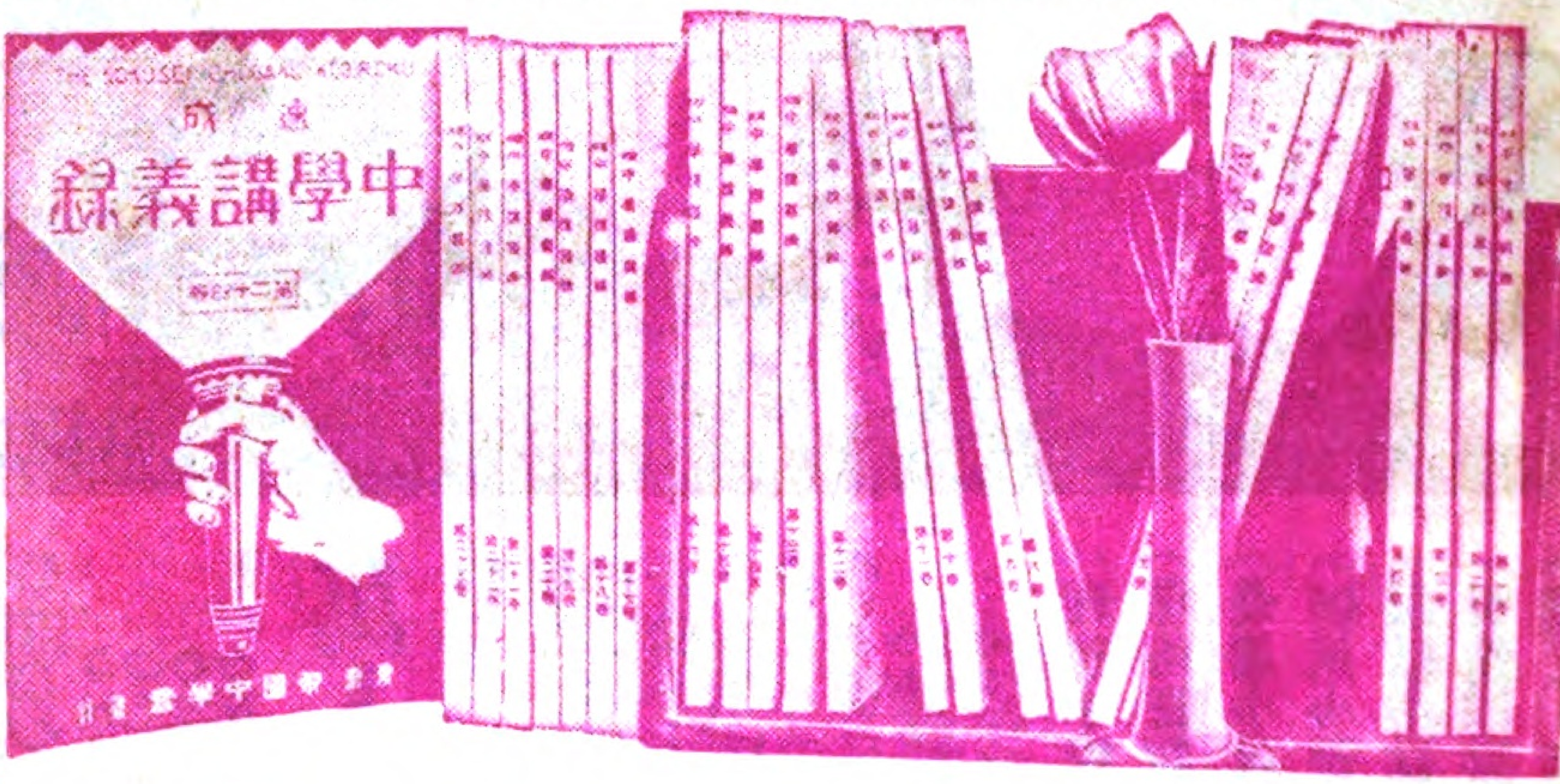

KING
キング
九月號





勉學の絶好期は來る!!

最も優れた「中學講義」と定評のある!!

▼この講義録に依つて獨學せよ!!

燃ゆるやうな希望を抱きながら、いろ／＼な事情で中學へ行けず、希望を達する事の出來ない諸君の英才を惜しみ、遠藤博士はいろ／＼研究の結果、僅か一ケ年！職業の餘暇に勉强しながら完全に中學の全科を修得する道を拓かれました。

▼即ち「速成中學講義録」がそれです!!

講義は最も平易にして覺え易く學費が僅少てすむこの講義録の見本は今スグ「キング」見た見本送れとハガキで申込次第詳しい内容見本無代送呈す

會長 巣鴨中學校々長 文學博士 遠藤隆吉先生

東京市神田區三崎町
帝國中學會
（電話九段一五六七番）

合理的で興味の深い

―ペン字速成上達法!!

近頃では事實あらゆる方面でペンを使ふ方が多いのでペン字の練習はいよ／＼急務となつてきたが、今評判の透寫式練習法とは他に類のない新式奇抜な新法にして短日月で日本字、英字、數字等すべてのペン字に熟達し得る珍しい通信教授である。詳細は今スグ「キング」で見た・・・・・と葉書に書いて東京市神田區三崎町ペン習字研究會へ申込めば説明見本無代にて送呈す。

懸賞附特賣

許特賣專式口川

KKK（サンケイ）ハーモニカ

懸賞附特賣



KKK（サンケイ）ハーモニカ懸賞附

貳千名當籤謝恩特賣！

KKK（サンケイ）ハーモニカはハーモニカの中で一番良いと云ふ事に決定して日本の名物になりました 其れは熱烈なる皆様の御愛好の賜と厚く御禮申上ると同時に御禮の意味で貳千名の方に抽籤で左きの賞品を差上げたいと思ひまして懸賞問題を提案しました御近所のKKK販賣店で懸賞附KKKと指名して御買求めの上答案用紙に解答を書いて懸賞係へ御送り下さい。

懸賞問題

一、KKKハーモニカは從來の十六穴や二十穴より何故良いのですか？

二、川口式專賣特許の番號は何番ですか？

答案用紙

は懸賞附KKKハーモニカを御買求めになれば一本毎に一枚添へてありますから其用紙に前記の答案と住所氏名及びKKKを買つた店の名を書き添へて御送り下さい締切は九月十日限の事正解者二千名の方には抽籤の上左の賞品を進呈（解答は答案用紙に限る）

賞品

特等	純金腕巻時計	壹個（壹名）
一等	三千圓當籤付復興債券十圓券	壹枚宛（九名）
二等	複音最上ハーモニホン	壹個宛（五十名）
三等	練習用ハーモニホン	壹個宛（二百名）
四等	メタル用金色ハーモニカ	壹個宛（四百名）
五等	ハーモニカ樂譜	壹部宛（五百名）
六等	川口先生の寫眞とハーモニカ界	壹部宛（八百四十名）

選外の方にもハーモニカ界一部宛を進呈します

KKK（サンケイ）ハーモニカは從來の十六穴や二十穴に缺けて居る低音の4・高音の7及3等の音樂上最も必要とする音階が加へられて居る……其ればかりではありませんリードの丈夫である事意匠の高尙なる事等一般の十六穴及二十穴に優る……其上値段は頗る格安である。

幸運はKKK（サンケイ）ハーモニカ愛好者の手へ

再び得難し今直ぐ御買求め下さい。

KKKの赤箱は全部改良品です



定價

二十一穴	複音	一圓五十錢
	重音	一圓六十錢
二十二穴	複音	一圓八十錢
	重音	二圓二十錢
二十三穴	複音	二圓
	重音	二圓五十錢
二十四穴	複音	二圓五十錢
	重音	三圓

送料 前金なら十二錢 代金引替二十八錢

東京日本橋區馬喰町三丁目

西村合名商社 懸賞係

振替東京一四七七番

（右のKKKの内廿二穴と廿四穴には當月中川口先生の寫眞添附）



萬家必備の良書七冊二円

八册揃ひ只の二圓

總紙數二千八百十八頁

斷じて不信用の駄本に非ず市內の方はゼヒ御來店の上實物（體裁內容）御覧の上御買求を乞ふ

左の模範的辭書八册定價十圓の處賣物宣傳の爲七册一時に御注文者には夕ゞの二圓に大割引す

●前金は小包送料廿錢増後金はハガキで申込次第四十錢増で急送す

●一册づゝの御注文は本紙愛讀者に限り前金なら特に定價の半額とす

●本書ば書店になし必ずハガキ又前金にて直接御注文下さいスグ發送

手紙新百科大辭典

◆他でまねの出來ない新式考案編輯で商用文◆公用文◆儀式◆交際◆日用文◆ハガキ文◆口語文◆候文◆見舞文◆案内文◆註文文◆催促文◆慰問◆弔慰文を始め凡そ手紙百般に亘る事細大漏さず掲載さればどんな惡文家も必ず上達保證の大辭典

新手紙研究會編
縱六寸横四寸
總紙數三百三十頁
定價金二圓也

いろは引大辭典

◆之までのいろは字引よりも、ひきよいみよいわかりよいのが大特長であるから手紙や文章を書くときチョツとみればどんな難しい字でも忘れた字でも忽ち字と意味が同時に分り一を引いて百を知り百を知つて活用無限、實に便利重寶の大辭典なり

常用漢字研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數三百十二頁
定價金一圓五十錢

現代新語大辭典

◆近頃流行の新熟語外來語流行語を知らねば新聞や雜誌を讀んでも演説を聞いても何がナンだかさつばり分らぬ本書は日常のあらゆる新語をいろは引でひけるやうにし一一解釋をしてあるから誰にも聞かずどんな新らしい言葉でもスグ分る良書なり

新語研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數四百二十頁
定價金一圓五十錢

最新英和新辭典

◆毎日毎時英語は同件するからダレでも英語字引は大必要也。本書はバラツク式急造の辭書と異り米國教育當局制定の四千語を始め普通一般の單語新語を全部網羅し眞にひきよいみよい分りよい初學者中學生獨學青年必備のきもちよき新英和辭書也

文學士山口先生著
縱四寸八分横三寸八分
總紙數六百六十頁
定價金二圓也

日常法律新辭典

◆民法◆刑法◆商法◆民事訴訟法◆人事訴訟手續法◆戸籍法◆恩給◆金錢貸借◆借地借家其他日常百般に亘る法律難問もチヨイと本書を見れば忽ち解決すること快刀亂麻の如し眞に辯護士も代言人も六法も顏色なからしむる新案日常法律新辭書なり

中澤幸安先生著
縱四寸八分横三寸八分
總紙數二百二十頁
定價金一圓也

青年社交新辭典

◆男女の交際さては友人知人との交際に心得ておかねばならぬことは社交の秘決で、社交上手は人をなる程と感心させ人を驚かせ人にすかれるが社交下手はいつも恥をかく。本書は知つて損なき社交一切満載 他店に絶對になき現代人必備の新辭典

東京社交倶樂部編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數三百三十頁
定價金一圓也

五分間演説辭典

◆普選の今日人中で演説や座談の出來ぬやうでは恥をかく本書は◆開會閉會◆大小宴會◆招辭◆祝賀◆送別◆入營◆凱旋◆表彰◆卒業教育◆懇親會◆新年會◆就職◆退職◆弔辭◆其他世間演説百般に亘り詳述し眞に舌三寸活殺自在の演説辭典である。

日本雄辯研究會編
縱四寸八分横三寸八分
總紙數三百十頁
定價金一圓也

發賣記念の爲 **記憶字典**（二百九十頁美本一册宛）**進呈** 後では忘れる今スグハガキで申込下さい

▲**僞物注意** 近時本廣告を模倣し駄本の僞物現る弊店は出版專業十年信用偉大せ御安心の上今スグ葉書で御注文あれ

◆東京市小石川區表町六七
振替東京六六八〇〇番

進文館本店（電話四七九〇 一四九五）

謹告

光榮

本會廿五年間の業績顯著なりとて

藍綬褒章を下賜せらる

本會創立以來廿六年間通信教授に依つて公衆の利益を興し、其功績著名なりとの理由により、今般本會主事に對し榮譽ある藍綬褒章を下賜せられたのであるが、本會は會長始め職員一同此の優渥なる皇恩に感泣して、今や全力を傾倒して講義錄の改訂に、通信教授法の完成に努めてゐる。

大日本國民中學會

創立は日本で一番古く內容は日本で一番新しい

中學講義錄

小學校卒業生

のうちいろ〳〵な事情で上の學校へ行けない諸君は日本で一番信用の厚い基礎の强固な本會へ入會して名實共に日本第一の中學講義錄に就いて學べ!!

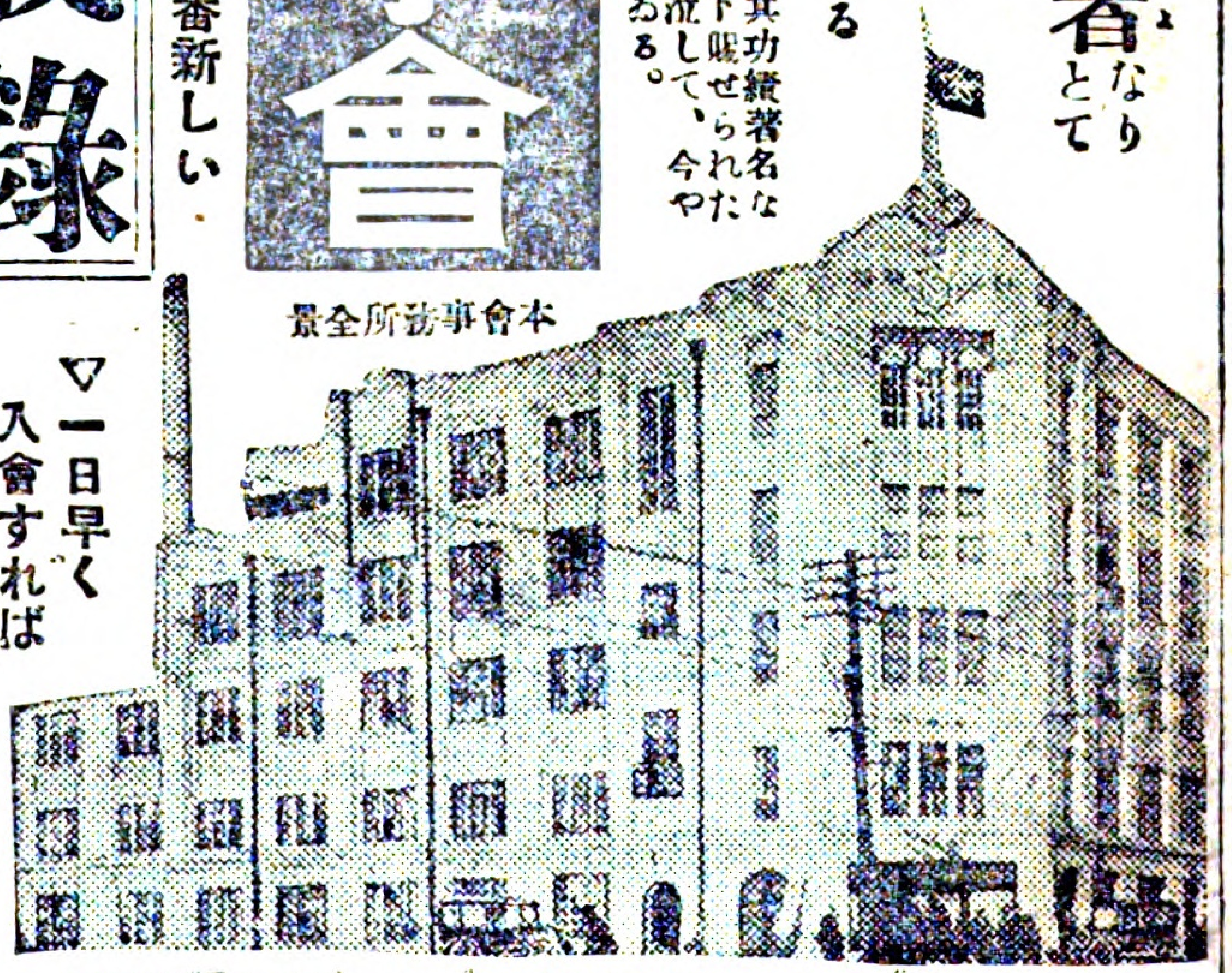
本會の特長

一、基礎が固い
二、信用が厚い
三、學制が正しい
四、內容が新しい
五、講師が偉い
六、會費が廉い
七、卒業が早い
八、指導が良い
九、教授法が巧い
十、成功が確い

◉獨學で立派に中學卒業が出來る!!

講義見本規則無代進呈

▽一日早く入會すれば
▽一日早く成功出來る



本會事務所全景

東京駿河臺 大日本國民中學會 電話神田 二一一一番 二一一三番 三一一三番 振替東京四二〇〇番



（本文參照）

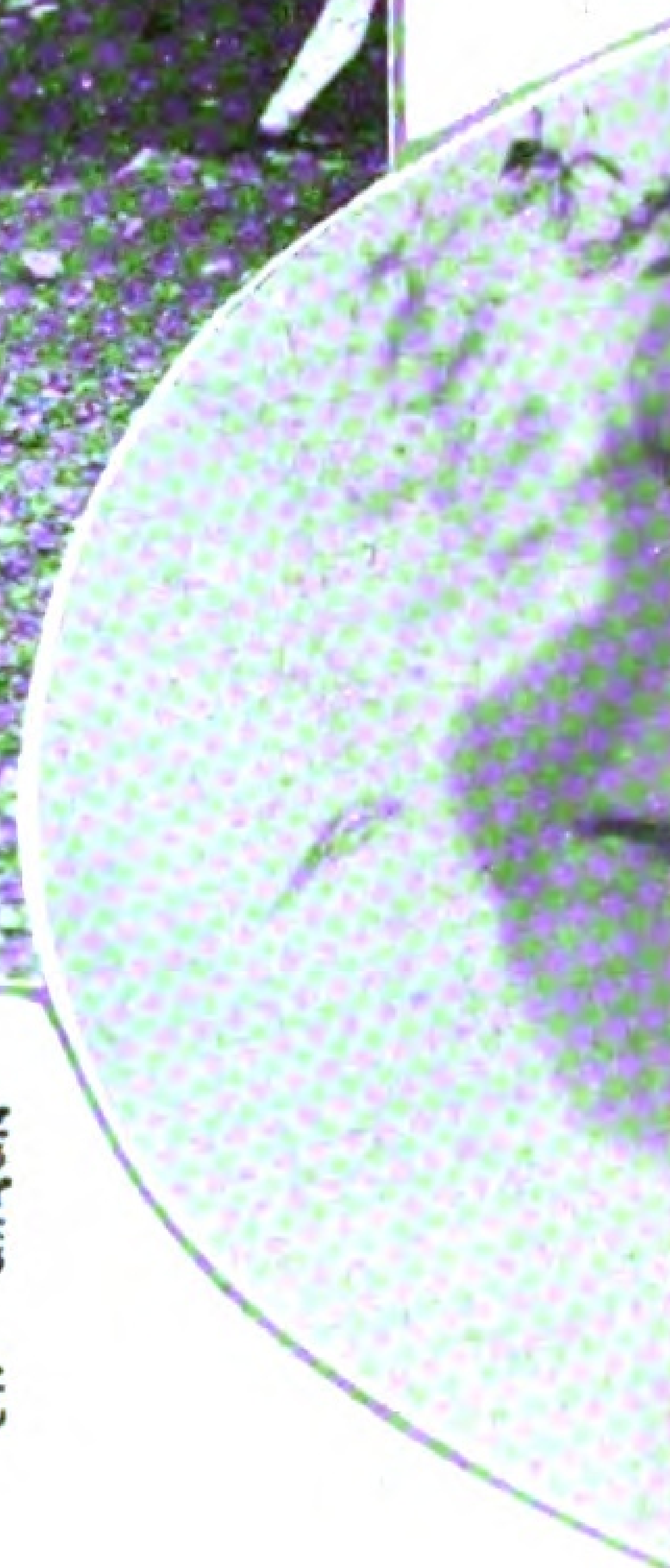
提督ネルソン

世界英傑畫譜（其の九）　エー・シー・ゴウ筆（英）

く々

金魚の影の
悲しやな





同行七人

↑オーイ、お山の
日が暮れかゝる
早く歸つて
麓の宿で
風呂へ入つて
飯焚かそ

一服千金↓

山々は
靄に包まれ
溝川に映る
夕雲の
影は靜か
仕事終へて
服む
一ぷくの
煙草の味の
おいしさよ





ジヤボ〳〵
おつとうつかり
でんぐり返つた
浮環を賴つちや
ゐられない

本田美禪先生の大傑作

血染の伽羅

劍俠、美女美男、哀艶切々！波瀾萬丈！
息もつがせぬ面白さ、痛快さ、怪奇さ、
沒落の悲運を呪ふ旗本奴と、意氣と男を賣り物の
町奴の大爭鬪！ 仇と知りつゝ熱火の戀に身を
焦す美女の悲戀！ 魔か？天狗か？花を欺く大若衆の
腕の冴え！怪美少年と奇怪な辻斬り！名木伽羅に絡る惡因緣！
貞享大江戸を背景に、稀有の大場面を展開せる一大情史！

五版出來

◇四六判函入 定價壹圓八拾錢 送料十錢◇東京本郷 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）



御申込次第圖書目錄進呈

專門美容術

自宅療法を教授す

アルラ白色飲劑

副作用なく只一日一回の服藥にて體内毒素の治療劑として專ら賞用されて居ります

逆上症、ニキビ、ソバカス、吹出物、便秘症、脂肪症等

顏面晒白術

短日にて難症ニキビ、ソバカス、色黑シミ、シワ、赤顏、油顏、日燒等を美化する外部療法なり

根本毛生止

毛根毛母の發育養素を障害し永久に繁毛の惱みを去る新法なり

急速毛生法

禿頭、薄毛、脫毛症、フケ症等急速に毛生し赤白毛を黑化す

白ナマズアザホクロ入墨魚の目イボ

東京本鄕東片町七八白山停留所際

自午前八時至午後九時　電話小石川四九七六　振替東京三六八〇九

美容大學院

どもり

どもりは立身、出世の妨げです。どもりでお困りの方は三錢切手封入御申し込み下さい。藥をのまずに自宅で人知れず治る方法をお知らせします。

東京市小石川區大原町二〇番地

東京雄辯指導會

獨占的新職業

何人も僅か二ケ月で電療得業士になる



僅か二ケ月の自宅獨習で完全に習得することが出來、卒業の上は全國何處にても極少の資金で自由に開業なし得られ、醫師や齒科醫におとらぬ好收入を得られる新職業は當所の養成する新式電氣療法專門萬病治療の電療得業士です、此技術は極めて容易で男女を問はず誰でも習得することが出來ます、一日も早く生活の安定を得んとする人はハガキで申込めば内容見本付規則書を無代進呈す

東京牛込通寺町廿二　電話牛込四二〇四番

東京電氣療法研究所

東京一の信用ある女髪結ひ學校

東京整容學院



東京整容學院の「美容整髪講座」は極めて僅かの學費で三ケ月間に日本髪と洋髪の結び方全部、美顏術・美爪術・婚禮衣裳着付・化粧法・美髪衛生・美容美髪師心得等美容師として必要な科目全部をすべて正式に且つ一切の秘訣を公開して解りやすく敎へ責任を以て卒業させます。又本學院實習部は日本髪洋髪兩部にて速成三ケ月で卒業できます。詳しいことはハガキに規則見本入用と書いて申込次第規則書を差上げます。

東京代々木德大寺公邸跡　電話青山一一七五番

東京整容學院

全力を盡して



此の繪は英國美術協會員ヘンリー・チューク氏が一九一一年の力作で疾風怒濤と戰ふ船員の悽壯な場面を描いたものである。これが一度世に發表されるや忽ち世界の評判となり、遂に國有品になつた。

—泰西名畫—
チューク筆(英國)

仲好し比べ



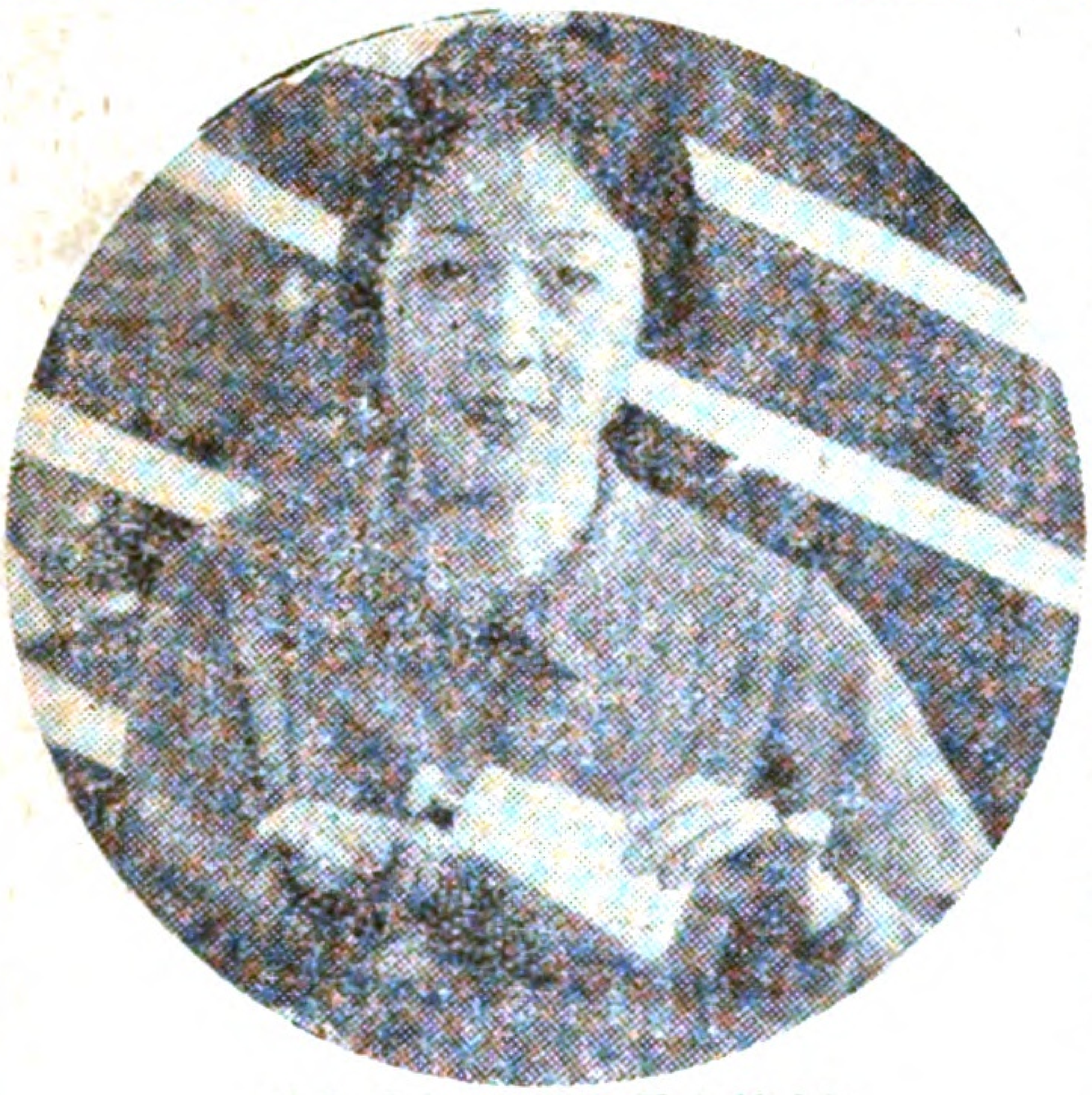
日本の坊ちやん犬連れて、松の茂つた公園で、駈つて馬乘り石拾ひ、愉快に遊んだその後で、おいしいパン〳〵與りました。桃太郎さんによう似た、日本の坊ちやん可愛いいな。



ドイツの坊ちやん猿君と、海岸通りの石敷きの、明るい〳〵往來で、ペダル踏んまへ大競走、猿君負けるな坊ちやん負けるな、見物多勢見てゐるぞ、どつちもしつかり踏んばりな。

眞に色白く美しくなる

專賣特許の白色美顏料『ウテナ』



（水谷八重子孃と「ウテナ」）

どんなに色の黒い方でも、一度つければすぐその効力がわかり、二度三度、とつける度毎に色白くなつて、みんなに不思議がられるほど美しくなるといふので、素晴しい評判になつてゐるのが『ウテナ』です。

色の黒い方、赤黒い方、眞夏から秋口の日やけを防ぎたい方、垢ぬけしない方、首筋の黒い方、ニキビ吹出物のでき易い方、あぶら顏荒性の方、小皺を除いて若返りたい方、すべて色の白くない方、眞から色白く美しく幸福になりたい方は、お忘れないやうに、毎日一度づつ『ウテナ』を愛用して下さい。

『ウテナ』は、色を白く美しくする獨特の新發見によつて創製された科學的最高級の美顏料で政府の專賣特許權を二つも持つてゐるほどの權威あるものです。

皮膚科專門の大家として有名な醫學博士赤津誠內先生は、合理的に色を白く美しくする一番確かな方法として專賣特許『ウテナ』の有効を證明されます。

素顏を眞からきれいにし、地肌を美しく整へて、キメを細かにする『ウテナ』は、女學生、處女、上流婦人間等は勿論教養ある現代家庭の唯一の美顏料として熱狂的歡迎されてをります。白粉をつけないでも、薄化粧でもしたかのやうに魅力溢れる美しさになるといふ『ウテナ』は、男子用美顏料としても非常な評判で、特に社交紳士間、青年紳士間では日に〳〵愛用熱をたかめてをります。

『ウテナ』の一瓶は、家庭のすべての人を美しくして、明い樂しい生活を生む幸福の使です、急いで用意して下さい。

特に色の黒い方、赤黒い方、垢ぬけせぬ方、ニキビ吹出物のでき易い方、日常の美顏用お化粧用には『ウテナ』一號がよろしうございます。

『ウテナ』をつけて、肌を美しく整へてからお化粧すれば、決して白粉くづれがせず、どなたでも上手な魅力あるお化粧をすることができます。

『ウテナ』は定價一號三圓、二號二圓、三號一圓で送料內地十八錢、海外四十五錢です。一號が一番お徳用ですが、普通の愛用には二號も手頃です。御試驗的に用ゐられるには三號で結構です。何れでも、百人が百人、どなたにもすぐ效力がわかります。東京本鄉區本鄉二の十三ウテナ本舖（振替東京二九一〇三）或は本鄉駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六一九）へ御注文下さい。

――百貨店、有名化粧品店、藥店にあり――



小說 君よ知るや南の國

加藤武雄先生著

四六判 布裝美本 定價壹圓八拾錢 送料十錢

あゝ歌は悲し、君よ知るや南の國、亡き母の美貌と情熱と天分をそのまゝ恵まれたまり子は、亡き父の遺してくれた紹介狀を賴みに、我が樂壇に時めく內山邦夫を遙々訪ねていつた。然し期待は裏切られ、すげなく突放されて了つた。亡き母と內山との間に秘められた謎の糸は、まり子に解くべくもない。天涯賴る所もないまり子は、あらゆる苦闘の後、遂に樂壇の明星と謳はるゝに至つたが、哀れ見よ！ 君よ知るや南の國！ 歌は悲し名曲の緣結――

東京本鄕（振替東京三九〇）
大日本雄辯會講談社

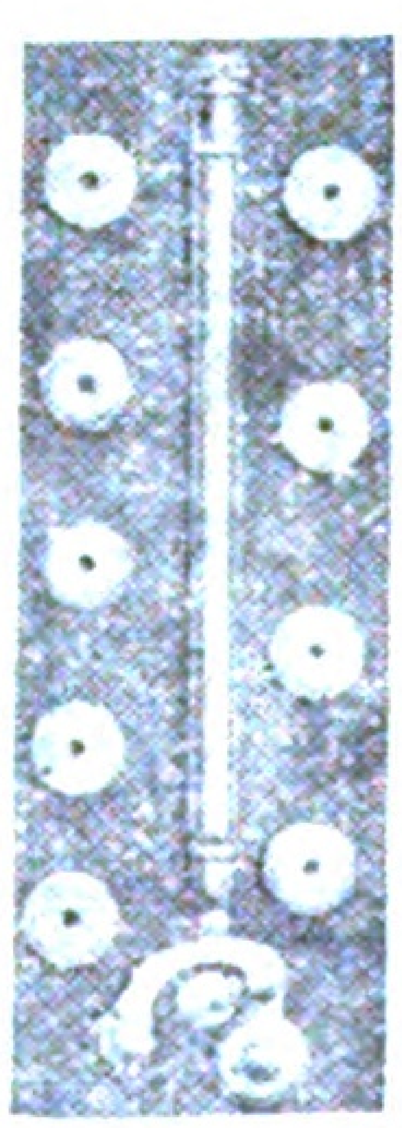
色白くなる

色黑き方、赤き方、アレ性、ニキビ、ソバカス、吹出物、脂肪顏、日にやけた御方は三錢切手封入御手紙下さい。色白く美しくなる良藥を封書でお知らせ致します。皆樣より引もきらず澤山の禮狀がまゐります。

東京市本鄕區
本鄕二丁目十三番地　久保とも子

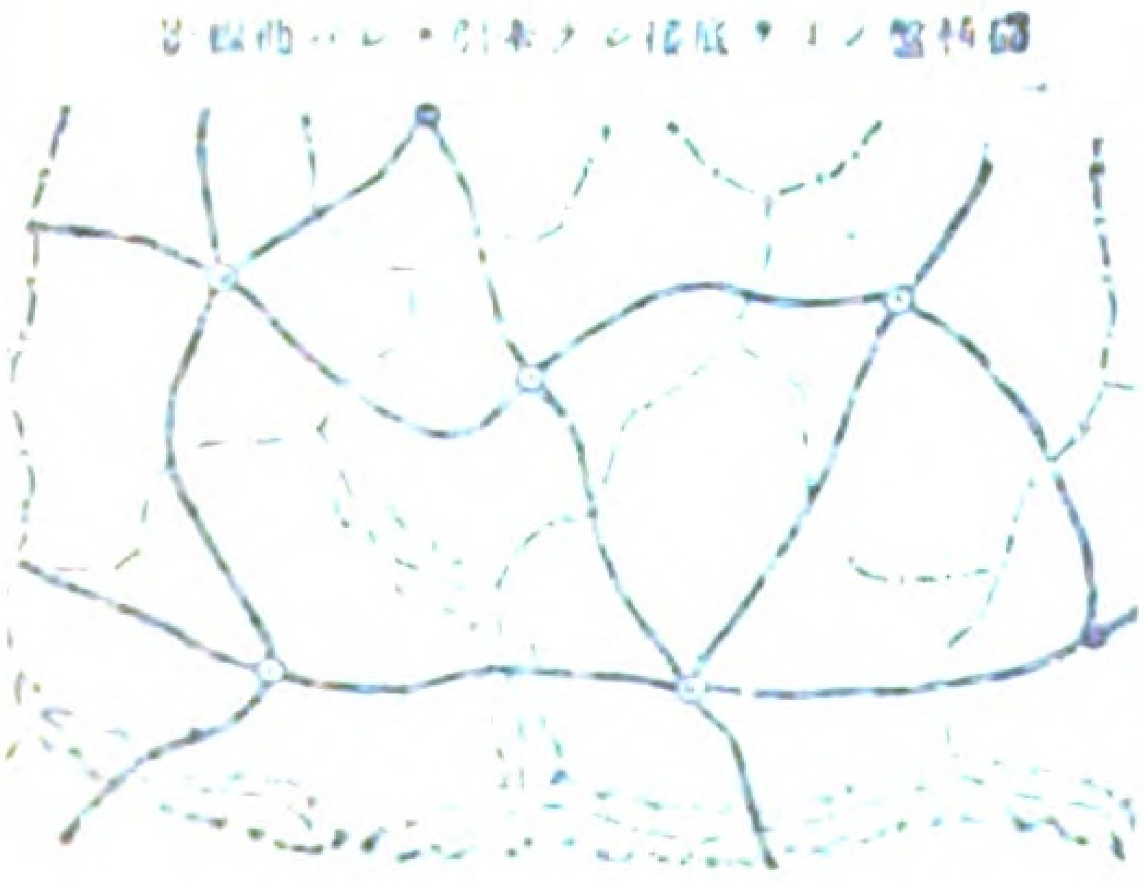
『キング』で見し旨お書き添へを願ひます。

輪轉式直線描器
（一名定規要ラズ筆線器）

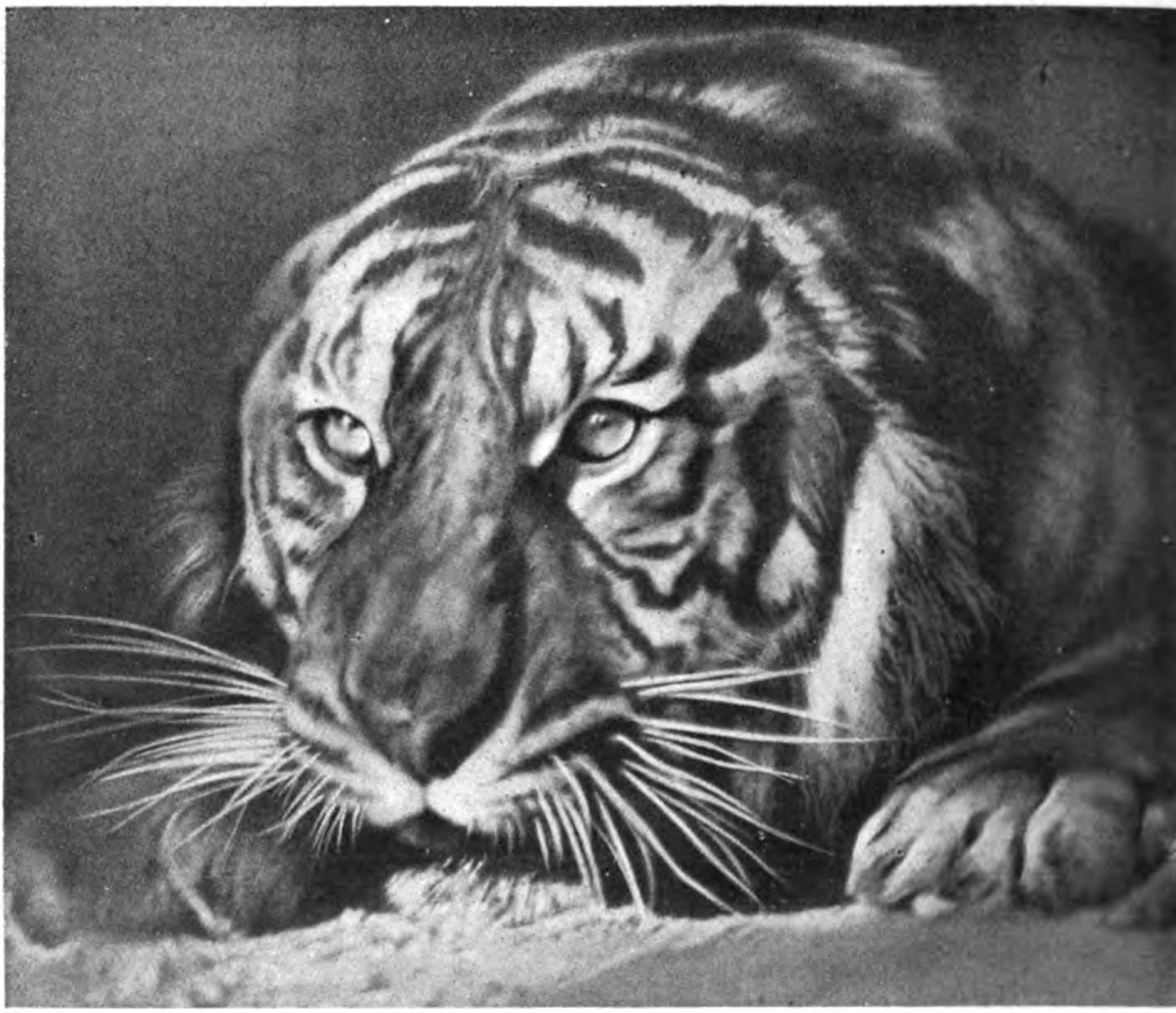


＝諸官衙御用品＝

軸の先に各種樣々な齒車を取付ければ、直線、曲線、點線、リーダー線、その他思ふまゝの線が描ける最新發明品。特に製圖家學生諸氏の時間經濟の爲め是非机上にお備へ遊ばされねばならぬ必然の武器であります。至急御用命を。



定軸式（描輪盤十種）一圓　送料内地一二
旋轉式（描輪盤七種）三圓　送料同上
東京市本鄕區駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社代理部
振替六六二九番



□王虎

尾崎喜八

虎は虎の斑いろの藪地にかくれる。
虎がかくれるのは何かを恐れる爲ではない。
虎は孤獨の自由を愛し、
たましひの薫る靜寂をたのしみ、
底知れぬみどりの瞳を半眼に据ゑて、
熱帶の地平にのぼる星や太陽を瞑想し、
いはれなき殺生を避けて濫りにあやめず、
小量の美食に虎は滿ちたりて、
ヒマラヤの千古の雪の水をのむ。

虎の規律は虎がまもつてゐる。
その規律を侵して來るものは誰だ？
メリケン紳士の小癪な虎狩に、
あゝ正直一徹の虎は身をふるはせて怒り立ち、
裂帛のさけびに天地を震憾し、
身をうねらせて嵐のやうに襲ひかかる！

名士の好

外では怖い小父さんも家庭ではみんな良い小父さんです。坊ちやま孃ちやまと一緒になつて何時もニコ〳〵。見る目も本當に羨しい名士の好々爺振りを御覽下さい。(一)樞密顧問官田健次郎男、日曜になるとお孫さんの角力の行司。『よいか負けるとクリ〳〵坊主ぢや』と軍配の團扇をあげてゐらるゝ處。右から健一君(十五)、敬三君(九)、田男、襄二君(十二)。(二)警視總監といふ厳しい肩書の宮田光雄閣下のスポーツマン振り。令息六郎君(十二)を相手にバットを握つ





好爺振り

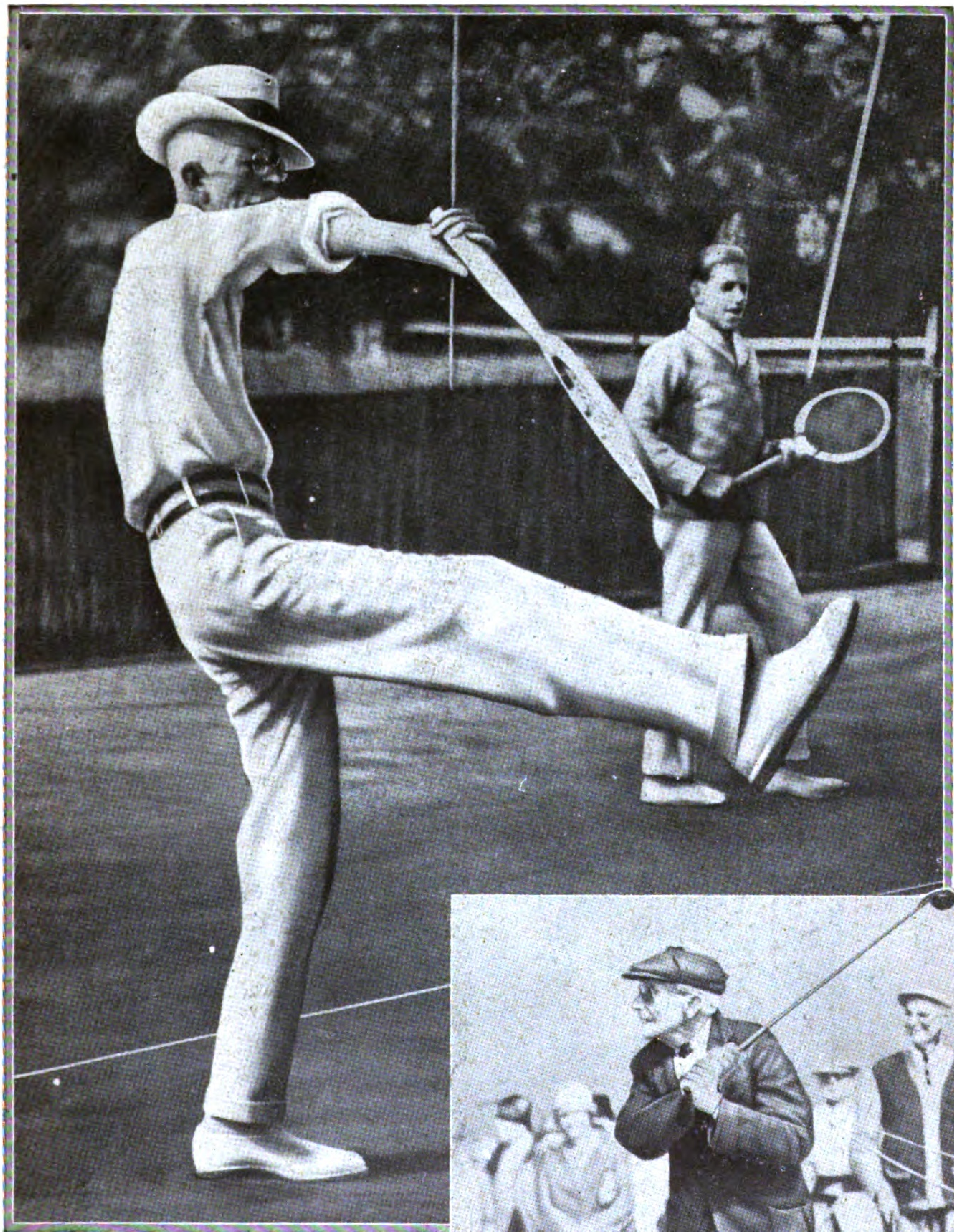




て『そら今度はホームランだよ』(三)軍事參議官の要職に在らるゝ安保清種大將。お庭の芝生でお子さんやお孫さんと一緒にニコ〳〵並んで『ヨーイドン』といふ處をパチリ。右から次郎君(十三)、八千代さん(九)、大將、清嗣君(六)、竹代さん(十一)。(四)議會の闘將であり又大雄辯家である永井柳太郎氏。『もつとふくらましてよ』と幼稚園の六郎君(六)にねだられてフートボールを吹いてゐるのも本當に無邪氣なお父さんではありませんか。

老いて此の意氣

歐米は流石にスポーツの國である。年をとつても常に潑溂たる元氣で若い人の間に伍し大いに氣焔をあげてゐる。五十、六十で競馬に出るなど決して珍らしくない。殊に名流の人達が卒先して體育のために精進せられてゐるのは羨しい次第である。政治に、經濟に、實業に非凡なる活動の源泉は悉ふして生れる。偉なる哉その意氣！

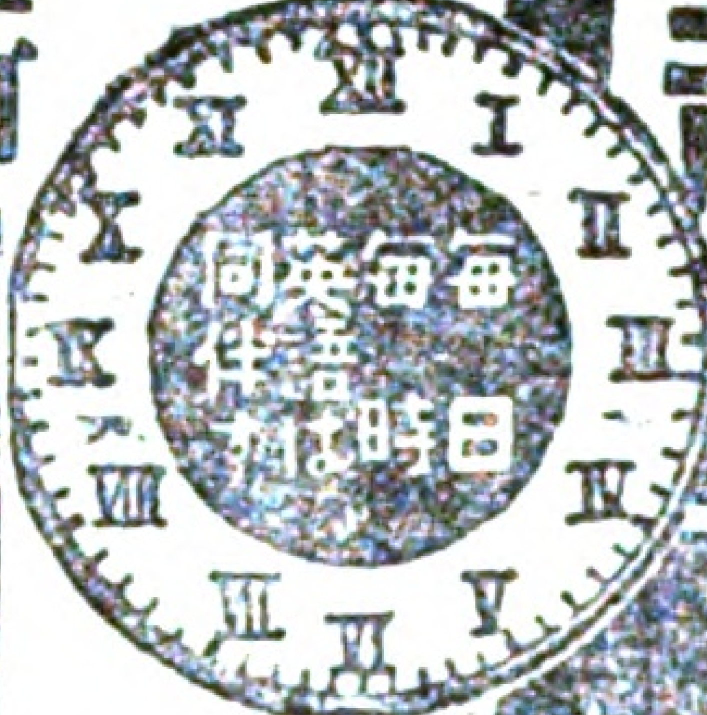




（上）御齡七十歲に達せられた瑞典皇帝グスターフ陛下がリヴイエーラ・テニスコートに於ける鮮かなプレー振り。（下）米國の石油王ロックフエラー翁が八十二歲の高齡をも物ともせず澤山な人と一緒に野に出て日課のゴルフに興ずる處。

研究社

英語通信講座



キングの讀者

新入會歡迎

●キングといふも英語モダンといふも英語然しどう書くか？

●英語を知る人は世界が廣い人生が明るい、希望は無限だ！

●況んや現代到る處の門扉は先づ英語を知る人に開かれる！

これなら――！必ず解る

▼ラヂオの岡倉先生初め諸大家の明快な講義

▼十五ケ月で必ず中學卒業專檢合格の實力に！

▼試みに即刻獨學案内附内容見本を請求あれ

●英語ばかりは混合講義錄では獨學不可能、專門本講座に信頼せよ

●十萬を超える學友と整然たる日課表で毎晩二時間十五ケ月勉强せよ

●否！一ケ月で身邊の英語が分る愉快さは知る人のみぞ知るである！

東京市麴町區富士見町六丁目

研究社通信學部

振替口座東京三〇八五番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



□わたしの金魚

わたしの金魚は
可愛いゝな

朝は黄金の光をうけて
口をパク〳〵
動かしながら
「嬢ちゃんお早よ」と
浮いて來る

幼稚園から
歸つて見れば
赤い三ッ尾を
ゆら〳〵振つて
「嬢ちゃんお歸り」と
浮いて來る

わたしの金魚は
可愛いゝな

秀英舍グラビア印刷

郷土



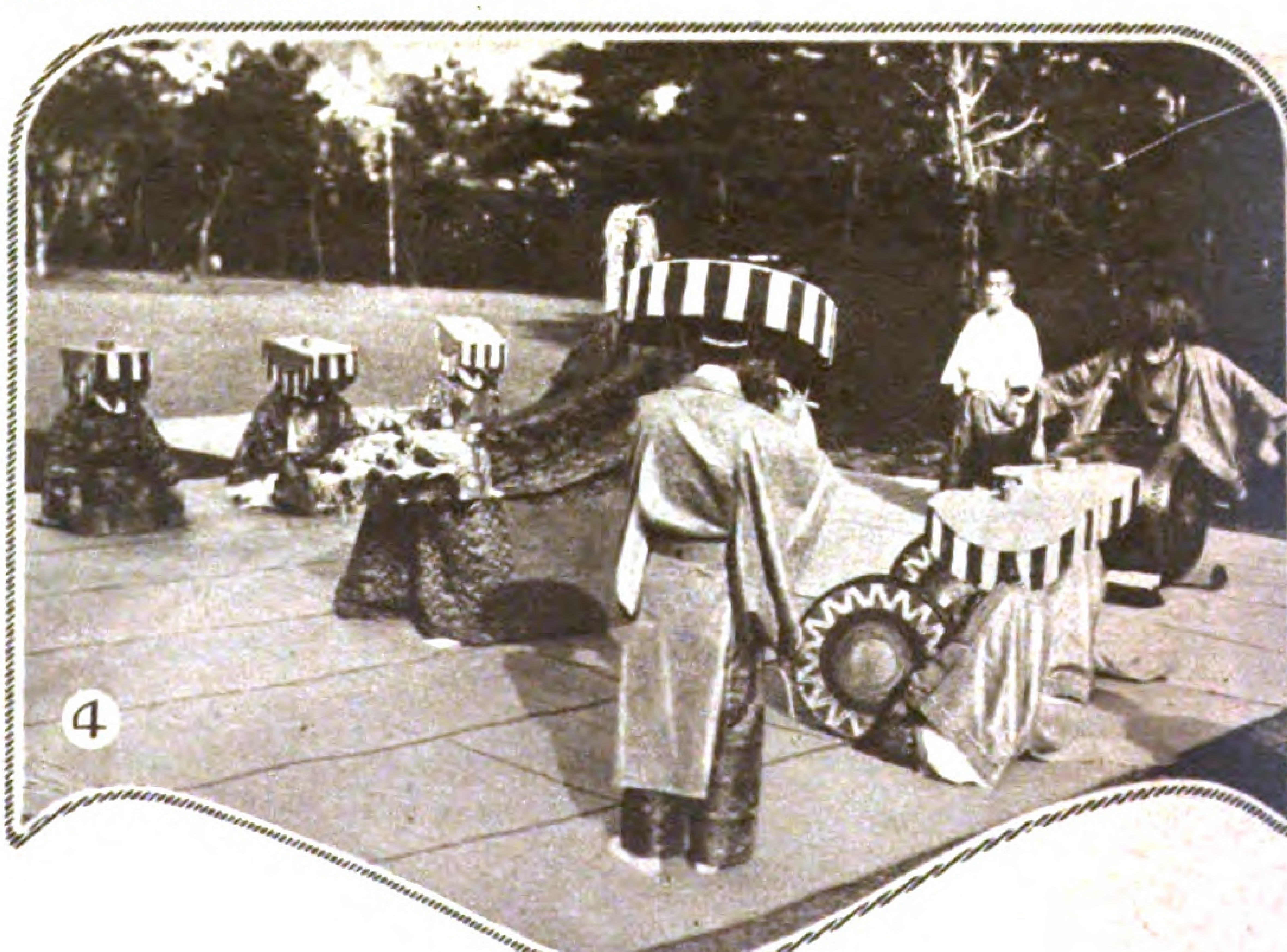
(1)大阪市今宮やすらひ祭の子供踊り。

(2)福島縣の相馬流山踊。花陣笠を冠り馬柄杓を持ち、武士が馬を馳る樣をうつして舞ひます。



(5)高知縣の太刀踊。赤、白の鉢卷、襷。太刀を翳して





(3)廣島縣の囃し田。田植の時このやうにして唄ひながら早乙女が苗を植えて行く、それをその儘踊りにしたものです。

(4)淺草區のびんざさら。古雅優麗な田樂の舞で淺草神社の氏子が昔から傳へて來た珍らしいものです。

源平合戰に擬して踊る勇壯活潑なもので、土佐は武の國、その國柄が偲ばれます。





(6)長野縣の大門踊。松代町で三百年前から傳はる由緒あるもの。昔、祇園祭禮の時、殿樣の御前で舞ひました。編笠に白扇派出な襦袢にだらり帶、元祿の昔も思はれる姿です。





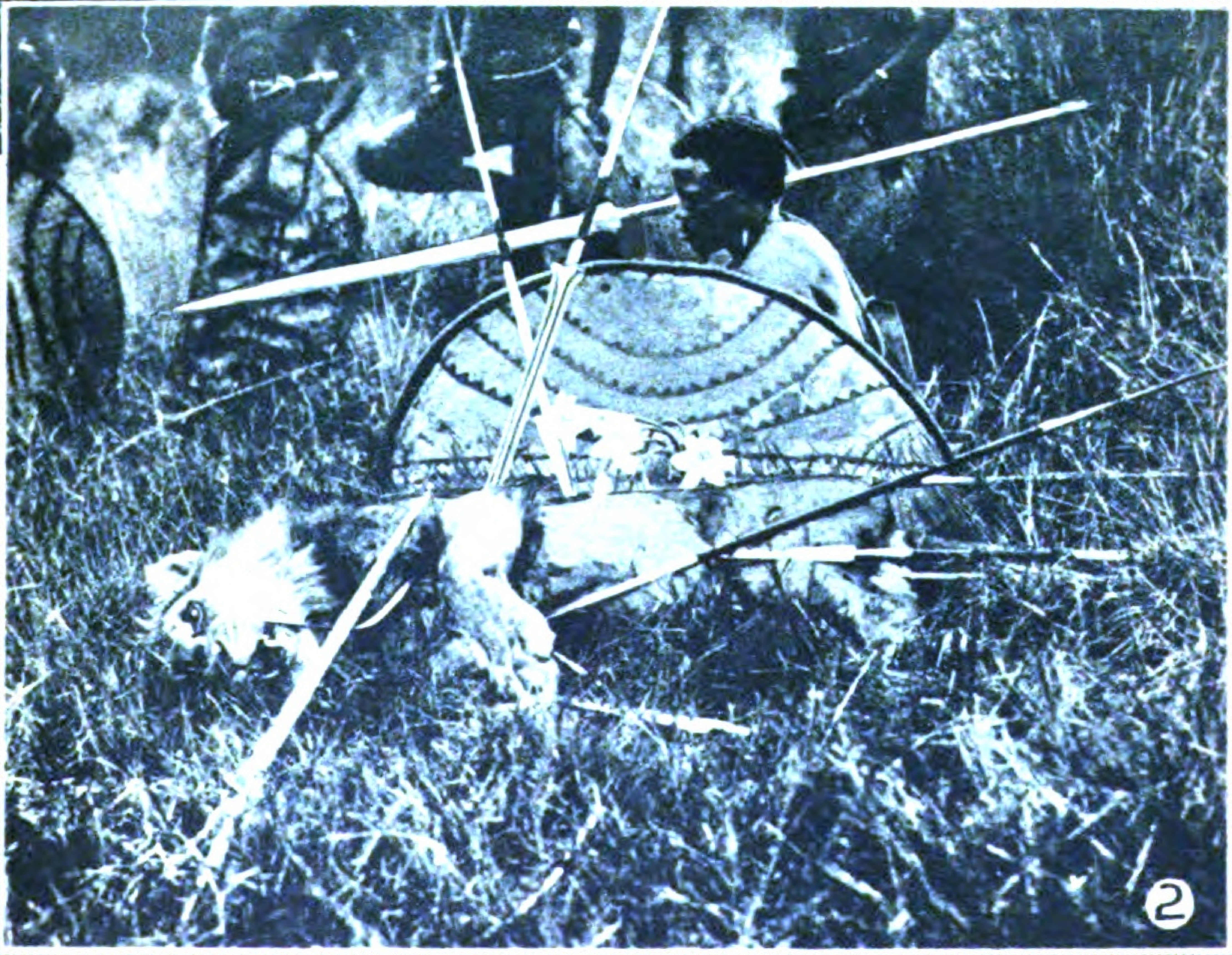
(7)青森縣のゑんぶり 朳といふのは農作に使ふ道具の一種で、これは初春の田植踊であります。烏帽子に藁の脚絆草鞋、鍬の柄をドシン〳〵と突きながら踊る野趣掬すべきものです。

猛獸



(1)南洋人が野獸を捕るために罠を仕掛けてゐる處である。獸が此の罠に上ると忽ち足を踏み外して穴に落ち同時に綱が足に絡まる樣になつて居る。そして其の綱の一端は跳釣瓶の樣な工合に竹竿に結いてあるので獸は宙に吊るされて了ふ。





(2)アフリカ土人の猛獸狩。彼等は革製の楯一枚を何よりの頼りとして身を護り、僅に十尺か十五尺の近距離に迫つてから敢然槍を奮つて猛獸を刺すと云ふ危險極る藝當を平氣でやる

(3)凄壯！　又凄壯！　鬼氣迫る印度の虎狩の場面である。ビ





カニア王の一隊が象を驅つて千古の密林に分け入つた時、物音に驚いた虎は叢の陰から飛箭の様に飛出した。象に跨つた獵人がスワ！と身構へる暇もなく怒れる猛虎は牙を鳴して跳りかゝつた。見よ！研鎌の様に鋭い爪は象の鼻に打込まれたのである。痛さに狂つた象は地に鼻をつけ降参したかと見ると然らず、忽ちその大木の如き足はシツカと虎の五體を押へつけた。メリ〳〵ツ！ さしもの虎も一たまりもなく肋骨を粉砕されて了つた。

(4)暹羅に於ける戰慄すべき猛獸狩の陥穽。太い丸太に鋭い竹杭を植付けたもので虎や豹が餌に近づくと支柱が外れて罠は落ち一撃のもとに獸は刺殺されるのである。

勞働



(1)英領印度カチン族の奴隷が數頭の豚を背中に擔いで隣村へ賣りに行く姿である。腰には各各一本宛刀を打込んでゐるのも一寸面白い。



(2)ハンガリーの農婦。長靴を穿いて家鴨を背負つて市場に行く姿。



(3)アジア・トルコの人足が驚く樣な重い材木を肩にして搬んで居る處である。



(4)此の奇拔な光景は南アフリカ土人がせつせと砂金探集してゐる有樣。褌はしてゐても全部女で一日の給金は三四十錢位だそうだ。

(5)シリア人の土工振り。夫がシャベルの柄を握れば妻は繩をつけて引張るといふ夫婦和合の名案。

(6)朝鮮の年若い人夫、その苦勞を知つてか知らないでか背中の鮭には雛が暢氣そう。

(7)之はモロッコ美人の水賣り姿。皮の袋から一杯幾らで賣つてゐるのも一寸見られぬ異國情調である

(8)西印度の女土人達が頭に石炭の籠を載てエッサラ〳〵と汽船に積込んでゐる處。



6



5



8



7



珍藝一幅對



これが人間業でせうか？　地から飛び上ること五尺、その機みに兩足でピタリと踵を叩く。蛸だつてこんな藝當は出來まい。今米國で大評判のクララ・ウオラックス嬢の記錄破りな珍藝當である。



あの踵の高い靴を穿いて、身體を二つに折つてしまつて、そして悠々と西洋梨を食べる。而も微笑を浮べてゐるんだから全く不思議な身體である。これも米國で評判のヘレン・ミハイル嬢得意の曲藝。

顏面刺針術の一例



魔か？神か？ 魔にも非ず神にもあらず本院獨特の個人指導的通信講習による事は何人も平易に實行し得べき尋常事なり

心身鍛練 氣合術

附百般靈術詳解並難病治法

昔ならば「門外不出、一子相傳の秘密も」今ならば「本院の通信指導で居ながら會得」

本院は獨特の個人的通信指導の講習書により諸種の心身改善法、無病長壽術、刀の刄渡り法、火渡法、金剛力法、護身術等の平凡なる百般の諸術は勿論として靈動術、不死身術、刺針術、千里眼透視術を始め一喝難病速治法に高等靈術の神秘とせらるる鎭魂歸神の神降し法、讀心術、光明觀想法、至る迄古往今來の諸靈術は悉皆傳授敎導して、何人にも會得實行せしむ。

◇明細說明書進呈（雜誌名記入ハガキにて字體御明瞭に御申込みを乞ふ）

東京市京橋區京橋電車交叉點東（日活前） 天玄洞本院

飲まずとも、手術せずとも

『塗けて治ほす わきが藥』無代送呈す

（百の議論よりも一つの證據）

隨分世の中には色々な塗け藥や、飲み藥のワキガ藥も澤山有ますが、自分から進んで無料で藥劑を御提供申上げ且つ送料迄も負擔して『サア今迄の藥類は何れ程違ふか御試驗下さい』と云ふ程の確信藥が外に有ませうか、本社の發見藥は從來世にアリフレた一時押への飲み藥や、塗け藥とは根本から相違したる新救治藥です。如何なる頑固猛烈なるワキガと云へ共治癒せしめます。論より證據には如何なる手術や藥療でも根治する事の出來なかつた方は、雜誌名御記入の上、本社宛に右の新發見に係る救治藥を御請求下さい、本社は喜んで右救治藥の試藥を秘密に御送申上げます。（字體は楷書で明瞭に願ひます）

東京市京橋區常盤町壹 グランド社

婦人倶

直ぐ役立つ實際記事

無駄な記事が一つもない本號こそお見逃しなく！





◎郷土に美風を興す女子團の活躍
涙ぐましい感激實話

◎專門大家の化粧
中年婦人のお化粧法……見違へる程美しくなる化粧の秘訣等大公開

◎足の短かい人　背の高すぎる人は……
やせぎすの人　太りすぎた人
（どうすれば美しく見えるか
再び見難い特輯記事）

◎素顔の美しさを見せる男女化粧秘訣

◎人相で解る婦人の運命
興味ある話の樣ですが實際はどなたにも重大問題です

◎男子は婦人の何處に一番眼をつけるか
婦人は男子の何處に一番眼をつけるか……
（男子も婦人も必ず心得て置くべき常識記事！）

◎この手を用ひよ
嫌な男に言ひよられた時……云ひ憎い事を打明けねばならぬ時其他色々の心得公開

◎新流行秋向手藝品色々
セーター、ケープ等が誰方にも出來る手藝の秘訣！

樂部 九月號

嫁ぎゆく前後の心得

◎新婚當夜の花嫁の心得

◎良緣を得るには……先づこの條件を注意せよ！

◎新婚の私達は……先づ第一に何を語つたか？

◎式後の十日間 斯うすれば皆んなの氣受をよくする

◎嫁ぐ間際の大切な注意

◎嫁入後知らねばならぬ妻の心得

◎花嫁の化粧、結髪、着付實演で 模範的な花嫁の化粧から着付まで懇切な說明つき本誌の大計畫

日本一の小說欄

◎双鏡……久米正雄
美しい双生兒の運命！悲戀！美戀！戀物語

◎綠衣の聖母……長田幹彦
果然天下驚倒！悲運の美人！涙の大長篇小說

◎母……鶴見祐輔
文壇社交界政界到る所で大評判の名篇

◎時代 日の出島……白井喬二
破れるやうな人氣！之までに見ない大傳奇小說

◎朝顏合戰……上司小劍
先生が久し振りの大快篇、驚くべき新奇な筆法

◎山百合の草紙 大佛次郎
武家の娘を廻つて、血と涙の哀話

◎右の外 重寶記事數十篇滿載・定價八拾錢 送料四錢・東京本鄉（振替東京三九二〇）大日本雄辯會講談社

すてゝおかれぬ

ふとり過ぎ

からだに害なく程よくやせてスラリとしたる美容姿となる◆



男でも女でも隨分世の中には太肥つた人がある殊に年若き婦人は肥太つて居ると老けて見らるゝしやれ『三平二滿』だとか『デブ』だとか悪口をいはれる甚だしきは顔が馬鹿者ではないかと疑はれ知らぬ所へでも行くと立派な令孃もドト女と間違へられる、それが爲めに學問もありお金もあり餘る程の財産家の令孃もお嫁に行く事も出來ず可惜花の時代の二十歳前後を徒らに過ごして容色は益々悪くなるばかり遂にはつまらぬ人の妻となつた例も澤山ある。たとへ男子でも肥過ぎて豚の樣では決して見よいものではない、それに第一太り過ぎた人は身體が強壯でない。

井上醫學博士曰く

肥滿ノ人ハ心臟ガ障害セラレテ脈搏ノ不正並ニ結節ヲ發シ熱病ニ對スル抵抗弱クナリ肺臟モ運動ヲ障害セラレ氣管支加答兒ニ罹リ易ク肝臟ハ肥大ス又動脈硬變萎縮腎糖尿病等ヲ併發スル事アリ豫後不良

筒井醫學博士曰く

オベシタス(肥エ過ギタル人)ハ歩行困難心臟微弱、脈搏不齊、心臟肥大呼吸困難其他種々ノ障碍アリ、心臟衰弱腦出血肺出血ヲ發シ頓死スル事アリ

自分では何でもない樣に思つてゐるが此二博士の説を聞かば決して安心して居られぬ事が分るであらう。本店では豫ねて專門家をして之が療法を研究中遂に理想的一大妙藥中容丸を創製するに到り世の幾多肥滿者に一大光明を齎したのである。本劑は甲狀腺製劑を主劑としたもので從來ありふれた他の無責任なやせ藥と全く異り、決して胃腸を害せずに細らせるといふのが大特色で又太つた人の體内にある有害性の老廢物其他(即ち脂肪悪血酒毒水氣等)を細胞組織より分離せしめ之を體外に排泄する作用があるから、細胞組織は緻密となり、肉次第にシマリテ堅々したる美しき中肉の堅體となる、又身體虚弱なる人は反つて前よりも強壯となる。

●廿歳前後の婦人にして肥滿せる人
●其他血ぶとり酒ぶとり肥りの人
●ニキビ出で脂肪じみて肥滿せる人
●月經不順で肥滿し歩行困難せる人
●悪血又は水氣の爲身體肥滿せる人

右の如き人中容丸を服用すれば通利の機能をよくし胃の作用を増し絶對に體を害さず顔及び身體はスラリとして美しい容姿となる。又肥滿の爲顔色赤黑き人は色白くなると云ふ實例澤山。中容丸を服用せば、身體瘦て骨と皮ばかりになりはせぬか』とか『一度やせても再び太りはせぬか』などと一々本店に問ひ合す人あれど決して然る心配なければ安心して服用せられよ。

中容丸の定價は、十日分金三圓、廿日分金五圓五十錢、卅日分金七圓五十錢、四十日分金九圓の四種がある大抵の人は十日乃至二十日分にてよけれど肥滿甚だしき人は三十日乃至四十日分を求められよ、御注文の方法は振替又は郵便爲替にて代價御送金次第すぐ發送いたします、又ハガキにて御注文の節は代金引替にても送ります、尚本藥發送及び服藥中の注意等を記した説明書が藥品に添付してありますから御覽下さい

太つた人を治せずにおくと井上博士や筒井博士の説の如く遂に實に恐ろしい病氣を發する事あり時としては生命をも奪はれます。思ひ立ちしが吉日一日も早く本藥を用ひて、スラリとしたる中肉、美しきやさ容姿、無病壯健の御身體となるゝ樣くれぐれもおすすめいたします。

尚中容丸は發賣以來非常な好評を博し、常に製藥が間に合はぬほどの賣行きでありまして、今の場合直接の御注文者に對してのみ漸く製藥が出來るといつた狀態でありますから、當分の間どうか是非直接に御注文下さるやう御願ひ申しあげます。

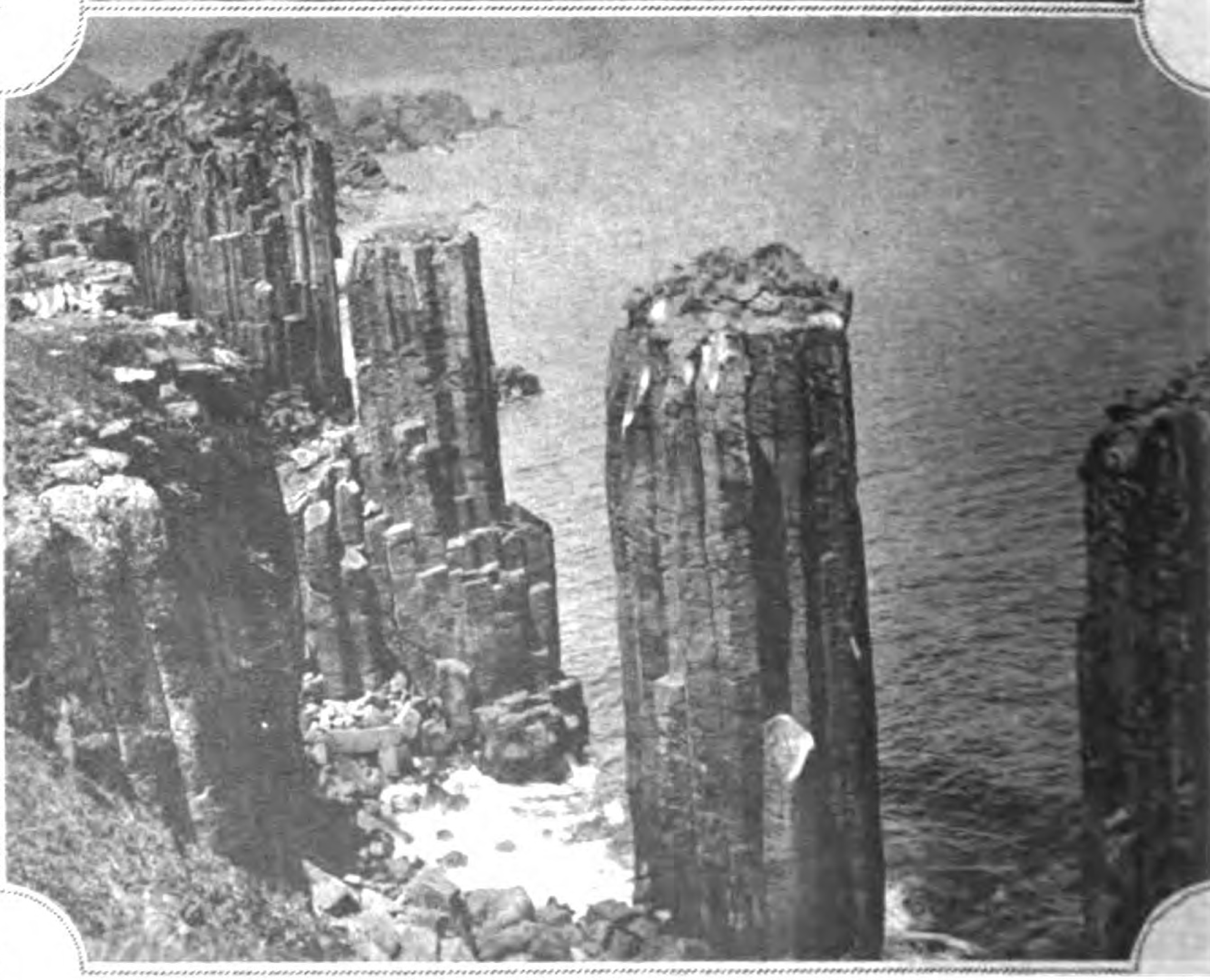
東京市小石川區表町六十八番
發賣元 **鶴岡藥品部**
振替東京一六六八〇番
電話小石川四七九〇番

本藥に對する詳細の説明書がありますから御申込次第無代進呈いたします。

奇岩



昔坂上田村麿が當時熊野灘を荒し廻り鬼と呼ばれた海賊を征伐したと傳へらるゝ和歌山縣鬼ケ城の一部である。奇岩海に迫つて一大岩窟をなして居り中の廣さは優に二千人を容れ得るそうである。



朝鮮海金剛叢石亭の絶景である。玄武岩の石柱は整然と紺碧の渚に聳え其奇は蓋し海金剛中第一である。中央の石柱は昔四人の仙人が此の峯に來て遊んだと云ふ傳說から四仙峯と稱へられてゐる。

決死の





危險！危險！下は千仭の谷底。此の峻岨の峯は「煙突」と綽名されてゐるアルプス山脈中のグリソン山。

一分に一里！今や飛行機は恐ろしい速力で上空數千米を飛んでゐる。見よ！一人の妙齢の美人はヒラリ機翼に下つて決死の藝當。危險は刻々に迫つて行く。





數十尺の高さから悍馬一鞭ザンブと計り水中に飛込む冒險騎手は米國のカーパー嬢。

冒險





どうです。此の大膽さは紐育の眞中で旗竿のペンキ塗替。一つ誤れば命がない。

此れは又痛快で奇抜。アフリカの土人が空中高く渡した丸太の上で火の出る様な競技の眞最中。重い袋で叩き落され様ものなら大怪我をして了ふといふ危いスポーツ。





獨逸の潛水夫が特殊の服を着て沈沒船の安否を尋ね今將に海底に沈まんとする處。

變な家

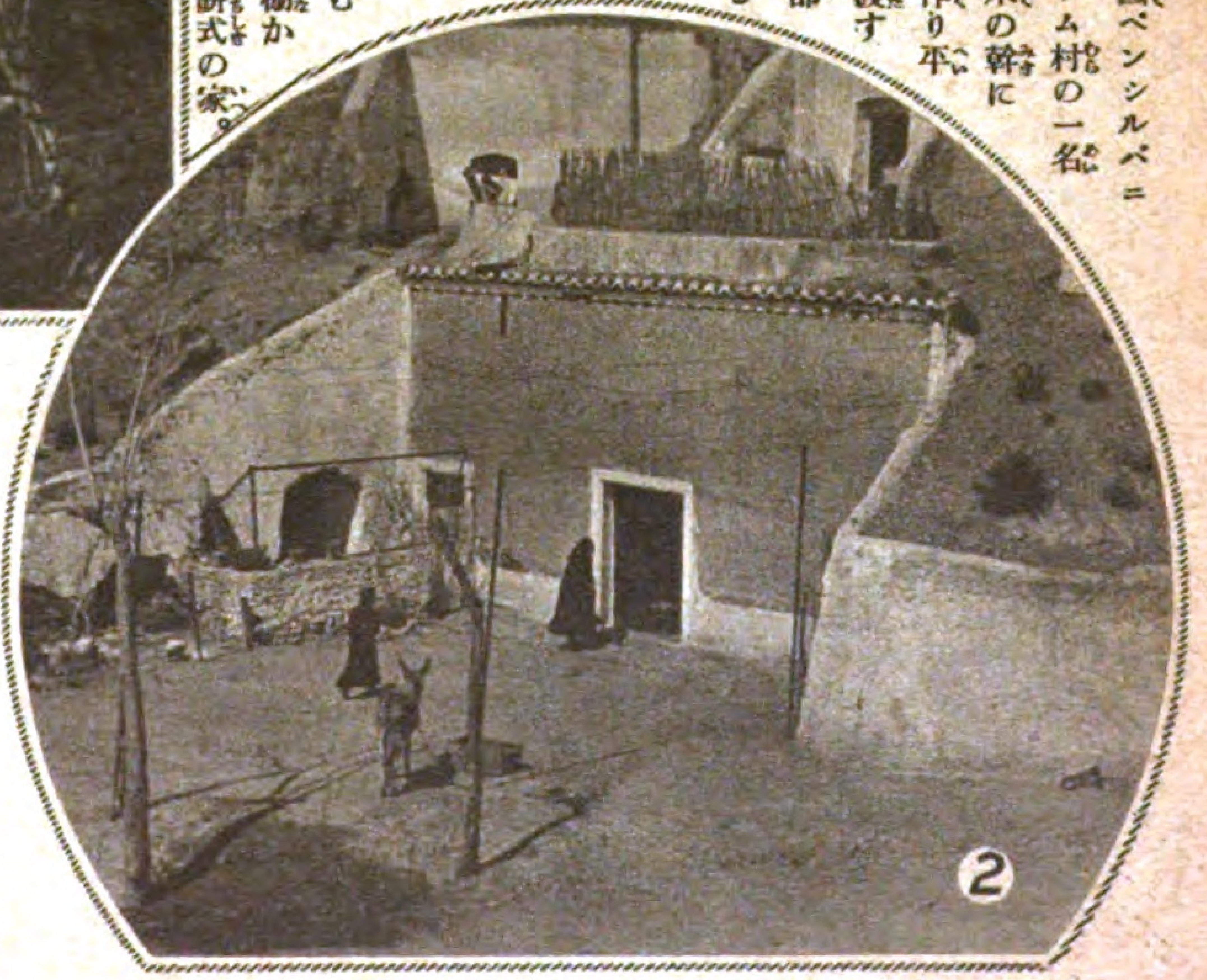




(3) 氷ばかりで出來てゐるエスキモーの家。しかし和氣あい〳〵の家庭は



(1) 米國ペンシルバニア州ヘラム村の一名物。大木の幹に階段を作り平野を見渡す高さに部屋がある。秋になれば自然に果物が窓から轉がり込むといふ棚から牡丹餅式の家。





(2) スペインに今も殘る穴居時代の遺物、崖の根元に堀込んだ家。これなら大抵の地震では潰れない。岩の處々に見える窓や勝手口に、お目をとめ下さい。

面白い家



不和な土藏作りの家よりも溫い。



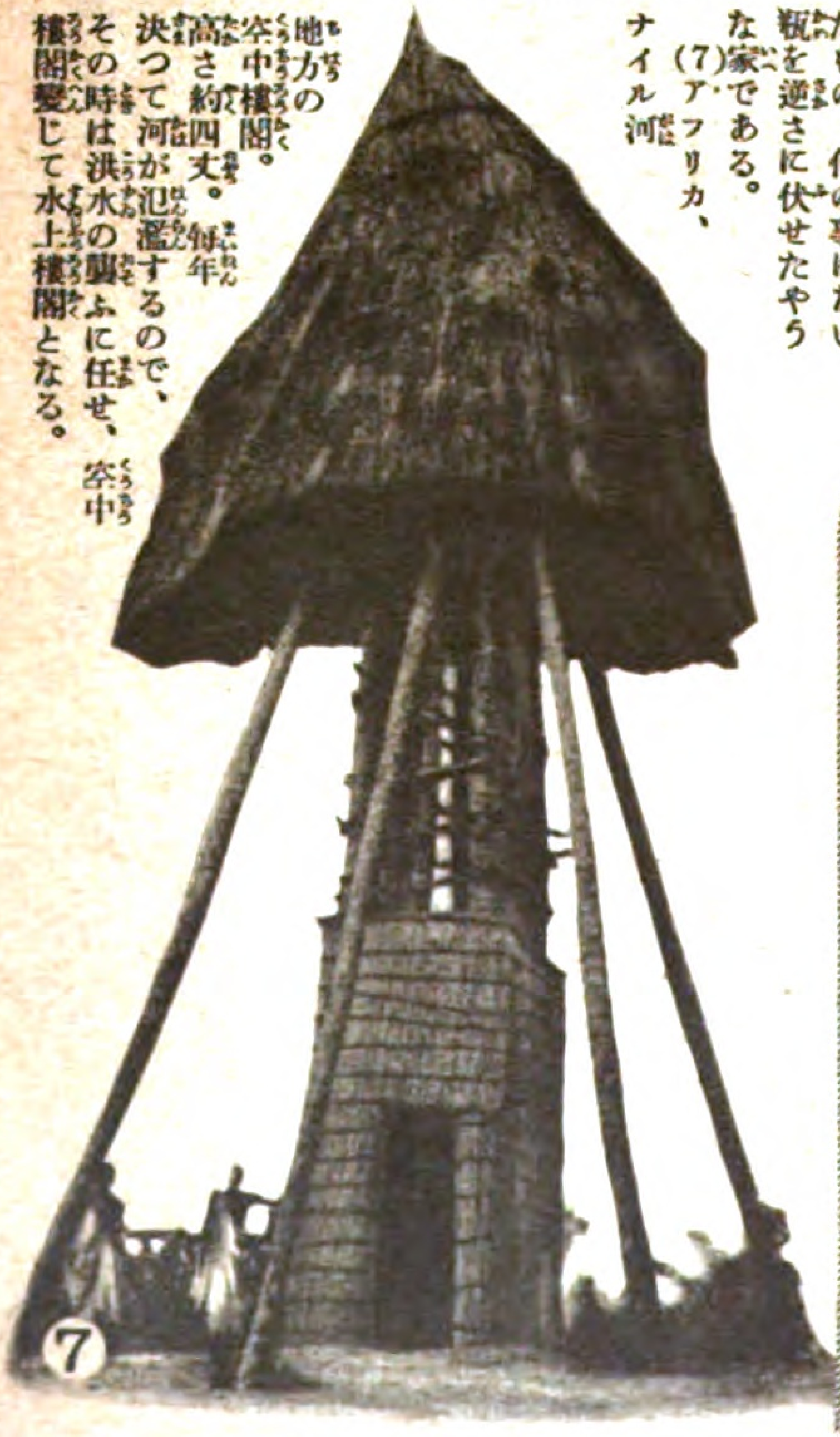
⑤

(4)南洋土人の樹上の家。猛獸の襲來を防ぎ暑を避け、濕氣が來ないから最も衞生的。但し嵐の時は少々搖れ方がひどい。

(5)南洋パプア島の水上の村落。そよ〳〵と床下から吹上る風はどんなに涼しいでせう。椰子の防風林、珊瑚礁の防波堤、穏かな波に浮ぶ月を眺めながら一村は平和な夢に入る。

(6)中央アフリカ土人マツサ族の家は寫眞の如く土を捏ねて乾かしたもの。何の事はない瓶を逆さに伏せたやうな家である。

(7)アフリカ、ナイル河地方の空中樓閣。高さ約四丈。毎年決つて河が氾濫するので、その時は洪水の襲ふに任せ、空中樓閣變じて水上樓閣となる。



⑦



⑥

水邊の





素裸になつて水邊に立つと誰でも無邪氣だ。子供に還る。矢張り人は自然の子だ。(1)『サア〱渡つた渡つた』と因幡の兎でも渡す樣に水の上に出來た人間の橋。八人の娘さんの茶目振りである。(2)ヤット繰出した拳闘の一手。パタリ！敵は參つたかと思ふとこれも砂原のいたづら。二人の美人は米國の映畫女優。(3)珍無類のダイビング。自分の足をシツカと押



たわむれ





へた蠻飛躍一番宙返りして海に飛込む放れ業である。

(4)盥の様な小舟に乗つて並んでゐるのはナイル河口のアフリカ土人。汽船から銅貨を投げると獺の様に水を潜つて素早く拾ふ。

(5)『オット流れちや大變』兩手に一ぱいお船を抱いてはしやいでゐる船成金？ も罪のない水邊のたわむれ。



私はお人形です







私はセルロイドのお人形です。王子の工場で型に入れて煮られたり、女工さん達に口紅をつけて貰つたりして漸く産聲あげました。私のお母さんは澤山あります。硝化綿（紙を硝酸で融かしたもの）、樟腦、アルコール等です。これからお友達と一緒に裸のまゝで洋行します。行先は大抵米國で、中には英國、獨逸、南洋に行く人もあります。こうして私達は年に四百萬圓宛日本のために働くのです。皆さん私達が出發の時はどうぞ旗を立てゝ送つて下さい。



ひよどり草紙

吉川英治先生大傑作！

禁裡より徳川家へ御下賜の名琴紅鵯に絡る大讀物！父の命を救はんと美少女早苗、快男兒耀之助の大活躍！慓悍獰猛、大阪方に密通せる惡漢陣太郎と斯波丹波守を向ふに廻して苦辛慘憺！　血あり、涙あり、波瀾萬丈！

或は、美しき巫女の慘虐、或は熱血兒怪童麻吉の出現！或は安中城下の大亂鬪、或は惡漢陣太郎が早苗へ無體な戀慕！危機一髪！早苗耀之助の運命！

見よ！手に汗握る壯絶可憐の大場面！

河野通勢畫伯裝幀
山口將吉郎畫伯 挿畫執筆

四六判製幀優雅
定價 貳圓（送料 拾錢）

東京本郷駒込坂下
發行所・大日本雄辯會講談社
振替東京三九三〇



御申込次第圖書目錄進呈

現文壇の權威として人氣湧くが如き

加藤武雄氏の傑作出づ

華鬘



ふとした誤解から愛妻を呪ひ、戀慕の一女性を兇刃に倒した青年畫家都築專一！



黒曜のやうな眸の持主！夫專一が病氣の爲め、思はぬ誤解をうけ乍ら戀に泣く可憐な靜代

明眸罪あり、戀は悲し

愛慾の苦悶に泣く魂の嘆き

媚婦と嘲られ、妖婦と罵られながら、彼女はいかに悲しい戀に泣いたか？　まことの戀が、いかに解せられ難く、たとへば荒海の底の眞玉の、人間の眞情がいかに誤られ易いか？　憎みを以て愛に酬ひ



靜代の可憐な姿に思ひを寄せて誘惑を謀る色魔都築龍彦！



罵られ嘲られ乍らも戀に燃え戀人の兇刃に倒れし佐竹房子！



房子の唯一の理解者として命も房子を想ふ貧乏畫家三好明！

られ、呪ひを以て戀に報ひられ、遂に、その戀人の兇刃に命をおとした美人佐竹房子の、あまりに美しく、あまりに悲しき半生の哀史！更に身を粉にして夫の爲に盡し乍ら、ふとした事から夫の誤解に泣く靜代、過つて愛妻を呪ふ専一、更に之を廻つて幾多の男女あり、その構圖の波瀾重疊なる、その描筆の絢爛精緻なる、これ字々に血湧き、句々炎を駈る一巻情熱の繪巻！眞に近來文壇の大傑作！

敢て青春多恨の人々の愛誦を待つ。

最新刊

小村雪岱畫伯裝幀

四六判布裝函入美本

定價貳圓卅錢

（送料拾四錢）



東京本郷駒込坂下振替東京三九二〇

大日本雄辯會講談社

神經衰弱は不運の基

—世界的大發見の精力增進劑—

▼神經衰弱の原因

『十で神童、十五で天才、二十過ぎれば普通の人』と云ふ古い諺があります。何故二十過ぎると普通の人になるのでせうか。それは性的神經衰弱に冒されるからです。二十歳から五十歳位までの勉强盛り働き盛りの人で、神經衰弱に罹つてゐない人は殆どありません。神經衰弱の原因は色々あります。然し、その十中八九は過度の勉强又は性的不滿若しくは飽滿に基くものです。

▼神經衰弱者の悲哀

一度神經衰弱に罹ると、記憶力、活動力、性慾も衰へ、病氣に對する抵抗力もなくなり、全く無氣力な人間となります故に長上、友人、異性から疎んぜられて不愉快な日を送るやうになり、遂には生活の根柢さへも危くなります。

▼不思議な藥の發見

羽太博士は御承知の通り、ホルモン研究に就ては我國第一の權威者であります。人間活動力の源泉を培ふ神藥「キング・オブ・キングス」は博士が多年苦心の結果發見されたもので人體の諸器官中一番感應の鋭い靑春腺に或る微妙な直接刺戟を與へて全身の諸機能を活潑にし、精力を增進する事は驚くべき程顯著であります。從つて神經衰弱を一掃するは勿論、記憶力、活動力、性慾、若さ、美しさを著しく回復增進します。

醫學博士 羽太鋭治先生責任創製

精力增進回春秘藥

キング・オブ・キングス

百粒入 **金貳圓** 內地送料拾貳錢

東京市神田區北神保町十一 **春泉堂**

電話九段二五一八番
振替貯金東京三五〇一九番

試に羽太博士の詳細な『**說明書**』を御覽下さい。ハガキにキングで見たと附記して申込めば、直ちに無料で送呈します。

精力增進劑**キング・オブ・キングス**は講談社代理部「**振替東京六六二九番**」で取次ぎます。

萬人熱狂
繪ばなし大會



家庭スケッチ

ザッと一風呂浴びた父親褌一つの裸でドッカリ縁の籐椅子に掛けた。三つになる子供駈けよつて可愛い人さし指で可愛くない父親の臍を押した。そしてその顏を見上げ『父ちやんチーン』父親何の事か解らずキョトンとしてするがまゝに放つておいたら、何遍も何遍も『父ちやんチーン』だ。そこへ母親が、『今度は坊やのチャブチャブよ』と呼びに來た。『アラツいやな坊やだネ。父ちやんのお臍を呼鈴だと思つて……』『ワッハッハッハッ』父親無性に嬉しがつて子供を抱上げた。高く……高く……。



道話　**お月樣ばかり**

或る男月夜の晩にその子供を張番させて西瓜畑に盜みに入つた。『人が來たら知らせい、誰も見ては居ないか』すると子供は『誰も見ては居ないけれどお月さんが見て居る』その一言に彼は大いに恥ぢてそのまゝ歸つた。



○偉人名言

一、人は只其の長所のみを取れば可なり。其の短所の如きは必ずしも知るを要せず。

一、人は己れが嗜好に合する者のみを採用すべからず。

一、用ゆる以上は十分に其の人に委す可し。

一、人材は必ず瑕疵あり瑕疵なきは以て人材とすべからず。

一、人を用ゆるに當りては小過を咎むる勿れ。

（荻生徂來）

あほだら經

黑づくし

烏渡出ましたお笑ひ草、お釋迦讓りのあほだら經文、印度に緣んだ黑の字列べて、玄人めかした木魚の合唱、これから陽氣に始まり〳〵（チヤカポコ〳〵）およそ世間に黑いものなら、山なら黑髮川では黑部、くらう判官源氏の大將、黑田如水は九州大名、京都で黑谷、東京で黑門イタリー黑シヤツ幅を利かせ

道話

人生の意義

昔エヂプトのある王樣が全國の學者に向つて人生の意義を問はれた。命に應じて全國の學者は泉湧くオアシスに集り、議論を戰はせて苦心研鑽十數年の後漸くこれを數千卷の書に表し數十頭の駱駝に積んで喜び勇んで王の下に來たところ、王はすでに老境に入られ此の浩瀚なる書を讀む氣力がない。仍でこの內容を二頁程に纏めよとの再度の王命により又オアシスに集り十數年苦心に苦心を重ねた結果數千卷の書を漸く二頁に纏めて王に捧げたところ、此の時王は既 *



* に失明せんばかりの有樣で二頁すら讀む事が出來ない。それで更に一字を以て人生の意義を表す樣にと王命が下つた。それから數年の後竟にその一字が

偶話

金を貯める法

或る處に小金を貯めて安樂に世を送つてゐる老爺があつた。一人の若者が一日彼を訪れて金をためる秘訣を尋ねた。すると老爺は『あの柿の木へ登れ、折れそうの所迄』若者は登つた。『そこで片腕で下れ』若者は下つた。『先づ小指を開け、次に藥指を開け、次に中指を‥‥』今や若者は二本の指で枝をしつかと握つてるのみである。『その次を離せ』若者は悲鳴をあげた『これ丈けはどんな事があつても放せません』と老爺は一段と聲を勵まし『その意氣だ。その丸いものを放したら金は貯らぬ。金を貯める秘訣はそれを放さん事だ』



て、黒絲縅しは日本の武裝、まだく黒いはニグロの赤ん坊、汽船の釜たき、忍術使ひの忍びの扮裝、丹波の荒熊、闇夜の烏、黒鍬、黒豆、黒鯛、黒胡麻、鍋釜お尻もよつぽど黒いが、棚の大黒煤けてまつ黒、赤い鳥居も稻荷は九郎助、若いうちなら苦勞は樂だ、黒くなる迄元氣で働らきや、黒塗金庫を三つ四つ並べて、後生安樂氣樂に暮せる（チヤカポコ〳〵）

見出されたので欣喜躍雀して王に奏上した。その時王は臨終の間際で辛ふじて間に合ふ事が出來た。その一字は何であつたか。曰く、『求めよ（Seek）』

滑稽問答

問『珍中の珍なるものは何か？』

答『汽車に乘つて舟を漕ぐ事』

問『貧乏の棒はどうすれば細くなるか』

答『鉋（艱難）で削る』

問『口車の賃金如何』

答『嘘八百圓が先づ相場』

小話

『私の國の宮重大根は切口が三尺もあつて長さは二間もある』『ナント其の種子を一つ二つ欲しいものだ』『何になさる』『さればサ庭に大根を作つてその後を井戸にします』



○あべこべ集

太る蛔蟲　やせる子供
子供は細く氣をつけ
　大まかに放つとけ
太く短き生活より
細く長かるべし







家庭遊戯

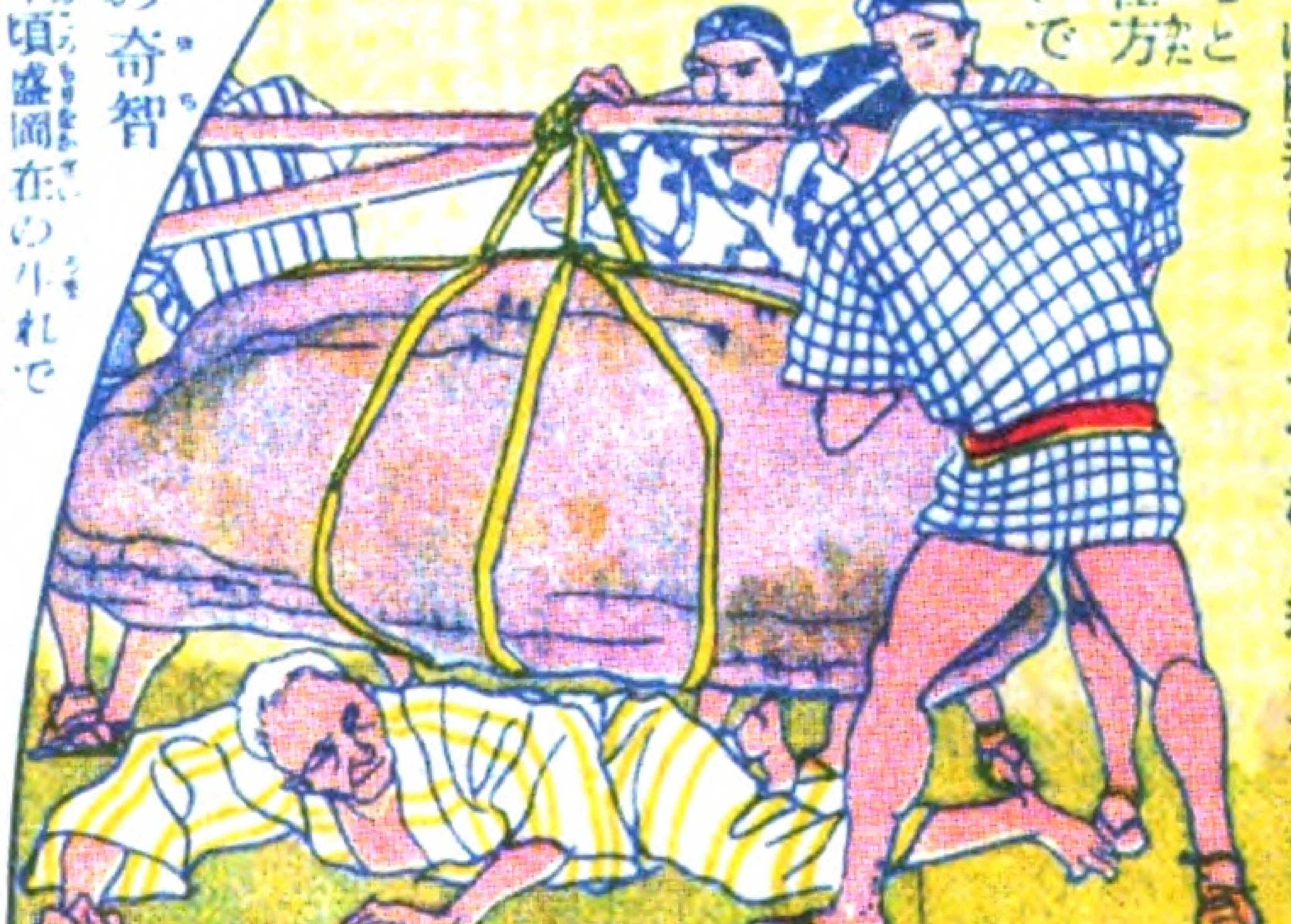
鉢巻競爭

人數を紅白の二組に分け向合せに坐り各組の一番に手拭一筋を渡し合圖と共に鉢巻をして手を一度又は三度打ち叩いて二番目に渡す。これを繰返して早いのが勝。だん〱やつてゐると中々面白い。

美談

大石と老人

天龍河原で千貫以上の美事な大石を見出し金毘羅大權現と彫刻し村の丘に建立する事になつた。血氣の青年が數十人勇んで長い棒で擔ぎ出したが坂の中途迄來るともう疲れて動けない。ところが信者の一老翁が來合せて忽ち大石の下に腹這ひになつて潜り込んだ。サア大變一寸でも肩をゆるめると老人は押潰されて了ふ。仕方なく青年はヤットの思ひで苦痛を忍び乍ら漸く頂上迄運ぶ事が出來た。どんな仕事も命を打込めば成功は疑ひない。



美談

血染の聖書

或る時強盗が女學校の寄宿舍に入つて一人の少女に向ひ『所持品を皆出せ！』と嚇すと『何でも御入用の品はお持ち下さい』と淑かに答へた。驚て賊は大風呂敷に目ぼしい品を入れて逃出し校門の處まで來ると



名人物語

仙臺坊の奇智

明治初年頃盛岡在の生れで仙臺坊と呼ぶ盲目の謎の名人があつた。高座にあつて客からかけられる謎をすら〱と解いて評判となつた。

ある客がそのあまりにも鮮かな頓才が癪に障つたのか、一つ困らしてやらうと思つて『仙臺坊の馬鹿とかけて何ととく？』と侮辱をなげた、目のあたりに皮肉な笑さへ浮べて答へた。『仙臺坊の馬鹿とかけ





先の少女は追縋り『その[illegible]の[illegible]は亡き母の手織の品で大切なもの故何卒お返し下さい。その代り之を上げます』と一冊の聖書を投げつけると少女の顏に當つて夥しく鼻血が出た。少女は地に伏して彼が眞人間になる樣に祈つた。翌朝賊が縛に就き入獄したと聞いた少女は獄舍を訪れて聖書を差入れた。賊が何氣なくあけて見ると血の滲んだ表紙裏に『主よこの人に罪を負はする勿れ』と書いてあつたので賊は心から改心して善人になつた。そして此の少女は後に知名の紳士の夫人になつた。



○あべこべ集

門戸は開放し
口と財布は
閉づるが勝
高い鼻は折れ易く
低い鼻は信賴を生む



□家庭科學

食鹽を五合や一升宛買ひます吾々の家庭では暫くするとニガリが出まして濕つぽくなつたり潮解したりします。それを防ぐには下に灰をおいて灰の上に竹の皮を敷きその上に鹽を貯へると何時迄たつても食鹽はサラリとしてゐます

て金屏風にふんどしととく』『心は……サ』『心は――かける奴が馬鹿だ――』――客はアツと感嘆したものの、忌々しくてならない、懲り性もなく『それぢや、仙臺坊の糞喰ひとかけて何ととくサ』と一層ひどい難題をかけた。――が彼は怒る色も見せず莞爾として切り返した。『されば、夕立ととく……』『ウーム、心は何とサ』『西ア暗い――(汝ア喰へ)』客は這ふ這ふの態で逃げ出して終つた。

友情美談

銃口に立つて

織田信長は武田勝賴が反旗を飜した時その捕虜を多く銃殺して快しとした。織田軍の近藤兵馬が或る日一人の捕虜が銃殺されんとするのを見るとそれは同鄕の竹馬の友高田源兵衛だ。驚いて信長に助命を嘆願したが聞入れられない。あはや發射の命を下さうとした時兵馬は身を躍らして銃口の前に立塞り『サア打てッ、俺は竹馬の友を救ふ事が出來ないなら寧ろ友と運命を共にする』此の感動すべき有樣を見た流石の信長も感に打たれて源兵衛を許した。



馬鹿話　書生と鰻

ある田舍の鰻屋の店先で一人の書生が鰻を負けろと頻りに談判して半日も動かない。主人も根がつきて書生の要求通負けるとし『では串にしませうか包みませうか』と問ふと書生曰く『イヤ今買ふのでない、これから東京に行つて勉强し、出世してから國へ歸り女房貰つて子供が出來、若しその子供が鳥目であつたら買ふつもりだ』

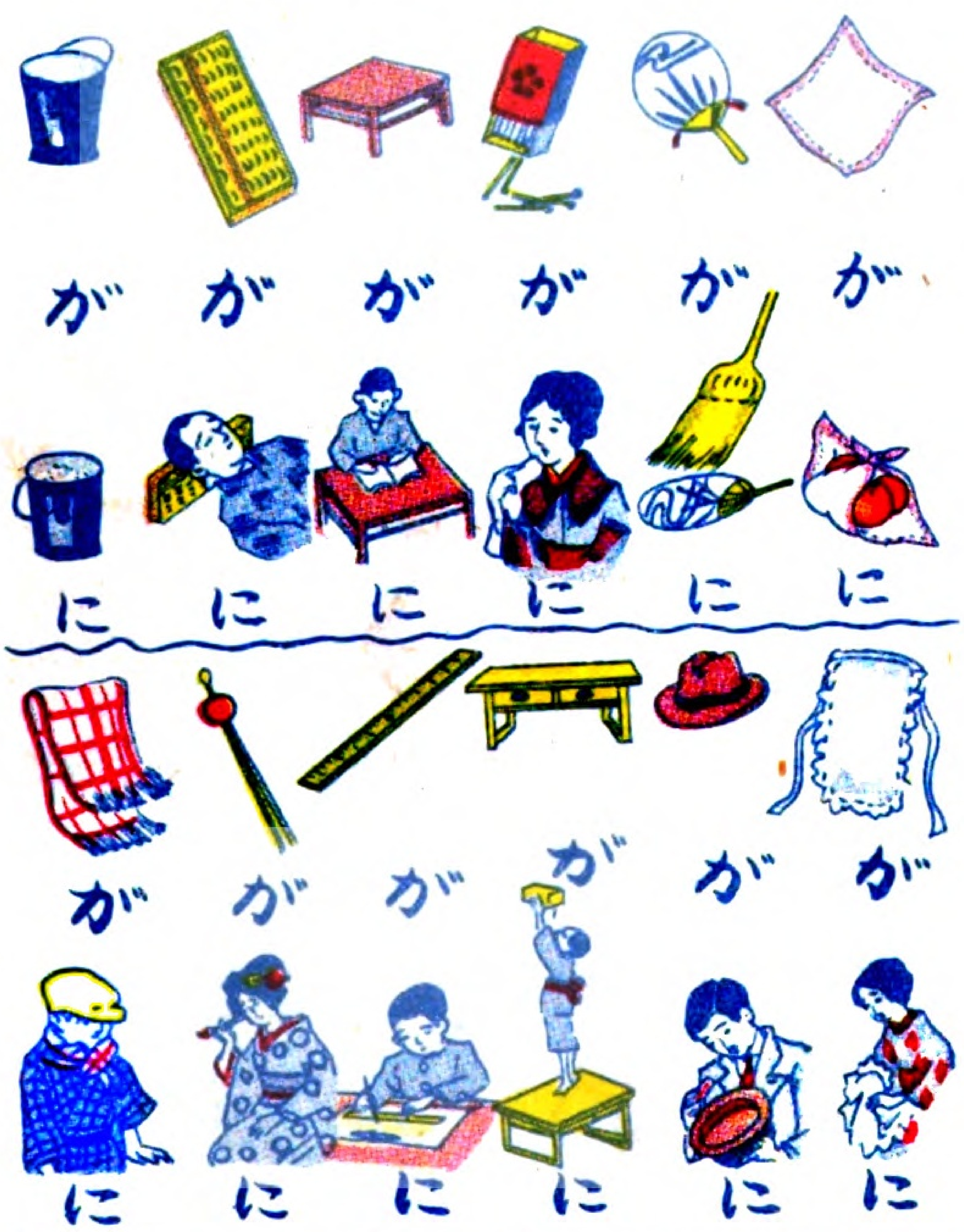


考へ物

將棋の駒を全部場面に列べ駒特有の筋道を防げぬ樣に並べて御覽なさい。（誰がやつても歩三ケ残ります）

王		香	香	歩	香	香		金
							飛	
金		歩	銀	銀	銀	歩		歩
	飛							
歩		歩	歩	歩	歩	歩		金
			桂		桂			
銀		歩		歩		歩		金
桂			歩		歩			
桂		歩	角	歩	角	歩		王

繪言葉　本職以外の勞働



仁和加仇討

やア珍らしや建具襖之助、かく申す某は同家中掛地表具が一子衝立なるぞ、よも見忘れは致すまい、五ケ年以前父を討つて立退き所々方々と尋ねる所姓、で逢ふたは優曇華の花咲く春の今日の對面いざ尋常に屛風く

○滑稽早口

△京の狂言師が京から今日來て狂言今日して京の故郷へ今日歸つた。

△美濃の蛇池に蛇が居るぢやげな、牡蛇か牝蛇か何ぢやかんぢやかか分らんぢや。



無駄話 拾つた金

『君こないだ僕は五百圓拾つたよ』『羨しいな』ところが贋札さスッカリ』『そりや莫迦を見たな』『其の財布から足がついて犯人が捕り賞金百圓貰つた』『そりやよかつた』『それで債券買たら三千圓當つた』『へえ』餘り有頂天になつて落して了つた』『誰か屆けてくれたか』『いゝや結局元々さ』



一口噺 金のなる木

金のなる木を持つてゐると聞いて訪ねて來た客『根を分けて下され』と所望すれば主人は『そなたは欲の深い人故進ぜられぬ。假令金がなつても待ち兼ねて青いうちにとるるであらうがな』

○童謠

麥笛吹きましよ　ピッピッピ
吹き〳〵行きましよ　ピッピッピ
すみれが咲いてる　ピッピッピ
雲雀が鳴いてる　ピッピッピ
母ちやんことづけ　忘れずに
急いで行きましよ　ピッピッピ

滑稽浪花節

節へ虎は死して皮を殘し人は死して名を殘す。豚は死して肉を殘し象は死して牙を殘し蠅は死して傳染病を殘し鮎は死して子を殘す——何でも死ぬ時は殘すに限る、さりとて財產殘すはよいけれども借金を殘して死ぬは恥なり——節へ是も心一つの置處……。









語呂合せ

□捕らぬ狸の皮算用
□隣の大將錢勘定
△鐘は上野か淺草か
△錢はないのか明かぬのか
○聞いて極樂見て地獄
○醉うて極樂寢て遲刻
×窮鼠かへつて猫をかむ
×急須かへした猫をける



昔噺　首の斬替

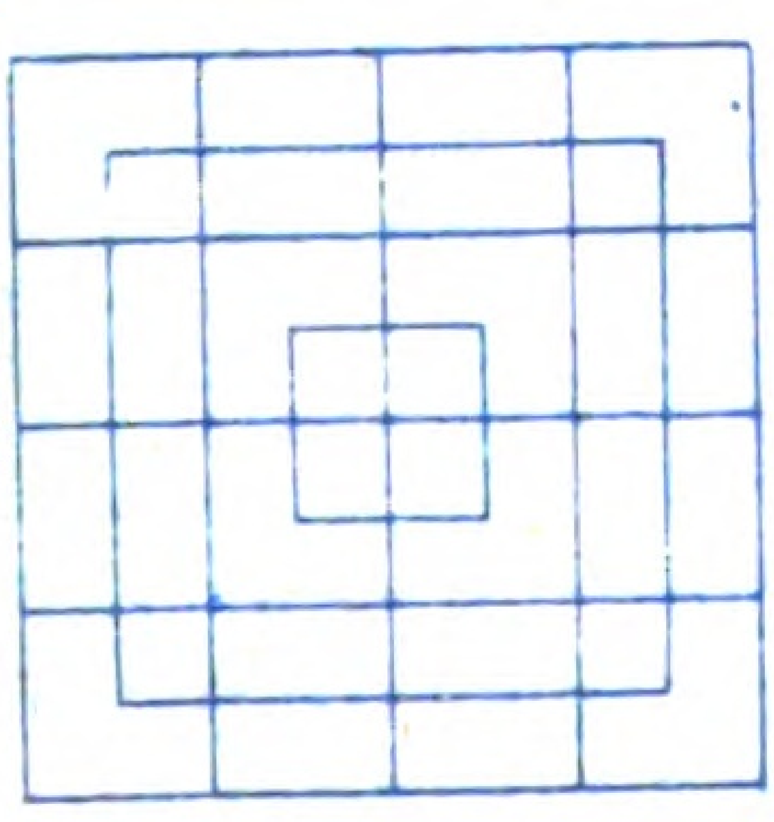
首斬屋の前に立つた男澤山並べてある樣々の首を見て『あの好男子の首はいくらだ』『あれは百兩で御座います』『あの鬼の樣な醜男の首は？』『あの方は二百兩でございます』『何故醜男の方が高いのだ』『あの首は鬼の樣な怖い顏をしてゐるので借金取が來ても何をッと眼を光らすと恐ろしさに逃げるから高いのでございます』『それじや其首を斬替へてくれ』と自分の首と醜男の首を斬替へ代金も拂はずにそのまゝ出て行かんとするので首斬屋『代金をどうぞ』と云へばその男眼を光らせて『何をッ』



滑稽講談　六尺の魂

ヌーと入込んだ覆面の强盜留守の主婦を捕へて『オイ愚圖々々云はずに金を出せ』『何をッ女と見て莫迦にすると承知しないよ……』『恐ろしく度胸の良い女だな』『一寸の蟲にも五分の魂、妾にも憚ん乍ら二尺五寸の魂はあるんだよ』『ところが俺の魂は六尺だ』『そんな長い魂があるものか第一五尺の身體に六尺のものは這入る譯がない』といふと强盜ヌカラヌ顏で『實は魂が眞直納つてると眞人間だが長すぎるお蔭で魂が曲つてるんで……』

考へ物



此の中に正方形が四十四あります。數へて御覧なさい。出來そうで中々容易に出來ません。

童謠　麥踏み

麥踏み麥踏み　ヤツコラセ
東にお日さん　首出した
麥踏み麥踏み　ヤツコラセ
頭でお日さん　晝休み
麥踏み麥踏み　ヤツコラセ
お日さん　お山にお歸りか
麥踏み麥踏み　ヤツコラセ
私もそろ〳〵歸らうか





諧謔小說　遊星

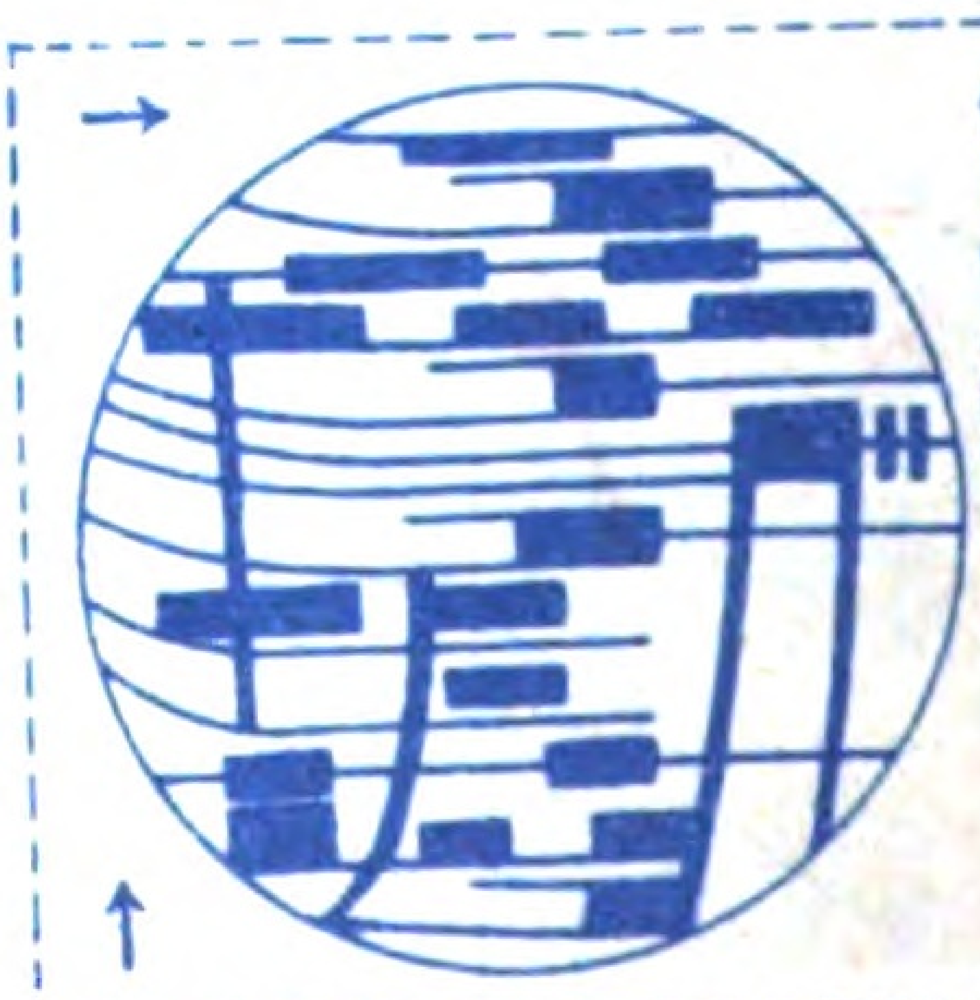
ある夕暮、銀砂の樣な空の星を仰ぎ乍ら新夫婦の語らひ。妻『まあ あの星の綺麗ですこと、あれは何といふ名なのでせう』夫『あれはねヴヰナス、宵の明星さ』妻『ヴヰナス？　まあ好い名ですわね』夫『戀の幸福と云ふ意味の星さ』

それから二十年經過のある夕暮。妻『あの綺麗な星は何？』夫『名なんか知らないよ』『何か意味があるんでせう』『意味なんかないよ星だもの』

茶話　山椒

或る座頭が他所で山椒にむせた者の可笑しさを噂してゐたら一人の出しやばり屋一つ俺がその眞似をしてやらうと有合せの山椒を二三粒口へ入れ咳拂ひよろしく目を白黑にさせてゐる內に狂言がすぎて本當にむせて了つた。息をするさへ苦しさうに水を！　水を！　とその場に倒れたが滿座の人々は本當にむせたとは少しも氣附かず、迚も上手だ、本物と少しも違はない。全く器用な男だわいと頻りに賞めてゐる內、その男到頭爐の中へ轉り込んだ。併し一座の人はまだ眞似事だと思つてるうち終には鬚を燒き頰髯迄焦し始めたので、始めて本當にむせたのだと氣づき俄に水よ藥よと騷ぎ出した。おかげで漸く息は吹返したが此の男『あんまり眞似事がすぎて苦しさの餘り面目玉を灰にまぶしました』

此の圖を矢印の方向から斜にして見ると字が見えます何といふ字でせう。



□洒落問答

○富士山はいゝですね行きましたか。
○二人は到々一緒になるとさ。
○身投げの女は素敵の美人だつて。
○まだ純金そのまゝか。
○オイ熊公昨晩酔つて亂暴したな。
○刺されたらどうでした。

□いゝやまだ。
□添ふか。
□水の垂れるようなね。
□イヤ鍍金りはげた。
□イヤ俺は酒亂
□蚊ゆくて困りました。

珍聞

青痰の禮

伊太利の商人ボノが象牙を買入れる爲阿弗利加のナイル河の上流に行つた時その地の王に謁見を差許されて伺候すると、裸體の王が出御になり先づ侍從の顔にペッと唾を吐きかけ次にボノにもかけた。短氣の彼れは眞赤になつて怒りピストルを向けようとした處通譯は駭いて遮り『此の國では人に唾をかけるのが尊敬の表徴で、殊に王の唾を頂くのは無上の光榮である』と説明した。だが治まらぬのはボノの胸の中、





豪勇

逸見十郎太

薩軍切つての劍豪逸見十郎太は明治十年田原坂の戰に前方に敵の銃聲が聞えた時、愛刀を下げて出で來り『敵は前方には居ない此方に居るんだ』と云ひつゝ傍の藪の中に入り十分位して平氣な顔で出て來た。部下が模樣を尋ねると『うん皆よ』唯一言。不審に思つて藪を調べて見たら、三十餘名の敵が唯一刀のもとに屠られてゐるので、今更乍ら彼れの腕前にビックリした。

學界餘聞

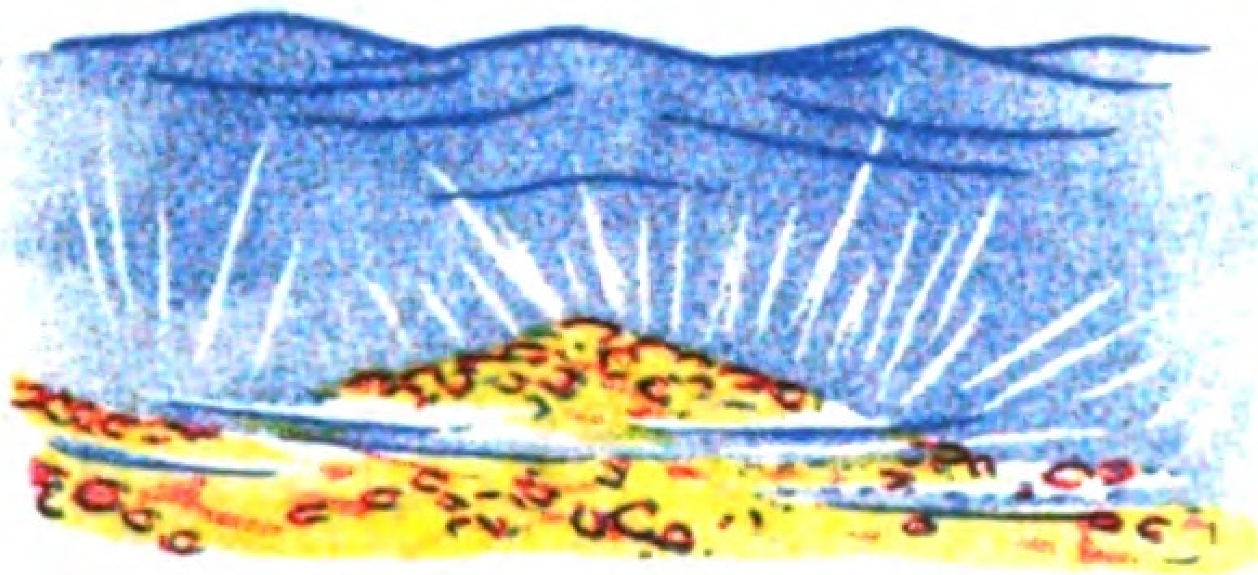
靈魂の重さ

米國マサチユセッツ州のマクドガル博士は人間の靈魂の重さを計るために、或る時肺病で瀕死の狀態に在る一名の患者を寢臺のまゝ精巧な秤器の上に載せ、靜に注目して居ると恰度患者が息を引取つた刹那秤は俄に下つて一オンス四分の三丈け輕くなつた。つまり六匁餘りが人間の靈魂の重さだと博士は斷定した。



餘りの忌々しさに今度は王にイキナリ痰を吐きかけたところ美事王の顔に命中した。流石の王も顔をしかめ乍ら『朕汝の深厚なる敬意を嘉賞す、象牙の取引の儀は勝手たるべし』と至極御滿悦の態。





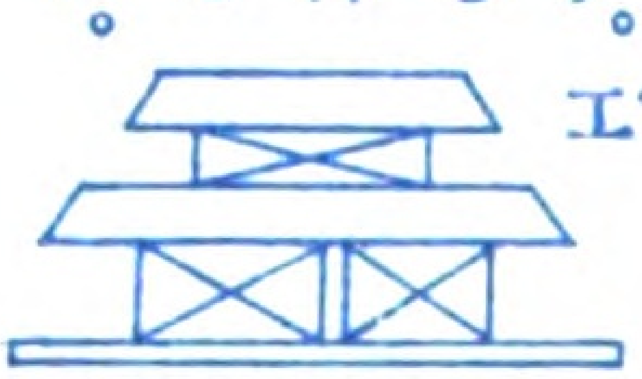
海外奇聞

海底の黄金

南米コロンビアの土人は昔からグアタピタ湖を聖靈の湖と稱へて事ある毎に黄金を投込み幸福を祈る奇習がある。併し此の黄金を取ると忽ち神罰を蒙ると言ひ傳へられ、湖底には莫大な黄金が沈んでゐるさうだ。（誰か取りにお出でになる方はありませんか）

○一筆描

此繪は一筆で描けます。工夫して御覽なさい。





車中スケッチ

バッグと女

バッグ（手提袋）を持つた女が電車に乘つた。車掌が切符を切りに來た。女はバッグをあけ蟇口を出しバッグをしめる。そして蟇口をあけ二十錢出して蟇口をしめる。往復切符を買つて六錢のつりを蟇口をあけて入れる。蟇口をしめる。バッグをあける蟇口を入れるバッグをしめる。『行き』の切符は帶の間へ挾む。又バッグをあける蟇口をあける『歸り』の切符を入れる蟇口をしめるバッグをしめる。そうしてあたりを見廻し『まあ早い電車だこと！』

縮尻話

聲色

始めて轉任して來た街で勝手が解らない。歸らうにも自分の家の見當がつかない。この邊で聞いてやれと一軒の家の戸を叩いて『モシ〳〵この邊に近頃越して來た凸山さんの



宅を御存じでせうか』と問へば中から『誰方ですか』と聞覺えのある聲出て來たのを見ると妻君だ。

『まあ嫌な方』

『イヤその一寸こわいろを使つて見たんだよへ、、、』



頓智物語 數字の願書

昔德川三代將軍の頃、惰け者の百姓があつた。少しの不作を口實に近村十ヶ村申合せの上、唯『一二三四五六七八九十』と書いた免税の嘆願書を出した。役人は不審に思ひ其の譯を訊すと『一々申上候 二が二がしき事に候へども三年此の方四終の饑饉にて五穀も稔らず七をおくやら八ぢをかくやら九はずに苦しむ十ヶ村の難儀何卒宜敷御察し下され度候』すると程なく三代將軍から『十九八七六五四三二一』と云ふ書附が下つた。百姓は恐るゝ伺ひを立てると『十分に取入れをし乍ら九はずに暮すとは心得違ひ八ぢを恥とも思はず七をおくやうなものなら六なものでは*

*ない五公儀の掟を以て四罪とは思へども三代將軍の御情けを以て二度とは許さぬ一度は許して遣はす』之を聞いた十ヶ村の百姓は恐入つて引下つた。

□廻文

△くさのなはしらずめづらしはなのさく
（草の名は知らず珍らし花の咲く）

△きしにさくいろかもかろいくさにしき
（岸に咲く色香もかろい草にしき）

△しきふたつつれつもつれつつたふきし
（鴫二つ連れつもつれつ傳ふ岸）

△まつとまつしめとりとめしつまとつま
（松と松注連取り留めし夫と妻）

奇智頓才 片箸の賀詞

信長が中國攻略の志燃えて居た或る年の正月、柴田勝家始め諸將綺羅星の如く居流れて元旦の賀詞を申述べた。『さあ屠蘇を汲め予も雜煮を祝ふぞ』と信長機嫌よく膳に向うとこれはしたり箸が一本しかない。↓



珍料理 熊掌

熊掌は支那料理のうちでも五味八珍の一つとして珍重される。後脚よりも前脚、同じ前脚でも右より左、大きいのより小さいのが價が高い。これを料理するには熊の掌を泥で固めて蒸した後、毛を一本々々拔き去るのである。



信長は不吉千萬と怒ち烈火の如く怒つた。サア大變人々は度を失つてゐる時羽柴秀吉丈けが『目出度い〱』と歡んで居る。信長は益ゝ怒つて、『藤吉郎何が目出たい！』と礑と睨めば『天下をカタハシからお取りになる瑞祥で元旦から誠に目出たう厶ります』



喜劇 自殺

場面――月夜の公園。人物――ベンチにかけてゐる二人。

甲『あゝ世の中が嫌になつた』
乙『俺も世の中が嫌になつた』
甲『死にたくなつた』
乙『俺も死にたくなつた』
甲『僕はカルモチンを呑む』
乙『俺は猫いらずを呑む』二人は各ゝ藥を呑み苦悶の態。軈てぐつたりなる。暫くし乙起上り甲の財布探る。
甲『君それは空つぽだよ。僕は君の財布を狙つてゐたんだもの』



□禮儀ものは附

○むさいものは……汚れた手布と無精ヒゲ
○愼みたいものは……井戸端會議と無駄づかひ
○氣障なものは……實家自慢と世辭わらひ
○洗ひたいものは……お勝手の布片と廁の手拭
○取り替へたいものは……手洗鉢の水と汚れた靴下
○見苦しいものは……フケの頭髮と片べりした下駄



←支那奇談 金銀の的

支那の北部は夷狄の地に接してゐる關係上度々その侵略に苦しんだ。或る時知事は一考を案じ、金銀の的を作り民をして射さしめ、當つたものにその的を與へた。命中する樣になると段々的の距離を離して行つた。一年の後再び夷狄が襲來した時、竊で習つたのが大いに役立つて見事之を撃退する事が出來た。それ以來二度と侵される事がなかつたといふ。

名人物語　巖の身

禪の所謂不動心の心境にある人を宮本武藏は武藝の方から巖の身と云つた。或る時細川光尚公が『巖の身とは如何に』と問ふた處實地にお目に懸けやうと秘藏弟子の寺尾求馬之助を呼びにやつた。求馬之助が呼びに應じて光尚公の面前に伺候すると武藏はその側に在つて『求馬之助そちは仔細あつて殿より切腹仰せつかつたぞ』と聲をかけた。すると彼れは聊かも動ぜず。『謹んでお受け申しまする。暫く準備の間御猶豫下さいませ』と面貌擧動少しも變る事なく次室に下つた。武藏は『只今の求馬之助の身體が即ち巖の身に候』と云つた。公はいたく感動された。



◈考へ物

一、狩りしきの山から兎飛び出づる（鳥の名七つ）

二、晝からはちと影もあり雲の峯（蟲の名七つ）

答——一、かり、しぎ、やまがら、う、さぎ、とび、つる。

二、ひる、か、はち、とかげ、くも、のみ。

逸話　ハーチング夫人

一九二〇年三月一人の立派な貴婦人が米國ワシントンのホワイトハウス（大統領官舍）の柵外から中の庭園の美しさに見惚れてゐるとそこへ巡査が來て『其處に立つて居てはいけません早く立去りなさい』と叱つた。一年の歳月はすぎた。一九二一年三月ホワイトハウスは新らしい主人を迎えると共にその庭園は開放された。市民は思ふ儘に此の庭園を樂しむ事が出來た。一年前巡査に咎められた人こそ誰あらう大統領ハーチング夫人であつたのだ。



○屁の川柳

大笑ひ下女の寝言に屁がまじり



念佛と屁ばかりひつていゝ姑



居眠つて下女細長く屁をすかし





○奇妙

學生『先生の御職業で何が一番奇妙と思はれますか』ドクトル『さうですね三文の値打もない人を治療するに一日十弗宛も取らねばならない時ですね』

滑稽謎々

初戀とかけて
無人島と解く
氣(木)はあつても
云へ(家)ない



○感情の動物

熊公『さうガミ〳〵云はなくても借りたものは返しますよ。何しろ人間は感情の動物ですからね』
伊勢屋『さうとも勘定はキチンキチンとしなくちやね』



逸話　吾が家は褌

支那の竹林の七賢と云へば頗る脱俗飄逸な人があつたが
その中の劉伶が或る夏褌も
せず素ッ裸で晝寝をして居たら
友達が來て『なんぼなんでも褌位はしたらどうだ』と云ふと劉伶はすましたもの『俺の住居は天下中だ。この家は褌だ。君の様に＊
＊入つて來たものは褌の中へ飛込んだ蚤同然だ』
流石の友も呆れて了つた。

新案嘘字

次の字を一つ一つ讀んで見て下さい。



讀み方

1モダンガール。2らくだい。3マラソン。4キング。5みかけだほし。6ながわづらひ。7かゝあでんか。8はんもん。9こうつうせいり。10くひにげ。11しゆつせ。12ものもらひ。13うらぎり。

一大事花嫁
どうも屁が出そう



下女と屁の
對決をする
居候



屁をひつて
嫁は雪隠出
にくがり



豪勇物語　輝氏の大膽

文安二年山内義勝と宮坂彈正が戰火を交へた時義勝の臣で當時豪勇の譽高かつた田垣輝氏は不幸虜となつた。彈正はその勇を惜しみ一命を助けて從はしめようとしたところ『若し私が助かつても飽迄御躬の首を狙ふのみである』『たが其方を失つた山内家は早晩沒落の外はあるまい』輝氏は憤然として『私如き者も雜兵よりは勝るかも知れぬ、然し我が軍には百に餘る私以上の豪傑が絶えず御躬の首を狙つてゐる』と豪語した。その態度の見事さ。彈正は大いに駭いて急使を馳せ山内家に和を請うた。輝氏の大膽よく主家を危地より救ふ事が出來た。



笑話　放屁

お芝居に出る假馬の後脚の奴が急に足踏みをして嘶いた。樂屋に入つてから親方に『何故あんなつまらない事を仕出來した！』と叱られると『イヤハヤ前脚の奴が臭いのを放りましたので』



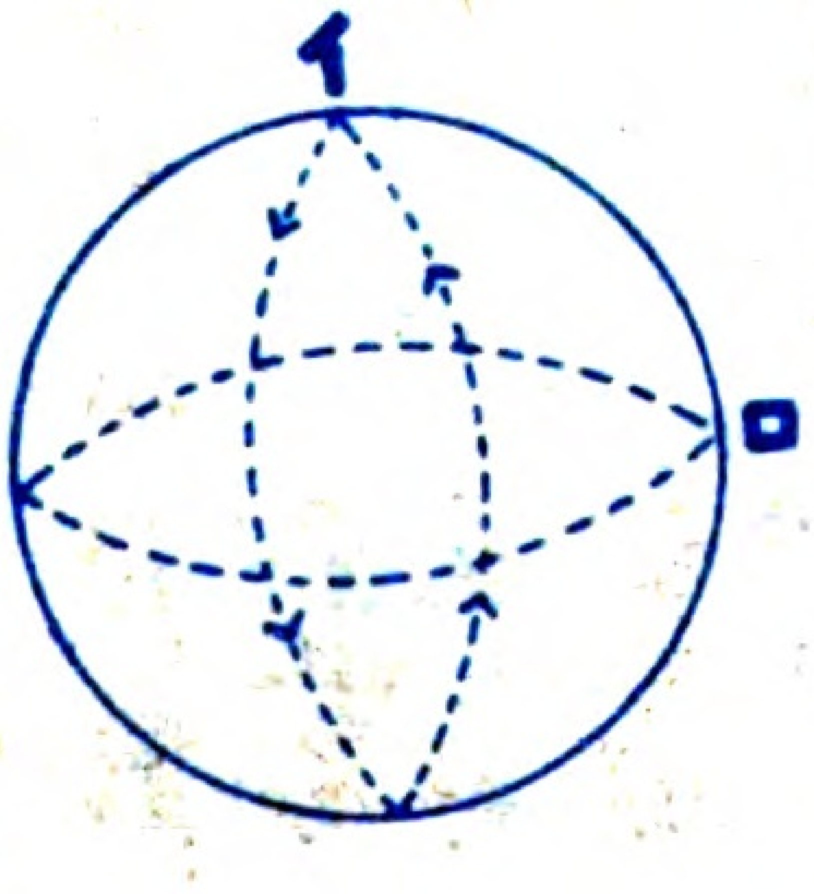
頓智　老病

或る人君公の逆鱗に觸れ死を賜はつた。『いくら願つても助命は罷りならぬ。併し死に方は汝の望み通りにしてつかはす』『有難き御仁慈願はくば老病で死にたう厶ります』君公失笑、遂に助命された。



○手品

二つの林檎を用意しその一つを客に見せ次に他の一つをナイフで皮を剝きます。そして一寸力を入れて押すと林檎は幾つにも切れます。（種明し）――一番細い針金で圖の様に林檎を縫つて行きイに合せて靜に引張ると半分に切られてゐます。この様に口でも行ふと四つに切れますが一寸見た丈けでは附いてゐて解りません。



○滑稽謎々

『東京から京都迄歩いて行くとかけて何と解く』『難船と解く』『心は』『覆へる（靴かへる）』

東西古今大雄辯家の名範例！

雄辯法とは何ぞ
時代の要求と雄辯
雄辯の基礎科
分類と其範例
談話と演説
雄辯の三大分類
大内青巒の報恩
大隈重信の「青年
政治家に告ぐ」
圓朝の「馬の別れ」
雄辯及び
雄辯法の發達
雄辯と歴史
孟子の問答法
ソクラテースの
問答法
詭辯より論理へ
詭辯論者
「アヒレスと龜」
印度の雄辯
及び雄辯法
釋尊の説法
富樓那の雄辯
希臘羅馬の雄辯
及び雄辯法
デモステネス
シセロの雄辯
ローマの雄辯

アントニオ攻撃
の演説
東西雄辯の差異
支那　總と雄辯
宗教的雄辯
日本の雄辯
雄辯と國民性
雄辯の主體と
しての思想
思想の充實
論理の概念
雄辯の客體
としての聽衆
聽衆を知るの必要
地方語と標準語
時代精神の洞察
アントニオ
の演説
聽衆の種類
思想の整頓と
立案の構成
演題の選定
谷本富氏の演説
無題主義
收束法と結膝法
演説の骨組み
綜合と分解
綱領一段格

思想の過程と
表現の順序
遞降法と遞昇法
文章と身體
敎授の五段
説敎の五段
統一と變化
修辭的組み立て
「喜中樓」の演説
語句の布置
ヘスチング
彈劾の演説
資料の選擇
と其の應用
所説の證明と資料
資料選擇と標準
犬養毅氏の選擧
干渉反對の演説
アスクイスの
文明の義戰
解説の
利便と資料
譬喩の利用
譬喩使用の心得
寓話「猫の相談」
板倉重矩の逸話
ブロード
ショウの話

興味と資料
自然美の表現
滑稽の興味
悲哀美、悲壯美
文藝上の作品
「ヴェニスの商人」
和歌、俳句、漢詩
新井石禪師の三心
雄辯として
の修辭
雄辯修辭の要件
表現の平明
普通的の言語
専門語の通俗化
國民的言語
文法上の明確
表現の興味
と壓力
擬人法——
擬聲法——
提喩法——
換喩法——
對比法——
反語法——
設疑法——
諷喩法——
活現法——
嗟嘆法

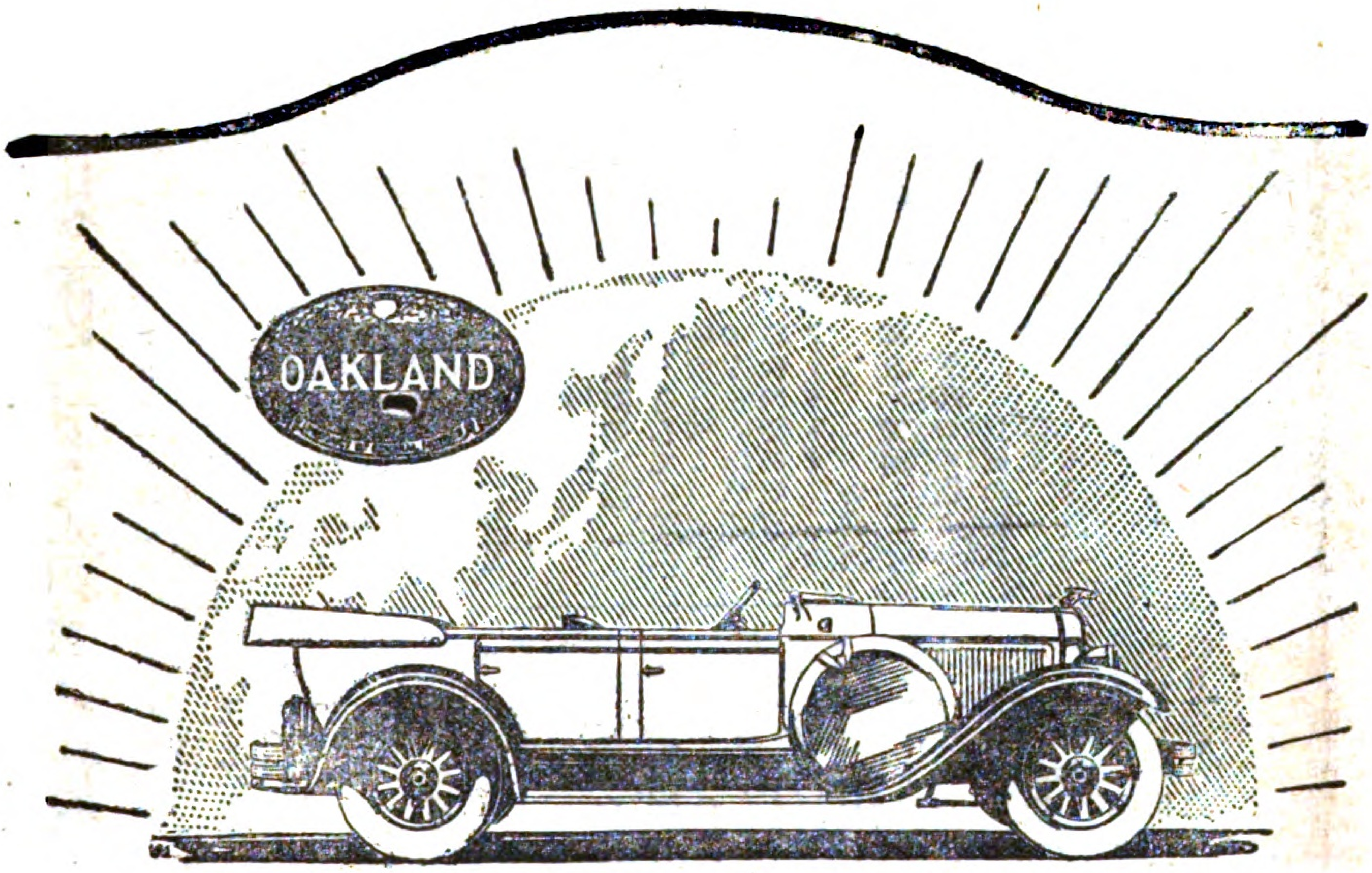
壓搾せられた
る警句
暗示と壓力
警句法——
文藝的修養
歐陽修の朋黨論
重盛の諫言
雄辯として
の聲音と姿勢
言語と聲音
聲音と表情
聲音の長短高低
聲音の練習
假聲と擬聲
呼吸と停語
聲音と聽衆
所謂「五分演説」
急所と要領
ラヂオと演説
見るものとし
ての注意
登壇の態度
壇上の姿勢
身心の相關
ゼスチュアの效用
説明身振り
表情身振り
姿勢と均衡

雄辯は
人格の發露
辯は人なり
辯士の紹介
第一印象
期待と滿足と感銘
機才と膽力
群衆として
の聽衆
理解力の低下
群衆心の特徴
暗示享受性
ブルータスの演説
立てる聽衆
坐せる聽衆
辯論の
演題の説明
不言の演説
言語は手段
譚の論理
挿話の使用
聽衆との應酬
言語の缺陷
譚の言葉
聽衆心の把握
實際的應用

（此の外數十項）

駒込坂下町
三九三〇
大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目録進呈



信頼すべき價値の自動車

オークランド號

オークランド號コスモポリタン六氣筩車が飽まで信頼すべき價値を有する所以は、其機構全體において完全に均衡が保たれて居るからであります。

本車の速力と動力とは能く平均し、敏速な始動力と持久する牽引力は、兩々相俟つて作動の確實を與へ、有名なる調和平衡器附き曲柄軸は扭力率に起因する一切の震動を除去して居ります。

ゼネラル・モータースは徹頭徹尾「均衡」を主眼として、あらゆる方面から見て、最も信頼の出來る品質價値を、新オークランド號に造り込むことに成功しました。

フエートン型　定價　金四千四拾五圓（大阪渡）

セダン型　定價　金四千四百九拾五圓（大阪渡）

（オークランド號はゼネラル・モータース金融會社による月賦販賣の便あり）　型録は販賣店にて進呈‥純正部分品は必ず特約販賣店でお買求め下さい

日本ゼネラル・モータース株式會社



本家弥次喜多

森暁紅作・曽我廼家五九郎實演

(一) 銚子の見當

寢臺に轉がつて特急列車一睡の夢でトッ走る東海道、現今其の交通の便は有難いが、あつたら五十三次を後足で蹴飛して行く、其れを想ふと昔のノンビリさ、人間の足をムダにしない道中筋、文明なるものに奪はれて寂しくなつた現代の街道と反對に往來の人織るが如き賑やかさ、馬子唄、鈴の音シヤンコ〱、馬がヒイーン、宿へ入ると茶屋の女達が、

『お休みなさいまし〱、暖かい冷飯もございます、煮立の肴の冷たのもございます、お掛なすツてお休みなさいまし。』

『オツと彌次さん神奈川の臺へ來たぜ。』

『ウム茶屋の女のいふ言が氣に入つた、焚立が暖かで後に冷たから暖かい冷飯か、なアる程違ひなしだ、そこでお掛なすツてお休みにならうかな。』

『いらツしやいまし、奥の方が廣うございます。』

と呼立る女の聲に釣込まれて、彌次北兩人うか〱と奥へ入る、欄干から望む海の見晴し、下は波打でザブン〱。

『奥の方が廣い筈だ安房上總まで庭の内の了簡だ、時に銚子はどの見當だらう。』

と云へば茶屋の女大急ぎで燗をつけて來て、

『ハイお銚子はこちら………。』



(二) 出たらめ當り

戸塚手前の松並木、例のヨタを飛ばしながらやつて來る彌次北に前後しながら、キョロ〳〵視てゐた伊勢參りの小僧、

『旦那樣一文下さい。』と縋り寄る、彌次郎兵衞納まつて、

『ウム遣らう、おまへは何處から來た。』

『笠に書いてあります。』

『フーム奥州信夫郡幡山村長松か、幡山村と云へば俺も彼處にゐた事がある、幡山の與次さんといふ人は壯健か。』

と出たらめをいふ、小僧はチョイと驚いた樣な顏をしたが、こりや出たらめと察してニヤリと笑ひ、

『えツ旦那樣、その幡山の與次と云のは私の叔父さんです。』

と、うまく當つた樣に云へば、彌次郎兵衞得意になつて、

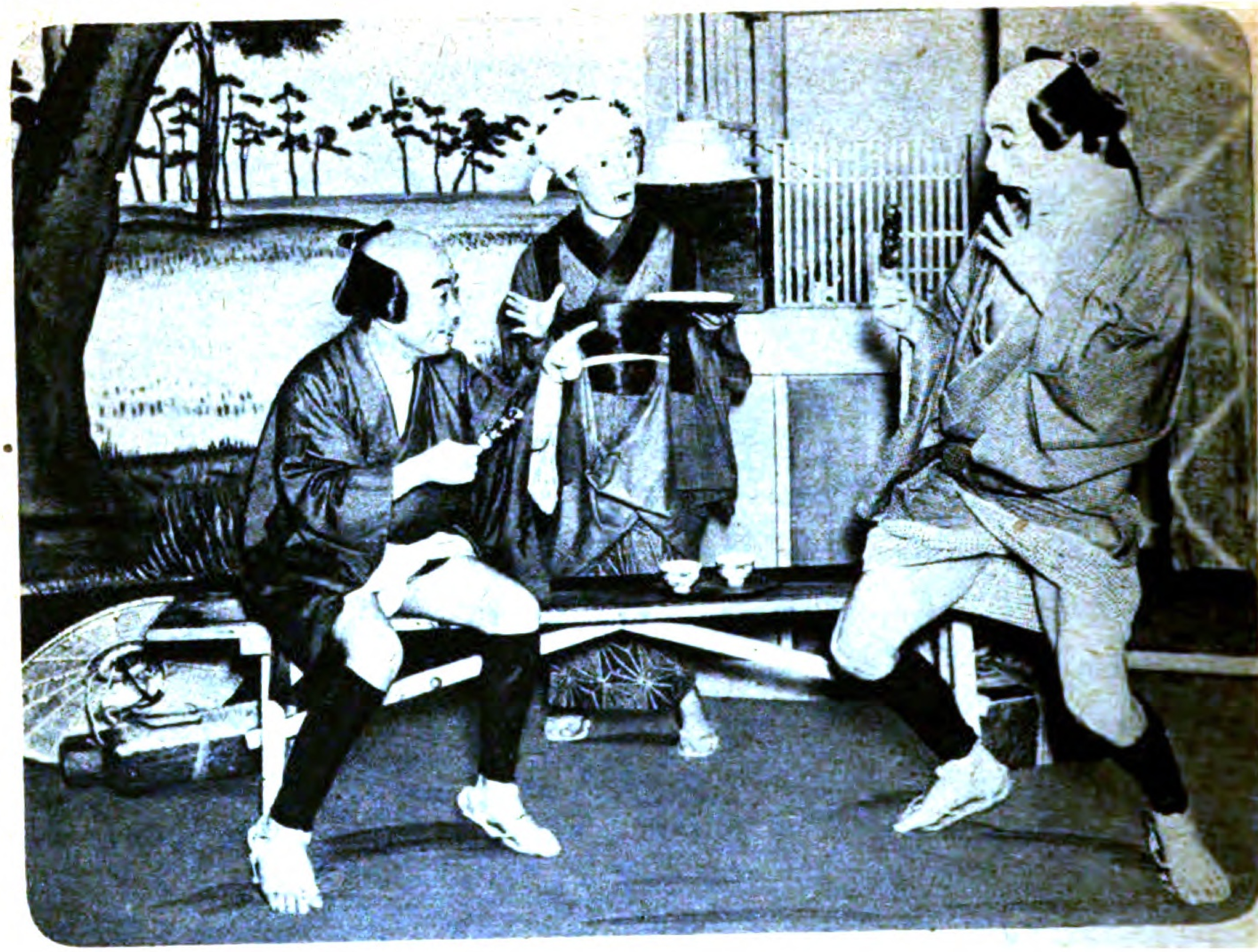
『こりや妙々、左樣か〳〵不思議だなア。』

『叔父さんを知つてる人とは懷かしい……旦那樣、私は腹が空いて步けません……。』

『よし〳〵與次さんの甥とあつちやア見ちやアゐられない、餅でも買つてやらう。』

と彌次郎兵衞そこらで五文の餅を買つてやれば、小僧貰ふが速いか占たとばかり駈出して後から來る伴れの小僧に分けながら、

『出たらめを當らして餅にしたアハヽヽ。』



(三) 團子火事

藤澤の宿のとりつき、あやしげな茶見世に休み、喰ひしんばうの北八屋臺の上の燒團子をみると、

『オイ〳〵婆さん團子は冷たいか、少し暖めておくれ。』

と云へば、『ハイ〳〵燒直して上げますべえ。』

と茶見世の婆さん消炭の火を掻き廻し、パタ〳〵と煽ぎ立て、あたりかまはず灰だらけにして團子を燒く、

『フツ〳〵ひどい埃だ、これさ婆さん灰を立てない樣に燒けないか。』

『ハイ〳〵、灰が立たない樣にでございますかハイ〳〵。』

『ハイ〳〵洒落てゐちやア困る。』

『ハイ〳〵どうも此の火を起しますと、昔から灰が立ちますものでハイ〳〵。』と婆さんモグ〳〵云ひながら、漸つと燒直した團子を持つて來る。

『オイ來た、イヤ眞黑に燒いたもンだ。』と北八受取つて、

『彌次さん一本やらないか。』

と云ひながら、いきなり横喰ひに一ツやつたが、

『ひやア、あツ熱ツ、、、、。』

と飛上つて團子を吐き出した。消炭の火が團子に附着いて無慘や北八の舌の一軒燒け！



（四）頬被り

箱根八里は馬でも越すがヨウ、鈴の音シャン〳〵、其の箱根の峠へかゝッて來た、袷の樣な春の山、お大名のお國から江戸入と見える女中達が四五人、駕籠をつらせて面白さうに喋舌りながら向ふから來る、とみた彌次北、

『ヨウ素敵〳〵美しい女中が來るぜ、オイ〳〵彌次さんッてば彌次さん。』

『ウームンみんな生きた女だな奇妙〳〵。』

『時に彌次さん白い手拭を被ると顔の色が白く見えて好い男らしくなるといふが本當かね。』『そりやア左樣さ。』

『ウフ有難い一ツやつてみよう。』

と北八早速袂から晒の手拭を出して大氣取で頬被りをする、と通りすがりに女中達が其の顔を覗いて、みんなプッと失笑てゆく。

『どうだい彌次さん、みんな俺の顔を見て嬉しさうに笑つて行つたぜ、たしかに好い男に見えたのだね。』

『アハヽヽ北公大笑ひだ、其の頬被りの兩端に紐がぶら下つてゐるから笑つて行つたのだ何だい其れは……。』

『えッ。』と北八氣が着いてみれば、其れは前夜宿屋で風呂に行く時、袂へ入れたまゝ忘れてゐた越中褌！



（五）泥龜の夜討

三島手前の流れの際で、子供が泥龜を捕へてゐるのを見かけ、これを買取つた彌次北兩人、晩に宿屋で料理して貰つて大いに氣力を養ふつもり、其れを藁苞へ入れてぶら下げて三島の宿屋へ着いたはいゝが、くたびれぬきの酒が先になつて醉拂つてしまひ、泥龜の藁苞を床の間へ置いたまゝで寢てしまつた。

と眞夜中に藁苞の中でクサ〱してゐた泥龜先生ノコ〱と這ひ出して、ムニヤ〱寢言を云つてゐる北八の床の中へ入り込み、胸の邊りへノコ〱上つたから堪らない、

『キヤツ。』と北八は思はず夢中で叫んで、何者ともわからず引摑むで叩きつければ、其れが涎を垂らした彌次郎兵衛の顏へバツタリ、彌次郎兵衛飛起きてこれも、『キヤツ。』とばかり、泥龜は面喰つて駈廻つてゐたが、其の勢ひで、寢呆おどろく彌次郎兵衛の手の指へ嚙みついてぶら下つた。

『アツ、ウツ、痛てゝゝゝ。』

と手を振つて飛上りながら泥龜と氣が着いて、

『ウ、ゝ、すツ　すつぽん、すつぽん。』

と悲鳴をあげれば、まごつきながらも北八曰く、

『なか〱すつぽんとは拔けないな。』



（六）痰呵の鼻折り

藤枝の宿の入口、風呂敷包を肩にかけた田舍爺、馬の跳たのにビツクリして、逃げる拍子に北八に衝突る、元來ウカウカしてゐる北八だ踏堪へもなくヨロ〳〵ドシンと水溜りへ尻もちをつく、田舍爺さらにうろたへて、

『ヤレハヤ御免なさい。』

と云ひながら北八を抱起せば、北八振拂つて怒り立て、

『ヤイ〳〵御免なさいじやア濟まねえぞ、こらヤイ體は小さいが、ギヤツと生れるとたんに金の鯱を横眼に睨んで、水道の水で產湯をつかツた阿兄さんだ、江戸にゐりやア花川戸の助六でも長兵衞でも、一日も二日も置く男だ、さア勘辨出來ねえツ。』

『ヒヤア濟まねえこんだが、態とぶつかツたじやアねえでがす、馬が惡いでござえますだ。』

『何だと馬が惡い、馬が惡くツたツて馬に文句云へるかツ。』

『御尤も樣でヒヤア。』

『サア承知が出來ねえ、何の意恨があつて此の阿兄さんを水溜りへころがしやアがツたンだ。』

『そりやア水溜りじやア無え、馬の小便の溜りでござえますだヒヤア。』



（七）ドボーン

強雨をくつて日坂驛の早泊り、翌朝カラリと晴れたに元氣づいた旅雀、早立ちをして鹽井川といふ小川の淵へ來ると、きのふの雨に水嵩が増して鳥渡越すにも大仕事、時に彌次郎北八の前に、京へ上ると見える座頭が二人ジャン拳をして、やがて負けた方が脊負つて渉らうといふ趣向、勝つた座頭の方へ負けたのが脊中を向けてゐる、と見た彌次郎、こいつは妙だと頷いて横から密つと行つて脊負さつてしまふ、何にも知らずに負けた座頭は彌次を脊負つてザブ〱と川へ入つてゆく、取殘された岸の座頭は、四邊を杖で探つて不思議な顏をしながら、

『これ〱猿市、早く脊負はぬか〱、どこにゐる〱。』

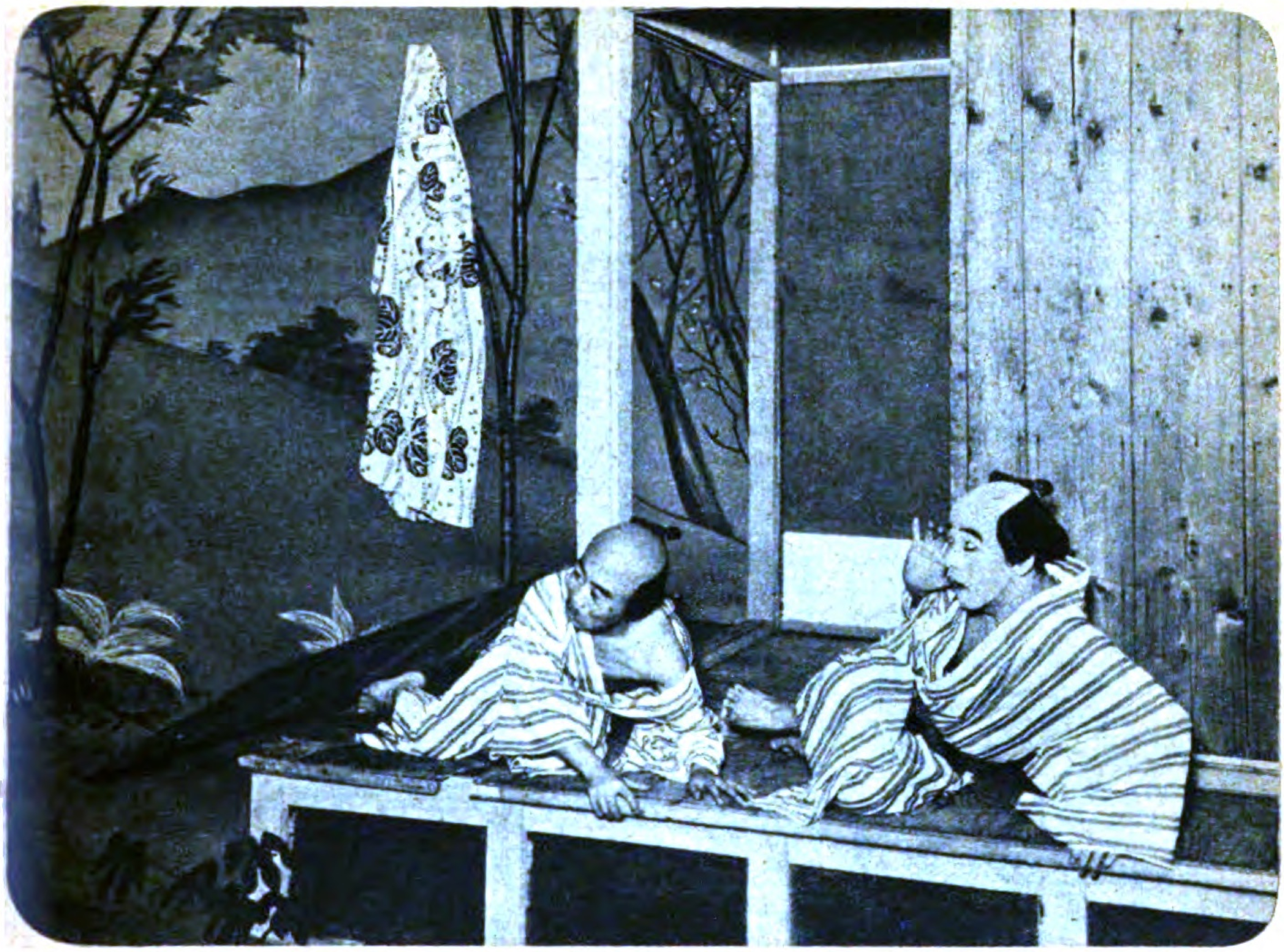
と呼び立てる、其の時恰度彌次郎を脊負つて川のまん中まで行つた座頭は、耳を立て見えぬ眼にふり返り、

『何じや犬市、脊中に負ぶたは犬市じやないのか、オヤ〱此奴…………。』

と彌次郎の脚絆の樣子を探つて氣が着き、怒るまい事か、

『おのれッ。』

と白い眼を剝いて叫ぶと共に、兩手を放して彌次郎を川の中へドボーン。



（八）無氣味な宿

濱松と云へば當時立派な城下だが、宿引に引張られてヘンに陰氣な宿を取つた彌次郎北八、生憎其の晩シヨボ〳〵と雨が降出したところへ、宿の内儀が因縁事で死んだ回向の百萬遍の聲、南無阿彌陀佛々々、鐘の音がさびしくカーン〳〵、鼻ツ張は強いが元來臆病な兩人、床には就いたが眠るどころか、

『オイ〳〵彌次さん、まだ生きてゐるかい、薄氣味の悪い家へ泊つちやツたな。』

『ウームン何でも内儀さんが首を縊つて死んだのだといふからえてものが出るに違ひないねブル、、、。』

『嫌だよ彌次さんおどかしちやアいけない、俺は先刻から小便に行きたいンだ。』

『俺も先刻からがまんしてゐるンだ、勇氣を出して一緒に行かうか。』

『一緒なら少しは氣が強い、此場合だ便所へ行かずと庭先でやらかせ。』

と兩人怖々這出して庭先の雨戸を明けたとたん、何を見たのか、『キヤツ。』と一緒に叫んで打倒れフウ〳〵泡を吹く。此騷ぎに宿の亭主が出て來てみれば、取込み忘れた干物の白い浴衣がフワリ〳〵。



（九）えらい歌人

彌次郎北八駕籠を奢つて大納り、白須賀の驛を出て名代の汐見坂にさしかゝる、北は山續き南は海、其の絶景に例の狂歌を兩人負けずと口詠めば、駕舁はさも感心した樣に、

『ハア旦那方はえらい歌人じやな、アレ向ふの山を見なさろ、鹿が居ますわい。』

と云へば北八すつかり歌人氣取で、

『ホヽウ左樣か、それは歌になるな、なんと一首詠んで聽かせようかの。』

『有難うございます、どうせ馬の耳に念佛だが、歌といふやつは何となくいゝものだ。』

『先づ斯うだ、いゝかな、奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の、聲きく時ぞ秋は悲しき……どうだ、わかつたか。』

『へゝえなるほど、恐れ入りました、そんなえらい歌詠の旦那とは知りませんでした、なア後棒。』

『オウまつたくだ、何でも此の旦那は凡人じやアねえ。』

『これさ先棒、此の旦那の名を知らねえか、名高い方だぞ。』

と駕舁が言ひ合ふのを聽いて、北八いよいよ納まり、

『俺の名を知つてゐるか。』と訊けば、

『知らなくつてサ猿丸太夫樣だんべえハヽヽヽヽ。』



(二) 坊主持

二川の驛を過ぎ、名高き岩穴の觀音に詣で、來る程に北八少し退屈の欠びをしながら、

『聊か草臥れたな彌次さん、荷物を一緒にして坊主持にしないか。』

『そりや面白からう、先づジヤン拳で決めよう、そらチツチツチツ……北公負けださアかついで行きな。』

『ヤレ〳〵。』

と北八澁々、かつぐ所へ、法華宗の旅僧と見えて、

『だゝぶだぶ〳〵、だゝぶだぶ〳〵。』と向ふから來る。

『そら來た彌次さんおまへの番だ。』

『こいつア早過ぎたな、是非もない。』

と彌次郎が荷物をかつぐところへ又、

『どうぞや旦那方、足の叶はぬ躄に一文やつて下さい。』

と這ひ〳〵やつて來たの見ると坊主、

『オヤ有難いこれも坊主だ、そら北八渡すぞ。』

と彌次郎荷物を渡さうとすると、躄は天窓を下げて後ろを見せ、『私は坊主じやございません、後ろに少し毛があります。』と、よけいな言をいふ。

『チヨツむだな毛を生やしたもンだ。』と彌次郎ブリ〳〵。



(二) 北八狐

狐が出るといふ名代の御油の宿から赤坂へ行く松並木、日の暮れかゝつた急ぎ歩に、北八が少し先になつて、其の松並木で待つてゐる所へ、狐の噂で氣味惡ながら後から追着いた彌次郎、『何だ北公こんな所にゐたのか。』

『ム、こゝらへ惡い狐が出るといふから一緒に行かうと思つて待つてゐたのだ。』

といふ北八の態度を熟と視た彌次郎、此奴狐が化けたのだなと思ひ込み、『イヤ巧く化けやアがつたな。』

『何だ〳〵彌次さん變な言をいふぜ。』

『何が變な言だ、太い畜生だ尻尾を出せッ、其の手は喰はねえ、うぬッ。』

『アツ痛たゝゝゝ何をするンだ彌次さん、手が曲らア。』

と呆れる北八の手をグイ〳〵と後へ廻して縛つてしまひ、

『斯うして置いて犬をケシかけるから、其の時になつてコンコン泣いても追附かねえぞ。』と引立てる。

所へ恰度走つて來た犬ワン〳〵と吠立てたが、狐でない北八泰然として驚かず、

『ウプ彌次さんしつかりしろよ、自分で自分に化かされてゐりやア世話がない。』



（三）馬あつかひ

池鯉鮒の驛へ入つて來た彌次郎、草鞋くひで足を痛めビッコひき〳〵、『少しの間草履で行く方がよささうだ。』

と藁草履をつるした店へ入り、

『安くツて切れツこのない草履を一足おくれ。』

と云へば、亭主は商賣上手の伊勢者で、

『ハイこれなら安うおます、仕舞つて置きなさつたら一生切れん事、請合でおますへ、、、、。』

『イヤ云ふ言が確かだな、一足幾干だ。』

『十四文でおます。』『ちつと高いな半分じやアどうだ。』

『片方だけ買はしやいますか』

『ふざけちやアいけない足は二本だ。』

『そんなら無理云はんとスッキリと買ひなされ、安うおますが。』『買ふ身になると安くないンだ、じやもう二文出さう負けて置け〳〵。』『そりやとても負かりまへんがな、そんならこれになされませ、一足七文でよろしいがな。』

と亭主がぶら下げて出したのを見ると馬の鞋、側で見てゐた北八嬉しがつて、

『オウ〳〵彌次さん、其れを穿いて俺を背中へ乗せてツてくんなハ、、、、。』



（三）奇妙々々

神風や伊勢と都の別れ道といふ追分の立場から、町を離れて野道へかゝると、向ふから百姓馬に横乘した男が來る。

『オイ〳〵北公、俺が彼の馬に乘つた男が近附いたら、默つてゐて降させて見せるがどうだ。』

『フーンそんな洒落た眞似が出來るか。』

『ウム出來るから奇妙だ。』

といふ內、百姓馬が近附いて來たが、其れに乘つた男フト氣が着いた樣に飛降りて、おじぎをしながら行過ぎる。

『なるほど彌次さん不思議な藝だな。』

と北八すつかり感心してゐる、ところへ又戾り馬に乘つた馬士が鼻唄をうたひながら向ふから來たが、これも慌てゝ降りて行つた。

『こいつア驚いたな、どんな秘法があるンだい彌次さん。』

と北八どうにも解せない顏をして訊く。

『アハ、北公、種を明かしてやらうか。』

『ウム〳〵、どうするンだい〳〵。』

『難かしい事はない、鳥渡後方を向けば直ぐわかる。』

と云はれて北八後方を振向けば、自分等の後から立派な武士が二人來るのだつた。



(四) ワン的退參

伊勢は津で持つといふ其の繁昌な町へ乗込んで、作者の十返舍一九の僞名詐稱をやり、化の皮を剝がれて、とんだ夜半に追拂はれ、ホウ〳〵の態で暗い街道筋を辿つて來た彌次郎北八、道端の犬まで怪しく睨んで、ワン〳〵と吠えかゝる。

『畜生々々、ふざけた奴らだ、俺を知らねえかツ。』

『オイ〳〵北八、犬に文句を云つたつてわかるまい、それより俺が術を以て犬を退參させて見せる。』

と云ひながら彌次郎、空宙へ何か文字を書いてゐる。

『フーン妙な眞似をするンだな。』

『北公覺えて置くことだ、犬に吠えられた時には、宙へ虎といふ字を書いて見せると、忽ち犬は逃げ出す事奇妙だ。』

と彌次郎得意顏で云つたが、犬は一向に逃げ出さない、さらに一層ワン〳〵ウヽーワン〳〵。

『オイ〳〵彌次さん畜生よけい吠え立てるぜ。』

と云へば彌次郎舌打をして、

『チェツ伊勢の犬は無筆だと見える………。』



(三) お杉お玉

伊勢は古市相の山では例の名物お杉お玉が、ペンペラ〳〵チャンラン〳〵と、のべつに三味線を彈き立てゐる、通りすがりの見物、旅人が其の三味彈く女の顏を狙つて錢を投げつければ、輕く顏を振り除けて決して當ないのが亦慣れた藝。

『オット彌次さん、彼の顏へ見事に一文叩きつけて見ようぜ。』

『よし心得た。那須與市は扇の的、そら來たイヨッ。』と代る交るに投げても〳〵當らないこと、うか〳〵と錢を投げてしまふばかり、遂に北八口惜しがつて、

『忌えましい、よし〳〵彌次さん見ておいで。』

と云ひながら、北八道端の小さな石塊を拾つて來て狙ひをつけ、

『えいツ。』

と投げた、彼の女達は錢なら顏を除けて其の傍へ落させるのだが、石塊の場合には亦心得たもので、三味線の撥でチョイと受けて、ポンと投げ返へす、と其の石が北八の顏へ見事に當つて、

『アッ痛ツ。』と云へば、彌次郎は傍で、

『イヤ飛んだ目にあひの山だ。』



（六）アリヤア〳〵

京は田舍女も美しい、頭の上へ柴薪梯子などを乘せて商に出て來る例の大原女達が、四條の河原で休んでゐる所へ、通りかゝつた彌次と北八。

『彌次さん一つ冷かしてやらうか。』

『江戸ツ子だつて幅の利かねえお上りさんだ、あべこべに冷かされるぜ。』と云ふのも肯かずに北八大原女の傍へ行き、

『オイ姉さん達、よくまアお前達は重い物を頭へ乘せて歩けたものだの。』

『これが稼業じやわいな、旦那はん梯子買ふとくンなはれ。』

『ウム梯子か買つてもいゝが、安く負けるか。』

と北八冷かすつもりで云つたのだが、ねつい上方女の四五人がかり、とても北八及ぶ所でなく、ものゝ見事に取卷かれてワイ〳〵云はれ、對手が女で喧嘩もならず、遂々梯子を買はされてしまひ、其れをかついでフウ〳〵と大息。

『樣ア見ろ北八、そんな物を買つてどうするンだ。』

『ウーム京都に火事があつたら江戸ツ子の火懸りを見せてやるのだ、どこかに火事はないかアリヤア〳〵。』

配役

彌次郎兵衞……曾我廼家五九郎
北　八……曾我廼家笑蝶
其他五九郎一座一人一役二十八名出演

新井石禪師大講演集

●● 四六判クロース函入定價貳圓（送料拾錢）●●

忽十二版

信仰を求むる者
修養に志す者
煩悶せる者
愛と光の殿堂に

─永遠の幸福を求むるものは本書を讀め！

新井石禪師は、生前曹洞宗管長總持寺貫主として萬人渴仰の的たりし一代の高僧である。その法話は、行文平易にして頗ぶる面白く、或は解脫を說き、禪を敎へ、或は家庭問題、人格養成、或は精神生活、或は實業と佛敎等、人生久遠の幸福を齎せる眞に不朽の大信仰！大道德！



道重大僧正

■道重信敎師大講演集

見よ！眞の禪餘の敎へ、賢聖諸菩薩の心を尋ね、大いなる愛と智慧の信仰に生くる師が、混沌たる現代を救はんとする至誠熱烈の大法話！或は信心を說き、處世の道を敎へ、或は家庭の敎養、婦人の新修養を訓ふる等の諸問題、何人も光明に接するの感あり。

四六判函入
布製美本
壹圓八拾錢
送料拾錢

東京本郷駒込坂下
大日本雄辯會講談社
振替東京三九三〇番

御申込次第圖書目錄進呈



怪傑条の平内が痛快無比の大活躍！



小僧から滿鐵總裁になつた山本条太郎氏



『富士』は日本の譽！

おもしろい〱名篇傑作滿載！

▲生ける謎 三百六十萬兩の行方！（赤城山大秘録）

▲痛快壯烈 リンドバーグ物語……中正夫

▲出世の鑑 小僧から滿鐵總裁（小説より面白い山本条太郎の大成功傳！）

◎美男活躍 落花劍光錄…三上於菟吉

◎支那快傑 孫逸仙…大音龍太

◎怪盜出沒 白粉蜘蛛…行友李風

◎人情物語 女囚人…貴司山治

東西逸話美談画譜（現代九名画伯執筆）

トテモ美しい美術印刷！

面白くて爲になるお話滿載！

◎武勇講談 条の平内…寶井馬琴

◎因果物語 幽靈船頭…梧桐知秋











良書より誠實なる朋友なし

著者	書名	内容	定價	送料
◇日下部四郎太博士著	一人行脚	（科學者の面白い旅行記！）	參圓五拾錢	送料拾四錢
◇日下部四郎太博士著	異國行脚	（珍妙奇抜！世界の風習紹介）	貳圓八拾錢	送料拾四錢
◇田山花袋著	花袋行脚	（文化の跡を歴訪せる旅行記）	貳圓參拾錢	送料拾錢
◇生方敏郎著	哄笑微笑苦笑	（赤裸々な人世諷刺痛快無比）	貳圓參拾錢	送料拾貳錢
◇成[illegible]篤著	縱横漫談陸海軍腕くらべ	（興味津々隠れたる軍事秘話）	壹圓八拾錢	送料拾錢
◇鹽谷温博士著	支那文學概論講話	（世界に誇るべき支那の研究）	五圓	送料拾八錢
◇中村孝也博士著	源九郎義經	（博士の名文になる大英雄傳）	貳圓八拾錢	送料拾六錢
◇中村孝也博士著	しら菊	（秘めたる寶玉の如き美文集）	壹圓貳拾錢	送料六錢
◇丘淺次郎博士著	煩悶と自由	（博士の獨創的研究の人世觀）	貳圓八拾錢	送料拾貳錢
◇安藤愛山著	教育道話	（面白く有益な新修養書）	貳圓五拾錢	送料拾四錢
◇鶴見祐輔著	現代日本論	（米國に於ける氏の大講演！）	壹圓六拾錢	送料八錢
◇高島米峰著	隨筆思ふまゝ	（痛快なる筆鋒警世の大文字）	貳圓參拾錢	送料拾貳錢
◇谷脇素文著	川柳漫畫（うき世さまぐ）	（名川柳に漫畫を附す痛快著）	貳圓參拾錢	送料拾錢
◇近藤蕉雨著	社會萬般番附大集	（世態の萬般を知る大快著！）	參圓	送料拾四錢
◇安田與四郎著	株式市場の表裏	（株式投機必勝の虎の卷！）	壹圓八拾錢	送料拾錢
◇北原白秋著	日本民謡作家集	（大家の傑作民謡の大集成！）	貳圓五拾錢	送料拾四錢
◇北原白秋著	現代民謡選集	（民謡愛好家必讀の名著！）	貳圓	送料拾錢
◇鳴弦樓主人著	名人達人決死の大試合	（日本魂の華！名人達人活躍）	壹圓五拾錢	送料拾錢

御申込次第圖書目錄進呈

更生日本の要求するものは人物なり

此の大識見の下に滿身の熱情を傾けて成る

鶴見祐輔氏の大快著

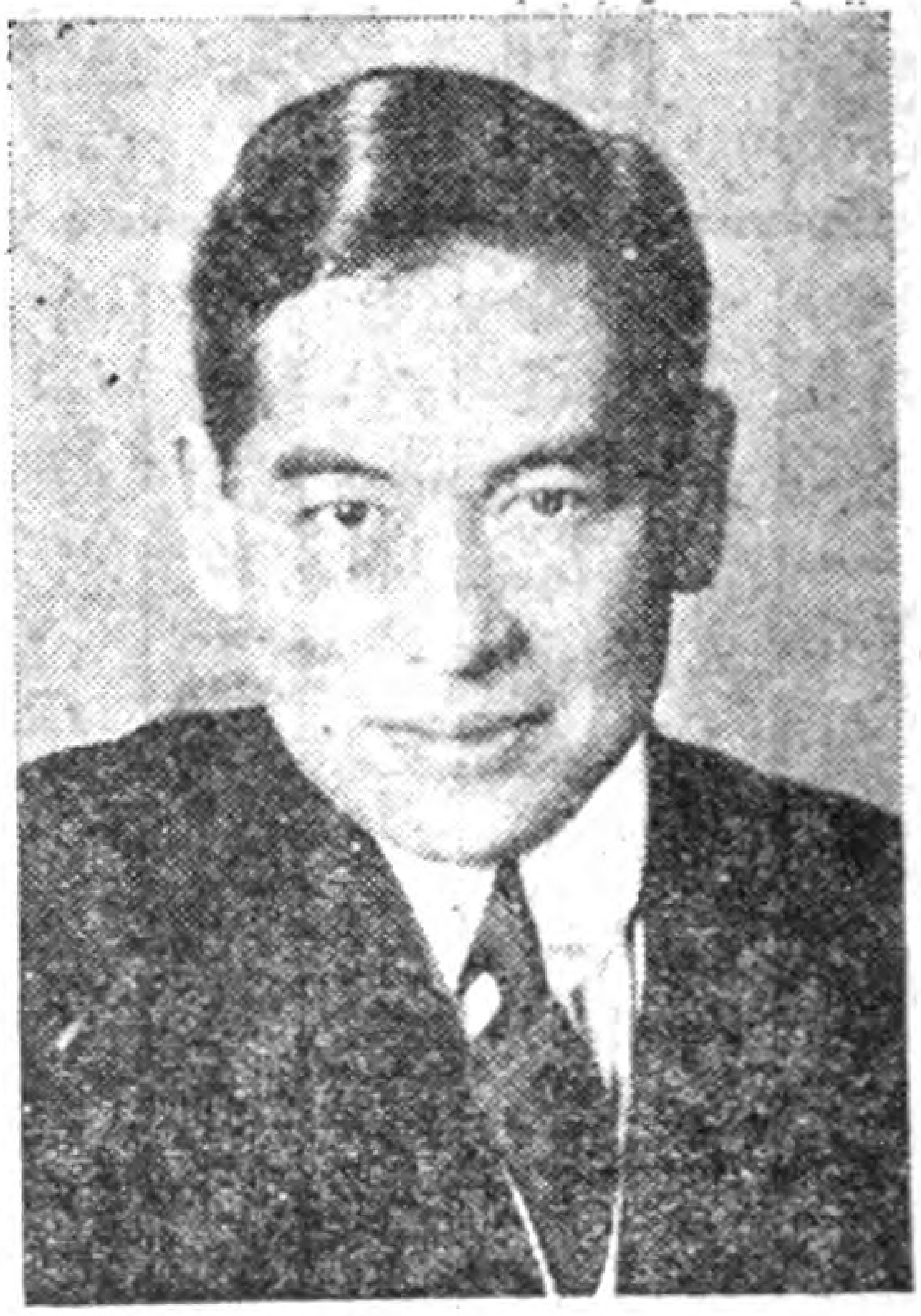
壇上紙上街上の人

切に滿天下の一讀を奬む。

著者歐米に客遊すること十數回、世界各國の各方面に於ける大人物に面接し、縱横に論談す。本書即ちそれ等大人物の風丰を叙し、その思想を寫し、出世活躍の大場面を傳せるもの。

御申込次第圖書目錄進呈

近代世界の大偉人たるウイルソン、及び同氏を廻る人々、現代米國を動かす人々、歐洲各國の巨人新人、現代支那の偉人傑物、近代日本の大人物等、政界、思想界、文藝界、操觚界、映畫界、事業界に亙り、その傳する人物數十人、平明暢達の行文は時に當つて風を生じ龍虎躍るの概あり。或は又潺湲たる清流の雅趣あり。



斯の如く興味深く有益の書

は現代稀である。國民としては新日本の指導書として、個人としては處世成功の指針として、萬人の一讀を奬む。

人物を練り識見を高めんとせば人物傳を讀むに如くはなく、現代世界の狀勢を知らんとせば、須らく世界大人物の行跡を辿るべし！

大好評二十版!!

四六判總布裝函入り美本
世界大人物寫眞十數葉
定價二圓七十錢（送料十四錢）

東京本郷駒込坂下
大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇）

御申込次第圖書目錄進呈





奉祝

若き日本の儀表

として、國民景仰の標的でいらせられる秩父宮雍仁親王殿下には、この月良辰を卜せられ、松平節子姫を迎へて、婚儀の盛典を擧げさせたまふこととならせられた。殿下には、金枝玉葉の御身を以て、夙に軍旅のことにいそしみたまひ、節子姫は温良貞淑、實に日本婦人の典型でおはします。而して御二方共に、遠く海外に遊ばれ、新時代に相應はしき修養を重ねたまひし故に、仰ぎ見まゐらするだに一味爽涼の氣の懷しまれるのを覺える。竹の園生の御榮えは固より、いやが上にも國礎の鞏かるべきを思うて、欣躍の情を禁ずることが出來ない。あゝ天には瑞雲の靆くあり。地には歡聲涌いて潮の如し。我等、筆を以て報國の至誠を致さんと欲するもの、感激特に極まるところを知らず。謹んで茲に奉祝の微衷を述べまゐらせるのである。



秩父宮御成婚奉祝歌

西條八十作　本居長世曲

むらさきの秩父の峰に
慶びの雲こそなびけ
今日こそは、あゝ今日こそは、
國民の胸高鳴る日。

諸人よ、祝ひまつらん、
この契、清くたふとし、
背の宮が越えませし雪、
穂高岳の永劫の白妙。

諸人よ、頌へまつらん、
この縁、永くはてなし、
妃の宮が掬ませたまへる
ハドソンの樹蔭の流れ。

日本の若き榮を
象れる雄々しき皇子の、
おん胸に永久に匂れよ、
うるはしの大和撫子。

むらさきの秩父の峰に
慶びの雲はれわたる、
うち仰げ、千古の空に、
聳りたつ女男の二峰。


遅からず典雅に
f
p
p
む ら ー さ き の　ち ち ー ぶ の ー
み ね に　よ ろ ー こ び の　く も こ そ　な び け
His
け ふ こ そ ー は　あ お け ふ こ ー そ は　く に た み
f
の　く に た み の む ね ー　た か な る ー 日
rit.

あゝ九月十三日

元學習院教授
日本女子大學校教授　服部他之助

一、想ひ起す片瀬の夏

『貴方は酒も煙草も嫌ひださうで結構です。自分はどつちも好きなんで少々困ります』

乃木院長は常に私に向つて斯う云はれた。

學習院の生徒が片瀬の水游場へ出かけた。丁度明治四十一年の七月二十日からであつた。無論院長も往かれた。私も往つた。すると滯在三週間の間、院長は、その「好きで困る」酒を一滴も飲まれない、煙草一服も吸はれない。それを朝夕一緒に暮らして目撃した私は、心中非常に驚いたのである。

日本酒なら一升以上は易々と飲まれた院長である。旅順陷落の時に行はれた大祝賀會の席などでは多くの外國觀戰武官から獻ずる杯を片端から受けて、ブランデー、ウオツカ、シャンペーン、斗酒なほ辭せすと、コップ幾十杯を傾けて、遉が酒量家の外國武官を驚かした乃木大將である。それが片瀬の二十一日間、學生と共に天幕生活をせられる中は、つひに一滴も口にされなかつたといふ事は、何といふ自制力の強い事だらう。私はそれに驚いたのである。

生來好まぬ故に杯を口にしない私の如きものと、一升以上も飲み得る將軍が三週間も、一滴も飲まないと云ふのには、實に天地の距離がある。これは普通の人のなし得る事ではない。その爲し得ぬことを爲し得るやうにする根本は何か。全く修養にあるといふの外は無い。

二、空さりげなく澄める月かな

學生が食堂で食卓に肘を突いて食事することは、乃木院長は非常に嫌はれた。肘を突いてゐる者が目に入ると、其方に向つて例の恐ろしい鋭い目付と口付で、突然、大喝一聲、

『肘をテーブルに突いては不可ーン……』

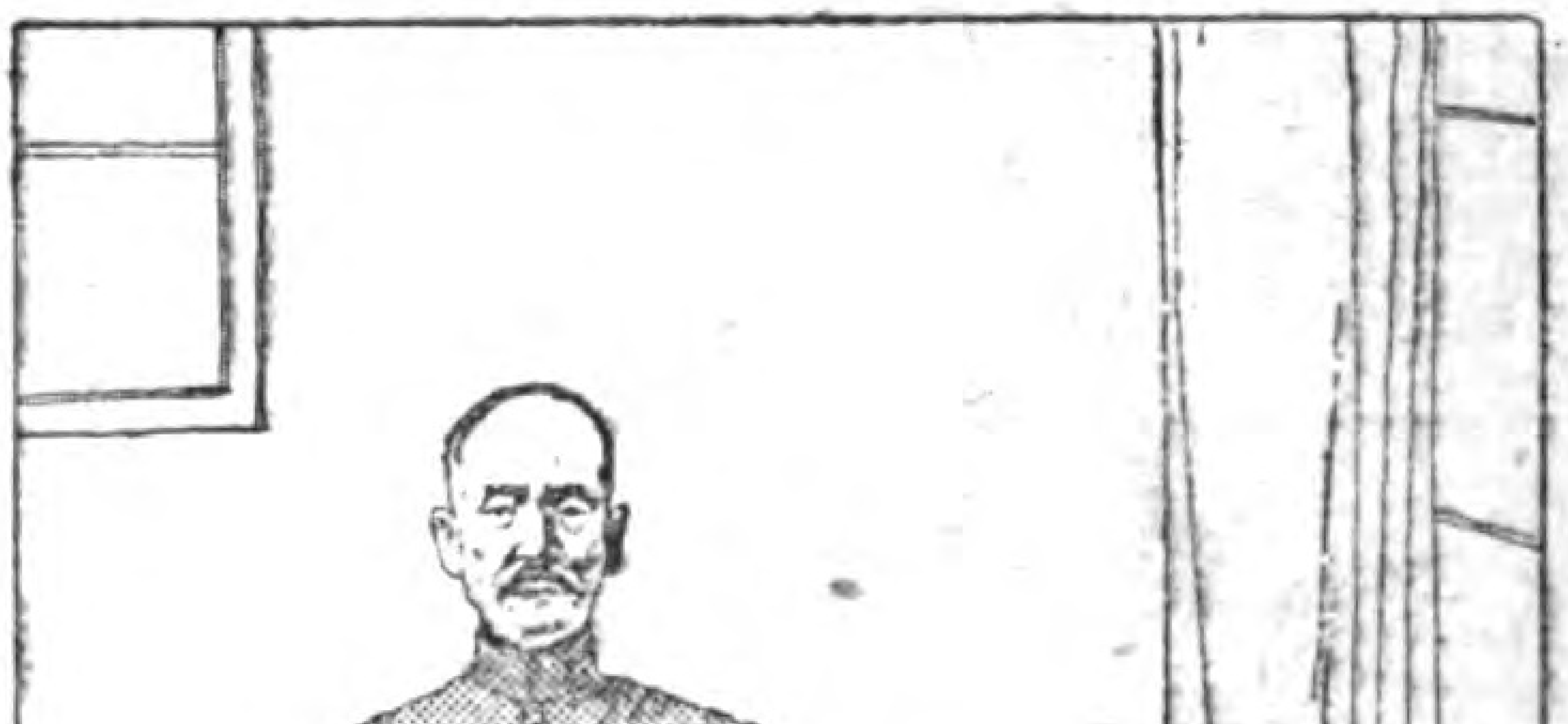
百雷が一時に落ちたやうに、廣い食堂の隅々まで響き渡るやうに叱られる。其の聲が餘りに唐突なので、學生のみならず隣りに居る私迄も、時には吃驚して、胸の動悸が長く止らない事

があつた。所が數秒ならずして、未だ吾々の動悸の止らない中に、院長の面にはもう怒の跡などは全く消え失せて、いつもの通り、愛情の籠つた温和な父親のやうな顔つきになつて居られた。

夜の雨はまだ乾かぬに夕立の
空さりげなく澄める月かな
從三位頼政

その光風霽月の狀態が乃木院長であつた。喜怒哀樂の情を自由に支配し、自在に調節し得る人は殆ど罕である。朝出がけに腹立たしい事に出逢ふと、一日中不快な感じが去らない、といふのが普通である。聖賢といはれたソクラテスでも、偉人リンカーンでも、此の突發的な怒の情を抑へるためには、一方ならぬ苦心をしたと聞いてゐる。

併し怒るといふことは、人情の自然であつて、聖人も凡人も變りはあるまい。たゞ違ふところは、一度び憤怒の情の發した次の一瞬間に執る處置如何である。聖人と凡人、修養ある人と無い人との違ひを生ずる原因はそこなのだ。



三、天下一品の笑顔

『どうしたんだらう、一匹も出ないぢやないか』

『出たよ、雉子と山鳥が、うるさいほど出たよ』

兎の捕れない失望に、やけ氣味の茶目氣分も手傳つて、若い院の學生が、青竹を持つて兎を追ひながら、あつちでもこつちでも、こんな事を言ひ合つた。

明治四十年の十二月二十二日であつた。宮内省の許可を得て、習志野の御料地へ兎狩に行つたことがある。元氣に滿ちた學生の事とて、非常な期待を以て喜び勇んで出掛けたもんだ。然るにどうした事か一向に捕れない。飛び出したのは雉子や山鳥ばかりで、兎はてんで影も形も見せないのだつた。さてこそ斯うした皮肉まじりの偶語も聞え出したわけである。

院長も意外に思はれたらしい。學生に交つて長い青竹を兩手に兎を追ひ廻りながら、

『こんな筈はない』

と不機嫌さうに言はれた。それもその筈、御獵場ではあり、特

に許されて主獵官の案内で兎狩をするのであるから、相當に捕れるであらうと豫期することに於て、學生も院長も變りはないわけだつた。

一度、二度、三度と追つた。さうして四度目もやつぱり徒勞に終つた時、愈〻院長の怒が爆發した。

主獵官、學生監、獵師などを一所に集めて、例の恐ろしい目付き口つきで、

『今日は諸君の御案内で此の通り此處彼處を四度も狩つたが、出て來るものは山鳥と雉子ばかりで、兎は一匹も見えない。一體どうした事ですか。思ふにこゝは雉子や山鳥の場所で、兎の場所ではないのでせう。貴君方は主獵官でせう、今日は兎狩に來たのだから、どうか兎の居る處へ案内してもらひたい』

と、その言葉にも顏色にも不滿の樣子があり〳〵と見えた。聽くものは皆恐縮してしまつた。

丁度このお叱言が終つた時である。後ろから高等科の學生が四人ほど傍に來て院長に擧手の禮をした。院長は俄かに學生の方に向き直つて、如何にも和やかな、樂しさうな顏に、滿々と笑を湛へて、



『今日は足馴らしぢや。明日はきつと澤山捕るぞ』

と、親が子供を慰めるやうに莞爾とされた。

其後或る機會に、主獵官の人々が、

『乃木大將から不平交りの言葉を聽いた時ぐらゐ恐ろしい事はなかつた。全く身内ブルブルと顫へるやうな感じがした』と話し合つてゐるのを私は聽いた。

一方その日宿屋に歸つた學生たちが、二階の部屋で、互に偽らざる會話を交してゐるのをも私は聽くことが出來た。

『今日は兎は一匹も捕れないし、足は疲れる、腹は餒る、兎狩なんて、ちつとも面白かアないと思つてゐたが、ふと院長に出會つて、例の元氣のある笑顏で、「明日はたんと捕るぞ」と言はれた時は、疲れも腹の餒つたのも實際忘れてしまつたよ。ねえ君、院長の笑顏は正に天下一品だねえ』

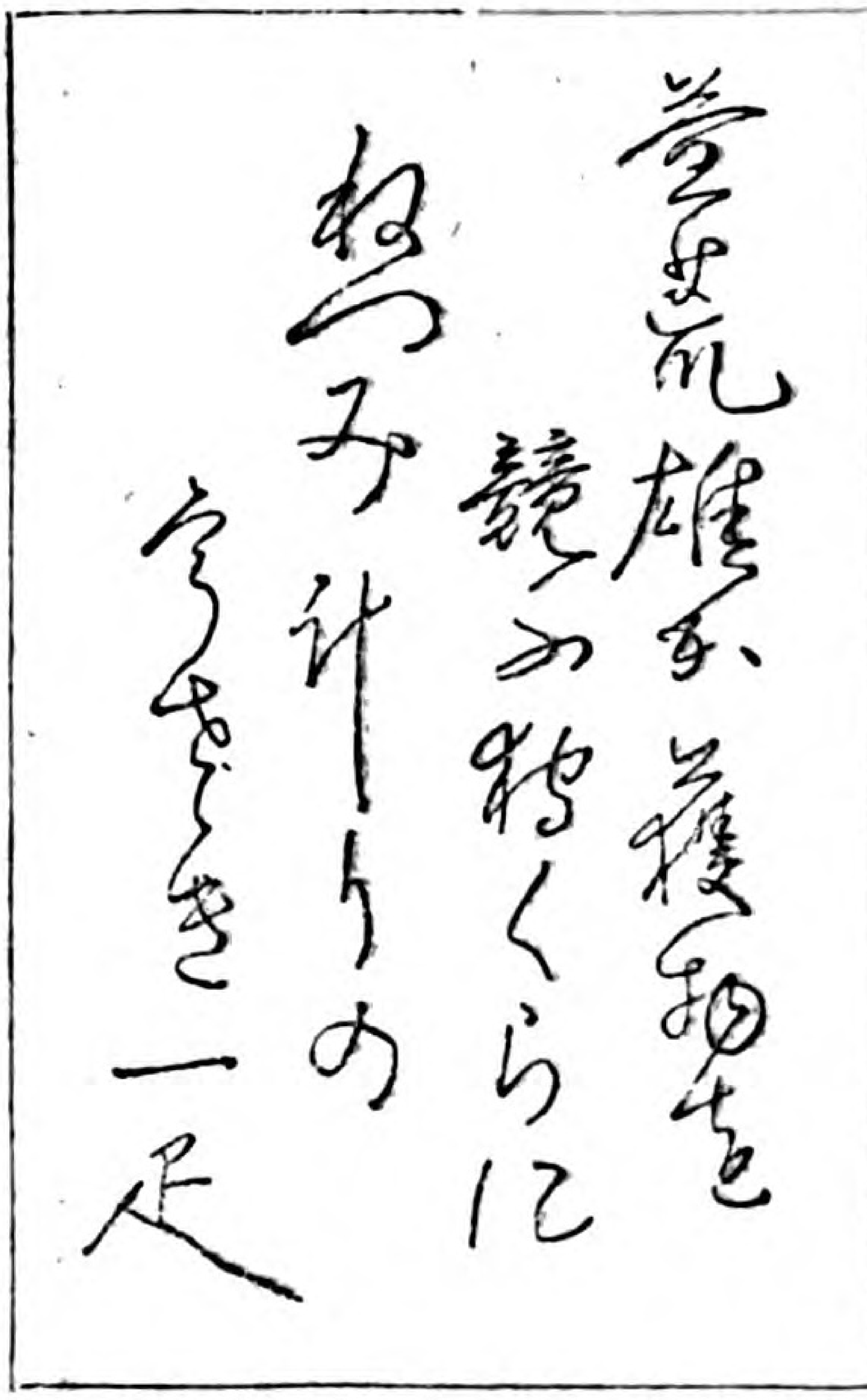
主獵官に向つては『體がブル〳〵ふるへた』と云ふまでに恐

ろしい院長が、一瞬の後、學生の方に向き直つては、『足の疲れも腹の餓つたのも忘れ』しめるまでに温和な顏色になられる、その咄嗟の變化を、私は實に不思議に思つた。

斯くの如く喜怒哀樂の感情を、自由に支配し得る人が、世に果して幾人あるだらうか。『怒を遷さず』――孔子が顏回を褒められたその語は、移して以て乃木大將を頌する言葉とすることが出來ると思ふ。

四、燈を暗くして禱る心

益荒雄か獲物を競ふ狩くらに
ねつみ計りのうさき一疋　　希典



乃木院長自筆の歌（鉛筆書）

勝典君が旅順で戰死されたといふ訃音が、始めて司令部に達した時、副官達は、大將がどんなに悲しまれるだらうと心配して、それを大將に知らせることを躊躇した。併し斯くてあるべきことでないから、一副官は思ひ切つて大將の部屋に入り、將に口を開かうとすると、折から洋燈の下で虫眼鏡を以て地圖を見てをられた將軍は、

『云はんでもよい。分つてをる』

と言はれた。而して間も無く洋燈の光を暗くされた。數分の後、又元の通りに洋燈を明るくして地圖を見てをられたさうである。斯く突然洋燈を暫らく暗くされた事に對しては深い理由があつたに相違無いと思はれる。此の燈を暗くしての默想は、果して何の爲であつたらう。子を持つ親には自ら首肯かれることと思ふ。而も數分間が經つか經たぬに、また元の通りに洋燈が輝いて居たといふことは、何たる自制力の强さであらう。

この事について、後日親しく將軍から聞いた話がある。

其晩は南山總攻擊のあることが決定して居つた。所が、司令官室で今夜の成否を氣遣ひつゝ、地圖を繙いて頻りに作戰に耽けつてゐた將軍の面前へ、判然突如として軍裝した勝典君が現はれた。

『何しに來た。今夜は、お前の聯隊は總攻擊をする筈ではないか。早く還れ!!』

將軍の言葉が終らぬ中に、勝典君は、無言のまゝで、何處へか去つてしまつた。

『一種の靈感とでも云ふ事が出來ませうか』

と淋しさうに語られた將軍の心中をお察しして、涙をこぼさぬものはなかつた。

院長は自邸にある時、時をり陸軍少尉の服を着けて居られた。これは保典君の古い軍服であると聞いてゐる。保典君の少尉服を大將たる院長が時々着用されたといふことは、單なる經濟などによるのでは無論ない。深い深い意味のある事と私は信ずる。

皇師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

此詩は院長の嚴肅な眞情を吐露されたものであると同時に、私共から見れば、また院長の尊い修養を表したものと謂はねばならぬ。

我子の死を悼み、我子を思ひ愛する情を以て、人の子の上を思へばこそ、此の言葉が出る。而かも我事は內に抑へて、ひたすら他人の上に同情するといふことは、たゞ修養あるもののみが爲し得ることである。修養の極致、よく此に至るものなるかを思うて、自ら頭の下るを覺えるのである。

五、神にあらず人なり

私は完全に自己の感情を支配し得る人は、たゞ理論上にのみ存在し得ると思つてゐた。然るに一度乃木院長に接するに及んで、私は恰も永い眠から醒めたやうな感を以て院長を仰いだ。自己の感情を自由に支配し得る人が、現に私の眼前に佇立してゐたのだ。



それは太陽が東の空から昇るといふ事實と同じ力ある事實であつた。かゝる偉大なる人格の持主乃木將軍を院長に戴いて、その殉死さるゝまで六年有餘の長い間、同じ寮舍にありて寢食を共にし、父として尊び、師として敬ひ、親しくその指導の下に、不完全極まる者でありながら、育英の道に携はることを得たのは、何たる幸福な私であつたらう。

私達と同じやうに目あり、耳あり、手あり足ある人間が、たゞ心の修養と鍛錬とによつて、殆んど奇蹟に近いほどの立派な性格の人に出來上つた、この乃木院長といふ生々しい事實あるを見て、心の修養といふことの、いかに絕

大にして深遠な意義あるものなるかをどうしても私は切實に感ぜずには居られぬ。

さうだ、將軍は神ではない人であつたのだ。將軍の人格が餘りに崇高であり、あまりに偉大であつたが爲に、『人と生れた神なり』と讚へる人も數多ある。尤もな事と思ふ。併し私はいつも考へる。將軍は始めからダイヤモンドではなかつたのだ。彼の修養が彼をダイヤモンドにしたのだ。さうして遂に神とまで仰がれるやうになられたのだ。そこに我々は一層親しみと、一層の尊さを感ずるのである。

六、死して而して生く

現世を神去りましし大君の御あと慕ひてわれは行くなり



學習院第三寮生（明治四十二年度）　前より二列目左より五人目服部他之助氏七人目南日恒太郎氏

大正元年九月十三日、乃木將軍殉死の大事件が突發した事を始めて知つた時、何故か私は餘り驚かなかつた。

『あゝ左樣であつたか』

と云つたのみで、傍にゐた者にも疑はれた位であつた。過ぎし六年の間、毎日々々將軍の日常に接して、その如何にも美しい性格、如何にも奧床しい心情、如何にも嚴肅な誠實、眞に透き徹るやうな純潔、正義に對して火の如く燃え立つ熱心は、將軍の心の何處から如何して湧き出るかといふ事は、永い間の私の心の大問題であつた。それが今『乃木將軍殉死』の報を耳にするに及んで、始めて釋然として解けたやうな心持がした。

將軍は『君に忠』といふ大理想を徹底するためには、何物をも犧牲にした、自分をさへ無くして居られたのである。

人は誰しもその大理想の爲には『死をも辭せぬ』と決心する程、確乎たる信念がある筈だ。かうした大理想の爲に自分が正義と信ずるものの爲に死ぬのは、僞善な生を保つよりは遙かに勝れてゐる事は論ずるまでも無い。斯の如き死は實に死にあらずして永遠の生である。畢竟、一番大切なことは、眞實にわが大理想に對して、正

とする所に對して、自分が忠實であるか否かである。人にほめられるとか、惡口をいはれるとか、或ひは又、その爲に困難に陷るとか、陷らぬとかいふことは問題ではない。是を大にしては生死も度外視さるべきものである。

　將軍は旅順の土となることを決心した。けれども明治大帝の篤き思召によつて再び帝國の地を踏んだ。併しながら將軍の心中は『愧我何顏看父老』である。死すべかりし生命を、大帝の篤き思召によつて存生へたのである。されば大帝に殉じ奉るといふことは、慥かに將軍にあつては豫定の行動であつたのである。

　將軍が第三軍の戰況を奏上された後、大帝は侍臣を遠けられ、將軍に對して畏くも御慰めの御言葉を賜はつたらしく拜察されたとは、當時の侍從武官から私の親しく聽き得た所である。大帝と將軍との間に如何なる御話があつたかは、固より伺ひ知るを得ないけれども、お召によつて侍從武官が御前に罷り出た時乃木將軍はハンケチを以て眼を覆つてをられたといふ。

　想ふに、凱旋後の將軍の生活は、すべてを大帝に捧げ奉つた自我無き生活であつたのだ。院長生活は解脱の境遇にあつたのだ。『君に忠』この大理想以外には何物もなかつた。一擧手一投足、そこに自分といふものの少しもない。偉大なる理想の現實された生活であつたのだ。その大理想を貫徹するためには、將軍は御後を慕ふより外に道はないと信ぜられたことと思ふ。

　かくて將軍は己が最高と確信された『君に忠』の大理想を現しつつ、永遠に生きて行つたのであつた。――今より十七し前、九月十三日の夕、明治大帝の轜車發引の時を以て。

御眞影

佐藤紅綠

　私の小學校時代には御眞影を拜する式はなかつた。教育勅語を降し給ふと同時に御眞影を學校に賜はつたと記憶する、其れは私が中學生の時であつた、毎年の奉拜式に私は面を擧げて御眞影を拜する事は出來なかつた、只だ餘りに畏れ多いからである、處ろが段々年を取るに從つていつの間にか面を擧げる樣になつた。其れだけ私の恭謙な心が怠つて來たのでないかと日も反省する、私が學生であつた時に子爵曾我祐準將軍を路で見た事が屢々であつた、將軍は何時も首を低れて行く、私は先輩に訊いた、勇猛を以て名ある將軍の姿勢らしくない。すると先輩は答へた。將軍は天を敬してるのだと、今一人の先輩が言つた。東宮の御附であるからだと、そこで私は初めて解つた。

　子爵に對する景仰の念が熾になつたのは此の時からである、故德大寺侍從長の首の骨が曲がつたのは明治天皇の御傍に扈從して居た爲である事は世人の普ねく知る處である。私共草莽の臣にも此の心がなければならぬ、至尊の御眞影に對しても決して面を擧げべきでない。



偶話 鐘の響

赤坂秋水

希臘の古書に一笑話ながら人情の機微を穿つたことが載せてあります。

或る商店の婦人が不幸にして夫に先立たれたので、更に新しい夫を迎へたがよいかどうか、そのことを懇意な坊さんの許に相談しに來ました。

『夫が亡くなりましてから、商賣も思ふに任せず困却して居ります。就いては永年わが家に奉公して居る番頭が、何事にも忠實で商賣の道にも長けてをるので、これを夫に迎へたらどうかと思ひますが如何でせう。』

『それは早速迎へられたらよろしいでせう。』

『でも店の番頭を迎へたら世間の思惑もどうかと存じますが。』

『それなら見合したらよいでせう。』

『併し妾一人では家業の末が案じられます。』

『ならやつぱりその男を夫になさつたが得策でせう。』

『若しも夫にした後思ひがけなく悪い事でもしたら大變です。』

『然らば見合せるに限ります。』

かやうに問ひつ答へついつまで經つても一向決定がつきませぬ。けれ共坊さんが仔細に思ふのに、婦人の内心は番頭を夫にしたくてならないらしい。そこで一策を案じて、

『では斯うしたらよいでせう、今にこの寺の鐘が鳴りますから、その時よく〳〵その響を聽いて、鐘が夫を迎へよと鳴るか、或は迎へるなと鳴るかをきゝ分け、その上で決心しなさい。』

と敎へました。婦人は成程と合點いて、暫らく雜談に時を過して居ると、やがてゴーンと鐘がゆふぐれを告げて鳴り渡りました。婦人は瞑目してその響を聽いてゐたが、覺えず喜びの色を現はして、



『鐘のひゞきは夫を迎へよと鳴りました。』

坊さんはニコニコして、

『では早速お迎へなさるがよろしい。』

婦人は勇んで家に歸り番頭と結婚しました。ところがその後年を經て、番頭は不行跡をはじめ遂に家産を破るに至つたので、婦人は之を離緣して扨て再び寺に行き、坊さんにこの事を語り、最後に『あなたは妾を欺いた。』と愚痴をこぼしかけた。

坊さんは、

『いや、私は決してあなたを欺いたのではない。つまりあなたが鐘の響を聞きちがへたのでありませう。もう一度篤と鐘を聞いて御覧なさい。』

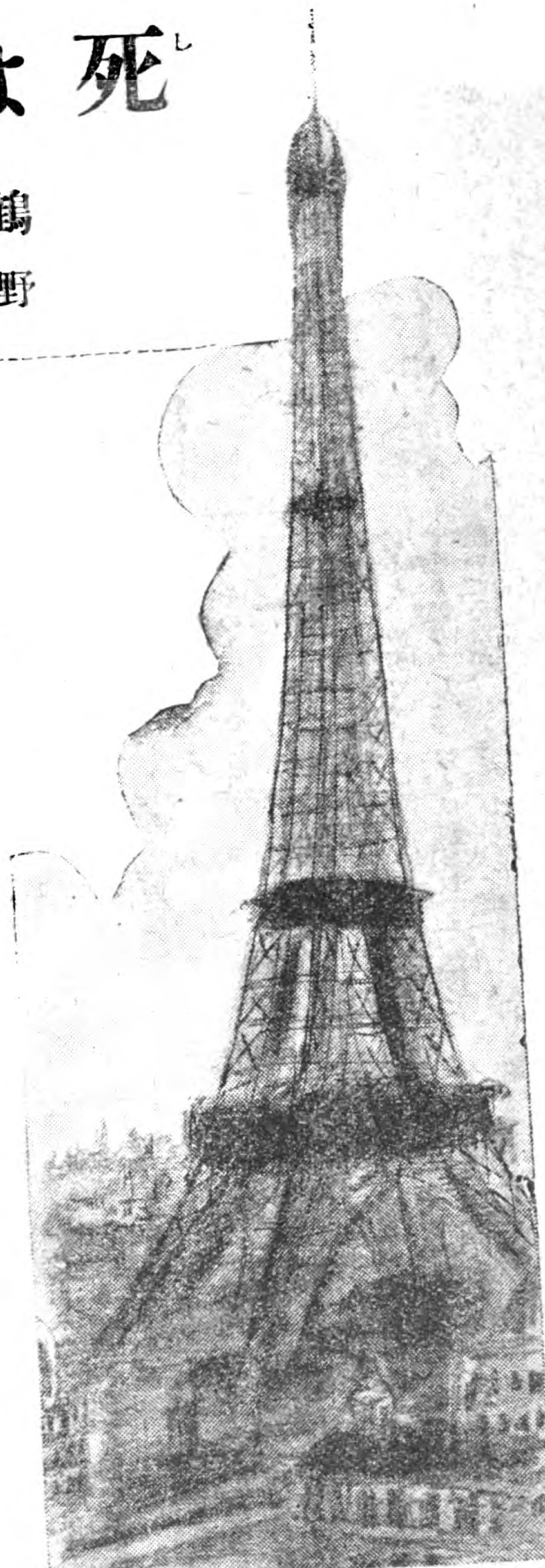
と諭し、暫く時刻を待つうち、又ゴーンと鐘が鳴り渡りました。婦人はそのひびきに耳を傾けて居つたが、やがて、

『いかにもあなたの仰せの通りです、妾は鐘を聞き損じてをつたと見えます。今聞くと鐘は夫を迎へるな、迎へるなと鳴りました。』

と云ひました。

死よりも強し

鶴見祐輔
野崎貞雄畫



一

車窓から遙かにエツフエル塔が見え出した時分から、小笠原剛はすつかり昂奮してしまつた。

『先生、あすこに見え出しましたね！』

と、窓から頭をつき出して叫んだ。

『おい〳〵、そんなに無暗に頭を出すと、汽車からころげ落ちてしまふよ』

と、中江先生は面白さうにからかつた。

『やあー！　見える、見える。大きいお寺が見え出したぞ。あれがきつと、ノートル・ダムだな。あつ、段々、段々、家が見え出したぞ。あのうちの一つが、きつとチユイレリーの宮殿だな。凱旋門はまだ見えないかなあ。奈破崙のお墓は、どこらの邊かな』

そんなことを、たてつゞけに饒舌りながら、剛は小供のやうにはしやいだ。

『まるで夢のやうだなあ。僕もとう〳〵かうして、巴里を眺めるやうになつたんだからなあ。早

いもんだなあ。人間といふものは不思議なもんだなあ』
と、獨語のやうに聯が言つてゐる。と、後から、
『おい小笠原、君は夢を見てゐるんだよ。その證據には、一寸手の甲を抓つてご覽。夢がさめるよ。アッハハハハハ』
といふ中江眞人の聲がする。
『いや、先生、本當ですよ。きのふ僕はマルセーユのホテルで朝眼がさめると、全く夢かと思つたんですよ。一たい自分はどこに寢てゐるんだらうと思つた。少しねぼけてゐたんですね。どうしても譯が解らないんでせう。それで哲人學園に寢てゐるんだとばつかり思つて、大きく眼をあけて部屋を見廻すと、まるで様子が違ふんでせう？　暫らくぼんやりしてゐて、それから寢臺から降りて、窓掛けをサラ／＼と上げると、眩しいやうな明るい南國の日を浴びて、マルセーユの街が脚の下に忙し相に動いてゐるんですね。僕は全くうれしくなつちやつて、わーいッ！　と大きい聲でど鳴つちやつたんです』
『アッハハハハハハ』
『アハハハハハ』
と、中江先生と小早川勝男とが、一どきに高く笑つた。
『だけれど、先生も小早川さんも、初めてご洋行のときはさういふお氣持がなさりませんでしたか。先生だつて嬉しかつたでせう？』
と、聯が車窓にもたれたまゝ、こちらを向いて眞顏になつてきいた。
『さうだなあ。僕のは大分古いことだから、もう記憶がうすいね。小早川君のを聞き給へ』
と、中江先生は、相變らず秘藏弟子の聯をからかひ乍ら話を小早川の方に向けた。
『それは嬉しかつたですとも。僕は外交官試驗に及第して、倫敦の公使館附の外交官補の辭令を貰つたとき位うれしかつたことはないね。それで愈々上陸したのが矢つ張りマルセーユでせう。僕はホテルへ荷物を下ろして、部屋に入つたときは、人が見てゐないので小躍りしましたね。實際、我々日本人は洋行が好きなんですね』
と、勝男は若々しい顏に、當年の喜びをたゝへて語つた。
『さうだ。日本人は實に洋行が好きだね。日本人で洋行の夢を見てゐない少年は無いだらうね。さうして、巴里とか倫敦とかいふところを、夢の都のやうに美化して憧憬れてゐる。今後は少女たちも段々と外國旅行を夢みるやうになるだらうね。
そこが日本人の面白いところだ。八幡船で支那の沿岸を荒し廻つた氣象がまだ殘つてゐるんだね。外國へ出たい、外國へ出たい、といふ氣が凡ての日本人の血管のなかに躍動してゐるんだね。それが日本を大きくする力だね。
英國人を偉大にしたのも、あの英國の少年が、大きい海を眺めて、あの大きい波のむかうの國に往きたいなと思つてゐる



その精神だね。佛蘭西人のやうに、本國の家庭が何よりよいところと思ふやうになつては駄目だね。大世界に對する大きい空想が、若い國民の頭の中に燃えてゐるうちが花だね』

ゴーッ、と音がして、車室が急に暗くなつた。

『おや、大變だ。先生、大變ですよ。もう着いたらしいですね』

と、剛があわてゝ車窓から飛び退いた。

『アッハハハハ、何もさう周章てなくてもいいよ。どうせ巴里行の汽車なんだから、一度は着くに定まつてゐるよ』

と、中江先生は、悠然としてゐる。

轟々と音して、高い家々の間を走り終ると、列車はぴたりと、廣いオルレアン停車場のフォームに停まつた。

どや〳〵、と大勢の客が、部屋々々から荷物を持つて出掛けるやうだ。

『荷物！　荷物！』

と、大聲に叫びながら、よごれた淺黄の制服を着た荷物運搬夫が、列車の廊下の中へ這入つてきた。

『さ、これと、これと、持つていつてくれ。合計十二個だよ！』

と、小早川が流暢な佛蘭西語で命令した。

『ボン！　ボン！（よろしい、よろしい）』

と、まるで鐵砲を打つやうな返事をして、運搬夫が二人でその荷物を、棚から下ろした。一人は三十恰好の肥えた丈の低い男で、赤黒い髪の毛に、口のまはりから顎にかけて、やぶのやうにむしやくしやとひげを生やしてゐる。人の善ささうな、碧い眼で、一寸剛を見て、につこり笑つた。

剛も思はず、につこり笑つて、

『ボン・ジュール（今日は）』

と、ありつたけの佛蘭西語を出した。

何やらん、ぺら〳〵〳〵、ネスパ　と、その男が言つて、両手をぱらりと開いて見せた。



何が、何やら譯がわからずに剛が、
『ウイ！　ウイ！（然り、然り）』
と言つたときに、中江先生が、クツクツと、笑をこらへて赤くなつた。
何かやりしくじつたかな、と剛は思つたが、例の呑氣で、すぐどや〳〵と車室から出て、廣いフォームに降り立つた。
そこには、四五人の日本人が來てゐて、先に降りた小早川と握手して挨拶してゐる。
『こちらが、中江先生です。先生、こちらが公使館の一等書記官の水谷君。公使が見える筈のところ、今日は據ない差支がありまして、水谷君が代理でお迎へに來てくれたんです」
さう言つて、一人々々を快活に引合した。それから小笠原もみんなに挨拶して、一同は出札口から、停車場の廣間に出た。

二

停車場から馬車に乘つて、セーヌ河の邊に出たときに、若い剛は、胸のちく〳〵痛む程の喜びを感じた。もう十二月初めの巴里は、美しい街路樹に青葉は落ちつくしてゐる。しかし青葉は無くともセーヌの水は、いつでも碧い。品よく石で疊んだ堤防の間を、塵一つ浮めぬ綺麗な水が、漫々と靜かに流れてゐる。小さい川蒸汽が、大勢の人を積んで、つつ、つーつ、と水鳥が波の上をゆくやうに、事もなげに川波の上を分けてゆく。その川のむかうに、中世紀の香りの漂ふ古風な家々が並び立つてゐて、そのうしろに、くつきりと青空に聳えてゐる鼠色の古塔が、まがふ方なきノートル・ダムの伽藍だ。ユーゴーの靈筆によつて、日本の青年をすら動かしたあの物語の舞臺のノートル・ダムだ。
剛は、馬車の上から、眼に吸ひつく程しげ〳〵と、このセーヌ河畔の風光を眺めた。
『とう〳〵巴里に着いたのだ』

さういふ感激が、若い彼の胸に一杯になつてゐた。

三

歴山王三世橋を渡つて、廣いコンコルド廣場に出た。埃及遠征の記念たる白い方尖碑を中心に、四周に各州を象どる女神像が立つてゐる。その一つ黒い喪章に被はれてゐるのがアルサス・ロレーン州の像である。一八七〇年に獨逸に奪はれたこの二州を、取り戻すまでは佛蘭西民族の復讎心は休まないのだ。

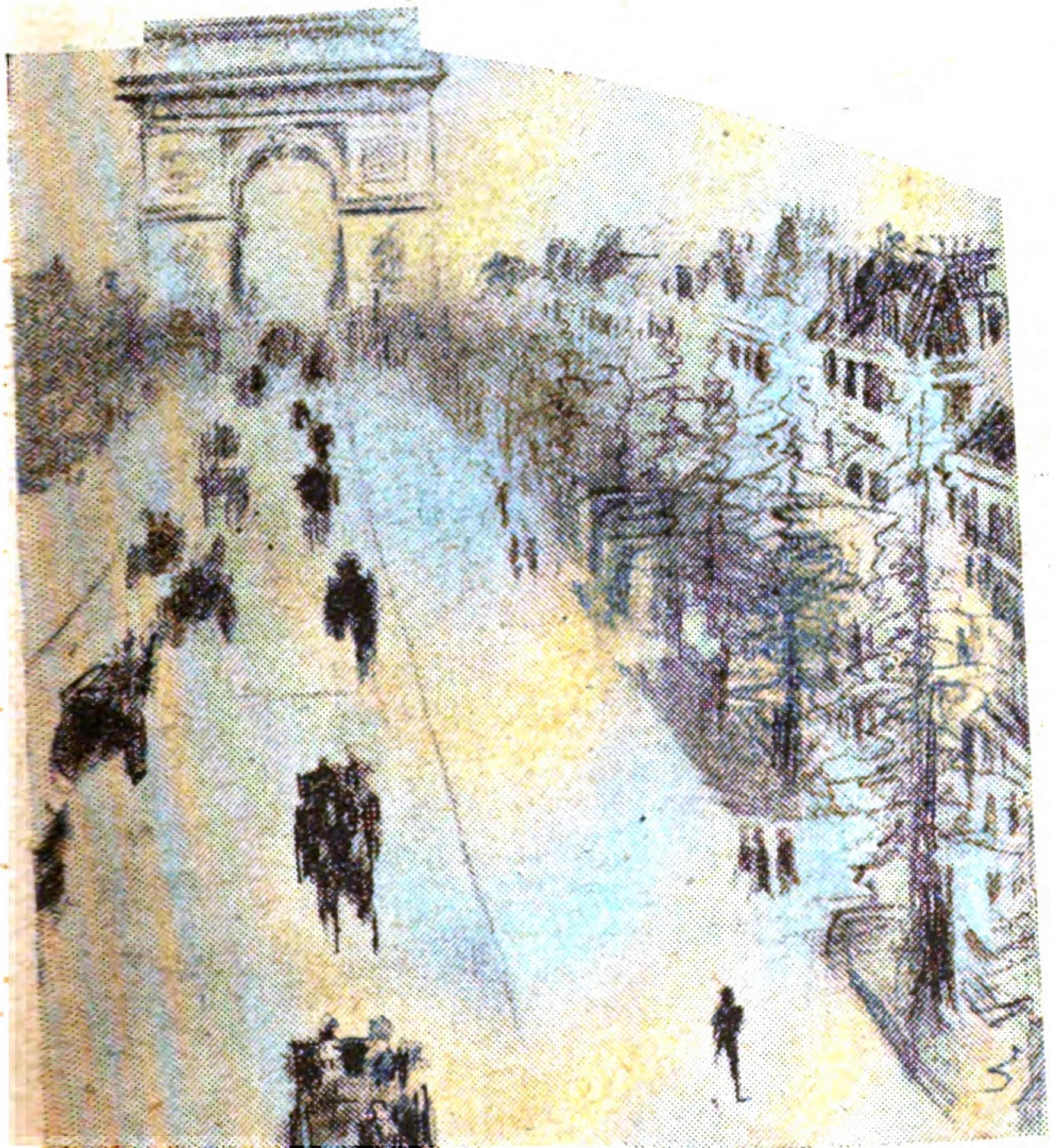
その廣場の中ほどをすぎて、高い橡の樹や、マロニエの樹立ちをめぐると、眼界さつと一時に開けて、左手の方に廣やかなる大通の限りなく通ずるを見る。それがまがふかたなきシヤンゼリゼーの大路だ。都のうちの都と謳はれる巴里の、大路のうちの大路と賞へられるシヤンゼリゼーだ。

『先生！』

と、剛は思はず大きい聲を出した。

『何だい、だしぬけに』

と、眞人はびつくりした。



『先生！　とう〳〵來ましたね。やあ、矢張り來たなあ』

と、小笠原剛は、馬車の中で窮屈さうに身もだえした。

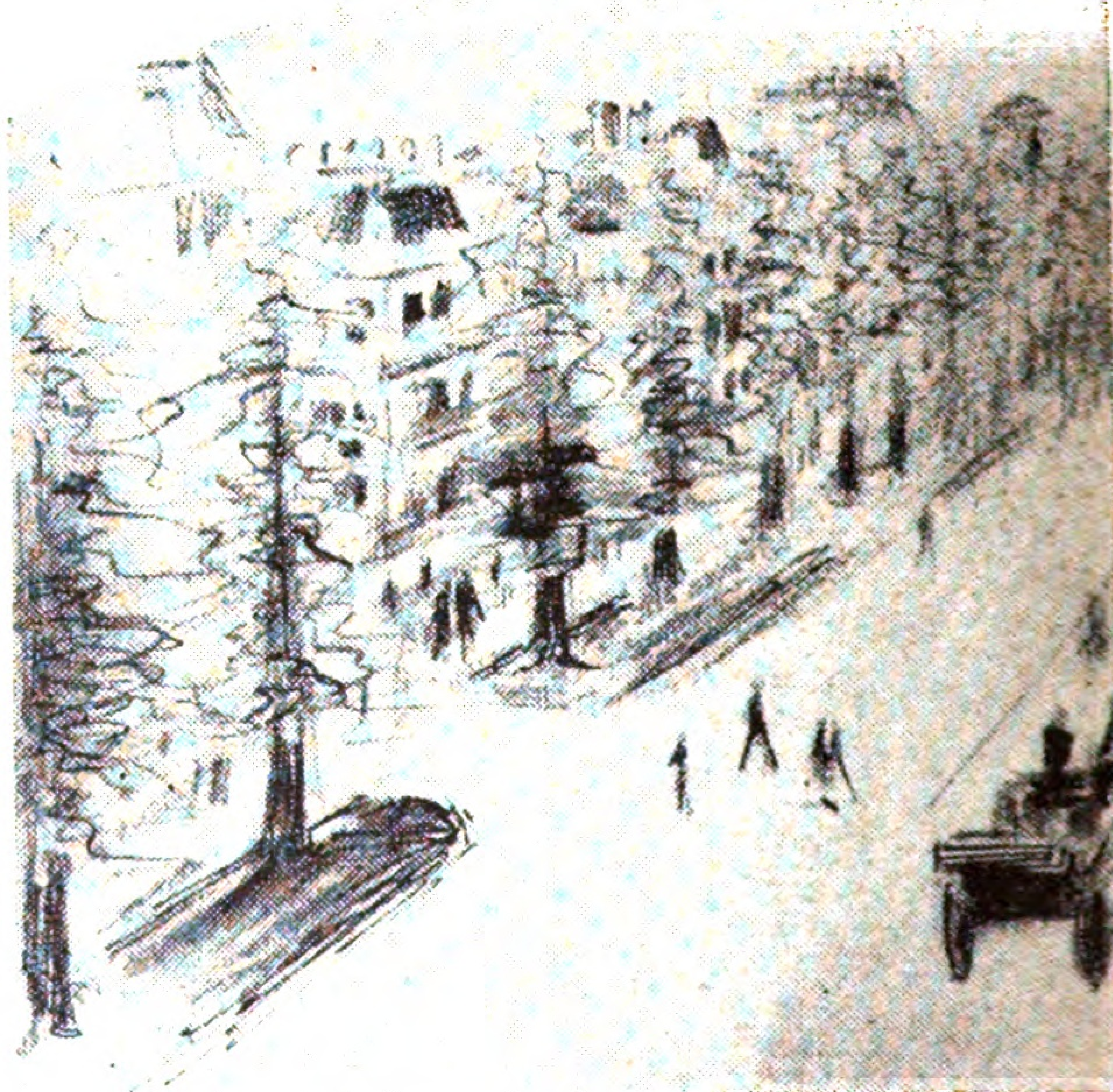
剛の眼に墜ちたシヤンゼリゼーの大路は、白と碧と赤と黒と異色との交錯であつた。ぱつ、とたゞさういふ色どりが、彼の眼に墜ちたのだ。その次の瞬間に彼は、これ等の色彩の持つ形を意識した。

白いのは家であつた。兩側に整然と軒を並べる家々は、多くは白い石又は白堊であつた。さうして、三階より五程の高さで、道幅と程よき釣合を取つてゐた。その々が一見して遊子の心をふのは、その清楚たる構への一つ〳〵が別々の建築になつてゐて、藝術的な調和を持つてゐるためだ。それは倫敦や伯林や紐育を見たる人々が、巴里を見る時に沁々感じることだ。その家々の前に三間程の人道があつて、その端に見渡すかぎり巴里名物の街路樹マロニエの大樹が、美しい並

木を作つて列んでゐる。葉の落ちつくした木々の幹と枝の色が黝かつた。さうして、その中央が廣い車道である。アスファルトで鋪装した鼠色の大路が、所謂大道直きこと髪の如く連つてゐる。その上を美しく着飾つた婦人たちが、馬車に乘つて轣轆として過ぎてゆく。家々のところ〴〵に、赤と白の段だらの天幕の人道に張り出してあるのが巴里の特色たる珈琲店の街路椅子の被ひである。さうして、此等一切の色調の上を、夏も春も秋も、而して冬と雖も倘ほ碧い大空が、くつきりと冴えてゐる。

その廣い大路は、コンコルド廣場に初まつて、次第に爪先上りに西にむかつて上り、盡くるところに小丘あり、小丘の上に悠然と文鎭のやうに坐つてゐるのが大奈破崙の勝利を記念する凱旋門である。

奈破崙のセント・ヘレナに歿した五月五日には、コンコルド廣場から見ると、落日がこの凱旋門のアーチの間に沈むのであるといふ。佛蘭西人らしい心持だ。



巴里は雲の都だ、とある人の言つたやうに、この都は空ゆく雲の美しいところである。工業の少ないことは、巴里の仕合である。倫敦のやうな煤烟が大空を濁さない。その澄み切つた空の上を、さま〴〵の姿したる白雲が、湧きつゝ崩れつつ悠々と渡つてゆくのだ。

巴里を美しく造營することによつて、佛蘭西國民の心を和げて革命を防止せんと志し、バロン・ドスマンといふ都市計畫の天才を起用して、思ひのまゝに美しく作らしめた奈破崙三世といふ男は、世間で考へる程のたはけではなかつたのだ。

誰れでも巴里に入るときつと一度はあつといふものだ。況んや若くして巴里の町に入つて、驚心駭魄せざる遊子があらうか。小笠原剛は、全くあつ、と言つたのである。

『先生、綺麗ですね！』

と、彼は少年のごとく叫んだ。

その時、彼の馬車が、このシャンゼリゼーの大路に向つて曲つたのには、彼は全く面喰つた。
『先生、こゝを通るんですか』
『うん、通つては悪いかね』
と、中江先生が、からかつた。
『だつて、先生！』
と、彼はなんだか勿體ないやうな氣がした。
『おい小笠原、よーく、この町を見ておいてくれ。かういふ風に藝術的な都市を造れる民族は、本當に偉大なんだよ。ペリクリスの作つた雅典、それから羅馬、それから巴里。人間の作る藝術品の中で、都といふものはその最も大きい藝術品の一つだよ。
自分の國の首府を、藝術的に破壞して平氣でゐる程、美に對して盲目となつた時は、もうその國民の理想主義の傾きかけるときだよ』
先生は、しんみりとした口調でさう言はれた。
さうして、車がはたと止まつて、彼等はこのシャンゼリゼーの通りにあるカールトン・ホテルに旅裝を解いた。

四

旅の塵を洗ひおとし、洋服を着換へた剛は、先生と小早川の後について、午餐に食堂に降りていつた。
どこを見てもガラスばかりのやうに見える廣間をいくつか通りすぎて、大きい食堂に出た。剛は何となく身のひけるやうな感じがして硬くなつた。ことに食堂の入口から見渡すと三段程低く作つた廣い部屋のうちには、二百人あまりの席があつて、今し午餐時と見えて、大勢の人が一杯集つて食事をしてゐた。各國の外交官が多く來てゐたのだとは、その時剛には氣が付かなかつた。
北京の事件にからんで、歐洲の風雲がたゞならぬ氣配になつたゝめ、當時世界外交の中心地であつたこの都には、歐洲各國の外交官や政治家や知名な新聞記者等が大勢集まつてゐて、それが午餐時には、カールトンの食堂に集まつて、食事をしながら意見を交換し種を取つてゐたのだ。
さきに小早川が氣を利かしてテーブルを豫約してあつたので、給仕長は鄭重に、窓側の落ちついた席に案内した。先生は眞中に坐ると、小早川を右、剛を左に坐らして、小早川と相談して食事の註文を初められた。
その間に剛は、そつと四周を見廻した。
その時剛は、實に先生に申譯ないことをしたと思つた。彼は思はず顔の少し赤くなることを感じた。
それは、剛が坐つた丁度正面の食卓に、桃色の絹の着物をきて、黒いすかし絹の鍔の廣い帽子を心持ち眼深かに被つた女性が坐つてゐる。どういふのかたつた一人である。牛乳のやうな白い頬に、くつきり浮み上つてゐる圓い碧い眸、希臘風な通つた鼻、薄い紅い唇。細い眉毛、頬に美人ぼくろを一つ點じて



ゐる。唇から折々洩れて見える揃つた白い齒。白い二の腕を露はに出して、しとやかに食事をしてゐる。

　それをちらりと見ると剛は、生れて初めて

『綺麗だな』

と思つた。

　思ふと同時に彼は、はつと氣が付いた。今自分は先生の前に坐つてゐるのだ。その先生の前にゐる自分が、よその女を綺麗だななどと思つたのだ。飛んでもない罪を心に犯してゐるのだ。何といふことだ。申譯ない。さう思つて彼は、思はず赤くなつたのである。

『おい小笠原、牡蠣を喰べるかい。生の牡蠣だよ。巴里の名物だよ。』

先生が突然さう言はれた。

『えつ？』

と、剛はどぎまぎして、一層赤くなつた。

『小笠原君は、このホテルへ來てから、馬鹿に硬くなつちやつたね』

と、輝男が前から言つた。

『さすがの豪傑も場後れがしたんだね。アハハハハ』

と、先生が愉快さうに笑はれた。

それでやつと説明が付いたので、剛は内心ほつとしながら、

『え丶、一二三日すりやちき直りますよ』

と、苦笑した。

しかし、食事の間に剛は全くまごついた。

ふと食卓から顔を上げると、以前の女性に正面からむき合つた。その瞬間にパッタリ眸が合つた。周章て剛が横を見ようとする間もあらせず、その女が嫣然とあでやかに笑つた。正面から剛の眸を覗き込むやうにして、につこりと笑つたのだ。

剛は腸の底まで何か冷たいものが、すーつと入つたやうに感じた。さうして、その次の瞬間に、何とも言へない喜びに、ぞくぞくした。

と、彼はすぐ、自分の右に坐つて居られる中江先生を意識した。激しい自責の感じが、潮のやうに奔騰した。

彼は、すぐ眼を皿に落して、默々として食事をした。彼は自分の額に彼女の視線の矢のごとく亂射せられてゐることを意識しつゝ、ものにおびえたるもの丶ごとく、おづおづと食事をした。

先生と輝男が、何か話しかけるときに、彼は、、、どきんとして冷汗をかいた。

苦役のごとき食事が無事にすんで、彼は、ほつとしてテーブルから立つた。先生に数へられてゐたやうに、先生と小早川とを先に立たして、一番おしまひについて彼は立つた。そのとき彼が、恐いもの見たさに、もう一度こつそり、その食卓を見やると、何時の間に立つたのか彼女はもう、影も形もなかつた。



五

その晩、公使の招待で、剛は生れて初めてオペラといふものを見た。アナトル・フランスの書いたタイースである。剛は何が何やら無我夢中で見てゐた。話の荒筋は輝男に聞いてゐた。しかし、歌聲よりも、しぐさよりも、音曲よりも、彼は舞臺の上の女優たちの美しさに恍惚とした。さ

うして、女など綺麗だと思ふ自分の墮落を深く愧ぢた。しかし、愧ぢながらも彼は、恍惚として陶醉するやうなうれしさを感じた。踊るたびに裾の方から露はれる、白い絹のくつ下につゝまれた美しい女優の足を、惡魔を見るやうに彼は眺めた。

オペラからの歸り、キヤフエー・ド・パリといふ華やかな料理店に伴はれて、彼等は芝居歸りの夜食をした。さうして下戸にも飲める三鞭酒の甘い味に心持ち醉つて、剛はホテル・カールトンに歸つてきた。

何となく物足りないやうな、恐ろしいやうな感じが、彼の全身をつゝんでゐた。ホテルの食堂からは、音樂の音が賑やかに洩れてくる。と、一きりやんだと思ふと、ドッと拍手の音がする。



『ダンスをやつてゐますね』

輝男がさう言つた。

『うん、さうだね。久しぶりだ往つて見ようか』

と、中江先生が言はれた。

『え、先生もダンスをなさりますか?』

と、輝男が涼しい眼を一杯に見開いた。

『アハハハ、さう馬鹿にしちやいけないよ。僕だつてまだそんな老人ぢやないよ。ダンス位出來るさ』

『いや、さういふ意味ぢやありません。日本ではダンスと言へば、何か輕薄な人間

のする罪惡のやうに考へてゐる連中が多いんですからね。先生のやうな方が、ダンスをなさらうとは思ひませんでした』

『それは尤もさ。何事によらず、一つの新しい社會習慣が一國に入るのは六ケしいものでね。その新しいものゝ入るために、今迄の習慣の調和が破れるので、その亂調から色々の犧牲者が出てくる。だから、僕も日本ではダンスをまだ學園の學生たちに奬勵しない。もう少し女子の教育が進んで、女が矢鱈に男の言ふことをきかなくなるやうな意思と理性の鍛錬が出來てからでないと、今日のやうなセンチメンタルな日本の若い女が、すぐダンスや男女交際を初めたのでは、澤山の犧牲者が出て困るからね。

まあ日本では、スポーツ位からぼつ〳〵入つてゆく方が無難でいゝね。

おつと、理窟を言つてゐるうちに着いたね』



廣い食堂の眞中のテーブルを全部片附けて、光るやうな木の床に、あまり辷らないやうに白い粉を少し撒いてある。天井の中央に高く懸つてゐる懸垂洋燈から落ちてくる黄色い光が、雨のやうに部屋一杯に降り灑いでゐる。床の周圍に紅の紐を結ひめぐらして、その外に食卓を置き、三々伍々これに坐つて、三鞭酒やらレモン・スクオッシなど飲んでゐる。男は燕尾服、女はデコルテ。鵞毛の扇で輕く扇ぎなどしてゐる。白、黑、綠、黄、紫、橙、水色、藤色、而して眼のさめるやうな銀

絲、金絲、金剛石。油繪の中から抜け出してきたやうな美人。矢のやうにすぐい貴公子。燦として隅々まで光り輝いてゐる。

と、廣間の突き當りの上のバルコニーの上に陣取つた音樂隊の絃頭から、さつと新曲が流れ初めた。

すは、と一同が立ち上つた。黒き紳士の服と、雪のごとき貴婦人の衣裳とが、翩翻として舞ふ胡蝶のやうに纏れつゝ、解れつゝ、解れつゝ、また纏れつゝ舞つた。床の上を、黒き男子のエナメルの靴と、白い女性の絹の靴とが、ちら〱、ちらちらと、光りつゝ辷り、辷りつゝ光つていつた。



それは音樂の波の上を漂ふ薄絹のごとく、光の海のうちを泳ぐ細鱗のやうであつた。金髮あり、黒髪あり、栗色なるあり、銀色なるあり、あるはたばね、あるは編み、波打つあり、直きあり。つぶらなる眸、赤き唇、白き齒、微笑みつゝ、語りつつ、喃々として過ぎ、ひそひそとして舞ふ。

蓊勃として觀者の鼻を撲つ香りは、薔薇あり、ライラツクあり、ヘリオトロープあり、百合あり、蘭あり、而して鈴蘭あり、馥郁として相交はり、融然として相溶く。温氣快く室に滿ち、樂と色と香と明眸と、相解けて作り出す一望の樂園、小笠原剛は、惚然として立ちすくんだ。

『どうだい、あすこの隅のテーブルが空いてゐるやうだね。坐らうぢやないか』

と、先生が言つた。

『いや、お待ち下さいよ。女づれでないと入れないのかも知れませんよ。一寸聞いて參りませう』

と、流石外交官だけに輝男は、つと近付いて入口に立つてゐる給仕長に私語いた。

給仕長は大きく合點いて、何やらん輝男にさゝやくと、やがて三人を、正面のよい座席に案内した。

『君は今朝、餘つ程心附をやつたね。クツクツククク』

と、先生がちやんと察して笑つた。巴里の習慣を百も承知の中江先生である。

『いや、さういふ譯でもありませんが。公使館の連中がちやんと、先生のことをお話してあつたやうです。それからね』

と、輝男は一寸あたりを見廻して、

『矢張り婦人同行でなくては、こゝには入れないんださうですがね。一人二人婦人をつれてきてあげると給仕長が申しますからね。そのまゝ頼んでおきました。よろしいでせう?』

と、訊いた。

『それは、構ひませんよ』

と、案外先生が開けて居られるので、輝男がほつと安心した。

そのとき輕い靴の音がしたと思ふと、給仕長と一緒に二人の女性が歩いてきた。

『今晩は、紳士たち』

『お暫らくね、オホホホ』輕い佛蘭西語で、さう言ひながら、その婦人たちが一人は輝男と先生の間、一人は剛と輝男との間の空いた椅子に腰を下した。その瞬間に、ぷーんと、高い香水の香りが剛の鼻を突いた。

『ようこそ。お待ちしてゐました』と、快活に佛蘭西語で答へながら、輝男は、につこりとして二人の顔を交る〳〵見た。

『何をめし上りますか?』つゞいて輝男が二人にきいた。

『騎士たちのお好みのまゝに』と言ひながら一人が、銀の小さい手下げ袋から、紙莨を取り出した。と、輝男がすぐ衣嚢から燐寸を取り出して、パッとつけてその莨に點じた。

その眼もとまらぬ應對と早業に、剛はすつかり度胆をぬかれて硬くなつてしまつた。

『三鞭酒を一本』さう言つて輝男はすぐ、酒表を取り上げて、年代と名前とを指示して、給仕長に命令した。

『あなた方は、オペラのお歸りでせう?』

と、一人が圖星をさしたので、流石の先生もぎよつとして、

『何故?』と、訊きかへすと、

『オホホホ、こゝにプログラムが載せてあるぢやないの?』

と、食卓の上に剛が置いた、今夜のタイースのプログラムを指さした。

剛はまた失敗つたかと思つて、益ゝ周章てしまつた。さうして、さつと赤くなつた。

『あの方は、お若いのね。可愛らしいこと』

一人がさう言つて、一寸剛の膝の上にのせた手の甲を輕く抓めつた。剛ははつとして、髪の根まで赤くなつた。

と、音樂の音が一せいに起つた。

『ラ、ラ、ラ、ラ、ラー』

と、一人の女が曲に合せながら、誦さんだ。

つと椅子を離れた輝男が、靜かに會釋して、その女の椅子を後に引いて助け起すと、すぐ廣い床の上を、辷るやうに靜かに踊つていつた。

剛はまるで、馬鹿のやうな自分を發見した。

『おい、小笠原、これが巴里だよ。いや、巴里の一面だよ。よく見ておゝき。もう三ケ月もすると、君もこんなことは平氣になるよ。』といふ、先生の聲が耳許で聞えた。

『それでは私にも、紳士の義務をつくさして頂きませうか』

さう言つて先生は、水色の夜會服を着た女の手を取ると、靜かに廣い床の方に歩んでゆかれた。

その凝滯のない、天衣無縫といつたやうな先生の後姿をじつと見守りながら剛は、

『いつになつたら俺も、先生のやうに、人生硬軟の二つの世界をあのやうに無拘泥に、悠々と歩いてゆけるやうな修業が出來るだらうなあ』と私語した。

そのとき、ふと高い白粉の香りがしたと思ふと、つと肩に輕く手をのせて、

『モシユー、あなたは踊らないの?』と、いつたものがある。

すつと首を廻した剛の顏にすれずれに顏を寄せてゐる若い女がゐた。それが、今日午餐の時に彼に笑みを送つてゐた、その美しい婦人であつた。剛は心臟が一どきに、どつと止まつたやうに感じた。(つゞく)

名士芳墨の中から

◎鳩山春子先生より

『今般貴社修養全集及び講談全集御發刊に相成、現下思想國難に直面して是が大鐵鎚となり照明燈とならむとせらるゝは、全く國を思ふの至誠に依ること ゝ深く祝賀仕候。……』

◎陸軍中將　堀内信水閣下より

『修養及講談全集大賛成ナリ。親ハ子ヲ生ミ歴史ハ國民ヲ造ル、而シテ歴史中最モ民心ニ感動ヲ與フルモノハ通俗講談及事實修養談デアル。是ハ日本獨特ノモノデアル。……故ニ此種原稿ノ如キハ目下ノ病的思想界ニ最モ必要ナル注射劑デアル。……』

◎久留島武彦先生より

『貴社ニシテ始テ全集ノ全集ラシキ意義アル發刊ヲ見ルベク候、標準的全集ノ發刊一日モ速カナランコトヲ祈ル』

◎文學博士　藤井健治郎先生より

『今般貴社に於て修養全集並に講談全集の大出版を御計畫被成候趣爲邦家斯道慶賀此事に奉存候、貴社從來の御成績に鑑み此壯擧も必ず御成功可被致は一點不容疑所、謹で前途を祝福致候。……』

◎高等師範教授　松井簡治先生より

『目下所謂思想國難に際し、貴社の修養講談二全集御發刊の御計畫は最も機宜に適したるものとして、小生は滿腔の賛意を表し候。……』

此外多數名士の方々より賞賛激勵の辭を賜はつて居ります、尙項を改めて御報告申上げます。

國難を打開する力

商工參與官　牧野良三

近來、頻りと『國難』が叫ばれます。政治國難と云ひ、經濟國難と云ひ、將た思想國難と云ふ、何れもその憂慮すべき國難たることに於て論はありませぬ。然し、それが我國の實相その儘であると思つたならば、それは非常な謬りであります。にも拘らず、我國の實情が、恰も國難その者であるかのやうに叫び、種々と國民を刺激し、よつて以て國民を發奮努力せしめることが出來るやうに考へて居る人の少いのは、私の遺憾とする所であります。

×　×　×

或る人は云ふ――吾々の精神生活には、二つの動力がある、一つは『やつて見よう』と自ら勵ます力であり、他の一つは『駄目だ』と抑へる力である。吾々の精神生活はこの二つの相反する刺激によつて、いろ〳〵な生活境遇を作るものである。

然らば、世の國難を叫ぶ人は、その叫びによつて、國民に何を期待せんとするのでありませうか、――『やつて見よう』といふ心持ちをか、それとも『駄目だ』といふ心持ちをか。

我國に、幾多の國難あることは事實であります。然しそれと同時に、我が國力の發達の頗る目覺ましきものあることも亦事實であります。私は、聲を大にして『國難』を叫ぶ前に、まづ以て『國民よ、我國情と國力とを知れ』と叫ぶことの、更に緊切なることを思はざるを得ないのであります。

×　×　×

國難の一つとして、常に數へられるものに國債があります。今や我が國債の總額は五十二億に上り、十年前に比べると倍額となり、國民一人當りの負擔は、實に九十圓となつて居ります。屈強な働き盛りの青年男女ならば、一人九十圓の國債負擔は必ずしも問題でないかも知れませぬが、老人や小供や、貧しい下級の勞働者までが、一人九十圓の國債を負擔

する――今朝產聲を擧げたばかりの赤ン坊までが、百圓に近い公債を背負つて出て來たと說かれては、誰かその國難の重大なるに恐れざるを得ませうか。

× × ×

然し、十年にして倍額になつたものは、獨り國債ばかりではありませぬ。物價も倍になり、所得も倍になり、而して我が國富の如きは三倍（約千二十三億圓）になつて居るといふことを知つたならば、そこに國債の總額五十三億なるに就ても、また自ら別種の感慨を抱くに至るであらうと思ひます。

國債の一人負擔額が九十圓になるといふのも、それは五十三億といふ總額を、六千萬と云ふ人口で割つた數字に過ぎませぬ。數字の一人當りが九十圓になるからとて、國家は、決して貧乏人や赤ン坊にまで各〻九十圓を負擔させは致さない、數から申せば、大部分は皆、富豪の負擔であります。

又その五十三億の國債も、總べて皆使ひ果して烟になつてしまつた譯ではありませぬ。その大半は生產公債として、鐵道となり、港灣となり、各種の事業となつて、勞働者に仕事を與へ、國民に產業を與へ、地力を開發し、國富を增進して、直接に間接に國力の充實となり、民力の涵養となり、單に現はれて出る數字の上からのみ見ても、國債の利子ぐらゐは優に稼いで居るのであります。大金持ちの亞米利加には國債がないかと申せば、現にその總額が三百八十億圓、一寸我國の八倍であります。その爲に彼の如く國土が開かれ、その爲に彼の如く產業が盛になつたとも云へませう。

斯くは言ふものゝ、國債の增發は、之を愼しまなければならないことは勿論であります。五十三億の國債總額は、我が國家としての重大國難であることにも論がありませぬ。たゞ併しながら、そこに、我が國民の理解と自覺とを促すべき、他の重大な事實のあることを知らなければならぬと思ふのであります。

× × ×

國債の話は簡單な一例に過ぎませぬ。貿易に就ても亦同樣であります。年々我が外國貿易は逆調で、輸入超過のみが續くといふことが、同じく國難の重大な一つになつて居ります。事實は正に其の通りであります。

然し、それは主として海外貿易表の數字の上のことであつて、我が國民は、實は此の數字の外に貿易上大いに働いて居るのであります。例へば我が國民が海外に在つて、その地と外國との間に貿易を行つてゐる所謂『出商業』の總額は、多き歲には十數億、少ないときでも數億。最近の大正十五年には、總額六億圓の取引をして居ります。私は、國民のこの雄雄しい海外發展の事實を知らしめずして、たゞ徒らに國難を

叫ぶことは、決して國民の發奮努力を促す所以でないと信ずるのであります。

又この外に、支那、滿洲、南洋、南米等、海外の各地に投資して居る邦人の事業は、その額十數億に上り、之れから收める年々の利益は相當の額に上つて居るけれども、これも亦貿易表の數字には現はれて居ない事實であつて、然かも亦國民に知らしめなければならぬ重大な事實であります。

此の外、我國の船舶が海外各地に活躍して、運賃として齎らす所の海外收入の如き、最近不況を繼續しつゝも尚ほ年額二億を下らず、海外より收める保險の收入も亦一億を下りませぬ。やかましく云はれて居る海外移民の送金や觀光外人の消費も、また相當額に上るとは云へ、是等の數字に比べては、殆んど問題にならないと云つてもいゝ狀態であります。

×　×　×



牧野參與官の演說振り

我が海外貿易は、國民に、輸入額の多いと云ふことを恐れしめてはなりませぬ。それよりも寧ろ貿易總額の甚だ少額であることを警告しなければならないのであります。何となれば、多いと言はれる輸入貿易の總額は、最近の昭和二年が漸く二十一億七千萬圓で、國民の一人當り僅かに三十六圓に過ぎませぬ。獨逸國民の一ケ年百十四圓、佛の百〇三圓、米の七十三圓、而して英吉利國民の一年二百五十二圓なるに比べると、殆ど比較にならないと謂はねばなりませぬ。輸入の少いのは産業の振はないのである。原料を海外に仰がなければならぬ我國が、一ケ年二十億や三十億の輸入額に止まることの、其處に、却つて重大な國難の潜んで居ることを知らなければならぬと信じます。

×　×　×

何事によらず、物は考へ樣だと言はれてゐる。然し、この問題は決して考へ樣の問題ではありませぬ。何となれば、そこに我國の國情があり、國力があるからであります。國情と國力とを理解せずして、國難が正しく理解せられる筈はあり

ませぬ。

× × ×

世人の國難を叫ぶ所以は、我國を既に完成したる成人國家とする所から起るのであると思ひます。その爲に、我國と英吉利とを比較し、亞米利加と比較して、悲觀したり、憂慮したりして、遂に國難來ると叫ぶのであります。然し、我國は、是等の謂はゆる先進國家とは違つて、まだ未完成國家である、まだ一人前ではないのである、まだ親がかりの若き青年國家であります。其處に我國の國情があり、前途があり、又その意味に於て國難もあるのであります。

國家を斯く解するとき、初めて『國難』の何物なるかが、釋然として理解されるであらうと思ひます。

× × ×

以上、私は國難理解の一例として、主として謂はゆる經濟國難の方面に就てのみ論じたのでありますが、他の謂はゆる政治國難、思想國難に於ても、深き考察を廻らす時、また同樣に理解することが出來ようと思ひます、否左樣に理解すべきものと信じます。

而して斯くの如く理解する時、謂はゆる『國難來』の聲は、我々の合理的判斷と愛國的感動とによつて、奮然起つてこの國難を打開するの實力を湧起せしめずには措かないでありませう。こゝに至つて始めて『國難』が、『大いにやつて見よう』といふ積極的動力となることを自覺すると同時に、斷じて『駄目だ』といふやうな消極的動力であつてはならないことをも認識するのであります。

古人は『敵國外患なきものは國恒に亡ぶ』といつた。『憂患に生きて安樂に死す』といつた。みなこれ『國難』が國民奮起の理解と努力とを齎すものなることを高調したものであります。國難來の叫ばるゝや大いに佳し、たゞその叫びをして、あくまでも奮起打開の力を與ふる警告の聲たらしめよ、斷じて悲觀におとしいるゝ絶望の聲たらしむる勿れ、と私は切言するものであります。

偶吟

土井晩翠

一　大空の星を摘むべく屋にのぼる
　　はかなのものよ名を人といふ

二　眺めつゝ思ひやるべきはてもなし
　　三千大千世界を星を

三　とある夜半わが心臓のとゞろきを
　　大わたつみの潮とききぬ

四　流轉とや小川は物の數ならず
　　ヘラクリタスに花踏ましめよ（落花）



ネルソン提督來る（口繪參照）

海軍中將・子爵　小笠原長生

『ネルソン提督來る』。その一言が傳はると、群集は、強風の前の幔幕のやうに、どうつと搖れうごいた。われらの提督は、いづこ。一目なりと、その姿を拜して、祝福の言葉を投げかけようと、彼等はひしめき立つた。歡聲が、提督の身邊に渦卷くと、走りつ、馳けつ、躍りつ、みな一齊に押出したが、肝心の提督の姿は見えなかつた。その筈、隻眼隻手、小兵な、纖弱な彼は、全くその包圍の中に陷つて、身動きすらも出來なかつた。或は踐を轉じ、或は方向を換へて、右往左行、此の人ごみの間を縫ひ乍ら、かくれるやうにして、波止場へ急いだ。祖國の守護神として、崇敬の的となつてゐた提督が、佛西聯合艦隊擊滅の爲に、任を帶びて、今、海に浮ばんとして居る。群集が熱狂して、其の行を壯にしようとしたのも無理からぬ事である。

時はこれ、一八〇五年（文化二年）九月十四日朝、處はこれ、英國ポーツマス港の埠頭。辛うじて棧橋を下りて、提督は、ひらりと端舟に乘つた。又しても、歡聲は、地をどよもして起り、帽をふる者、手巾をふる者、みな我を忘れて喉も裂けよと叫びつゞけて居る。感極まつて、嗚咽して居るものさへも居る。その間にあつて、大英帝國の運命を双肩に荷うた提督は、冷嚴にして沈靜な態度を持して居る。彼は果して何をもつて、これに應へんとするか。圖は、此の朝、棧橋に於けるネルソン提督出征の風姿を描いて、精彩奕々、これを見るものをして、宛ら、身、そこにあるが如き感を起さしめる傑作である。

提督、體軀壯剛なるに非ずと雖、膽度、夙く人に超え、その實際的荒戰術は、最も得意とする處にして、敵の心膽を寒からしむるのは、毎度の事であつた。一七七〇年（明和七年）十二歲にして海の子となつてより、三

名士カリカチュア



骨を刺すやうなキビキビした雄辯に、老いて益々旺んな政治家犬養木堂氏。

財政通で名高い、福德圓滿の政治家高橋是清氏。



傑作又傑作と常に巨彈を擲つ文壇の巨匠菊池寛氏。



高齡矍鑠として國家の爲盡瘁する財界の元老澁澤子爵。



內外の國事に奔走し、國士として名望の高い後藤子爵。



全世界にその令名を馳せた東郷大將。

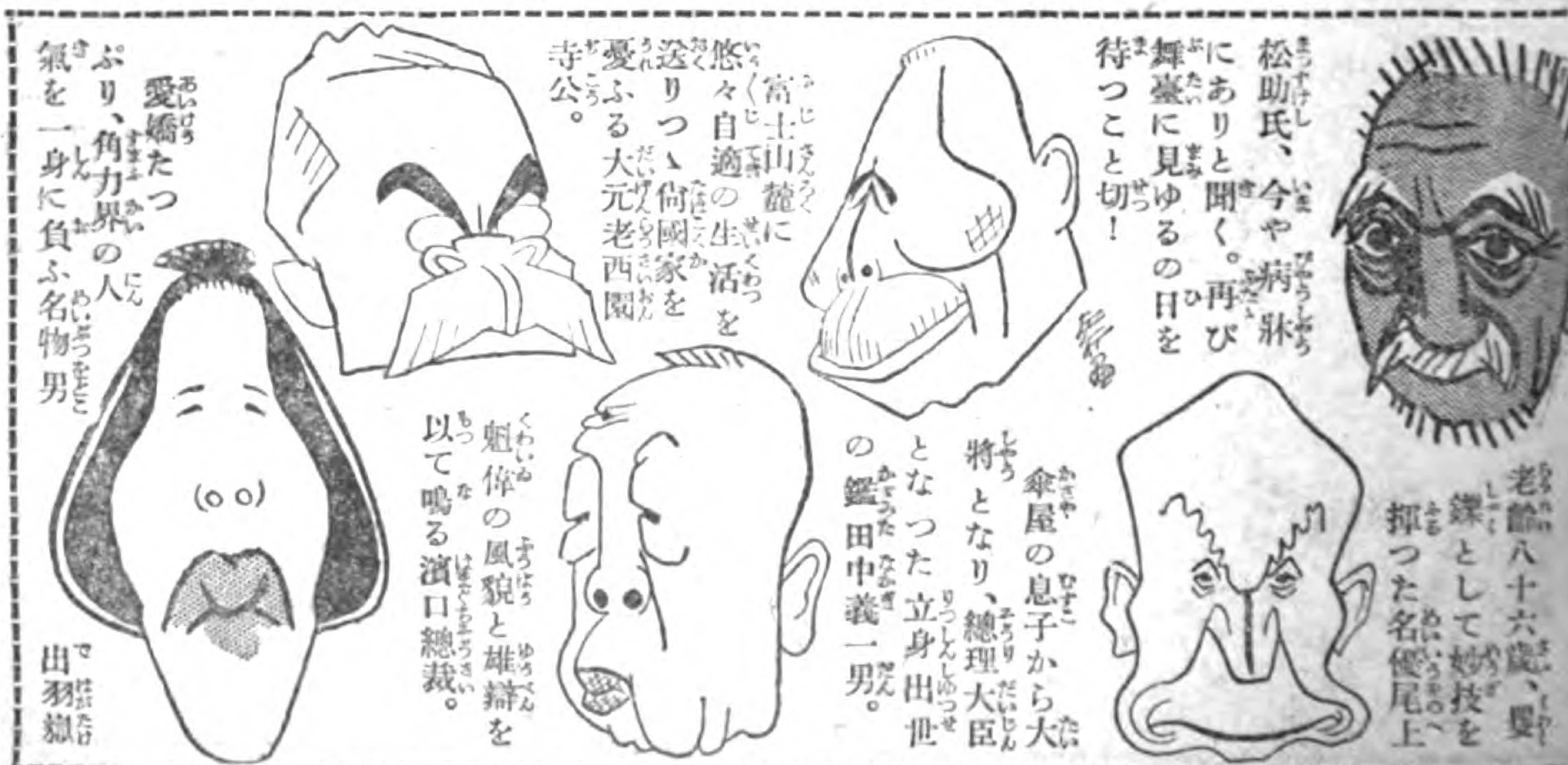
十餘年の艦上生活が續いた。ヒンチンブローク號艦長として、始めて中米セント・ジュアンの初陣に臨んだのは、二十二歲。佛國との開戰此方、奮戰、奮戰、又奮戰、つひに艦隊統率の司令長官となつたのは、四十歲。その間、臨戰百七十有餘回、右腕を斷ち、右眼を失ひ、面上彈痕斑々たるに至る。

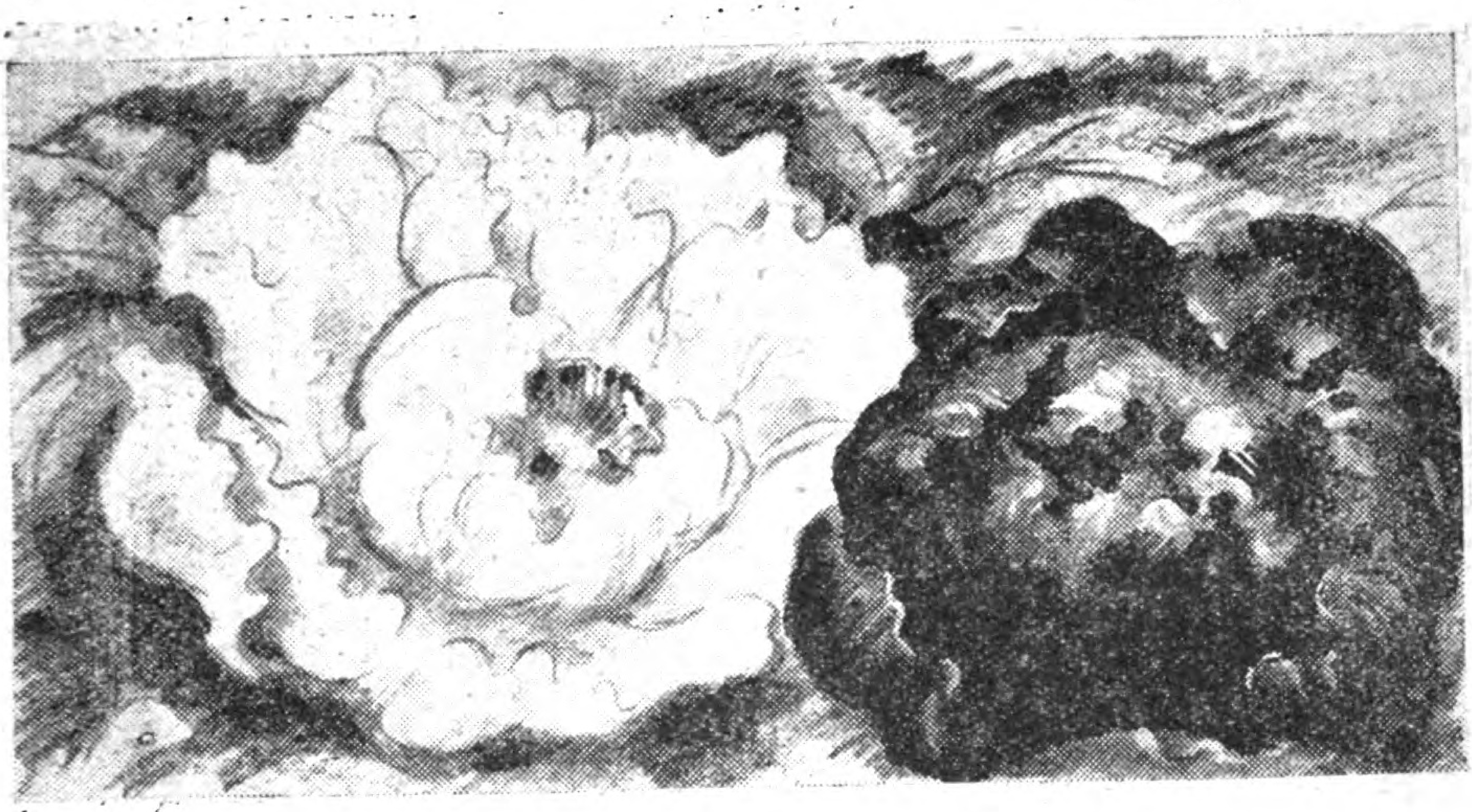
彼の存在は、實に對岸の陸上に於て、風雲に乘じ赫々たる武勳を奏しつゝあつた英雄兒大那翁をして、海上に於て其の野望を縱まにすることを許さなかつた。『吾をして、英海峽六時間の制海權を把握せしめたなら、何んの、高が英國、こつぱい微塵に叩伏せる』。那翁は、かく豪語して、着々としてその準備をとゝのへた。『來らば來れ、佛帝、たとへ鬼神たりとも、斷じてその海岸を距る一浬の外に出でしむるものでない』。提督は、かく壯語して、金剛不壞の大覺悟をもつて、これに對抗した。龍鬪虎擊、こゝに於てか、乾坤一擲の爭覇戰は起らざるを得ない。

此年九月二日、警報忽ち至る、メルトンの閑居。提督は、そこに歸臥して居つたが、佛西聯合艦隊の消息を得て、蹶然としてポーツマス港から揚帆した。時正に午前八時、ユニオン・チヤツクの旗、翻々として曉の風にひるがへつた。

九月二十一日、殺氣漲るトラフアルガル岬。敵艦隊の戰列艦三十三隻、英國艦隊の戰列艦二十七隻、隻數に於ても、砲數に於ても、彼よりずつと劣つてゐたが、提督の率ゐる艦隊は、意氣衝天、斗牛を貫かんず勢を示した。其日正午に近づき、彼我艦隊の射程距離に入らんとした刹那、旗艦ヴイクトリア號の檣頭高くかゝげられたのは、千古不磨の信號『英國は各員が其本分を盡さんことを期す』。これを望見した將卒は、勇躍抃舞して、未だ戰はざるに優勢の敵を壓倒した。

勝てり、勝てり、英國艦隊はつひに勝てり。だが、提督今や亡し。先の華やかさに比べて、何ぞ蕭索たる、群集は、祖國に對する本分を果して、壯烈な最期を遂げた彼の屍を悄然として迎へねばならなかつた。祖國の個々人々が、跪拜し、接吻し、眞心をこめて旺なる見送をしてくれた、その歡呼に對して、彼が酬いんとした所のものは、只此の一事。曰く、死！（完）





東京行進曲

菊池寛
寺内萬治郎 畫

誤解

道代は、息をはずませながら、家へ歸つて來た。

伯母は、道代が色を易へてゐるのを見ると、駭いて訊いた。

『道ちやん。どうしたの。』

でも、道代は事實をありのまゝに報告することが、なんとなく氣恥しいので、しばらくの間だまつてゐた。

『どうしたの。顔色が青いぢやないの。』

『まあ、いやな人！』

道代は、ひとり言のやうに呟いた。

『誰がさ。』

『私の後を追ひかけて來るのよ。』

『どんな人がさ。』

道代は、崖上の人であるとは云へなかつた。

『若い人。』

『不良少年だらう。世の中に、ひどいことをする人だね。』
伯母は、さう云つた儘、深くその事を訊ねようとはしなかつた。彼女は、そんな事よりも、もつと大事な用があつたのだ。
『ねえ、道ちやん。お前奉公に行かないかい。』
『えゝ。どこへ。』
道代は、伯母が藝者家へ奉公に行けと云ふのではないかと思つて、覺悟はしてゐることだつたが、可なり緊張した。
『お邸へさ。』
『お邸へつて？　何處？』
『上の藤本さんで、ぜヒお前に來て貰ひたいと云ふんだよ。よく勤めて呉れゝば、ちやんとこしらへをして相當な所へお嫁に世話して下さると云ふんだよ。』
道代は、お嫁と云ふ言葉に、少し顏を赧めながら云つた。
『どうして、私に來いと云ふのかしら。』
『そりやお前、昨日お前がゴムマリを拾つてあげたらう。そのとき、藤本さんの若旦那が、お前を見たのぢやないかね。』
道代は、さう云はれると、その若旦那が今日、自分を呼びかけたあの學生であると思つた。さう思ふと、同時に道代は、若旦那なるものに對する反感が、ムラ〳〵と湧いた。
『伯母さん。わたし、いやよ。』
『どうして？　わざ〳〵お前を呼びに來て下さるんだもの。もしかすると、これがお前の出世の緒かもしれないよ。』
『どうして。』
『だつて、今日來た女の人は、四十五六の年寄の人で、女中頭だと云つてゐたが、この前にゐたお小間使などは藤本さんで、世話をして法學士の奧さんになつたのだとさ。』
だが、道代は今日見た若い學生のことを考へると、藤本家へ行くことは、どうしても氣がすゝまなかつた。
『いやかえ？』
伯母は、道代がだまつてゐるのでもどかしさうに云つた。
『わたし、いやですわ。』
『どうして。』
『どうしてもいや。』
道代は、いつになくしつこく答へた。
『さう。ぢや仕方がない。あす、あの方が來たら、お斷りしよう。』
伯母は、さう云つたまゝ、庭へ降りて、乾いた洗濯をしまひ込み始めた。

×　×　×

良樹は、あくる日、女中頭からの報告をきくと、可なり失望した。自分の心の中に、一杯になつてゐる好意が、相手にちつとも感ぜられないのが、いかにも情なく思つた。

牡丹の會

藤本家の牡丹の會は、六月の終りの日曜日に開かれた。
白金の高臺を、一萬坪近く占めてゐる邸地の奧には、可なり

大きい牡丹畑があつた。その花の種類から云つても、その數から云つても恐らく、東京第一ではないかと云はれるほどだつた。

藤本家では、毎年牡丹畑の滿開の日を期して、盛大な牡丹の會を催すのだつた。今年は六月の了りの日曜に、その催しがあつた。主人の朋友知己である無數の實業家を初め、有名な政治家、外交團の人々も交つてゐた。主人がひいきの俳優、藝人達も來てゐた。お客の中には家族を連れた人も多かつた。接待には、新橋赤坂の一流の名妓が、四五十人も來てゐた。

模擬店は、邸内の到るところに設けられてゐた。テニスコートのある廣場には、崖の方へよせて、小さい掛小屋の舞臺が作られて、餘興場になつてゐた。

午前十時からの招待だつたが、午前は少し曇つてゐたので、來客の足が遲かつたが、午後になつて空が晴れ、初夏のさわやかな光が、園内を照す頃には、來邸する自動車の警笛のひびきが、分秒の絕



え間もないほどだつた。パッカード、カデラック、リンコーン、ステウドベーカーなど新型の車が、邸内の車寄に溢れて、電車通にまで續いた。まるで自動車の新型展覧會のやうだつた。中には、二萬圓以上もする自動車中の王であるロールス・ロイスや、珍しいミネルバなども交つてゐた。

邸内には、もう五百人に近い人が、はいつてゐた。屋内も屋外も人が一杯だつた。三つある應接室、二つある大廣間も人が一杯だつた。

三時には、廣い庭園も、もう人でうづまつてゐた。四阿、芝生、葉櫻の下、泉水の傍、どこにも五六人宛、一人が集つてゐた。模擬店にも、だん／＼人が集り出した。おしるこの店には、美しい令孃達が、四五人並んで、キヤッキヤツ笑ひながら箸を動かしてゐた。喫茶店も大繁昌だつた。おでんや、すしやなども、もう黒山のやうに人がたかつてゐた。

かうした店には、新橋と赤坂の美しい妓が、お給仕をしてゐた。

模擬店の雑沓を離れ、小さい丘の上の大きい楓の樹の下に、五六人の青年紳士が集つてゐた。その中に、山野秀夫もゐた。彼は、黒のタキシードに、縞のズボンをはいてゐた。外國から歸つたばかりであつて、巴里人かと思はれるほど、スッキリした恰好をしてゐた。



外務省の安田健吉もゐた。有名な劇作家の島津稔もゐた。

『珍らしいね。君が、こゝに來てゐるとは思はなかつた。文壇人は君一人ぢやないか。』

山野は、さう云つて島津に話しかけた。

『いや。松田天風が來てゐるよ。先刻、盛んにおでんをパクついてゐた。』

『松田天風か。しかし、あれは帝劇關係で呼ばれてゐるんだらう。兹の主人は帝劇の大株主だから。』

『うむ。さうかも知れない。』
『純然たる文明人は君一人さ。どうして、この家を知つてゐるんだ。』
『いや、僕はお嬢さんを知つてゐるんだ。』と、島津は云つた。
『あはゝゝ。ぢや、僕達と同じだ。』
と、山野は云つた。
『僕等も、みんなさうだ。』
安田は、さう云つた。
『われ〳〵はお嬢さんを、取り卷く狼連なんだあはゝゝゝ。』
若い紳士の一人はさう云つて笑つた。
『だが、早百合さんは美人だね。今日も、新橋と赤坂の藝妓が澤山來てゐるが、早百合さんの美しさは、壓倒的だね。』
安田は感嘆して云つた。
『早百合さんの良人になる男は、一體誰だらう。』と、若い紳士の一人は云つた。
『良人になんかなる必要はないが、あの人にとにかく愛されてみたいね。最初に愛される男は、一體誰だらう。』
と、島津は云つた。彼は、文明でも第一に數へられるほどの美男だつた。
山野は、ニヤ〳〵笑つてゐた。
『どうだ、山野君、君なんか自信がないかね。』
安田は、山野をからかふやうに云つた。
『ないこともない。』
山野は、しづかな調子で云つた。すると、島津は何と思つたのか、山野の自信に充ちた態度に、挑戰するやうに云つた。
『山野君でも、早百合さんには齒が立たないだらう。』
『なぜ。』
山野は、少し色を易へて言つた。
『僕は、そんな氣がするんだ。僕はあの人は、竹取物語のお姫さまのやうな氣がするんだ。』
『馬鹿なことを云つちやいかん。そんな超人間的な存在が、現代にあるものか。僕は、もし僕がそんな氣があるとすると……』
と、山野は昂然として云つた。
『何だ、ぢや君はそんな氣があれば、早百合さんと、戀愛關係になれると云ふのかい？』
島津は、山野の態度に少し反感を持つたらしく、一寸ムキになつてゐた。
『そんなことを、露骨に論するのは、穩かぢやないよ。殊に、相手がお嬢さんだもの。』と、山野が言つた。
『然し、露骨に云つてゐるのは君ぢやないか。僕は、竹取物語のお姫さまのやうに神聖視してゐるぢやないか。』
『君には、あらゆる女性は神聖に見えるだらう。あはゝゝゝ。』
と山野は云つた。
『ぢや、君にはあらゆる女性が、娼婦に見えるのか。』
島津も負けてゐなかつた。
『さうは云はない。しかし、どんな女性でも、征服にゐる聖淑



な娘でも、戀愛に對して、絕對に安全なんて女性は、一人だつてゐやしないよ。君は、森鷗外の譯した短篇小說を讀んだことがあるか、ある男が尼院の尼僧にいきなり接吻すると、最初は猛烈にそれを拒むが、おしまひには、向ふでも反應を示すと云ふ小說があるが、大抵の女性はさうだよ。たとひ、彼女が處女であらうとも。』

『馬鹿を云つちや困る。僕は、女性の德性をそんなにまで、輕々見たくない。少くとも、日本の女性は。』

『それは、たまく君の無經驗から來てゐる空想だよ。』

山野は、まるで高飛車になつて云つた。

『君は、あらゆる女性を知つてゐるとでも云ふのか』

島津は、本氣になつて憤慨してゐた。

『少くとも君よりは多くね。』

『然し、君が知つた女性から、他の女性を推測することは、片斷だよ。少くとも、この早百合さんの如き場合は。』

『いや、同じだよ。女なんてものは、みんな同じだ。たゞ最初男が愛をさゝやいたとき

に、うれしがつて泣くか、恥しがつて笑ふか、眞赤になつてそれぎり物を云はないか、そんな違ひがあるだけだ。あはゝゝゝ。』
山野は、あらゆる女性を征服し盡くしたやうに、高らかに笑ひつゞけた。
『君はそんな自信があるのなら、早百合さんに君を愛させることが出來るか。』
と、安田が云つた。
『そんな氣があればさ。僕は、今全然そんな氣はないんだ。僕は、もう女に飽きてゐるんだ。僕は、日本の女に飽きて、外國へ行つた。しかし、外國の女も結局同じだつた。僕は、十八のときから丁度、五十回以上、戀をしたよ。だが、それがみんな同じなので、つくづくいやになつたんだ。最初は、半年位でいやになつた、その次ぎは三月二月、おしまひには、一度その女の身體を自分のものにするともうすぐにいやになつたのだ。この頃では、相手が僕に屈服しかけるともういやになつてしまふのだ。』
山野は、可なりウヰスキイが利いて來たと見え、可なり夢中になつてしやべつてゐるんだつた。
『嘘つきだね。僕は、日本の女性の名譽のために、君が嘘つきだと云ふことを、證明してやりたいね。』
『あはゝゝゝ。お氣の毒さまだけども、それは徒勞に了るだらう。僕はね、三十一の今になるまで、失戀したことがないんだよ。もつとも、たゞ一人あるがね。それは、僕がその女性に合つたのが、結婚式の三日前だつたのだ。これだけは、さすがの僕も、手のつけやうがなかつたよ。あはゝゝゝ。尤も、明日結婚すると云ふ日に、僕を尋ねて來て、夜中泣き明して行つた女もあるがね。』
『汚らはしい。君が、そんなに自信があるのなら、早百合さんを、君のものにして見たまへ！』
島津は憤然として云つた。
『そんな氣がないんだよ。』
山野は、冷然として云つた。
『ぢや、君の云つてゐることは、みんな嘘だらう。』
『あはゝゝゝ。ぢや、僕が早百合さんを自分のものにしたら、君はどうする。』
『僕は、將來創作の筆を斷つ。その代り、君が失敗したら、どうする。』
『僕も、將來ピアノの前には坐らない。』
『面白い。面白い。』
安田は、手を叩いた。
『僕は、早百合さんを信じてゐる。君が指一本でもさはれるもんか。』
『あはゝゝゝ。僕が、早百合さんと樂しい媾曳をするところを、君に見せてやらう。』
『それは、いつの事だ。』
『あはゝゝゝ。期限の約束が必要だね。』

『何年でも待つてやる。』
島津は、強い自信で云つた。
『そんなに、永い期限を貰つちや僕の恥だ。三ケ月あれば澤山だ。三月は、とにかくかゝるな。』
『君は、早百合さんを、自分のものにした證據として、何を見せるのだ。』
『さうだね。まさか、あの人と接吻してゐるところを、君に見せるわけには行かない。どうだ、僕と二人ぎりで、郊外を散歩してゐるところでも、見せればいゝだらう。』
『よし。それで澤山だ。早百合さんが、そんな不謹愼なことをされることは絶對にないと信じてゐる。』
『あはゝゝ。今の内に、君は題材があるだけ、澤山書いて置きたまへ！ 注文は出來るだけ、取つて置いた方がいゝぜ。今に君は、筆を絶たなきやならんから。』
山野は、笑ひながら云つた。
『君こそ、出來るだけ、音樂會をやつて置きたまへ。この夏場は地方廻りをやつたら、どうだい。今にピアノの前に立てなくなるんだから。』
『御冗談でせう。それぢや、肝心の方がお留守になるぢやないか。僕だつて三月の間に、一人の處女を自分のものにしようと云ふんだもの。相當苦心は入るからね。音樂の方は、いつだつていゝんだからね。』
そのとき、松並信男が、この連中を見かけて、丘へ上つて來た。
それを、素早く見つけたのは、安川だつた。
『ねえ、松並君君の競爭相手が出來たよ。山野君が、早百合さんに、モーションをかけようと云ふんだ。』
松並は、一寸暗い顏をした。でも彼は苦笑しながら、
『そりや、仕方がない。强敵だが、仕方がない。』
『なに、松並君心配することはないよ。早百合さんは、君の手に落ちないごとく誰の手にも落ちはしないよ。』
と、島津は云つた。
『いや、松並君心配したまふな。僕は、あの人を永久に自分のものにはしないんだよ。あはゝ、僕が一度自分のものにしたら、君にゆづるよ。あはゝゝゝ』
山野は、惡魔のやうに笑つた。

盲目的愛着

夕暮が來て、來客が大抵去つてしまふと、早百合姉妹の招待したお客達だけが、ダンスのために、殘る手筈になつてゐた。洋館の大廣間の椅子や長椅子や卓子などを片づけ、晝間餘興に來てゐたジャズ・バンドを、そのまゝ利用して、舞踏會を催すのであつた。
山野秀夫も、むろん殘つてゐた。彼は、晝間劇作家の島津と、論爭したゝめに、可なり不愉快な氣持になつてゐたが、しかし島津に對して、意地で爭つた事を、實行するためには、今

日の舞踏會などは、最初の第一歩を踏み出す絶好な機會でなければならないと思つた。

殘つたお客は、青年紳士が二十四五人と、そのパートナアの夫人令孃が十四五人ゐた。

松並信男や、外務省の安田など、早百合のダンス友達は、みんな殘つてゐた。白耳義公使の令孃も、殘つてゐた。

山野は早百合とは一度踊つた。いつかホテルで會つたときよりも、早百合は、打ち解けてゐるやうに山野は思つた。

『今日はありがたうございました。日本へ歸つて初めて愉快な一日を暮しました。』

山野は踊りながらさう云つて挨拶した。

『いゝえ。何のおもてなしもなくて。』

『いや。あの牡丹の美しさと、貴女のお美しさとが何よりのおもてなしです。』

そのくせ、山野はウヰスキイばかり飲んでゐて、庭の奥にある牡丹畑は到頭見ずじまひだつたのだ。

『まあ、御冗談ばつかり。』

早百合はさう言つたがしかし、惡い氣持はしないらしかつた。



一時間以上、踊つて、みんなが可なり疲れた時だつた。云ひ合はしたやうに、凡ての人が休息し始めた。そのとき、誰が云ひ出すともなく、山野に失禮でなかつたらピアノを一曲、聽かせて貰ひたいと云つた。

滿場の人が、わーつと聲を立てるやうに贊成した。

山野の歸朝歡迎音樂會は、可なり成功だつた。批評家達は、山野の秀れた天分が、二年間の留學で、著しい進歩をしたことを認めずにはゐなかつた。

今夜殘つてゐる人々も、大部分は山野



の演奏を聽いてゐなかつたので、こんな機會に、それが聽かれたら、どんなにうれしいかと思つてゐた。早百合も、皆の思付きには賛成だつた。

『ねえ、藤本さん、あなたから一つお勸めになつたらどう？』

婦人客の一人が早百合に云つた。

『さうね。ぢや、妾から改めて、おねがひしますわ。ねえ、山野さん、何か一つ彈いて下さらない。』

早百合は、輕い媚態を浮べて山野に云つた。

山野は、先刻から彈きたくて、仕方がないのを、藝術家の威嚴を保つために、わざと辭退してゐたのだつた。異性の心をうごかすのに、音樂の力ほど強いものはない。雄鳥が美しい歌を唱つて雌鳥の愛を得ようと努めるやうに。

『貴女が、御所望になるのなら、一つ彈きませう。』

『さう。それは、有がたいわ。下にもピアノは、ございますけれども、私の部屋

に在るのが、お氣に入ると思ひます。どうか、私の部屋へいらしつて下さい。』

山野を囲んで、人々は階上の早百合の部屋へ行つた。

人々は早百合の部屋の豪奢な設備に目をみはつた。山野は、グランドピアノに近よつて、輕く右の手に鍵盤を叩いて見た。

『いゝピアノですね。此の間、僕の演奏會で使つたものより、もつと素晴らしい。』

さう云ひながら、山野はしづかに、ピアノに向つて腰かけた。ピアノに向ふと、彼は急に嚴粛に見えた。

彼のニヤケたところは忽ち消え失せ、彼の美貌は神々しさを帯びるのだつた。

彼は、そこでショパンのプレリユードを彈き出した。そのタッチの鮮かさ、その技巧の見事さは、五十人に近い聽衆を、強い力で、グイ／＼引きずつて行く力があつた。人々は、恍惚として、演奏者の魂の底から溢れ出るやうなメロデイに、心を浸してゐるのだつた。

プレリウドが了つたとき、早百合が云つた。

『もう一つ。メンデルゾーンのハンチング・ソングを彈いて下さらない。』

それに賛成したやうに、聽衆は一齊に拍手した。山野は輕く、うなづいて、壯快なハンチング・ソングを彈き始めた。人人は、聞いてゐる裡に、獲物を追うて馳け出す、犬の鳴き聲、騎馬の獵人達の蹄のひゞき、角笛の音などを聞くやうな氣がした。

山野が、彈き了つて、立ち上つたとき、聽衆の口からは、深い溜息の音から、嵐のやうな感嘆の聲が洩れて來た。

『山野さん、素敵でしたわ。』

さう云つた早百合の眸にも、ある輝きが宿つてゐるのだつた。

山野は、得意になつた。

『これぢや、三月は入らなかつた。もつと威張つてやるんだつた。』

彼は心の裡で、さう思つた。

山野の彈奏が了ると、皆はドヤ／＼と階下へ降りた。階下の食堂で、紅茶の支度が出來たからと云ふのだつた。

山野も、階下に降りて紅茶を飮んだ。すると、同じ卓子に、早百合の妹のなつ子が、來て坐つた。ダンスのときにも、山野はなつ子と、三度も一しよに踊つてゐるのだつた。

『山野さん。わたしとても感心しましたわ。』と、なつ子は云つた。

『あはゝゝ。ありがたう。然し、今日は疲れてゐるので、思ふやうには彈けませんでした。』

『まあ。御冗談ですわ。わたし、音樂の美しさが、今日初て分つたやうな氣がします。』

『恐れ入ります。』

なつ子は、早百合ほど、はでな顔ではなかつたが、しかしい

かにも處女らしい初々しさと可愛さが、身體中から溢れて來るやうな感じだつた。

『わたし、お父さまにお願ひして、あなたに教へに來ていたゞかうと思ひます。』

『はゝあ、結構ですね。』

『今、キーランド夫人が、月曜日毎に來て下さるの。でも、それ以外にあなたに來ていたゞいたら、どんなにうれしいか分りません。』

『私も、欣んで伺ひます。』

山野は、なつ子のピアノのレツスンにこの家へ出入りすることが出來れば、早百合を自分のものにすることなど、たゞ一投手の勞に過ぎないと考へた。

『お姉さま、一緒に稽古なさるかも知れないわ。』

『結構ですな。』

山野は、島津に對する戀の戰ひを半以上、成就したやうな氣がした。獨逸では、令孃達を最も誘惑し易い位置にあるものは、音樂教師であると、統計に出てゐるのだつた。山野は、微笑した。

劇作家など云ふものは、甘い奴だと

食堂は、すぐヴエランダにつゞいてゐた。ヴエランダには、初夏の涼しさうな月がさし込んでゐた。紅茶の後で、ヴエランダに出てゐる人も澤山ゐた。

『庭に、お出になりませんか?』

なつ子が、すゝめた。

『お伴しませう。』

山野はなつ子と一しよに立ち上つた。姉妹位置を換へてゐたらばと山野は思つた。

ヴエランダから、二人はいつの間にか庭へ降りてゐた。

なつ子は、絶えず山野に寄り添ふやうにして隨いて來た。

泉水の中の飛石を渡るとき、なつ子は山野の手を輕く取つた。

『危いわ。落つこちると、たいへんよ。』

山野は、處女の柔い手を、自分の掌の中に感じた。山野は、なつ子が、彼女の手を差し出すと同時に、彼女のあらゆる愛情をも一しよに差し出してゐるのを感じた。

泉水を越すと、そこは芝生になつてゐて、月光をさへぎる樹木は一本もなかつた。

『いゝ月ですね。』

山野は、さう云つて空を振り仰いだ。

『いゝ月ですわ。わたし、うれしいの。』

さう云ふと、なつ子は山野に寄り添うて、一しよに月を見ながら、そつとその可愛い頭を山野の右の肩にもたせかけるのだつた。

それは、山野に對する彼女の愛着だつた。彼女、自身はそれを意識してゐないかもしれなかつた。彼女は、山野の才能と藝術とにすつかり魅了されてしまつたのである。（つづく）



萬花地獄

吉川英治
伊藤彦造 畫

やりすごす寸馬豆人

馬、山駕、徒歩の音。

露や草の香に濡れよごれた十一名の一行は、司馬大學を先頭にして、やがて、波坂の嶮を喘ぎのぼり、沓打の茶屋に着いて、暫く息休めをした。

この沓打のあたりは、すでに雲表二千五百尺の高地、高原らしい植物の花が滿地にこぼれ咲いてゐる。そして、その花の軒端に、お妻のおしこめられた荒繩の山駕が、邪慳にドサッと抛り置かれた。

『さあ、これでやつと、最初の一山は越えたといふものゝ、まだ草津までは日いッぱいの折所ぢや、充分足を休めてゆくがいゝ』

と、典六は駕の者をねぎらッて、

『オ、これから見ると、素晴らしい眺めでございますな』

と、大學の床几のそばへ寄つて行つた。

善光寺の劍客、三浦龍爪と傳八郎の兄弟は、地の理に明るいところから、

『あの正面に見えるのが、妙高、黒姫、また左に寄つてみえるのが戸隠山でござる。——左様、あの高社山の橫に見えるのが吉田の宿から善光寺の方角にあたります』

などと、頻りに、大學と段之進に向つて、四顧の地勢を說明してゐる。

その話の途切れたところで、茶店の先に、馬子や駕の者が思ひ思ひにくつろいで居る樣子を見廻して、

『……そこで殿様、お妻のやつは何うしますな？』

『何うと言つて……、昨日、諜し合せて置いたとほり、片づけてしまふ迄のことぢや』

『だが、その場所は』

『まあ急くな、もう一二里山へ這入つて行けば、旅人の目につかぬ所もあらう。……それに、お妻へ手を下す前に、宿から連れて來た馬子などを處分して置かぬと、得て、アゝいふ下郎の口から、思はぬ秘密が里の者へ洩れて行く……』

『ぢやあ、この邊でと思ふ所へ來たら、眞つ先に、土地に明るい三浦兄弟から、何か、合圖をして貰はうか』

『ウム、ならば、斯ういふ手都合にして……』

と、大學は扇子を半開きにして、自分の口へ當てた。

そこで、五人の肚も決まつた。——お妻の運命はもう一里か二里の先に定められたのである。

『さ、出掛けようか』

誰からともなく、力のこもつた聲がかゝツた。

馬子の罵り、馬の嘶き、つゞいて山駕の息杖が上がると一行はふたゝび行装を作つて、杏打の茶屋の軒先を離れ出した。

すると——直にその後で。

茶屋のうしろから、ひよツこりと姿を見せたのは内柿の幸安で、まだ油斷のない目くばりで、

『やれ、いゝ按配だつた。——亭主殿、有難うございました』

禮を言ひながら、裏に開つて有つた莨簀を除いて、そこに隠れてゐた、角太郎とお吟の二人へ手招ぎしながら其處へ出て來た。

其家の老爺は、改めて、三人の床几へ茶を汲み直して來ながら、

『好い都合に、先では、誰も氣がつかなかツたやうでございます。たゞあの片目の侍だけが、頻りに裏を覗いてをりましたから、もしや、見つかるのではあるまいかと、手前もハラ〳〵して居りましたが……』

『わしも其處に屈んでゐるうち、毒虫に刺されて弱つてしまつたが、然でガサゴソしては一大事と、凝と辛抱して居たよ』

と、幸安は腫れ上つた首すぢへ、何か草の葉らしいものを揉んでこすツて居た。

角太郎は軒端に立つて、杜の陰から、やり過ごした敵の一行を見送つてゐたが、又、床几へ戻つて來て、悠々と、一椀の茶をすゝり終つた。——そして、

『御亭主』
と、靜に眉を昂げて呼ぶ。
『はい』
『これから先、澁峠までの間には、まだ大分難所があると聞いてをるが、何處かこの邊から、先へ近廻りをする間道はあるまいか』
『それは無い事もございませぬが、折角、こゝから先は割合に樂な道で、それが切れると草津堺の折所でございますから、そこを險しい間道からお出なすッては、とても、お女中の足がお續きなさいますまい』
『いや、今の者達の先へ越えさへすれば、多少の惡路はいとはぬ心算……。して、その間道とは何う參るな』
と、早くも、道者笠を手にして立ち上る。
お吟と幸安も、すぐ、角太郎に尾いて其家を出た。
表に立つて、手をかざして見ると、沓打の茶屋から琵琶池の方へつゞく渺とした高原の一路を、先發した大學の一行が、點點と蟻の如き列を作して寸馬豆人の文字どほり彼方へ霞んで行くのが見られた。



繚亂血汐の花

岩菅の赤い山肌に、一朶の白雲が崩れたかと見ると、行くてに方る白根山脈をなぐッて、高原特有の冷やゝかな風が、一行の者の面を吹いて、繚爛たる高山植物の花が五彩の波を打つて行く。
『オ、ひどい霧だ』
濕ッぽい水粒に、睫毛をふさがれて、司馬大學が鞍の上から八方を見渡すと、うしろに鈍色の銀を湛へてゐた琵琶池も、ゆくての白根連峰の山の姿も、又、足元からつゞく高原の萬花も、すべて模糊たる乳色の霧一色につゝまれて、さ



ながら夢中を迷つて來たやうな心地がする。

『馬方！』

と、三浦龍爪が手綱を止めた。

『なんです？　旦那』

『濕ッぽくなつたな。――雨が來はしまいか？　雨が』

『なアに、澁峠の霧と來ちやあ名物ですよ。見て居てごらんなさい、今に、岩菅の横ッ腹に、カーッと強い陽が射して來ると、こゝらもすぐに夜が明けたやうになりますから』

『さうか……オ、馬子、煙管を落としたから取つてくれ』

『へ？……何處にです旦那』

と、彼の足元へ體を屈めた途端に、鞍の上からのぞき込んだ三浦龍爪、握り固めてゐた大刀の柄を廻して、抜き打ちに馬子の脳天を梨割に斬ッて下げた。

『うゝッ……』

と、霧にまじつて立つ、紅の殺風。

驚いたのは、馬子や駕の者で、

『わッ』

といふなり、弟傳八郎の馬の口輪を持つてゐた馬子も、司馬大學についてゐた馬力も、早腰をぬかさんばかり八方へ逃げ出しかける。

『傳八、逃がすな』

と、龍爪は、血刀を揮つて、うしろへ言つた。

この時もう、ヒラリと、鞍から飛び降りた傳八郎は、逃げ出す馬子を七八間追つて、うしろから槍を取つて突き仆して居たし、また、司馬大學も自分の馬子を、たゞ一刀に斬ッて捨てた。

そして、たゞ一人、蜥蜴鞘の段之進だけが、逃げ足の早かつた二人の駕昇きを追ひかけて、果てなき高原を何處までも追ッかけて行つたが、やがて、乳色の模糊としたなかで、

『ひッ！……』といふ絶鳴が聞こえた。

一人は斃れた。

併し、あとの一人は、そこから深海のやうになつてゐる篠谷の斷崖へ、ズ、、、ッと吞まれたやうに辷り込んでしまつた。

『惜しいことをした』

段之進は殘り惜しげに舌打ちをもらしたが、その時、霧を隔てた向ふの方で、後の道連れが、自分の名を呼ぶやうに思はれたので、血刀をさげたまゝ飛んで歸つた。

戻つてみると、大學と三浦兄弟は、典六に山駕の繩を切らせて、そこへ、半死のお妻を引きずり出して居るところだつた。

――お妻の軀は反抗ひする力もなく、咲き競つてゐる繚亂のなかへ抛り出されて、その根にまつはる霧のなかへ亂れた黑髮をガバと俯ッ伏せた。

『やい、お妻』

段之進は、その髮の根をグイとつかんで、

『いよいよおめえの死場へ來たぜ、今のうちに、何とか少し、江戸の女らしい啖呵を切ッて見たら何うだ。……オヤ、もう息が吐けねえのか？ 折角、存分に斬りさいなんでやらうと思ふ所へ來て、張合のねえ意氣地なしめ、それッ、もう少し性氣をつけて腰を立てろ！』

土足を上げて蹴離した。

お妻の指の爪は、草の根をつかんだまゝだつた。

馬子の血を塗つた大學の刃が、彼女の頰のそばへスッと下がつて來たのも意識に感じてゐるか何うか？

『ちえツ、こいつアもう、半分以上くたばつて居ますぜ』

『ウム……昨夜から水もとほらず、この山駕に揺られて來ては、氣が遠くなるのも尤もだ。おう、龍爪兄弟』

『はつ』

『死骸の捨て場は？』

『この先の篠の底無し谷――』

『往來の稀れな高原ではあるが、こゝは、澁と草津の一本道、滅多なものに死骸を拾はれては後日どんな面倒なことが起らぬとも限らぬからな』

『心得て居ます』

『では止刀を刺してやらう。典六、その髪の毛を手に卷いて押さへて居ろ！』

蠟よりも青白いお妻の顔が、彼の腕に、ガクリと齒を嚙んで仰向けにさせられた。――薄目を開いた彼女の瞳は、無情な天を恨むやうでもあり、大學の面を睨んで居るやうでもあつたが、もう視力もなく、丹の唇に微かなわなゝきを見るのみだつた。

刹那だつた。

――それを周圍の者は、大學の手にある氷刄が、お妻の乳の下を刺し貫した血汐かと思つたが――、事實は意外な逆顚を來して、彼女の黒髮を手に卷いてゐた山名典六が、突然、絶叫をあげて横ざまに打ッ仆れたのである。

『呀ッ――』

『おゝ』

こはそも何？ 何等の不意！

驚いた三浦兄弟、司馬大學、蜥蜴鞘の段之進、そのほか一味六名の浪人達。

足元から雷火に彈き飛ばされたやうに、一齊に驚いて、バッと四方へ跳び退ざりながら、鐺を刎ねてそこを見ると、漠々たる霞の膜を破つていつのまにか、忽然とそこに突つ立つた白衣道者笠のひとりの若人。

なんでそれに膽を潰さずに居られよう。

『やゝ、小枝ツ？』と、誰か間拔けに叫ぶ。

『オヽ、御代修羅陣屋の炎上以來、久しく汝らに附き纏りお具へて居た小枝角太郎だ！ したが、今日こそは、一味の悪人ばら、十方隱れ場所のないこの高原を幸ひに、ひとり餘さず斬りつくすから覺悟をせい』

言ひも果てず、かなぐり捨てた道者笠の飛ぶよと見るまに、氣を呑まれてゐた側面のひとりへ向つて、豹のごとき身を躍らせる。

『あ、あツ』

ドッとうごく劍と槍の穗。

拜み打ちを迯つた角太郎の一刄に、早くも鮮血の虹が縱横に立つた。

十方無碍の獅子亂刀

天馬のやうな不意の敵に、一度は氣崩れをして亂れ立つたが、衆に強味を持つ大學が血刀を指して、

『それツ、その瘦せ浪人に廣言を吐かすな』

と、叱咤する聲の下から、オヽと繰り出した鋭い一槍、

『小枝角太郎とやら、三浦龍爪の弟岡苗傳八郎が一命を貰つたッ』

と、七尺柄の穗を手元へ吸つて、あつと見るまに、角太郎の胸元へ突いて行つた。

『推參！』

カラリッと空へ鳴つた槍のケラ首、傳八郎はしまッたと叫び

ながら、素早く手元へ柄を返したが、時や遲し、水田郷の飛刄、輪を描いて肩先へのぞんで來た。

弟の危急と見て、三浦龍爪が、

『おのれ』と、横合から大刀を揮り込む。

飯綱神流の鋭い劍風、さすがに、片手扱ひにもならず、角太郎は身を開いて二三合の刄を合す。

その瞬隙こそ狙ふところと、蜥蜴鞘の段之進や、そのほかの浪人は一度にうしろへ廻つたが、角太郎は飛燕を見るやうに、又も一人の腰車を拂つて、サツと位置を交して居た。

そして殘る八人の敵を、すべて劍前にうけながら、眼點の心氣を、構へた刀の鋩子に凝とあつめる。

犇めく八人の白刄と槍は、光鋩を縺れ合はしてジリジリと角太郎の身一つに迫つた。彼の面は莊嚴なほど潮紅して、鬢には絞らるゝ汗が見える。

颯々たる高原の風が、絶えず、彼と此れとの分ちなく吹き撫でて行く。――霧は折々霽れ、折々天日を暗くして、劍の光にも目まぐるしい明暗がくり返された。



と――今將に必死となつて、双方わき目もふらぬ其の場所からや丶離れた彼方で、

『離してツ、離してツ。――幸安樣そこを離して下さいませ』

と、お吟の上逆ツた聲がして居た。

幸安は懸命に、彼女のうしろから抱き止めて居るのだつた。

『ばかを言ひなさい、あの中へ、女のお前などが加勢に入ツたとて何うなるもんか』

『いえ、たとへお助太刀の足しにならないまでも』

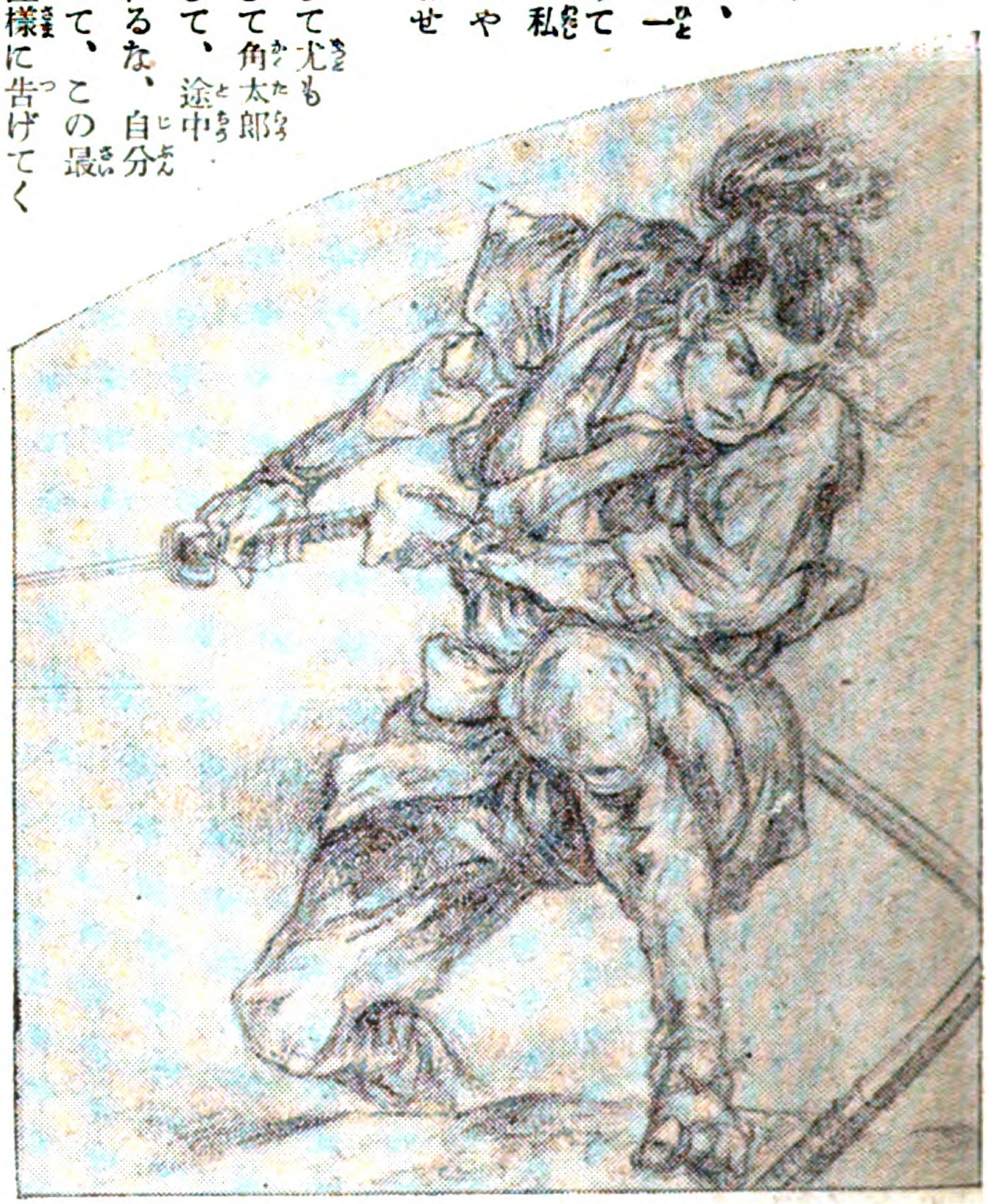
『そんな理窟はない、助太刀にならなければ足手纏ひ、角

太郎様にとつて却つて邪魔だ』

『でも、みす〳〵、父の研定を殺した大學や段之進を對手に、角太郎様があゝして一人で大勢の敵をうけて居ますのに、なんで私が、こゝで他人事のやうに眺めて居られませうか』

『そりや、人情として尤もだが、そこを心配して角太郎様も心配して、決して、途中で手出しをしてくれるな、自分が斃れたら骨を拾つて、この最期を飛車兵衛と光江様に告げてくれとまで仰言つて、覺悟をした上のことではないか。――それを、わしの様な老ぼれの醫者や女が出洒張つたとて何の多足になるものぢやない』

――自分の無力と危險を忘れて、一太刀でも、角太郎に助勢をしなければ濟まぬと跪くお吟を抱き抑へて、幸安先生の聲は、まるで叱りつけるやうだつた。



すると、目迅くその二人を見つけて、

『おゝ、うぬは藪醫者の幸安だな』

彼方の手を拔けて、疾風のやうに驅けて來た段之進が、いきなり、彼とお吟を目がけて斬りつけた。

『あつ』

と、二人は草の根に躓いて蹌けた。

――角太郎は矢庭に目前の敵を捨てゝ、また一散に段之進の後から追ひかけて來たが、今、幸安の上に彼の凶刄が風を切つて行つた刹那、角太郎の氷刄も、そのうしろから慕つて、段之進の背すぢへ颯と飛びかゝつた。

幸安の身に血煙りが立てば、當然、段之進の命も同時に無い瞬間だつた。――途端に、中に挾まつた段之進が、はツと身を沈めて、うしろに太刀を拂ひ返すと、角太郎の劍はあやふく受けとめられて、無我夢中らしい幸安先生、脱兎のごとく草のな

かを逃げ轉んだ。

『段之進！　オ、お前こそ、お父さんの仇、大學と一緒に、私の父の研定を殺した仇……』

お吟の喘ぎあへぎな叫び聲が、二人の白光のなかに聞こえた。彼女の手にある短い刄物が、相手のうしろへ迫つて行つた。

『生意氣なッ』

と、段之進が一拂ひに薙ぎつけたので、角太郎は思はず、

『お吟！　あぶないッ』

と絶叫して、それを救ふべく、彼女の身に跳びついて仰向けに突き仆した。

千種のなかへ、お吟の姿が仰向けに埋もれた。角太郎はもう段之進の殺刀を決して彼女に近づけさせない。烈々たる焔の劍が、見るまに、相手をしどろにさせて行く。

併し。

すでに對手は彼一人でなくなつてゐた。三浦兄弟と司馬大學、そのほかの者も、彼の右に有り左に有つて、入れ代り立ち代り、その寸隙を狙ッて寄る！

『おうツ、奸賊！』

身を飜へすや否、角太郎はさらに形相を改めて、司馬大學の姿を目がけて斬りつけた。

『それ、大學様に近づかすな』

と、三浦龍爪がその間に立ちふさがつたが、眞つ向に被つて行つた水田郷の白虹が、わッといふ呻きを呼んだかと思ふと、それを阻めた三浦龍爪が、飯綱神流の劍客と誇稱する口ほどもなく、肩から肋骨に斬りさげられて、朱に染んだ五體を大學の足元へドンと仆した。

と見て、勃然と眉を昂げた傳八郎は、

『やつ、おのれよくも兄を手に掛けたなッ』

手槍を取り直して驀しぐらに突いてかゝる

しかも、その槍さへ瞬くうちに千段から斬り落とされ、一味の浪人も刻々と傷を負つて、十方無碍の獅子亂刀、血を塗れば塗るほど、風を斷てば斷つほど、角太郎の手は冴えてゆく。

水田郷を研いだお吟の父の定八の怨魂が、今もその刀の刄にひそんで呪ひを呼ぶか、それにあたつて沓打の高原に空骸をならべたものすでに六人。

陰風は草原の根を這つて、霧か血か雲か、細かい水粒の流れが漠として劍光をつゝむ。

『段之進ッ』

大學は突然一方へ向つて走りながら、

『無緣小屋へ、無緣小屋へ』

と叫びつゞけて行つた。

無緣小屋の呪縛

『卑怯なやつ、返せッ』

角太郎は、大學が又奥の手を出して逃げる算段と見たので、



血眼になつて、うしろから聲を浴びせた。霧に隱れ霧に見えして、先に宙を飛んでゆく三人は、大學と段之進と、そして龍爪の弟傳八郎の姿である。

もう一息だ。もう一息の精根をつくせば、司馬大學を刺止めることができるのだ。彼の一命に水田郷の天誅を與へた時には、それと同時に、自分も刺し交へて斃れてもいゝ。

彼は元より、今日この高原を、生きてふたゝび降るものとは初めから思つて居ない。併し、その斬り死には、必ず、大學を死出に伴つてゆかなければ、死すとも瞑せられない、生きてはなほ世に永らへる望みがない、と思ひ極めてゐた。

さう思ふ今の一念。幸安やお吟の身を顧みてゐる遑もなかつた。

『返せツ、大學待てツ』

血を絞るやうな聲をあげて追ひかけて行く。

そのうちに、道は草原を切れて一面な篠と栗林の登坂にかゝつて來た。——火のや

うな息を喘ぎながら、ふと見ると、殿之進に側八郎の姿は、遙りの林に姿を消してしまつた。

『あつ！』

坂の途中まで追ひかけて來たところで、角太郎は愕然と踉けかゝつた。

『何うした』

と、頭の上でゲラ〳〵と嘲笑ふ聲がする。振り仰いで見ると、そこに、岸々たる層をなしてゐる岩がある。その岩の上から、司馬大學の憎い面構へが罵るのであつた。

『おい、角太郎、腰でも抜けたのか』

から言ひながら大學は、その傍らに見える無縁小屋の中から、老仙のやうに髪も衣服も汚れぬいた一人の人間の襟がみを摑んで、ズル〳〵と小屋の外へ引き摺り出した。

この草津峠の無縁小屋は、今は裏街道となつて立ち寄る者もないが、昔は澁の湯から草津の湯里へ辿る途中で、行き暮れた業病の貧しいものが、行路の人の恵みをうけて餘命をつなぐ非人小屋で、今、大學が襟がみを摑んで出した人間も、恰度、さういふ哀れな者のやうに見えた。

が――その朽木に組まれた土穴の小屋を見た途端に、はツと、角太郎は或る豫感に胸をひしがれた。

『おい角太郎、そんな所にまごついてゐないで、早く此處へ登つて來て大學を討つたら何うだ……その代りには、汝がここまで來るうちに、此の片輪者の一命は大學が冥途の道づれとして連れて行くから左樣心得ろ』

彼は、小屋のうちから引摺り出した病人を膝の下に組み敷いて、その胸元に、刀の切ツ先を逆しまにつきつけてゐた。

『おうツ……大殿ツ、大内記樣ツ――』

『さうだ、これは貴樣が主人と敬ひ慕ふ大内記だ。多寶塔に居たころとは、一層人間ばなれがして、今では生きてゐると言ふも名ばかりの片輪者、恰度それの置き場所にふさはしい、この無縁小屋にあれ以來抛り込んでおいたが、のぞみとあれば、今でも、この大學が冥府へ暇をとらしてやるぞ』

『おのれ、勿體なくも、世が世なれば御代崎一萬石の主、しかも、汝も先頃までは、主と仰いだ大殿を膝下に敷いて、その雜言は何ごとだ』

『わはゝゝゝ。青二歳らしい言ひ草、だれがこんな片輪者を、心から主人と仰ぐやつがあるか。』

『おゝ、ならば、大内記樣を此の方に渡して、汝も、駒木家の陣代らしく、いさぎよくこの角太郎と雌雄を決しろ』

『囈言を申すな、貴樣は元來、去水流の劍法にかけては、少しばかり味をやるが、まだ〳〵智恵にかけてはこの大學の眼から見て黄口の小兒にも等しい。――なぜと言へば、汝は此方を追ひつめて來た氣で居るのかも知れぬが、もう、立派に、この大學の策中に陷ちてゐるではないか。――無念と思ふものなら、そこから一寸でも、動いて見ろ』

と、再び、駒木大内記の胸元に、手の刃を向け直した

あゝ、おそるべき呪縛の罠。

彼を斬らんとすれば、自分の刄が彼に屆く前に、大内記の一命は惡魔の手に奪ひ取られる。——司馬大學は初めから、かういふ卑劣な策に墜とすべく、自分をこゝまで釣り込んだのだ。

——と、角太郎も氣が着いたが、今はもう、醜い一敗地に立つて居る自分自身を、何うすることも出來なかつた。

『——參つたらう、角太郎。いゝ加減に我を折つて、そこで立ち腹を切つてしまへ。』

後ろにはまた段之進の聲がする。

小屋番をしてゐた一味の浪人も、そこに五六人加はつて、三浦傳八郎と共に、狹い、坂の道を立ちふさいで居た。

進退極まつた角太郎の樣子につけ込んで、大學はまた頭の上から勝ち誇つたやうな傲岸さで、

『どうするッ？　角太郎』

と、呶鳴りつけた。

『——貴樣はふだんから大層忠義振つた口をきくが、まこと、心から大内記を思ふなら、よもや、この片輪を見殺しにはできまい。……さ、この刄で大内記を一突きに刺すのが望みか、又は、大内記に代つて、貴樣がそこで立ち腹を切つてみせるか、いづれでも、望む方の返辭をしろ！』（つゞく）

今一息の處で、恐しい罠に陷つた小枝角太郎の無念や如何に！　雨か？　風か？　大惡魔司馬大學の奸智は今や彼に一歩の身動きさへ許さぬ……以下事件は如何に奇しき展開を見るべきか?!　次回の待遠しきことよ!!

探偵小說 切手の奇遇

此木久山
松野一夫畫

美人

社用で大阪へ出張を命ぜられた青木は、午後七時東京驛發の神戸行一二等急行へ乘込んだ。

花見時で乘客が多く、寢臺をとることが出來なかつたので二等車の隅に窮屈な一夜を明かさねばならぬことを覺悟した。

大阪へ着くのは翌朝八時。

青木がぎごちない眠りから覺めかけて、半ば夢のやうに聞いた騷音は米原らしい。そろ〳〵乘客が起出して、着物を着替へたり、顏を洗ひに行つたり、車内がざわつき出したので不足の眠りがほんたうに覺めてしまつた。

自分も顏を洗はうと洗面所へ行つて見ると、若い女が洗面最中なので、青木は引返して下車の準備をしてしまふと京都へ着いた。客は大半下車して、新らしい客はほとんどない。周圍が急に空いたので青木はやつとのびのびした氣分になつた。

それから洗面所へ行つたが、まだ先刻と同じ女がゐる。こんどは髮に櫛を入れてゐたが、引返さうとする青木に、

『どうもお待たせいたしました』

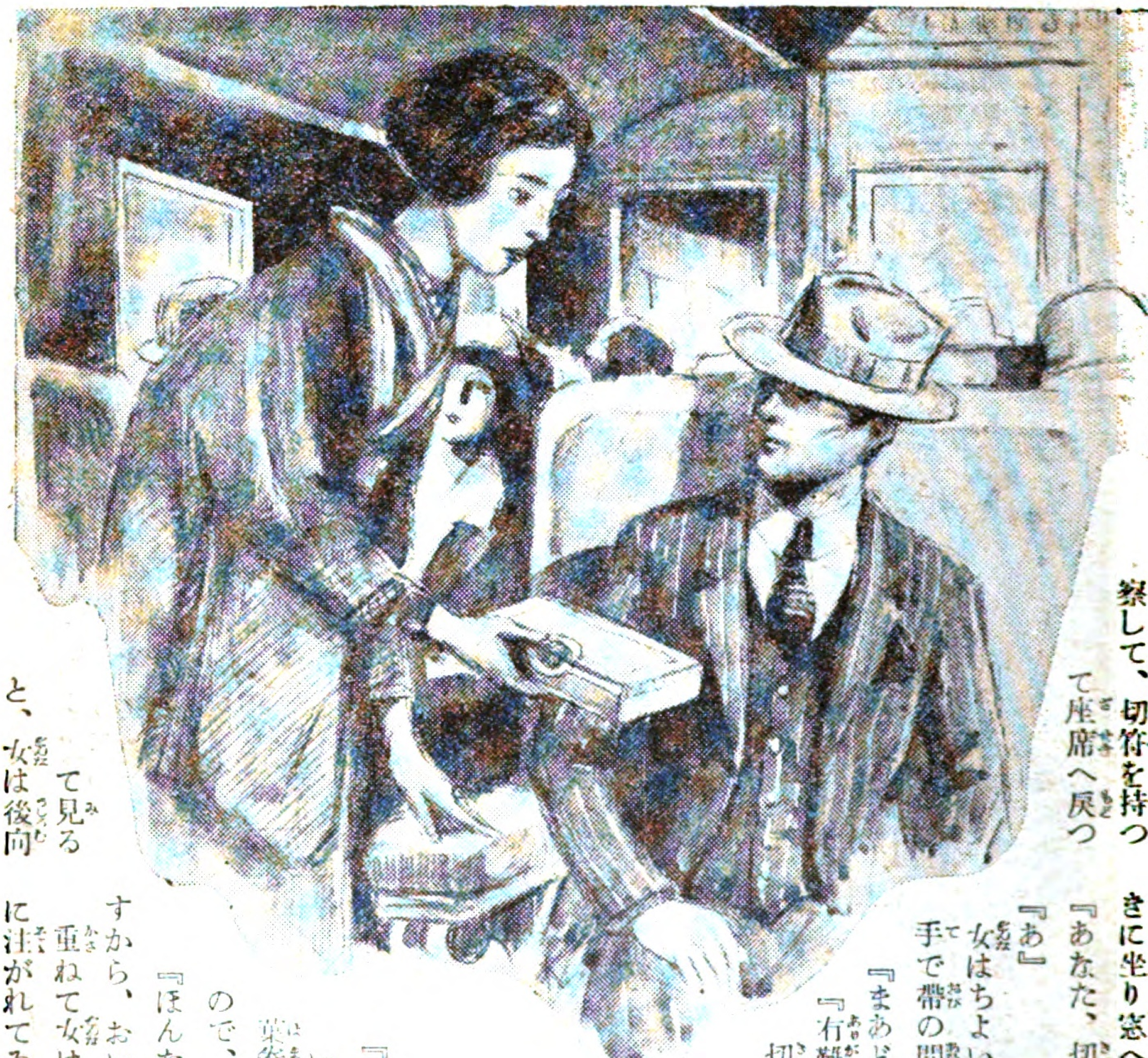
といつてすぐに出て來た。青木も輕く會釋をして代つてはいつたが、もう含嗽の水も僅かしか出て來ない。そこ〳〵顏を洗つて出ようとして、ふと棚の隅に切符一枚置いてあるのに氣がついた。手に取つて見ると、切符は大阪行だが、番號が[illegible]2999とある。

『おれぢやない』と、直ぐつぶやいた。

青木には妙な癖があつて、汽車へなど乘るときは、きつと切符の番號を調べて見る。それは青木に古切手蒐集の道樂があるので、その穿鑿癖から來た習慣かも知れない。ところでは(越)三越發賣のマーク、今の女のだなと推



察して、切符を持つて座席へ戻つて見ると、女は後向きに坐り窓へ化粧鏡を立て丶、まだ髪をいぢつてゐた。



『あなた、切符をお忘れではありませんか』

『あ』

女はちよいと慌てぎみで、油染みた右手を宙にうかし、左の手で帯の間を探つて取り出したのは、急行券ばかり、

『まあどうも――』と、心もち顔を染めて、

『有難うございました。わたしのです』

切符をうけとると、女は向き直つて頭をさげた。

青木は席へ戻つて、素晴らしい美人だなと思つた。十九か、二十か、令嬢にしては意氣すぎる。それ者にしてはあまりに上品だ。などと考へながらぼんやり窓外を眺めてゐると、

『あの――』

美しい聲とよい香りがうしろに迫つたので、振り向くと、

『貰ひ物で失禮でございますが、召しあがつてくださいまし』

葉卷莨の箱らしいのを手にして彼の美人が立つてゐるので、青木はどぎまぎして當惑した。

『ほんたうに失禮でございますが、わたしには不用の品ですから、おいやでありませんでしたら――』

重ねて女は請ふやうに侑める。青木は車内の眼が悉く自分に注がれてゐるやうに感じられて氣まりが悪い。

『これはどうも――』
青木は曖昧な返事をしてそつと車内を見廻すと、反對側から洋服男が、氣味の惡い視線を凝と自分に投げてゐる。その憎々しい眼が敵意と冷笑をあらはしてゐると思ふと、青木は反感を起してわざと快活に、
『では折角ですから、遠慮なく頂戴いたしませう』
箱をうけ取らうとしたとたん、汽車が大きくカーヴしたので女はよろめいた。
『お掛けなさい』
言はれて女は素直に青木の側へ腰をおろした。
間近に見る女の顔は一層麗はしいものであつた。ふくよかな肉附き、房々とした耳隱髪、美しい贅澤な、しかし上品な好みの衣服に、胸にも指にもキラ〱する飾をつけてゐないのが奥床しい。たゞ一つ青木が變に思つたのは、滑かな項から頸をはつて咽喉へ消える一條の細い白金の鎖であつた。それがばかに仇つぽく一種の鐵火味を漂はして、令孃好みとはうけとれない。懸守りとしてはあまりに時代的である。何んであらう。
『大阪へは何時に着きませう』
『八時です――もうすぐ着きます』
青木が出して見た時計は、八時二分前。
『いろ〱有難うございました』
女はしとやかな會釋を殘して、自分の席へ歸つた



奇遇

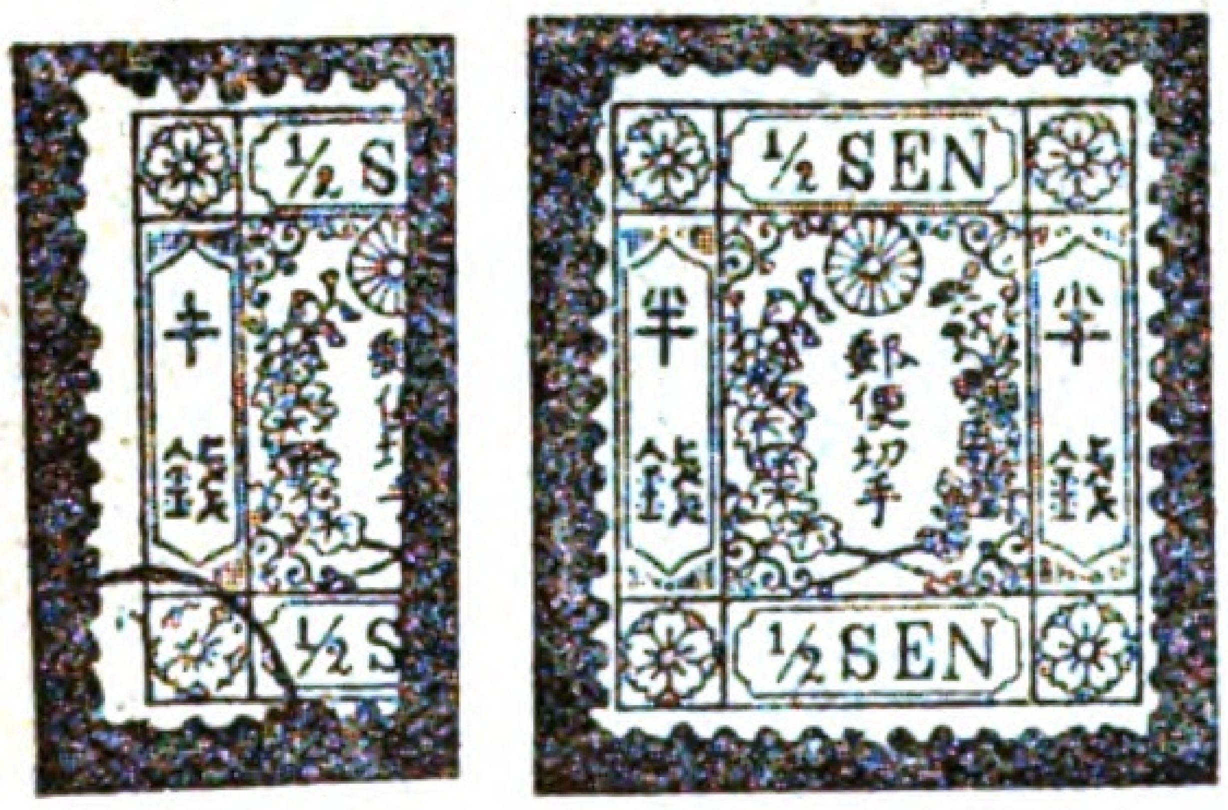
洋杖と鞄とを兩手にした青木が、デツキへ出ようとした刹那、右手から殆んど青木に突き當らんばかりにし

て、あわて〻後部の車室へ消えた男がある。はつと身を避けた瞬間、青木はそれが自分の斜向にゐた眼付の憎憎しい男であつたと氣付いた。

混合ふ改札口を通つて晴れた麗かな日向へ出ると、自分の胸のあたりが光るやうに感じて氣が付くと、鎖がダラリと垂れてゐる。本能的に短衣のかくしへ手をやると時計がない。

『あいつだ』

思はず叫んだ。憎惡と冷笑を含んだ黒い眼の持主、下車の間際に突當らんとした男。あいつに掏られたに違ひないと青木は覺つた。



伯父から漫遊土産に贈られた佛蘭西製白金の時計、青木には可なり愛着の籠つた品であるから忌々しくてたまらなかつた。

それから青木は數日大阪に逗留して、社用を濟して歸京したが、こんどの出張にはちよつと忘れ難い明暗二つの追憶が殘された。一つは葉卷を贈れた美しい女、一つは憎々しい眼を持つた掏兒。



倂しそれも當座のこと。うれしかつたことも、忌々しかつたことも忘るゝともなく忘れてしまつた一ケ月後。青木は社の歸りに例の古切手道樂から、何か掘出しものはなからうかと、三崎町の前田商店——古切手を商賣にしてゐる家——へはいつた。

扉を押して店へはいると帳場台を挾んで、主人と相對して腰をかけてゐた女が、ふりかへつてこちらを見た。

『あッ』

思はず青木は聲を擧げようとした。

『まあ』

その女は輕いおどろきの聲をあげて、美しい笑顔を見せた。身裝はすつかり變つてゐて、耳隱しが銀杏返しと變り、令孃風の華美な衣服が黒つぽい地味な縞物と變つてゐたが、美しい顔と、白い襟元に光る細い白金の鎖とは、一月前の汽車の中で見たのと變らなかつた。

『いつぞやは、有難うございました』

『いや私こそ、かへつて有難うございました』

青木が女と並んで腰をおろすと、女は主人に『それでようござんす』と、低い聲で言つた。

すると主人は數枚の紙幣を出して女に渡した。

女は急に立ちあがつて、

『あの、急ぎますから、失禮いたします』

青木に挨拶して周章氣味にそは〳〵出て行つた。

見附けた珠をまた失くしたやうな氣持で、青木はぼんやり見送つたが、ふと帳場台に目を落すと、そこに一枚の古切手が置かれてある。古切手へ目がつくと青木の蒐集癖が、美人の後姿を押しのけて猛然と頭をもたげた。

『や、キ半錢だね――おゝ綺紙だ』

『とんだとこを見つかりましたね』

主人は苦笑した。美人に渡した金がこの切手の代價であつたからである。

『僕がもらはう――いくらでいゝね』

青木はその古切手を取上げて手から放さうともしない。そこで主人も仕方なく僅かの口錢で、キ半錢を青木に賣つた。

キ半錢切手といふのは、何んな切手かといふと、陰暦明治五年九月朔日發行の郵便切手で、美濃紙に似た強靱な茶色の日本紙を用ゐてゐた原始的切手である。印面左側の價格「半錢」の半の字の兩點が缺けて、圖に示すやうに片假名のキの字形をあらはしてゐるのでキ半錢と稱され、日本切手中の最も著しい變種といはれる珍品である。

何うしてこんな切手が存在してゐるかといふのに、當時の切手は和田倉門外の舊評定所跡に設けた太政官紙幣局の印書局で製造したもので、現今のやうに電胎版式でなく、當時彫刻の名人と稱された松田敦朝に命じ銅版に手彫をさせたものである。ところが何うした拍子か原版の一面中――一面は切手四十枚分――に一枚分だけ、半字の兩點が缺けてゐた。發行後この誤刻に氣付いた政府はすぐ原版を修正したから、キ半錢切手の現存數は極めて少ない。さうしてこの切手には綺紙のものと、無地紙のものと二種あり、綺紙のものは一九二七年ギボンス型錄の評價によると十五磅（邦貨百五十圓）とあり、無地紙のものは少し安いとあるが、それだけの金を出したとて、おいそれと買求めることの出來る品でない。それを數枚の紙幣――二十餘圓で手に入れることの出來た青木は鬼の首でも取つたやうに喜んで前田商店を去ると、家へ歸らずその足で、有樂町のミカド郵券倶樂部へ急いだ。

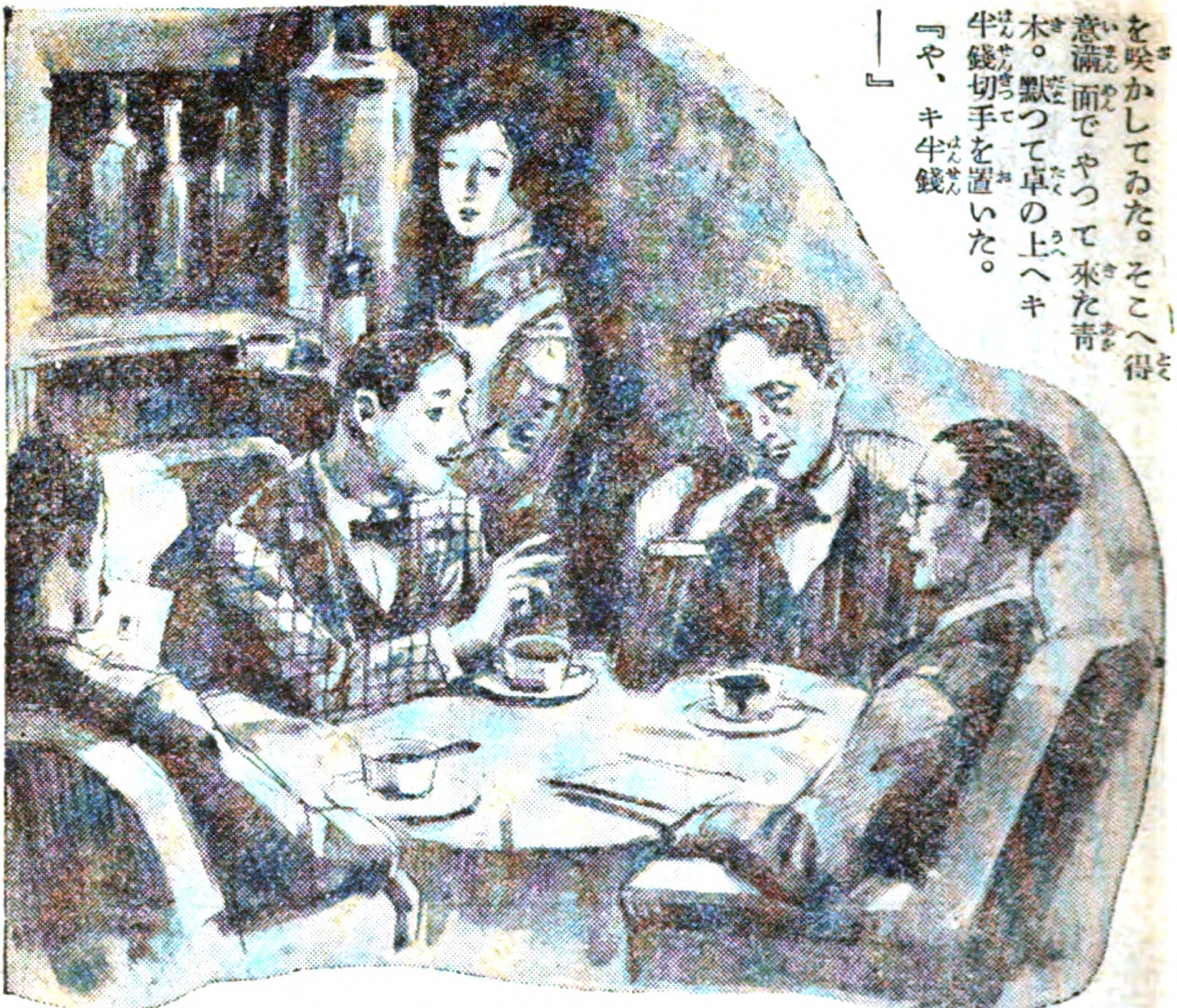
裏書

ミカド郵券倶樂部といふのは、郵便切手愛好者の會員で成り立ち、機關雜誌を出したり、會員が會合して切手蒐集に關した話しをしたりする團體である。

倶樂部にはその晩も五六人の同好者が寄り合つて、雜談に花

を咲かしてゐた。そこへ得意滿面でやつて來た青木。默つて卓の上へキ半錢切手を置いた。

『や、キ半錢――』



『ほう、キ半錢ですか』

『無地――それとも縞紙かね』

『未使用ですか、へえ使用濟』

『どこで手に入れました。輸入ですか』

皆一度に青木に驚異の質問を發しながら、奪ひ合ふやうに古切手が手から手へ渡された。

『前田で買つたんです』

『いくらで――』

『二十圓あまりで』

『二十圓――ほんたうですか』

人々は青木の言葉を疑はずにはゐられない。こゝにゐるほどの誰もが、切手商としての前田商店がキ半錢の時價を知らぬと思ふものはない。

『僞造ぢやないでせう』

『冗談ぢやない、ほん物ですよ。併し、前田がそれだけの代價でわたしに賣つたのは、前田へこの切手を賣つたものが、わたしの知つた人であつたからです。つまり前田は時價でない値で素人から買ひ取つたとあつては、店の信用にかゝりますからね』

『なるほど――あなたの知人は、素人で何うしてこういふ切手を持つてゐたんです』

『それはわたしにも判りません――その知人といふのが不思議な知合ひで、さうして不思議な再會の奇遇が、

この切手をわたしの手に入れさせたのです。その奇遇の因縁をお話しいたしませうか』

『え、ぜひ聞かせてください』

そこで人々の好奇な面持ちを眺めながら、青木は得意になつて、大阪出張の汽車中で絶世の美人と知り合ひになつたこと、金時計を掏られたことまで細かに話し、それから今日前田商店でその女に図らず出つくはした奇遇を、さも深い因縁であるかのごとく吹聴した。

『青木さん、御馳走さま』

『二度あることは三度といふぜ、青木君三度目の奇遇外つこなし。前祝ひをやりたまへ』

二三の人が青木を揶揄ひ出したなかに、黙つてキ半銭切手を手にし、首をひねつてゐた伊東といふ會社員が、

『どうも不思議だ。わたしはこの切手に見覚えがある――確かに、この消印の工合が、全くこれに違ひありません』と言ひ出したので、皆ちよつとおどかされた。

『さあこんどは伊東君とキ半銭の奇遇だ』

『奇遇の鉢合はせは、いよ／＼奇遇だ、さあ伊東さん、お話しなさい』

『伊東さん、どこでこの切手を御覧になつたのです』

直接關係のある青木は眞面目に訊いた。

『大阪です。心斎橋筋の玉屋時計店です。ええと、わたしが東京へ轉任する間際でしたから、昨年の七月でした。出發の二三日前、心斎橋筋へ買物に行つた折、通りかゝりに玉屋の陳列窓を覗くと、ふと目についたのがこの切手です。それは二つ折印籠形の、白金の時計さげの磁石を拔いてこの切手が嵌めこんであつたのです』

『めづらしいな、記念切手などは折々陳列窓で見かけるが――』

『わたしも不思議に思つたのです。我々蒐集家さへ手に入れ難いものを、無造作に陳列窓へ曝らしてあるのですからね。値札を見ると、¥450――とあります。残念ながら手が出せません、そのまゝ東京へ來てしまひましたが、その當座はそのキ半銭が氣になつて、あゝして陳列窓へ曝して置いては、色が褪せてしまふだらうとか、あの値段は時計さげだけの値段か、それとも切手を入れての値段だつたらうかなどと、くだらない心配をしてゐたもんです。それがいつともなく忘れてしまつてゐたところ、今夜偶然この切手を見て思ひ出しました。確かに消印の工合に見覚えがあるのです』

『全く伊東君の見た切手が、これに違ひないとすると、青木君と美人と、伊東君とキ半銭、實に因縁のまつはつた奇遇だ』

『伊東さん、あなたの御覧になつたのは、昨年の七月ですか』

小橋といふ會員がかう訊きました。

『七月の初めにこちらへ轉任したので、玉屋で見たのは六月の末でした』

『青木君、君が美人にかへしてやつた切符は幾日つといつ

たね』

『さうだ』

小橋は青木と親しい間柄、小橋の質問が熱心なので青木が

『君も何か奇遇談をかつぎ出すつもりか』と揶揄ふと、小橋はにや／＼しながら一同を見廻し、

『實は諸君、僕もこのキ半錢切手について、一つの奇遇談を持つてゐるのですが、僕のは過去の奇遇でなく、未來の奇遇ですから今晩は申上げられません』

『未來の奇遇とは變ですね』

『變でも、變でなくても未來の奇遇ですから、今は話しが出來ません。たゞこれだけは言ひ得ると思ひます。さきほど誰かが青木君に向つて、二度あることは三度あるといふ諺を仰有いました。その諺に小橋谷之助が裏書きをいたします。僕は今急に用事を思ひ出しましたので、これで失禮をいたします』



立上つて眞面目くさつた挨拶をすると、小橋はさつさと歸つてしまつたので、皆その頓狂な振舞ひに呆れたが、彼をよく知つてゐる青木は、

『なあに、思はせぶりをして、わたしたちを擔いだつもりなのです』と氣にも止めなかつた。

三度

それから五六日過ぎると、青木を勤め先きの會社へ訪ねた小橋は

『青木君、見せるものがあるから、ちよつと一緒に來たまへ』

腰もおろさずに急き立てる。

『なんだ』

『なんでもいゝ、一緒に來れば判る』

強て促すので青木は仕方なしに從いて出かけた。

小橋は元新聞記者で今は私立探偵の事務所を開いてゐるが、親の遺產で生活の出來る身分だから、業務などは看板だけで常に暢氣に遊んで暮らす男と青木は思つてゐた。だから今日もカフエーへでも連れこんで、どうだ掘り出しものだらうなどと、綺麗なエプロンの美人でも見せることだらうと思つたところ、意外にも警視廳の階段を上つて行つた。さうして呆れる青木に說明を與へず、とある室へはいつて青木を×

×課長といふいかめしい人に紹介した。

課長は顏付に似合はぬ優しい態度で

『青木さんですか、詳細は小橋君から伺つてをります――あなたはこの者を御存じですね』側を見かへると、課長の右手に腰をおろして俯向いてゐる男女を見て青木はおどろいた。

男は、青木が大阪へ出張したとき梅田驛で突當らうとした鋭い黒い目を持つた男。女は汽車の中で自分に葉卷をくれ、さうしてその後前田商店で再會した美人である。課長は微笑を見せて青木の様子をながめてゐたが、

『あなたが汽車のなかで、大阪行の切符を見つけて返してやつたのは、この者でせうな』と女を指して訊いた。

『はい、さうです』

『御苦勞でした。もうお歸りくだすつてようございます――小橋君、有難う』

聞くと小橋は青木を連れてそこを出た。

『おい小橋君、僕にはちつとも理由が判らん。あの女と男は何者だ。そしてまた何んで取調べをうけてゐるのだ』

青木が訊きにかゝるのを小橋は押へて、

『後で詳しく理由を話すから、今夜まで辛抱しろ。僕は今夜七時に倶樂部へ行くから、君も行つてゐたまへ――ぢやあ失敬』

警視廳を出ると小橋はかう言ひ捨て、さつさと行つて了つた。

その夜倶樂部へ集つてゐるのは、やつぱり前夜と同じやうな顏ぶれで、雜談に耽つてゐるところへ、前後して姿を見せたのは小橋と青木とであつた。

『やあ小橋さん、未來の奇遇は何うなりました』

笑ひかけるのを小橋は手で押へて、

『今晩は前夜裏書したわたしの義務を果しに來ました。それは二度あることは三度あるといふ諺が事實となり、青木君が前夜われ〳〵を羨望せしめた奇遇の美人と、三度目の奇遇を重ねたことを報告することであります』

『ほんたうですか青木さん。三度の奇遇とはよく〳〵縁が深いと見えますね』

側の人は面白がつて青木にかういふと、青木は苦笑ひをして、

『惡縁です――併し小橋君は奇遇の理由をわたしにもまだ話してくれないのです――さあ小橋君話して聞かせてくれ』

小橋は落着いて、しかし得意の態度でポケツトから新聞の切抜きを取り出し、

『これは大阪朝日新聞の昨年七月一日の夕刊の切拔です。まづこれを一讀いたします』といつて讀み出した。

結論

今朝四時頃市内南區心齋橋筋玉屋時計店の陳列窓が何者かに破壊され夥しき貴金屬類を窃取せられてゐることを折柄密行中の山田巡査が發見大騒ぎとなり所轄船場警察署より係官出張取調べをなすと共に時を移さず非常線を張りたるも犯人を逮捕するに至らず目下嚴探中である。被害總額は五萬圓に達する見込であるといふ。

『と、あります。さてわたしは先夜青木君がこゝへキ半錢の切手を持つて來て、汽車の中で絶世の美人から藥卷莨をお禮に貰つたことと、御自慢の時計を掏られたことゝ、その後美人と再會したことゝを聞きました。それからまた伊東君がそのキ半錢切手を貼て玉屋時計店の陳列窓で見たといふお話しを承はりました。その時わたしの記憶にあつた昨年夏大阪の玉屋時計店の盗難事件が心にうかびました。占めたぞ――青木君の奇遇の美人が即ち玉屋の賊だ。かう斷案を下したわたしは即座に青木君と美人の三度目の奇遇を豫言し、二度あることは三度あるといふ諺に裏書したわけであります。それからわたしは歸宅して切拔を調べると、すぐこの記事が見付かりました。これで伊東君が玉屋の陳列窓でキ半錢を見た數日後の盗難と判つたので、いよ／＼キ半錢を持つてゐた美人を犯人若くは連累の一人と信じ、直ちにわたしは神戸の鐵道局へ出かけ、四〇三號の大阪行切符を借りて來て指紋を取りました。それを警視廳の臺帳へ照合はせると、何うです諸君、青木君の所謂絶世の美人は、「令孃お絹」と稱せらるゝ前科數犯の曲者であることが判りました。そこで前田商店に就いてその住所を調べたが、無論出たらめを言つてゐたので判らず、警視廳へ密告しその手で令孃お絹一味の徒を、片つぱしから擧げた末に、とう／＼情夫「黑眼の銀」とある處に潜伏してゐたのを逮捕してしまひました。この「黑眼の銀」が青木君の時計を掏つたやつであります』

演説口調でこゝまで説明して來た小橋は、何うですといひたげな得意の笑みを持つて人々を見まはした。

『うむ――さうだつたか』青木は唸つた。

『さすがは小橋君だ、偉い手柄をやつたね』

『小橋さん、それからあなたの豫言した青木さんの奇遇といふのは――』

『それは警視廳で××課長が、今日お絹と銀とを調べてゐるところへ、僕が青木君を連れて行つて逢はせました。即ち三度目の奇遇です』

『なるほど、確かに三度になりましたね』

皆小橋の豫言的中を承認して青木を見かへると、『全く三度目が、奇遇中の最も意外な奇遇でした』かう言つて青木は苦笑した。

因に令孃お絹檢擧の結果は、たゞ玉屋の盗難、青木が時計掏られたことが判つたばかりでなく、お絹は同類十數人と共謀してやつてゐた、數百萬圓に達する阿片密輸事件が曝露されてしまつた。

――終――



○　河井醉茗

龍神丸、住吉丸、
わが所有船の名を染めし
幟を立てゝ、神渡る
神輿迎への漁師達、
幟うちふり勇ましく
賑ふは海を守る神
今年の秋の大漁を。

○　石榑千亦

八百萬神つどひ夜すがらをゑらぎあそべる祭の夜かな
われらがため新機たてゝ祭待ちし

母の心を今にしておもふ

○　三木露風

秋雨の降りかゝる
宵の祭の灯よ。
神樂の音聞ゆれど、
人々は散り行きたり。
叢に鳴く
蟲の音滋し。
蕭條たる雨。

○　岡本綺堂

花笠の藝者もまじる祭かな。
店先で將棋さしけり祭の日。

○　長田幹彦

夜更けてから遠音に聞えるあの屋臺囃し、……粹な藝者の手古舞ひ姿、……
きほひな若い衆に、あの花車、……
蠟燭の灯影ゆらぐお假屋、……

それももう再び見ることの出來ぬ少年時代の思ひ出になつてしまひました。

○　川上三太郎

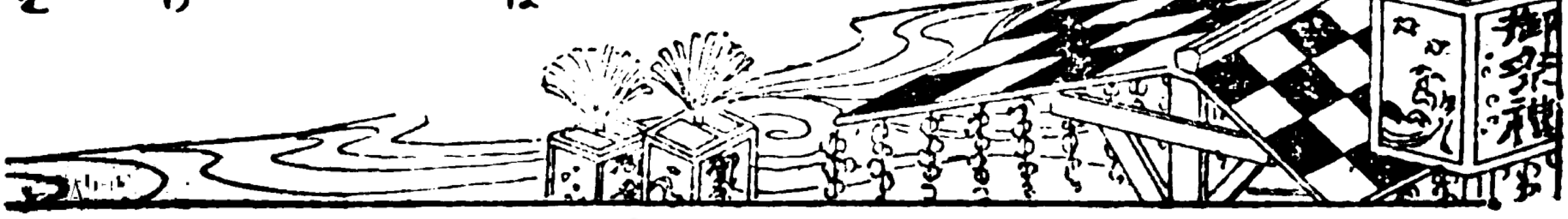
銀行で途切れて祭灯がつづき。
樽神輿暫く迷ひ子泣き忘れ。
お祭が過ぎると元の大工なり。

○　竹内薫兵

軒毎の祭提灯に灯の入りてほのぼのとあかしこの問屋町。

○　室生犀星

ビイドロに肉桂水を入れ、
そのビイドロの小さき瓶に口つけ
われは吸ふなり、
ビイドロに透ける虹のごとき色を



われは吸ふなり、
肉桂水を吸ふなり、
祭の朝のをさなごころに、
肉桂水をわれは吸ふなり。
われの吸へるものは祭の朝の肉桂水と虹とビイドロなり、

○ 近藤飴ン坊

擦りむいた傷を泣かない祭の子。
お神酒所に娘自慢の花を見せ

○ 上司小剣

大衆的な賑かい『まつり』よりも、神秘的な淑しい『まつり』を好みます。『わッしよわッしよ』のおみこしは嫌ひです。霊代を奉安した御羽車（みこしとほゞ同じ形、車にあらず）を、駕輿丁が十二人で舁いで、深夜を静々と渡御まします。……さういふ『まつり』が好きです。家が神主の故でせう。

○ 添田唖蝉坊

お神輿を擔がぬ人がおみこしを据ゑておみきをきこす御神酒所。

○ 老鼠堂機一

餅も搗き酒も造りて秋祭。
旗風や皇霊祭の秋日和。

○ 弘田知秋

外見の喧嘩に止手もなくて、阿多福ひよつとこ馬鹿囃子、
踊も呑みほす親なら子なら、擔ぐ神輿も菰被。

○ 巌谷小波

田植笠けふの吉き日の吉き雨に。

○ 大木篤夫

青春はげに華麗なる蛾の羽搏一瞬の祭昨日 わが祭は影か落葉と
散りゆけり、
さて、古風なる雅やかなる、また
聖なる笙と太鼓と舞の祭も……
今は見よ、末人の末期の亂舞、
黄金と劍と肉の祭に獸の如く地を
統べたり。
あゝ廢れゆくものゝ美しさよ、
われも、世も、亡びの門の歎きに
あり。

○ 長谷川時雨

灯ともさぬ
朝ぢやうちんは我命、
消しやうにも
はかなかりしか。

無言の愛

前文部省普通學務局長　關屋龍吉

（この記事は約八分間位で讀切れます。）



◇可愛い平和の使者のお伴して

　アメリカの子供から我が國の子供へ可愛い人形を贈られたのに對して、我が全國の子供たちが、心からなる返禮として、五十八個（各府縣及び代表人形）のさも可愛らしい人形を、海の彼方のお友達に贈ることになつたのは、昨年の秋のことだつた。

　私が、この華やかしい平和の使者のお伴をして、アメリカへの旅に上つたのは、その十一月の十日。三週間の船路も恙なく桑港の埠頭に着いたのは、廿六日の朝まだきであつた。

　爾來滯米五十日、我が平和の使者可愛い人形が、彼の國の人々から、如何に熱誠なる歡迎を受けたか、招待の案内三百三十口、到底その全部の好意を受け切れなかつた程の熱狂的歡待であつたといふ一事で、略ぼ想像が願へようかと思ふ。それは、この事が、どんなに彼の人々に強い感激を與へたかを裏書するものでなくてはならぬ。

◇我子を迎へる樣な在米邦人

　その中でも私の殊に愉快に感じたのは、在米の日本人――日本の延長とも云ふべき人達、それは寧ろ此の人形の贈手ともいふべき人達でもあり、人形なぞは左程珍らしくも思はぬだらうと思つた私の豫想を裏切つて、丁度、我子が遙々遠き海路を渡つて訪ねて來たかの如く、異常な歡喜を以て迎へたことであつた。

　實は始めカリホルニヤは素通りするつもりで居つた所、彼の地在留邦人が、

『どうしても寄つて呉れ、なつかしいお人形を一目でも見たい』

と云ふ切なる希望を申出られたので、都合して一寸立寄ることにしたのである。處が、移住してから三十年も四十年も經つ人達が、異口同音に、

『移住以來こんな嬉しいことはない。』

と云つて、代表人形だけ見せて濟ませようとすると私に向つて、どうしても、各府縣別の人形を見せて呉れとせがんで聽かない。とう〳〵其の誠意にほだされて、豫定以外に二日間も公開展覽をしたが、みんなは、それ〴〵出身府縣の人形

の評判で大評判であつた。

桑港で展覽會をやつた時など、三日も前から五十里の遠きを厭はず、遙々とやつて來た人達もあつた位。又ロザンヂエルスでは展覽會場が狹かつたため、入口から三丁も行列が續くといふ素晴らしい人氣だつた。

「人形」が日本人に與へる親しみ懷かしみの根深さが、これで知られる。彼等が純一な幼い時に受けた感激が、いかに強く「大人」の心を支配するかゞ察せられる。また人形を通して受ける國民的感動――故國への思慕が、そこに涙ぐましく湧き出てゐるのを看取せずには居れないのである。

◇お人形で分つた我國の美點

この機會に於て、私は是非全國民に傳へて喜んでもらひたい事がある。

それは、人形を親しく見た米人が、人形の着てゐる下着が、上衣と同じやうに頗る美しいものであつたこと、裏地が表に對して少しも遜色のないこと、結んだ帶の内側、誰にも見えない所までも立派にしてあるといふことなどから、如何にも日本人が表裏のない、否、表は木綿でも裏は絹にするといふやうに、外形よりも内容を、形よりも心を、言よりも行を重んずるといふ日本人の特色を感得して、驚歎して居つたことである。

嘗て日本製の鉛筆や茶の品質が、見本と相違してゐたといつて、ひどく攻撃された不名譽を、我が可憐にして無邪氣なる平和の使者は、見事に一掃して吳れたのであつた。希くは此の純眞な我我の子供のなしたいみじき功勞を、我々が無にしないやう、全國民殊に海外貿易に從事する人々に切望せざるを得ないのである。

◇松平正子姫の堂々たる態度

在米邦人の子供が、如何に米國に於て活躍し、彼等米人の子弟をして驚嘆せしめつゝあるかといふことも、亦私は告げねばならぬ。

私は松平大使一家の方々には非常に御世話になつた。[illegible]と ならせらるゝ節子姫は、親しく人形の出し入れなどにも御骨折り下さつた。

殊に御姉御の正子姫は、ワシントンに於ける人形受渡しの際、其の他在住の兒童代表として挨拶を述べられたが、其の日の姫の態度は、莊重といはうか、堂々といはうか、日本固有の振袖を着て、悠々迫らず、朗らかな流暢な英語を以て挨拶を述べられ、滿場の人々をして感心して傾聽せしめられた。あゝその場の光景、それは全く故國の人達に見せたい程であつた。

申すも畏い事ながら、聖上陛下がまだ東宮におはします頃、御渡歐の砌、倫敦市の歡迎に對して、いとも莊嚴なる御挨拶を遊ばされ、供奉の人々をして感涙に咽ばしめ給うたといふことを洩れ承はつたが、ふとさう云ふ事までも思ひ浮べつつ、私は正子姫の當日の態度を、涙なしに見る事は出來なかつたのである。

紐育では、受手の兒童代表は彼の有名なルーズベルト氏の令孫であつたが、

話のゆかぬ加減もあつたらうが、物々しい場內の樣子に少し照れ氣味で、洵に氣の毒な出來榮であつた。それに對して、こちらの代表の子供の態度は、既に立派なもので、沸くが如き滿場の喝采を博した――これ等の事實は抑も何を語るものであらうか。

これを實際調査の結果から見ても、我が在米知識階級の子供達は、半年か一年位も語學の修練を經ると、誰もが大抵學校內で優秀の成績を示してゐる。事實我在米の兒童は殆ど米國の學校の首席か、さなくば二、三番といふ所を占めてゐるのである。

此等の點から見て、私は、我が國民が頭腦の働きから考へても、決して彼等に劣るものでない。むしろ大いに勝るものあるを思うて、非常に愉快に、又非常に心強く感じたことであつた。

否、學問ばかりではない、正子姬をはじめ其の他の邦人代表兒童が、晴れの場所に於て、少しも惡びれる所なく、堂々と自分の言はんと欲する事を言ひ、日本兒童のために萬丈の氣焰を吐いて米人を驚歎せしめたといふ事は、そこに學問以外に、云ひ知れぬ――人格の力といはうか、日本人が何か底力があるやうに思はれて、愉快に堪へなかつた。

我々は尊いものを持つてゐるのだ。日本人は日本人として光つてゐるのだ。それを忘れてはならぬ。と同時に飽迄も自重して研鑽を積まなければならない。

◇米人の心を動かした御禮狀

先に米國から日本に贈られた人形に對する日本兒童の御禮狀が、向ふに非常な好印象を與へてゐることも、亦見逃すことは出來ぬ。私の逢つた米人の總ては、決してお世辭でなく、心から、

『日本の子供はよくこんな手紙が書ける。』

『日本の子供の手紙は、一讀、眞に快い感じにうたれる。』

『何といふ詩的な手紙だらう。』と、云つてゐた。さうしてまた彼等は思ふ、

『我等の贈物に對して態々斯うしたお禮の手紙をよこす許りでなく、全國の子供が醵金までして返禮するといふ日本國民は、何といふ禮儀の厚い國民であらう。』

と。かうした印象は到る處で米人を感激させたやうである。

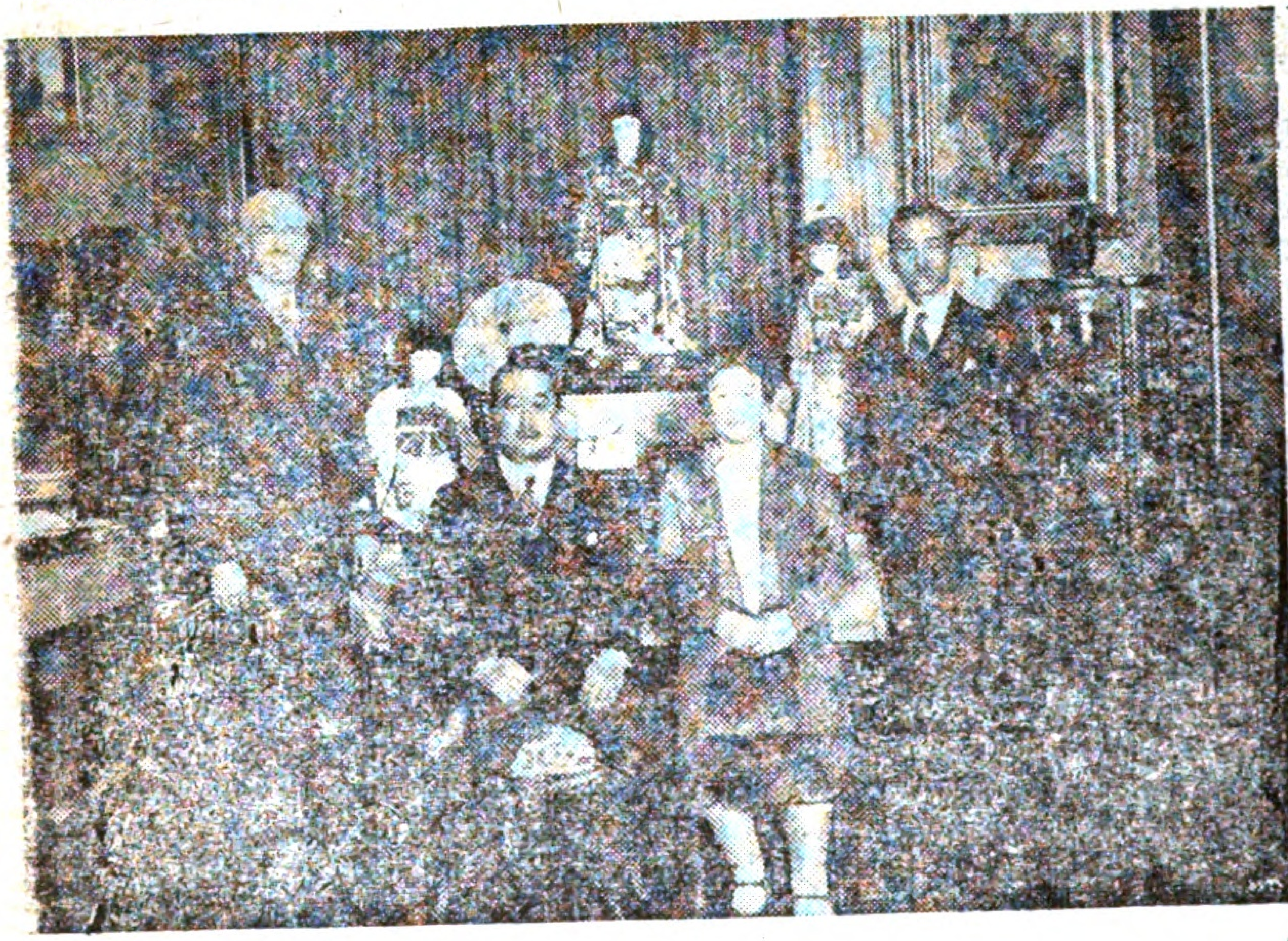
私が米國を去るに當つて彼の國の人々は言つた。

『あなたは御國の今回の企が、いかに日米親善のために偉大なる效果があつたかを見られたであらう。この上は、願くは、一日も早く口を利く可愛らしい日本の人形――無邪氣な日本の子供が、打揃つて我國を訪づれて呉れるやう、我等はその日を千秋の思を以てお待ちしてゐる。どうぞ私達のこの心持を、純眞な日本の子供達、禮儀に篤い日本國民に、是非つたへて貰ひたい。』

松平大使も亦人形歡迎の席上で言はれた。

『本國の命により、大使としてアメリカに駐在してゐる私は、ときをり惡口なども云つて米人諸君の感情を害することもあるが、今回迎へた五十八人の無邪氣な

大使は、口數こそ利かぬけれど、併し誰をもにこ〳〵させるだけの美しい顏と、不思議な魅力を持つてゐる。



ワシントンに於ける人形を中心として集まり
中央松平大使夫妻。右」關屋氏。左」世界兒童親善會長ギューリック博士

私は、今回、此等の大使を迎へる事によつて、日米の親善が彌増しに濃度を加へてゆくことを確信して、大いに自ら安んずるものである。』

また在米邦人も、『どんな敏腕な大使が來られるよりも、寧ろ此の無邪氣な大使樣が見えられたことがどんなに有効だか分らない。』

とまで云つて喜んだ。殊に感情の鋭い婦人には、お人形をヒシと腕に抱いて涙を流した人さへあつた。

國民と國民との親しみ善しみは、ただに外交や辭令によつてのみ結びつけられるものではない。かうした美しい心のあらはれ、打ち解けた感情の交換——純眞にして無邪氣な幼き者の心と心との接觸。それこそ眞に兩國を永遠に結びつける平和の鐘でなければならない。私はそれを切實に感ぜしめられた。

今やわが可憐なるお人形は、彼のパッチリとした眼を以て、あの無邪氣な物言はぬ口を以て、そして優美そのものの如き振袖姿を以て、わが祖國のために親善を圖るべく米國の各學校を巡回しつつある。思へば無心の人形にも靈ある如く思はれて懷しの限りである。

それに就て思ふことは、何しろ感情の表現の激しい彼の國の人々の事とて、可愛さの餘り、或は抱いたり、撫でたり、キスしたりするので、それが四十八州を廻るうちには、可なりよごれてしまふのではないかと思はれる。だから一旦使命を果して一所に落ちついたら、向ふの子供の永久の友たらしむべく代りの新らしい人形を送る必要はないだらうか。世の識者の一考を煩はしたいものである。



洋行土産　赤毛布縮尻帳

文學博士　松村武雄

△『ジウジュツ』勘違ひ

霧の深い冬の午後、倫敦の宿で書物を讀んでゐると、十歳になる男の子がにこにこして自分の側にやつて來て、頻りに日本のことを質問し始めた。紙で拵へて横に開く『シヤウジ』といふ戸、腹の一隅に双物を突立ててぐつと引き廻す『ハラキリ』等の話に無邪氣な眼を見はりつづけてゐた少年は、だしぬけに、

『ミスター・マツミユラ、（松村をかく發音する）あなたはジウジュツが使へるでせう。』

と云ひ出した。自分は心の中で『來たな』と思つた。『ジウジュツ』――我が國の柔道は、錦繪、着物等と共に、外人に異樣な興味をそそる代物である。中には『ジウジュツ』を神秘化して、魔術の兄弟分ぐらゐに思つてゐるものさへある。そして日本人でありさへすれば誰でもこの『ジウジュツ』を心得てゐると思つてゐる。ところが、自分は『ジウジュツ』なるものを一向心得てゐない。だが愛くるしい少年の好奇心をおし潰すのが氣の毒だつたので、

『使へるとも。不思議な手まで使へるよ。』

『不思議な手つて、どんな手？』

『一旦人を殺しておいて、それを活き返らせる手だよ。』

『死んだ人を活き返らせることが出來る？』

と、少年は極度の好奇心と興味とを沸



『ミスター・マツミユラ、あなたはジウジュツが使へるでせう？』

『使へるとも、不思議な手まで使へるよ』

き立たせた。

『さうだよ、死んだものでも、ジウジュツの手を使ふと、息をふき返すよ。』

このとき少年は突然椅子から起ち上つて、熱心に自分の顔を覗き込みながら、

『ミスター・マツミユラ、僕の祖父さんは病氣であんなに弱つてゐるでせう。でも僕、もうすつかり安心しちやつた。祖父さんが死んだら、ミスター・マツミユラに頼んで活き返らせてもらへるから。ね、ミスター・マツミユラ、あなたはきつとさうしてくれるでせう。』

と叫んだ。自分は少年の希望に燃ゆる眼差を見ると、落語のおちのやうな可笑しさを我慢しながら、

『ええ、さうしてあげるよ。』

と答へる外はなかつた。

△二人アントニオ

ナポリでの出來事である。

ある日ポムペイの遺跡を見物しようと思つて、友達と一しよにナポリの宿を出ると、案内者がうるさくつき纏つて來た。いくら不用だと斷つても、だにのやうに喰ひ下つてゐる。困りきつてゐると、中年の紳士が現れて、これを追ひ拂つてくれた。そして、

『あなた方は、案内者なしでポムペイにお出かけのつもりでせう。それも結構です。でも性の悪い案内人が多いのですから、これを差上げておきませう。』

と云つて、一葉の名刺をくれた。名刺を一目見た自分たちは、

『おお、あなたがアントニオさんですか。』

と叫ばずにはゐられなかつた。それほど彼は實直な案内人として日本人の間によく知られてゐるのであつた。彼は快く笑つて、

『ええ、わたしがアントニオです。でも案内人達は、わたしが日本の方々に信用のあるのを知つてゐますので、アントニオはもう死んでしまつたとか、アントニオはわたしですとか僞つて、日本の方々に近づかうとしてゐます。そんなときにこの名刺をお使ひ下さい。』

と云つて、一禮して立ち去つた。

案内人の撃退の護符を手に入れた自分たちは、ほつとした氣持で、ポムペイ行の電車の出るのを待つてゐた。と、やがて一人の年若い男がつかつかと自分たちの側にやつて來て、

『わたしはアントニオです。ポムペイの御案内をしませう。』



『ではこの名刺をくれた人は誰でせう？』と先の名刺を差出すと、彼は鼠のやうに逃げ去つた。

と云ひ出した。自分たちは電光のやうに目を見交して、無言のうちに『來たぞ』といふ合圖をした。

『あなたがアントニオさんですか。』

と、友達の一人が何くはん顔をして尋ねると、

『ええ、さうですよ。』

と、いささかもぢもぢする。

『では、この名刺をくれた人は誰でせう？』と、先の名刺を若い男の鼻先にさし出すと、流石厚顔の案内人も、まるで世界中の澁柿を嘗めさせられたやうな顔をして、鼠のやうにこそこそと逃げ去つた。

自分たちは大聲で笑ひ出したかつたが、側に立ち並んでゐる伊太利人たちの苦笑に氣がつくと、氣の毒になつて、すまし込んでしまつた。

△化け損ね

倫敦のチャーリングクロス街の或る古本屋で、塵まみれの古本を頻りにいぢくつてゐると、後の方で戸の開く音がして、一人の男が入つて來た。尖つた腮に白髯を生やして、眼をしよぼしよぼさせた老人であつた。自分はこの老人を見ると、何故となく童話によく現れる巫術師を想ひ出した。

巫術師君は、片手に下げてゐた袋から六七冊の古本を取り出して、嗄れた聲で、古本屋の主人に買つてくれと云ひ出した。主人は困つたやうな顔をしてそれをひねくつてゐたが、突然自分に聲をかけて、

『あなたは支那人でせう。』

と云つた。自分に限らず、日本人は外國ではよく支那人と間違へられる。始めのうちは餘り好い氣持もしなかつたが、その頃はもうなれつこになつてゐたので、からかひ半分にさうだと答へると、

『ではこの本を見て下さい。どんな種類のものです。』

と云ふ。見ると、それは盡く漢籍であつた。詩經と易經とであつた。支那の稗史隨筆のやうなものは可なり讀んだつもりの自分も、詩經や易經は全く難物である。今度は自分が頭を掻かねばならぬ番になつたわいと、頻りに頁をめくりながら、心中太だ弱つてゐると、例の巫術師君が、自分を買ひかぶつたのか、それともここで効能を吹き立てねば、折角の書物を賣りそこなふとでも思つたのか、自分に對つて、滔々と詩經的、易經的氣焔をあげ始めた。自分はまるで烟にまかれてしまつて、高等學校の科外講義でうろ覺えの詩經的易經的記憶の滓を



『あなたは支那人でせう』と尋ねるので、からかひ半分に『さうだ』と答へると一冊の漢籍を前へ差出した。

糠一ぱい並べ立てて見たが貧弱な應答で、愛太刀にばかりなる。自分は、腋の下に冷汗を流しつづけて、

『すつかり化け損ねた。』

と、心の中で呟いた。

△アルヂエリア土人？

ビザンチン藝術の名殘を味ふのだと、鼻息を荒くして、伊太利はラヴエンナの町に乗り込み、停車場の食堂で晝飯を食べたまではよかつたが、金を拂つて起ちかけると、ボーイがぢろぢろ自分達三人の顔を見つめながら、

『あんた達は佛蘭西の殖民地から來たんだらう。』

ときり出した。その場は『さうぢやないよ。日本人だよ。』とえらい權幕でやり返したが、食堂を出ると、三人とも少なからず毒氣を拔かれた形である。

『どうして僕達を佛蘭西の殖民地から來たと見たんだらう。』

『佛蘭西の殖民地と云へば、アルヂエリアの土人とでも思つたのかな。間違へるにことをかいて、アルヂエリア人とはひどいね。』

と、大いに憤慨したが、どうもそんな人間に間違へられた理由が飲み込めぬ。いろいろ考へた末に、一人が、

『さうだ、さうだ、僕達は永の旅で顔が眞黒になつてゐるだらう。そこへ持つて行つて拙い佛蘭西語であのボーイに應答したんだから、あいつめ、てつきりアルヂエリアくんだりから來た土人と思ひ込んだんだよ。』

と微苦笑をもらす。自分も口を尖らせながらも、その微苦笑を唇に貰ひうけぬわけにいかなかつた。



妖巫のやうな顔をした便所番の老婆がぎろりとした目で睨みながら手をふつて何やらしやべりました。

△便所難

自分の友達が牛津の町を散歩してゐると、急に便意を催して來た。西洋——ことに英國は便所の少ないところだ。友人は困つてしまつて、近くの家をのぞき込みながら、『便所はどこ？』と尋ねたつもりだつたが、慌ててゐるので、便所を研究所と云つてしまつた。

『研究所？　研究所なら、二三町先ですよ。』

と、對手はすまし返つて親切に教へてくれた。友人はほつとして二三町駈けて行つたが、便所らしいものは一向見つからぬ。彼は迫り來る便意に慌てきつて、今度は、

『洗濯屋はどこにあるのです。』

と云つてしまつた。
『洗濯屋は、少し行つて左側にありますよ。』
やれやれと今度こそはと、友人は少し行つて左側を見ると、便所は見えないで、洗濯屋があるばかり。もうたまりかねて、餘程離れてゐる知人の宿まで一目散。
いや友達のことばかり云つてゐられぬ。自分もブダペストでは、便所難の洗禮を受けた一人である。一體マジャールの言語は、英、獨、佛語から推測の出來難い『人困らせの言葉』である。自分はブダペストに來て始めて本當に『外國』に突き放されたやうな氣がした。言葉の上から島流しの俊寛のやうな心細さで、ブダペストの街路を歩き廻つてゐると、問題の便意が催して來た。右往左往してやつと便所らしい建物を見つけたは見つけたが、建物のどちらの部分が男子用であるか見當がつかぬ。なる程一方には Nök 他方には Férfiak と麗々しく書いてはある。しかしマジャールの言語を解せぬ自分にとつては、書いて無いのと同樣である。どちらにしようと惑つてゐるうちに苦しくなつて來たので、まるで籤を抽くやうな氣持で、Nök と書いてある方に驅け込むと、便所番の老婆が、ぎろりとした目で自分を睨みつけながら、手をふつて何やら叫び出した。その言葉は解らないが、その樣子から『間違つたな』と悟つて、自分は大慌てに慌てて逃げ出した。Férfiak が男の方だなといふ大した學問をしながら。(了)

◎知ラザルハ誤ルニ優ル　（ジファーソン）

談話室

巣立ち

本田美禪

この頃小鳥(セキセイインコ)を飼つてゐるのだが、なか〳〵可愛い。殊にその卵を孵化して巣立ち際になつて來た時の彼等の樣子は何ともいへぬほど可憐多情で、教へられるところさへ甚だ多い。飛べぬ中は餌を哺ましてやるが羽根が利くやうになつて來ると容易に側へ寄せつけぬ。『其處に餌があるじやないか、拾つて食つたら好いだらう』といふ態度を示して、容易に盲愛に陥らぬ。心を鬼にして小兒等に自活の道を考へさせる。私も男子が四人あるので、空氣の惡い東京へわざ〳〵歸つて來て駒澤へ巣を營んで見たのだが、巣立ち際になつた子供は、いつまでしても嘴を私の傍へ持つて來る。小鳥の親のやうにやると好いことは十分承知してゐるのだが、さて親心では鈍行しかねる。イブセンは非常な子煩惱家で、わが子のために働いて巨萬の富を蓄積したゝめ、その子は終に平凡な人物として終つたさうだが、恐らく渠は小鳥(セキセイインコ)から巣立たせ時機を看取して心を鬼にすることを知らなかつたのに相違ない。私は其んな事を考へては毎日箱の中の小鳥を見てゐる。而うして餘り慾張つて仕事をしないやうに要愼してゐる。

旅から歸つて

三上於菟吉

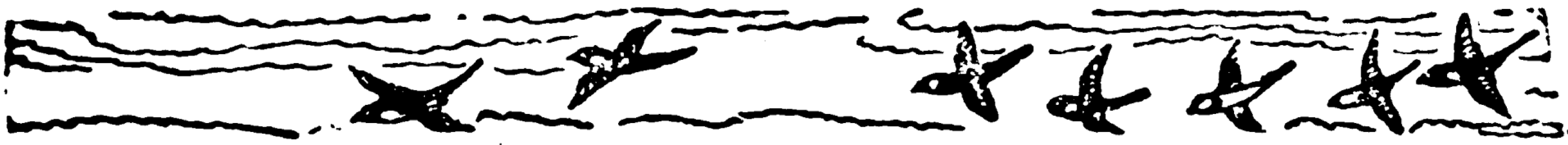
何にしても今度の支那旅行は、廿日カツキリで歸京した飛脚旅びで、北京だけをさへ十分に見ることも出來ませんでした。しかし、古宮、廟苑、泉池の廣大さと壯麗さ――しかもそれが、何とも言へぬ亡國的なさびを帶びてゐる眺めは、私がこれまで見たあらゆる景の中の絕美であつたのです。

とは言へ、そこに生きてゐる市民生活を、上から下まで瞥見して、そして今更私たちが日本に生をうけたことを、上天に感謝せざることを得なかつたのです。最近機會を得て、もつとくはしくこの氣持を皆樣にお話したいと考へるのです。

人生觀

菊池寛

人生を如何に考へるか、これは何人にも課せられてゐる問題である。たゞ、日常の生活に追はれて、人生に就て一度も考へたことのない人は悲しい人である。人生とは何ぞや、それは古來賢哲の士がいろ〳〵に考へぬいた難問である。しかし、いくら難題であるからと云つて、人生に直面してゐる我々の人生に就て考へないと云ふことは卑怯である。日常生活は日常生活であり、功利生活は功利生活である。がしかし、それらの生活とはまた別に、半夜夢さめた折は、この人生に就て考へることも、人間に生れた一の立派な仕事である。そして、たとひ學識が淺くとも、經驗が乏しくても、自分は自分で曲りなりにも人生觀を作り出すことが出來たら、立派なものであると思ふ。自分自身の人生觀を確立して、その上に立つて生活してゐる人は、どんな卑賤な職業に從事してゐても、その人の身邊には後光が射してゐると思ふ。



無蓋貨車の麻袋

岡本綺堂

わたしは明治五年の生れであるから、今日までの長い月日のあひだには種々の思ひ出がある。その中で、なんと云つても自分の生命に關するやうな事件が最も記憶に殘つてゐる。それも一度ではないから、一々に列べ立ててゐては長くなるので、こゝでは單に日露戰爭當時の一節を說くことにする。

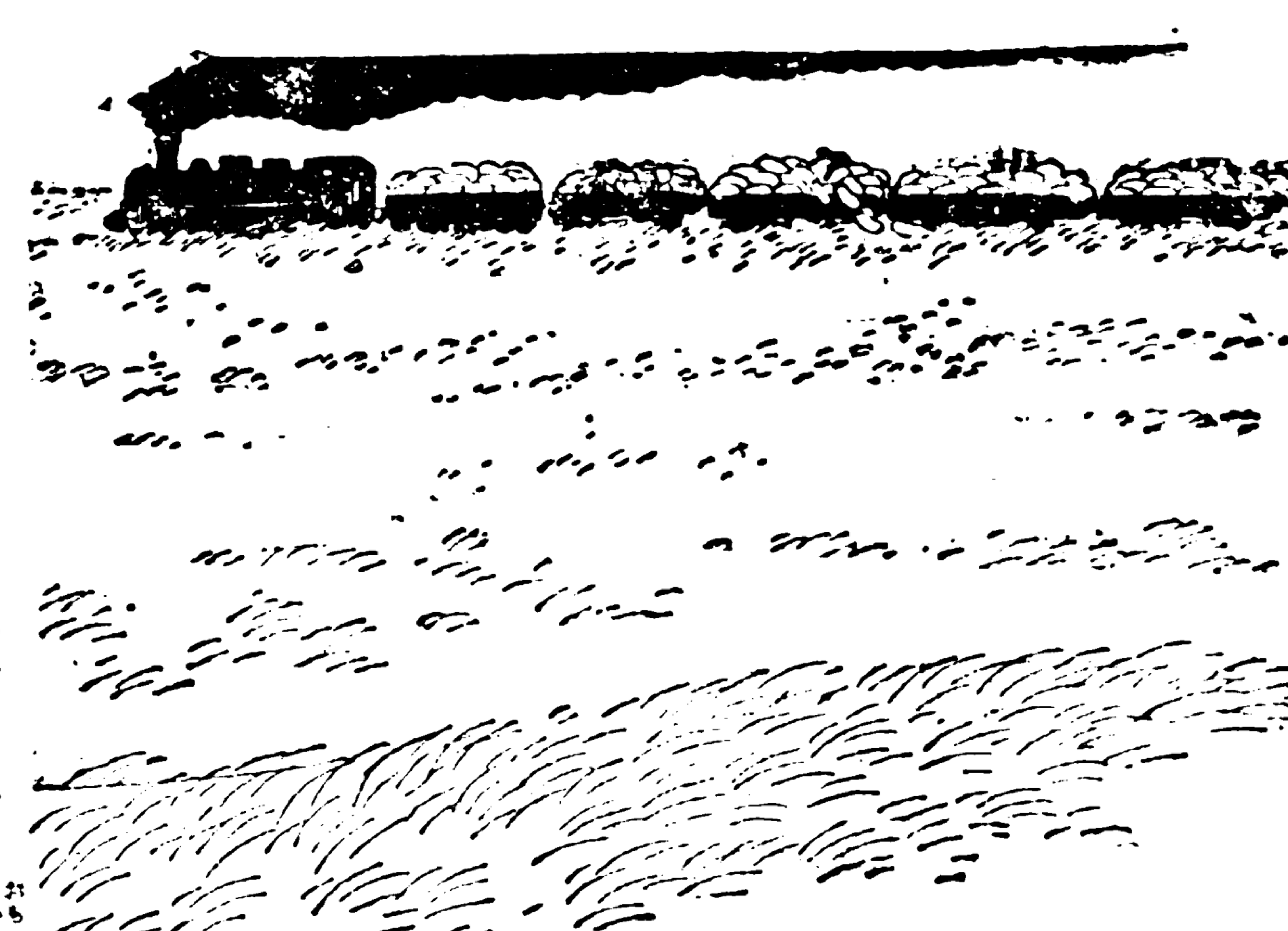
明治三十七年八月二日、その當時わたしは東京日日新聞社の從軍記者として滿洲の戰地にあつた。金州城外から普蘭店まで北上するのに、八月の日中に徒歩するのは難儀であるので、貨物列車に便乘させて貰ふことにした。私ばかりでなく、他の從軍記者諸君もみな乘せられたのである。朝霧のまだ晴れないうちに停車場へゆくと、そこには十幾臺の無蓋貨車が連結されてゐて、どれにでも勝手に乘れといふのであつた。

無蓋貨車はよんどころ無いとしても、どの貨車にも種種の軍需品や食料品が山のやうに積んであるので、我々はその荷物の上乘りをして行かなければならないのである。平時ならば斯うでも無いのであらうが、戰時であるから積まれるだけ積んだものらしい。この上に攀ぢ登るのは難儀だとは思つたが、場合が場合であるから皆思ひ思ひに乘つた。わたしの攀ぢ登つた車には、大きな麻袋や米俵が高く積んであつたので、私はうしろ向きになつて麻袋に跨がつた。袋のうちには何が這入つてゐるか判らなかつた。

やがて發車すると、霧はだん〳〵に剝げて、暑い朝日がわれ〳〵の頭の上に照つて來た。この場合、暑いくらゐは仕方もないが、怖ろしいのは汽車の速力である。おそらくこれが全速力と云ふのではないかと思はれるやうに、直走りに走つてゆく。これでは普通の客車に乘つてゐても隨分難儀であるのに、我々は無蓋貨車の高い積荷

の上に乘つてゐるのである。後向きに乘つてゐても、迂濶に眼を明けられない。萬一振り落されたら大變である。わたしは自分の右側にゐる麻袋に獅嚙み附きながら揺られてゆくと、汽車の動揺が激しい爲か、その麻袋が少しづつズル〳〵と滑り落ちて行くやうに思はれた。

この積荷は停車場で支那の苦力が積み込んだものである。彼等が無責任にどんな積方をしたか判らないと思ふと、わたしの不安はだん〳〵に大きくなつた。自分の摑んでゐる麻袋が滑り落ちれば、わたしも一緒に轉げ落ちるのは知れ切つてゐる。わたしの顔からは一面に汗が流れた。それは暑い爲ではなかつた。



さりとて此の場合、今まで獅嚙み付いてゐた右側の麻袋から手を放して、更に他の袋をつかむと云ふことが、容易に出來ない。なにしろ汽車が無暗に走るのであるから、些つとの間でも手を放す餘裕がない。一旦獅嚙み付いたが最後、いつまでもそれに獅嚙み付いてゐるの外はない。而もその袋は次第にズル〳〵と滑つてゆくらしいのであるから、私は實に生きてゐる心地はなかつた。汽車は早い、積荷は高い、その頂上から眞逆さまに滑り落ちたらば、私のからだは何うなるか、文字通りに粉骨碎身の運命に陥るのは云ふまでもない。

『えゝ、どうともなれ』

わたしも仕舞には自棄になつて、運を天にまかせて揺られてゆくと、何といふ所か知らないが、汽車は一つの鐵橋にさしかゝつて、その速力が幾分か緩くなつたので、こゝぞと思つて、わたしは慌てゝ手を放して、更に左側の袋に獅嚙み付いた。それから間もないことである。汽車は鐵橋を渡り過ぎて、やがて崖に沿うたカーブ

に來かゝつた時に、車は一つ強く搖れたと思ふと、右側の彼の麻袋は遂にズル〳〵と滑り落ちてしまつた。
私ははつと思つた。

袋をつかみ換へることが最う少し遲かつたら、わたしは今この思ひ出話などを書いてはゐられないのであつた。

秩父宮殿下の御事

南部修太郎

私の家が麻布の新龍土町に住み移つてから二十年になる。そして、家の西側は歩兵第三聯隊と垣根を接してゐる。聯隊の兵舍は最近に建ちなほつたばかりで、モダアン兵舍などと言ふ惡口もあるが、以前の赤煉瓦の何となく牢獄のやうなそれと較べると、すつきりした、清楚な姿が私の書齋から眺める眼にも快い。私の家が初めてそこに來た頃は田中義一大佐が聯隊長で、大隈重信伯を講演に招いたりした事が世間の評判になつた。

今の聯隊には、言ふまでもなく、秩父宮殿下が御勤務なされてゐる。自然、私はしばしば殿下のお姿を近近にお見受けする。朝と夕、いつもお附武官を三尺ほどあとに從へさせられ、左手に黑革の鞄をお抱へになり、少し俯向き勝ちに赤革ゲエトルのお足を輕く運んで行かれる。近所の子供達はもうすつかり殿下のお姿に親しんでゐて、そのお足音を聞くと、姿勢を正して、次から次へとぴよこりぴよこりとお時宜をする。殿下は御微笑とともに一一それに擧手の禮を返される。畏れ多いが、それは他眼にも美しい、明るい、すがすがしい感じのする情景である。私の家と向ひ合せの伊藤博邦公邸の横は狹い路地で、きたない話だが所謂小便横町である。所が、殿下はしばしばそこをお通りになる。御勤務の往き來を御徒歩でなさると言ふ事さへ何か晴れ晴れしい氣持を覺えるがそこをお步きになる殿下のお姿を拜する度ごとに、私は胸に或る強いペエソスの迫つてくるのを禁じ得ない。

子供の眼

小川未明

『降りになるか。馬鹿に寒いな』

甚三は、爐に火を焚いて、鐵瓶をかけました。さなきだに、日が暮れると山氣が肌に迫つたので、戸を閉めて、さびしく燈火の下に坐つてゐました。

暗くなつて、まだ幾何も經たなかつたが、もはや、あたりは、しんとして、夜中のやうに靜かでした。彼は、床を敷いて、四つになる子供を抱いて寢ようとしました。この時、誰か戸をたゝくものがあります。

『今時分、誰だらう？』

彼は、里へ行つた、妻が歸つて來たとは思はれなかつた。起き直つて、耳を欹てると、『夜中、道に迷つたものですが



どうかお助け下さい』と哀れな聲で、頼むのであつた。

人の好い甚三は、知らぬ風をしてはゐられないので、早速立つて行つて、戸を開けていれてやりました。

『どんな土間の隅でもいいから、一夜寢さして下さい』と、見知らぬ男は言つたので、甚三は、消えかゝつた爐の火を起して、その傍へあげてやりました。この時、女の子

は、この見知らぬ人を見ると火のつくやうに泣きたてた。

『どうした、どうした』と、甚三は、子供をあやした。しかし子供は、泣いて、泣いて父親にしがみついて、顔を隠しました。

『いくら人見しりをするからつて、そんなに泣くやつがあるか』と、言つて、彼は、爐の傍に小さくなつて、うつむいてゐる人に對して氣の毒にさへ思つたのです。

思はぬ侵入者のために、子供が泣いて、その夜は、落付いて眠れぬうちに、いつしか明けかゝりました。うす明るくなると、見知らぬ人は、禮を言つて出て行つた。

その人が、ゐなくなつてから、後で、『なぜ、あんなに、お前は泣いたのだ？』と、彼は、いつものごとく、い〻機嫌になつてゐる子供を見るとたづねました。

『青い、おつかない顔をした小母ちやんが、あの小父ちやんの脊中におんぶしてゐたのだもの……』と、子供は言つて、なほ思ひ出したやうにべそをかきました。

『ナニ、青い顔の小母さんが、おんぶしてゐたつて？あの小父さんにか……どうして、お前には、そんなものが見えたのだ』と、父親は、子供の眼を、不思議に感じたのでした。

ちやうど、その日の晝頃であります。

日頃、顔を知つてゐる巡査が、いつになく緊張した樣子をして、戸口から覗いた。

『誰か、あやしいやつが、こゝを通つたのを氣付かないかな』と、言ひました。

『いつ時分ですか？』

『いや、昨夜、この山へ女をつれ込んで殺したものがあるのだ』

これを聞くと、甚三は、冷水を浴びたやうな氣がして、覺えずそこにゐる子供を抱き上げたのでした。

何といふ生命の強さ

土岐善麿

梅雨の午後、書齋にはいると、南のガラス窓に一匹の大きな蠅がうるさく飛んでゐた。僕は薄い雜誌を二つに

折つて、ぱたりとそれを打つた。蠅はころりと書卓の片隅にころがつた。そしてぴく／＼と足をふるはし羽をうごかして、まだすつかり死に切らない。

蠅取粉がよくきくと普段家族がいふので、それを茶の間から持つて來て、死に切らない蠅の上へぺこ／＼と撒いてみた。『生きながらの死骸』はます／＼苦しさうに身をもがく。僕が、やがて一ぺーヂほど書物を讀んでからどうしたらうかと、その蠅をみるとまだ死なゝいばかりか、そばに小さな白い幼蟲が三つほどうごめいてゐる。ウジだ。よく見ると、今息をひきとらうとしてゐる親のからだから、一匹、二匹、三匹、盛んにウジが生まれてくる。尻から、また、先刻打たれてすこしやぶれた、腹の間から。

蠅取粉をまた撒いてみる。なか／＼死なゝい。何といふ執念、何といふ生命の强さ。斷末魔の苦しみにもがきながら、この一匹の蠅が努力する『種』の保存の惱み。

僕はぢつと眺めてゐたが、書卓の上がうよ／＼と汚なくなつてゆくやうなのに堪らなくなつた。また茶の間から石油乳劑を持つて來て、どろ／＼とその上に流した。

一瞬、親も子も、ひとたまりも無くころりと動かなくなつた。

彼にも人情はあつた

加藤武雄

もう二十五六年前、僕が十四の年の年の暮です。僕の家は失火の爲に全燒したのでした。

この火事の時の事です。火事は昧爽の六時頃、母屋と棟を接した納屋から起り、それを發見した時は、もう母屋に燃えうつり、半鐘が打鳴らされて村の大騷ぎとなつた時分には、母屋の三分の一ぐらゐは、炎の舌で嘗めつくされてゐました。が何しろ棟數もすゐ分多かつたので、かなり長い間燃え續け、消防隊も澤山あつまつて來て、しばらくの間は、戰場のやうな騷ぎでした。さういふ中で、一きは目立つ働きをして呉れた男があります。

僕の眼には、火の移つた穀庫の屋根の上に仁王立に立つて、何か大聲にどなつてゐるその男の姿を今でもはつきりとうつてゐるのですが、そのYといふ男のその日の働きは、何人の眼にでもつきました。實際、Yは、横鬢のところに火傷したくらゐでした。

『どうしたといふのだ。Yが馬鹿に働いたぢや無えか？』

『まるで天狗さまのやうに働いたぞ』

あとで、そんな事を云ひながら、村の人達は、かくべつ、僕の家とは關係の無い筈のYが、しかも隣村から飛んで來て、そんなに一生懸命働いたことを一つの不思議と噂し合ひました。Yは、馬力業をしてゐたのですが、さう評判のいゝ方の男では無かつた。身を挺して他の難に當るといふやうな、そんな任俠な男ではまるきり無い。その



Yが――と、不思議にしたのは、村の人だちだけではありません、僕なんかも、妙な事だと思ひました。が、祖父はその時いひました。

『Y――もやくざな男だが、矢張人情は知つてゐる』

よく聞くと、Yと僕の家との間には、こんな關係があつたのださうです。Yの女房になつてゐるF女といふのが、僕の家に機織女に雇はれてゐました。ところが、F女はYと懇ろになりやがて身重になつたのです。祖父は、あと一年ぐらゐ給金を前渡しにしてある、それに棒を引いて、F女をさつぱりとYに渡し、多少、新世帯の面倒をも見てやつたのでした。ところが、Yはそんな風にして貰ひながら、それ以來五六年にもなるのに、顔出し一つしない。ものを知らない奴だと、温厚な祖父もやや慍りを含んでゐた――さういふ事でした。

この話は、あまりにありふれた平凡な話で、この里で

諸君に失望させたかも知れません。たゞあんな、そんな事が——といふ力もあるでせう。しかし正直なところ、僕の過去に於て、最も僕を動したこれは一つの事實です。僕は、Yの事を思ふと、人間に對する信と愛とを新たにします。Y——。僕は、これまで、ぐでぐでに醉つたからだで、馬力車の上にふんぞり返り、みだらな歌などを唄つてゐるYを見て、何ともいへない[illegible]てゐました。そのYが、それだけの心持を見せて呉れた——その事で、その事の記憶で、僕の人生はいつも明るくされるのです。『Yも人情は知つてゐる』さう呟いた時の祖父の眼にはいくらか涙がにじんでゐたやうでした。

街路清潔取締法

中村吉藏

近頃地方官會議の席上で、某縣の警察部長が、その細心な取締りぶりを長官閣下のお耳に入れて置かうつもりであらう『私の縣に於きましては、街路清潔取締りの上から、馬の尻へヅックを宛てがはせる事にしました、始めの中は至極結果が善いのですが、馬が長く歩いてゐると、ヅックがずれて來て、自然、街路を汚す事になりますので、他にもつと妙案はないかと考慮中であります』と、

長官閣下は噴飯しかゝつたのをヂッと抑へ、頬をふくらませて眼を白黒した。

この警察部長の所謂思想善導方法を自分は聞きものだと思つてゐる。

描いた疊

上司小劍

私の母は、俗にいふところの癇性疾みであつた。ちよツとしたことを氣にして、それで眠れないといふやうなことが再々あつた。私も其の血を受けて、なか〳〵の苦勞性だが、しかし、母ほどにはひどくないと、自分には思つてゐる。母はこの氣苦勞に、日常生活を責めさいなまれ、自ら生命を縮めて、三十七歳の時、十二歳の私をのこして、あの世へ旅立つた。あの世には氣苦勞のない安らかな次の國があると思つたのかも知れない。

氣苦勞と言つても、母のは何もさう深い煩悶や焦慮があつたわけでなく、貧しいながらに、生活も安定してゐて、父とゝもに親子三人のくらし、内面にも外面にも、母を惱ます敵はなかつた。それだのに、母の氣苦勞は絶えない、……といふのは、母が朝から晩まで、身のまはりのことに、ばか〳〵しいこまかな注意を拂つて、ピリピリと神經ばかり遣はしてゐたからである。母はまづ朝起きるとすぐ家中の履物を調べる。さうして、其の日の天氣によつて、今日履くものはこれ〳〵と定め、それ以外のものは、決して穿かせない。親子三人と女中の分までを、ちやんと土間に揃へておく。さうして其の揃へ方が大變だ。敷石の上へ正しく並べ、甲の下駄と乙の草履との間は何寸、敷石の端と履物との間が何尺、これしから、同じ甲の下駄にしても、左と右との間隔は何寸と、一々きまつてゐるのである。まるで、觀艦式に軍艦を並べるやうだ。それがために、母の帶の間には、いつも短かい尺が用意されてあつて、たゞ下駄ばかりでなく、家の内の器具調度の位置をば、絶えず其の尺によつて、正して置くのだ。たとへば座蒲團の如きも、疊の緣や壁の下の押し緣や、または敷居を標準にして、それから二寸とか三寸とか間隔をとつて置く。兩方の端で寸法を測つて、キチンと一分まで合つてゐなければ、蟲が納まらないのだ。座蒲團や火鉢の如きものまで皆それだから、床の間の飾りなんぞ、殊にやかましく、掛物が曲つてかゝつてゐたことや、置物の位置のくるつてゐたことなぞは私の家に決してなかつた。

女中が緣側へちよツと洗濯物の乾いたのを置いても、位置が氣に入らないと、母は必らず立つて直しに行く。くるまき井戸の釣瓶の位置が氣に入らぬと言つては、なほしに出る。天井に一匹蠅のとまつてゐるのがいやだと言つて追ひ拂ふ。障子にちよツと、針のさきで突いたほどの穴を見附けても、すぐ貼りかへる。忙しい人のことを『寧日なし』とよく聞いてゐるが、母のは『寧日なし』どころか、寧時も寧分も、或は寧秒もなかつたので

ある。とにかく、こんな風に間斷なく神經を働かして、言はゞ高速度に、めまぐるしく人生を送つたから、三十七で死んでも、他人の百二十五まで生きたほど神經を働かしたか知れない。

　この神經質な母が、時間のことには割り合ひに無頓着であつたのは、よい時計のなかつたためであらう。私のやうに、時計の一秒二秒までをこまかく氣にすることはなかつた。私は、時計と言へば、セコンドの針ばかり見て、何分何秒を知る以外に、何時だか忘れてゐるといふやうな風だが、母にはそれがなかつた。それに母は、自分の家のことをこまかく氣に疾むだけで、他人のことは全く無頓着であつた。他人の家や室内が、いかに亂雜で、器具調度がどんなに取り散らかされてゐても、一向平氣で、批評一つしなかつた。この性質を母から其のまま受けないで、



私はとかく、他人のことが氣になつて困る。近所の醫者の家の標札が曲つてゐるのをば、通る度に氣にしてゐたが、知らない家へ餘計な世話を燒けず、いろ〳〵苦に疾んだ揚句、深夜金槌と釘とを持つて、そッと其の家の門に忍び寄り、カン〳〵とやつて、家人に怒鳴られた、のは、友人間に評判の私の逸話（？）だが、さういふことは、私に數倍した母の神經質にもなかつたのである。さういふ風だつたから、母の生きてゐるうちの私の家は、こまごました日用の家具なんぞ、實に整然たるものであつた。鋏はどこ、錐はどこ、何はこゝあれはそこと、入れ場所や置き場所が、ちやんときまつてゐて、其の置き方も、例の尺で測つた正しさだから『それ鋏がいる、どこへ置いたか』と探しまはるやうなことは、一度もなかつた。

障子を破つても、すぐ貼りかへることは出來る。夜が夜中でも、ちよつとしたそゝうで、ほんの少し破つた障子を、母は寢衣のまゝ起き出して、よく貼りかへてゐたが、疊を焦がしたとなると、素人の手には合はぬので、呼びにやつた疊屋の來るまで、母の機嫌は絶えずわるくて、顏が蒼ざめてゐた。煙草の吸ひ殼で、黒子ほどの穴があいても、其の一疊或は室全體の疊の表がへをするのだから、疊を焦がすといふことは、其の頃の私の家にとつて、身體を怪我したよりも大事件であつた。

或る冬、父が炬燵のそそうから、疊を一尺四方ほども焦がした。さア大變だ。幸ひ母は不在だつたが、歸つて來たら、どんなに怒るか知れない。泣いたり喚いたり、一日一夜ぐらゐは焦げ疊に取り付いてゐるだらう。それが恐ろしいので、父はいろ／＼工夫した末、多少繪心があつたところから、疊の焦げ部分へ、丈夫な美濃紙を貼り、其の上に繪の具でもつて、寫實式に疊の目を描いたものだ。兩の色合ひと言ひ、焦げないところとの接觸點と言ひ、撫でて見なければわからぬほどの上出來で、恐らく父一代の繪畫作品の最傑作だつたらう。

四五日して、この描いた疊は遂ひに發覺したが、母もさすがに笑つて、そんなに怒らなかつた。

ある日の兄と弟

佐々木味津三

——弟は出かける時から何かと愚圖々々言つてゐたが、川についてからも兄より自分の釣竿が短いと言つて、只それだけの理由でまた例の我まゝと聞き分けを持たぬ癇癖を出し乍ら、青い額に太い筋を張らして、骨ばかりのやうな瘦せた身體を左右にくねらした。

馴れてゐたから耐らへてゐようと思つてゐたが、あまりな我まゝにいつになく憎惡が湧いたので、兄はつい怒りにまかせてがんと一つ頰を打つた。

『年下だからその位のこと當り前ぢやないか！』

そして罵しり乍ら睨めつけた。と——、すこし意外だ

つたのである。いつも必ずすぐにわッとやる弟が、どうしたことか泣かなかつた。ひよろひよろとなつた足元を支へ直すと、痛さも現さず黙つて流れに竿を垂れたので、嘗つてなかつたそのいぢらしい姿にきゆつと胸がしめつけられて、打つた兄がわッと泣いた。——と、それがまた悲しかつたか、つゞいて弟がわッと泣き出した。

——ある日の兄と弟の思ひ出である。

汽車の寢過し

廣津和郎

今から約十年程前の事だ。自分は鎌倉に住んでゐた。ところが、自分には自家では物の書けない癖がある。それで執筆する場合、いつでも東京に出て來た。もつとも、雑誌の締切のぎりぎり結着まで書けない質なので、さうして上京して、雑誌社の督促を受けながら、徹夜して書き上げようといふのである。

そんな風にして書き上げてしまふと、暢々して、愉快になるので、直ぐ眠る氣にもなれず、宇野浩二君に電話をかけて、二人で東京市中をぶらぶらやつた。眠らないままでふらふら歩きまはるのである。

その散歩の歸りに新橋驛に行き、自分は宇野君と別れて汽車に乘るのが例だつたが、汽車に乘ると一遍に眠くなり、そのまま横須賀まで持つて行かれてしまふ事がよくあつた。

それだから宇野君がよく車掌に、

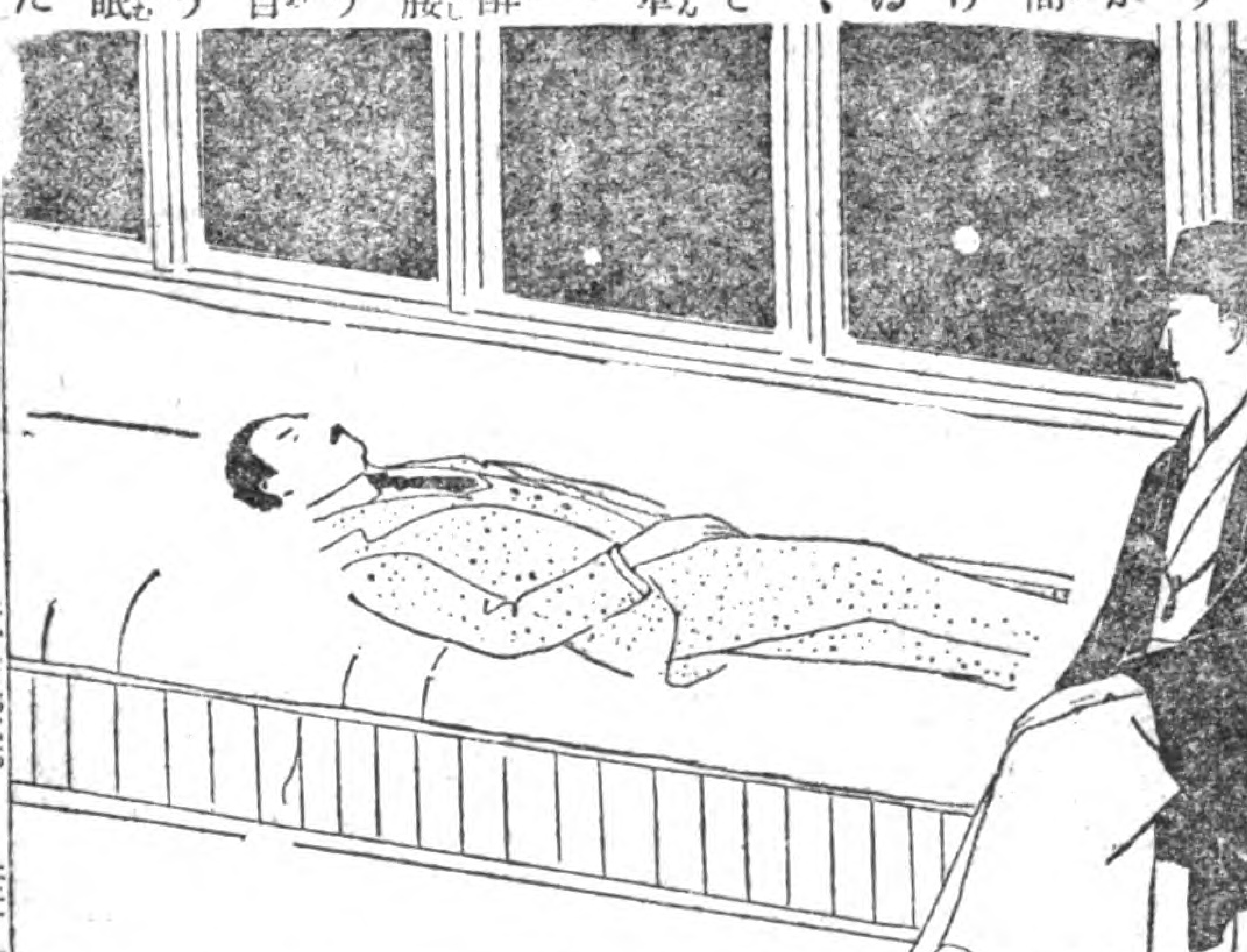
『君、この男は眠つてしまふかも解りまんから、鎌倉に行つたら、起してやつて下さい』などと頼んで吳れたりしてゐた。

或時、自分は例によつて横須賀で眼が覺めた。夜も大分遅くて、それから鎌倉の方へ引つ返すのは、大船行きが一列車あるだけだつた。最初の中は乘越すと、狼狽して、車掌や改札口にその旨を云つて、鎌倉まで引つ返す許可をわざわざ得たりしたが、併し慣れつこになると、知らん顔をして、次の上り列車に澄し込んで乘り込むや

うになつて來た。

丁度具合よくその大船行きが直ぐ出るところだつたので、自分は二等車にひとり乘り込んで澄してゐた。外には客が誰もなかつた。すると、發車間際になつて、二人の紳士が駈け込んで來た。背廣服を着てはゐるが、恰幅の好い、五分刈頭の、短く刈り込んだ口髭を生やしてゐるところから、ひと目で海軍將校だと云ふ事が直ぐ解つた。

這入つて來るなり、非常に醉つてゐるらしい一人が、直ぐ腰掛の上に横になつて、ぐうぐう鼾をかき出した。『おい、駄目だぞ。又眠ると乘越すぞ』もう一人の紳士は、さう云つて、眠つた友の肩に手をかけて搖つたが、『うん、うん』と云ふだけで、正體がない。『チエッ』と舌打ちして、それから自分の方を見て苦笑したが、急に何か思ひついたやうに、『失敬ですがあなたは何處までおいでですか？』



『鎌倉です』

『鎌倉、それは丁度好い。濟みませんが鎌倉に行きましたら、此男を起してやつてくれませんか。私は田浦で下りますから』

『よござんす』自分は自分が鎌倉に下りる事を忘れて、横須賀まで寢過して來たのに、今此處で、他人の寢過しの監督を頼まれた事が頗る可笑しかつたので、元氣に答へた。

『それぢや頼みますよ。イヤ、實にこの男の寢過しは有名なんです。大船では「おや、又來た」つて云はれる位なんですからね。いつかなんぞは、大船まで行つて、そこから又送り返されたら、今度は最初出發した横須賀まで歸つて來てしまつたといふ男なんですからね。あつははは』と海軍々人らしい快活さで笑つて、『それから又、東京から横須賀に歸るのに、東海

道線に乘つて、大船で乘換へるつもりでゐたら、眼が覺めたら沼津だつたといふので……あつははは』

自分も思はず聲を出して笑ひ出した。自分は自分も横須賀まで今寢過して來たのだといふ事を、その將校に話さうか知らと思つてゐる中に、田浦に來たので、彼は立上り、友の事を賴んで、下りて行つてしまつた。自分は殘された、眠つてゐる將校を見守りながら、ひとり頰笑んでゐた。――監督されるべき身が監督する。急激に變化した立場の皮肉。

だが、引受けた責任が、自分の眼を緊張させて、自分はたうとう鎌倉まで居眠りも出なかつた。そして鎌倉に着くと、寢過しなどした事もないやうな澄した顏をして、

『もし、もし。鎌倉ですよ。鎌倉ですよ』と眠れる將校をゆり起した。

海外珍聞

モダンガールに對する男の隱れ場所

世界大戰後世界中のタガがゆるんで倫理、道德は甚だしく廢頽し、その代りに不行儀、不品行が盛んに横行する樣になつたことは、隨分心ある人をして眉をひそめしめたものであるが、近頃は漸やく目がさめて來て、所謂モダン何とかやらは各國を通じて次から次へと虱つぶしに隅の方へ押しつけられてゐる樣な形勢となつた。

これにつれて所謂新思想なるものも次第に前線から退却しはじめて、これまでは新らしがりやが美術、文學等の上に途方もない我がまゝを行つて、それを臆面もなく舞臺や書物の上にさらけ出してゐたものであるが、三角戀愛や四角何とかやらを面白半分に書きたてる癖が病みつきになると、一般の讀者が大抵の不都合は差し支へないと思ふやうになるといふので、今日に於ては歐洲各國共頗る嚴重に取締るやうになつて來た。

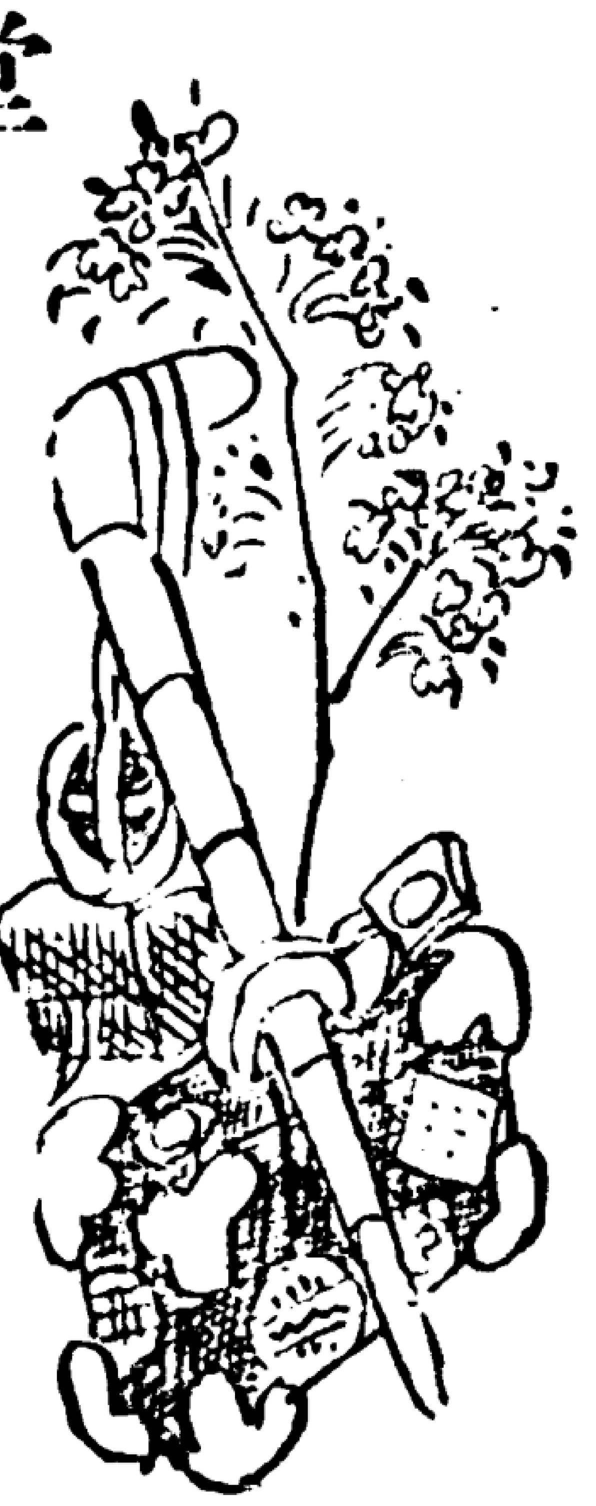
次に產兒制限だの手輕な離婚說を主張してゐたお先走りの連中も、一時は何とか世間に慕はれたものであるが、これも今では世界の到る處非常な勢ひで退却中である。

ツンツルテンの着物にザンギリ姿の女は、一歩々々男の領分を侵さうとして夢中の有樣であるが、かうなつては男の方でも自衞上、女からは生理的に到底追ひつかれない雲隱の中へはいつてしまはなければならぬかも知れない。女から生理的に到底追ひつかれない雲隱といふのは、男の顏中の髭を自然に任せて延ばすことで、成程からすればいかな御婦人でも眞似は出來ない筈である。現にイギリスでは、男子連が寄り／＼そんな相談を始めたといふことである。



旅館哲學　茶代と人生

社會教育家　加藤咄堂



○宿帳の利用

『入らつしやいまし……お早いお着きでございます』

『今晩一晩厄介になるよ』

『どうも毎度有難う存じます。……竹の間へ御案內……』

『毎度ぢやない、僕は初めてだよ、……イヤなか／＼氣がきいて居るな、此の宿屋の善否といふものは案內の時に解るのだ。客を玄關に待たして置いてバタ／＼するやうでは駄目、……さつさと荷物を持つて案內して、さア此室へと、其の通り其の通り……イヨウなか／＼立派な座敷だネ』

『これは此程新築をいたしましたので』

『此家では先づ二番目の座敷だネ、もう一つ立派なのがあるだらう』

『イエこれが上等で』

『辯解するには及ばんよ。何時何ん時、どんなえらい人が來ないとも限らぬ、松の間は明けて置くさ』

『イヤもう何にも彼も御存じで……若しお氣に召さなければ更へましても』

『結構々々。ハヽア女中達もなか／＼小綺麗にしとるな。此家の女將さんは綺麗好きと見えるな』

『ハイ宅では掃除がやかましうございまして』

『それが第一ぢや。座敷ばつかり綺麗にしても便所のきたないなぞは全く閉口だからね』

『まこと申し兼ねますがお名刺でもございましたら……』

『オヽ宿帳か、名刺の代りに書いてやらう、此方へお貸し、……エヽ宿所姓名職業年齡とこれでよからう』

『どうもお手數をかけまして有難う存じます』

『オイ番頭さん、一體、君、宿帳は何のためにつけるのか知つて居るかネ』

『ヘイ何の爲と申しまして、警察がやかましいものですから……』

『それは解つて居る。それだけならアンマリ働きがないぢやないか、これでネ、此の客は山の方から來たか、海の方から來たか、前晩はどこへ泊つたかが解らう』

『ヘイ』

『それによつて取扱ひをきめるのだ。山の方から來た人なら海の肴を珍らしがるし、海の方から來た人なら、なまじつか海の物より山の物を珍らしがるといふものさ、そこらの氣轉をきかして晩飯の膳に一皿二皿でも客によつて取りかへて見ろ、どの位、客が喜ぶか知れたもんぢやない、そこに氣づかずに宿帳は警察へ屆けるだけだと思つて居るやうでは、番頭さん、まだ商賣に熱心が足らんといふものぢや』

『へエどうも恐れ入りました。これは一つ旦那に聽いていたゞかなくては……』

『オイ〳〵旦那なぞ呼ばなくてもよい。……アハヽヽ、番頭め、面喰つて引き下りよつた』

◎客の取扱ひ方

『只今は、番頭がいろ〳〵御敎訓を受けまして』

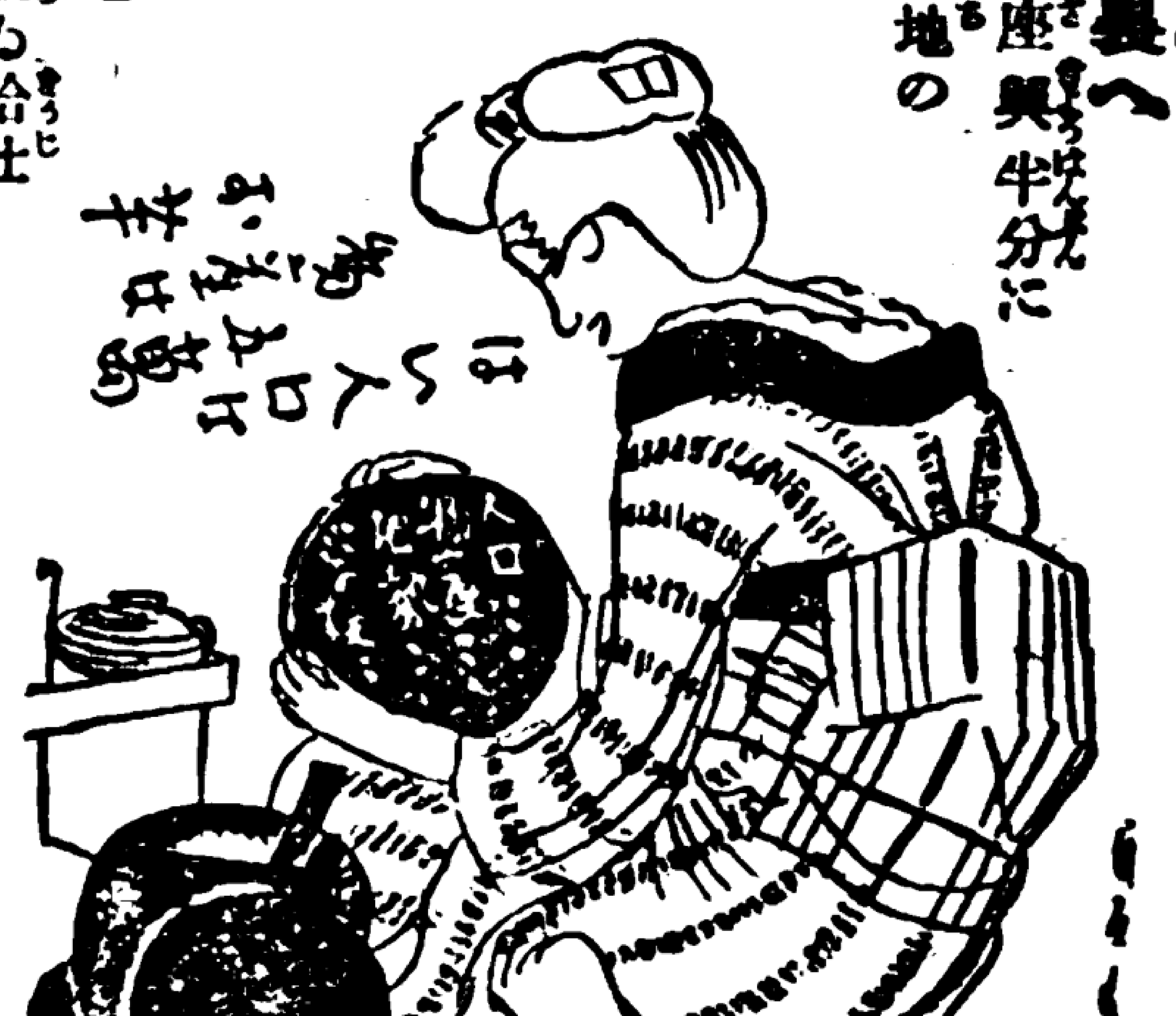
『オ、あなたが此家の御亭主か、イヤお女將さんまで引つ張つて來たネ』

『へエ旦那方のやうな旅馴れたお方に數へていたゞきませんと、此女は全く世間見ずでありまして』

『マアこちらへおはいり、ソンナに次ぎの間に平伏せられては話が出來ない』

お盆の裏へ

御飯の時等お座興半分に女中さんに其土地の何を聞いても大抵は御存じない。女の知識慾の乏しさをまざまざと見せつけられる。人口に物産に地勢に學校の數位ゐ給仕盆の裏にでも書いて置いたら好からう。（比左良）



『イエどういたしまして』

『それがいかん、一體宿屋といふものは自宅の代りだ。旅をして宿屋について自宅へ歸つたつもりに氣樂にならなければならぬ、さう鹿爪らしくせられては窮屈で仕方がない、マア此方へおはいり』

『へエ、それでは御免を蒙りまして、……さあおまへも御免を蒙つて……』

『ウムさう〳〵、それで話が出來るといふものだ。どうも宿屋の宿屋らしいのは面白くないて、氣樂に、かう自宅に居るやうな氣にするのが肝心だ。しかし、もと〳〵他人だから、自宅に居るやうにぞんざいにすれば客は怒る、というて他人の家へ客に行つたやうに丁寧にすれば窮屈がる、客に行つたよりは疎末に、自宅に居るより丁寧に、これが宿屋の秘訣、このこつをうまく呑み込んでやれば客は乾度滿足するよ、勿論、客によつては自宅では威張れぬものだから宿屋で存分威張らうといふのがあるから、一概にいへぬがネ、そんな客は威張りたいだけ威張らして置いて、ウンと茶代でも貰ふのが當世だよ』

『イエその威張りなさるお方に限つて、御茶代なぞは……』

『少いといふのか、それもさうだらう。時に御亭主、僕なぞも茶代は少いよ』

『イエどういたしまして、お茶代たぞは……』

○茶代と人生

『日本の宿屋に泊つて一番心配なのは茶代のことだ、多くやるのも馬鹿々々しいし、少いのも氣の毒だし、一體、どの位が程度なものだネ』

『手前どもでは別段茶代はあてにいたして居りませんので、お下げくだされば戴きますが　チャンと宿賃だけで經濟の立つやうにいたして居ります』

『感心々々、客の方からいつても宿泊料は當然拂はねばならぬもの、茶代はやつてもやらなくとも、よいものだが、さてさうはいかぬのが永年の習慣、宿屋の方でも、また何程かはくれるものだとチャンと懷勘定にはいつて居るのだから、此傳統を破るといふことはむつかしい。矢張これは西洋流に支拂の一割とか、一割が少けれぱ二割とか、定めたらどんなものぢやらう。今は多いのになると支拂の五倍も十倍もあるのだからネ』

『ソンナのは滅多にありませんが、大抵は支拂額以下でございます。マア普通五割見當でございませう』

『そんなら、さう定めたらどうかネ』

『定めますと、當然請求いたすことになりまして、それだけ宿賃がお高くなりますと同じことで、それでは一般のお客にお氣の毒で、下さつても下さらなくともよいといふ自由の餘地を置いておいた方が御便利かと存じます』

『それもさうだネ、必然と自由、これも面白からう。昔の人もいうた通り人生は生れて來て死にゝ行く道中の宿屋だ。

いづこをも定めなき世と知りぬれば家をも旅の心地こそすれ

既に人生を宿屋と見る以上、人が此の世で働くのは此の宿屋へ拂ふ旅籠賃、人と生れながら何事もせずブラブラと暮らして死んでしまふのは旅籠賃を拂はずに出立した無錢飲食食逃げ同樣、英雄とか哲人とかいふ人は既定の宿賃以上にお茶代を餘計に置いて行つた人と見てよからう。われ〳〵も精々此の浮世といふ宿屋に餘計茶代を置く算段をせにやならぬ、オツトうつかりすると食逃げになるぞ、ハヽア、飛んだお談義、亭主、迷惑だつたらう』

『イエどういたしまして』

勿體ない

世話に砕けた銀杏返しも惡くないだらうが、いつか九州路の旅で二ケ所程、下品でない耳隱しに結つて帶を胸高に結んだ生娘風の女中さんを見た。これは感じが甚だ純で勿體ないやうな一種の爽感を享ける。（比左良）



○客も主人も

『ナカ〳〵亭主、客扱ひがうまいネ』

『どうも此の商賣はむつかしいもので、何分若い者を多く使つて居りますものですから、御客樣が心安くして下さると、ツイ御無禮をいたしますし、あまり窮屈なお客樣へは出たがりませんし、人を使ふは使はるゝで、これが一苦勞でございます』

『さうだらう、あまやかせば付け上り、叱れば怒る、人間といふものはむつかしいものさ、それは自分が先きに立つて手本を示すより外はないよ。亭主がゾロリとして居つて奉公人ばかり叱つたからとて、うまく行くものぢやない。女將さんが朝寢をして女中ばかり叩き起したのでは云ふことはきかんからネ。僕は宿屋へはいつて女中の取りなしで女將さんの人柄はわかるし、座敷へはいつて床の間の飾りつけで御亭主の趣味も判ぜられるよ。何時行つても床の間の掛け物は懸つぱなし、花瓶の花は枯れたなりといふやうな宿屋は、座敷の呼び鈴の損じて居らぬのは少い。何にも、さう贅澤にせよといふのではないが、客に不快を與へぬ程度にはして置かなくてはネ』

『どうも痛み入ります。始終叱言を申すのですが……』

『それがいかん。叱言をいふより自身でなさい。身直ければ影また直しぢや。自身で其の心掛けで居れば、自然と奉公人もよくなる。奉公人を金で雇つたものだと思ふと違ふよ。自分の仕事を助けてくれるものと思つていたはつておやりなさい。彼等も後々は一軒の主人となるものだ』

下手でもよい

宿屋の部屋の掛物や額等で凡らく旅情を慰めるに足るものを見たことが無い。繪は下手でもよいから掛物も額も屛風も悉くを其の土地の名所圖繪にしたら甚だ結構だらう。（比左良）



『お客樣もさう思つて下さると有難いので、泊つてやると思召さないで、泊めてくれるとな』

『さうだ。客に其の心掛けがあり、宿屋は宿屋で泊つていたゞくと互に感謝し合へば至極圓滿だが、兎角、金を拂ふ方が威張るが世の慣ひで、主人が奉公人を金で雇つたと思ふやうに、客も亦金で泊つてやると思ふから間違ふのだ、行き暮れて泊るに家のない不自由を思へば何んな宿でも不足はいへぬが、宿屋も亦門前に雀羅を張つて毎日毎晩、一人も客がなければこれほど困ることはない、毎度御贔負に有難うと、どんな客でも大切にせにやならぬ。そこがそれ二宮尊徳のいうた賣手喜び買手喜ぶ商賣道徳だ、だから僕のやうな客でも粗末には出來ぬぞ、……ハヽァまた御談義か』

『いろ／＼有難うございました。お疲れの中を長座いたしまして、もう御風呂の仕度も出來ませうから……』

『ハヽ、耳が痛くなつたから逃げ出すネ、風呂なら、此の呼鈴で聞いて見よう』

『エ、それが少し損じて居りまして、……』

『ハヽア、そいつは悪かつたネ』

○日本人の習癖

『そんなにモジ〳〵したまふな、モウ宿屋の悪口はいはぬよ。今度は少し客の棚下しをやらう』

『お客様の棚下ろしは、商賣冥利、申すことはございません』

『其の心掛々々、全く以ていへた義理ぢやあるまい、今の宿屋といふものは、ズッと通れば、宿屋の都合のよい部屋へ案内せられ、宿屋の都合のよいものを食はされ、宿屋の都合のよいだけの金を取られ、其の上宿屋の都合のよいやうに茶代を出さねばならぬのだからネ』

『さう被仰れば、さうですが、ソンナお客様が一番扱ひにくいので、初めからこれこれと被仰つて下さる方の方が樂ですよ』

『そりや、女將さんのいふ通りで、ホテル式に一々金で定めれば簡單なのだが、ソコが日本人の面倒な所で、内に現金的な物質主義を包藏しながら、外は「金のことなぞは」といふ上品振りを示すのだから始末が悪いよ。……今少し生活が複雑になれば此假面が脱げて却つて便利になるかも知れんが、今の所はまだ昔流のお上品振りが遺つて居るのだから、むつかしい』

茶代

夫婦者、旅行して宿といふものへ始めて泊る。風采が好いので松とか竹とかいふ上部屋へ案内された。先づ茶代といふものを五十錢包んで女中に渡す、暫らくして番頭『只今茶代を頂きましたが何かお間違ひぢやアないでせうか』夫婦者『ア、左樣か、此處は茶代はいらないのか』番頭の『ワナは失敗(青起)』



『左様でございます。おつしやつて下さらないものですから、氣をつけて差上げますと押しつけるやうに思はれますし、差上げねば不取扱のやうに思はれますので、全く氣の揉める商賣ですよ』

『一體日本人は自分の知つた人同志の間には非常に禮儀の正しい國民だが、知らない人に對しては仇敵同樣、威張れるだけ威張らないと損と心得て洗面所なぞで相客が顔を合はしたとて挨拶するものは少く、借りた一間は武士の城廓、何をしようと勝手かまはず、況して金を出して泊つて居るのだから宿屋の迷惑、もとより眼中になく、「旅の恥はかきすて」で騒がれるのだから、たまつたものぢやない』

『全く左樣でございますよ、お風呂の案内に致しましても、隣りのお客を先にでも致しませうものなら御機嫌が悪く、さればというて何誰も御一緒といふ譯には参らず、こちらで御案内申した折り

は、おはいり下さらないで、後からお出掛けになつて、「大分湯がよごれて居るナ」なぞと皮肉を被仰るのですもの、困つてしまひますわ、……それに困るといへば、忙しい最中に、いつまでも〳〵女中相手にチビリ〳〵御酒を召し上つて居るので、其のために他のお客様への御膳が遲れますし、全く氣が氣でないのですが、まさかお給仕半ばに立たすわけにも參らず、「姉さん幾歳だい」なぞと被仰つて悠々と召し上つて居るのを見ますと旦那の前ですが、全く苛々することがありますよ』

『さうだらう、日本人は宿屋を泊る所と考へずに遊ぶ所と思つて居るものが多いんだから、まあ宿屋の改良より客の改良が先きだネ』

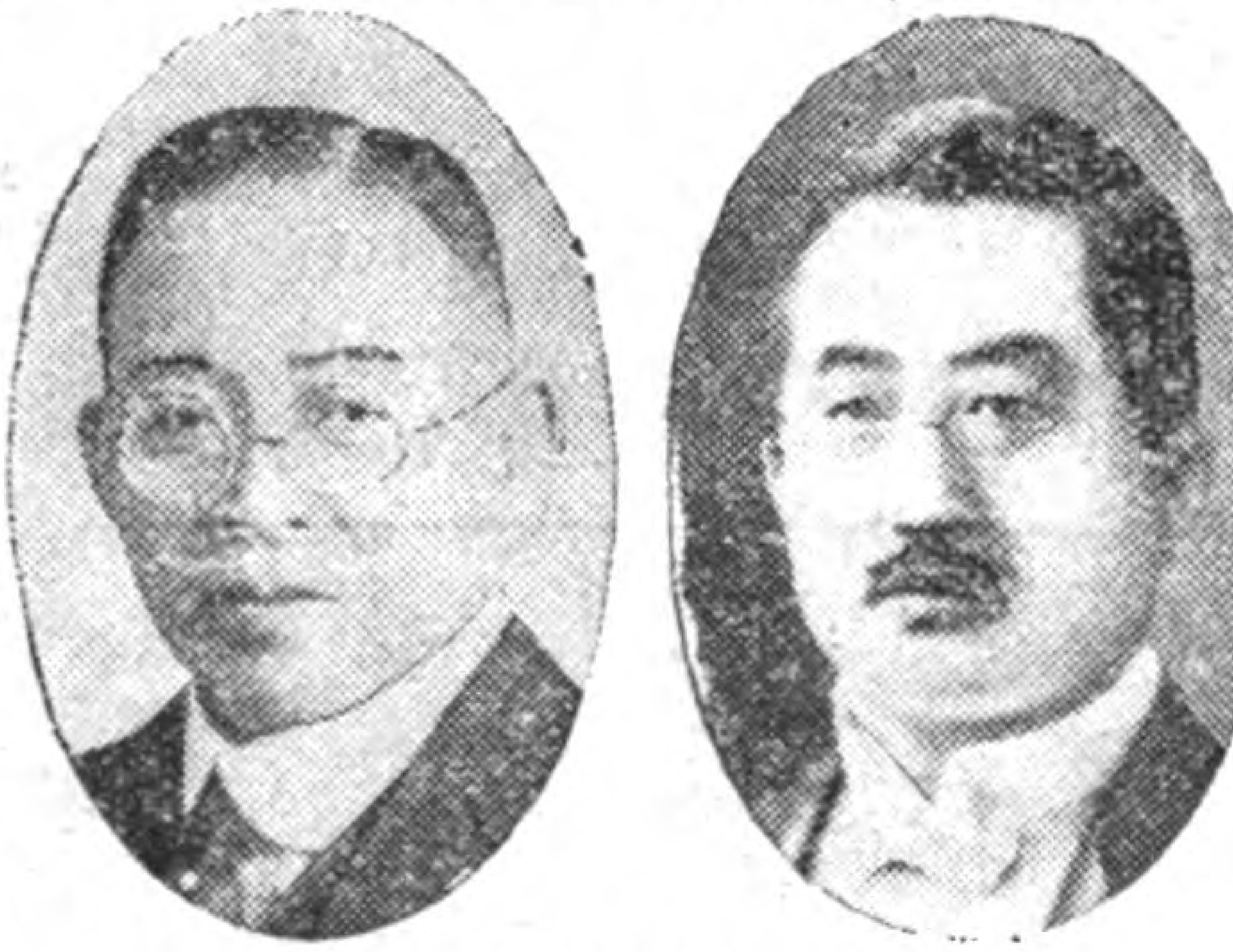
『ツイ釣り込まれてお客樣のことを申してしまひました。……旦那樣もお草臥でせうからさあ貴方、これで失禮しませう。……オヤお茶が冷えました、お入れかへ申しませう』(終)

友情美談

松平大使と長嶋氏

鈴木文史朗

松平大使夫妻の事實上の媒介人が長嶋隆二氏であることを世間は餘り知らない。松平氏と長嶋氏は高等學校から大學にかけて、常に三番とか四番とか席次が隣り合ひ、大學生時代は一緒に自炊生活をやり、大學を出て松平氏が外交官の試驗に合格して五十圓の月給取りとなり、長嶋氏が大藏省に入り四十九圓の月給取りとなつた時、その二人の獨身者の月給を一緒にして麴町へ一つ家を持つたものである。それから松平氏が英國へ赴任すると、又長嶋氏が大藏省から派遣されて英國へやつて來、こゝで又二人は朝晩往來した。この時長嶋氏が松平夫人となる可き鍋島家の息女の寫眞を持つて來て、結婚談の話を始めたのである。かうして二人は高等學校時代からの莫逆の友であるが、一人は順調に、一人は中途から逆境に立つてゐる。併し友誼はかはらない。今も時めく松平にとり最もなつかしい心友の一人は長嶋氏であり、今度歸朝後間もなく長嶋氏を訪ねて『おれ』『貴樣』で一高時代の昔にかへり二人の過去と現在と將來をしみ〲語つたさうだ。



松平大使(右)長嶋隆二氏(左)

因果應報奇談

◇貴婦人と船長

スコットランドのカーコーディの山路を辿り行く一臺の美しい馬車があつた。今から八十年程昔のことである。馬車はキルマリン伯爵家の紋が這入つてゐる。馬車の中には伯爵夫人が美しい裝ひを凝らして乘つてゐた。山紫水明のカーコーディの山中にある、別莊へ、避暑のために夫より一足先きに急ぎつつあるのであつた。

と、前方に二十歲餘りの青年が、ぼろ〳〵の服を着て、靴もはかずに裸足で、石ころの山路に足を痛めたか、牛の歩みよりのろく、跛足を曳き乍ら歩いてゐた。馬車が青年の傍らを過ぎ行かうとした時に、夫人は馬車を止めさして、青年に聲をかけた。

『大層お困りの樣子、さあ遠慮なくお乘りなさい。』

青年は夢かとばかりに喜んだ。次の驛まで天使のやうな美しい夫人の傍らへ、乞食のやうた青年は同乘した。次の驛で夫人は左へ、青年は右へ行かねばならなかつた。靴を買ふ金と、一ケ月は支へられる若干の金とを惠まれて、青年は涙の裡に禮を述べて、何處へか行つた。



その時から二十年あまりの歲月が過ぎた。溫和な顏をした、船長の服を着けた四十歲ばかりの紳士が、カーコーディの山中へ、同じ道を馬車で辿りつつあつた。彼は二十年前と四邊の景色を見比べて、少しも風物の變らぬのに感慨が深かつた。ふと道の傍らに馬車を避けてゐる見すぼらしい中年の婦人に眼が止つた。婦人は徒歩で足を痛めて行き暮れてゐるらしかつた。紳士は昔此の道でキルマリン夫人に馬車へ乘せて貰つた、ジョージ・ブラウンであつた。彼はそれ以來志を立てて、今では大きな船の船長となつてゐた。カーコーディの山中に、キルマリン夫人が昔に變る零落して住んでゐられることを聞いて、かくは馬車を急がせてゐた。

心は急ぐけれど、彼は足を惱める人を見ては、昔のことが思ひ出されて、やがて馬車へ件の婦人を助け乘せた。次の驛でその婦人を降す時に、厚く禮を云はれたので、ブラウンは赤面しつつも、『私は步行に惱んでゐる人を見る度に、殊に同情に堪へないのです。想へば二十年の昔になりますが、此の途で私の行き惱んでゐるのを助けて下すつた夫人があるのです。今その恩人キルマリン夫人のところへお禮に行くところなのです。』

婦人は倒れんばかりに驚いた。

『ああ、想ひ出しました、あなたがあの時の青年でしたか、私がキルマリン夫人です。』

ブラウンも吃驚して暫しはものが云へなかつた。キルマリン家は伯爵の若死にした後に惡い執事のために財產を橫領され、夫人は全く落ぶれて居たのであつた。

ブラウンは直ちに奔走してキルマリン家の財產を惡人から取り戾し、再び夫人を昔の安樂な生活に置き、二十年前の恩を返した。

◇インチケープの鐘

スコットランドの東岸にアバブロツクと云ふ所がある。そこの海岸は多くの暗礁があつて、殊に最も危險な暗礁にインチケープの岩と云ふのがあつた。この暗礁に船をぶつけて、毎年沈む數が少くないので、アバブロツクの高僧は色々と考へた末に、この岩に一個の鐘を繋ぎ、浮標をつけて海に浮べておいた。するとそれが浪のまに〳〵カン〳〵と高く響くので、水夫たちは大いに警戒し、爾來この岩に乘り上げる船は滅多になくなつた。



此の近海を荒し廻る海賊の首領にラルフと云ふのがあつた。偶々此處を通過した時に、水の上に黑い浮標の浮いてゐるのを見て、

『ハハア、これが例のアバブロツクの生臭坊主が、賣名のために浮べた鐘だな、よし取り捨ててやれ。』水夫たちに命じて鎖を絕ち切らせたので、鐘はずぶ〳〵と海中に沈んだ。

『ヤアこれで氣が淸々した。これからは坊主の御高德を讃へ奉る奴もあるまい。』

かくてラルフは船を沖合ひに漕ぎ出して、彼方此方と掠奪を逞しうし、獲物を滿載して勇ましく歸航に就いた。ところがスコットランドの東岸に來た時に、濃霧全く天を籠めて、一寸先きすら判らなくなり、ただ浪のまに〳〵浮いてゐるより他途がなかつた。『波の碎ける音がするから磯に近いのは確かだぞ。』『此處は一たい何處だらう。』『せめてインチケープの鐘が聽えればなあ。』口々に海賊たちの云つてゐる間に、船はドドツと暗礁に乘りかけた。この暗礁こそインチケープの岩であつた。ラルフは齒がみをして口惜しがつたが時既に遲し、浪は見る〳〵船を浸し、恰度鐘が沈んで行つたと同じやうに、海底深く沈んで行つた。

◇敬神の野

伊太利半島の先にあるシシリー島の、有名な火山エトナ山は、時々大爆發を起しては附近村落の住民を焦熱地獄に苦しめた。

十四世紀の中頃に久しぶりに大爆發した時のことである。黑煙天を蔽うて紅蓮の流燄地を這ひ、火山灰の下に埋められた村落は數知れなかつた。住民は金目なものを背負うて、われ先きにと逃げ出して行つた。その中に二人の青年が、異樣な荷物を背負うて行くのが人人の眼を惹いた。何だらうと思つて近寄つてみると、年老いて身の自由を失うた親を背負うて行くのであつた。



ところが不思議にもその青年の逃げて行く道には、熔岩は少しも流れず、綠草生ひ茂つて、誠に安全であつた。その青年の後ろに從つた人々丈けは、何の火傷もすることなく、安全な地へ逃れることが出來た。人々はこれこそ青年の孝心を天も憐んで、全く神助の賜物であらうと云ひ合つた。

後になつてその野原は「敬神の野」と名付けられ、二人の青年アナピヤスとアンフイノマスのために碑を建て、永く兩人の孝心と、野原の名の起原とを書き印した。今もなほその野原と碑とは殘つてゐるさうである。



長篇講談

塚原小太郎

寶井馬琴演
井川洗厓畫

手の鳴る方へ

今回雜誌キングの好みによりまして、塚原小太郎勝義の傳記を連續して申上げることにいたします。この塚原小太郎は、後に卜傳と號して卜傳流といふ一派を編出した古今の名人。天文の六年正月十七日の出生。父は常陸國水戸の城主佐竹左京太夫義宣の家老で、常陸國塚原城の主塚原土佐守と申します。この人も天眞正傳神道流の名人といはれた飯篠山城守家直入道長威齋といふ人の門人で、飯篠四天王の一人。飯篠四天王といふのは杉本備前守政元、上泉伊勢守秀綱、諸岡一羽とこの塚原土佐守。土佐守はなかなかの達人。總領を新左衞門といつて後に帶刀。次男が本講談の主人公小太郎勝義で、劍術の中から生れ出たやうな人物。父の土佐守は武藝者だけに閑さへあれば、兄の帶刀や門人に劍術を教へてをります。小太郎勝義それを見てをりまするが、一向自分は竹刀をとつて稽古をしようともいたしませぬ。で、ある日、土佐守が、

土『これ小太郎、其方はもう今年十三ぢや。子供でも今から武術の稽古をしなければならぬ。なぜ其方は竹刀をとつて稽古をしない』小太郎はニヤ〳〵笑つてゐたが、

小『お父樣、劍術などといふものは、習はないでも出來るものは出來ます。出來ない者

は幾ら一生懸命に習つても、名人達人にはなれませぬ』
土『それだから習へと申すのぢや。習つてさへ名人達人になれないといふのに、習はずにゐては尙ほ達人にはなれぬではないか。今亂世に出世をするには武勇にある。それにはどうしても劍道を十分に習つておかなければならぬ』
小『それは私も知つてをります。けれども私は習はないでも宜しいので』
父『習はぬでよいといふことがあるか。習ひなさい』
小『いえ、習はないでも兄さんよりは强うございます』側で聞いてゐた十八歲になる兄の帶刀が怒つた。
帶『小太郞、生意氣なことをいふものではない。私はお前よりは先に、お父上から劍術を習つて、今年で五年になる。もうぢき切紙か目錄にもして下さるといふのだ。お前はろく／＼劍術を習ひもしないで、兄よりは强いなどとは何だ』
小『兄樣、お怒りになつてはいけませぬ。私は本當のことを申上げたので』
帶『尙ほわるい。怪しからん奴だ。では立合つてみろ。私と試合をいたせ』
小『御免蒙ります。厭でございます』
帶『それみろ。口では生意氣な言をいつても、試合をしろといへば、負けるから厭だなどといふのだらう。これからは大きな言をいひなさるな』
小『いえ兄樣、負けるからいやだといつたのではありませぬ。試合をしても私が勝つにきまつてゐるから、厭だと申上げたのでございます』
帶『なにツ、勝つにきまつてゐると……どうも憎くいことをいふ奴だ。お父上、小太郞と試合をさせて下さいまし。あのやうなことを云はれては、私は默つてをられませぬ』
父の土佐守、ニコ／＼笑つてゐたが、
土『帶刀、そのやうに怒るな。何をいつても小太郞は十三ぢや。子供であるから相手にするな』
帶『いえ子供でもあんまり生意氣でございますから、懲しめのため一つ二つ打ツ叩いてやらうと思ひます』帶刀は赤くなつて怒つてゐるが、小太郞はたゞニヤ／＼笑つてゐる。
土『小太郞、兄があのやうに立腹をいたしてをるのに、何故其方は笑つてをるのぢや』
小『それでも兄樣は、試合をすれば負けるにきまつてゐるのに、あんなに煙を出して怒つてゐるからをかしいんです』土佐守も小太郞の言ふことがあまりに傍若無人であるから、少し憎くなつて來た。
土『小太郞、其方はなぜ左樣なことをいふ。兄は兄だけに劍道は上だ。そんな生意氣なことを申さぬで、早く兄に謝りなさい』
小『なにも謝ることはございませぬ。兄樣が試合をしたいといふのですから、その通りさせたら宜しうございませう』
帶『なにツ、生意氣なことをいふ。無禮な奴、勘辨ならぬ。さ

ア來いッ』帯刀は手を震はしてゐる。

土『では致し方ない。小太郎、兄と試合をしてみろ』

小『父上のお申付なら仕方がございませぬ。兄様、誠にお氣の毒様でございます』

帯『何が氣の毒だ』

小『弟の分際として、兄様を負かすのは誠にお氣の毒でございますが、これも因縁とあきらめて……』

帯『黙れッ。怪しからん奴だ。さア來いッ……支度をしろ』

小『支度などは要りませぬ。このまゝで木刀が一本あれば澤山でございます』兄の帯刀は襷鉢卷をして、すつかり支度をしたが、小太郎はそのまゝで木刀を右に持ち、ニコ〱笑ひながら立つてゐる。

『ヤッ』『エイッ』氣合の聲をかけて身構へに及びましたが、土佐守が見ると、帯刀の方は法に叶つてゐるが、小太郎の方は隙だらけ。土佐守肚の中で――小太郎口ばかり大きなことをいつても、まだ劍道は知らない、今に兄に酷く打たれゝば、あの傲慢も直るであらうと思つてゐる。その内に『エイッ』と叫んで、眞向望んで打込んで來た帯刀の鋭い太刀先、小太郎は打込まれたかと思ひきや、ヒラリッ體をかはして小太郎の姿はどこへやら、帯刀は空を打つて前へトン〱トンとのめつて行つた。



小『ドッコイ、兄様何をしてゐるのです。もう少し行くと行止りだ。ハヽヽ』……

小『ドッコイ、兄様何をしてゐるのです。もう少し行くと行目を打ちます』振返つて見ると、いつの間にか後の方に立つてニヤ〱笑つてゐる。クワッとして振返りさま帯刀が『ヤッ』と打込んで來た木刀、今度こそはと思ふと又姿が見えない。ポンポンと手を打つ音がして、

小『兄様、此方ですよ〱。手の鳴る方へ……』

帯『いや汝れッ』と、跡込んで打つて

かゝると、ヒラリ。打込むとヒラリ。その身の輕いこと、目まぐるしいやう。一太刀も合はせないで帶刀、グル〳〵廻つてばかり居る。終ひには目が眩んでヒヨロ〳〵する所を、小太郎が木刀で肩先をピシーリ。

小『いかゞ』強く打つたのではないが、氣合で打たれたので、帶刀ドタリそれへ倒れて、

帶『參つた……』

小『誠に失禮……』木刀を投出すと、ズン〳〵表へ出て行つてしまつた。あとに父の土佐守は呆氣に取られて、暫らくは小太郎の出て行く後姿を見送つてをりましたが、思はず膝を打つて、

土『あゝ恐るべき奴は小太郎、習はずしてあの腕前。なる程大言を吐くも無理はない。彼は生れながらにして劍道が具はつたものであらう……帶刀』

帶『はい……』

土『はいではない。どうしたのぢや、未熟者め。僅か十三歳の弟に、一太刀も交へずして打たれることがあるか』

帶『はい、どうも申譯がございませぬが、又あんな目まぐるしい奴はございませぬ、燕か蝶のやうな男でございます』

この時に土佐守が、塚原の跡を繼がせるのは、弟ではあるが小太郎である、いゝ後繼者が出來たと、心の中に喜んだ。ところが、何分にも稽古をつけてみると、小太郎の太刀筋が鋭い、迚も自分の手では扱ひきれない、これは兄弟子ではあるが、小太郎を仕込む者は、上泉伊勢守より外にないと、かう思



ひましたから、こゝで小太郎が十三歳の時に、初めて上州箕輪の住人上泉伊勢守秀綱の門に入れることになりました。

箕輪の小天狗

この上泉伊勢守秀綱といふ人は、もと上州箕輪の城主長野信濃守業政に仕へて、その武名を輝かしてをりましたが、長野信濃守が武田信玄のために滅ぼされてからは、信玄の招ぎを斥け、諸國を漫遊して武術を磨き、後に上州箕輪へ立歸つて來て、こゝに道場を開き、多くの門弟を取立てゝをりました。この伊勢守秀綱、幼名を大助といつて、七歳ぐらゐの時から山へはいつては、高い所から飛下りたり、高い岩の上へ飛上つたりして身體の輕く動くことの稽古をした。又は木の枝に棒を綱で吊して、それを動かしておいて、打つたり叩いたりしながら、劍術の眞似をしてゐた。十三歳の時に、愛洲陰流の愛洲移香といふ人に就て、初めて本當の劍術と槍術を學び、後に飯篠山城守家直の門人となつて、天眞正傳神道流を修業いたしました。ところが素より劍道の神とはいはれた程の人物、忽ち先輩を凌駕して、飯篠四天王の隨一と稱へられ、後に箕輪に道場を開いた時に、神道流に愛洲陰流を加へて、一つの流儀を究めましたのが神陰流。同じ『しんかげりう』でも柳生但馬守宗矩の開きましたのは新陰流で、上泉伊勢守のは神陰流でございます。この上泉の門人には出羽國上戸澤の住人磯畑伴藏秀國、これは後に柳生飛驒守のお師匠さんになつた人物、それに神後伊豆、丸女藏人、疋田文五郎、柳生又左衛門宗嚴（宗矩の父で後に但馬守）奧山孫次郎などといふ有名な人物がございますから、實に上泉の道場は非常な勢ひ。そこへ塚原小太郎勝義が入門いたしました。ところが、習はずして見を打込むほどの小太郎、伊勢守に就て稽古をすると、腕はグン／＼上がるばかり、先輩も打込まれることが度々でございますから、伊勢守の門人一同も、小太郎の腕前には舌を卷いて驚いてゐる。

昨日と過ぎ、今日と暮す内に、光陰に關守なく、小太郎早や十七歳に相成りました。正月の十一日、この日武士は具足開き、町人は藏開きなどと云つて、正月飾つた鏡餅を雜煮にして祝ひます。殊に上泉の道場では稽古初めでございます。伊勢守は早朝から起きて、齋戒沐浴、衣服を更めて道場へはいつて來ると、もう數十人の門人は詰めてゐて、師の姿を見ると、兩手をつき頭を垂れて

『先生、お早うございます。本日は御具足開き當日、天氣快晴、御目出度く御祝ひ申上げまする』

伊『オ、目出度いことである』挨拶が終ると、これから代り代りに稽古をする。時に伊勢守秀綱、塚原小太郎に目をつけてをりましたが、

伊『小太郎、けふは稽古初めぢや。一本稽古をして遣はす。さア參れ』

小『ハツ、有難き仕合せに存じまする』

先生御自身の稽古といふので、門人一同道場の周圍にズラリ

と坐つて拜見をしてゐる。小太郎勝義立上つて竹刀を執つたが、其の頃は竹刀といつても現今のやうに竹を四つに割つて先革を嵌め、中締をいたして柄革を嵌め、弦をかけ、音が冴えて叩いてそれ程利かず、打たれて徹へがないといふ器用な竹刀ではございませぬ。唯竹を四つに割つて糸で卷き、これをひめぢ革でこしらへた袋の中へ差込んである。同じ竹刀でも極つて不態なもの。小太郎之をとつて前へ出る。伊勢守殿が、

伊『さア、遠慮なくまゐれ』

小『ハツ……』小太郎後へさがつて神陰流の半身入身の青眼といふのに構へて、『エイッ』伊『ヤアッ』互ひにぢッとつけた。付けながら伊勢守秀綱、小太郎を見ると、實に兎の毛で突いた程の隙もない立派な構へ。『ウームこれは入門以來、非常な上達だわい』と心中に思ひましたが、油斷なく構へてゐる。

其内にいかなる隙を見出したか小太郎勝義、『ヤッ』と一聲打込む竹刀、心得たりと伊勢守、陰の構へを陽に開き、丁々發止丁發止、十七八合といふもの打合つたる有様は、實に物凄いばかりでございます。この勝負いかゞなるかと、門人一同肩を怒らし、手に汗握つて見てをりまする内に、『お面……』鋭い聲と共に小太郎の打込んだ竹刀、心得たりと伊勢守パチーリ受けようとして見事受け損じた。この時小太郎は上段の差面を打つて來たのですが、この上段の差面といふのは、劍術をお習ひの方は御承知でございませう、兩の手で振上げてゐたのを打下ろす時に、左の手で柄の頭を撥ねる、と一緒に鍔際を押へてゐる右の手が中柄へ滑つて、そこで打を向ふへ入れると、相手の頭を見事に打つ。伊勢守は立派に受けるつもりであつたが間に合はなかつた。强かに頭を打たれて、

伊『參つたッ』といふ伊勢守の聲。小太郎遙か後へ飛びさがつて、

小『恐れ入りました』門人一同思はずワッと感嘆の聲をあげる。伊勢守秀綱舌を卷いて御感心。

伊『小太郎、其方は非凡の腕前である。この方は上段の差面を打たれようとは思はなかつた。其方如き非凡の者が、我が門に現はれたといふことは、神陰流のます〱盛になる瑞祥である。其方は師に勝るものである』と、悉く御賞美。門人一同も小太郎をさして上泉の小天狗、箕輪の小天狗と呼ぶやうに相成りましたが、當人少しも慢ずる色もなく、朝は星をいただいて起き、夜は兵法の書物に目を曝して、子の刻(十二時)でなければ眠らぬといふ勉强ぶりでございますから、腕前はいよ〱上達するばかりでございます。

羽黑山の大入道

その頃、出羽國上縣梵字川の源、羽黑山付和川の祠大黑堂の別當に比那丸入道照海といふ修驗者がございました。身の丈六尺七寸、力量五十人力、赤樫の八角一丈餘りの棒を巧みに使ひ、自分が工夫をした太陽流の棒といふのを用ゐて、いかなる武藝の達人でも、唯一打に敵ふと豪語いたしてをります。

下には辨天堂の龍山、この者鎖鎌の達人、つゞいて毘沙門堂の滿海、大黑堂の金山、これを比那丸入道の天地人の門人といふ。その外讃岐坊、能登の坊、信濃坊をはじめ主從十三人、出羽國羽黑山を立つて諸方を山伏で修行をして歩きながら、武藝の道場と見れば、他流試合を申込む。圓海の腕前を知らずに、高が修驗者と侮つて立合をした者は、多くは八角の棒のために打殺されるか大怪我をする。それがだん／＼知れ渡ると、腕の出來ない武藝者などは『折角の御入來でござるが、先生御病氣で立合が出來ませぬ。これは輕少でござるが、御斷り料でござる』といつて、幾らかの金を包んで出す。いゝ事にしてそれで酒を飲み魚を食ふ。金がなくなると又道場破りをして歩く。始末にいけない坊主、けれども腕前が出來るから、誰あつて圓海を打込む者がない。

この圓海、廻りまはつて乘込んで來たのは上州箕輪上泉伊勢守の道場。此の時には伊勢守殿非常な大病、磯畑伴藏は諸國修行に出て留守、塚原小太郎は常陸の塚原城、父土佐守の許へ行つてゐて、これも留守でございます。圓海來つて見ると、實に宏大なる道場。流石の圓海も驚いて見てゐたが、



圓『どうだ龍山、滿海、金山、この道場の有樣は、流石に上泉伊勢守は日本一の武藝の司といはるゝだけに立派なものだな。百萬石の諸侯の格式があるな』

龍『左樣でございます』

圓『併し山師の玄關と申して、構へばかりは立派でも、伊勢守それだけの腕前があるかどうか分らぬてな』

龍『左樣でござる。師の坊のお腕前には敵ふものではございま

すまい』、
圓『ウム、試合を申込み、伊勢守を唯一打に打ち碎いて、圓海がこの道場を乘つ取つてくれう』
龍『それが宜しうござる』上見ぬ鷲の振舞ひ、こんな亂暴な奴に出會つてはたまらない。づか〳〵と玄關前へ立つて、
『頼まうツ』身體も大きいが聲も大きい。四邊へビリ〳〵ツと響く。
『ドーレ……』取次に出たのが上泉四天王の一人丸女藏人。見ると眞先に立つた比那丸入道圓海、身の丈六尺七寸、柿色の衣に篠懸の袈裟、頭には兜巾をいたゞき、八つの襞は乾兌離震巽坎艮坤の八卦に象り、色の黑きは地を象り、柴打ちの太刀を佩き、黑色の脚半に八層の草鞋、右手に突いたる一丈餘りの金剛杖、手許の丸きは日月星を象り、下の角なるは東西南北、須彌の四天を象つたものであります。小山のやうに肩怒らして立つてゐるその後につゞく山伏十數人、何れも身の丈勝れたる者ばかりでございますから、藏人驚いて、
丸『これは何れからお出で……』
圓『愚僧は出羽國羽黑山大黑堂の別當比那丸入道圓海と申す者でござる。上泉伊勢守殿に宜しくお取次を願ふ』さては噂に聞いた比那丸入道圓海といふのは此奴か、なる程力のありさうな大きな奴だと思つたが、上泉四天王の一人丸女藏人であるから少しも驚かない。
丸『ハヽア、只今伊勢守先生には御大病でござるが、別に御祈禱をお願ひ申した覺えもござらぬが……』
圓『祈禱にまゐつたのではない』



丸『然らば經でもあげに參られたか。先生は御大病ではござるが、まだ經をあげるには早うござる』

圓『默らつしやい。祈禱をしたり、經を誦むやうな坊主とは違ふわ。無禮な奴』

丸『ハ、ア、それではカツポレか阿呆陀羅經か……』いや圓海怒つたの何の。

圓『默れッ。比那丸入道を知らぬか』

丸『存ぜぬ。浪花節の雲右衛門入道なら存じてをる』

圓『いやますく＼人を馬鹿にした奴。伊勢守と一本立合をいたさうと存じて參つたのだ。早々取次げッ』

丸『いや、



それは今も申した通り、伊勢守先生には御大病でござるから、折角だがお立合は出來かねる。平癒いたしたらお出でを願ふ』

圓『なにッ、伊勢守は大病だ……アッハ、、、僞りを申すな。この比那丸入道が恐ろしいので、大病だなどと申して立合はせないやうにいたすのだらう。嘘をつくな。卑怯な奴だ。たとへ立合つて勝つにしても、手柔かにしてやるから、大病などといはぬで、早く取次げ』丸女藏人も年が若いから怒つた。

丸『默らッしやい。誰が僞りを申す。御大病だから御大病だと申したのだ。鮹坊主などに驚いて虚病を使ふやうなものではない。無禮なことを申すな』

圓『アハ、、、怒つたな。怒るなら取次げ。たとへ病氣であらうとも、伊勢守に會はぬうちは歸らぬ、早々に取次げ』いつかな肯かぬ圓海の無禮の態度に、丸女藏人



は此奴一番道場へ引張り込んで叩き毆つてしまはうと思つたから、『暫く待たつしやい』と待たしておいて奥へ來ると、磯畑伴藏と塚原小太郎の二人はゐないが、柳生又左衛門、神後伊豆、疋田文五郎、奥山孫次郎、那珂彌左衛門といつたやうな四天王八天狗などといはれる人物が揃つてゐる。疋田文五郎が、

文『丸女、何だ、大分な鬪で騷々しかつたが……』

丸『いや各々、大變な奴が來た。出羽國羽黑山大黑堂の別當比那丸入道圓海といふ坊主が來て、先生と試合をしたいといふのだ』

すると、奥山孫次郎が、

孫『ハヽア來たか。その圓海といふ奴は、修驗者ではあるが、諸方の道場破りをやつて、なか／＼腕前も強いといふことだ。併し迚も先生に及ぶものではない。先生が御健康なら直ぐに試合をして、後々のため一打に打ち懲してしまはれるのだが、あの御大病では迚もお立合は出來まい。折角だが斷つた方がよからう』

丸『いや奥山、拙者もさう思つたから斷つたのだ。ところが、僞りをいふな、圓海の名を聞いて、恐ろしくなつて大病などといつて逃げるのだらう、卑怯な奴だ、たとひ勝つても手柔かにやつてやるから立合をしろといふのだ。あんまり癪に障ることをいふではないか』

疋田文五郎氣が短かい人だから、

文『それは怪しからぬ。さういふ事を云ふ奴で見ると、このま

ま立合はないで歸したら、諸方へ行つて、先生のことを卑怯な奴だなどと言ひ觸らさぬものでもない。どうだ奧山、先生に此事を申上げると御心配をなさるから、先生には申上げないで、一道場へ引入れて、われ〳〵で立合つて一つこッぴどい目に遇はせてやらうではないか』

孫『さやう』

文『圓海といふ坊主、どれだけ腕前が出來るか知らぬが、高が修驗者、われ〳〵も先生のお仕込で、まさかに圓海如きに負けるやうなことはあるまい。一同でその圓海坊主を叩き毆つてしまはうではないか』

丸『さうだ。拙者もさう思つてゐるのだ。どうだ各〻』

『それがよからう。やッつけてしまはう』何しろ二十臺の若い人ばかりだから氣が立つてゐる。すぐに案内をすると、圓海入道主從十三人ぞろ〳〵ッと道場へ通つた。

憎まれ口の御見舞



丸女藏人がそれへ出て、

丸『お望みによつてお立合をいたすが、當道場の掟、殊に今も申した通り、上泉先生は御大病であるから、われわれがお相手をいたす』

圓『なにッお前達が相手をするのか。どうも弟子の貴樣では相手にとつて不足だが、道場の掟とあらば仕方がない。ちよいと片付けて



しまふから、さア出さッしゃい』

丸『なにッ、ちよいと片付ける。いや無禮なことを申すなッ』

圓『怒るな〳〵。そんなに怖い顔をしないで早く打つて來い。この比那丸入道が汝等を撫斬にしてくれるわ』と、大言を拂ひながら、例の一丈餘りの金剛杖、リウ〳〵と打ち振つてヤッといつて構へたのを見ると、左の足を踏んで右の足を締め、身體の構へは陰に陥ちてゐる。しかも棒を逆にとつて額の所に一文字につけてゐる。これ圓海が工風をした太陽眼の構へといふ。身體を陰に陥ちてゐて、打込む時に陽に開きながら棒が眞直に伸びてゆく。丸女藏人、禪鉢卷をすると、木太刀を取つてそれへ出た。『ヤッ』『ヤッ』双方睨み合つたが、流石大言を拂ふだけに圓海の腕前は大したもの。一寸の隙もないから丸女藏人打込むことが出來ない。暫らく睨み合つてゐる内に、圓海ちよいと隙を見せた。誘ひの隙と知りつゝ『ヤッ』と叫んで打込んで來た藏人の木太刀、ヒラリ體をかはしながら、息も吐かせず打込んで來た金剛杖、その早いこと目にも留まりませぬ。藏人身をかはす間がなく、肩先を手強く打たれて『参つた』と後へさがる。

圓『アッハヽヽヽヽ、それでも木刀の持ち力を知つてゐるから感心だ。まアせい〴〵勉強をしろ……さアお次だ』

疋田文五郎堪りかねて飛出した。

文『拙者は上泉伊勢守門人疋田文五郎と申す者だ』

圓『名前などはどうでもいゝ。さア來い』

『ヤッ』『ヤッ』打ち合つたが、圓海の腕前よほど勝れてゐるとみえて、二三合にして疋田文五郎打込まれてしまつた。

圓『アハヽヽヽ、どうも弱い奴ばかりだ。さアお次の番だよ』圓

腕にした坊主。神後伊豆それへ出ると、
圓『今度は貴樣が打たれる番か』
伊『默れッ。大言は後にしろ』怒つて見たが、腕前の相違は仕方がない。神後伊豆も二三合にして打込まれる。つゞいて那珂彌左衞門、奥山孫次郎、柳生又左衞門、皆圓海坊のために打込まれてしまつた。
圓『アッハヽヽ、いやはや何奴も此奴も弱い奴ばかりだ。さアもう相手になる者がなければ、早々伊勢守に出ろといへ』
丸『先生は全く御大病だ』
圓『本當に大病か。それならかく申す比那丸入道圓海、山伏の法を以て伊勢守殿病氣平癒の祈禱をいたして進ぜるから、病室へ案内をさつしやい』立合をするといふのではない。病氣平癒の祈禱をするといふのだ。こんな奴の祈禱は利く氣遣ひなからうが、利かなくてもともと〳〵通り、利けば先生の御病氣が癒ると思ふから、門人達相談の上伊勢守の病室へ通した。圓海一人と思ひの外、圓海が眞先に十三人の山伏、一度にぞろ〳〵ッと伊勢守の病室へ通つて、枕元へヌックとばかり突立つた。
圓『伊勢守殿でござるか。手前は出羽國羽黑山大黑堂の別當比那丸入道圓海と申する者、御大病の由御見舞にまゐつた』と、破鐘のやうな聲。弟子達これを見て、先生のお身體に障りはしないかとハラ〳〵してゐる。けれども伊勢守は、發熱甚だしく頭も上がらぬ有樣。
圓『大分お苦しいと見えるな。併し貴殿は御病氣で何よりお仕合せでござる。もし病氣でなくば、愚僧の金剛杖に當つて落命するやも測り難い。以後も羽黑の山伏が訪ねてまゐつたら、御病氣が第一でござるぞ。さても〳〵命冥加の伊勢殿ではあるわい。ワッハッハヽヽヽ』と、大口開いて打笑つた。御祈禱どころではない。思ふ存分憎まれ口をたゝいて、そのまゝノッソノッソと玄關の方へゆく。
これを見聞してゐた門人一同無念骨髓に徹し。
一同『山伏待てッ』
圓『何だ。待てと申すからは、立合をすると申すのか。立合なら何時でもまゐれ。この金剛杖が當つたが最後、汝等の命はないぞ』金剛杖を斜に構へて、ハッタとばかり睨まへた。血氣の門人、立上らうとした時に、
『待て、待て〳〵手出しをいたすな。控へい』といふ伊勢守殿の微かな聲。門人一同思はずハッと平伏する。
圓『手出しが出來ぬか。馬鹿め、アッハヽヽヽ、さア參らうか』ノッソ〳〵と力足を踏んで、十三人ぞろ〳〵ぞろ〳〵出で行く。あとには伊勢守殿、
伊『無念ぢや。小太郎にてもをりしならば……』と、たつた一言、ハラ〳〵と落涙に及ばれました。

猿涙を流して喜ぶ

此方は常陸國塚原城の父の許にをりました塚原小太郎勝義、書見をいたしてゐる所へ赤紙付の至急の書面、上泉四天王の連

名であるから、嗽手水をして披いて見ると、恩師御病氣中出羽羽黒山大黒堂の修験者比那丸入道間瀬がまゐつて、これ〳〵しかじかと事細かに認めてございます。怒氣滿面に溢れたる小太郎勝義、羽黒山の方をハツタと睨み、

小『己れ憎くき比那丸間瀬、山伏修驗の分際を以て、武藝の淵源恩師の御道場を荒せしのみならず、恩師の面前に於て暴言を吐くとは憎さも憎し。恩師左程の御大病と存ぜず、御看護申上げざりしはわが誤り。いでこの上は羽黒山に乘込み、比那丸入道を唯一打に打ち殺し、恩師の恥辱を雪ぎ、お詫の印となさん』と、決心いたした小太郎勝義、父土佐守に委細を述べて暇を請ひ、許しを受けましたから、こゝで旅の支度と、懐中には金子二十兩の用意、波平行安の大刀、關の孫六の小刀を帶し、枇杷の木を以て作りました三尺三寸の木劍を袋に入れて、これを脊負ひました。枇杷といふ木は輕くて打が利いて、當り所が惡いと敵を一打に打殺してしまふ。眞劍に類するといふぐらゐ。併し不淨を嫌ふ木であるから、敵を打ち殺すと、そこだけは黑く汚點になるのが枇杷の特徴。滅多に武藝者でも用ゐない。塚原小太郎と宮本武藏はよくこの木劍を携へて歩きました。いよいよ小太郎勝義、常陸國塚原城を立出でましたのは、弘治元年四月の上旬でございます。

途中も無事に出羽國へ乘込んでまゐり、羽黒山の麓へ來た時が四つ頃ほひ、只今の午前十時。ワイ〳〵人の騒ぐ様子に、何事であらうと思つて見ると、六七人の百姓達が一疋の大猿を繩で縛つて、それを松の木へ吊して、竹棹で今一突に突かうとするところ。

小『あゝ待てツ。暫らく待てツ』と、小太郎慌てゝ聲をかけた。

○『ヤアお武家樣でごぜえますか、何で止めなさる』

小『いかなる惡戯をいたしたか知らぬが、拙者の目にとまらぬ内は兎も角、目にとまつた以上は殺すわけには相成らぬ。どうか助けてやつて貰ひたい』

○『ヤアお武家樣の前でございますけれども、この猿の奴め惡い奴でございまして、私共の家へはいつて來て、飯櫃をあけて、中の飯を食ふでがす』

小『ハ、ア面白いな』

○『面白いことはねえでがす。さうしては其邊にある食物を出しては、みんな食ひ荒すでがす』

小『斷つて食ふのか』

○『冗談云はねえもんだ。猿が斷るものでねえ。私等が留守といふと入つて來るでがす。氣がついて追駈けてゆくと、途中で見えなくなるから、家へ戻つて見ると、家の中へちやんとはいつて、私等を見て笑つてゐるでがす』

小『ハ、ア猿が笑ふかな。併し猿は人間より三本毛が足りないなどと申すが、猿智惠と申して、三本足りなくても其方共より悧巧だとみえる』

○『お武家樣、猿の加勢するものでねえ。そればかりならいゝ

が、赤ン坊を戸棚へ押込んだり、蒲團を引裂いたり、悪い事ばかりするから、陥穽で捕まへたでがす。これからみんなで竹槍で突き殺してしまふでがす』

小『さうか。それは憎い奴であらうが、けふのところは拙者に免じて許してやつてくれ。その代りたゞは頼まぬぞ。金子三兩遣はすから、どうか猿を助けてやつてくれ』

〇『ヘアさうかね。三兩下さるかね……どうだね、みんな、このお武家様が三兩やるから、猿を助けてくれといふが』

△『さうさ。三兩になるなら助けてやんべえ。又今度捕まへたら、三兩になるだから……』いゝ料簡の奴です。

〇『それでは三兩で助けてやります』

小『それは忝けない』そこで小太郎懐中から三兩の金子を出して、百姓達に渡す。百姓達は喜んで、猿を松の木からおろし、繩を解いてやると、猿は逃げもしないで、小太郎の前に小さくなつて俯向いてゐる。

小『こりや猿、よく聴けよ。其方の眷屬は前世には火防の神と崇められ、日吉山王權現の使姫である。ゆゑに禁廷に於ては烏帽子をかぶり、直垂を着し、金の幣をたづさへて、主上の御前に火防の舞を舞ふとやら。それ程の身でありながら、何ゆゑ萬物の長たる人間の家を荒し、悪戯をいたすか。以來は心を改めて、人に禍ひをするな。よいか。さア早くゆけ』と頭を撫でてやると、

猿『へえ、これは塚原殿の若旦那でございますか。危いところをお助け下さいまして有難う存じます。何れこのうち御禮にあがります』もとより猿ですから口は利けませんが、こんな事を云つてをるのでもありませうか。ポロリ〳〵涙を流しながら、幾度か頭をさげてゐる。

小『分つたか、分つたらよい。早くゆけ』

名残りをしさうに、猿は振返り〳〵山の奥をさして行つてしまつた。後見送つて小太郎勝義、

小『さて〳〵首途によき功徳をいたした』と、ニツコリ笑つてこれより登山に及び、木の根、岩角を踏み越えて二里、頂上なる羽黒山大黒堂の玄關へかゝつて來た。塚原小太郎勝義がいかなる腕前を現はしまするか、次號のお樂しみといたします。

（つゞく）

◇湖畔の手習

エリー湖畔の白砂の中に埋もれて、指先を以て文字を書いてゐる子供があつた。彼は學校へ行くことも出來ぬ程の貧兒で、毎日苦しい仕事に働いては、一家のためにパンを儲けねばならなかつた。けれども彼にはたゞ一つの樂しみがあつた。それは文字を習ふことであつた。彼は天稟の才筆を與へられてゐた。

筆墨を買ふ金がないので、彼は暇さへあればエリー湖畔の砂に文字を書いて、自分の習字の練習をした。

今に尚ほ英學生の學ぶスペンセリアン流の優雅な書風は、かくして貧兒ピー・アール・スペンサーに依つて、エリー湖畔の白砂を習字帳として完成されたのである。



名士の家庭と愛兒の讀物



伯爵　二荒芳德

十三歳になり候のにはグリムス物語、アリス物語など西洋の物語を讀ませ居り候。雜誌では幼年倶樂部、少年倶樂部などを大變樂しんで讀み居り候。一冊の中必ず何か一つ參考になるものを記憶に殘し居り候。四歳に相成候のはコドモノクニを讀み居り候。これも色彩は非常によろしく候。



第五高等學校教授　八波則吉

尋一の幼兒と尋四の子は共に幼年倶樂部を愛讀してゐます。拙宅には小生の參考として、小學校用の副讀本や課外讀本などを數種集めてゐますが、それらの物の讀める所を自由に讀ませます。皆材料が精選してあるものばかりですから、有利であると存じてゐます。雜誌は幼年倶樂部の外は與へません。



醫學博士　佐々木秀一

幼年倶樂部、少年倶樂部、小學生全集、兒童文庫を讀ませてゐます。何れも有益な課外讀物と存じます。



評論家　高島米峰

小學校の五年になるのが一人ゐます。幼年倶樂部を最も愛讀してゐます。安心して與へられる雜誌です。

本は友の如く數少く精選すべし（ウイーランド氏）
書籍は貯藏せられたる精神なり（ボフエー氏）
氏より育ち（日本俚諺）

薪よ、馬になれ

素敵に面白い童話
御一家お揃ひで是非御覧下さい

小島政二郎
東風人 畫



一

昔、或處に、ゼルビンと云ふ若い木樵りがゐました。毎日朝早く、――まだ市ぢゆうの人達がぐつすり眠つてゐる頃に起き出て、手斧を肩に山へ行き、森の中で一日働いて、夕方になると、切り出した薪を脊負つて、『薪や薪、薪は要りませんか。』と町町を賣り歩きながら、家へ歸つて來るのでした。かうして、どうにかかつましくその日を暮してゐました。

すると或日のこと、その日に限つてまださう働きもしないのに變に疲れを感じたので、ゼルビンは、森の中の、景色のいゝ池のほとりへ腰を卸して、一休みすることにしました。

見ると、すぐ傍の青草の上に、美しいお姫さまが一人、白鳥の羽根で拵へた眞白な着物を着たまま、スヤ〳〵と眠つてゐました。お姫さまは、丁度その時何かいやな夢でも見て入らしつたのでせう、しきりに兩手を動かして何か拂ひのけるやうな御樣子をなさいました。

『お可哀さうに。夢の中で恐い思ひをして入らつしやるのだらう。こんなに日を顏一ぱいに浴びて眠つてゐれば、誰だつて恐い夢を見るに極まつてゐる。』

ゼルビンはかう一人言を云ひながら、親切にも立ち上つて、樹々の枝を上手に組み合せて、それへ自分の上衣を張りわたして、お姫さまの上へ日除けを拵へてお上げしました。

『これで幾らか安らかにお休みになれるだらう。――どれ、私

も一眠りしようか。』
から呟いて、もとの自分の場所へ歸らうとした時でした。ふと氣が附くと蝮が一匹、赤い舌を吐き出しながら、お姫さまの手首へ嚙みつかうとしてゐるところでした。
『畜生。』
一目見るが早いか、ゼルビンは手斧を振り上げて、二打ちに毒蛇を切り殺してしまひました。
その物音に、お姫様も目をお醒しになりました。さうして立ち上りながら
『有り難う。』とニツコリ笑つて仰しやいました。
『いゝえ。』とゼルビンも丁寧に禮を返しながら、彼は早や青草の上に腰を卸して、『失禮致します。』と御挨拶を申し上げるが早いか、そのままゴロツと仰向きに寢たと思ふと、遠慮なく目をつぶつてしまひました。
『ゼルビンさん。』お姫さまは優しく、



『私、あなたのお陰で命拾ひをしました。だから、何か心ばかりのお禮をしたいと思ふのですが……。』

『いゝえ、今のところ何も欲しくありません。それよりも、このまゝ靜かに寢かして下さるのが、何よりの思召です。』

かう云ふが早いか、彼はもうスウ〳〵と寢息を立ててゐるのでした。

お姫さまは、慾のないゼルビンの仕方を暫く眺めて入らつしやいましたが、

『ああ、何と云ふいゝ方だらう。――ゼルビンさん、私はいつまでもあなたの御恩は忘れませんよ。あなたがあの蛇を退治して下さらなかつたら、私は寢てゐる間に、意地の惡い魔法使に攫まつて、蛇にされるところでした。おお、思つて見ただけでも恐ろしい。本當に私はあなたのお陰で、かうして無事でゐられるのですわ。そのお禮に、これから先きあなたの望むことは、何でも私が叶へてさし上げますわ。――では、靜かにお休みなさい。』

かう云ひ終はると、お姫さまは、足許に落ちてゐた睡蓮をお拾ひになつてしづしづと池の岸まで歩いて入らつしやいましたが、そのまま構はずジャブ〳〵水の中へはひつてお行きになりました。

すると、睡蓮がそれをお迎へするやうに、みんな揃つてお辭儀をし、睡蓮の花はパッチリ目を開いて笑ひました。

やがて、お姫さまは腰の深さまではひつてお行きになつた頃、胸で空中に三度輪をお描きになつたと思ふと、水が左右にさツと分れて、そのままお姫さまの美しいお姿を波の下に呑んでしまひました。――本當を云ふと、お姫さまは、この山の池の若い王妃さまなのでした。

眠つてゐる間に、こんな不思議なことが起つてゐたとは夢にも知らぬゼルビンは、目を醒すと、すつかり元氣を恢復して、夕方までにはどつさり薪を切り溜めることが出來ました。で、それを積み重ねて、その上に馬乘りに跨つて繩を掛けましたが、その時ふと、

『馬のやうにこの薪の束に足があつてくれたら、どんなにいゝだらう。さうしたら、騎兵のやうに反り身になつて、威張つて街を通つてやるのだがな。』と考へました。すると、急に薪の束がムク〳〵と立ち上つたと思ふと、ニョキ〳〵と足が四本生えて、ポカポカ、ポカポカと歩き出しました。

『ホホウ、これは不思議不思議。いゝ乘り心地だ。――ウン、そこの橋を渡つたら、右へ曲がる。よし、よし。――さあ、ここからが街だ。やあ、みんな驚いて目を丸くしてゐるぞ。――愉快、愉快。』

ゼルビンは、大得意で薪の馬に跨つて、大通りを揺れて行き



ました。

二

その頃、市の眞中の廣場には、立派な王さまの宮殿が立つてゐました。

王さまには、アレリ王女と云ふ、たつた一人の王女さまが入らつしやいました。大層綺麗な、よく出來た方でしたが、一年ほど前から、どうした譯か急に沈んでおしまひになつて、毎日つまらなさゝうなお顔をして入らつしやいました。

王さまや王妃さまは大變御心配になつて、お醫者にお見せになつたり、御旅行に連れてお出でになつたり、いろいろ手をお盡しになりましたが、何の利き目もありませんでした。お醫者達は、誰も彼も口を揃へて、『別にどこと申して御病氣はございません。何かをかしい話でもお聞きになつて、王女さまがアハハと一度お笑ひになりさへ

すれば、すぐ直つておしまひになるのですが……。』と云ふのでした。

　そこで、王さまは、をかしい話を上手にしやべる女官と、吹き出さずにはゐられないやうな歌ばかり唄ふ女官とをお選びになつて、朝から晩までアレリ王女のお傍に附けてお置きになりました。

　今日も、アレリ王女はバルコニーへ出てつまらなさゝうに下の街を眺めて入らつしやいました。お傍には、例の二人の女官が、笑はずにゐられないやうなをかしな歌や話を、一生懸命にお聞かせしてゐましたが、王女さまはニコリともなさらずに、相變らず沈んだ御樣子をして入らつしやいました。

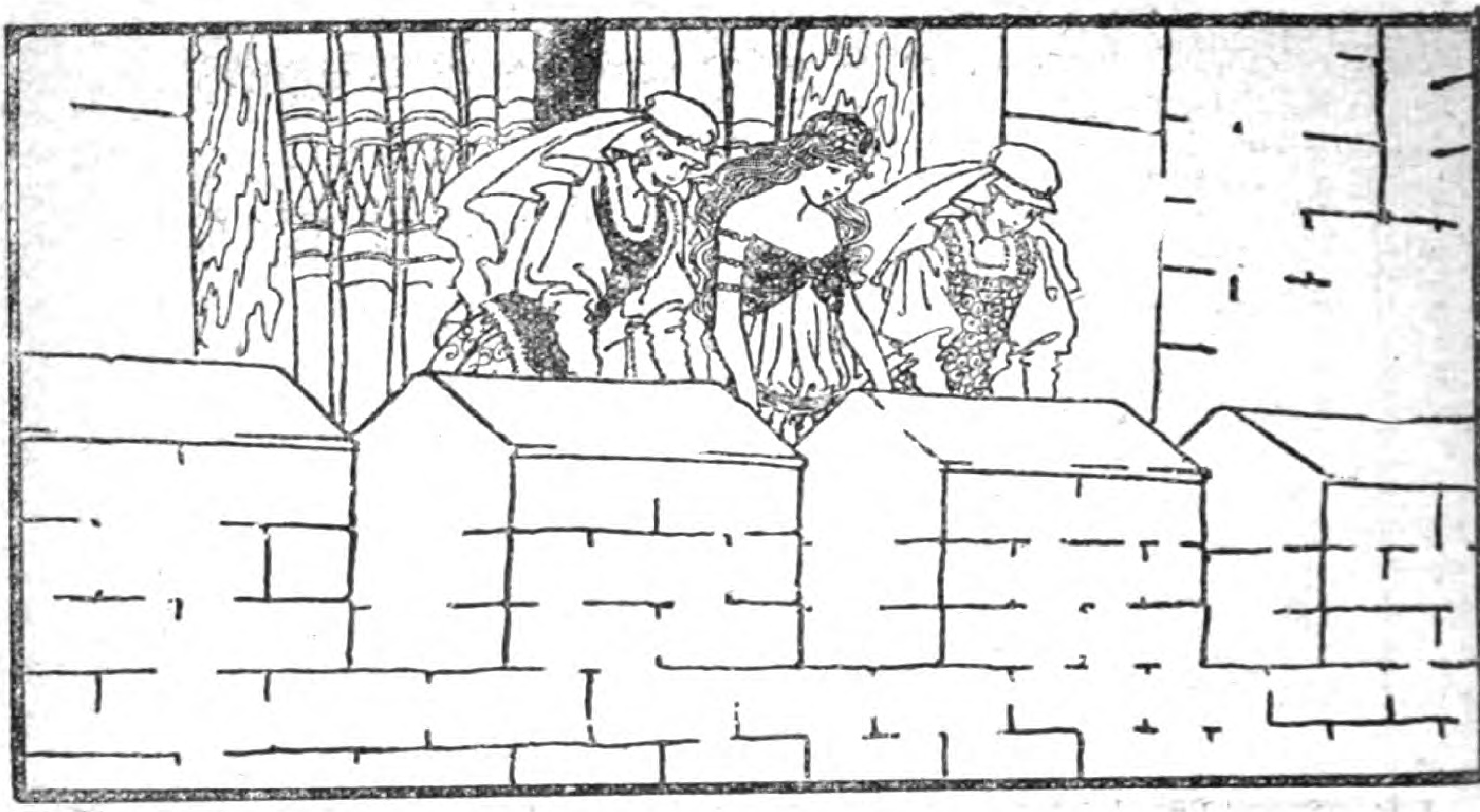
　丁度そこへ、ゼルビンが薪の馬に跨つて意氣揚々と御殿の下を通りかかりました。

　これを見た二人の女官達は、

『まあ、御覽遊ばせ。』と、アレリ王女に指さしする間もなく、オホホ、オホホと笑ひ出しました。

『オホホホホ、まあ、あの、オホホホホ、王さ





まのやうな、オホホホ、氣取り方と云つたら、オホホホ。』

『本當に、オホホホ、まるで凱旋將軍のやうなオホホホ、樣子をしてゐるではございませんかオホホホ。』

お互に笑ひ轉げながら、手に持つてゐたオレンヂを、我を忘れてポーンと投げつけました。

それが二つともゼルビンの顏にコツンと當つたので、『これは痛い。』と見上げると、この有樣なので、『やあ女官殿、をかしければ、お笑ひなさるがいゝ。──が、笑ふくらゐなら、いつそいつまでも笑ひ止まぬ方がよろしからう。──まあ、さうして一生笑つて入らつしやい。』

ところで諸君、ゼルビンには、池の若い王妃さまが味方に附いてゐるから叶ひません。女官達は、前よりも一層笑ひこけて笑ひこけて、どうしても笑が留まらなくなつてしまひました。

アレリ王女は、笑ひ物にされてゐるゼルビンが氣の毒におなりになつたので、

『お前達。いゝ加減に笑ふのをお止めなさい。』とお叱りになりました。

『ハイ。』とは云つたものの、二人とも、どうしても笑ひ止むことが出來ませんでした。

ゼルビンは、今度は王女さまのお姿を見上げながら、

『まあ、何と云ふ綺麗な方だらう。──しかし、どこか悲しさうな御樣子をして入らつしやる。私は、あなたが御幸福で入らつしやることを祈ります。さあ、どうしたら御幸福におなりになれるだらう。──さうだ。最初にあなたを笑はせた方のところへ、お嫁に入らつしやい。さうすれば、きつとお仕合せにおなりだらうと思ひます。』

ところで、諸君、よく覺えてゐて下さい。薪の馬に乘つた時は、誰にも──相手が王さまだらうが、王妃さまだらうが、敬禮をしなくつていゝのです。──よござんすか。それを、ゼルビンはつい忘れてしまひました。アレリ王女に恭しく一禮を

したはずみに、縄の兩端を持つてゐた兩手が弛んだから堪りません。薪はバラバラにくづれて、あッと云ふ間に、ゼルビンは地面の上へ放り出されました。尻餅を突いた拍子に、足が二本とも上へあがつて、そのままクルリと一廻りしたと思ふと、土の上へ坐つてしまひました。

人の轉がるのを見ると、なぜをかしいのでせう？　あれ程ふさいで入らしつたアレリ王女が、この時思はず、

『オホホホ。』とお笑ひになりました。

まあ、何と云ふ美しい笑ひ聲でせう。――その笑ひ聲を聞いたものは、まるで香水を振りかけられたやうに、清々とした氣持になりました。ところが、王女さまは何をお思ひになつたか、つとお立ち上りになると、笑ひを後に殘されたまま、急いでドアの中へはひつて行つておしまひになりました。

こつちはゼルビンです。その暇に、落ち散つた薪を拾ひ集めてギユツと縛つて、ズルズルうしろに引きずりながら、今度は歩いて自分の家の方へ歸つて行きました。

その時は丁度四時でした。四時は、王さまのお晝寢の時間です。安樂椅子の上でウトウトして入らつしやると、いきなりお首へ噛り附いた者がありました。驚いて目を醒まして御覽になると、アレリ王女でした。

『お父さま。』王女さまは、後は何も仰しやらずに、泣きながら額やら頬やら、王さまのお顔ぢゆうにキスをなさいました。

『どうしたと云ふのぢや？　何が欲しいと云ふのぢや？』

『いゝえ、何も欲しいのではございません。お父さまをお喜ばせに参つたのです。――お父さまは、永い間私のお聟さまを探して入らつしやいましたわね。今やつとその方を見つけました。』

『それは喜ばしい。して誰ぢや？　カバ國の王子か。――さうぢやない？　では、カプリの島の王子か。――さうでもない？　ウン、分つた。ソレントの王子ぢやらう。――さうでもない？　フフン、一たい誰ぢや？』

『あら、困つた。私にも名前は分りませんの。』

『名前が分らん？　それは困つた。』

『でも、たつた今し方、御殿の前の廣場で見掛けたのですけれど。』

『それはどこかの王子か。』

『さあ、それは存じません。』

『困つたなあ。わしはそんな雲をつかむやうな話を聞いてはゐられん。――これ、侍從共。姫のお附女官を呼んで、姫をお部屋へお連れ申せと云へ。』

やがて、二人の女官がはひつて來ましたが、まだ笑つてゐました。王さまの御前で笑つてゐるなどとはこの上もない無作法なことなので、王さまはお腹をお立てになつて、

『こら、馬鹿共。笑ひ止めい。止めいと云ふに。』

しかし、王さまがお怒りになればなる程、二人の女官はますますオホホホと聲高に笑ふばかりでした。ですから、王さまは



本當に怒つておしまひになつて、
『侍從長。この二人を連れて行つて、首をちよん切つてしまへ。』
『はつ。』
それを聞いた王女さまは、慌てて、
『お父さま、お忘れになつたの。お父さまの御代になつてから死刑をお廢しになつたので、世界中の人々からお褒められになつたことを。』
『さう〳〵、さうだつた。我々は文明人だつたのだ。よろしい、二人は死刑の代りに、土牢の中へ放り込んで置け。』
すると、二人の女官は、
『陛下。お慈悲でございます。もう決して笑ひなど致しませんから、どうぞお許し下さい。私達は魔法使に魔法を掛けられたのでございます。』
『我國に魔法使はゐない筈ぢや。』
『いゝえ、陛下。木樵りの乗つた薪の束に四本の足が生えて、ポカポカ歩いてまゐるのが魔法使の仕業ではございませんでせうか。』
『薪の束が歩く？　成程。侍從長、兵士に命じ

て、その男と薪の束とを取り押へて燒いてしまへ。』
『まあ、あの方を燒くのですつて？　お父さま、その方が只今私の申し上げた方ですわ。』
『え？　その男だつて？　ああ、わしのまはりの者は、みんな魔法に掛つてしまつたのだ。侍從長、急いで總理大臣を呼べ。』
大臣はすぐ現れました。脊の低い丸々と肥つた男で、歩いてゐるのだか、轉つて來るのだか、分らないくらゐでした。殊に、顎は二重にくくれて、しじゆう笑つてゐるやうな顔をしてゐました。
『來たか。』
待ち兼ねて、王さまの方から口をお切りになりました。
『國内に、未だ曾つて聞いたことのない事件が起つてゐるさうだが、どんな模樣ぢや？』
『恐れながら陛下。國内は至つて平和でございます。實は、私はここに警視廳からの報告書を持つてまゐりました。お聞き下さい。――ええと、昨日我首府で起つた事件は、次のやうであります。あんまり間食ひが過ぎて死んだ子供が十人、兄弟喧嘩が九人。――まづ事件と申しますと、これくらゐのもので、至つて少うございます。陛下には、大御心を安じ下さいますやうに。』
『そちの知つてゐるのはそれだけか。』と王さまはイラ〳〵なさつて、『わしはもつと知つとるぞ。一人の男が薪の束に乘つて廣場を通りながら、王女に魔法を掛けて行つたのぢや。それで王女は、その男を聟にしたいと申すのぢや。』
『陛下。そのことでございますか。そのことなら、私も存じてをります。總理大臣は、すべてのことを知つてゐなければなりません。それぱかりのことに、陛下は大御心をお煩らはせになることはございません。其奴をつかまへて燒き殺してしまへば、それで事件は治まつてしまひます。』
『その悪者がどこにゐるか知つてをるか。』
『勿論知つてをります。總理大臣は、すべてのことを見てをります、聞いてをります。』
『よろしい。では、十五分間のうちに、その悪者をここへ連れてまゐれ。若し十五分經つても連れて來なかつたら、總理大臣を止めさせてしまふぞ。――行け。』
『はつ。』
この時ばかりは、流石のニコ〳〵總理大臣も、笑つてばかりもゐられませんでした。次の部屋まで退くと、いゝ鹽梅に、そこでバツタリ警視總監に出逢ひました。
『君、君、その何だ。その薪に乘つて通つた奴を、今から十五分間――いや、さうぢやない、十分間だ、十分間にここへ連れて來ることを總理大臣が命ずる。十分間に遲れると、君は役目を止めなければならんよ。』
『はつ。』
警視總監は、すぐ宮殿を飛び出して行きました。（つゞく）

花と傳說

蘭のお禮

肥後の國内田の里から二里ばかりの僻村に某といふ男があつた。或る時、馬を曳いて隣村からの歸るさ、村境の峠でとつぷりと日が暮れていかさま物淋しい。男は『このあたりは日頃悪い狐が出て往來の者を誑かすと聞いて居るが、おのれ今にも出て見よ、目に物見せてくれるぞ』と、キッと心を張つて居た。すると向ふからわが子がたゞ一人ちよこちよこ走りに駈けて來て、『お父さんが餘り遲いから迎ひに來た』とまつはりつく。その男は『待てよ』と考へた。わが家から此處まで大分道のりがある。幼兒の一人やつて來られるわけが無い、偖は狐が化けたのだな。と心に思うたが顔には些とも出さず、『さうか、それは遠いところをよく來てくれた、さぞ勞れたらう、サア馬に乘れ』とその子をしつかと馬の背に結はへつけた。さて家に立歸つて見ると果してわが子は家に待つて居つたので、『憎さも憎い悪狐め』と庭の大木に括りつけ青松葉で燻し上げたから狐もつひに堪へきれず正體をあらはして苦しみ悶えて居たが間もなく息も絶えぐ\になつた樣子。そこへかねて恩になつて居るおばあさんが來合せてこの有樣を眺めあまりの不憫さに、『もう逃してやりなさい』といふ。ほかならぬ人の言葉故、背きもならず殘念とは思うたが縛めを解いて放ちやつた。ところがその翌日、又おばあさんがやつて來たので昨夜の話を持出すと、おばあさんは眉を寄せて、



『わたしは昨日は一日持病のために寢てゐたのぢやから、此家へ來よう道理がない』

それではやはり狐に甘々と欺かれたかと、男は此上もなく口惜しがつた。

さてその夜のこと、おばあさんの夢枕に一匹の狐があらはれて、

『わたしは昨日某といふ男に殺されようとした狐の妻でございますが、おばあさんの盡力をわたしが借りたお蔭で夫を助ける事が出來ました、就ては何ぞお禮がしたいと思ひます故どうぞ何なりとおつしやつて下さい』

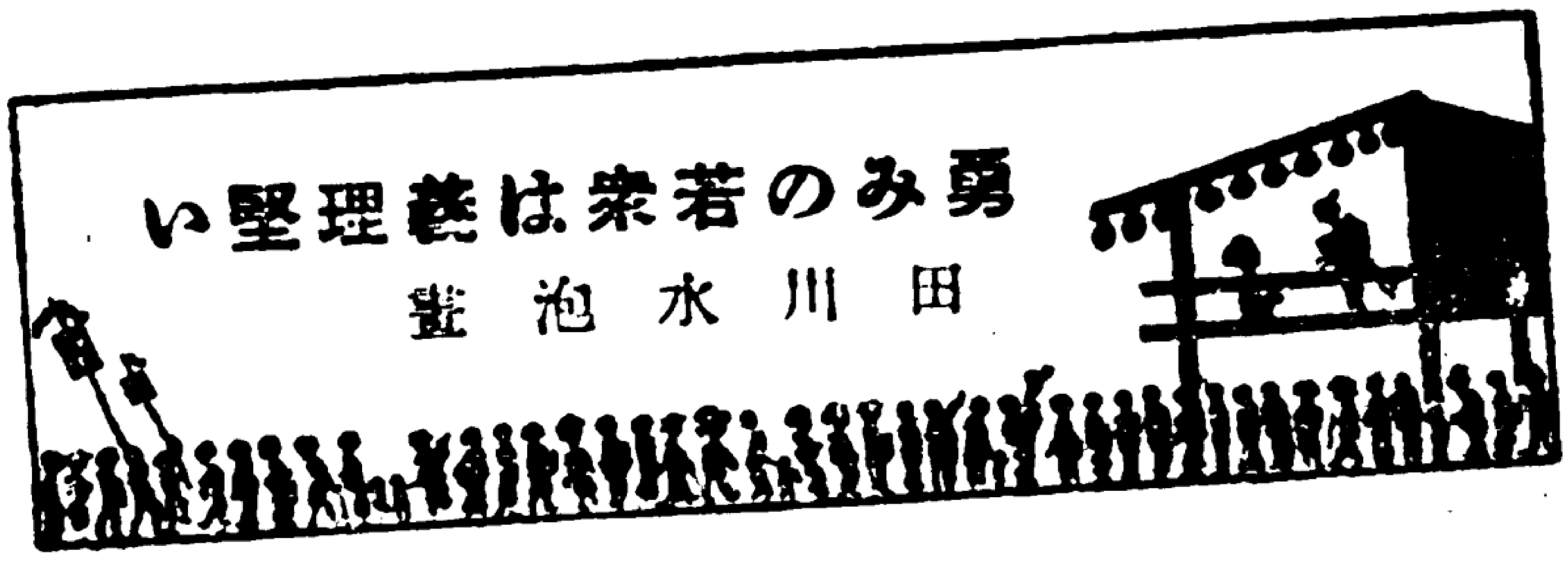
おばあさんはこれに答へて、

『わたしにはお蘭といふたつた一人の孫娘があつたが、ついこの間病で失くなつた、わが身にもかへようと思ふほど可愛かつた孫故、只の一時も忘れるひまがない、せめてはその名の蘭を庭に植ゑてそれを形身と眺めたいがその蘭がこのあたりにはない、それ故何處ぞからその根なり種なりを持つて來て庭に植ゑてはくれまいか』



と云つたと思ふと忽ち夢は覺めた。その次の夜更、しきりに庭の方で狐が啼くのでどうしたことかと夜の明けるのを待つて起き出て見ると、こはそも、庭一面に蘭が植ゑてあつた、日を經ると共に香りの高い花が吹き出した。それまでこの土地には蘭はなかつたが、それ以來はつと生ひ育つやうになつた。





落語　三年酒

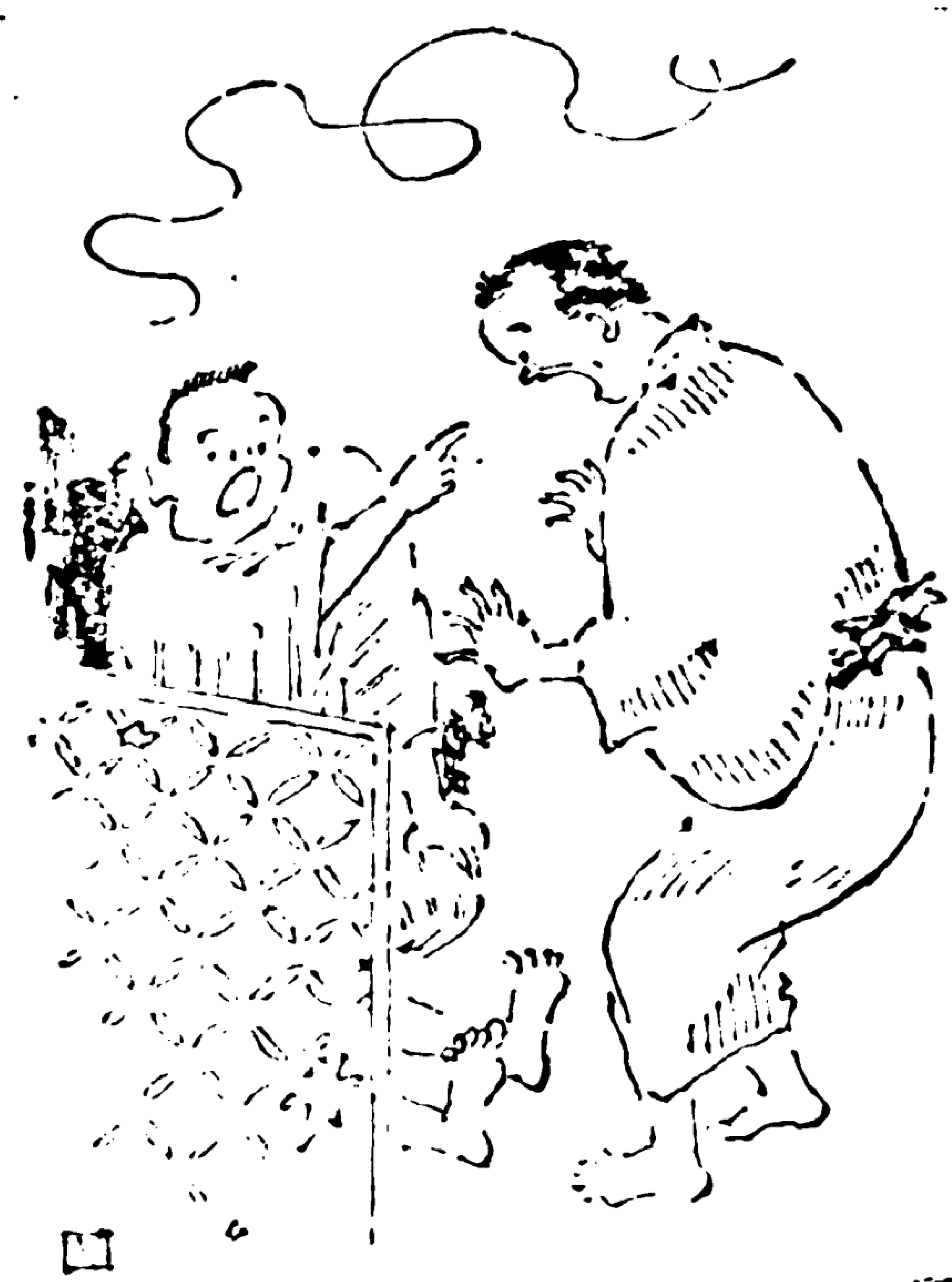
柳家金語樓演
谷脇素文畫

世の中が進みますると、召上る物までが變つてまゐります。その昔は年數をきつたお酒がありましたさうで、一年とか二年、或は三年酒と申しまして、一杯飲んで醉つぱらつて寢てしまふと、三年間夢の間に過ぎたなどといふ、今時そんな酒があれば、皆樣はお飲みにならないでせうが、落語家のわれわれは皆もう先を爭つて飲みます。けれども春先は飲みませぬ。飲む時節は十二月の二十九日頃、グーッとあふつて、酒屋が來ようが、家主が來ようが、高鼾で三年間過して、目が覺めたら晦日だつた日には、何にもならないことになりますけれども……昔はかういふお酒を飲んで醉つぱらつて、幾日も寢てをりますので、死んだものと間違へて埋めてしまつたら、又のこ〳〵起きて來たなどといふ、珍らしいやうな不思議なお話しがあつたさうで……〇『梅さん、ちよいと此方へはいつて貰ひたい。相談があるんだ』梅『へえ、何です』〇『あのね、こゝの主人が、たうとう冷くなつてしまつたのだ』梅『はゝア冷えたんですか』〇『いや冷えたんぢやアないよ。蹈まつてしまつたのだよ』梅『はア乾したのですか』〇『いや乾しやアしないがね。動かなくなつてしまつたのだ』梅『あゝさうですか。そんなら電車の車掌さんに頼んだらどうです』〇『車掌さんを頼んだら、どうかなるのかい』梅『へえ、動きまアす』〇『何を下らないことを云つてゐるんだ。もうしやうがないのだよ』梅『しやうがないといふと……』〇『突張つてしまつたのだよ』梅『はゝア、一遍茹でたら……』〇『おい、餡ぢやアないやな。人間を茹る奴があるか。死んでしまつたのだ』梅『あゝさうですか。そんな筈はないがな。去年あたり達者だつたけれども……』〇『去年達者だつて、死んでしまつたものはしやうがない』梅『それがね、後で間違ひになるといけねえからね。一遍當人に聞いてみたら……』〇『何を言つてゐるんだ。物が言へるくらゐなら生きてらア』梅『あッなアる程なア』〇『何を感心してるんだ。

ところでな、これはかうやつて家



に置けねえんだ。持つて行かなくつちやアいけねえんだ』梅『ははア交番へ……』○『おい鼠が死んだのぢやアないやな。お寺へ持つてゆくんだ。ところがお寺へゆかれねえ理由があるんだ』梅『ははアさてはお寺に借があるな』○『何を下らねえことを言つてゐるだ。實はね、こゝの但馬屋の主人といふのは、去年の秋頃から、大森の藤村助太夫とかいふ神官の所へ出かけて、大變神道に凝つてしまつたのださうだ』梅『何だい、神道といふのは……』○『神道といへば、つまり神様だ。神様に凝つてしまつたのだ。日本は神國だから神様がいい、佛の方は生臭坊主が多くつていけねえと、かういふのだ。それで神道々々とのべつ幕なしにいつてゐたさうだ。それをお内儀さんが寝物語に聞いてゐたんだ。そこでお内儀さんのいふには、良人が神道に凝つてゐたのだから、神道で葬式をしたいのだが、と云つて先祖から、おかづきになつてゐるお寺様を無にも出來ず、あのお寺は親類みたやうになつてゐるのだから、一つ坊さんにも來てもらひ、神道にも來てもらつて、兩方で仲よく半分づつやつて貰ひたいといふのだ』梅『なる程ね』○『尤も臍から上は坊さんの方で、臍から下は神道の方と、人間を分ける訳にはいかないけれども、神道と坊さんで半分づつ。で、神道の方は無論來てくれる筈になつてゐるさうだが、坊さんがなか〳〵來まい、といふのだがね。その和尚さんといふ人の所へ掛合に行くには誰がよからうと、いろ〳〵相談をした揚句、まアお前さんに行つてもらはうといふことになつたのだ。何故はこの使は人間が利巧ぢやいけないんだ。何所かぬけてゐなくつちやア、どうも扱へない役なんだ。まアお前さんなら、ぶッつけ……』梅『よしませう私は。どうせ私はぬけてをりますよ』○『いや、ぬけてるッたッて、さうその何だよ、頭ぬけてゐるんだよ。そ







のはつきりしない、むず〳〵した所が……』梅『ど、ど、どうせ私は、む、む、むずむずしてをりますよ。しては居りますけどもね、けどもね、その、ねえ、けども……』○『それ、そこがいゝんだよ。そのむず〳〵を見込んで頼むんだ。それを坊さんの前で二時間ぐらゐやつて貰ひたいのだ。いくら強情な坊さんだつて、しまひには腹を立つてしまつて、面倒臭いからゆくよと、かういはしてくれゝば此方のものだ。もしお前さんでいけなかつたら、後へ理窟屋の竹さんを出さうちやないか。あの理窟屋の竹さんを出して、理窟で攻めれば、坊主だつていゝ加減まゐつてしまふだらう……竹さん竹さん』竹『へえ、今聞いてをりましたが、私のことを理窟者と仰しやいましたが、なる程私は理窟はいふよ。理窟は言ひます。理窟は言ひますけれども、私は無い理窟をいつた事はありませぬよ。あるべき理窟をいふんで、それを理窟ツぽいといはれると……』○『それ、もうやつてゐらア。そこがいいんだよ。で、もしお前さんでいけなかつたら、三番目には少し荒つぽいのを出さうちやないか。誰がよからう。安さんがいいね……おい安さん』安『何だ喧嘩かい』



○『脅かしちやアいけねえ。お前さん、三番目に出るんだ。最初むずむずさんが出て、その次に理窟屋さんが出て、最後にお前さんが出て……』安『あゝさうか。坊主をスパッとやつちまふか』○『やつちまつちやいけない。殺すんぢやアないんだ。脅かしてくれりやアいゝんだ』安『それでいゝのか』○『それで用が済むんだ』安『なアんだ、つまらねえ。火でも放けるのかと思つた』○『火などを放けちやアいけないよ……それでも

四

し坊さんがきいたらば、但馬屋の主人が一昨日の朝家を出て、大森の神官の家へ行つて、歸りに目黒の伯父さんの家へ寄つて、一杯飲んで酔つぱらつて歸つて來て、寝たツきり未だに起きない、こ





れは死んだものと思ひますから、片付けたいとな』安『あゝさうか。それでいゝのか……ヤイツ、むずむず、理窟屋、早くしろ〳〵』竹『待つておくれ。今、衣服を直して……』安『チョツ女みたやうに何だ』竹『女みたやうに……おいそんな理窟があるかい。私は自分の衣服を自分で直してゐるんだよ。自己の物を自己で直すのに、何で他人にかれこれ……』○『おいおいそこでやつてゐちやアいけないよ。先方へ行つてやるんだい』竹『ぢやア表へ出よう……』安『實に安さん、お前さんはよく怒るね』安『竹さんもよく理窟をいふね』梅『お前さん二人はさういふけれども、私はどうもその何だ。安さんが怒るのは、私は知つてゐるんだよ。安さんが、腹を立てるのは、エー、まア、な、なんなんだよ、まア假りに、エーまア早い話が……』安『じれつてえな、この男は』梅『やアこゝだこゝだお寺は。私が先きへ入るよ……こんちはア、今日は』△『どーれ……』



梅『はツは、こーれ』△『いや何方からお出でになりました』梅『へえ、彼方からお出でになりました』△『おや〳〵、どうしてお出でになりました』梅『歩いてお出でになりました』△『あゝそれはそれは』梅『やれ〳〵』△『なアんだ。御用の趣は……』梅『へえツ』△『御用の趣は……』梅『へえ、御用のおめゝきは……』△『おめゝきではない。御用の趣……』梅『御用のおめめきは、愛宕下の但馬屋から二人來てゐるんだ。それでお前さんの所の、あの組長ゐるか』△『はア、組長……』梅『お前さんの所の親分……』△『親分……』梅『ほーら居るだらう。ほら頭』△『頭……はゝア住持でございますか』

梅『まだそんなにならないだらう。今三時半ぐらゐのものだよ。お前さん所の、ほら大統領』△『大統……はゝアお住持ならばをられます』梅『何か折ツぺしよつてゐるのかい』△『折ツぺしよつてゐるの

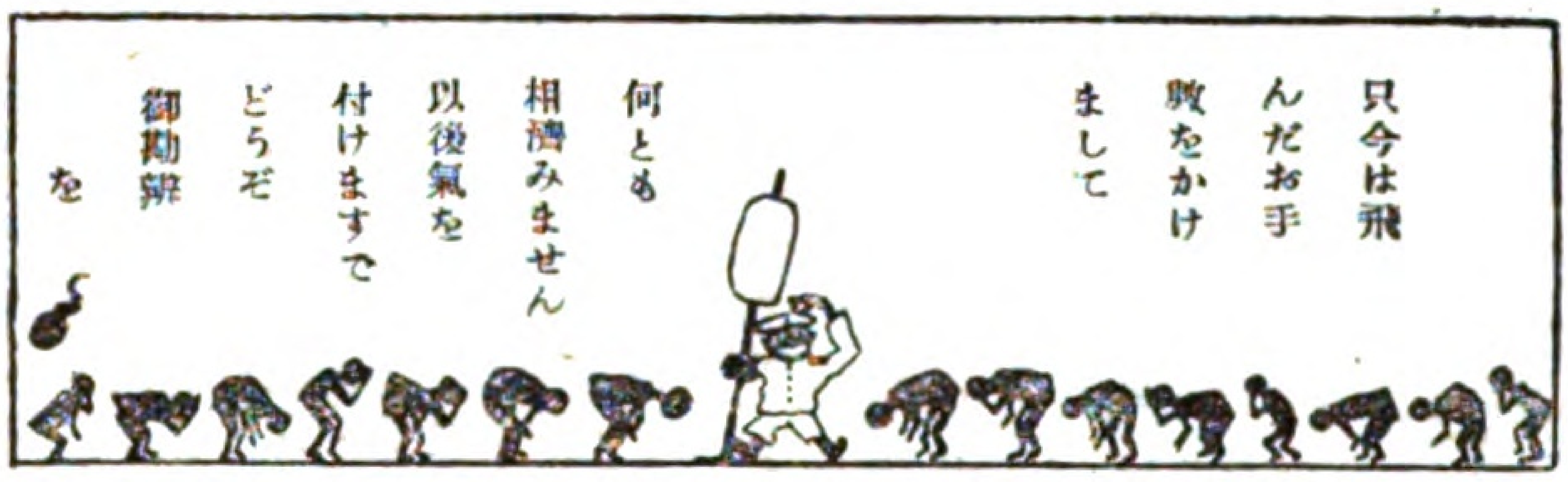


ではない。坐つてをられます」梅『あゝさうかい。ぢやア生きてるね』△『生きてをります』梅『その人にさういつておくれ。但馬屋から三人で來てゐるんだつて』△『どうかお上りを』梅『上つていいのかい。ぢやア上がらう……上がれとよ。附いてお出でよ。順がいゝよ。私が先で、次が理窟さんで、劍突さんが一番後だよ。ムズ、リク、ケンといふのだ。ムズリクケンで行かうよ……へえ今日は』坊主『はいお出で』梅『ホツ、凄い坊主だな。お前さんかい主は』坊『手前が當寺の住職でござる』梅『いやに納まつてゐやアがるな……えゝ愛宕下の但馬屋から來てゐるんだ、三人ね。それで話に來てゐるんだ。で、實はその、昆ぢやねえから、交番ちやねえんだ。固まつてしまつて、もうしやうがないんだよ、これは。今日は……」坊『何だい今頃。はい今日は』梅『で、ね、但馬屋が……あゝさうだ、但馬屋の主人がね、主人が一昨日の夕方歸つてきて。寢たツきり、未だに起きねえ、といふ譯なんだ。それで何か聞いても返事をしねえ。さはつて見たら冷くなつてゐるんだ。動かしてみると固まつてゐる。固ぢやねえから茹たつて駄目だとよ。つまり物が順に行つてゐや



アがるのさ」坊『はゝアおかくれになつた……』梅『いえ、そんな卑怯な男ぢやアないのさ。別に逃げ隱れはしないけれども、もうしやうがないんだよ』坊『はゝア、おなくなりになつた……』梅『いえ、なくなりやアしないよ。あんな大きなものが、なくなる奴があるものか。家にあるんだよ。あることはあるけれども、もう使ひ道にならないんだ』坊『はア、お年のお若いのにお氣の毒な。手前共と但馬屋さんとは親類關係の間柄、寺方の方で萬事萬端お葬式は……』梅『ちよつと待つてくれ、そ、それがね、別に借があるわけぢやねえんだがね。どうもお前さんの方はすぐ葬式の方へ持つて行つて、狡いよ』坊『狡くはない。お葬式は……』「梅」いや、それ





がその葬式まで往かねえんだ。といふのは、但馬屋の主人は去年の秋、何だよ、ウーン……あゝさうだ。去年の秋のわづらひに、いつそ死んでしまうたら、かうした嘆きはあるまいに……『坊『何だね、それは……『櫻『これは違ふか。去年の！……さうだ。去年は達者だつたつて、しやうがねえんだ。おゝ大森だ。大森の砂川捨丸……といふのは萬歳だね。さうぢやアねえや何とかいつたつけ。何とかした、何とかいふ神官の所へ出かけて、大變御神燈に凝つてしまつたんだ。早合點しちやいけねえよ。清元の師匠に凝つたわけぢやねえんだ。日本は神國だから神樣でなけりやアいけない。坊主なんか昔の坊主はえらいのがゐたけれども、今の坊主は……ウン今の坊主は……まアこれは極く内



輪の話がですよ。今の坊主は、早くいへァ碌でなしといふわけなんだ。その中にお前さんもはいつてゐるんだよ。……よく聽いてお出でよお前さん、他事ぢやアねえんだからね。今の坊主は碌でないから、神道でくといふことを、のべつ云つてゐたさうだ。すると、この内儀さんといふものが寢物語か何かでよく聞いてゐたんだよ。

だけれどもこれは寢物語だから、常にはならない。私が直かに聞いたわけでねえんだから。私の所へね、寢物語が聞えたわけぢやないんだ。私の家は本所なんだから。綠町五丁目なんだよ。あ四の廣い通りを左へゆくんだよ。さうすると蒲團屋と荒物屋の横をはいつて左側の四軒目が私の家だ。但馬屋は愛宕下だよ。愛宕下の寢物語が本所まで、どうやつたつて聞えやアしない。此方から聞きにゆけば聞こえるけれども、今到底そんな事をしてゐられたいんだ。何か、内職はないかと思つてね。諸方探したけれども、そらこの頃は不景氣だらう。たか〲いい仕事といふものがないんだ。まア遊んでゐるといけないつてんでね。お父さんは家でボール紙を貼つて、阿母は麻繋ぎを……』坊『何

だい、お前さん但馬屋さんの話はどうした』梅『まア／＼話の序がさうなんだよ。それでつまり一昨日の朝家を出て、但馬屋の主人が大森へ行つたのだ、大森へ。さうするとつまり但馬屋がまア、こゝのこの膝の所、お茶臺のある所だとするとだよ。さうすると、大森はエーと、まア此邊の見當になるんだ。それで歸りに目黑に寄つたといふわけなんだから、目黑は丁度まア此方の見當だね。さうすると、大森が……いや大森が、大森が此方だよ。さうすると、つまり目黑が膝で、このお茶臺のある所が、これが但馬屋ですから、さうすると目黑、目黑が向ふで、で、こゝに大森があるでせう。さうすると但馬屋から大森へ省線で行つた奴なんだ。汽車や何か通る省線があるんだよ。汽車も滅多に汽罐車は通らねえんだよ。通るには通るけれども、つまり石炭焚くのは貨物の時にだ。汽罐の力といふものは、えらいものだね。とに角あの汽罐一つで二十五六の貨物を引張つてゐるんだ。凄い力だね。チャ／＼ポッポ、チャ／＼ポッポ……』坊『ちよつと待つておくれ。お前さん幾才におなんなさる。頭の毛が禿てゐて、チャ／＼ポッポ、チャ／＼ポッポとは何た事だ。お前さんぢやア話が解らない。其方にお出でになる、次の方から伺がはう』梅『へえ、もう駄目かい。あゝさう。ぢやア竹さん、出ておくれよ。お前さん



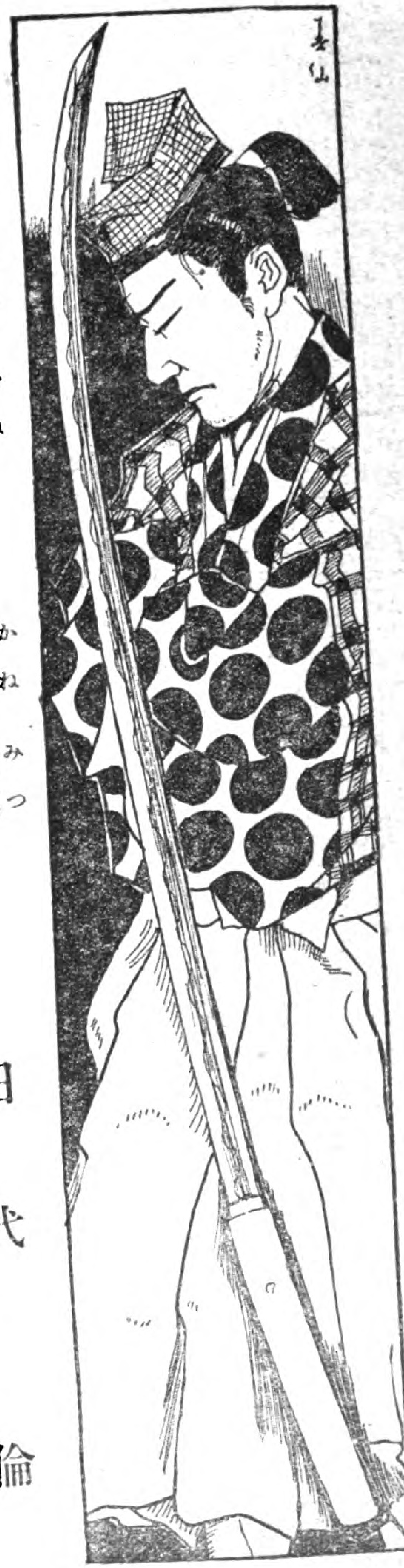
四

の形だよ』竹『ヘノ、エヘン……御免下さい。こゝで承つてをりましたら、大變御立腹の御様子ですが、それは少し物の理窟が違やアしませんかい。なぜかといふのに、まア物の理窟が、貴下がこの方と爭ひをなされば、貴下が愚になりますよ。愚ぢやア貴下はないでせうけれども、物の理窟が愚になる理窟でせう。この人は愚の人であります。低能でありますす。能無しであります。能無しだつて脳がない譯ぢやアない。脳はある。あることはありますが、血液の循環が悪いといふ譯なんです。私は先生に伺つたんですが、私の左利きは何も酒を飲みたいんで、左が利くわけぢやない、つまり脳の血液の循環が左の方に利くんださうで。けれどもこれは頭蓋骨を取れば直ぐ分る。人體構造からいひますれば頭に毛があらうが、坊主であらうが、結局は血液の循環が悪くなれば冷たくなる。早い話が美味いものを食へば、肥えて來る。貴下は肥つてゐるが、察する所、肴や肉を食べますね』坊『これはどうも話が飛ん

だ方へゆくが、但馬屋さんはどうしなすつた』竹『まアまア物には順序がある。まア理窟がさうでせう。死ぬには死ぬ理窟がなくちやならない。但馬屋にも理窟がある。その理窟といふのは、何も但馬屋さんに頼まれて言ふのぢやないが、要するに、血液の循環が悪くなつて、冷たくなつた。が、水死をしたのでないから、温めてみたところで、しやうがない。そこで物の理窟といふものが……』坊『どうもお前さんの理窟は何だか、さつぱり分らない。もうよろしい。理窟はよろしい。もう解りました。その次の方から伺はう』竹『併し物の理窟が……エヽもう駄目ですか。ああさうですか。ぢやアもう止します……おい安さん出ておくれ、お前さんの番だ』安『よしッ。出てやらア畜生め。おい鮹ッ』坊『鮹……鮹とは何だ』安『何だといふことがあるか。この狸め』坊『狸……』安『何をいひやアがるんだ。モ、ンガー、ガリガリ坊主』坊『ガリガリ坊主……』安『何時まで愚図々々いつたつてしやうがねえ。汝は今夜但馬屋へ来りやアいゝんだ。さう〳〵安来節か何か唄つて引上げりやア、跡は祝儀の方で片附けようといふんだ、手前と祝儀と半分やらせようといふんだ。それが出来るか出来ねえか、はつきりいへ。ヤイツ、はつきり云へといふんだ。もし出来ねえといつてみろ、この狸め、出来ねえとぬかしてみろ。鮹を持つて出刃庖丁でズブリ胴中を突ッ通して、ガリ〳〵と引つかき廻すから……』坊『もうよろしい。最初の方、出て下さい。初めの方がいゝ』梅『ヘツヘ、、、だから言はないことぢやアない。だから私が割に楽だといふんだ……で、つまりですな和尚さん、但馬屋の主人が一昨日の朝家を出て、大森へ行つた訳なんでせう。さうすると、但馬屋がこゝ、こゝとするでせう。さうすると、大森がこの見当……』坊『分つたよ』竹『分つたらようござい ますが。まア物の理窟といふのは、さういふ理窟には……』坊『ワーイ、もう分つた分つた』安『分つたら来い。このガリガリ坊主が、何でえーツ』坊『行きますよ行きますよ』

たうとう三人して和尚さんを連れてまゐりました。線香だ、お経だ、とやつて、親類、近所の人も大勢来てお通夜。お酒が出る。人の不幸を幸ひにして、ぺロ〳〵に酔つて管を巻く。唄をうたふ人もございます。賑やかな通夜最中、死んだと思つた当人、ウーンといつて生返つたから大騒ぎ。○『どうしなすつた。死んだのぢやアないかえ』主人『いや目黒の伯父の所で、飲んで酔つたら三年の間目が覚めないといふ酒を飲ませられたので、三年の間眠ることになつたのだ』○『三年のものが、どうして今晩目が覚めました』主人『あんまり賑やかだから、ちよいと息継ぎに一杯……』

（完）



名人講談　正宗と兼光

田代倫
名取春仙畫

時は嘉暦の頃、畏き邊りよりの禁裡御番鍛冶を新たに命ぜられるといふ御沙汰が下りました、諸國の刀鍛冶より一口づつの刀を鍛へて献上、それを鑑定の上、最も名作を聖上に献り、御番鍛冶にするといふのでございますから、刀鍛冶としては此の上もない名譽、此の事を聞いて諸國の刀鍛冶は一斉に起つた、けれども其の當時刀鍛冶の司といへば言ふまでもなく東は相模國の住人五郎正宗、西は備前長船の住人孫左衛門兼光、先づ此の二人に優る者はあるまい、今度の御番鍛冶の榮冠は此の二人の上に落ちるのであらうといふ噂とり〴〵、けれども正宗の父左近將監行光が先年御番鍛冶を命ぜられて居りますから、今又正宗に此の名譽を奪はれては、備前は日本の刀鍛冶の元祖といはるるだけに、備前の國の大恥辱でございますから、どうしても此の度は備前の手に此の榮譽を握らなければならぬといふので、備前の刀鍛冶は寄ると集ると此の相談で持ち切の有様。

『幾ら斯うして顔を揃へて相談をしたからといつて結局は小田原評定だ、殘念だが吾々には正宗殿に優る刀は打てようとは思はぬ、だが打てぬといつて備前から出さぬとあつては此の上もない名折、誰か正宗を凌ぐほどの刀打つものはないか……仕方がない、矢張り兼光に頼むか』

『吾々もさう思ふがな、何と申しても、彼の兼光に我等の代表として打たせることは出來ぬ』

『出來ぬといつて、人間は悪い奴だが、あの男より外に正宗を

向ふに廻して打つ者はあるまい』

『ウム、それもさうだ、では兼光に頼むといたさうか……だが、あの放埒では心許ない、酒を飲みながら打つたのでは、碌な刀は出來まい』

『其所が相談ぢや、吾々から意見をして、刀打つまでは精進潔齋、身を淨めて打つて、備前の名折にならぬやうにして呉れるやうに頼むより仕方はあるまい、幾ら兼光でも吾々が揃つて頼んだら、其の位の事は聞いて呉れよう』

『マアさうするより致し方はあるまい』

『それでは出掛けようか』相談一決して一同は打揃つて兼光の家へ參りました。兼光は景光の倅で、刀を打たせては人に優れた腕を持つて居りまするが、至つて心立の惡い男、殊に大酒を好んで、酒に醉ふと亂暴狼藉、傲慢無禮、人を人と思はぬ振舞。ゾロ〳〵と揃つて來た刀鍛冶一同、案内に從つて奥へ通ると、今しも兼光は大きな器でグビーリグビリと酒を煽つて居る所。

『兼光殿、お在宅か』

『オヽ、誰かと思つたら、政光、次行、大勢揃つて何か用でもあつてか』

『されば、知つての通り此の度の禁裡御番鍛冶……』

『アヽ其の事か、其の事は申すまでもない此の度の御番鍛冶は此の兼光に極つてゐる、其の前祝にでも參られたか』

『別段前祝といふ譯ではござらぬが、其の事に就て御相談申上げたい事があつて參りました』

『アヽさうか、兼光が御番鍛冶になつたら、弟子にでもして呉れろといふのか』

『あれだ、あれだから厭になつてしまふといふのだ』

『マア愚圖々々いひなさるな、あの位の事はいふだらうと、覺悟をして來たのではないか……別に弟子にして呉れといふ譯ではございませぬが、此の度の御番鍛冶、萬一他の手に取られるやうな事があつては、備前長船の名折れ、どうか兼光殿、適れ名刀を打つて、備前物の爲に氣を吐いて頂きたく、吾々揃つて御願ひに上りました譯……』

『イヤそんな心配には及ばぬ、貴公等が來ないでも、モウ御番鍛冶は此の兼光に極つてゐる、他の者の手には渡さぬから安心をして、居眠りでもして待つて居なさい』

『ではござるが、相州には五郎正宗といふ適れの者が居りますから……』

『ナニ五郎正宗……正宗が何だ、イヤサ適れの者とは何だ、正宗がどうしたといふのだ』

『イエ正宗殿は行光殿の御子息、人物といひ腕といひ、適れの者と專ら人の評判……』

『アハヽヽ、何だ、人の評判が當になるか、拙者の目から見れば、正宗などは子供だな、一人前と申したいがまだ半人前だ、全體正宗を此の兼光と比較して見るといふのが甚だ怪しからぬ』

『左様でござるかな』

『左様でござるかなとは何だ、各々もさうだ、此の兼光の所へ頼みに來るならば、禮服でも着て、禮儀を正しくして、先生何分お頼み申しますと、頭を下げて來るのが本當だ、それを正宗如き者と同日に論ずるとは何事だ、歸れ〳〵』盃を投り付けないばかりの權幕、驚いて一同は這々の體で歸つたが、其の評判の悪い事一通りでない、けれども腕はどうしても兼光に叶はぬから齒を食しばつて我慢をして居ります。

其の内に獻上の日が近づいて參りますけれども、兼光は刀を打たうともいたしませぬ、毎日酒ばかり飲んでゐる、弟子の兼助といふのが心配して、

『先生』

『何だ』

『モウ日が幾らもございませぬ、京都へ行く日が近くなつて參りましたから、早く刀をお打ちになつては如何でございます』

『餘計なことをいふな、打つて宜い時には、貴様が默つて居ても打つわ、總て名人といふものは、オイソレといつて安ッぽく打つものではない。貴様のやうな菜ッ切庖丁ばかり打つ奴はオイソレと打つか知らぬが、天下の名人の打つ刀は菜ッ切庖丁とは違ふぞ、氣の向かぬ時には打つことは出來ぬのだ』

『ヘエ、左様でございますか、天下の名人といふのは誰のことでございます』

『誰といふことがあるか、此の兼光だ』

『ヘエー貴下が天下の名人でございますか』

『考へる奴があるか、いざとなれば一日でも打つことが出來るのだ』

『ヘエ、それは先生の事ですから、一日でも打つことは出來ませうが、普通の刀と違つて、天子様の御手許へ上がる刀を打つて御刀鍛冶になるのでございますから、精進潔齋、身を淨めて打たなければならぬといふことを聞いて居ります、先生のやうに酒を飲んで打つては良い刀は出來まいと思ひますが……』

『默れツ、生意氣なことをいふな、酒を飲んでも此の兼光の打つ刀は、天下何者にも劣らぬのだ、馬鹿めッ餘計な事を申さず、酒を買つて來い』

『ヘエ……』

聞き兼ねたと見えて父の兼光が、

『コレ伜、それはお前が悪い、兼助のいふ事が正當だ、畏れ多くも天子様の御手許へ上がる刀を打つのだ、酒を飲んだり、心を穢く持つ時は、自然其の刀に亂れが來る。亂れのある刀は諸侯方の御手許へ上がる刀でも御用ゐにはならぬ、況して一天萬乘の君の召される寶刀、そんな行ひをして打つては、刀の汚れになる、身を謹しみ、心を淸らかにして……』

『お父さん〳〵餘計なことを言ひなさるな、此の兼光は假令酒を飲んでも立派な物を打つて見せるのだ、要らざる事を言はずに、お父さんなどは炬燵にでも入つて寢てゐれば宜いのだ……

兼助、酒を買つて來いといふのに何故買つて來ない、馬鹿め』父に逆ひ、弟子を叱り付けて毎日の酒びたり、其の事を聞くにつけ他の刀鍛冶も『ア、惡い奴は兼光、此の備前で、あの男より腕のある者はないのだから、本來なら身を謹しみ正宗に劣らない刀を打つて、備前鍛冶の名を揚げて呉れなければならぬのに、此の頃の行ひ、憎い奴は兼光、是では迚も良い刀は打たれまい』と、落膽の餘り、侮り憎しむ者はあつても一人として善く云ふ者はございませぬ。

期日が近づくと流石に兼光もチッとしては



居られない、

『コレ兼助、細工場の支度をしろ』

『ヘエ、お仕事をなさるのですか』

『當然だ、乃公の顏色を見たら言はれなくとも細工場の支度をする位の考へになれ、馬鹿野郎』

『ヘエ、どうせ私は馬鹿野郎でございます』腹が立つやうなものゝ、兼光が是から刀を打つのかと思ふと、弟子の兼助も心が勇んで居ります。

細工場へ入つた兼光、やがて打ち初めましたが素より腕の出來る男、打上げたのは立派な刀、

『兼助、立派な物が出來たぞ、仲間の者へ參つて、禮服着用で、兼光の鍛へた刀、有難く拜見に來いと觸れて廻れ、サア酒だ酒だ』

けれども誰あつて見に來る者はなかつた。

之に引替へて相州鎌倉に居りまする五郎正宗に於ては、此の度の台命を承ると、其の日より精進潔齋、水を浴びて身を淨め、神佛を祈り、精神を籠めて鍛へた刀、普通の刀鍛冶は、切れるやうに〳〵と鍛へる中に、正宗のは身を守るやうにと祈つて鍛へる平和の刀、之が刀鍛冶としての本來の主旨、切れるやうに〳〵と心掛けて打つ刀は血を見なければ鞘に納まらない。之を惡刀といふ、村正などの刀が是であります。或る時正宗が村正に小言をいつたことがある、『總て刀といふものは人を切る爲に持つものでない、我身を守る爲に帶するものである、刀鍛冶も其の事を念頭に置いて、身の守りになるやう、穩かに打たなければならぬ、お前の刀は人を切る爲に打つ刀である、其の證據を見せて遣はす』といつて或る小川の所へ行つて正宗の鍛へた刀と村正の鍛へた刀、二口を水の流れに逆つて立てゝ置いて、水上から紙を流した、紙は水流に從つて流れて來て、村正の刀の前へ來ると、スッと二つに切れて流れた、處が正宗の刀の前へ來ると、紙は傍らへ刀を除けて流れた、之を見て正宗は懇々と村正を諭したといふ話がございますが、實に味ふべき事柄でございます、正宗の刀は此の穩かな點に於て名刀とも申すべきでございませうが、況んや今回は一天萬乘の君の御佩になる刀、之が納まれば御番鍛冶の榮冠を得るのでございますから正宗に取つては一代の名譽、魂を籠めて打上げた刀、惡からう筈はございませぬ。

扨日が近づいて參りましたので孫左衛門兼光は、弟子の兼助を供に連れて備前を出立、途中も無事に京都へ着いたしました、直ぐに鍛へた刀を納める、尤も兼光、正宗の二人だけではございませぬ、美濃、大和、河内、攝津、越後、九州其の他の國々より、我こそはと集つた刀鍛冶四十餘名、所定の日までに殘らず納めたが、一人一口といふ規定でございますから四十餘口、之を一々審査員が鑑定をして、第一位、第二位を定めるのでございますから中々の手間、依つて『選定の上は使者を以て御通知いたすから、一旦各〻には御引取りあつて然るべし』とい

ふお達し、ソコで刀鍛冶は皆夫れ〳〵國へ立歸ることになりましたが、正宗と兼光は尚も京都に滯在、其の間も正宗は、朝起きれば、齋戒沐浴、神佛を禮拜して、只管當選を祈つて居りまするが、兼光は水を浴びるどころではない、酒を浴びて太平樂を並べ、甚だしきは遊女に戯れるといふ不謹愼。

『兼助、乃公は決定を聞いて歸らうと思つたが、モウ此んな菜ツ葉や芋の煮たのばかり食はせるやうな所に居るのも厭になつた、先へ國へ歸るから、貴樣は後に殘つて、決定を聞いて歸つて來い』

『へエ、待つて居ても、どうせ駄目でございませう』

『ナニツ』『イエナニ此方の事でございます、先へお歸りになつても宜しうございます』

『ウム歸る、乃公は第一番には極つてゐるが、念の爲だ、殘つてゐろ』

『へエ、一番といふことが分りましたか』

『分らぬでもさう極つてゐる』

『亂暴だ……』兼助を置いて兼光は京都を立つてしまひました、兼助は後に殘つて恃みにならない事を恃みにして公表の日を待つて居りました。

此方は備前へ立歸つた兼光、直ぐに仲間の刀鍛冶を呼集めた。

『兼光殿お歸りか』

『どうでございつたか兼光殿』

『コレ〳〵兼光々々と申すな』

『へエ、何と申しますな』

『一天萬乘の君の佩される寶刀を鍛へた兼光だ大先生と言へ』

『へエー、それでは貴下のお打ちになつた刀が、御取上げになりましたか』

『イヤまだ極らぬ、今に兼助が歸つて來れば分るが、遠からず拙者は禁裡の御番鍛冶、貴樣達とは位が違ふ、名を呼ぶことがあるか、大先生といへ〳〵』

『イエそれでもまだ極らない内は安心が出來ませぬ』

『馬鹿をいへ、極つたも同樣だ、貴樣達も酒肴を用意して祝に持つて來い』グビーリグビリと酒を飲んでの怪氣焔、一同も驚き呆れて引取りましたが、ア、モウいけない、あの樣子では迚も良い刀が打てよう道理がない、今回の名譽も正宗殿に占められた事であらうと、一同もガツかりして、兼光の惡口たらたら、其の内に兼助から何日歸るといふ手紙が參りましたから、一同の刀鍛冶も其の日は兼光の所へ集つて待つて居る、處へ歸つて來た兼助、

『ヤア皆さん、お揃ひでございますか』

『オ、兼助殿お歸りか、お疲れでございませう、どうでございましたな京都の模樣は……』兼光ジロリと見て、

『兼助、どうだ、乃公が第一位だらうな、御番鍛冶は此の兼光だらうな』

『へエ……』といつたが兼助の眼には涙が一ぱい

『先生いけませぬ』
『何ッ……』
『第一位は相州の五郎正宗でございます』
『何ッ、正宗だ……馬鹿をいへ、それは人の噂を聞いて來たのだらう、決定ではあるまい』
『イエ決定でございます、愈々正宗といふ事が極ると、何所へ行つても正宗はえらい評判、それに引替へて私の顔を見ると、あれは備前兼光の弟子だ、大きな事ばかりいつても、御斧鍛冶になれなかつた、宜い氣味だと、私の顔を見て笑ひますので、私は飛んだ恥を掻いて歸つて參りました、先生、だから言はないことではございませぬ、是といふのも、貴下がお酒を飲んだり、身を淨めないで打上げたからでございます、貴下ばかりではない備前鍛冶一同の恥辱でございました』と言ひ差して兼助はワッと男泣に泣出しました、之を聞いて一同も、豫て期したることながら、流石に言葉もなく互に顔を見合せるばかり、



『エ、イ何で泣く兼助、まだ極つたことではない、追つて正式の使者が京都から來る筈だ、其の使者は必らず兼光の第一位であることを知らせて來るに違ひないわ』
『イエ先生それは違ひます、確かに第一位は正宗といふことを聞いて參りました、何れ正式の使者が參るには違ひございませ

ぬが、私の言ふことに違ひは……』

『默れ／＼、餘計な事を申して師に恥辱を與へる不埒者、馬鹿めッ』といふと持つて居た盃をパッと打ち付けたのが兼助の額へ當つてタラ／＼と破血、

『アッ、先生、私の顏を……』

『打つたがどうした、生意氣な事をいつて師匠を恥かしめる不都合者、トットと出て行け』惡鬼のやうな顏をして睨み付ける有樣手も附けられない、一同の者は這々の體で歸つたが、モウ頼みの綱も切れて一同はガッカリして泣くに涙も出ぬ位、それでも正式の使者が來るといふのが切めてもの頼み、使者が來たらと待つてゐる内に、愈よ使者の到來、一同は又々兼光の所へ集つて參りました、流石の兼光も此の時ばかりは裝束を改めて出迎へました、けれども使者の口上も、兼助の報告を裏書したに過ぎなかつた。

第一位は相州の住人五郎正宗、當兼光は第十七位と極つたり。



是れだけの事を告げて使者は引上げました、流石の兼光も顏色青ざめ、ブル／＼身體を震はして居ります、耐へ／＼た一同の怒りは一時に勃發した。

『コレ兼光殿、今までの行ひ、どうせ碌な刀は打てまい、今度の第一位は相州の正宗殿と、豫て思つて居たが、切めて第二位

三位にでも成ることか、備前長船を代表する刀が、第十七位とは何事だ、よくも〳〵其の様な鈍刀を打つて、吾々に恥を掻かせたな、此の返報はきつとするから覺えて居ろ馬鹿者め』

『此の大白痴』口々に罵しる跡に父親も、

『コレ兼光、此の有様は何事だ、今になつて思ひ知つたか、適れ天下の刀鍛冶よと、いはれるやうにと朝夕に、神や佛に此の父が、願うて居るのが氣が付かぬか、尊い御方のお刀、願うてもない事ゆゑに、行ひを愼しみ身を淨め、念にも念を入れ、魂を打ち込んで打つべきに、親の意見も聞容れず、日毎夜毎の酒びたり、我身ばかりか備前鍛冶の名に泥を塗つた大白痴、それでも刀鍛冶だといはれるか、あの此所な不所存者め、ア、情ない事をして呉れた。此の父は人に顔向けが出來ぬ、穴でもあれば入りたい』と髪の毛を掴んで口惜泣き。

『エ、イ、よくさわ〳〵と泣きくさる、此の兼光が十七位とは使者の口上受取れぬ、正宗めは長く京都に停まつて居たといふことゆゑ、大方夫れ〴〵の役人めに賄賂まひなひ、金で位を買つたに違ひないわ、高の知れた五郎正宗、此の兼光、鎌倉へ乘込んで、必らず正宗を弟子にして見せる、正宗を弟子にして參れば申分あるまい』

『馬鹿なことをいふものでない、日本の國々から集つた刀鍛冶は四十餘人、其の中で第一位を占めるほどの正宗殿、何でお前如きが弟子に出來ることか、さういふ事をいふ口で、何故今までの行ひを愼ち、切めて正宗殿の弟子になり、此上の修業をして、適れ立派な刀鍛冶となり、此の恥辱を雪がうこそはいつて呉れぬ、私の心が解らぬか、正宗殿は小さい時に、繼母が殺さうとしたのを怨みとも思はず、自分の身を神に捧げ、雪の中に水を浴びて繼母の病氣の平癒を祈り、剩へ母の命に代つて刄の下に脊を切られ、脊割正宗とさへいはれるほどの孝行者、親を足蹴にする其方とは雲泥萬里の心の相違、何で正宗殿に及ぶものでない』

『エ、イ言ふな〳〵、我子を賞めもせず、正宗を賞める情なし親父め、聞く耳持たぬわ、是から鎌倉へ行つて、正宗を必らず弟子にして見せる、イ、ヤ弟子にすることが出來ねば、首にして持つて來る』傍若無人の振舞に、弟子の兼助仲間の者も、呆れて顔を見合せる、餘りの事に父の景光は、切歯をいたして居りましたが、果は耐へ兼ねて、ワッとばかりに其の所へ泣き倒れました。

それから一月の後、相州鎌倉なる五郎正宗の邸を尋ねる一人の男がございました、それは言ふまでもなく備前の兼光、人毎に正宗の評判の好いことを聞くのも癪の種、尋ね當てた雪の下の正宗の邸、玄關兩側には御番鍛冶の印、菊の御紋の附いたる高張の厳めしさ、怨めしさうにそれを睨み詰めて居りましたが、軈て氣を取り直して玄關の前に立ち、

『頼まう』

『ドーレ……』と答へて出て來たのは、正宗の門人彦四郎貞

宗、此の貞宗は正宗の十哲の一人、後にに正宗の娘の婿となつて相州流の秘傳を授けられたほどの人物。

『お出でなされませ、何方から……』

『拙者は備前から參つた者だ、名前は申されぬが、正宗は居るか』大變横風な男だと思つたが、貞宗も穩かな人ですから、

『ハイ、在宅いたして居ります』

『さうか、正宗に會ひたいと思つて、態々備前から參つた者だ、取次げ』

『ハイ、暫らくお待ちを願ひます』貞宗も驚いて奧へ來て、

『先生に申上げます』

『貞宗、何事であるか』

『只今玄關へお人が參りまして、備前から參つた者だと申して居ります、誠に其の態度、言葉遣ひ横風でございまして、普通の人とは變つて居ります、ひよつとしたら氣が狂つて居るのではないかと思ひます、御取次いたしましたが、お會ひにならぬ方が宜しからうと存じます、お留守だと申してお斷り申しませうか』

『イヤ／＼左樣なことを申すものではない、私は刀鍛冶、備前から參つたといふ所を見れば、大方同業の者であらう、私の名を知つて訪ねて來たとすれば、會はずに歸すといふは無禮、假令どのやうな御方でも苦しうない、お通し申すが宜い』

『畏りました』正宗の氣性を知つてゐる貞宗は、再び出て來て、

『どうぞ此方へ……』

『ウム案内をしろ』通された奧の座敷、茶煙草盆、直に其の待遇の叮嚀なこと、『嫌に叮嚀にする奴だ』四邊を睨んで待つて居る所へ、靜かに襖を開いて立出でました正宗、

『是は／＼手前お訪ねに預かりました五郎正宗、初めて御目にかゝります、承れば備前から遙々お出でになつたとのこと、定めてお疲れのことでございませう、悠々お休み下さるやう』此しとやかに兩手を仕いて挨拶をした、其の態度は實に穩か、此の度の禁裡の催し、首尾好く選に入つて御番鍛冶となり、日本一の名を舉げた正宗だから、定めし人を人とも思はず、眼下に見下すことであらうと、己れの心に比較べて思つて居たのが、心から慇懃な正宗の態度、兼光は聊か氣先を碎かれた樣子であつたが、負けぬ氣の男、

『イヤ性來丈夫な拙者別に疲れるやうなことはござらぬ、旅疲れたら宿屋へ泊つて悠くり休んで參る、何も貴公の所へ參つて休むこともござらぬ』正宗も驚いた、成程貞宗のいつた通り隨分な男だと思つた。

『それは何より、然らば遠路の所をお出でのこと故、お風呂になとお召しになつては……』

『アイヤ風呂などは入らいで宜しい、拙者は當家へ風呂に入りに參つたのではござらぬ、風呂へ入りたくば何所いでも入れる、風呂がなければ川へ入れば水も流れて居る、井戸には何時でも水がござる』喧嘩腰だ、斯うして喧嘩を吹ツ掛けて相手が

怒つたら、次第に依つては切つてしまはうといふ兼光の了簡、處が相手が大腹中の正宗、少しも氣に掛けない。

『是れは失禮を申上げました、して御用の趣きは……』と來た、怒るだらうと思つたのが、少しも怒る樣子もなく、御用の趣きはと來たから、喧嘩に來たのだとは流石に言へない。

『されば、刀打つ業、御仕事の樣子を拜見に參つてござる』嫌だといつたら文句を附けようといふ積り、正宗は一寸考へて居りましたが、

『最早火を落しま*してござるが、遠路遥々のお越し、未熟の業を御覽下さるは何より、仰せに從ひ只今御覽に入れまする、暫らく御休息下さるやう』叮嚀に會釋をして靜かに座を立つた、其のゆつたりとした態度、兼光は思はず氣を打たれたやうに其の跡を見送つて居りまする、正宗は是から貞宗に言ひ付けて細工場の支度萬端の用意、スツカリ整つた所



で、『此方へ』と兼光を案内をする、來て見ると正面には四方の神々を祀つてある祭壇、其前には燈明は晃々と點じてある、四方には注連が張つてあつて、塵ツ葉一つない、正宗貞宗を見れば、裝束に身を正し、烏帽子を頂き、先づ神前に禮拜をいたして居る樣子、之を見た時に兼光、思はず其の所へうづくまつてしまつた、ア、何といふ神々しい有樣だらう、是から見ると乃公の細工場など、何時掃除をしたのだか分らない、塵だらけ、乃公の飲む酒の徳利が轉がつてゐる、神なども祀つてはゐない、此所に比べると乃公の細工場は物置同樣、又正宗の樣子、烏帽子裝束に身を正してゐる、成程是れでなければ良い刀は打てない、乃公はドテラ一枚で打つたこともある、雲泥の相違、あゝ今更羞かしい……崇高の念に打たれて兼光は、今までとは打つて變つたやうに、身を固くして其所に畏まつた、禮拜を終つた正宗が、

『是より未熟ながら正宗の刀打つ業を御覽に入れまする、身體をお樂にして御覽を願ひまする』會釋をして座に着いた、向ふ鎚は彦四郎貞宗、鞴の音と共に火焔は上る、やがて眞赤に燒けた

鐵を挾んで、金敷の上へ乘せ、右手に鎚を取つた正宗、一つカーンと入れる、同じく鎚を取つた貞宗、テーン、カーン、テーンカーン、テンカン〳〵、師弟二人が精神を籠めて打つ鎚は、凡人の耳には唯テンカン、と聞えますが、是れぞ治國平天下、五穀成就、一切眞如、人民安堵の響き、其の鎚の冴えは、魂の底までも沁み渡るやうな心地、兼光は恍惚として恰も夢見る心地『アアあの鎚の音、冴えた響き、あれでこそ魂の籠つた刀、あゝ恐れ入つたものだ、無念無想、護國太平より外にない、それに引替へ此の兼光は、人に賞められよう、高く賣らう、名を賣らうと思つて打つた、何といふ恥かしい心だらう、それなればこそ人の誹りを受けるやうな刀を打つたのだ、一天萬乘の君に獻る刀を打つなどと、よく罰が當らなかつた、父や弟子の意見も用ゐず、あのやうな有樣、ア、悪い事をしたと、流石の兼光も、後悔の念が犇々と胸に迫つて、吐く息さへも苦しい樣子。



總て、打上げた鐵、正宗は左手に挾んで傍らの湯槽の中へサッと入れた、デューッ……パッと立つ白煙、兼光はジーッと見て居りましたが、

『ハッ、先生ッ、どうぞ私を御成敗を願ひまする』

と言ひ差したなり其の所へピタリと兩手を仕いて頭を下げた、驚いた正宗、

『是はしたり、何を申される、成敗などと、お氣でも狂はれたか』

『何とも御詫の申上げやうもござりませぬ、此度禁裡御番鍛冶の選に洩れしは此の身の未熟、それを省みず只管先生の幸運を羨やみ始み、次第に依らば先生の首取つてとまで心に定め、遙々備前より參りし某、最前より寬仁大度の御樣子、又た只今の御腕前、恐れ入りましてございます、それでこそ眞の日本一の刀匠、中々某の及ぶ所にござらぬ、今更後悔に胸も鎖れ申した、是までの罪何を以て償ひ申さうか、先生の御刀の錆ともならば、切めて此の身の罪滅ぼし、御成敗下されい』血を吐くやうな懺悔の言葉、流るゝ涙は瀧の如、其の所へ平伏をいたしました。

『ホヽオ是は思ひも掛けぬ御言葉、して御身は、……どなたでござりまするな』

『名乘るも羞かし備州長船の住、孫左衛門兼光めにござる』

『何ッ、兼光……兼光殿か』流石に正宗も事の意外に思はず兼光を見詰めて居りましたが、ニッコリ笑つて、

『イヤ兼光殿、御名は[illegible]の如く、承つて居りました、能う訪ねて參られた、今の御言葉、正宗嬉しく聞きました、過ちを改むるに憚かることなかれとは聖人の言、何事も過去の夢でござる、アハヽヽヽ』

『恐れ入りましてござりまする』

『イヤ〳〵遠く離れて怨まるゝより、私の心持が分つて下されば何よりの幸福、兼光殿、態々遠路の御入來、相州流の長所、お示し申さう、御手を上げられい』

『ハッ、恐れ入りまする』

『御遠慮には及びませぬ、秘傳、長所をお示し申す心願のため、いざ……』と羞恥む兼光の手を取つた正宗は、湯槽の中へズブリと入れた、自分の首を狙ひに來た男を憎みもせず、手を持つて相州流の秘傳の湯加減を教へる正宗の態度。

『ハヽッ、先生、どうぞ此の上はお弟子の末席へお加へ下さいまして、御教導を願ひまする、兼光、生れ變つて粉骨碎身、刀打つ業のため精進致しまする心得、お許し下さるやう』

『オヽそれは何より、名人が一人殖えた、御國のため目出度うござる』

斯うして懺悔に蘇つた兼光は、改めて正宗の門に入りまして修業五年、元々天分豐かの上に、正宗の撫育を受けたので其の技術は益々上達、後年正宗門下十哲の第一位となり、大兼光の名を得るに至りましたのは、偏に正宗の人格、兼光の悟道に依る所、題して正宗と兼光、是にて終局でございます。（をはり）

絶對保證 色を眞白くす 脫色素法

ニキビそばかすを除くは極めて容易なり

本文の執筆者は斷言したい。曰く……廣告文なるものは百中の八九十までは虛飾誇大の羅列だと……從つて、一般の讀者が廣告文を見る眼は、その內容を多大に割引して判斷せねばならぬ――ところが――玆に揭載される『レオン洗顏クリーム』の紹介文に對しては絶對に信用されて宜しからうと思ふ。次の文章は些少の割引もなく讀まれたい。

何故ならば、この一頁の廣告文中には、所謂宣傳的の色々の巧妙な言葉を悉く除きて商工省特許局の特許條文の一部を拔萃して報告するに止める。レオン洗顏クリームなる品は、今日までの化粧品中には、曾つて類例を聽かぬ日英米三ヶ國の專賣特許品である。どんな色の黑い人でも、レオン洗顏クリームを二月も連續的に使用すれば、色黑の原因たる色素が漂白されて西洋人の皮膚の如くに綺麗な純白に變化するのは當然であつて、その點が新發明である。これだけの權威ある發明品も、大々的な宣傳をせぬので知らぬ人も多いやうである。幸ひにして此文章を見付けた人は早く實驗あれ。默つて使用すれば顏や手の皮膚が別人の如く白く美しくなるので隣人などは吃驚するであらうが、**ニキビ**そばかすに惱んでゐる人々には藥品などより何層倍も迅速な奏効だから御知らせを乞ふ。

（**附記**）本品は日本の石鹼を創製せる有名な化學者の發明なるも總てを宣傳に用ひず。

特許條文の拔萃

英國專賣特許。第一一七〇六〇號。
米國專賣特許。第一二七八五一八號。
日本專賣特許。第三一二九〇八號。第三八一一九號。第四一六〇四號。

（前略）……右ヲ溫湯ニ於テ使用スル時ハ、極微細ノ狀態ニ混和セル硫黃ハ石鹼樣泡沫中ニ瀰漫ク散布シ『コロイド』硫黃ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼樣ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ硫化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黃泉ニ於ケルト同樣ノ效能ヲ發揮スルニ至ル。此ニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ依テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、硫化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼樣乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ水分ヲ遮斷セル過硼酸曹達ガ此際石鹼樣溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル强力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ類スル一種ノ接觸作用ノタメ、新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ槪ネ直チニ酸化サレテ新鮮硫黃ニ復シ、一層强力ニ作用スルニ至ルヲ以テ（中略）多量ノ極微硫黃ヲ遊離シテ美白ノ效果ヲ一層有力ナラシム。（下略）



――顏と手だけ白くなりし少女の寫眞――

△注文の方法▽

レオン洗顏クリームは、その特殊効果を認めて、各雜誌社の代理部でも取扱つてゐるが御希望者は、發賣元たる東京市牛込區西五軒町三二番地レオン商會（振替東京七四九一二）へ御送金あれば直ぐ郵便小包で發送する（代金引換はハガキで申込めばよし）但し發賣元への書面には【キング】で見た事を必ず御記入あれ（振替用紙は裏面に書く）――價格は眞面目な美顏料として極めて安價である。德用大瓶金三圓四十錢（送料十八錢海外五十五錢）なれば賣藥等より遙かに多量で凡そ二ヶ月以上の使用となり他の化粧料や石鹼まで節約し得るので頗る經濟である。また御都合で小瓶金一圓四十錢（送料內地十二錢海外四十五錢）を申込みてもよい。本品は効果に疑問の餘地なき確實の發明品なれば何人も躊躇なく直接注文を寄せられたい。注文者の御便宜にて東京市本鄉區駒込坂下町四八講談社代理部（振替東京六六二九番）に申込まれてもよい。

（注意） あまり早く色白くなりたる故に接するも却つて皮膚を艷々となす安心あれ。何等かの害なきかと照會書面に

（日燒） ヒヤケの如きは一二回にて漂白される夏季の必需品なり。



こんなことは不衛生である

醫學博士　高野六郎

夏の衣食住に就いて閑却されて居る不衛生を書いて見る。

夏は暑いから自然裸體になる場合が多く、衣類などは身に纏はなくても濟む。從つて衣服に關する不衛生は餘りない。若し夏でもお行儀よく衣類を着けて皮膚を天日に曝すことを好まない人があつたら、それは大きな不衛生である。夏の衛生家は出來る限り素裸になつて、

天日と外氣とに肌を

觸れしむることに努めねばならぬ。少し位は寢冷をしても身に障らぬ位に皮膚を鍛へるのが夏の衛生である。

家屋の方にも夏は不衛生が少い。戸障子を明け放して外氣を十分に通はせ、光線がよく入つて室も明るくなる、それに煖房の心配はないから夏の住宅は自然に任せておけば自ら衛生的になる。土藏座敷のやうな濕氣を含むで冷々してる所は不衛生である。

日本の夏の病氣は大部分食物から來る病氣である。其所で食物の警戒が必要となり、從來生水を飲むな、生物を喰べるなといふ衛生が行はれる。此の生水生物禁斷が果してほんとの衛生であらうか、是は一應考へて見ねばならぬ。

水は飲み足りない

方に害があつて飲み過ぎる方に寧ろ利がある。つまり好きなだけ水は飲むで良い。そして出來るなれば大地から湧き出す自然の水を飲むが宜い。其の點から云ふと泉水や井戸の水は大に歡迎すべきである。水を飲むと腹が痛くなるとか云つて子供に水を與へることを節約する親達も少くないやうであるが。井戸水が一般に怖れられて居るのは是にも一應理由があることで、不完全な井戸の水には往々腸チフス菌などの病菌が潛入してるとがあり、その水を生のまゝ飲むで傳染病に罹つた實例も少くない。それで生水禁止となつたのであらうが、元來井戸などは大抵僅の工夫で全く安全にすることが出來るものである。

井戸を閉鎖式に

してポンプで汲み上げるやうにすれば水道の水位に安全にすることは容易に出來る。不完全な井戸水を飲むのは不衛生であるが、井戸の不完全をそのまゝにしておいて、生水を飲むまいとするのも一種の不衛生である。人間に煮沸した水ばかり使用するやうに奬めた所で實行の出

來る話ではない。其よりも天惠の冷水を快く且つ懸念なしに飮めるやうに工夫すべきである。

生物禁止もよく注意しないと却つて不衞生になる。一番解り易い話では、赤ン坊に煮立てゝ消毒した牛乳ばかり飮ませて居ると病氣になるが、之にレモン汁のやうな新鮮な果物の汁を加へて飮ませると丈夫で育つといふ明瞭な事實がある。人間は一定度まで、

生の物を喰べない

と生活を續けることが出來ないやうに出來てる食物を熱に逢はすと不完全な榮養品に變ずるといふことは恐らくヴイタミンの或るものが熱のために破壞されるためであらうが、兎にも角にも人間の食物中には一定度の生物が入らねばならぬ筈のものである。又自然と人間の喰物がさう出來て居る。例へば西洋人は生の野菜とか生の果實とかは食卓に缺くことが出來ないものと信じて居る。日本人は餘り果實を喰べない代りに、野菜の鹽漬や大根下しを好むで喰べる。西洋の食物中では野菜と果實は生で喰べるのを原則としてる。日本でも香の物は勿論火を通さない。其の香の物が日本人の食卓に歡迎されるのは當然である。

こんなことは失禮である



府立第一高等女學校長　市川源三

一、他人殊に婦人の前で、斷りなしに煙草を吸ふことは失禮である。

一、電車汽車に乘つて股をひろげ兩足を投げ出して居るのは失禮である。

一、話し合つて居る人々の横間から斷りなしに其の話を奪つて了ふのは失禮である。

一、交換手の間違を電話者のそれと混じて『違ひますよ』と邪慳に言ふのは失禮である。

果物を子供にやる

ことを怖れる人達があるが、此は間違であつて、よく熟した果實は成るべく與へる方が衞生に叶つて居る。殊に皮を剝いて食べる果物は結構である。新しい漬物も成る可く喰べる方が身體のためになる。人間の食物の大部分は火熱を應用して調理してあるのだから、せめて野菜や果實などは生のままで澤山喰べさせたい。

刺身なども必要な食品であつて、注意して調理した刺身は却つて危險なものでない。刺身のツマと稱するもの野菜類であるから、一擧にして火食の缺陷を補ふことが出來る。日本の食物からサシミと香の物とを禁じて得意がつてる素人衞生家も時に見受けるが、こんなことは或は却て不衞生になることもある。寧ろ安心して刺身と香の物とが喰べられる工夫をすべきものである。

勿論生物を喰べる方にも大抵不衞生が

つき纒うて居る。漬菜や大根の鹽漬の新しいのは實は可なりに危險である。

野菜類には寄生蟲

の卵や大腸菌の仲間が附着して居る。此等の危險な病原體は元來は人間の大小便の中から出たものであつて、日本の野菜は大小便を肥料として栽培する關係から、肥料中の危險物は便所から地へ地から野菜へと傳はつて來る。此の危險物は火熱を通せばすぐ死滅するが、香の物に漬けた位ではなか〳〵死なないで人の腸に達する。日本に寄生蟲が多く、チフスや赤痢が多いのは此のためである。其所で菜漬や大根漬を平氣で喰ふのは不衛生であるといふことになる。日本人の毎日の食物から缺くことの出來ない香の物を危險狀態に捨てゝおき、毎日平氣で之を口にしてるなどは餘りに亂暴な話である。其所で之を

安全な食物

とすることは目下の急務であるが、此は容易でない。せめて漬物の野菜にだけは人糞尿を施肥しないやうにするか、或は日本中の便所を改良して、十分安全に消毒の出來た大小便だけを肥料にするかといふやうにならなければ、安心して香物が喰べられない。然し地から離れて育つ瓜とか、茄子とか、キャベツの内部とか、大根下しとか、玉葱とか、いくらでも生で食べられる安全な野菜類が少くない。

果物でも生のまゝ、皮も剝がないで喰べるのは一層危險を含むで居る。一番不安心なものは莓で莓に牛乳をかけて長い時間置いたものなどは丁度

黴菌の培養を飲む

やうなものである。

刺身は大體海魚を使ふが、河魚の生肉には、時々條蟲だのヂストマだのといふ寄生蟲の、幼蟲が入つて居て、其の生肉を喰べたゝめに、人體に寄生蟲を生ずることがあるから此の方は止めた方が無事である。然し鮪だの鰹だのといふ海の魚の生肉には何も人體を害するものは入つて居ない。つまり海魚の刺身は安全で、見方によつては之を喰

こんなことは不經濟である

評論家　千葉龜雄



一、汽車の中の辨當の食ひあまし、料理店や牛肉店その他のたべあまし、宴會に於ける日本酒、西洋酒のつぎばなし、若しくはこぼれる分量は、何とか經濟的に始末が出來ぬものか。電燈の無用なつけつばなしも。

一、時間の不勵行。

一、形式のための手みやげ。

一、自分の手で出來るものを、貴族的で行きたいために、または見榮のために、女中や使ふ人を雇ひ入れる家庭、其他無數。

べない方が寧ろ不衛生とも云へる。然し生の魚肉は一旦之を汚すとなかなか清潔にならない。例へば蠅が便所から赤痢菌を持つて來て刺身の上へ置いて行つたとか、チフス菌保有者の魚屋が危險な手で刺身を作つたとか云ふ場合には、其の刺身が危險になるのは當然である。然し海魚の肉片は生來は清淨なものである。蠅がとまつて之を汚したとしても、表面だけ取去れば中の方は生のまゝで喰べて差支ない。刺身は取扱ひに注意さへすれば、西洋で好むで喰ふ生牡蠣などより數等安全な食物である。此等の貝類は下水の流れ込むだ淺瀬の泥を餌として育つので、其の腸の中には往々チフス菌を含むで居ることがある。貝を腸ごと生で喰べるのは危險である。

冷藏函などを使用

尙夏の間食物の保存のためにするのは甚だ衛生的である。然し冷藏函内の温度が必ず氷點近くに一定してあればよいが、氷の切目には多少温度が上る。宜い加減高い温度の中に長く置かれた食物は或は腐敗に傾いてるかも知れぬ。寧ろ夏は調理したての食物を口にする事を原則として冷藏函などは餘りあてにせぬ方が安全である。

夏の喰べ物を其の不衛生の理由を考へて、其の要點を警戒すれば、從來不衛生の隨一と考へられて居た生水、生物、それが却つて衛生に叶ふやうになる。

米糠にはこんな偉効がある

醫學博士　田澤鐐二



田澤鐐二博士

脚氣の蔓延及害毒

脚氣の我が國民間に於ける蔓延は頗る廣汎で、明らかな脚氣患者の外に、單に脚の浮腫又は倦怠だけを訴へてゐるもので、やはり同一種と思はれるやうな程度の者まで加へると、蔓延の狀は一層甚しいと考へられる。

脚氣病はそれ自體が既に油斷のならない病氣であるが、其外に心臟を弱める所から、諸種の他の疾患で心臟の力を唯一の賴りとする樣な場合、例へば急性傳染病の場合などに、脚氣を併發すると確かに危險が多い。單に心臟血管系の關係ばかりでなく、脚氣を併發すると、神經系統消化器系統等の機能を減退させる結果、他の疾患の療養に不利な影響を及ぼす事が多い。例へば結核病の療養の場合など然りである。

以上の如く脚氣の災害は關はる所廣いものであるから、脚氣の流行に惱まされる國民と、然らざる國民とでは、その得失に非常な差異を生ずる。殊に脚氣は男女青年に多く、學生、勞働者、出稼人、戰地の軍人、航海中の船員等食物の窮乏と戰ひつゝ活動の第一線に立てる者又は姙産婦に最も多いものであるから、國民活動力を減殺すること頗る大なるものがあり、國家社會の保健問題としては、深甚の注意を要する疾病の一である。

脚氣症狀と危險

脚氣は一年中あるが、殊に夏秋の候が最も多い。初めには脚に倦怠を覺えたり、浮腫が起つたりする。脚又は手が痺れて知覺が鈍くなり、或は運動痲痺を起して歩行困難又は不能に陷り、遂に起きることが出來なくなる。

この神經筋肉系症狀の外に、心臟血管系の症狀が著明に起つて、第一に脈搏數が増加し、一寸動いても動悸が起る樣になる。心臟症狀が急激に來ると、突然衝心を起して苦しみ悶えながら頓死する。私は醫者としてこの脚氣衝心で死ぬ時ぐらゐその苦悶の光景の悲慘なるに接した事がない。屈強の男子が絞め殺されるやうな死に方をするので實に痛惜同情が深刻である。比較的輕い患者に突然衝心を起す場合があるから、油斷が出來ない。

尚、小兒には乳兒脚氣といはれるものがあり、急性で死亡する者が多いから、早い手當が肝腎である。主なる徵候は、泣聲がしやがれたり乳をもどしたりする。注意すべきは、母の脚氣が極めて輕

微である様な場合に却つて起り易く、乳兒が死亡して後、母の脚氣が段々著明になる例も屢々ある。

治療と豫防

脚氣はかく恐ろしい病氣ではあるが、今日では最早學理も大體確定してゐて、治療も決して困難ではない。一體脚氣は米食國民に發生する疾患で、米糠成分を與へると極めて急速に恢復するのである。この有効成分は『ヴイタミンB』と稱せられ、米糠のみでなく、雜穀其他各種の副食物の中にも含まれてゐるが、併し脚氣が發生した場合には、この有効成分を多量に與へないと目立つ程の効果は認められない。

脚氣に對して有効成分を十分の量に與へると、その恢復は極めて顯著で、服用後二三日又は數日中に脈搏數は著しく減少し且つ安定して來る。百二三十の脈搏數が六十位の尋常數又は甚しきは四十餘位までも下降する。餘り脈搏が少くなつて家人が驚くことがあるが、これは藥が効を奏した結果で心配する事はない。それと共に尿量が増加して浮腫が去る。自覺症狀も容易に一掃されるが、心臓血管系に比しては、神經系の症狀即ち痺れなどは比較的治癒が遲れるけれども、これとて漸次に恢復するので、この有効成分を早期に多量に服用したもので、衝心した例は、まだ一度もない。

小兒の乳兒脚氣に對しても、授乳婦人又は産婦が早くにこの有効成分を十分に攝取すると、之を豫防する事が出來るといはれてゐる。

米糠の榮養價値

近來の說では、この糠の中の有効成分『ヴイタミンB』は、その中に存する胚芽に在るといはれてゐる。尚、糠の中には『ヴイタミンB』の外にも種々の重要なる榮養分が濃厚に含有されてゐることは、最も注意に値する事項である。

米粒の有する蛋白質、脂肪及び無機鹽類などは、米の精白の際、糠の方へ移行するので、糠はカロリー量も甚だ高く、香味、消化、吸收等の關係さへ能く順應して適當に應用すれば、牛乳や鶏卵にも優る滋養原料を有してをるのである。故に此の米糠成分の應用法に於て新しい境地を開拓すべき事、國家經濟の問題より見るも極めて重要である。

今回講談社が、御大禮記念の一事業として、民族保健の問題に着目し、米糠成分攝取の鼓吹に關する民衆教育の一方法として『脚氣爽』の發賣を企て、私に其指導を望まれたが、今日米糠製劑の世に行はるゝもの少くないけれども、向隔靴搔痒の感がないでもなく、國民は食料問題の急迫を感じ多數學者は米糠の榮養價値を說きつゝあるに拘らず、米糠成分攝取の習慣は其の進步遲々たるものがあるので、敢て其の乞ひを容れ啓發した所以である。



空軍の偉力

＝恐るべき軍隊蟻と胡蜂の話＝

農學博士 横山桐郎

◇ジプシーの生活

凡そ現在地球上に棲んでゐる生物の中で、その生活の模樣が吾々人間の生活に似てゐるといふ點で、又その生活程度が頗る進步してゐるといふ點で有名なのは、蟻であらう。彼等は昆虫の中でも、最も高等な一類として、一定の住居を構へ、確乎たる分業組織の下に、整然たる共同的社會生活を營んでゐる。彼等が昆虫の王者と稱へらるゝも亦偶然ではない。

然し蟻といふ蟻の總てが必ずしも平和な文化生活をやつてゐる譯でもない。中には是はと思ふやうな荒んだ生活をしてゐる者もある。その野蠻振りを最もよく發揮してゐるものとして、私は亞弗利加地方に棲んでゐる軍隊蟻を舉げることが出來る。『昆虫界のジプシー』さう軍隊蟻は呼ばれてゐる。他の總ての蟻が必ず一定の住居を持つてゐるのに、この蟻だけはそれを持たない。そして何時も大きな群を造つて山林原野を的もなく今日は石の下に明日は樹の洞にと、食物を追うてさすらひの旅をつゞけてゐる。所謂ジプシーの生活を送り迎へてゐるからである。

さういふ風に、その生活狀態から見ると、極めてあはれに思はれる彼等ではあるが、たゞ驚くべきことは、彼等が實に素晴しい威力を持つことである。見よ、その漂泊らひ行く前途に横はる生物、そ

彼は斯くして發奮した

◇製本屋の小僧

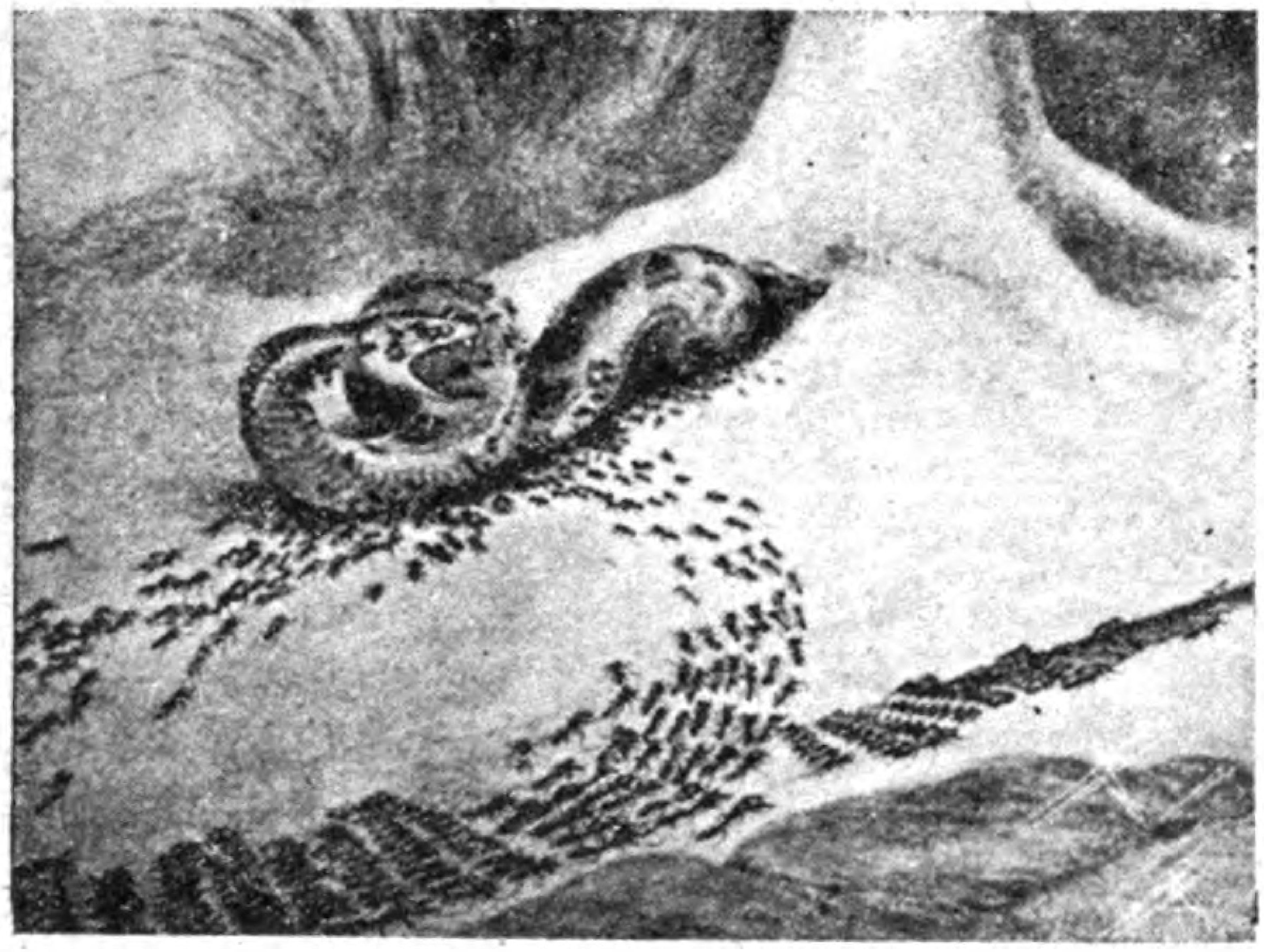
倫敦の裏町通りの小さい製本屋へ、一人の紳士がブリタニカ百科辭典の製本を頼みに來た。職工のミハエル・ファラデーと云ふ小僧はその辭典を綴り乍ら、ぢつとその中の文字を讀んでゐた。そして電氣と書いてある欄へ來た時に、彼は吸ひつけられるやうに讀み入つた。『私の將來研究すべき題目はこれだ！』彼は斯う獨語して胸の高鳴るのを覺えた。



一製本工のミハエル・ファラデーが、後に大電氣學者になつて、幾多の電氣に關する發明發見を遂げたのは、實に此の瞬間が抑もの動機であつた。

◇黒坊の偉人

『この黒ん坊奴が、そこで何をしてゐるのだ』



軍隊蟻が大蛇を襲つてゐる所

の進路を遮ぎる生きとし生けるものを喰ひ盡し、驅逐し去らではおかぬ彼等の暴力の慘烈さ、殘虐さを。かくして又この蟻は、漂浪蟻とも、狩獵蟻とも、驅逐蟻とも呼ばれるに至つた。

一口に軍隊蟻と言つても、いろ〳〵種類がある。その中で最も有名なのは、ドリルスと呼ぶ一類であらう。ドリルスにも二十種ばかりあるが、何れも亞弗利加や南部亞細亞あたりの熱帶國の產であること、その働蟻が盲目であること、その形にはいろ〳〵異つたのがあること等は一致してゐる。即ち働蟻と云ふ中にも、齒のある顎と斷ち切つたやうな頭とを持つた大形のもの、同じやうな小形のもの、それから又小さな頭と、突き出した額と、短い觸角とを持つた小形のもの、凡そこの三種がある。尙この類では雌も盲目なので、眼あきはただ雄だけといふ變つた蟻である。

◇天下無敵

彼等の漂泊は大抵曇天の日、若くは夜の間に行はれる。何故なら、彼等は日光が嫌なのだ。それ故、仕事が忙しく、發見した獲物の始末が終らぬ中に、夜があけて陽が昇るやうな事があると、彼等は大馬力で、通路の上に、土でトンネル式の覆ひを急造して日光を避けるのである。彼等の進軍する時には、例の大形の

でぶ〳〵と肥えた、意地悪さうな中年の婦人は、納屋の戸口で大聲でわめいた。納屋の中の小麥袋の傍らに、寒さに慄へながら、黒坊の少年がうづくまつてゐた。婦人は棒切れを以て少年の肩をピシリと打つた。少年は痛さに堪へないで、悲鳴を擧げて轉び出た。

寒い冬の夜を、家もなく、兩親もなく、頼る者の一人もないこの黒人少年は、幸ひ納屋の中に一夜を明したのであつた。ボロ〳〵と熱い涙を流し乍ら、少年は固く拳を握つたが、無法な婦人に抵抗する丈けの勇氣もなく、トボトボと出て行つた。心の中には、何時かは立派な人になつて、たとへ皮膚の色は黒くても、一人前の人間として扱はれるやうにならうと決心しつゝ。



黒人の偉人フレデリック・ダグラスは、かくて堅忍不拔、奮闘努力、彼が八十歳の高齢で世を去つた時には、この老偉人の葬列に、白人の市民が二萬五千人參列した。

◇最初の賃銀

「手前はこれつぱかしの字が讀めぬのかい。」ば

働蟻が列の外側に附き添つて、一行の指揮官兼案内役を努める。主隊は訓練された軍隊を見るやうに、一糸亂れず整然と行進する。その際である、若し彼等の進路を遮ぎるものあらば、それが蜥蜴の類であらうと、昆虫の類であらうと、乃至は大きな哺乳動物であらうと、すべての物を片つ端から捕虜として進むのだ。

殊に驚くべきは、現今地球上で一番大きい蛇として知られてゐるピソン、即ち『うはゞみ』の如き奴ですら、羚羊のやうな大物を呑み込んで悠々晝寢などしてゐる處を、運惡くこの蟻の一行に見つからうものなら、腹の中の御馳走もろ共、彼等の餌にされないでは濟まぬであらう。



軍隊蟻の獲し物を襲ふベンガリヤ虻

軍隊蟻なるもの丶獰猛さが、ほゞ察せられるではないか。のみならず、事實この蟻の大軍の前には、獸王獅子やゴリラの如きものでさへ、遁走を餘儀なくされるのである。されば亞弗利加の蕃人は、この蟻を非常に恐れる所から、仲間の中で何か罪を犯したものが出ると、その手足を縛つて軍隊蟻の通路に放り出しておく。かくて蟻の螫すがまゝ咬むがまゝに任せて、以て刑罰に換へるといふのである。

◇案外な脅威

天下無敵、これが軍隊蟻のほこりである。ゆく所として、恐るゝものはない。正に地上の覇者として認めることに於て誰しも躊躇しないであらう。だが諸君

鹿だなあ」斯う隣りの少年が云つた。

英國グラスゴー市のある紡績會社の工場で少年達が一生懸命働いてゐた。その時一人の十歳ばかりの少年が、傍らの同僚に文字を訊いた時、同僚は文字を敎へる代りに斯う云つて恥かしめた。恥かしめられた少年は口惜涙をポロポロと落した。



最初の一週間を働いて得た、最初の賃銀を貰つて家に歸つた時、その少年は母に願つて獨習の讀本を一冊買ふことを許して貰つた。そして彼は懸命に獨學した。如何なる困難も彼を凹ますことは出來なかつた。

アフリカ探險家として、また大神學者として有名な、ダヴィット・リヴイングストンが、十歳の時の出來事である。

よ、世の中といふものは、決して〳〵一種の生物の獨り威張りを許さない。何處まで行つても下には下があるやうに、又上にも上があるもので、この強猛なる蟻軍の威力を以てしても、どうすることも出來ぬ一つの強敵があるから面白いではないか。そも〳〵その強敵とは何であらうか。猛獸か、毒蛇か、否々そんなものはテンデ相手にならぬ事は既に述べた。その強敵とは、案外にも、一種の蛇と胡蜂となのだ。一種の蛇と胡蜂、この二つの虫は、軍隊蟻の進軍を見つけると、態々遠方からやつて來て、その軍隊の上を飛び廻るのだ。そしてちよつとでも隙さへあれば、忽ち飛び下つて來て、蟻の咬へてゐる食物を奪ひ取るが早いか、ブイと空中へ舞ひ上つて了ふ。無論、大事な物を奪はれた蟻は、憤慨その極に達して、取りかへさうとする。だが何をいふにも相手は翅がある、一飛、高く舞ひ上つて了つたが最後、如何に地團太を踏んで見たところで、どうする事も出來ない。たゞ空を眺めて憤慨するより外はないのだ。

◇空軍の威力

恐るべきライオン、ゴリラ、さては地球上に於ける最大の蛇ピソンさへも、向ふに廻はしてビクともしない南亞の猛者軍隊蟻も、空中の弱敵たる小蛇と小蜂とには、頭を下げねばならないといふ事は、一體何を物語るものであらうか。諸君、私はこの亞弗利加の曠野に於ける蟻と蛇との戰ひを考へる時、心から空軍の威力を痛感せねばならぬ。そして大いに顧みねばならぬ。吾々人間の世界でも、今後はたとへ陸に幾萬の精鋭を備へても若し空軍の備へを忽せにしたならば、その結果は蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。

我等はまだ〳〵空軍の威力に對する覺醒が足りない。例へば現に日本の一大國家的事業たる太平洋横斷飛行の如きすら、殆んど他事のやうにして顧みられぬ程、情ない狀態に在るではないか。諸君、私は多くを言はぬ。日本國民は、たゞこの軍隊蟻が何を訓へるかを考へれば足ると思ふのである。

大日本雄辯會講談社ニュース



開催中の高島屋と富士山

本社主催
富士山大展覧會

本社は今年『富士』創刊記念として文部省、鐵道省、山梨縣、靜岡縣、大阪府及び大阪市の後援を得て大阪高島屋呉服店樓上に於て、去る七月七日より同廿八日迄富士山大展覧會を開催、即ち同店第一階より第六階大會場に到る階段は、恰も一合目より漸次頂上に達する仕組で、観客は全部登山者といふ氣分になり、六階大會場に到つて四望する頂上の壯觀、變轉極りない雨晴の妙、旭日の壯、夕照の美等はいづれも大パノラマ、キネオラマで現出、其他富士山に關した古今の文獻を初め、傳説の富士は之れを繪畫或は人形で表し、高山植物、山間天幕生活等の實況等、観客をして眞に富士山にあるの感を抱かせるといふので、實に關西中の人氣を一手に集注したかの觀がありました。

婦人子供博覧會に於ける
本社の諸施設

七月一日以降二ケ月間、東京上野公園に於て開催中の秩父宮殿下御慶事記念婦人子供博覧會は時節柄頗る盛況を呈して居りますが、本社は其の趣旨に賛し、同會場内に本社特設場を設け、『勸進帳』『室内に於ける家族團欒の場』『猿蟹合戰』『花園に於ける家族遊歩の場』等の面白い舞臺人形を飾り、非常な評判になつて居ります。

尚此の外東京全市に、同博覧會の演藝番組報知臺を二百臺設置、其の盛況の一助として居ります。

英文『雜誌王野間淸治氏』と
歐米に於ける反響

我國英字新聞ジャパン・アドバタイザー記者秋元俊吉氏著『日本の雜誌王野間淸治氏と其事業』が發行されたことは本欄に於て既報の通りでありますが、其の後同書が歐米各國に紹介されるや、各階級に非常なるセンセーションを起し、各國新聞雜誌にそれ〴〵紹介されたのは勿論、本號別掲の如く、態々著者や野間本社々長宛に驚嘆讃稱の辭を寄せてくる向きが非常に多いので、社長も大いに恐縮してゐる次第であります。



婦人子供博・本社出品の一部

愈々大壯擧を敢行する
『現代』及び『雄辯』

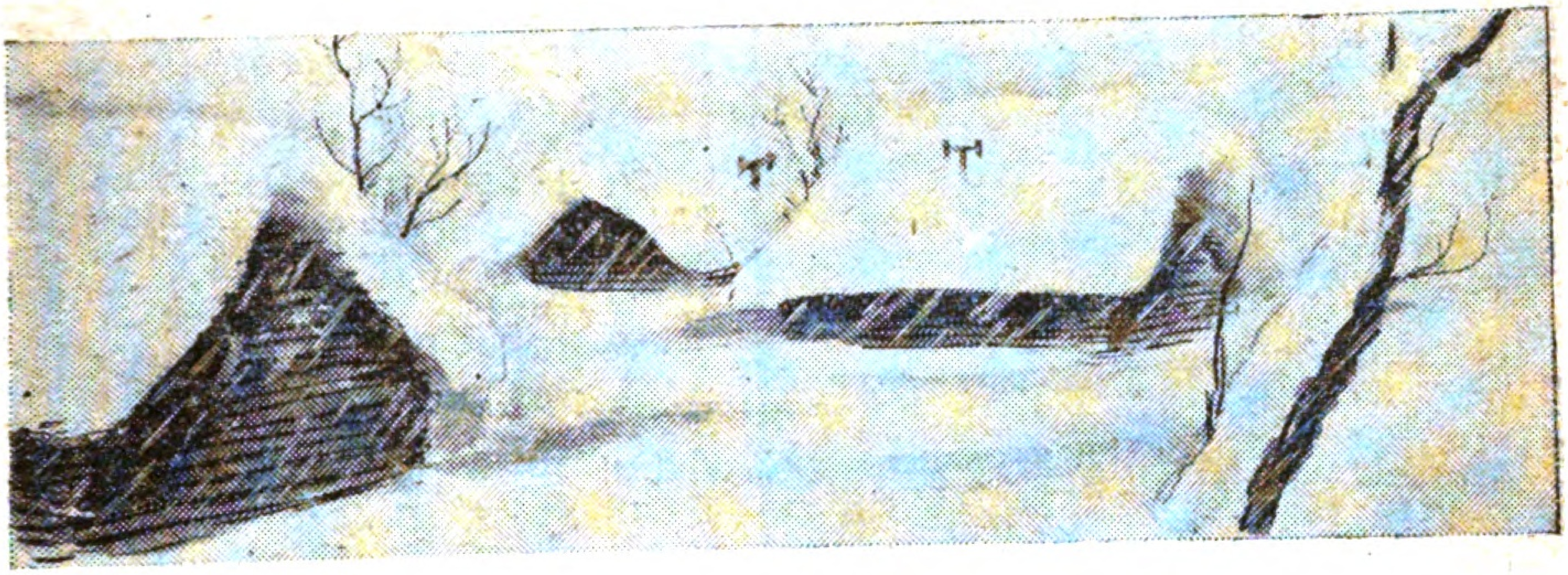
今や正に國難とも云ふべき現下の急迫せる時勢と、混沌たる思想界の實狀を默視するに忍びず、本社の二大言論雜誌『現代』及び『雄辯』は此の際兩誌の大普及大進出の必要を痛感し、數ケ月前より着々計畫を進めて來ましたところ、茲に準備完く成り、愈々此の九月號より內容に大刷新大充實を加へると共に、大英斷を以て、從來定價現代一圓、雄辯八十錢といふところを等しく五十錢に改正しました。

かくて更始一新の『現代』及び『雄辯』が一度世に現れたならば、必ずや讀書界の人氣を沸騰させることでありませう。

體育宣傳ポスターを
全國各小中等學校に寄贈

本社は體育奬勵の目的を以て、今般文部省體育課選定の體育宣傳標語を入れた色刷りポスターを二十萬枚印刷、全國各小中等學校に配布寄贈しました。

追記——彌天下翹望の二大全集愈々詳細發表！刮目してお待ちあれ！



免囚美談　大盗『疊屋竹』の話

東京保護會理事長　原　胤　昭

はしがき

私は過去五十年に近い間、自ら「前科者の友」と名乗つて、世を憚るこれら哀れな人達の味方となつて來ました。既に一萬人近くもお世話しましたが、その七割まではどうやら良好の成績を見ることが出來たのを思うて、あながち無駄骨を折つたのではなかつたと、聊か自負してをるのであります。

前科者、この名がどのくらゐこれらの人達の上に禍してゐることでせう。そしてそれがどれ程人と人との間を別け隔てして居るか判りません。そのために日々幾許かの靈魂が傷いて、再び闇へ陥つてゆくのであります。

左の一篇の物語は私がお世話をした數多くの囚人中の一人の例でありますが、斯様の事實を公表することは保護の本旨にも背くことゝ、自ら怖れて避けてまゐりました。されど今では、話の主人公の故人になつたものもあり、どうやら餘波を濁せさうに思はれるのも出來ましたので、今度初めてキングのお求めに應じて見ようと決心した次第であります。これを徒らに傳奇的な一篇の物語として讀みすてず、深く私の意のある所を御賢察願ふ次第であります。

改心も糞もあるか

今から四十年も昔の話、所は北海道釧路集治監での出來事であります。

その頃の監獄、と云つても、たゞ丸太を組み合はせたばかりの掘立小舍、雪深い厳冬の頃で三つばかり並んだその小舍は、白い帽子を被つて、雪に埋まつてゐるやうにも見えます。壁も屋根も、生木の丸太を組合せた上から荒莚を張りつけてあるだけのこと。莚一枚ぶら下げた戸口から入れば、床には熊笹の枯葉を無造作にしきつめた其の中に、囚人達は例の赭色の着物に目ばかり光らせて、豚の仔のやうに寢轉がつてゐます。でも軒の近くまで降り積もつた雪が風を防いで、中はムッとする位の暖かさであります。

病監と名づけられた一棟には、さすがに鐵板を桶のやうに曲げた、名ばかりのストーブがあつて、大きな生木の薪がプスプスど白い煙を立てゝ燃えてをります。それを圍んで、幾人かの病囚が蒼黒い顏を並べてをります。

冬枯の梢を鳴らす寒風が吹き過ぎる度に、外圍の莚の隙間から吹込んで來る粉雪が、囚人達の顏に降りかゝつて、見る間に解けては小さな水玉となり、頰を傳うて流れます。うるささうにそれを拭きとるもの、自棄に大きな唸り聲を立てるもの、咳いてせいて息も止まるかと思はれる程咳き込む老人。靜かだと見えるが、なか／＼靜かではありません。

今しもこの病監の入口が開いて、そこへ厚羅紗の背廣に毛縫の出目帽をかぶつた小柄の役人が一人はいつて來ました。

『おい、竹次郎はゐるかい』

役人は一わたり病囚達の顏を見まはして、靜かにから呼びました。すると、向ふ側の隅つ葉がガサ／＼と鳴つて、寢返りをしたらしい男が元氣よく應へました。

『何だい。竹次郎は俺だ』

『おゝ、竹次郎、私だよ。今日はお目出度うござんしたな』

その間に竹次郎は、床の上に身體を半分不精げに起しましたが、その顏には頗る險はしい色が漂うてをります。

『あゝ教誨師さんか。何がお目出度いんだ。お前さん達は、俺が特赦になつたから、お目出度いなんて云ひなさるが、憚りながらこの竹次郎、そんな甘い口に乘るやうな男ぢやねえんだ。手前達や寄つてたかつて、勝手な相談をするぢやねえか。何がお目出度いんだ。ふざけた事をしやがるから、俺は明日から食ふに困るぢやねえか。特赦も御赦もあつたもんけえ。こゝにかうして居りやこそ、お上のおまんまをあてがはれ、朝から晩まで暖爐を焚いて、暖かく大威張りで暮せるんだ。なにも俺達や好き好んで外へ出て、寒い思をしながら働きてえなんて頼みやしねえ。かうやつて假病でもつかつてゐれや、食べものは鱈腹喰つて、人の分まで[illegible]をかけて貰ひ、贅澤三昧も出來るといふものよ。べら棒め、特赦だ御赦だと碌でもねえ事をたくらみやがるんで、こちとら明日から食べるにも寢るにも困るぢやねえか』

竹次郎は床の上に大胡坐をかいて、これだけを一氣にまくし

立てましたが、力味返つたその顔には、まばらに伸びた髭が一本一本逆立ちをしかねない様子。教誨師は病人の枕頭をまはつて、竹次郎の傍まで行つて腰をかゞめました。

『それでも君の改心の實があがつて、特赦になつたんだから、これからは晴天白日の身なんだ。有難いことぢやないか』

『何だつて？　改心の實だ？　人を馬鹿にしてゐやがる。この俺樣が、心を改めましたとぬかしやがるんだな。俺樣の泥棒根性が綺麗に洗はれて、人間並に生れかはつたとでも云ふんだな。おい教誨師の旦那、耳の孔ほじくつてよく聽いてくれ。この竹次郎はな、石川島から小笠原島、それからこの北海道くんだりまでも腰の鎖をがちやつかせて歩き廻つたんだが、憚りながら改心なんてしをらしい種は、これつぱかりも持合はせちやゐねえんだ。どこを押しやそんな音が出るんだ。馬鹿々々しい、役人共の明き盲目め』

『誰もお前のことを兎や角云ふ者はないよ。君の改心を見屆けたのは、この私だ。私が上申したんだよ。それが内務省に申立になり、お上でもあゝ竹次郎が改心したか、それは結構だといふことになつて、お許しが出たのさ。だから今日所長さんから丁寧な申渡しがあつたわけだ。みんな私がしたんだよ』

役人は言葉靜かに　やさしく言ふのでしたが、竹次郎はますます威猛高に山犬のやうに吠え出しました。

『旦那、御冗談をなすつちやいけねえ。どこに私の改心の印があるんでえ』

『そりや竹次郎、改心はそこらに轉がつてゐる棒切れや何かとは違ふ。お前の心の中にあるんだから、目には見えはしない。私もこれで人の心に物を敎へる役目をしてゐる。人樣の心が見えないやうでは、お役目がつとまりはしない。これから先、君の心から見事にそれを抽き出してお目にかけよう。君ももう一刻ようく寢て考へてごらん』

竹次郎は尙も唇をピクピクさせて、何か怒鳴り立てたい樣子をしてゐました。こゝの病囚達は、竹次郎の大聲に何れも目をさまし身を起してゐました。教誨師はその誰れかれに何かと言葉をかけながら、やがてこの病監を出てゆきました。竹次郎が特赦になつたと云ふことは、これら命知らずの囚人達にも、大きなショックを與へずにゐませんでした。



北海の集治監

こゝで少しく當時の事情を申しておく必要があります。日本

の刑法は明治十五年に改正になつて、これが所謂新刑法とよばれ、舊刑法に較べると、刑が餘程輕くなりました。その釣合をとるために――簡單にかう申しておきます――新刑法に照らして、囚人を特赦することになつたのであります。竹次郎は終身懲役でありましたが、その罪狀は竊盗三犯以上と云ふので、新刑法にあてはめると、もう刑期を終らせてよいことになつてゐました。さればといつて、理由もなく放免も出來ませんから、形式上改心者といふことにして、特赦の手續を運んだのであります。

竹次郎が拘禁されてゐた釧路集治監は、北海道でも東北の最極端、川上郡熊牛村字標茶といふ、釧路平原が雄阿寒、雌阿寒の兩山岳に遮られる所、釧路の港から十二三里も歩いて、これから硫黄山にかゝらうといふその麓にあります。これは樺戶集治監、空知集治監に次いで建てられたもので、長期十三年以上の重罪囚を收容してゐました。

この集治監といふのは、一つには內地の監獄で持てあました囚徒を、脫獄しても早速の行き所に困る北海道に流さうと云ふのと、今一つには、これらの囚徒を使つて、北海道の奥地を開拓せしめようと云ふ、この二つの目的から建てられたもので、當時としてはなかなか旨い所へ氣がついたものであります。



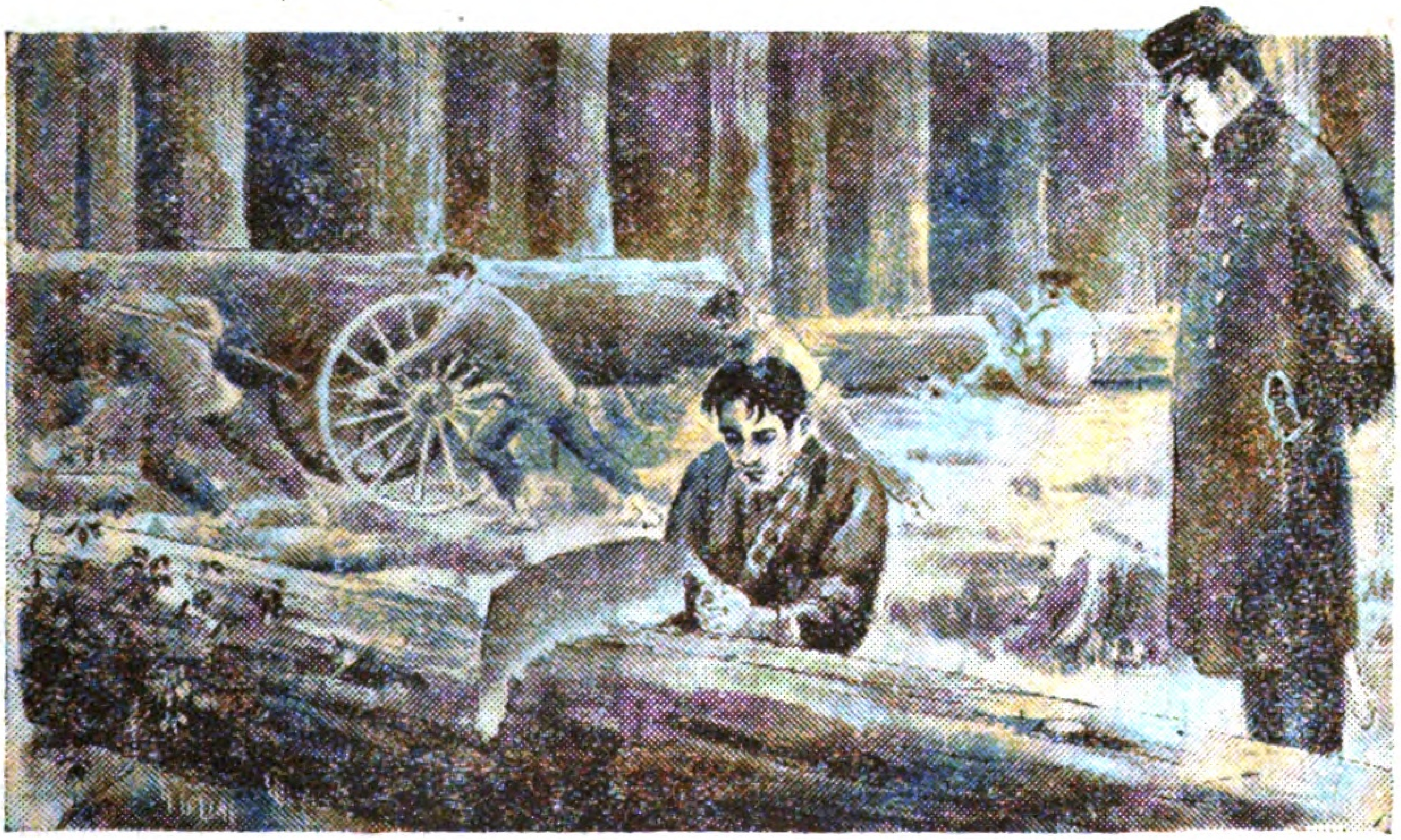
千古斧鉞の味を知らない大森林の途なき途を踏み分けて連れ込んでおけば、いかに命知らずの荒くれものとはいへ、逃走したところで、幾里出れば人里に出られるやら、飢を凌がうにも齒に合ふ木の實一つ得られない北海道の荒野、まかり間違へば狼か熊の餌食になるのが落ちであつてみれば、まづ命のある間は天を摩する大木に斧を加へ、繩目の如く地に這ひまはる熊笹の根を刈分けてゐた方がましだといへませう。殊にどうも人生を素直に歩けない人達には、かうして自然と鬪ふことが、どんなに性に合ふかわからない。ですから獄舍といつても、丸太組みの繩からげで、釘一本使はない荒小舍、これを圍むに幾丈といふコンクリートの高塀をもつてする必要もありません。

それでも囚徒十人に一人位の割合で看守が附いてゐます。その看守の腰にはサーベル、手には村田銃が持たせてあつて、囚人達が少しでも無理に獄舍を出ようとすれば、サーベルは鞘を走り、銃口は遠慮なしに火を吐きました。自然囚人達の氣合の烈しかつたのも無理はありません。況してこの釧路集治監は、樺戶空知の兩集治監でも手におへないといふ厄介者ばかりを集

めてゐたので、伐木開墾に働かせるといふよりも、狂氣の樣に騒ぎまはる日の方が多く、夜毎に枕につく頭數の減つてゆくのも致方のないことでありました。

かうした囚人の生活をそのまゝ放置するわけにはまゐりません。彼等の人格の改造は望まれないまでも、息の根の通ふ間は何とかして精神的な慰安を與へ公道を誨へる必要があります。そこで政府は、その當時漸く外國から直譯した刑獄の新知識によつて、教誨師といふ役人を置くことになつたのであります。この竹次郎の話の教誨師もそれで、その小柄な教誨師の旦那は、かくいふ私なのでありました。

併しこの山中のことで、たとへ釋放されたからとて、早速の先先に困る者のあるのは當然で、さうしたものを一時保護して、その身の振り方をつけてやると云ふ所まで手を延ばさなければならなかつたのが、この教誨師の役目でありました。今でこそ全國に八百以上も保護所がありますが、その頃はわづかに教誨師の篤志家が、その頼りない人達の杖柱となつて上げるより外に途がなかつたのであります。



和みゆく心

竹次郎が特赦の祝詞を述べられて向つ腹を立てたのも一理あります。この嚴冬にうつかり外へ出ようものなら、忽ち冷藏庫の鮭の樣にならねばならぬことを思へば、竹次郎がここ一番ふん張つて、居殘りをさせて貰らはうと仕向けるのも、強ち無理とはいはれますまい。それに竹次郎は、その時ほんたうに身體をいためてをりました。併し法律は、一度特赦になつた者を一日も監獄に留めておくことを許しません。竹次郎はむくれながらも放免になつて、一時私の家へ身を寄せることになりました。時に明治二十一年。

私には妻も子もありました。私はこんな山の中でも、職務であれば更に苦痛は感じませんでしたが、私の家族達にしてみれば、たゞでさへ淋しい山中の生活の上に、絶え間ない恐怖――それは命知らずの幾百といふ獰猛な兇漢を毎日目にし耳にするその恐怖が、襲ふ

のでありますから、彼等が心細かつたであらう事は想像されます。

併し私の家族達は、竹次郎に對しては、何の隔てをも致しませんでした。昨まで丸太の床に熊笹の枯葉を敷いてねてゐた彼が、今は疊の上に綿の入つた蒲團にくるまりました。稗の冷飯を宛てがはれた口に、白い御飯が運ばれました。やがては夕のランプを圍んで、親も子も打ちくつろいで、笑ひ話に興ずる時、彼も亦その仲間に入つて、ほゝゑましく耳かたむけるやうになりました。聖書をよんで、私がお祈りをする朝の禮拜の集ひにも、彼は跪坐して目を閉づるやうにさへなりました。

常州谷田部の小百姓の悴と生れて、幼い時から鍛冶屋に奉公し、冷酷な主人にこき使はれ、居たゝまらずにそこを脫け出して、遂に泥棒の仲間入りをした彼、二犯三犯と重ねて「彈屋竹」といへば、日本國中に響いたほどの大泥棒として、各所の監獄を渡り歩き、この雪深い北海道の集治監でも、指折の兇漢として怖れられ、娑婆の風より監獄の水の方が性に合ふやうになつた彼、ましてや北海道送りとなつてからは、故郷からの音便も杜絕えて荒みきつた彼ではあるが、かうした朝夕を送るにつれて、どうやら彼の心にも家庭への願みが頭を擡げて來たやうにみえました。竹次郎も遂に人間であることが否まれず、私が持つ家庭の團欒の愉悅は、竹次郎にとつても持ち得る心だつたのであります。

私が妻や子を呼ぶその舌で、竹次郎に呼びかけ、頑是ない兒が父を追ふその足で竹次郎と散歩を共にし、妻が鏡臺に對つて身仕舞をするその手で、竹次郎が割つた薪を納屋に運びます。かくして二ケ月三ケ月と經つうちに、彼の心に何かが解けて流れる或るものゝあることが感ぜられて來ました。遂に彼は口を開きました。

『旦那、申譯ないこつてございました。竹の心にも懲役人は懲いもんだと、しつかり判りましてございます。今迄は本當に申譯ない長い年月を過してまゐりました。これからはきつと心を入れかへますでございます。特赦にしていたゞいたお上の有難さがようく解りましたし、お骨折下さいました旦那のお心づくしも、骨肉に沁みてうれしうございます』

また竹次郎はかうもいひました。

『郷里に殘してありますお袋もどういたしましたか。親父は私が荒つぽい稼業をしてゐる中に死んだと聞きましたが、お袋はまだ生きてゐてくれますかどうか。北海道へ送りになつてからは、一向便りもいたしませんでしたが、旦那のお話で親の有難てえこともようく判りやしたから、きつと手紙を出して見ますでございます。お袋はこんなやくざからの手紙には、鼻もひつかけねえか知れませんが、それも仕方ございません。でも竹が達者で御赦になつたとだけでも知つてくれりや本望でございます』

またある時は、かうも云ひました。

『旦那、天の神樣にわつしの罪も亡ぼされるやうにお願ひして、

下さいまし。わつしには、どうも空恐ろしくつて、お願ひが出來ねえでござえます。これからは、きつと心を入れかへて、眞人間になりますでござえますから、天の神樣も幾久しう御照覽下さえますやうに……』

煤けた顏に、ギラ〳〵光つてゐた彼の眼からは、止め度もなく涙が流れて、疊に面をすりつけ、肩を搖つて忍び泣きをする彼を見ることも、珍らしくはなくなりました。

今や人生の常道に立ちかへつた彼の心に、新らしくも明るい世界が見出されて來たのであります。人間が自分の過去を知り、現在を悟り、更に將來の運命にまで考へ進む時に、第一に起るのは肉身の親と靈魂の親とに對する感恩でなくてはなりません。竹次郎の新らしく明るい世界に、郷里のお袋が現れ、天の神樣が顯はれたのも、この感恩の結果であります。

幾日か經つて、竹次郎が郷里に出した手紙の返事が來ました。流石に親です。それには老いた母は、一日も早く竹次郎の顏が見たいと望んでゐることが書いてありました。竹次郎は頻りに郷里へ歸る夢ばかり見續けました。



四月に入つて、さしもの雪も大方消え、木々の梢には紅い角芽がふくらんで來ました。北海道にも春がめぐつて來たのであります。竹次郎もやうやう郷里へ歸る頃となりました。彼は釋放される時に渡された給與口錢と、私が心許り餞別とを旅費にして、雪解時の困難な路を踏みしめながら、幾年か前に仲間と共に手鎖腰鎖でつながれたまゝ押送されたその路を逆に、今はたゞ一人小風呂敷を首つ玉に結びつけて、釧路の港へと向つて、標茶原野を足どりも輕く下つて行くのでありました。

老母の一言

竹次郎が歸つて來たと聞いて、親類や近所の人達が集つて來ました。さすがに血を分けた人達や幼友達の誰彼は深切でした。竹次郎が本心から悔い改めて、まづ母を尋ねて戻つたことが、何より皆を喜ばせました。過ぎこし日の物語や懺悔の言葉がそれからそれへと續きました。佛壇の父の位牌に燈明があげられたことは申すまでもありますまい。

私が釋放者を取扱つた過去の經驗で、最も勝れた成功を收め得た方法は、彼等が改心したと見た時、第一にその故郷に骨肉を訪ねて謝罪させることです。それが兩親であれば、最もよろしい。兩親がなくば、兄弟であれ親戚であれ、その血を汲む誰彼を訪ねさせて、これと和がせることが、そ

の人の將來をどの位明るくするか判りません。竹次郎もこの手で成功した一人でありました。

　竹次郎は特赦になつた御恩報謝と老母への孝養のため、當分村に足を留めることゝなりました。そして弟の畑の手傳ひや村の日雇などに精を出してをりましたが、やがて秋の多忙な收穫の時も終つて、そろそろ暇になつて來ると、この先どうして身を立てゝゆくかといふことを考へぬわけにはいきませんでした。老母もそれを考へてゐたのでした。

『竹よ、お前が折角改心して歸つてくれたんで、おれもどんなに嬉しいか知れねえ。それにしてもこれから先、どうしてゆく氣か。お前もよつく考へてくれや』

　ある晩、老母は改まつて、かう云ひました。

『そりやおつかあ、俺だつて考へねえでもねえ。毎日日傭取りみたいな事ばかりしてゐたつてしやうがねえとは思ふが、商賣しようにも金は無しさ………』



『それもさうだ。どうもお前も、これから先すぐに一人立ちになるつてわけにもゆくまい。それならいつそ北海道にあらつしやる親切な旦那様の所さ行つて、お側で百姓でもさせてもらつてはどうだらうのう』

『ほんになあ、俺の今迄の行狀が行狀だから、この土地では暮しもむづかしい。北海道ならもう氣候にも馴れてるし、土地の貸下げでも受ければ、百姓するに困ることはねえが』

『それが一番いゝだな。それならもう一ぺん北海道さ行くか』

『だつておつかあ、それは出來ない相談といふものだ。北海道へ行くにだつて、二兩や三兩の金では行けねえ。二十兩もかゝるからな』

『なにさ、それにはおれにも考があるから云ふのだよ』

『では、おつかあに金があるのかい』

『いんにや金は無い。だけんどお前が本氣で北海道へゆくなら、あれをお前に遣るから、旅費にして行つたらよかんべえ』

　さう云つて、老母が指さしたのは、土間に積まれた玄米の幾俵かでありました。これは老母が來年の秋まで食ひつなぐ大事の米であります。

『あれを俺にくれて、お前はどうしなさる』

『お前がほんたうに改心してくれりや、佛様だつておれを見殺しにはなさるまい。村中へ頼んだからつて、一年位は食ひつないでゆけるといふものだよ』

『では、おつかあは乞食するつもりか』

『おゝするとも、乞食でも何でもするだ。お前が改心してさへくれりや、おれは喜んで乞食になるだよ。竹……』

流石兇惡で鳴らした竹次郎ほどの者も、老母のこの一言には、思はず聲をあげて泣き出し、兩手を合せて母を伏し拜んだと云ひます。

それから幾日かして、竹次郎は村の人達へ更めて暇乞をし、再び北海道をさして旅立ちました。

突然、私の官宅へ訪ねて來た竹次郎の姿は、見るも氣の毒なほど窶れはてゝゐました。私も家族もびつくりして、思はず目を瞠つたほどでした。竹次郎は玄關先で泪ながらに老母の有難い訓戒を繰返して述べた後、

『旅費だつて、そんなに十分あつたわけぢやございません。併しお袋が折角こしらへてくれたのだから、不足を言はずに出かけました。室蘭から日高と十勝の海岸を歩いて來ましたが、川止めに會つたりして、思はない日數がかゝりましたんで、旅費は一文もなくなりました。それからは仕方がないので、人の軒に立ちました。御飯を惠んで下さる方へは、甘えて生米を無心いたしました。そしてそれを一粒づつ口へ入れて歩きました。それも釧路を過ぎてからは、もう旦那の家の軒先まで辿りついたやうな氣がして、一刻も早くお顏を拜みたいと、此の二三日は何處へも寄らず、何も口へ入れずにやつてまゐりました。どうか旦那、お慈悲でございます。お袋が安心するやうに、百姓なり何なり出來るやうにして下せえまし』

さう云ふ彼の眞心には、何の疑ふ餘地もありませんでした。私は二言といはせず、彼を受け入れてやりました。

それから早速土地の貸下げを願つてやつたり、又適當な女を娶はせて、一本立の農夫にしました。彼の夫婦は毎夜のやうに私の宅へ來ては、人の道、天父の話に耳を傾けました。

その後、私は教誨上の主義の相違から、職を辭して東京へ引上げて來ました。殘された竹次郎は、相變らず農夫として、近隣から可愛がられてをりましたが、明治三十年頃、私の跡を追うて上京しました。其の時は子供の二三人も出來、竹次郎夫婦は洗禮をうけて、立派な基督信者となつてゐました。

私は彼をまた臺灣の知人に紹介してやりましたが、臺灣に行つても、農業をしながら、旅人宿を兼業し、息子四人娘二人を立派に育てゝ、世を去りました。娘の一人は官吏に、一人は商店の事務員に、それ〴〵嫁き、息子達は兵役を卒へて農場で働いてゐる者もあり、末子はたしか、今東京のある中等學校に學んでゐる筈であります。



學校美談 銀の簪

山口縣熊毛郡室積村では、小學校新築の議が起つて、ある夜、村の主なる人々が集まり、夜の更けるまで大いに熟議を凝らしたが、何分工費が嵩むので、その財源に苦しみ、其の夜は遂に散會してしまつた。之を聞いた其の家の女中ふぢは、

『私は貧乏な家に生れ、イロハのイの字すら讀めないが、子供の教育の何より大切なものだ位の事は知つてゐる。その教育を施す小學校が金が掛かるから建てられないでは濟されまい。自分も細腕ながら、應分の事はしなくてはならぬ』

から考へたので、翌日、彼女は村役場に村長を訪ね、

『これは私のほんの志でございます。小學校建築費の中に加へて下さいまし』

と、懷から取出したは銀の簪が一本。これが彼女の唯一の貴重品であつた事は言ふまでもあるまい。

『貴女がこれを、學校へ寄附する?』

と、村長は目を瞠つて驚いてゐたが、やがてハラ〳〵と感激の涙をこぼし、

『村では貴女の志を清く受けまするぞ』と云つて、銀の簪を押しいたゞいた。



この美談が數日の後には村中に響き渡つた。これが醇朴な村人達を感激せしめずにはおかなかつた。人々は吾も吾もと私財を寄附して、小學校は見事に新築の工を了へた。その小學校落成の當日、彼女は推されて賓客の最上席に座を占めたが、時の知事は壇上にたちて、

『ふぢ女は教育もなき農村の貧しい一婦人に過ぎないが、その公益を思ふ志に至つて何人にも劣らぬ。富貴の人、金を投じて名譽を購ふ如き者に比すれば、その勝れること萬々、實に本校の本尊と謂ふべきである』と、稱讃の辭を呈した。

私が十七八歳であつたら

斯くありたい四つ

林學博士 本多靜六

一、親讓りの財産や名譽が有つても決して之を宛てにせず、裸一貫の境遇から叩き上げて見たい。——眞の幸福は自己の努力による外に無いのだから。

二、煩悶や迷ひ事が出來たら、師父又は先輩に在りの儘に打ち明けて、其の判斷を仰ぎたい。——間違が少ないから。

三、どんな仕事でも、取り掛つたら迷はず疑はず一心不亂になつてやりたい。——必ず其仕事に趣味を生じ何物にも優る快感が湧いて來るから。

四、何事でも、愉快に正直に親切に努力したい。——成功したいから。

國際場裡に馳驅すべき人材

法學博士 下村海南

今日の日本は誠に多事多難である。しかし幸にも人材が押すな〳〵と盛り上つて、市町村會議員から府縣會議員選擧にすら、幾萬圓を投じて惜しまない。況んや衆議院議員の運動費をや。況んや勅選議員の被選費をや。更に參與官政務次官大臣とやらの獵官熱に於てをや。

これほど國内に自稱人材が鬱積してるにも拘らず、更に大なる世界的の舞臺國際場裡に馳驅すべき人材はあまりに貧弱である。在外大公使館といは

ず、國際聯盟をはじめ、毎年開催せらる丶國際會議だけでも數十を以て算する。しかも此の舞臺に日本を代表して活躍すべき人材は、寥として曉天の星もたゞならず。人材の何れもが皆謙讓の德を發揮して尻込したがる。今もし我に外に向ひ、自由自在に思ふ事を筆にし舌にしうる力あれば、少くとも日本の爲め更に世界の爲め海外に微力を効さねばならぬ。

そう思ふと、吾語學の才の乏しきが怨めしいというて、もと〳〵學校の外語教育は帶に短く襷に長い、もし今われ十七八才であつたら、西洋人の家へ書生に住み込み、よく外語に耳や口を慣らして置きたい。そしてお國は外國への宣傳はお下手だなど笑はれないやう他日少しはお國の爲め役に立つて見たい。

理想は遠大に現實は忠實に

佐藤紅綠

私が十七八歳であつたなら先づ自ら獨立する事に計畫を立てます、富豪の子でもいつまでも親の脛を嚙るのは耻辱です、貧乏人は猶ほ更らの事です。私は中學や高等學校などへ行きません、私は自分の目的に向つて專門の學問を修めます、商人になるにしても醫者になるにしても工業をやるにしても、私は學校よりも實地修業を執ります、今日の青年が大學を卒業しても何んにも知らない、役に立たない、農學士は百姓に劣る、空理空論、虛名、肩書、そんなものを重んじた明治時代の餘弊が今日の青年を空虛な屑籠の樣なものにしてしまひました。私は絕對に學校を信じません、學校は今日の青年を誤まりました。

私は金も欲しくはなしも名譽も欲しくない人間で、只だ自分の力一ぱいに働

いて丁度劍道をやつて氣持の快い汗を搔いた時の樣に、渾身の血を躍らせながら生きて行きたいと思ひますから十七八歳であつたなら矢張り、學問などをせずに實地に働きながら研究したいと思ひます。實地に働きさへすれば獨立も出來るし一歩々々に目的に進んで行けます、現實を踏み固め〳〵して遠大な理想を築きあげるのです。私は學校などへは決して行きません。

アマゾンの流域へ

高島米峰

私は、今十八歳で、中學校の五年生であります。今日の中學校は、それ自身としての存在ではなく、上級學校の豫備門であります。私は、餘儀なく、更に上級の學校に學ばなければ、役に立たないやうに、教育せられつゝあるのであります。しかし私はもうこの上、上級學校で實生活にあまり役に立ちさうもない學科のために、頭を疲勞させて、その上に、今後幾年かの後、何々學士とかになつて、しかも、就職難のために、さいなまれたくありません。

私は、來年三月中學校を卒業したら、直に南米へ出かけます。殊に、今後必ず世界各國が、主力を集めて、その寶庫の扉を開かうとするであらうアマゾン流域の開拓に、身心を捧げたいと思ひます。狹い日本の內地で、お互がお互の財布を狙ひ合つて居たところで、畢竟、共食ひです。人類の幸福を、お互に食ひ荒して居ようよりは、南米の天地に、大和民族の發展を圖るといふのは、吾々年少氣銳の徒にだけ與へられた光榮ある天職ではないかと考へます。

矢張り同じ事であらう

救世軍少將　山室軍平

雜誌『雄辯』の更生

◎拾有九年の誌齡を重ね、本社發祥の名譽を擔へる雜誌『雄辯』は、時勢の進運に伴ひ、雜誌報國の大目的に添はんが爲、その內容に一大改善を加へ、本邦唯一の辯論雜誌として、毫も恥づる所なきものにしたいとの議は、昨年來盛んに社內に論議せられ、研究に研究を加へ、立案に立案を重ねつゝあつたが、議漸く熟し、成案愈々確立し、來九月から更生『雄辯』を出すことになつたのは、誠に喜ぶべきことである。

◎『雄辯』多年の奮鬪は漸く酬いられる時が來た。今や普選實施に依り滔天の勢を以て興隆した雄辯熱は、『世はいよ〳〵雄辯の時代になつた』と叫ばしむるに至つた。加ふるに創刊以來間接直接『雄辯』の爲に盡された年若き人々は、今や社會の各方面に活躍して、新進有爲の才鋒を發揮し、漸く國家樞要の位置を占めつゝあることは、確かに『雄辯』の誇りである。

○この雄辯勃興の好時機に於て、『雄辯』が內容を改善し、且多年の懸案たる定價改正を斷

私が現在十七八歳であつたとしたら、私は自分が曾て其の時代にやつた通りをくり返すだらうと思ひます。私は十六歳の暮、活版職工として苦學して居る間に、悔改めて基督の信者となり、十七歳の春、神に誓うて、將來勞働者、職工、其の他一般民衆の間に、この福音を宣傳する者にならうと決心し、爾來其の目的に向うて努力奮闘しつゝ、今日に至りました。枝葉の點に就いては、今一新にやり直すことが出來たら、かうもしたいと思ふ所がないではありませんが、大體に於て、私は今も四十年前に自分がやつた通りを、今一度くり返す外はなからうと思つてをります。

大いに勉強して見たい

至誠堂病院長　吉岡彌生

私は過去を振返つてみますに、たとひ私が現在十七、八歳であつたとしても、事實その當時の私と、思想に於ては、殆ど何の變りもないと考へます。即ち、私は男子のすることも、女子のすることも、すべて知りたいのが性分ですから、先づ女學校を卒業して、今の男子と同樣な高等學校程度の教育を受け、それに依つて、外國語及び自然科學の知識を十分理解修得しようと思ふでせう。そして、更に進んで大學に入り、職業教育を受くると同時に、所謂『學術の蘊奧』を極めたいと思ひますが、醫學及び醫術が、何といつても、私に最も適して居ると信じますから、職業はやはり醫學を選ぶでせう。どう考へても、私が現在十七、八歳であつたら――といふ特殊な感想は持ちません。以上のことが、私の十七、八からの現實の希望であり、憧憬であつたのですから。それにつけても現在の日本の女子教育の不振を慨く者、獨り私一人のみではありますまい。

行して、一雜誌の普及を圖り、以て雜誌報國の大目的に邁進せんとするは、眞に時宜に適する企であつて、必ずや江湖の歡迎を受け、素晴らしい發展振りを示すであらうと、一般の注目を惹いてゐる。

日本の三大戲曲

明治以後に書かれた諸家の脚本數百篇の中、最も傑作と云はれてゐるのは、

菊池寛氏作「戀愛病時代」
山本有三氏作「坂崎出羽守」
岡本綺堂氏作「尾上伊太八」

の三篇であります。『戀愛病時代』は近代戀愛の相を寫した極めて深刻なもの、『坂崎出羽守』は德川千姫に對する坂崎成政の悲痛な失戀を描いて問題となつた名篇、また『尾上伊太八』は市川左團次の演出に依つて一躍著名となつた原田伊太八と遊女尾上との數奇な物語、三篇が三篇、非常に面白いものであります。

講談倶樂部九月號には、この三大戲曲を小說に書直し、特別讀物として掲載して目下非常な評判を捲起してをります。



青春

中村武羅夫
田中良畫

胸の痛手

暑い〳〵と、苦しんでゐた夏も、だん〳〵終りに近づいて、初秋の時候になつた。陽の光、空の色、雲のたゝずまひ、そして、取りとめもなく吹く輕い風、みんな秋だつた。

美しい日和がつゞいて、夜になると、星の光が冴えた。庭の隅や、手洗鉢の蔭などで、虫の鳴く聲が、だん〳〵繁く聞えるやうになつて來た。

避暑地に行つた人々は、初秋の風が吹きそめると共に、慌たゞしく都へ歸つて來た。が、岸本信一郎だけは、夏が終つても、秋の初めになつても、矢來の家には歸つて來なかつた。冴子や鶴子は、以前とちつとも變らずに、時々手紙を出したが、今では、返事を呉れるのも面倒臭くなつたのか、信一郎からは、ちつとも便りがなかつた。

『岸本さんからは、まだ手紙が來ない？』

冴子は、學校から歸つて來ると、行きなり姉の部屋に駈け込んで、訊くのが常だつた。

『手紙なんか、來やしないわ。』

鶴子の返事は、何時でも決つてゐた。彼女は、終ひには、信一郎から手紙が來ないことよりも、手紙が來ないと冴子に返事をすることが悲しくなつて來た。

『どうしたんでせう？』

冴子は、自分たちの方からいくら手紙を出しても、信一郎からは、ちつとも返事を呉れないことに、拘泥らずにはゐられなかつた。彼女は、相手が冷淡な以上、自分たちも打つちやつて置けばいいと思ひながら、やつぱり氣にせずにはゐられなかつた。

『屹度、お忙しいのよ。』

鶴子は、どんな場合にも、人を非難したり、惡く思つたりすることは厭だつた。信一郎から手紙が來ないのは、信一郎が、怠けてゐるのでもなく、冷淡なのでもなく、何にかのために、忙しいのだらうと思ひたかつた。冴子に、さう返事をするばかりでなく、自分の心にも、さう思はせたかつた。

『お忙しいのでせうつて？』と冴子は、びつくりしたやうに眼を見張つた。

『えゝ。』

鶴子は、微かに頷くと同時に、顏を背向けてしまつた。

『岸本さんが、何にがお忙しいの？』と冴子は冷笑した。

『何にがつて、それは、いろ／＼お忙しいことがあると思ふわ。』

温和しい鶴子も、妹の冷嘲的な態度に、思はずむつとして、反抗せずにはゐられなかつた。

『學校は、もうお濟みになつたのだし、そんな忙しい筈なんかないと思ふわ。』

『だつて、人樣のことですもの、分らないぢやないの。』

『でも、いくらお忙しいたつて、手紙をお書きになる暇もないなんていふ筈は、ないと思ふわ。』

『それだつて、どうだか分らないぢやないの………』

『分つてるわ。』

『どうして？』

『わたし達が行つた時だつて、あの奧さんの別莊へ行つて、あゝして遊んでゐらしたぢやありませんか。』

『それは、あの時は、さうだつたけれども………』

『今は、お忙しいとおつしやるの？』

『えゝ。』

『そんなことが！』

『だつて、分らないわ。』

『屹度、やつぱり、あの奧さんたちとご一緒に、遊んでゐらつしやるのよ。そして、家に歸つて入らつしやることも、わたし達に手紙を下さることも、忘れてゐらつしやるのよ。お忙しいことなんかあるものですか。』

『もう、そんなことは、どうだつていいぢやないの。』

鶴子は、冴子が餘り拘泥るのが煩くなつて、眉を顰めた。

『えゝ、それはどうだつていいけれども……』

冴子も、考へて見れば、假令、岸本がどんな態度をとらうと、さう何時までも、拘泥はる必要はなかつた。たゞ、自分の家の部屋を貸して、一緒に暮して來たといふだけの仲である。それ以上、何んでもないのだ。厭になつて來れば、出て行つてしまふかもしれない。それだつて、別に文句など言ふ資格はありはしないのだ。

それだのに、岸本から手紙が來なかつたり、冷淡にされたりすることが、どうして、こんなに氣になるのだらう。自分の兄ではなし、戀人ではなし、何んにも氣にすることなんかありはしないのだ。

冴子はさう思つて、岸本の態度に對して、餘り執拗く拘泥はる自分が、何んだか恥しくなつて來た。

『冴子さんは、どうしてそんなに何時までも、岸本さんのことばつかりに、拘泥はらずにはゐられないの。』

鶴子は、顏を赧らめて微笑を含むと、妹の顏を覗いた。

『あら、わたし、そんなに何時までも、岸本さんのことばつかりに、拘泥はつてゐやしないわ。』

冴子も、ぽつと顏を赧らめた。

『わたし達が、岸本さんにお手紙を上げるのは、何にも、岸本さんからご返事を頂くためばかりぢやないわ。』

『……』

『岸本さんが、ご返事を下すつたつて、下さらなくたつて、そんなことは、どうだつていいと思ふわ。』

『……』

『以前、あんなに親しくしていたゞいたんですもの。時々、お手紙を差し上げるのは、當り前ぢやないの。』

『えゝ。』

冴子は頷いた。

『だから、岸本さんの方から、手紙が來ても來なくても、そんなに氣にすることはないと思ふわ。』

鶴子は、妹に言ひ聞かせた。が、その實は、それは妹に言ひ聞かせることではなくて、自分自身の心に、言ひ聞かせることだつた。何にを信一郎に求めることがあるだらう。あの人は、たゞ、お座敷を貸したお客さまではないか。あまりいろんなことを要求しても、それは、要求する方が無理である。これが、鶴子の、かね〴〵自分に言ひ聞かせる言葉だつた。

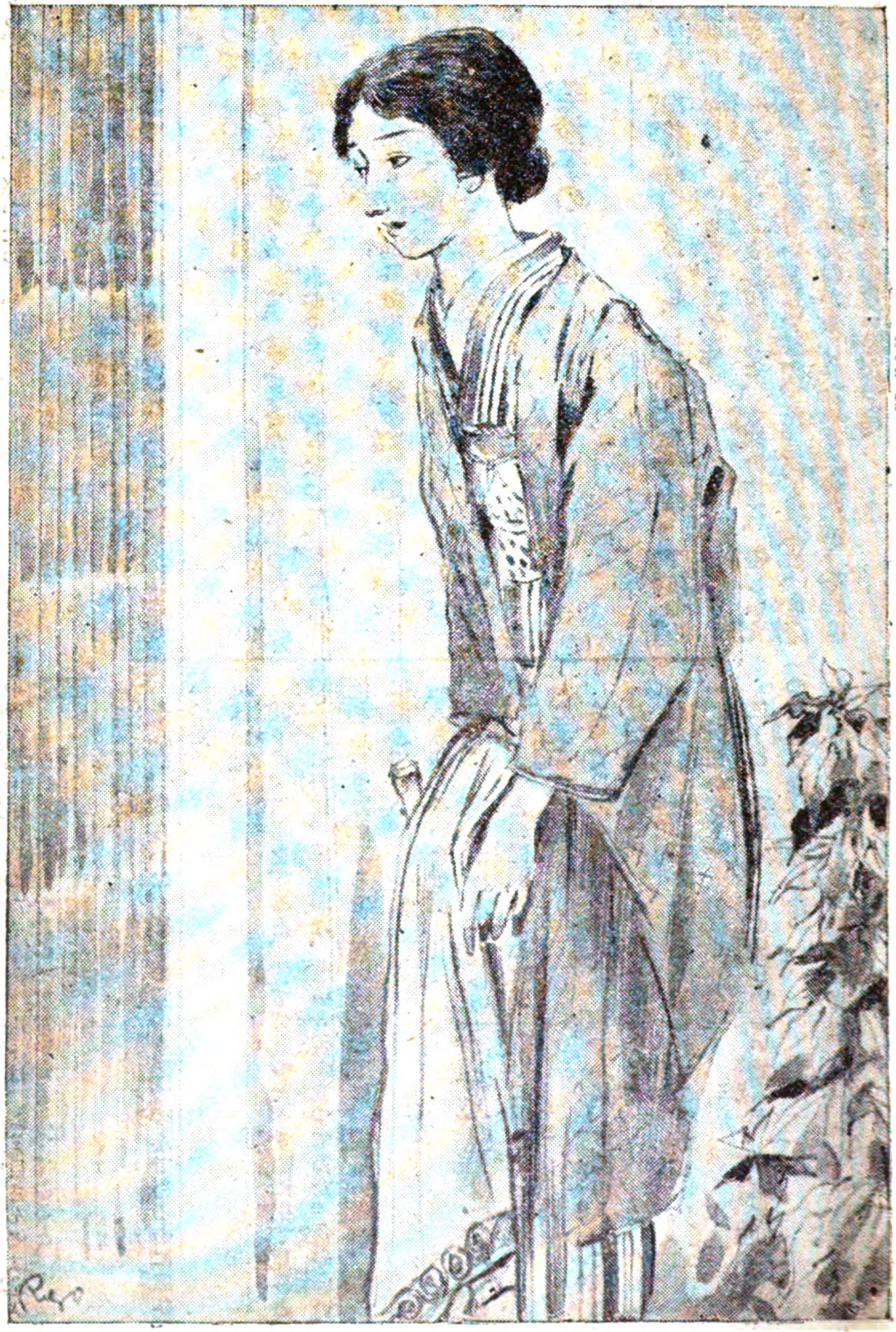
一時は、何物をも獻げて、愛して來た信一郎だつたけれども、逗子ホテルに滯在した、たつた二日か三日の間に、信一郎の態度にすつかり絶望してしまつた鶴子は、哀しい諦めをつけてゐた。信一郎に、何んにも求めてはならないといふことである。彼が、どんな態度を、自分たちに對して取らうと、決して恨むこともなければ、不平を言ふこともないと、悲しく諦めてゐた。



『ね、お姉さま。』
　暫らく默つて何か考へてゐた冴子は、急に眞面目くさつた顏をして、改まつた調子で呼びかけた。
『何に？』
　鶴子は、訝しげに妹の顏を眺めた。
『わたし達はね、もう岸本さんのことは、何んにも言はないことにしませうよ。』
『あら、どうして？』
　鶴子には、冴子の言つてることが、よく腑に落ちなかつた。
『だつて、岸本さんのことで、何にか言つたり思つたりすると、何んだか氣がへんになるんですもの。』
『どうして？』
『どうしてだか知らないわ。』
　冴子はつと顏を背向けたが、彼女のその横顏は、ひどく悲しさうな色を帶びて見えた……
『岸本さんのことを、お話したつていいぢやないの。』
『…………』
　冴子は、何故か默つてゐた。
『岸本さんのことを思つたつて、構やしないぢやないの。』
『…………』
『氣持ちがへんになるなんて、何んだか可笑しいわね。』
『あら、ぢや、お姉さまは、岸本さんのことを思つたつて、何んともない？』
『ええ。』
　鶴子は曖昧に頷いたが、羞含むやうに顏を赧らめた。
『わたし、何んだか、さびしいやうな、悲しいやうな氣がして來るのよ。』
『さう。』
『お姉さまは、何んともないなんて、おえらいわね。』
『あら、えらくも何んともありやしないことよ。』
　鶴子は、慌てて言つた。彼女は、妹の率直さ、正直さに對して、何んだか、自分の疚しさを感ぜずにはゐられなかつた。冴子は、何も彼も正直なことを言つてゐる。それだのに、自分は、衒つたり、嘘を吐いたりしてゐるやうな氣がして、恥かしく思はずにはゐられなかつた。
　すつかり諦めたとはいふやうなものの、それは、理性の上のことで、感情としては、諦めても諦め切れないものが殘つてゐた。いや、諦め切れないといふよりも、胸に受けた痛手が、まだ、すつかり癒え切らないのであつた。信一郎のことを思つたり、話したりする度に、その痕が、或る痛みを感ぜずにはゐなかつた……
　が、鶴子は、それを冴子のやうに、正直に、打ち明けることが出來なかつた。正直に打ち明けることが出來ないのは、反つて、冴子よりも自分の方が、拘泥はつてゐるのかもしれなかつた。冴子より自分の方が拘泥はるのは當り前だとしても、鶴子は、それを恥かしく思はずにはゐられなかつた。

『どつちにしても、わたし達は、岸本さんのことなんか、綺麗さつぱり忘れてしまつた方がいいわ。』と、冴子が言つた。
『………』
鶴子は、妹の言葉に對して、何んとも答へなかつた。冴子の言ふことは、自分が言はうとするところである。忘れてしまつた方がいいには違ひないが、さうかといつて、あんなに親しくした人のことを——いや、鶴子の場合に於ては、單に親しくしたばかりではなく、竊かに處女の殉情を獻げて愛しすらもした人のことを、そんなに易々と忘れられる筈はなかつた。忘れられる筈がないばかりでなく、例へ自分のことなんか何んとも思つてくれない人にしても、自分だけが、竊かに心の何處かで思つてゐるぐらゐのことは、差支へないやうな氣がした。
　何時までも〳〵、信一郎のことを忘れないのは、その後、だんだん親しくなつて來た竹内に對して、濟まないやうな、邪惡なやうな氣もしたけれども、しかし、たゞ潔く處女らしい心を持つて、思つてゐることぐらゐ、ゆるされてもいいやうな氣もした。
『そして、わたし達は、外の人のことを思つたり、お話ししたりした方がいいわ。』と、冴子が言つた。
『外の人つて？』
鶴子は顔を擡げると、妹の眼を覗き込むやうにして眺めた。
『外の人よ。』
冴子は、意味ありげに、にや〳〵笑つてゐた。
『まあ、をかしな冴子さん。』
『あら、なぜ、わたしがをかしいの。』
『だつて、人の顔を見て、にや〳〵笑つたりするんですもの。』
『ね、お姉さま、岸本さんのことなんか、すつかり忘れて、もつと外の人のことを思つた方がいいぢやないの。』
『だから、外の人つて、どんな人のことだか、訊いてゐるぢやないの。』
『お分りにならない？』
『分らないわ。』
『まあ。』
冴子は、くる〳〵と眼を見張つた。
『どうしたの。』
『だつて、お姉さまが、餘まり感が鈍いんですもの。』
『まあ、失禮なことおつしやい。』
鶴子は、優しい眼をして笑ひながら、妹を睨めた。
『だつて、ほんたうぢやないの。』と冴子は、揶揄ふやうに笑つてゐた。
『自分で、はつきり言ひもしない癖に…………』
『はつきり言はなくたつて、分りさうなものだわね。』
『曖昧なことを言つたつて、誰に分るものですか。』
『だから、感が鈍いと言ふのよ。』
『鈍くたつていいわ。』と、鶴子はつんとした。

『あら、お姉さま、怒つたの？』
『誰だつて、そんな失禮なことを言はれれば、怒つてよ。』
『ご免なさい。』
冴子は、ぺこりと、冗談のやうに、一つ頭を下げた。
『何んでも謝まりさへすれば、それでいいと思つて……』
『ぢや、どうすればいいの。』
『どうすればいいか、わたし、そんなことは知らないわ。』
『まあ、氣むづかしいお姉さま。』
『冴子さんは、何時だつて、わたしを馬鹿にしてゐるんですもの。』
『あら、わたしは、こんなにお姉さまのことを思つて居るのに。』
冴子は、不平さうに、頬つぺたを膨らませた。
『わたしのことを思つてくれてゐるのなら、そんなに馬鹿にしない方がいいわ。』
『まあ、驚いた。』
『何んにも驚くことはないわ。』
『だつて、お姉さまは、わたしのことを、惡くばつかり取つてゐらつしやるんですもの……』
冴子は、何時の間にか、少し涙含んでゐた。
『だつて、お前が、あんまり人を馬鹿にするからさ。』
鶴子も、何時か悲しい氣持ちになつてゐた。彼女は、冴子を非難したことが、だん／＼後悔されて來た。よく考へて見ると、竹内の手紙にあつたやうに、冴子は、お茶目さんには違ひないが、たつた二人しかないきやうだいとして、自分のことを思つてくれてゐるのは、ほんたうである。それを、馬鹿にしてゐるなどと非難したことは、すこし氣の毒だつたやうな氣がして、後悔した。
『惡かつたら堪忍してね。』
冴子は涙を一ぱい溜めた眼をして、素直に謝つた。
『あら！』
鶴子は、思ひがけない妹の素直な態度に、びつくりせずにはゐられなかつた。
『わたし、お姉さまを愛してゐるのよ。尊敬もしてゐるのよ。』
『わかつてるわ／＼。』と、鶴子は慌てて言つた。
『それだのに、お姉さまから、お姉さまを馬鹿にしてゐるやうに思はれるのは、屹度、わたしが惡いのだわ。』
『いゝえ、冴子さんが惡いことなんか、ちつともありやしないわ。』
『ね、お姉さま、堪忍してね。』
さう言つた時、冴子の二つの眼から、ぽろぽろと涙が零れ落ちた。
『わたしが、惡るかつたのよ。だから、わたしを堪忍してよ。』
と、鶴子も、つい泣いてしまつた。
二人の涙は、柔らかく、甘く、二人の心を濡らして、溶け合はした。



『わたしが、岸本さんより外の人と言つたのは、竹内さんのことなのよ。』

『まあ。』

『ね、お姉さま、わたしたちは、岸本さんのことなんか、さつぱりと忘れてしまつて、竹内さんのことばつかり思ひませうよ。』

『だつて、だつて……………』

鶴子は、何にか言はうとして、言ふことが出來なかつた。彼女は、口籠つてしまふと、火のやうに眞赤になつて、涙に濡れた眼で、冴子を見た。

冴子も、やつぱり涙に濡れた眼で、姉の顏を見ると、何故ともしれず、ぱつと、顏を眞赤に染めずにはゐられなかつた。

二人は、擬くなつて、顏と顏とを見合せたまゝ、つい微笑し合はずにはゐられなかつた……………

美沙子の訪問

或る日――――

冴子は、學校に行つてゐるし、母は女中を連れて、下町の方へ買物に出かけて、誰も留守だつた。

鶴子が、一人で留守番をしてゐると、玄關の方に、優しい女の聲が聞えた。それは若い美しい聲だつた。鶴子は初め、自分の友達が訪ねて來てくれたのかもしれないと思つたが、それにしては、ちつとも聞き憶えのない聲だつた。

鶴子が、若しかしたら、他家の玄關に立つて呼んでゐるのを、自分の家と間違へたのではないかと思つてゐると、玄關の優しい女の聲は、また呼んだ。

『ご免下さい〳〵。』

それは、明らかに、鶴子の家の玄關で呼んでゐるのに違ひなかつた。

『はい。』

鶴子は、返事をすると、慌てて立つた。玄關に出て見ると、格子戸の外に、華やかな、若い女性が立つてゐた。色の白い、温和しさうな顏立ちで、長い睫毛の下に、優しい瞳が、清らかに澄んでゐる。

『入らつしやいませ。』

鶴子は、思ひがけない美しい若い婦人の來訪に、はつとして、ちよつとの間驚いてゐたが、直ぐに手を支いた。

『ご免遊ばせ。』

さう言ひながら若い婦人は、淑やかに、玄關に入つて來た。

『どなたさまで？』と、鶴子は問うた。

『わたし、北海道からまゐりましたのですが。』

『北海道から？』

鶴子は、それで、この美しい若い婦人が、岸本を訪ねて來たのに違ひないと察した。

『岸本さんは、只今、こちらにゐらつしやいますでせうか……………』

『只今、お留守でございますが。』
『お留守ですの。』
若い婦人の美しい顏には、あり〳〵と當惑の色が浮かんだ。
『はあ。』
『どちらへ行らつしやいましたのでございませう？』
『逗子に行つてゐらつしやいます。』
『ヅシ？』
『はあ、海岸ですわ。』
『あゝ、相模の逗子ですか。』
『さうですわ。』
『それなら、存じてゐます。避暑に行らしたぎり、まだ、お歸りにならないのでございませうか？』
『えゝ。』
鶴子は、岸本が、逗子へ避暑に行つたことを知つてゐるぐらゐなら、この婦人は、屹度、岸本とは、親しい間柄に違ひないと思つた。
『わたしは、また、もう疾つくに、こちらへ歸つてらつしやるのだとばかり、思つてゐましたの。』
若い婦人はさう言つて、困つたやうに、また淋しさうに微笑した。
『夏の初めに、彼方へ行らしたぎり、まだ一度も、お歸りになつたことはございませんわ。』
『ずつと、逗子にばかりゐらつしやいますの？』
『えゝ。』
『わたし、いくら逗子の方にお手紙を差上げても ちつともお便りがないものですから、屹度、もう東京へお歸りになつてゐらつしやるのだと思つて、近頃は、こちらへばかりお手紙を差し上げてゐたんですけれど、やつぱり、お便りがなかつたものですから……』と若い婦人は、何んだか腑に落ちなささうな表情をした。
『こちらへまゐりました岸本さんへのお手紙は、殘らず、逗子の方へお廻ししてあるんですけれども。』
鶴子は、辯解するやうに言つた。それは、全くその通りに違ひなかつたけれども、彼女は、何んだか、若い婦人から非難されてゐるやうな氣がしたのである。信一郎に來た手紙なんか、いい加減にして渡さないために、それで、信一郎が返事もくれないのだと、非難されてるやうな氣がして、鶴子は、つい辯解するやうな氣持ちにならずにはゐられなかつた……
『岸本さんは、お變りないのでせうか？』と、若い婦人は、遠慮深さうに訊いた。
『岸本さんでございますか。』
『えゝ。』
『さあ、如何ですか……』
鶴子は、若い婦人に對して、如何にも氣の毒な氣がしたけれども、彼女自身にも、はつきり答へることが出來なかつた。
『ご存じありませんの？』

若い婦人は、訝しさうな眼差しをして、首を傾げてゐた。

『實は、こちらにも、近頃、ちつともお便りがございませんものですから。』

『まあ。』

『どうして居らつしやることか、お案じしてはゐるんですけれど。』



『では、何時お歸りになるかも、分りませんのね。』

『はあ。』

『どうしようかしら。』

若い婦人は、當惑さうに考へ込んでしまつた。

『あの、失禮でございますが、岸本さんをお訪ねになつて、わざ〳〵北海道からお出でになつたのでございますか。』

『え〻。』

『それは〳〵。』

鶴子は、同情せずにはゐられなかつた。自分が逗子に訪ねて行つて、信一郎が留守だつた時の心細さと當惑とを思ひ出すと、彼女は、餘計、同情せずにはゐられなかつた。東京と逗子との間でさへ、あんなに心細かつたのだから、北海道のやうな遠い處からわざわざ出かけて來て、肝心の訪ねる目當ての信一郎が留守だと、どんなにがつかりすることだらうと、優しい鶴子は、涙含ましくさへなつて來た。

『逗子は、こちらから餘つ程遠いところでせうか？』



若い婦人は、暫らく經つてから、力なく訊いた。

『さうでございますわね、二時間とちよつとぐらゐで、行けるところなんですけれども……』

『わたし、こちらには、初めてまゐつたものですから、ちつとも樣子が分りませんので……』

『お差支へありませんでしたら、汚いところですけれど、お上りになつて、お休みになりませんこと？』

鶴子は、親切に言つた。彼女は、自分も逗子に行つて、心細かつた時に、竹内が親切にしてくれた時の、嬉しさと力強さとを思ふと、誰に對しても、困つてゐる時には、優しく親切にしなければならないと思つた。

『えゝ、有り難うございます。』

若い婦人の顏には、あり〳〵と、救はれたやうな色が浮かんだ。

『さあ、どうぞ。』

鶴子は、若い婦人を座敷に上げると、お茶だの、お菓子だのを、自分で仕度をして出すと、この見知らぬ若い婦人を親切に歡待した。

『どうぞ、お構ひなく。』と、若い婦人は、ひどく恐縮してゐた。

『生憎く、誰もゐませんで、わたし一人、留守番してゐるところだものですから、ほんとに失禮ですけれども。』と、鶴子は優しく言つた。

二人共、同じやうに年齢が若いのと、それに、あまり突然會つたので、はじめのうちは、お互ひに少し反撥し合つたけれども、だん／＼話してゐるうちに、打ち解けて來た。そして、鶴子は、その若い婦人が、美沙子といふ名であることも知つた。彼女が、北海道の信一郎の家にゐて、時々、手紙を信一郎のところへ寄越してゐた、あの美沙子であることを知つた。

美沙子の方でも、信一郎からの手紙の序でに、自分が、今座敷を借りてゐる家に、令嬢が二人あるといふことは言つて來たので、鶴子や冴子のことを知つてゐた。

『まあ、あなたが鶴子さんとおつしやいましたの。』

美沙子は、懐しさうに言つた。彼女は、折角訪ねて來た信一郎がゐないことに失望したけれども、優しい鶴子に會つたことは、非常に嬉しかつた。

『わたし、あなたのお噂は、岸本さんから、よく伺ひましたわ。』

鶴子も、急に、打ち解けた調子になつた。

『わたしだつて、あなたのことは、以前、岸本さんから、ちよいちよいお手紙の序でに伺つて、存じてゐましたのよ。』

『まあ。』

鶴子は、岸本が、自分のことを手紙に書いて、美沙子に知らせたこともあるのだと思ふと、嬉しさが込み上げて來た。

『お妹さんが、おありでせう。』

さう言つて美沙子は、首を傾げて、笑つてゐた。

『え〻。』

『冴子さんとおつしやるのね。』

『さうですわ。』

『只今、お留守？』

『學校ですの。』

『わたし、お目にか〻りたい。』

『もう直き、歸つて來るでせう。』と、鶴子は時計を見た。

『岸本さん、逗子が餘つぽどお氣に召したと見えますわね。』

美沙子は、話頭を轉じて、また、岸本の上に及んだ。

『屹度、お氣に召したんでせう。』

鶴子は、岸本のことを言はれると、やつぱり、拘泥りを感ぜずにはゐられなかつた。

『あなた、逗子をご存じ？』

美沙子は、そこへ岸本がゐるのだと思ふと、逗子といふその土地まで、何んだか懐しくて堪らないらしかつた。

『え〻。』

『行らしたことがございますの。』

『この夏、岸本さんをお訪ねして、一度まゐりましたわ。』

『好いところですか。』

『え〻。』

『わたし、逗子だの、葉山だの、鎌倉だのはよく小説に出て來るものですから、小説を讀んで知つてゐますけれども、自分で行つて見たことはございませんの。』

『北海道からぢや、遠いんですものね。』と、鶴子は微笑

した。
『あなたは、「不如帰」をお讀みになつたことがありまして？』
『えゝ。』
『あの小說の中に、浪子のことがよく書いてありますわね。』
『さうですわね。』
『わたし、あの小說を讀んでは、どんなに泣いたかしれませんわ。』美沙子は、無邪氣に、いろ〳〵のことを話した。彼女は、人を疑つたり、不平を持つたりしてゐるやうなところは、ちつともなかつた。どこまでも優しく、どこまでも朗らかで、快活だつた。
　鶴子は、美沙子と話しをしてゐるうちに、だん〳〵彼女の魅力に引きつけられて行つた。こんなに好い人が、岸本さんと結婚したら、どんなに素的だらうと思つた。鶴子は、美沙子を愛する氣持ちにすらなつてゐた。
『あなた、岸本さんと、ご結婚なさるといいわね。』
　初めて會つたばかりの人に、そんな立ち入つたことを言ふのは、どんなに失禮だかといふことは分つてゐながら、鶴子は、つい言はずにはゐられなかつた。言つてしまつてから、はつと氣がついて赧くなつたけれども、もう遲かつた。
『え？』美沙子は、びつくりしたやうに眼を見張つて、鶴子の顏を眺めてゐた。
『ご免なさい。』鶴子は、眞赤になつて謝つた。
『いゝえ、そんなにお謝りにならなくたつて、よろしいのよ。』
美沙子は、顏を赧くして、氣の毒さうに言つた。
『だつて、ほんたうに失禮なことを、つい浮つかり喋つてしまつて……だつて、わたし、心からさう思つたものですから……惡く思はないで下さいましね。』と、鶴子はしみ〴〵言つた。
『どういたしまして。わたし、惡くなんか思ふものですか。』
『ほんたうに、あなた、岸本さんと結婚なさるとよろしいのよ。』鶴子はまた改めて言つた。
『結婚することになつてゐるんですけれども……』と、さう言つて美沙子は、何故か少し悄氣た。
『もう、お決りになつてゐらつしやるの。』と鶴子は、さすがに胸を躍らかせた。
『えゝ、話しだけは。』と、美沙子は力なく言つた。
『ぢや、今度出て入らつしたのは、結婚なさるため？』
『でも、もう先の話しなんですもの。どうだか分りやしませんわ。』
『いくら、もう先の話しだつて、さういふ話しは、ちやんと決つた以上、變ることはございませんわ。』
鶴子は、自分が信一郎を愛しても、その愛を、信一郎に依つて受け入れられず、失戀したことは反つて好かつたのだと思つた。自分が、若し信一郎と結婚するやうなことがあれば、美沙子を、一生不幸に泣かせなければならなかつただらう。
だが、それは、鶴子の堪へ得られないところであつた。假令

令、自分が失戀の痛手に傷ついても、美沙子のやうな可憐で、優しい女性を、不幸に泣かせることは、忍びなかつただらう。自分が苦しんでも、美沙子を幸福にすることは、鶴子に取つて喜びだつた。自分が、信一郎に失戀したことは、反つて好かつたのだと思つた。

　だが、そんなことが、細かに言へるわけはなかつた。

『今は、岸本さんの氣持ちだつて、どう變つてゐらつしやるかしれないんですもの。』と、美沙子の氣持ちは、悲觀に傾いてゐた。

『大丈夫よ。』鶴子自身、決して大丈夫だとは思はないのであつたが、しかし、彼女は、美沙子を力づけるために、保證せずにはゐられなかつた。

再び逗子へ

　美沙子は、一時間餘りも休息してから、これから直ぐに、逗子へ行くと言つて、出かけて行つた。

『歸りに、また、伺ひますわ。』と、美沙子は玄關を下りてから言つた。

『どうぞ。』

　鶴子は、玄關まで送り出してゐた。

『わたし、今度は、岸本さんと一緒に歸りたいと思つてゐますの。』

『是非、さうなさいませ。』

『ぢや、左樣なら。』『左樣なら。』

　鶴子は、このまゝ美沙子に別れてしまふのが、何んだか殘り惜しいやうな氣がして、彼女が玄關を出て行つてからも、ぢつと見送つてゐた。

　美沙子が、門を出るか出ないかに、殆んど入り違ひに、冴子が學校から歸つて來た

『お姉さま、お客さまだつたの？』冴子は、姉がぼんやり玄關に立つて居るのを、不思議さうに見上げて訊いた。

『えゝ。』

『お綺麗な方ね。』

『冴子さん、逢つたの。』

『わたしが歸つて來ると、ちやうど、門を出て行らつしやるところを見たの。』

『美しい方でせう。』

『とても素的な方。』と、冴子は、眼を見張つてゐた。

『誰だか分らない？』鶴子は微笑を含んでゐた。

『分らないわ。』と、冴子は頭を掉つた。

『北海道から出て入らした方よ。』

『北海道から？』

『えゝ。』

『誰あれ？』

『美沙子さんつておつしやる方なの。』

『美沙子さん？』と、冴子は首を傾げてゐた。

『岸本さんを、訪ねて入らしたのよ。』

『あゝ、分つた。』と、冴子は手を打つて叫んだ。

『分つたでせう。』

『その方から岸本さんへ來た手紙なら、わたし見たことがあつてよ。』言ひながら、冴子は靴を脱いで玄關に上つて來た。

鶴子が、自分の部屋に歸ると、冴子も後ろから、のこ〱跟いて來た。

『それで、あの方、どうなさるの？』

冴子は、やつぱり、美沙子のことが氣にかかるらしかつた。

『これから、逗子に行らつしやるのだつて……』

『逗子に？』

『えゝ。』

『一人で？』

『えゝ。』

『あの方も、屹度失望して、歸つて入らつしやるのだわ。』

冴子は、傷ましさうに言つた

『なぜ？』鶴子は、腑に落ちないやうな眼附きをして訊いた。

『なぜでも。』

冴子は、獨りで、意味ありげに、にや〱笑つてゐた。

『失望して歸つて入らつしやるか、得意になつて歸つて入らつしやるか、そんなことは、どうだか分らないぢやありませんか。』

『分つてるわ。』冴子はさう言つて、高慢さうに鼻を蠢めかした。

『冴子さんは、どうして、そんなことを言ふの。』

『あの方、屹度、岸本さんを愛してゐらしやるのよ。』

『それは、さうかもしれないけれども。』と、鶴子は口籠つて、顏を赧くした。

『でも、岸本さんは、あの方を愛しちやゐらつしやらないのよ。わたしには、分つてゐるわ。わたしは、あの方の手紙を見たんですもの。あの方は、どんなに岸本さんを愛してゐらつしやるかしれないのよ。』

『……』

『けども、岸本さんは、今では、あの方のことなんか、ちつとも愛しちやゐらつしやらないのよ。』

『そんなことは、どうだか分らないぢやないの。』

『うゝん、分つてゐるわ。』

『どうして？』

『だつて、わたし、あの方の手紙を見たんですもの。』

『それは、美沙子さんの氣持は分つたつて、岸本さんが、美沙子さんをどう思つてゐらつしやるかは、分りやしないわ。』

『それだつて、わたしには、ちやんと分つてゐるわ。』

『まあ油斷がならない人ね。』

鶴子は微笑を含みながら、妹を優しく睨んだ。

『だつて、それぐらゐのことが、分らなくつて。』と、冴子は笑つてゐた。

『わたしには、分らないわ。』
『それは、お姉さまが、ぼんやりしてゐらつしやるからよ。』
『まあ。』
鶴子は不服さうに眼を見張つたけれども、妹の言ふことが尤もであると思へば、別に抗議を言ふことも出來なかつた。
『美沙子さんは、一人で逗子に行らしても、屹度、失望して歸つて入らつしやらなければならないのよ。わたしには、ちやんと分つてゐるわ。わたしたちが失望して歸つて來たやうに、美沙子さんも、やつぱり失望して、歸つて入らつしやらなければならないのよ。』
『それは、どうだか分るものですか。』
鶴子は、妹の言葉を、そのまゝ信ずることが出來なかつた。それは、冴子の言ふ通り、美沙子の方で、どんなに信一郎を愛してゐても、信一郎の方では、美沙子を愛してゐないかもしれない。
が、あんなに美しい、あんなに[illegible]しい美沙子を、眼の前に見たら、若し、信一郎がどんなに冷淡な人間であるとしても、彼女に對して、心を動かさないではゐられないだらう。殊に、信一郎は、そんなに冷淡な男であるとは思へない。青年時代の移り氣と、氣むらとに動かされる場合が多くても、若々しい情熱と、殉情とを持つた青年であることを、認めずにはゐられなかつた。北海道から、自分の後を慕うて遥々出て來た、あの可憐な美沙子を、哀しく一人で追ひ返さうなどとは思へなかつた。

『お姉さまは、わたしの言ふことを、お信じにならないのね。』
『信じられないわ。』
『今に分ることだから、見てゐらつしやるといいのよ。』
『えゝ、もう直き分ることだわね。』
『わたしの言ふ通りだから、見てゐらつしやい。』
『えゝ、見てゐるわ。でも、冴子さんの言ふ通りになるかどうだか、それは、まだ分らないわね。』
『今は分らなくたつて、それは、直き分るのよ。』
『もう直きね。』
二人は、顔を見合せて微笑し合つた。
そこへ、女中を連れて下町へ買物に行つた母が、歸つて來た。母が歸つて來たと思ふ間もなく、思ひがけなく、竹内がぶらりと遣つて來た。
彼は、日光に居るうちにも、度々手紙をくれたが、歸つて來てからは、家が近いところなので、よく遊びに來た。竹内と鶴子たち姉妹の仲は、だん〱親しくなり、だん〱打ち解けて來てゐた。
『おや、入らつしやいませ。』竹内の姿を見ると、冴子が、殆んど飛びつくやうにして迎へた。
『やあ。』竹内は、姉妹の顔を眺めながら、品の好い顔に、にこにこと、優しい微笑を浮かべてゐた。
『今日は、何にして遊びませう？　トランプ、それとも闘球盤？』

『そんな、遊ぶことばつかり考へてゐて、冴子さんは、ちつとも勉強しないのぢやない？』
『あら、失禮ね。』冴子は、竹内を優しく睨めた。
『おや〱。ぢや、勉強してゐるんですか。』と、竹内は笑つてゐた。
『それは、勉強してゐてよ。でも、遊ぶ時には、うんと遊ぶの。』
『遊ぶ時にはよく遊び、勉強する時にはよく勉強し、ですか。』
『え〻、さうなの！』と、冴子は強く頷いて見せた。
『それは結構ですね。』
『だから、今日は、これから三人して、遊びませうよ。』
『遊ぶのも遊ぶことだが、それより先きに、僕は用事があるんです。』
『用事が？』冴子は、眼を見張つた。
『今度の日曜、お二人共、お暇ですか？』と竹内は、二人の顔を眺めた。
『今度の日曜つていふと、今日は金曜日だから、明後日だわね。』
『さうです。』
『わたしたち、ちつとも差支へないわ。ね、お姉さま。』
冴子は、姉の顔を見た。
『え〻。』と、鶴子は頷いてゐた。
『お差支へなかつたら、逗子にお誘ひしたいと思ふんですが。』
『逗子に？』冴子は、逗子と聞くと、眼を見張つて、姉と顔を見合はせずにはゐられなかつた。
『いけませんか？』
竹内は、不安さうに訊いた。
『でも、逗子はね……』と冴子は、懲り〱したといふやうな眼附きをした。
『土曜日の午后から、皆なで別莊へ遊びに行くんです。ですから、あなた方も、是非、一緒に行らして下さい。』
竹内は、熱心に言つた。
『いいわね……』と、冴子はさう聞くと、今度は羨ましさうに溜息を吐いた。
『入らして下さいますか？』
『どう、お姉さま？』と冴子は、姉に訊いて見た。
『さうね、お母さまに伺つて見なくては。』
鶴子は、はつきりした返事を、躊躇してゐた。
『お母さまに訊いて見なくたつて、わたしたちで決めれば、何んともおつしやりはしないわよ。』
『でも……』
『ぢや、わたしが、お母さまに伺つて來るわ。』
冴子は、驅け出して行つたかと思ふと、直きに歸つて來たが、
『竹内さんとご一緒なら、行つても好いんですつて。』と、嬉しさうに叫んだ。（つゞく）



智勇連翹襷

本田美禪
山口將吉郎畫

怨を呑む久津見兄弟

各務大彌太の住所たる九段中坂の道場は、四五日以來ひつそりしてゐる。師範代首席たる成瀨軍六が小佛峠で、六造のために不覺を取つた其の重傷はやうやく癒えて、各務の留守中は以前のとほりに弟子を預つてゐたのだが、何にしろ肝腎の各務は田沼家の事に關して激しい活躍を續けてゐるので、滅多に道場へは姿を見せない。で、自然是れまでは、近所の人の迷惑するほど盛んであつた竹刀の音もやゝ淋びれ氣味になつてゐた。其所へ先夜意外にも各務が負傷して歸つて來た上、門弟共の見る眼には然程重大とも思へぬ手傷を、酷く仰山に云ひ立てゝ、書齋の中に體を橫たへ、傷養生をするのを名として一切面會は謝絕するやう家人に堅く吩咐けたりした。その結果として道場は火の消えたやうになつたわけだが、早瀨以下四五名の免許皆傳の腕前のある門弟達は晝夜とも道場內にあるやうに吩咐けられて其のとほり當家にあつて生活してゐる。尤も久津見兄弟は、笹島民彌を首にして、兄東馬の靈前へ捧ぐるまでは一日も稽古を廢すことは出來ぬので、師に乞うて當家にあつて

武道鍛錬に熱中してゐた。その兄弟が昨夕の事だ。用事があつて外出をして、途中日本橋を通りかゝると、民也にばつたりと行き會つた。不倶戴天の怨敵笹島！　討取るはこの時と、兄弟眴瞬をし合つてかゝつた。が、然し駄目だつた。太刀を取つてかかつては勝味のないといふことは渠等も不斷から知つてゐた。師大彌太も輕擧をせぬやう渠等を堅く警めてゐた。で、笹島に出會つても、一時は躊躇したのであつたが、眼の前に怨敵の姿を見ては手腕の優劣、師の教訓など彼此と考へてゐる暇はなかつた。其の結果として案の定、徳三郎は肩先に無念の傷を受けたのだつたが、民也の振舞は意外であつた。返り討ちにする心があつたら、兄弟共に易々と討ち取ることが出來るのを、渠は殊更に手ぬるく遇らひ、兄弟をしてこの場を逃げのび、再擧を謀り得るやうにして遣らうとでもいふやうな好意を持つてゐるらしく、激しい太刀は一本も何時までしても討ち込まなかつた。で、兄弟は辛うじて其の場は無事に引き揚げたのだが、師の戒めを破つてゐる上、恥の極印まで打たれてゐるので、歸宅はしたが、師には勿論、誰にも其の事を語らなかつた。斯くて口惜しき日は經つて、今日で五日間兄弟は一間の中で送つたのだが、この事が師や相弟子にひよつと氣着かれはせぬかと思ふと、渠等は安き心はなかつた。殊に師は寢所にあつて傷養生をしてゐる最中、其等の事を思ひ廻はすと、不安は殊に深いのだつた。

その中にまた一日送つた。今日は五月二十九日だ。

謎、謎！切なき謎

霖雨月も中葉は過ぎて、もう明後日は水無月の日を算へねばならぬので、暑さはずんと募つて來てゐる。殊に今夜は、宵から降り出した雨の加減か、息詰まるほどむしむしと暑さは人に迫つて苦しい。

大彌太は脇息に身を倚せかけて書狀を見てゐる。其れに今密使をもつて、老中筆頭、松平伊豆守信明からそつと屆けられたものなのだ。

行燈の火は大彌太の嚴い顏の半面と、渠の手で擴げられたる書狀の上を赤くしてゐる。

『ふん成程』頷くと共に微苦笑が渠の皺だらけの頰に上つた。『池田家家中一統に血判しての嗷訴三昧――。小石川に潜伏してゐる當家元召使たる女中の成敗をお許しあるか、各務大彌太を表向き討取ることをお許しあるか、二件の中一件の御許可を切に仰ぎたい。憚りながら台聞にお達した上御詮議を。もし二件とも御許容なくば、弓矢の面目、よしいかやうな御沙汰を蒙り、家中一統、浪人いたすやうな事があつても、決して後悔はいたさぬ云々……。斯んな事を嗷訴されては成程京州公もお困りだらう。だが池田家の人達が、爰まで思ひ詰めたのも決して無理な事とはいへない。殊に一藩の智囊と聞えた岸藏人は再三再四の縮尻のため門を鎖ぢ自から罪に服してゐるとか……

……。尤も千萬な立腹である。要は躬が悪いのだ』自責の念に驅られた一語を、最後に苦しさうに漏らすとひとしく、擴げて持つた書狀を投げ出し、烱々として光りを放つ眼を瞑りながら溜息をした。

軒の點滴は濕やかに雨戸の外に音を立てゝゐる。雨にも怯ず鳴き立てる蟀虫の音もかすかに聞える。

『だが豆州公の謎のとほりに……』暫くすると渠はまた聲に現はして呟き初めた。『今はまだ躬には死ねない。命を捨てるわけにはまゐらぬ。內諭のごとく幸丸殿を田沼家御家督に据ゑる一儀は、證據萬端、確と取り揃へてあるのであるから、何時願ひ出づるも任意だが、然したゞ御家督を續がせるだけの事では可ん。主殿（故田沼意次の事）殿に誓つたとほり——よし祿高は以前のとほり七萬石に還し得ずとも、左遷の封地下村から舊領相良へ戻してむらつて、



少くも若年寄ぐらゐの役は勤むるやうにして置かなければ躬には死ねない。其の他にもまだ色々と躬の手を藉さにやかなはぬ事件が、五指を屈するほど殘つてゐる。まづ第一に久津見兄弟に復讐させてやらねばならぬ。鎌鼬の六造もあのまゝ殺すのは惜い奴だし……。いや久津見兄弟といへば四五日前に弟の方

は手傷を負うて歸つて來たやうな話說だが、む？』渠は叫びながら聞耳立てた。

もう夜は大分更けてゐる。門弟達は各自の部屋で眠りに就いてゐるらしい。濕やかに降る梅雨は、依然と軒に點滴の音をちよぼ／＼と立てゐる。折々庭の青葉を搖すつて緩く吹いて行く風の外には、注意をするやうな物音はどの方面にも聞えなかつた。其れに今拔足差足、渠の部屋近くに忍び寄る人の足音が聞えて來たのだ。

『何者だらう』怪しみながら心の中では警戒の眼をじつと配つた。その脇息に凭れた體はわざと一寸も動かさずにゐる。



惱みぬいた悲哀の若者

暫くするとする／＼と右手の唐紙が外から開いた。現はれたのは笹島民也、身裝は常の拵へで、手には一刀を提げてゐる。が然し暗きに乘じて、人の邸內へ忍び入り、凶惡の意を擅にしようと思ふ者の其れとは全く異つた沈んだ樣子だ。頭も深くうな垂れてゐる。左右の足も戰いてゐる。其れが怖々と行燈の灯の圏內へ入つて來たのだ。

『是れは案外、笹島民也だ』思つたゞけで大彌太は振向かうともしなかつた。
『先生……』
『……………』各務は答へずに凝然としてゐる。刀架にかけられた瓶割は手近に置いてあるのだが、渠は其れさへも執らうとせぬのだ。
『先生!』今度は聲に力を入れて呼びかけながら舊師の側へ、渠は徐ろに沈着くと、疊の上へ兩手を支いた。
『何爲にまゐつた』
『失禮ながらお首を頂戴のため推參しました』
『然やうか』大彌太は些とも騒がず、民也の方へ初めて振り向き、『で、戀は什うした』
『は……』ぎよッとしたが渠もまた些とも騒がずに明快に、『成就しました』
『目出度いのう』と意外な一言。
民也は驚かずにゐられなかつた。
『は……』
『血氣未だ定まらざる、是れを戒むるは色にありといふ金言どほり若い中には陷り易いものなのだ。色に溺れ、色に囚はれ、天晴れ武士の一命を投げ出すやうなことにも相成る。汝も其のとほり小野の娘に、とう／＼一命を投げ出すといふ約束をして來たと見ゆるな』
『御賢察、恐れ入ります』

『だがまだ汝は本當の惡人といふほどない、また痴氣者といふほどにも至らぬ。躬が先夜小野の娘に、兩國橋で一太刀行られたあの晩汝は日本橋にて久津見兄弟に邂逅しながら、討てば易易と討ち得る兩人を、傷つけたゞけで戻してくれた。兄弟は躬に隱してゐるので、精しいことは存ぜぬが、討ち得る者を討たずして歸してくれたところから見て、躬はまだ汝の戀は愜はぬ。可哀相に痴氣者、まだ遂げがたき戀のため悶えて居るに相違ない。戀と共に死ぬ奴だ。不愍な奴だと心では憫れんでゐて遣はしたのだが、その戀ももう成就して躬の首を取りに來たとは目出度い。いつ小野の娘から嬉しい返答を聞いたのだ』
『さ、昨晩で御ざいます』
『成程』と大彌太は靜かに頷き、『而てその席で躬の首を——と女に望まれて來たのだな』
『は……』
『好い者に戀をした』と大彌太は矢はり眞摯で、頑く剛く答へてゐるかのやうな調子で續ける。『あの女は忠孝の娘としては出來過ぎてゐる。今日本に擦り傷でも躬に負はす者は勝美一個だ、喃う、名はたしか勝美といつたな』
『御意……』
『好い者に戀をした。躬ももつと年でも若く、男振りでも好かつたなら或は戀をしたかも分らぬ。はゝゝ』初めてちよつと笑ひかけたが、すぐ氣がついて再び眞摯に、『で、其程の女の所望だ。父の苦境、男の悲戀、且また叔父の苦忠に殉じて、小腕ながら

躬を討たうと思つて、あの大修羅場へ突として身を現はした勇氣には、躬も心から感服をして、あの夜河の中へ投げ込んだ事さへ悔いてゐたくらゐであるから、今汝を傀儡として、躬を討つために遣した意中も、勿論諒として居るが、然しまだ首は遣られぬ。その理由は今汝にはいはぬが、歸つて慥と申し傳へい。この白髪首は大彌太がもう一月ほど預かつて置く。その質として民也の首をその間、慥と預けて置くとな』

『………』民也は答へぬ。俠義に富んだ舊師の眞意は、涙をもつて會得して、感激をしてゐるのだが、然し渠は阿容々々とこの場から去る心はないのだ。命は今宵限りの命で、恐らくはもう勝美の命は小野家にあつて失はれてゐる。自分のみが生きて歸つて、約束どほり死に就いた女の顏に何うして會へよう。然う思ふと舊師の好意が渠には寧ろ怨めしいのだ。

須彌のごとき高義

『何故起たぬ』と大彌太は鋭く詰つた。『男らしくもない奴だ、早く行け』

『………』

『躬に討たれようと思つても躬は汝はよう討たぬ。他に討つ者のある事は、汝もよく知つとる筈だが』

『で、實は今晩は』

『もう好い』と各務は被せて、『躬の前で兄弟に討たれる考へでまゐつたことは、いふまでもなく存じて居るが、躬にはまだ容易には汝を討たすことは出來ぬのだ』

『ど、何うしてゞ御さいます』

『分らぬ奴だな』と大彌太は再び鋭く、

『汝が死ねば小野の娘も生きては居らぬ約束だらう』

『は……』

『だから生きて歸れといふのだ。娘は小野の一粒種だ』

『………』

『躬は忠孝に敵視され、呪ひの的とされて居つたが、躬は忠孝は憐んで居らぬ。兎も角も一刀流の宗家としての小野は名家だ。躬のごとき生れ損ひ、劍を執つて横に巾を世の中に押す者とは異なり、子孫を後に傳へにやあならぬ。能う分つたゞらう』

『は、然し……』感激しつゝ民也は遮り、『折角の御好意も、今はもう無駄ではないかと……』

『だから早く行けといふのだ』

『………』

『早く行つて躬の意中を告げぬと、犬死させてしまはにやならぬ』

『然しもう今頃は……』

『大丈夫だ、早く行け。曉方までは俠劍の術は揮はぬに相違ない』

『其程までの思召をば無にいたしては濟みませんゆゑ、[illegible]に兇

も角も是れで御免を』
『むゝ早く行け』
『はッ』
『待て〳〵』行きかけたのを慌てゝ呼び留め、側にある刀架から瓶割一文字を手早く執ると『是れを遣はす』
『は……。御愛刀を拙者めに』
『いや、汝にではない。天下無双の大彌太に、手傷を負はせた女丈夫に、恩賞として取らすのだ』
『よう分りまして御ざいます』
『汝も其れで安心したらう』と大彌太は急所を刺した。
『では先生は其れまでも……』
『其れもみな戀の所業だ』
『恐れ入りまして御ざいます。御免！』
『むゝ』頷きながら眼を舉げて、各務はじつと民也の姿を憫れむやうに見送つてゐた。
この未明、各務は俄に駕を命じて、老中筆頭、松平伊豆守の屋敷へ飛ばした。伊豆守が登城以前に會ふ必要があるからなのだが、一面には池田家の家中の者の光る眼を避けねばならぬためでもあつた。

痴情に花咲く

『喃え幸様、先生のお怪我の模様はその後什うなんで御さいませうかね』
『さア、拙者も一度お見舞にと肚では考へてゐるのですけど、御承知どほりの外出はしてはならないとの御教訓、其れを犯すのも什うかと存じて、其のまゝにして居りますが、和尚様のお話說の様子で見ると然う酷くお重いやうでも御ざいませんから、ぢき御本復なさるのでせう』
『然うならば結構ですが、私一時でも先生が當お屋敷にお見えにならぬと、心配で〳〵、生きたる空は御ざいませんわ』
『拙者も其れは同様ですがな、然し……』幸之助は言葉を切ると、恭姫君のお居間の方を新緣越しに透して見ながら、『幸ひに昨今は、姫君様もあの方に夢中になつてゐらつしやるので、拙者の事……貴女の事も、もう以前ほど淺ましい嫉妬の眼をもつて御覽にはならないやうで御ざいますから』
『でも貴下には今でも矢ツぱり』
『いや』幸之助はお梅の言葉を、不愉快さうに手眞似で抑へて、『もう其れはいはないやうに……。兎も角も貴女と兩個で、斯うして爰へ來てゆる〳〵とお話說することの出來るほど、姫君様は我々をお忘れになつてゐるのですから、この上はたゞ時節を待つのが……』
『でも私には貴下のやうに然う沈着いてはゐられませんもの』
『什うしてゞすか』
『考へても御覽あそばせ』お梅は少し拗ねて見せつゝ、『貴下は矢はり三度に一度は、御酒宴の場やお寢間へ召されて、小室殿

貴樣と御一緒に――』

『もうそれはおいひになるなと今申したでは御ざいませんかね』

『でも私にはどのくらゐ其れが悔しいか分りませんもの』

『はゝ埒もない』幸之助は苦笑しながら、『拙者さへしつかりと、貴女といふものを心に抱いて、放さぬやうにしてゐれば其れで宜しいでは御ざいませんか。以前と違ひ唯今のお側去らずは欣哉殿。拙者はほんのお話說のお相手として召されるばかりで、時とすると早う去にや、粹の通らぬ痴漢だなどとお叱り受ける事さへあります。』

『それ、然うなんで御ざいますもの』

『然うとは什うです』

『貴下は矢はり姫君のお側にゐらつしやりたいやうに心の中ではお思ひになつてゐるんですもの』

『何を莫迦な』

『否えもう好う御ざいます』といふかと思ふと、お梅は亭の竹縁からつと起ち上つて捷歩に、泉水の方へづッ／＼と來る。

斯うした事をして渠等兩個が、熾烈な戀を樂み得るほど今では姫の嫉妬の眼から開放されてゐるのであるから、もういざこざはない筈なのだが、其所がそれ痴情の癖で、動すると斯ういふ工合に口說に花を咲かすのである。

『怒つたのですかお梅どの』

呼びかけながら渠もまたそろ／＼亭の中から出て來る。

『…………』

『怒る事はないでせう。もう一度亭へ戾つて……。喃えお梅どの』

『…………』

『では止むを得ぬ。拙者は最はや貴女とは』

『幸ちやん！』といふ聲が突として其の後からこのとき起つた。

で、幸之助は愕いて、振向いて見ると見覺えのある――土藏の中にゐる筈の――義兄六藏が立つてゐる。

悔悟した鎌鼬

『愕くにやア當らねえ』と鎌鼬はにや／＼しながら、『好い氣になつていちやついてゐて、持つて來てくれる冷飯を忘れられてゐる俺の方が餘ッぽど驚いてゐるくれえたものだ』

『では脫獄に土藏を破つて？』

『うんまア早くいやア其んなものだが、然し何にも逃げ出す積りで土藏から出て來たんじやねえんだ。いくら待つてゝも飯が來ねえんで、窓から外を覗いて見ると、お前とお梅さんの今の有樣！　冗談じやねえ斯うやつて爰まで持つて來て置きながら、土藏へ入れてくれるのを忘れてゐるんだから始末にいけねえ。戀は曲者、いや、曲者を干乾にするほど他愛々々にするから妙さね』然ういひながら悠々と兩個の掛けてゐた緣へかけると、

六造は側にある――お梅がいつも運んでくれる――皿に載せてある大きな握飯を指で抓み上げて頬張り初める。

氏家の宿屋の二階で、別れて以來幸之助は六造に會つた事は一度もなかつた。反各務派の人達に買收されて良からぬ飛躍を、闇中にあつて試みてゐる噂は渠は各務から始終聞かされてゐた上に、白河からは乗物を列ねて共に江戸へ歸つた。が、然し其れだけで、顔を見たことは一度もなかつた。當隠れ家の土藏の内に監禁されてゐる事でさへ渠は最近に知つたので、知ると共に恐ろしい敵が側へ來たやうな不安の念に襲はれたのだが、其の時はもう六造は、各務の義氣と大腹中とに兜を脱いでしまつてゐたので、其等の事實を、渠は各務から聞かされて初めて安心少し沈着いた氣持になることが出來たのだつた。その六造の食事その他は、以前は多く寂善和尚が面倒を見てやつてゐた。其れをお梅に運ぶやう各務は特に吩咐けた。檻の中の狼は、羊となつてゐるのであるから、もう寂善を見たやうな膂力拔群、大膽不敵の豪僧の手を借らなくても好いわけで、前記のやうに優しい少女を各務が其れに代らせたのは、もう何人も六造を憎んでゐぬといふ事を知らせるための用意であつた。で、其んな事の渠は今心の中に思ひ浮べて、六造を見ても大聲を揚げ、母屋の人を呼ぶほどに慌て驚きはしなかつたのだが、何にしろ渠の見る六造は倘ほむかしの六造、お高の兄の鎌鼬、





自分を始終苦めてゐたあの無情酷薄な惡漢としか思へないので、氣を許すことは出來ぬのだつた。

『まア然うびく〳〵と爲てねえで、爰へ沈着いて掛けたら什うだね』嘲けるやうに六造は渠を眺めながら靜かにいつた。『以前は兎も角、今じや半分だけ改心をして、場合によつちや先生の味方をしようかと思つてゐるんだ。喃ア見るが好い』握飯を持つた右の手と、左の手とを一緒に並べて幸之助の前へぬいと差し出し、『このとほり先生は縛つた繩を總解いてくれてる。で、俺もまたその禮に、よし頼まれても土藏から逃げ出すめえと思つてゐるんで、今惡戯に土藏を破つて——といつたつて金網戸と、觀音扉とを工夫をもつて内から開けたゞけの話説なんだが、其れも何腹が減つてな行りきれなくなつた苦しまぎれに、出て來たやうなわけだから、腹さへ作りや直にまた逆戻りをして自分で歸るよ。斯う見えたつて俺も人間、情けに向ふ奴はないッて譬へのとほり先生にや全く降參してゐるだからなア』

『ではもう本當に義兄さんは心を入れ更へてゐるんですかい』

『難有てえ！』六造は眞に然う感じたやうに面を崩して、『よく義兄さんといつてくれたね。可異な事が機ッかけで、お前にもまた裡面じやいろ〳〵厭な事をしてゐたが、什うした許でお高のためには亭主同樣な人なんだ。肚から憎い道理はねえやな』

『お高といへば白河では可哀相な事をしましたねえ！』
『全くさ』六造はやゝしんみりしながら、『親の因果が子に報ふといふ譬へはあるけど、兄の因果が妹に報つて那んな死様したんだ。俺考へると妹にも濟まねえやうな氣がしてならねえ……』と語尾を微らして頭を垂れる。
　其れは幸之助も同じであつた。お梅といふ者があるために、渠は什うしてもお高の意に共鳴する事は出來ぬのだつたが、六造の手で小さい時から共に育てられた親みや、大道藝人として旅を歩いて、一緒に踊つたり唄つたりした兩個の過去の關係を回想すると哀れに打たれる。殊に六造の手から逃れて、一度は江戸へ走つた事だの、連戻されてまた元の藝を强ひられたが以前に倍して其れを冷やかに遇した事だの、氏家の旅籠屋で泣いて口説かれたときの事だの、白河の木陰で一刀の下に各務に斬られたかの女の事などを想ひ起すと、涙含ましくさへなつて來るのだ。
『だがもう何といつたところで』と暫くしてから、六造はまた面を上げつゝ、『死んじやつたものは仕様がねえから、せめて其の妹の、那れほど深く思ひ詰めてたお前を田沼家の跡取りにして、一萬石の大名の殿様にして遣つたなら、那奴も必と草葉の陰から歡ぶだらうと思ふんだ。俺のためにも然うすれば罪亡しになるわけなんだが、噛ア幸ちやん、お前も什うか那奴の事たきや、家督を繼いで出世して、あのお梅さんを奥方様と呼ばせるやうな身分になつても、忘れねえでゐてやつてくんねえ』
『其りや改めていはれんからつて、私も始終心の中では……』
『其れさへ聞きやア俺の方でも——いや出來ねえ。先生がやつて來た』
『え？』
『待て六造！』呼び止めながら大彌太は、泉水の上に架かつた土橋を此方へ向いて濶歩して來る。渠は松平伊豆守に會ひ、對談一刻、意中を披瀝して辭し去ると、當小名木川の隱れ家へ忍びの駕を飛ばして來たのだ。

神か人か

『逃げんでも好い、其所に居れ』
『へえ……』と六造は逡々してゐる。
『擅まゝに土藏から出た所行は好いたいはれぬが、然しもう當邸内なら、何所をうろついて居るのも同じだ。決して罪は問はんから安心をして居るが好い』
『へえ、什うも濟みません』
『幸殿』呼びかけながら大彌太は亭の竹椽へ悠々と掛け、『お身は什うか暫く彼方へ』
『は……』とは答へたが、小腰を折ると、『先生は御負傷を——といふやうに伺ひましたが、もうお宜しいので御座いますか』
『有難う。ほんのちよつと背中をやられて、道場の方にゐたのだが、なアにもうすつかり好いのだ』

『先生でも傷なぞをお受けなさる事があるんですかい』六造は憎ぜいやうに各務の顔を見ながら訊ねた。

『うん、上には上のあるもので、然も明に手傷を負はせた相手は斯んな小娘だ』と手を擧げて兩個の前へかの女の脊の高さを作る。

『其んな者にお行られなすつた』

『然うだ』と大彌太は笑顔で頷き、『この調子では約束の汝との立會にも大彌太は不覺を取るか分らんぞ』

『それ〳〵』と六造はぞく〳〵しながら、『その約束の立會はいつ本當に行つて下さる』

『其れを今いはうと思つて……早く彼方へ』といふやうに眼色をもつて各務は幸之助を追ひ立てながら、『實は六造』と俄かに聲の調子を落す。

『へえ』と六造も小聲で答へる。

『本月中頃——日取の點ははつきりとまだ極まつては居らんのだが、十五六日頃に公方家の水馬台覽のお成りがあるのだ』

『公方家といふと將軍樣の事をいふんですかい』

『無論だ』

『而て何所へね』と訝かりながら六造は訊く。

『墨田川の上流、戸田の渡しへお成りになるんだ』

『へえ其れで』

『驚くなよ六造！』

『什うしてゞすかい！』といよ〳〵怪しむ。

『その水馬台覽の際に約束の——明と汝との立會を御覽に入れるやうに願つて來たのだ』

『何ですツて先生』夢ではないかと思つたやうに六造は眼を大きく瞠つた。

『驚いたらう』

『本當ならば驚き桃の木、山椒の木ツていふ一件ですけど、什うして其んな馬迦げた事をね——

『明は汝を什うかして一人前の人間に、いや侍にして取らせる積りで強いて御老中に願つて來たのだ』

『……』

『尤も其れには』幸之助が柱屋の方へ姿を消してしまつたのを見澄ますとまた聲の調子を、各務は元のやうに野太くしながら、『仔細がいろ〳〵とあるのだが、何にしろ然ういふわけでな汝にも明にも一世一代、前代未聞の立會を御覽に入れようといふのであるから、當日は是非しつかりと心を据ゑて大彌太の腕に手裡劍を首尾よく打てよ』

『其んな事が本當にお聞き屆けになるもんですかい』

『なるやうにして置いて來たのだ』

『然やうで……』といつて六造は、突ツ立つたまゝ身動きもせず、地上をじつと見つめてゐたが、やゝあつてはら〳〵と、熱い大粒の涙を零すと、崩れるやうに大彌太の踏み出してゐる足の所へ平伏をして兩手を支きつゝ、『謝まりました先生！』

『什うしたのだ』

『貴下のやうなお人に出會つちや、どんな悪人でも心の底から改心しずにやゐられませんや』

『もう改心はして居る筈だが』

『否え』と六造は頭を振りつゝ、『改心しても皆んなじやねえんで、其の證據には立會をして、間が好かつたら貴下の命を取つてくれようと思つてゐました。神様のやうな貴下の命を』

『はゝゝ、氣悶えいたすな、然うむざ／＼と大彌太の命は汝に與へはいたさぬ』

『否え駄目です』と六造はまた頭を振つて、『口幅ッたい云草ですけど、わつしに百本の劍がありや、三面六臂の鬼神が、稻妻に乘つて走つてゐたつて決して遁しッこはありません。少くも四五本は必と打ち込んで御覽に入れます』

『其れを躬は望んでゐるのだ。然うした許を公方家の御覽に入れようと思つてゐるのだ。いや其程の自信をもつて汝の打つ手裡劍を御覽に入れようと思つてゐるのだ』

『では什うか立會する前、幸之助樣の一件を——御家督相續の一件をちやんと片づけてしまつて下さい』

『什ういふわけでの』

『わつしが出て證人に立ち、小佛峠の一件を公儀役人の眼の前で喋つて先生に勝たして上げます』

『其所まで汝は改心したか』

『えゝ、爲ないではゐられませんや、然し……』と六造はやゝ躊躇して後、『劍だけは眞劍にわつしやア打つて見たいんで、失禮ですが死ぬ前に幸之助樣の一件を片づけて置いて頂きたいんで』

『成程！』と大彌太は感心しながら、『然ういふ考へで申す信切、無にするやうに當つて何だが、躬にも色々と都合があるんで、いや、公邊に都合があるので汝の信切には從ひかねる』

『じや什うしても先生はわつしの劍で死ぬ氣でゐるんで』

『まア好い、はゝゝゝ』と大彌太は體を反らして、『自信も其所まで強くなければ眞の大丈夫とはいはれぬ、氣に入つた！』

『困つたなア！』

『や、姫君が此方へ來られる』各務は氣がついて向ふを見ながら、『お目に觸れると面倒だ。汝はまた元の土藏へ歸つて神妙にして待つて居れ。立會の日は今月中旬だ。もう些との間の辛抱だ。疾く』

『ではいづれ……』といひながら倉皇と土藏の方へ逃げて行く。

左に櫻、右に桃

今木陰からちらりと見えた姫の美しい全幅が、木陰を出きつて、泉水の上に架けられた土橋の方へ段々近づく。その後からは小宗欣哉と幸之助とが附いて來る。幸之助は今大彌太に遠慮をするやうに注意され、母屋の方へ歸つて行つた途中で姫に捕まつて、欣哉と共に漫歩のお供を云ひつかつたものらしい。

姫の顔色は遠目にもほんのり赤く見えてゐる。また晝間から欣哉を相手に、酒宴を催してゐたのであらう。拾ふ歩の千鳥に、縺れて、踉めくほどになつてはゐないが、兎も角も放縦三昧、女性としての嗜みも、周圍の者に對して持つべき遠慮氣兼などといふことは一切念頭にないかの樣子で、ちよつと振向いては仇口を兩個に投げながらやつて來る。頭髪は例の切髪なのだが、衣裳は莫迦に華やかである。金の大模樣の摺箔をした淡色絹の單衣を透して、緋縮緬の胴着の色が燃えたつやうに見えてゐる。庭下駄の上に載せてゐる絹の白足袋で包んだ足も、歩くにつれて赤く縺れる蹴出しのために仍榮えて薄桃色に見えるのである。總てが濃艶、總てが多情だ。

『欣哉に幸どの、什うしたものじや遲々してゐて』また振向いた恭姫は自裂度さうに兩個に叫んだ。『側へ來て左右からこの手を曳いてくれいでは、自からはよう歩けないのじや』

『……』兩個は答へぬ。

『ほゝゝゝゝ』興ありさうに姫は笑つて、『男同志でも心の中では矢張り悋氣し合ふものじやと見ゆるの。欣哉は昨今の親みじや。自からの今日までの……、いや、其れは兎も角、その幸どのと申す男は、些と石部どのである上に、梅といふ者を心に持つとる。お身がその人に悋氣するのは見當違ひといふものじや。さア兩個とも茲へ來て、早う手を取つて歩かしてくりや。知つてのとほり本丸の大奥にゐた時分には、手を取らせんでは一足も外へ出たことはなかつたものじや。今女中共を追ひのけて、お身達ばかり連れて來たのも、この、手を曳いてもらひたいため。晡う早うお來や』

『は……』今はもう止むを得ぬので、兩個は寄つて來て姫の手を取る。

この女護の島の女王に取り入り、思ふ存分に立身したいと考へてゐる欣哉の眼には、姫と幸之助との關係が、什う考へても潔白なものとは見ることが出來ぬのだつた。尤も欣も幸之助が、熾烈な戀をお小間使のお梅の上に持つてゐる事實は見認めてはゐるのだが、何にしろ姫といふ、絶對無限の權力を持ち、荒淫度なき性癖を白晝ですら發揮する女性の下にあるのであるから、其れも御奉公の一分と思つて服從しないものとも限らぬ。然う思ふと多少の嫉妬と、憎惡と反感とを持たずにはゐられぬやうな仕儀となり、つい今のやうに兩個並ぶと、諷詛らしく控へ目な態度も執つて見るのであつたが、今の姫の辨疏的言葉を聞くと總ての疑惑はさらりと解けてしまつたのである。

其れは幸之助にも嬉しく聞かれた。で、寄つて來て姫の手を欣哉と共に取つたのだつたが、然し本當の姫の心を――性的衝動に驅られると狂人同樣になつたり、積極的の行動を執る醜い姫の性行を――知りぬいてゐる彼れの胸には、尙ほ幾分かの不安はあつた。

『ふん、相變らず行つとるものだな』と大彌太は苦笑しながら此方の有樣をじつと見てゐる。『だが好い折だ茲で待ち受け、幸丸殿のおん事を今日はすつかりと話し置かう』呟きながら亭の

周圍を渠は徐ろに歩いて見てゐる。

その間に姫は段々近づく。

幸之助等は大彌太の姿を見ると姫の手を引いてゐることに恥を感じた。が、然し什うにもならない。是れもまた御奉公、大きくいふと忠義の一つだ。然う思ひながら放さずにゐる。お宮仕へは愁いものとは必ずしも武部氏の女房の言のみではないのだ。

『や、是れは姫君』と大彌太は一禮しながら、

『御遊歩で御さいますかな』

『おゝ各務』姫は匂やかな機嫌よく『お身はいつの間にまゐつてゐたのぢや』



『實は怪我をいたしましてな、數日來の不奉公、お赦しのほど願ひ上げます』

『もう怪我は好いのかや』

『は、お陰樣ですつかりと……』

『其れは嬉しい。什うあらうかと案じてゐたのじや』

『恐れ入ります』

『而て今日は』

『は』と大彌太は慇懃に、『些と内々でお耳に入れたい儀が御さいまして伺ひました。什うぞ其れへ』

『什ういふ事じやの』といひながら恭姫は、亭の竹縁へ腰を掛けたが、幸之助等に執らした兩手を、渠等に離すことは許さなかつた。左にさくら、右に桃、兩手に花の積りでゐるのだ。

『幸殿の儀につきまして』と大彌太は考へ〳〵、『お願ひがあるので御さいますが』

『ほう、什ういふ?』

『欣哉殿同列で、斯樣な事を申し上げるは什うあらうかと考へますが、欣哉殿は今はもう……憚りながら姫君のお旨に愜ひました立派な侍、い



かなる事を申し上げても懸念はないと存じますゆゑ、委細御意得るので御ざいますが……』といひかけて小室の面を、各務はじろり一目見てから、『實は幸殿は奥州下村、一萬石の知行を頂く田沼主計頭意定の相續人なので御ざいます』

『まア幸殿が其のやうな！』

姫は驚いて幸丸を見た。

小室も驚いて幸丸を見た。

『で、今度主計頭他界した其の跡目には什うしてもその幸殿を据ゑませんけりや慨はぬ事になつて居り、既に公儀からも其の件につきお許しを得てゐますので、數日中に幸殿を田沼家濱町の別邸へお入れ申したいので御ざいます』

又しても厭な本音を

『其れは目出度い』といつた恭姫の、微醺に燃えた綺麗な面は、歡喜の色で輝き初めた。『幸殿が其のやうな大名の子とは知らなんだ。喃う幸殿！』漫になつて欣戯に執らせた手を振り拂ふと體を捻つて、幸之助の方へ向きながら『そなたが大名の子息なら、自からにも考へがある』

『は……』と幸之助は頭を垂れた。

『今聞けば田沼家は一萬石の小大名とか、同じ家督を續ぐのなら、せめて十萬石以上の知行を頂く家の家督を續ぎやいの。父將軍家に申し上げ、其程のことはして頂くやうに必と自からが計らふほどにの、喃う各務』と姫はまた大彌太を見て『然うしたならばお身の肩身も自然と廣うなるわけで、自からもまた今日までのお身の類ひなき忠節に報ゆることが出來て嬉しい。喃う然うしやいのう』

『は……』各務は肚で苦笑してゐる。父將軍家の膝下にあつては爲たい法題、云ひたい法題、我儘三昧に生活してゐた姫のいひさうなことではあるが、今の姫は生ける屍だ、父將軍家に其のやうな勝手な熱を吹くのは勿論、文通さへも公然と――いや、當邸から足一歩出ることさへも愜はぬ境遇。『其れにまだ那んな暢氣な！』と思ふと渠は可笑くもなり、また哀れにも思ふのだつた。

『だが物事にはお償が入るぞや』と姫は續けた。『十萬石の身分となるやう、肝煎をして取らせる代りに、晴れて自からと婚禮をして、自からを簾中と呼ばせるやうにしてたもらにやならぬ。おう然うじや』と獨りで頷き、『格式も御三家同様、內室を呼ぶに簾中と呼ばせるほどの家柄に昇格をして頂くやうに御訴訟申し上ぐるといたさう。喃う幸殿！ よもお厭ではあるまいの』

『は……』

『はつきりと返答しやいの』といひながら白い手を伸べ、幸之助の手を堅く握ると、自烈度さうに三ツ四ツ揺振り『今日までは大道藝人、賤しい者の果と思つて、無禮な斟退我儘も放つて置いて遣したのだが、小祿ながら大名の子息といふことの分つた以上は、もう其のまゝでは置きはせぬから……。喃う是れほど思ふ自からの心を酌まず、是れまでのやう、勝手な事を申したら、自からの罰ばかりではなく、大道様の御罰も當らう。さアお來じや。彼方へ行つてゆる／＼と何かのお相談を皆でするゆゑ……』といふかと思ふと、幸之助の手を取つたまゝ姫は竹緣から體を起す。其の眼の中は情火のためにもう火のやうに燃えて來てゐる。（つゞく）

「これは面白い！」『素晴しい傑作だ！』「男の中の男各務大彌太の今後の活躍こそ眞に見ものだ！」『待遠しい！』『堪らない程後が待たれる！』この聲この叫びは今や我が讀書界を蓋ひ、人氣いよ／＼白熱！ 乞ふ！ 一層の御熱讀を！！

子供の夏休を愉快にする法

待ちかねた夏休みです。お子さん方はなるべくのん氣に、此の機會に身體を鍛へる様な躾が肝心です。大てい二十日から三十日位の長い休みの事ですから、どうかすると單調な生活に飽いて自分でも持てあませば、家でも持てあます様な事になり勝ちです。そこで何か變化を與へてやる親切が入る事になります。それには少年倶樂部と云ふ少年雜誌を讀ませるのが一番手輕で一番効果があります。少年倶樂部は本社から發行されてゐる雜誌ですから、私共は責任を以ておすゝめの出來る立派な雜誌です。

少年倶樂部一冊が家庭教師の代りをするとまで云はれてる位ですから、長い間學校をはなれて、先生の監督の無い夏休みは、この一冊がどれ程大事な役目をするかは、御想像がつかれる事と思ひます。

キングと同じく一冊五十錢です。五十錢で子供に良師良友を與へる事が出來るとすれば、實にしあはせな時世ではありませんか。あなたのお子様の夏休みを愉快にして上げる唯一の方法として、此の九月號一冊おもとめ下さい。

人氣湧く「少女倶樂部」

毎號好評の本社發行『少女倶樂部』は、最近其の人氣全く熱狂の域に達し、八月號の如き例月より大増刷をしたにかゝはらず、發行一日にして賣切れの書店數軒を見たことは眞に驚嘆すべきことでありました。

同誌がこれ程少女間に歡迎せられるのは、その讀物の面白さ、その實用記事の有益なこと、その口繪や繪畫などの美しさ上品さが、現代少女の心持ちにシックリあふばかりでなく、全誌面にあふれる堅實味が、學校としては生徒の課外讀本として、家庭に於ては子女の常識養成資料として、最好適のものであるからであらう。夏休みの良師として、お子様お妹様におすゝめします。

探偵冒険 七妖



暗夜の殺人團

猛犬は躍る

『品川とやら、ふざけた眞似をおしでない！　動いたら、一發で殺らすよ……』ポツカリ欄間に近い天井にあいた方寸に足らぬ小窓から現れた凄艶な眼と物凄いピストルの口、其處からは脅迫の言葉と嘲笑の語吻とが投げつけられた。

東小路淸子を僅かに救ひ出さうとした品川隆太郎の苦心も今は水の泡である。謀つた敵に謀られて、手も足も出ない嚢の鼠も同樣、無殘々々と名も知らぬ敵の手中に陷つて仕舞つた。殘念だ！　靑年品川は生れて初めて直面した危險と窮地にあり乍らも、一分二分と時が經つにつれて、自分ながら不思議に思はれる心の餘裕が出て來たのを感じた。何とかして此處から逃れたい。逃れる途は無いか。餘りの恐ろしさに身も世もあらず獅嚙みつく令孃淸子を片手に緊と抱へながら、やゝ脅えた眼を上げて欄間のピストルを睨め上げた。

『ホ、ホ、ホ……いくら睨めても、此の手は引込みませんよ……ね、今部下がそつちへ行くまで、穩しくしてらつしやい。命までも直ぐに頂戴しようとは申しませんわ……頂戴し度いものは別にあるのよ……』

嘲笑しながら片手をグイとつき出して、右隅へ右隅へとジリ



星（せい）

保篠龍緒

齋藤五百枝畫

ジリにじり寄る品川と清子にピストルを振つて見せた。

品川は右手の壁際へにじり寄りながらピストルから不図眼をそらして入口を見た。見たと同時に品川は占めたッ！と心の内で叫んだ。

『忘れてゐたシエパードだ。乘るかそるか、逃げられるか、失敗するか、此奴を利用して見よう』

と彼は突嗟に決心した。猛犬シエパードは命ぜられた儘入口の廊下に二疋、主人の不思議な樣子を不思議そうに首を傾げて眺めてゐた。品川は敵に覺られぬやうに名犬に合圖をした。名犬シエパードのドイルとペプの眼は主人の眼付を見ると同時にキラ〳〵と輝き出した。彼等は床に這ひずりながらヂツと天井の敵を狙ひ初めた。暫く狙つてゐたドイルは廊下を階段の方へ後退し出した。つゞいてペプも後退を初める。

『おい、いくら壁にへばりついても、このピストルは追つかけて行くわよ。いゝ加減で覺悟を極めたら如何？』

天井の腕は肘まで出してピストルをブラ〳〵と振り廻した。

『よしツ、ゴーヲンー』

聲は低いが唸るやうな言葉が品川の口から洩れるや否や、猛然二匹の名犬は疾風迅雷、風を捲いて砲丸の如くに室内に躍り込んだ、と見る瞬間、犬の後足は床を強く蹴つてヒラリ！壁へ飛び附くやうにジャンプした。

『アツ！』と叫んで手を引く間もあらばこそ猛犬ペプは天井から突き出してゐた腕の袖を咬へた。がつゞいたドイルは間髪を

入れず飛び上つて敵のピストルを奪つた……瞬間、ドンといふ激しい筒音！　素早く床の上に令嬢をかゝへて突伏した品川の頭上をかすめて彈は壁に當つた。

『早くッ！』

品川は床の上を這ふやうに令孃を抱へたまゝ脱兎の勢ひで廊下へ駈け出した。廊下へ出ると敵のピストルを咬へた名犬ドイルの口からそれを受取るや否や、その儘階段を駈け降り入口の扉を蹴開いて庭へ飛び出した。

それから前後を三疋の猛犬シェパードにかこまれ乍ら、彼は清子を



抱へたまゝ林を廻る道一筋をひた走りに走つた。

林を抜けると彼は初めてホッとして抱へてゐた令嬢清子をお

ろした。
『清子さん、御安心なさい、もう大丈夫』
流石の快漢品川隆太郎も初めての冒險に息を切らしながらいつた。
『こ……これからは街道へ出るばかりですから、街道を通るものに怪しまれぬやうに走りませう』
驚きと心痛とに失神せんばかりの清子は、品川の言葉も夢現で聞いた。が品川が既に走り出してゐるのに勵まされてよろめく足をふみしめつゝ品川の後につゞいて走つた。
街道へ出た彼は大聲で怒鳴つた。
『おーい！　相原君！……相原君！』
兩手を擧げて怒鳴ると同時に、前方二丁餘の處に停つてゐた一臺の自動車が輕い爆音を立てゝ進んで來て、ピタリと品川の前で停まつた。
『如何だつた？』
『救つたぞッ……相原！』
聲の終らぬ內に東小路清子がフラ〳〵になつて走つて來た。倒れそうな彼女を品川と相原で抱き上げて自動車の中へ入れた。
『水だ、氣絕しそうだよ』
相原は運轉臺から小さなコツプにソーダ水を入れその中へウイスキーをついで持つて來て、眞青になつた令孃に飲ませた。
『清子さん、確かりなさい！』
『……ハイ……』
答へても彼女には、極度の恐怖から、極度の疲勞から、極度の安心へ、餘りにも激しい心身の變化に堪へかねて、意識は殆ど昏迷に近い。
『早く出發だ。病院だ』
『ヲーライ』
相原は千切れるやうに尾をふつてゐる殊勝の猛犬を、一足は運轉臺に二足は品川や清子の足の下に乘り込ませて、早くも砂塵を捲いて走り出した。……

白玉の文字

品川隆太郎が大學時代に同鄉關係から親しくしてゐた難波醫學士が青山に病院を建てゝゐたので、昏睡の令孃清子を一と先づ、其病院へ擔ぎ込んだ。
硬骨と俠氣で知られた品川から不意に美しい女を擔ぎ込まれて面喰つた難波醫學士は取りあへず應急の處置をしておいて
『品川、全體、如何したんだ？　素晴らしい美人ぢやないか？』
醫學士の居宅の座敷で結果を待つてゐた品川は、
『大變な事件なんだ。そら、……例の代々木疑問の死を遂げた東小路子爵の令孃さ……實はね……』
彼は今迄の經過を大體說明して、
『僕は令孃と特に密談しなければならない用件を故人子爵から

託されてゐるんだ。……どうだい、病室へ行つて話が出來るか?』

『いけないよ……今、興奮を鎭める爲に眠らせてあるんだが、……ひどい衰弱だから一日か二日は絶對安靜にしておかなきやいけない』

『そいつは弱つたなあ!』

『東小路家へはどうする?』と相原が口を入れた。『この儘にしておく譯にも行くまい?』

『ウーム。小笠原の奴が來ると邪魔になつて困るんだが……といつて知らさずにも置けないしと……よし、早速知らせてやれ……形勢を見た上で臨機の處置をとる事にしよう』

彼は電話で東小路家へ令孃清子さんを救ひ出して青山の難波病院に入れてある旨を通知した。



『それにしても、品川、よく助け出したなあ、名探偵だぞ』と難波がいつた。

『實は怪しいと思ふある女を尾行けてゐた處が大塚驛で、その女が切符を買つたのを知つたから、直ぐその行先へ自動車を廻して貰ふやうに相原に電話で頼んでおいて俺は、その女の尾行をつゞけたんだ……』

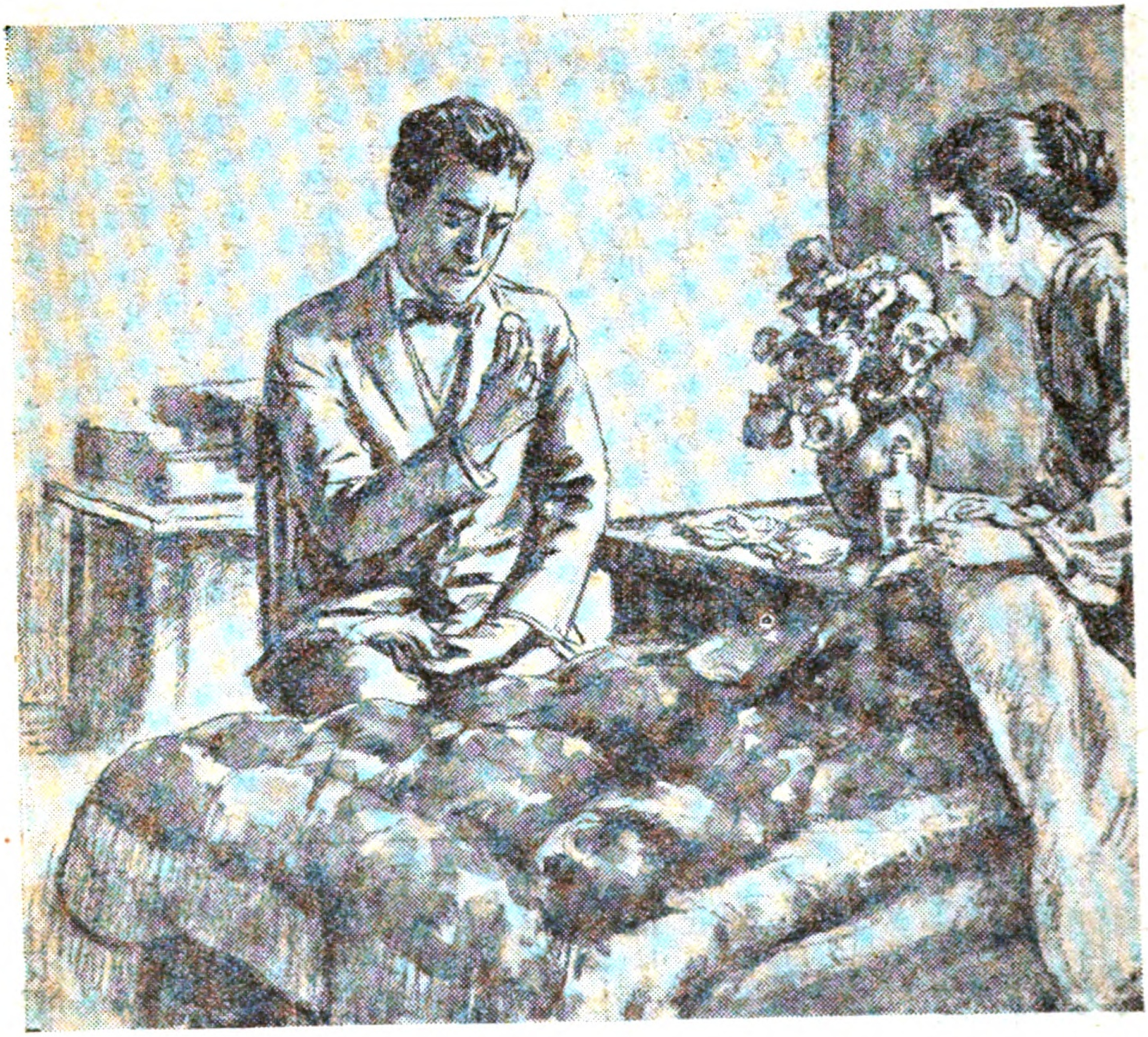
『品川から事件の大要を聞いてゐた處へ、問題の女を尾行けてゐるといふ電話があつたんだ』と相原がいつた。『だから萬一の用心にと同時に一つは試驗の爲に家に飼つてゐたシエパードを連れてドライブしたんだ』

『その犬で救ひ出す事が出來たんだよ。何しろ、名からしてドイルなんて奴がゐるんだからなあ、名探偵犬さ、アツハヽヽ』

品川は小笠原家の女中に目をつけ、それの外出を尾行して、女の行先を知ると共に、萬一の用意に、親友相原に急報を發して、自動車で女の下車驛へ先廻りをして貰つたのであつた。處が富豪の一人息子の相原は卒業後の徒然にシエパード種の犬を飼つて訓練してゐたので、早速それを引具して來て、實地試驗をやりまんまと成功した。

『それよりも、東小路家の人々が來た時清子さん救出經路の說明を打合はしておく必要がある』と品川がいつた。

品川が事件の表面に出る事はまづいといふ考へ



から、品川と相原とが井荻村の方面へ自動車の遠乘りに出かけた處が、窓から救ひを求めてゐる女のゐる事を發見したので、行つて見ると家人は留守、女は清子さんであつたので早速自動車に乘せて取りあへず友人の家へ連れて來たといふ段取にきめた。

『令孃に打合せておく必要があるか……』

『それは僕からよく話をしておく』と難波醫學士がいつた。

『家人に會ふ前に僕に會はせてくれ』

『よし心得た』

暫くすると東小路家の人々が急を聞いて馳けつけて來た。

果然小笠原重光が眞先に飛び込んで來た。つゞいて品のいゝ夫人に召使らしい女中が二人、それだけである。

姿の變つた品川隆太郎には、流石の小笠原重光も、これが先日カーテンの影から現はれた黒眼とは氣がつかなかつた。

『令孃は興奮を靜める爲によく眠らせてあります』と難波學士が説明した。『一兩日は絶對安靜を必要と存じます。唯今皆さんが御會ひになるのは今後の爲によくないと存じますから、誰方にも

一日位は絶對に面會を謝絶する必要があります』

品のいゝ夫人は東小路子爵の實姉で久世男爵未亡人であつた。夫人の切な願ひから、

『一寸、顔だけでも……』

といふ事になつて、久世未亡人が病室の扉の外から覗いて來た。

夜になつて東小路家の人々は感謝の言葉を繰り返し〳〵とまづ引取つて行つた。

翌朝、早く氣分も落ちついて元氣の出た令孃清子の室へ品川の姿が現はれた。

清子は寢臺から起き上らうとした。

『いや、そのまゝ〳〵』

と毛布にかけた品川の手を清子は緊と掴んでほろ〳〵と泣いた。幾條となく流れて行く熱い涙の感覺が、青年品川の手から胸へ緊々と傳つた。

暫くは二人とも無言であつた。

『清子さん、泣いてる時ではありません』と品川が感激に滿ちた聲でいつた。『貴孃の爲には最も重大な御話があります。そうして亡なられた御父さんが、瀕死の中から、あなただけに傳へてくれといはれた尊い遺言があります』

品川隆太郎は一ケ月先きの夜の出來事から、東小路子爵が最後の言葉までを詳細に話した。

清子は泣きはらした眼をきつと見据ゑて、ともすれば止め度なく流れ出ようとする涙を胸に喰ひしばりながらぢつと聞いてゐた。

『さうした譯で』と品川が最後の言葉を添へた。『子爵から……子爵の靴の中から出して渡された品物はこれです』

品川は小さな皮袋を差し出した。清子はふるへる手でそれを受取つた。

『悪人輩が狙つてゐるのはこの皮袋に相違ありません。この中に何かしら重大なものがあるに相違ありません』

『この中に？』

と慄へる聲で清子は初めて口を開いた。

『品川さん。開けて下さい。中を見て下さい。……わたしには……わたしにはこれを開けるだけの力が御座いません』

品川は令孃の差し出された袋を開けて見た。

中には古びた金襴の布切に包んだものが入つてゐた。

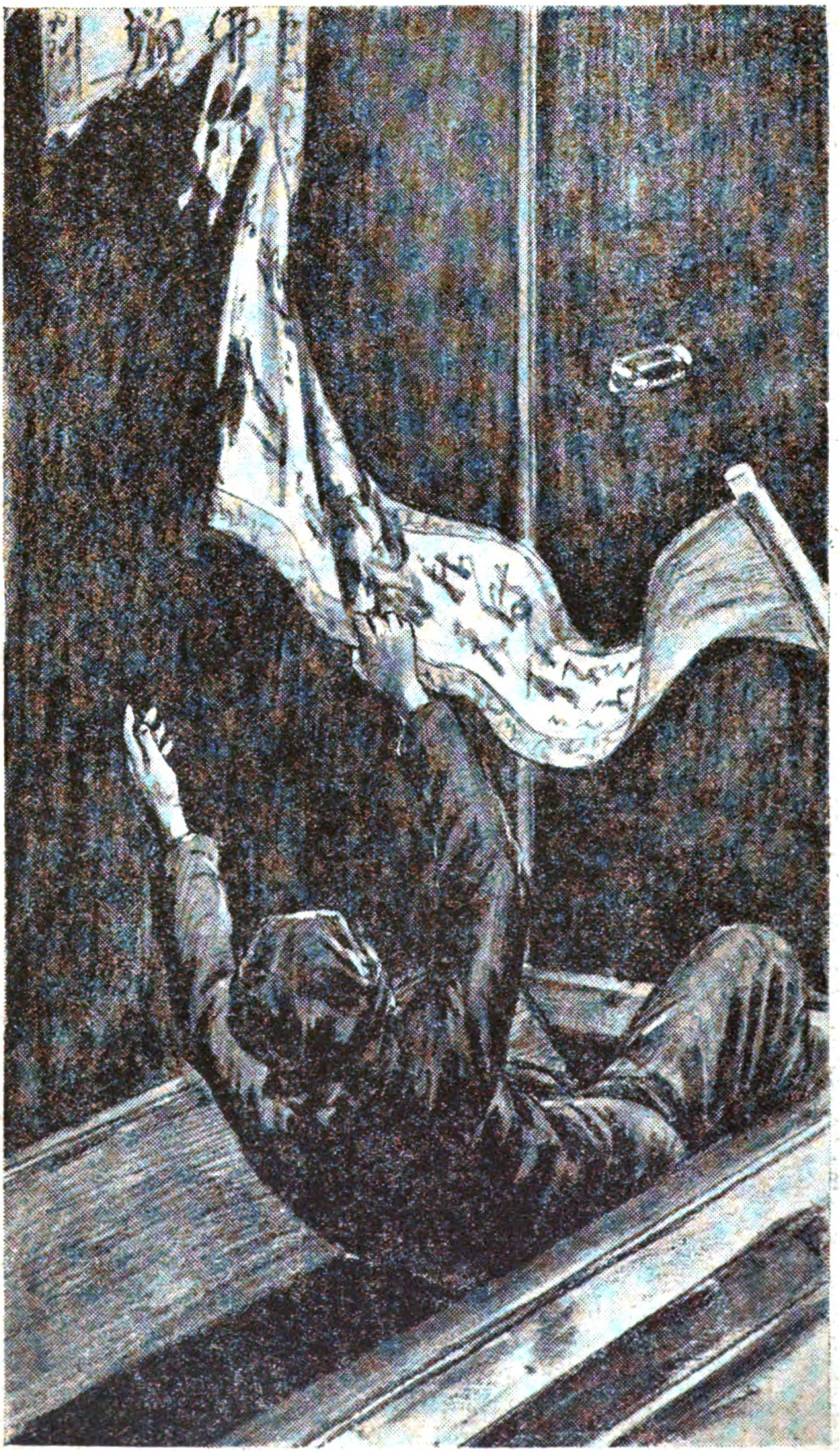
金襴の袋をとつた。黄ばんだ色の紙にくるんである。紙を開いた。白絹に又包んである。白絹を開けた。

最後に現れたのは？　一箇の白玉！　緒締にも似た一箇の白玉である。

『まあ！』と清子は驚きの聲を擧げた。『何んでせう？　これは？』

品川も意外だつた。中から恐らく書類でも現はれると想ひきや、何に使つたものとも見當のつかぬ一箇の白玉。寶石か貝か、或は曲玉の類か。正體の知れぬ一箇の白玉。

よく見ればその白玉の両面に美事な文字が刻みつけてある。
一面には篆書で『樞』の一字、
一面には隷書で『破軍走天樞』の五文字！



流石の品川隆太郎も、白玉を掴んで唸るばかりである。
『謎です』と暫くしてから品川が云つた。『とにかく謎です。この白玉の爲に子爵は命を亡はれた。この白玉に包まれた大きな

秘密があるのです。この白玉をとりまいて流血の惨事が繰り返へされようとしてゐるのです。大きな謎です。今は少しも解つてゐません。然し、清子さん。品川隆太郎は亡き子爵の最後の御言葉を引き受けて、飽く迄、此の謎を解きます』

『どうぞ……どうぞ、品川さん。御願ひ致します……清子からも御願ひ致します』

と彼女は白玉を握つた品川の手をとつて、今迄堪へた涙を堪へかねて泣き伏した。『どうぞ、この秘密を解いて、父の仇を討つて下さい……品川さん、清子からも……御願ひ致します』

『御安心なさい』と感激した品川は令嬢の波うつ肩を優しく撫でた。『御安心なさい。品川隆太郎、命にかけてもやり遂げて御覧に入れます！』

二人の感激は握り合つた手から手へ、胸から胸へ傳はつた。

『が、この玉はどうしませう？』

數分の後品川は我にかへつていつた。

『どうぞ、品川さん、あなたが預つてゐて下さい……わたしは……怖ろしくつて……とても……』

『よろしい』と考へてゐた品川がいつた。

『僕が確かに御預り致しませう。……が然しこの事は誰にも話してはいけません。二人の間だけに致します』

彼はぢつと謎の白玉を眺めてゐたが再びそれを元通り包んでしまつた。

『それから、清子さん、小笠原重光といふ人には油斷をしてはいけません。悪人です』

『エツ、小笠原さんが……』

『え丶。悪人です。恐ろしい秘密を持つてゐるらしい男です。決して油斷をしてはいけません。そして、小笠原に對して又別の敵がゐます。石波艶子といふ女らしいです。今の處、僕には兩方ともよく解つてゐませんけれども、此の白玉をめぐる悪人達には一方に小笠原あり、一方に石波がゐます。これだけは確かです。くれ〳〵も油斷してはいけません……ですから、清子さんは誰れか安心の方に……』

『さうですね、久世の伯爵様は！』

『久世未亡人ですか……それがいゝでせう。久世さんによく保護を御願ひなさい……それから……僕は小笠原と石波といふの丶素性から探偵にかゝります……』

話の中に扉をノックしたものがある。難波學士が入つて來た。

『やあ、話はすんだか？ 久世さん、小笠原さんが見えたよ……』

『話はすんだ……ぢやあ、僕はこれで御暇します……では清子さん、確かに引受けました。御安心なさい……』

『どうぞ、くれ〳〵も御願ひ致します』

清子はぢつと出て行く品川の姿を見送つた……。

清子は三日後に久世未亡人に連れられて病院を出た。

品川は白玉の謎を引さげて、益々活躍を開始すると、難波學

Ｓ、Ｓ三三、士を通じて倚子に傳言した。……それから又三日たつた。品川の消息がフツと消えてしまつた。

破寺の怪

星月夜、鎌倉山に夜は更けて、晝尚ほ暗い杉木立の夜は又一層の闇である。ふくろか、あらず、山に棲む怪鳥の聲も途絶えて、一山の禪場、禪寺、其處の庵に、彼處の本堂に通ふ坂道、小徑、石段道を照らす常夜燈や、道案内の電燈の五燭が、如何さま物の怪と、妖しい夜におびえたやうにポツリと闇に浮いて光暗くしばたいてゐた。

此處は鎌倉の奥圓覺寺の末寺大雲寺へ通ふ杉木立の細い石段道、其處らあたりから、靜かに闇のどんよりとした空氣をかすかに動かすやう人の足音が聞えて來た。それも足音といへば足音、唯だ時折に枯枝や小石を踏む微かな音ばかりである。

大雲寺はもと悟道の禪場巨刹圓覺寺の末寺ではあつたが、何しろ人里離れた奥の院の破れ寺で、唯だ時折入門の雲水が庭詰の雨露にぬれてたまらなくなつた時、一夜の夢を結ぶ法外無緣の小屋に等しかつたのを此の一年許り前の夏、流れて來た雲水坊主が、

『お借り申す』と一言斷つた儘、此の破れ寺にずる〳〵べつたり居据つて、何處から托鉢して來るか新舊の板や柱を擔ぎ込んで、勝手氣儘に破れた屋根を修理するやら緣の下の土を掘るやら、どうやら住居らしくしてしまつた。

家は小さい本堂と庫裡一棟、住職然と納つたが、本山の方でも別に氣にも止めなければ、山の中の破れ寺の事、世間でも見向きもしなかつた。のを結局よい事にして此の素性も解らぬ雲水坊主は、何處から拾つて來たか地藏尊を一體本堂に安置して朝晩に普門品の一くさりをチーンと鳴らしてあとは寺にゐるのやらゐないのやら、靜まり返つてゐた。

その大雲寺へ夜更けに向ふ人の足音。坊主が歸つて來たにしては少しおそすぎる。

やがて本堂の前へポツカリ浮び上つた黑い人影。足音の主である。

四邊の樣子をぢつと窺つて、先づ家を一周り、屋内の樣子をぢつと耳を澄ますらしい態度。無論此寺の雲水坊主ではない。

闇に動く五尺一二寸、小柄の人影はやがて再び裏手へ廻つて庫裡の座敷と思はれる緣の下へする〳〵ともぐり込んだ。

もぐり込んだ怪漢は廻り緣の板を下からそつと持ち上げる。試みる事一度二度三度、……チエッ！　と舌打をして四度目、五度目……六度目の一枚の板が音もなくスッと持上つた。緣の板を巧みにはづして、しばらくヂッとしてゐたが、その儘猫のやうに忍び込んだ。

森閑とした眞闇暗の庫裡の中、人の氣配もない。

それでも用心らしく靜かに座敷の障子を開けた。と同時にスッと流れる一條の光、懷中電燈の光が室内を切るやうにス、スス……と流れた。

流れた光は床の間でピッタリと止つた。止つた懐中電燈の薄明りに照らし出された床の間には一卷の軸がかゝつてゐた。

ボンヤリした光の圓が次第に明るくなると共に小さくなつて來る。怪しい人影が近づいて來たのだ。

床の間の前に立つた泥棒――夜夜中忍び込んで來たのだから泥棒に相違ない――の持つ懐中電燈の光は懸軸の最上部にピッタリつけられてゐる。

そしてその光にうつし出された一聯の文字、

『七佛……』

達筆に認められた『七佛』の文字から電燈の圓い光は次々に字を追つて下げられて行つた。その軸物の文字は、

『七佛蒲團欲今穿、先師禪板已相傳』

光は再び上に戻つて又下へ讀み下す。

『眼睛鼻孔可端直、頂對青天耳對肩』

筆者の署名もなければ印もない。唯だ七絶の詩が書いてあるだけであつた。

泥棒はしばらくぢつと見詰めてゐたが、やがて口の中で呟いた。

『……七佛の蒲團、今穿たんと欲す……先師の禪板、已に相傳ふ、眼睛鼻孔、端直なる可し、頂は青天に對し、耳は肩に對す……』

暫く口の中で何やらぶつ／＼いつてゐた。そして電燈を左に持ちかへて右手を延ばしたが軸を懸けた釘にとゞかない。一足床の間に上つたが、まだとゞかない。





二足床の間へ上つた泥棒は左手を壁にさゝへて右手を高く、ウンと脊伸びをした刹那、

『アッ！』と叫ぶ、

叫ぶが早いか、泥棒の身體は垂直の儘パッと床の間の中から緣の下へ消えてしまつた。とポッカリと床の間に開いた穴一つ。

人を呑んだ床の間の陥穽！

懸軸は落ちる刹那に掴まれて半ばビリビリと破られてしまつた。

破寺大雲寺の床の間に意外、怪しい陥穽！

『ウアハッハ、、、、、、』大きな笑ひ聲が寺をゆすぶつて次の間から起つた。——がらり唐紙が開いて、人が入つて來た。

『ウアッハッハ、、、、、、鼠がとう〳〵穽に陥ちやあがつた……ウアハッハッハ、、、、』

俎上の緋鯉

それから二十分ばかりして本堂の闇からガタガタと怪げな音が起つた。

『いや、御苦勞々々……ウフッ！　手數をかけやがつた』

太い聲が聞えた。ドサリと物を置く音。

『ぢやあ、吉岡、お前は早速、納屋へ行つて仕度をしてくれ、早くしねえと間に合はねえぞ』

『大丈夫でさあ……』

ガタ〳〵と本堂の雨戸を開けて出て行く音がした。

『和尚、どうしたんだ……暗くてしやうがねえ……何を間誤間

誤してゐやあがるんだなあ……和尚、早く來ればいゝのに……』

聲の終らぬ内に、

『和尚は、こゝにゐるぞ！』

闇の中に聲があつた。

『エッ！　あア、吃驚した、人の悪い和尚だ。ゐたのか？』

『最前から地藏様の前に坐つてゐた』

『愚圖々々しねえで、燈火をつけてくれ、早く御本尊の顔が見てえ！』

『急くなよ。落付け！　今つける』

パッとマッチをすつた。蠟燭の火がボーッと四邊を明るくした。

明りに照し出された二人の男。

一人は此の寺の雲水坊主、今一人は洋服をつけた紳士。

坊主は丈の高い、肥つた、頑丈な體格の大入道、髭が顔をうづめて、あぶら切つた獅子鼻、ギロリと光る凄い目、鼠色の法衣をたくましい腕にからみつけてゐた。

一方洋服の紳士はやゝ色白ながら精力家らしいたくましい骨格、太い眉毛の下から神經質で、然も殘忍らしい小さい兩眼がキラキラ獣の眼のやうに光つてゐた。

その二人の足下に、兩手兩足を縛り上げられた黒いかたまりが横つてゐる。

『巧く陷ちたな……床の間の陷穽とは氣がつくまい……』と坊主、

『だが、穴の中では骨が折れたぞ。氣絶でもするかと思つたら、安に相違、怪我一つせずにゐたからな……危く土手腹へ穴を開けられる所ぢやつたぞ』

『が、斯うなれば袋の鼠だ。南無阿彌陀佛……南無……』

『よせやい、引導にはまだ早い、どれ、お顔を拜見しようか』

紳士は身をかゞめて手荒くぐいと半身引き起した。そして曲者が被つてゐた黒い頭巾を掴み取つた。バラリと垂れた黒い髪、サッと現はれた白い顔。女だ！

女だ！　曲者は。然も美人。妖艶な眼をした二十二三の素晴らしい美人。ギロリと眼をあげて紳士と坊主の顔を見上げた。

双方無言。

紳士の眼は見る〳〵異樣の殺氣を帶びて輝いて來た。殘忍な色、暴虐な瞳、血走るばかりにギッと女を睨みつけた。

『奥様！　斯うなりやあ、仕方がない。お念佛でも唱へなさい……引導は和尚からでなくとも、此の私から渡してあげる』

『…………』

思はぬ陷穽に落ちて無殘々々と捕へられ、然も高手小手に縛られた絶世の美女は啞のやうに默りこくつて相手の顔を見上げてゐた。

『いふ事はありますまい？　な、今が今までの罪障消滅、その美しい顔と肉體、その恐ろしい心と精神、そして又炎のやうな慾望、それがすべて今夜、今一時間の間に無くなつてしまふん

ぢや。因果應報歸命頂禮、覺悟はよいぢやらう……が最後に聞いておいてあげる、遺言だけはな……』

『遺言？』

初めて美人の紅唇を洩れた一語。彼女の身體はわなわなとふるへてゐた。

『遺言ぢや。幾人か作つては捨て、捨てゝは作つた戀人への遺言だ。此の世に左樣ならをいふ時の言葉だ……』

『では私を……』

『あの世へ送つてやるんだ！』

『私を……あの……あの世へ？……私を殺すんですか、私を！』

女は叫んだ。

『殺してやるんだ！』と冷然一言。

『何も知らない私をだまして……こんな寺へ忍び込ませて、陷穽へおとして、あんなひどい目に會はせて……そして私を殺すんですか……私は……鎌倉ホテルでお友達と、いたづらな賭をしたんです。吉岡さんと、濱田さん大元さんと……カクテルを飲みながら探偵の話をしてゐたんです……そして、大雲寺の床の間にある軸物をはづして來られるかどうかつて、大元さんが仰いました……女だつて出來ますわといつて……議論して……籤を引いて……私が當つたんです……私が盗つて來たら……大元さんがそれを又返して來る事になつてゐたんです……大元さんと大雲寺の和尚さんは飲み友達だから驚かしてやらうつて……それで私は大元さんから……發見けられた時の手紙まで貰つて……緣の下から緣板をはづす事まで敎へて頂いて……そして途中まで吉岡さんに送つて頂いて……來たんですわ……それを……それを陷穽へ落して亂暴をして縛つて……嘘つき　誘拐し！　惡魔ッ！　さ、解いて下さいッ！　何をするんですッ！　失禮なッ！』

紅唇火を吐いて、怒りに全身を慄しながら叫んだ。

『まあ、まあ、靜かにしろよ、だまされたお前が馬鹿なんだよ……吉岡にしろ、濱田にしろ、大元にしろ、此處まで來るには苦心をしたものさ。欺されたお前が馬鹿よりも、欺した三人が利口だつただけさ……まあ、そう思つてあきらめろよ、折角手に入つた獲物だ、繩を解いて放すわけにはゆきかねる』と紳士が憎惡に滿ちた聲でいつた。

『何故、欺すんです？……何故斯んな目に會はせるんです？』

『何故欺した？　ホ、ホオ、そんな事はお前の胸に訊いて見ろ……胸に訊くまでもなく千萬承知の筈ではないか、なあ、おい、妖婦石波艶子！』

『えッ！　石波？　艶子？……違ひます、人違ひです！　私は泉矢品子です……違ひます……石波なんて……違ひます……解いて下さい……人違ひの私を何んで誘拐かすんです…何んで殺すんです……人殺しッ……』

『人殺しはないぢやらう』と紳士は益ゝ落ち附き拂つていつたが、その眼光は愈ゝ殺氣を帶びて來た。『人殺しは貴樣だ……我我の同志大山良夫を鹽原の山中で斷崖から突き落して殺した

女、そして又春木貢太郎を蘆の湖に沈めた女！　誰れだと思ふ、石波艶子だ！』と彼は女をきつと見据ゑて、『一代の妖婦石波艶子……我々の秘密を嗅ぎ知つて、自分一人の手にせしめようと容色と短刀とを隠し持つ夜叉石波艶子！　同志の恨だ、我々の仕事の敵だ。……愚鈍な警察の手を待つまでもなく、我々の手で處分してやるんだ』

『いえ、……いえ、違ひます！　そんな……そんな大それた……違ひます私は……』

彼女は蹌踉ながら立ち上つた。と和尚の太い手がドンと彼女の胸を突いたのでバツタリ倒れた。

『違ひます……私は泉矢品子です……それを石波だなんて……私が人殺をしたなんて……いひがかりです！　人違ひです！　どんな證據があるんです……證據もないのに……』

『證據？……フフン』と和尚が笑つた。

『證據？　そんなら泉矢さんとやら、何故、お前は二日も三日も前からこつそり



と此の寺の周圍をうろついたんだ？』
『散歩に來たんです』
『散歩に來て、人のゐない寺の中へ入つて、本堂の陰や、戸棚の隅を覗くやつがあるか……え、返事が出來まい？……それよりも、泉矢品子といふ、その名が證據だ！』
『泉矢品子？　私の名が？……』
『イヅミヤシナ！　馬鹿！　世間は誤魔かされても、此の大寺の和尚は誤魔かされんぞ、え、見る目嗅ぐ鼻、すべてが淨玻璃の鏡だ！　この鏡にうつした名前が、何だ、イヅミヤシナ！　ヘン。笑はしちやあいけねえ、イシナミツヤとイヅミヤシナと、假名で書い一較べて見ろ！　イシナミツヤの六字の假名を出鱈目に置きかへたら、何となる、イツミヤシナぢやあないか。一字の相違もない、そんな變名が何になる。イシナミツヤの變綴文字だ。それすら偶然だと仰るか！　え、毒婦！』
『そんな、いひがかりを！　まあ！』と女はあきれた。『泉矢品子が石波艶子の變名ですつて？　まあ！　それで私を……』
女はきつと唇を噛んだ。そして呆然として二人の男の顔を見上げてゐたが、急に、
『違ひます！』『違ひです……人違ひで、何も知らない私を殺すんですか……殺す……私を……ひ、ひ、人殺しッ！　人殺しッ！……誰れか……助け、助けてッ！　人殺しッ！　助けてッ！』



『默れッ！』大喝した紳士は突然り女に飛びついて、傍にあつた毛布を取り上げると、泣き叫ぶ女の頭から覆せてしまつた。
丁度その時、最前出て行つた吉岡が入つて來た。
『用意が出來た！　お葬の用意が出來たぞ！』

死の闇

山の夜は物凄い靜けさを包んで更けて行つた。時々ザワく

と木葉摺の音がするばかしで闃寂たる深夜の山寺には、すべてが死の沈默に落ちて、生きてゐるもの丶互の呼吸が息ぐるしい許りに互の耳に聞えて來た。蠟燭の火がジ、ジジと無氣味な音を立て丶明滅した。

『まだ會葬者が揃はない』と坊主がいつた。

『お葬場の方に揃つてゐる。早くしろ。生佛が待ちくたびれて化けて來るぞ』

『何が！　化けて來たら祝酒を一杯もやる、七佛の涅槃今らがつたか？』

『シッー！　無駄口はよせ』と紳士が制した。

重苦しい沈默が暫くつゞいた。座敷の方でコトリといふ音。

『何だッ！　あれはさ』と吉岡がいつた。

『鼠だ。いやさ梁上の君子ぢや、君子危きに近よらず。南無阿彌陀……』和尚は輕く强ひて笑はうとした。

『さ、吉岡、佛を擔げ！』

『俺がか？』

『昨日まで貴樣が惚れた女だ。それが今生き佛になつたんだ。後生の爲め擔がしてやる』

『俺がか？』と吉岡は躊躇してゐた。

『擔げッ！』と紳士が命令した。そして頭の方をグイッと手荒く持ち上げた。吉岡も不承不承に足の方を持つた。女は觀念したと見えて、身動きもしなかつた。今更、泣いたとて、笑つたとて、怒鳴つたとて、何になる？　此の深夜、人里離れた山の奥の破寺で助けを叫んだとて來る人があらうか？　慘忍な死の惡魔に捕はれた女一人。彼女は只運命、恐ろしい運命を待つより仕方がない。

和尚は手燭を持つて二人の後につゞいて外に出ようとした。

『火を消せ、糞坊主！』紳士が低い聲で唸るやうに怒鳴つた。

フッと火が消える。四邊は漆黑の闇。星影もない空に密雲低く垂れて、木も草も深く眠る丑三時、死の魔神三人は闇の中に忍びやかな重くるしい足音を盜んでシト／＼と樹立の中へ分けて入つた。足音が次第に死の闇に呑まれて消えて行く。……

『ウ、ウ、ウン』吉岡が唸つた。

『如何した』と紳士がいつた。

『ど、ど、どうもしない。俺ァ、こんな慘酷な仕事が恐ろしくなつた』と彼は吃りながら答へた。

又無言。三人は默々として木の葉を踏んで進んだ。

サッと闇に走る一道の閃き！　三人の姿が一瞬間闇に浮き上つた。と同時に暗黒から聲もなくぬつと現れた二人の人影。

『御苦勞！』威壓するやうな聲が底力をこめて低く呟やかれた。バタリと女が地上に横へられた。

懐中電燈の光が再び闇を切つて前方に流れた。と見るそれは岩山の中腹にある洞穴だ。奥の深さは可なりあるらしく、中途で曲つてゐる。

『墓地へ！』

再び威壓的なしやがれた聲がいつた。その男を先頭に、傍か

に足先へ丸い光を投げたから十本の足は洞窟の中の土を踏んで進んだ。右に曲ると間もなく突當りだ。突當りの地面が人一人を寢かすに足る位掘り下げてある。女をその中へ投り込んだ。

『和尚、引導を渡してやれ』

『南無阿彌陀佛……』靜かな聲がかすれて聞えた。『今、我々は重大な立場にある。我々が重大な目的を抱いて極秘の内に計畫し來つた大秘密は、當局が偶然の不注意から恐るべき妖婦の知る處となつた。その女は我々が搜索し、發見しようとしてゐる一大秘密の一端を掴んで、同じ目的の爲に非常手段を以て暗中飛躍をし、彼女に之を洩した同志二人は、遂にその犧牲となつて恨を呑んで妖婦の爲に殺されてしまつた。その女、恨み重なるその女、我々が唯一の敵であるその女は、我々の苦心によつて今夜、此處に捕へる事が出來た。同志の恨は今女を同じ苦しみに捕へ、同じ死の手に葬る事になつた。恨長く死んで行つた年若き我々の同志よ。地の底に生きながら安らけく眠つて行くであろう妖婦、石渡艶子の最後を見て、南無頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々々……』

低く細く、和尚の念佛の聲が眞の闇の洞内に反響した。恐ろしい沈默、沈默の一分時が過ぎて行く。人々は呼吸を呑んだ。そして心臓の鼓動のみが、洞内の空氣をかすかに動かしてゐた。

『ウーン。俺ア恐くなつた』と吉岡が唸つた。

『吉岡、鍬を入れろツー』

『……出來ねえ……俺ア……恐く……』

『吉岡、貴樣が女を殺したんだぞ、女を陷れたのは貴樣だぞ、いゝかッ……俺ぢやないぞ』

腸を絞るやうに紳士が叫んだと等しく吉岡の手にしてゐた鍬を奪ひ取るや否や、發止、洞内の壁の一部を打つた。

と見るドッと恐ろしい土煙を立てゝ壊れ落ちる土砂！……ムッとむせかへる土煙に追はれるやうに、五人の男は一散に走つて洞外へころがり出た。……夜目にもしろき黄白色の土煙、濛濛と洞の口から吹き出した。

慘忍酷薄！あはれな女性は、生き乍ら埋められた。鎌倉山の奥深く深夜に行はれた恐ろしい犯罪！彼等の關係が如何あらうとも慘忍の限りを盡した生きた人間の土葬！殺人中の殺人だ。人か鬼か。然も殺され乍らも一語も發せずに……一語を發する事すら出來ずに悪魔の手で殺されて行つた女性、石渡艶子！謎の女性である。それにして殺人魔鬼五人！

彼等は闇の中をころげるやうにして走つた。物の怪に追はれるやうに、夢中で走つた。走つて走つて大雲寺へころげ込んだ。そして本堂の中へペタ／＼と倒れてしまつた。が中で唯だ一人落ちついてゐたのは和尚であつた。剛腹か不敵か。彼は人々の跡から悠々戻つて來た。

『南無阿彌陀佛々々々々』と口の中で呟きながら、彼は悠々と本堂を廻つて手さぐりで庫裡の方へ進んで行つた。

パッとマッチをする音がした。洋燈に火を點けたらしく庫裡

の方が明るくなつた。ガタゴトと戸棚をあける音がした。聽て燈を持つて和尚が本堂へ引き返して來た。

倒れてゐる四人はハツハツと肩で息をしてゐた。

『やあ、惡黨に似合はず、死人のやうに蒼い顏をならべてゐるな？ 安心しろ〳〵死んだものは化けて來ない。まづこれで諸事安泰ぢや。さ、蒼い顏をせずと元氣を出せ。酒杯の用意も出來たぞ、……酒でも飲んで、人間らしい顏色になれよ……南無……』いひすてゝ和尚はその儘すた〳〵と書院の方へ引き返して行つた。

『さ、早く來んか、……來ぬと、和尚一人でやるぞ……』

書院で和尚の呼ぶ聲がしたと同時に、

『や、や、や！』と和尚が頓狂な聲をあげた。

『大變だ！』と彼は叫んだ。『大變だ。盜まれたぞ……早く來いッ！』

大變！ といふ唯ならぬ叫び聲に倒れてゐた四人は俄破とはね起きた。刎起きて一同書院へ走つた。

『ど、ど、どうした』

『無い！』

と和尚は床の間を指して棒立ちになつてゐた。

『無い！』

『アッ！』

床の間にかけてあつた七個の偶の軸物。石波艶子……否泉矢品子が手をかけて半ば破れたまゝになつてゐた七個の軸物。それが影も形もなくなつてゐる。不思議！ 五人は期せずして床の間に走り寄つた。と忽ち再度五人の目をついて出た『アッ！』といふ叫び聲！

床の間に一枚の紙が落ちてゐた。その紙！ 手帳を切さいた紙にはペンの走り書きで何やら書いてある。

和尚が拾ひ上げて讀んだ。

罪のない女性に罪をきせて、慘忍な人殺しを敢てした極惡非道の人間共。私の力では今あはれな彼女を救ふ事が出來ませんが、その代り、その代りに彼女に代つて私があなた方にそれ以上の復讐を致します。

泉矢品子さんに代つて、私が復讐を誓ひます。覺えていらつしやい！

そして軸物は彼女の遺品として頂いて行きます。

今から念佛をとなへて復讐の日をお待ち下さい。……

石波艶子……

小笠原重光樣

外御一同樣

『石波艶子！』和尚の手はブル〳〵とふるへた。紙は手を離れてヒラ〳〵と疊の上に落ちた。

『すると泉矢品子は？……』

『人違ひか！』

『そんな筈はないッ！』と吉岡が死人のやうな顏をして怒鳴つた。

（つゞく）

大懸賞募集

問題

（一）『世界十二傑』と云へば誰々を選びますか？（皆さんの最も尊敬する英傑の名十二人擧げて下さい。）

（二）東西古今の偉人中、皆さんは誰々の言行を知りたいと思ひますか？（三人の名を擧げて下さい）

（三）皆さんは古來の講談中どの講談に熱狂したか？（三篇の名を擧げて下さい。）

（四）皆さんはどの講談が一番讀みたいと思ひますか？（三篇の名を擧げて下さい。）

（五）現代名士中、どの人の體驗談が讀みたいと思ひますか？（三人の名を擧げて下さい。）

賞品

一等　十八金側腕時計　一個宛　五名

二等　銀側腕時計　一個宛　十名

三等　銀製小型花瓶　一個宛　五十名

四等　三拾錢圖書券　一枚宛　一千名

應募規定

◇用紙は郵便はがき又ははがき大の厚紙

◇一題毎に別紙に書くこと、一人で何題應募しても結構、當選は一題毎に決定。

◇投票數の最も多いものに投票した方を當選者として其數が賞品數より多いときは抽籤とします。

◇宛名は『東京本郷　大日本雄辯會講談社全集部』

◇締切……八月十五日

◇發表……本社發行『修養全集』『講談全集』第一卷附錄



米國通信 外國名士曰く集

在米國三越人事課長 岩崎英祐

◎英文『野間清治』を讀みて

▽紐育ワールド新聞の主筆スオウーブ氏曰く

『野間清治』を讀んで私は野間社長に敬意を拂はざるを得ない。毎月の發行高が日本の總雜誌の七割にも當るなんて僅か廿年位の間に偉い大發展を遂げたもんだね。こんな大雜誌出版業者は世界いづれの國にも殆んどあるまいと思ふ。

△費府エイア・アンド・ソン廣告代理店のダンニング支配人曰く

日本の雜誌出版業の覇者としての講談社の名は久しく承知してをつた。此の度『野間清治』社長の傳を讀んで一層貴社の經營方針と社長の理想とがよく了解せられて非常に教育せられた譯だ。あんな雜誌の經營法はアメリカ人に讀ませたら大に參考になるだらう。

▽紐育サン新聞のホッヂス主筆曰く

『野間社長』傳有り難く讀んだ。氏の事業振りを知つて大に啓發された。新聞雜誌の經營は非常なる困難が伴ふものだが遂にこの難局を打開して世界有數の大雜誌社に築き上げた野間氏の手腕も驚くべきだね。野間氏がアメリカのやうな惠ま

海外早耳帖

○飛行機全體を吊す落下傘

（加州トレイシー發信）落下傘もいざ墜落と云ふ突嗟に搭乘者が一人々々拔けてゐたんではまどろかしいといふので飛行機全體をフハリフハリと空中に吊し上げる調法極まる大パラシュートを發明したのがマツキーオンと云ふ飛行家で愈よ之が實行の爲め氏は自ら操縱する飛行機のエンヂンを二千二百呎の空中でピタと止めて了ひ早速用意の新落下傘を開いた。初め小さい落下傘がパッと開いたかと思ふと更に七十二呎もある絹製の天蓋を持つた複葉式の大落下傘が開き飛行機はフハリ〳〵と地上に下つて來て試驗は見事成功機體にも操縱者にも全然被害なし。



○麥稈帽と伊國大學生

れた國へ來たらヘンリー・フオードのやうな事業家になつたであらう。

▽カリア誌の編輯長チエネリー氏曰く

僕の編輯してをるカリア誌は週刊だが約二百萬出す。『野間清治』傳を讀めば『キング』は毎月百五十萬部を賣るさうだ。全く素晴らしい勢だね。アメリカでも月刊雜誌で百萬以上賣れるものは二つか三つの雜誌に過ぎぬ。日本のやうに國土狹小の國でこんなに賣れるなんて何か經營上の秘訣があるんだらうなあ。何卒教授が願ひたい。

▽雜誌サタデー・イブニング・ポスト誌のロリマー主筆曰く

『野間清治』社長は米國の出版界では誰に當るか一寸思ひ當りませんね。教育事業に從事してをつた人から雜誌界に乘り込んで權威を握つた人は先づあるまいと思ひます。日本の少壯政治家、少壯實業家、文藝家などの中でも野間氏の庇護をうけてる人も可成り多いさうですね。鶴見祐輔君とは大層親密の間柄だと聞いてをりました。更に僅一社で毎月數百萬冊も出版する雜誌社は日本に一つ、世界にも比較すべきものは澤山はあるまい。心から野間氏の今後の御活躍を祈ります。



岩崎英祐氏

◎流石は『キング』世界一のホテルの圖書館に

何でも世界一を誇る米國のシカゴ市に世界一のホテルが昨年八月出來た。ホテルの名はスチヴンス・ホテル、建築費は驚くなかれ五千五百萬圓だから丸ビルが五つは建築されよう。建物は地下四層、地上二十五層といふベラ棒に大きいもの、其部屋數は約三千であるから試みに一人

（フローレンス（伊太利）發信）イタリーではいつの間にか夏帽子をかぶらない事が流行となりイタリーの麥稈帽子製造業者は之が影響を受けてすつかり上つたりとなつた。ところがこれに奮ひ起つたのがファシスト團で國産品の保護とあつてしきりと麥稈帽子着用を勵行した。その結果この夏はイタリー全國の大學生が強制的に麥稈帽をかぶらせられる事となり醫科は綠、法科は赤といつた具合に各科別に色のついたバンドを麥稈帽に附すといふ趣向をこらす事になつた。



○ジヤズ排斥

（ハヴアナ（キユーバ島）發信）キユーバの劇場、活動、カフエー其他公衆の集る場所で演奏する音樂の半分はキユーバ人作のものを使ふべしとの法案が最近議會へ提出された。これは最近米國のジヤズが全盛を極めキユーバ全島を風靡した結果。

の旅客がこのホテルに泊つて每晩部屋を代へることゝすると全部の室を泊り歩くには八年半、ザツと九年はかゝる。オギヤアと生れた乳呑兒は小學校の二年生か三年生になる勘定。ホテルの中には二棟の病院もあるし、一萬冊を藏する圖書館も子供の爲の動物園もある。日曜日には牧師が出張して來て説教も行はれるから客はわざわざ敎會へ出掛ける必要はない。大食堂では五千二百人の人間が一時に食ふことも出來れば、三千人が一時にダンスする夜會場もある。こゝの圖書館には米國を始め歐洲各國の雜誌も備付けられてをる。東洋では語學の關係上何雜誌もあるまいと覗いて見ると『キング』だけが代表格に備付けられてをる。流石は世界有數の大雜誌だけありて世界一のホテルに備付けてあるのも何かの因緣であらう。シカゴを通過する洋行者は世界一のホテルの風格を一度は見るがよい。

◎藤原義江『キング』の勢力に驚嘆

世界の檜舞臺たる紐育と倫敦で得意の民謡『箱根八里』や『荒城の月』等を唄つて內外の聽衆を醉はした『われらのテナー』

藤原義江君倫敦にて曰く

米國各地を廻つて、紐育、ロンドンとやつて來ましたが何處へ行つても同胞諸君が僕に尋ねる第一は『あなたの唄を聽いて日本人として實に誇りを感ずる。あなたも四五年前歐洲を經て米國へ上陸したときには金はなし、紐育の劇場の何處かで唄はせて貰はうと思つて各劇場を歷訪しても誰一人相手にして吳れず大層苦心を嘗めたそうですが、今日では「我等のテナー」として歐米の各劇場から禮を厚うして迎へられるやうになつたとのこと、誠に御目出たい』と云ふから『よくそんなことを知つてをりますね』と逆に尋ねると『正月の「キング」を讀んで知つ

○一萬年前の動物



（アップランド　北米インヂヤナ州發信） 當地のジエイ・ダブリユー・ジヨーンズ氏所有の農場より高さ十二呎、長さ十六呎の巨大なアストドン（象に似た第三世紀の巨獸）の完全な骨が發掘された。學者の鑑定に依ると此の怪獸はインヂヤナ州の高地地方に壹萬年前に棲息して居つたものらしいと。

○爵位賣却廣告

（モントリオール發信） 波蘭の貴族レオングヴイクリウスキー伯爵は當地の一新聞紙上に十萬圓で波蘭の『伯爵』を讓り渡したしと廣告した。

これは同伯爵が近年懐具合が惡く巴里に住んでゐる妻子を食はせる事が出來なくなつた爲であると。

○米國大統領候補者の運動費

てをります』と必ず答へられる。實は一昨年滿洲からシベリア地方へ唄行脚した場合にも汽車で同席した日本人の大半は『キング』を手にしてをるから僕も買つて大に興深く讀んだもんです。然し赤面の至りながら當時は『キング』はこんな勢力があらうとは知らなかつたが、この度自分の經驗談が載つたので始めてこの雜誌が世界の隅々にまで普及し日本人のをる處必ず『キング』ありとの事實が解つて今更ながら勢力に驚いた次第です。

日本の國旗と『キング』は絶對不離

人跡未踏のアマゾン河の流域を親しく視察して紐育に着いた商工省の某官吏曰く

日本人の國家意識は偉いもんだね。それに海外に植民し發展する力も相應にある。あの人跡未踏のアマゾン河の流域にも日本人は孜々として働いてをる。それが大抵は掘立小屋に五人位づつ住んでをるのだ。遠く故國を離れて猛獸毒蛇と闘ひつゝアマゾン地方を開拓しつゝある我等同胞の小屋へ行つて見ると、天皇陛下の御尊影を飾つてある。尚大祭日などには日の丸の國旗も掲揚して故國の萬歲を祈つてをる。この健氣なる同胞が日夜故國の繁榮を祈る純な心持には涙がこぼれるやうで共產黨組織などを企る連中に見せてやりたくなる位だ。

更にこの蠻域にも『キング』と云ふ雜誌は何戸に壹冊は置かれてある。この『キング』を讀むのが人跡未踏の同胞には唯一の慰安と云つてもよい位で、この雜誌の發展力と膨脹力には實に驚嘆した。

日本の國旗の赴く處『キング』之に從ふと云ふやうな譯で、兩者は絶對不離の關係にありと申しても宜しからう。云々

（ワシントン發電）米國大統領候補者指名戰は共和黨は六月十四日フーバー氏が壓倒的で勝利を博し民主黨も六月廿六日にテキサス州ヒューストン市に於て行はれるが今回の選擧に於ける兩黨各候補者の運動費は五月末の調査に依つても六十五萬三千七百五十五弗（約百四十萬圓）の巨額に達して居る。內兩黨を通じての最高額は共和黨のフーバー氏の約七十萬圓で最低が同じく共和黨のノーリス氏で之は又タッタ十二圓とは驚かされる。

近頃驚嘆記

◇時價約一億圓の黃金――即ち大判小判で三百六十萬兩――が、群馬縣勢多郡敷島村大字津久田上ノ原の一角に埋藏してあるといふ話。もしこの黃金が掘り出されたら、それこそ世界の耳目を聳動させるに足る大事件だ。

◇事の次第は、德川幕府の再興を圖る目的で、時の勘定奉行小栗上野介、甲州流軍學者林鶴梁、快傑雲井龍雄等が、あの維新のどさくさ紛れに紅葉山御金藏の常備軍用金三百六十萬兩を前記の場所へ埋藏したのである。

◇この間の事情には如何なる大傳奇物語よりも面白い經緯があるか、それは雜誌『富士』八月號に詳しく出てゐる。



百一發の恩惠

工學博士 田中龍夫

九十九圓の有難味

私が百圓の金を借りに行つた時、私の友人が、今丁度九十九圓しか持合せがないから、これで勘辨してくれと言つて、その九十九圓を貸して呉れたとしたら、私は果して怒るであらうか。否々あとの一圓はどうでも都合できるといふので、その九十九圓を、きつと三拜九拜して借りて歸つたに違ひない。誰が一圓足らぬからとて突返すものがあらう。



さて問題はこゝである。九十九圓を三拜九拜して有難がる我々が、九十九の寶物を――幸福を、百の中たゞ一つ足らぬからとて、なぜ有難いとは思はないのであらう、なぜ感謝感恩の念が溢れて來ないのであらう。

くよ／＼病――不平菌

くよ／＼とおもいつゞらの中よりぞ、とんだお化が出るぞ恐ろし（二宮尊徳）

或者は不健康を悲しみ、或者は家庭の不和を悲しみ、又多くの者は貧のつらさを悲しんで、今や世間は不平、不滿、悲觀の聲に充ち滿ちてゐる。その極、遂にはこのくよ／＼症となり、煩悶病となり、更に悲觀支カタルを起し、信仰衰弱、神經麻痺症をも併發し、全日本を擧げて病魔の蔓延に苦んでゐる。病原は不平菌である、不滿菌である。而してその結果は、どんなお化が出るか、思へば眞にそら恐ろしい話だ。否、現にいろ／＼なお化が出てゐるではないか、――不平不滿を叫ぶことのみを知つて、感恩感謝することを知らぬ現代人は禍である。



百萬種の第一番

我等は果して感謝すべき何物をも持たぬであらうか。一體我等は我自らの存在について眞劍に我自らを見つめることの勞をすら惜しんでゐるのではなかつたか。



――我等は思ひがけなくも人間として此世に生れて來た。よしや豚として生れみゝずとして生れたとて何物をも怨む權利はないのに、幸にも人間として生れて來た。廣い世界に動物と名のつくものは百萬種にも上るのに、我等は一切の動

物の發長たる人間として生れて來た。これは決して有り易いことではない。實に有難いことである。百人中の一番に選ばれても感謝するであらうものを、まして百萬種の一番たる人間として生れて來たことを思へば、何人かよく歡喜感謝せずして居られるものぞ。

又我等は日本人として——世界の難局に棹さして東洋の使命を果し行かうとする日本人として生れて來たことを感謝する。又我等は勞働する者の一員として生れ來たことを感謝する。勞働の體驗のないものには、實は天地の眞味は解らないのである。

人生を祝ふ百一發

こゝに於てか百の恩惠の中、たゞ一つ足らぬと見えた不如意——まゝならぬ一事こそは、これ九十九のありふれた恩惠にも增して大切な、有難い恩惠であつたことを發見するであらう。

すればその一つの恩惠の値打は、決して一ではない、二にも三にも匹敵すべき天の恩寵であつた。——といふ事に目醒れば、九十九の恩惠は、實は百にも倍して百一の恩惠であつたことを悟るであらう。然り、人生を祝福した百一發の恩寵であつたことを感謝して、人生の歡喜の眞底を味ひ得るであらう。

有難き事のみ思へ

有り難き事のみ思へ人はたゞ今日の尊き今の心を　（黒住宗忠）

曾て黒住翁の教へられた家訓の第一條は「日々ありがたき事を取り逃さぬこと」であつた。一日といふ一日、數へ來れば、きつと有難いことは幾つもある。まして我等の生涯を回想する時、そこには有難いことと感謝すべきことが滿ち溢れてゐる。徒らに不平と不滿とに驅られて、この有難いものを取り逃してはならない。



何がまゝならぬ

かくと承知して見る時、我等の人生は百のうち九十九の恩惠を以て充ち溢れてゐるのだ。我等の恩惠は、いかにも、百たるべく只一つ足りない。その一つが足りない爲に、不如意の生活をなし、不平不滿の悲鳴をあげてゐるのだ。

然らばその不如意——まゝならぬといふ不平不滿の正體は何か。よく檢べて見ると、豈圖らんや、それは我等を鍛錬し、我等を教訓して、人格の完成、天國の建設にまで我等を導く一大秘藥、天下一品の良藥である。

この良藥を飲みほしてこそ——まゝならぬが浮世の、その艱難苦勞を嘗め盡してこそ、我等は人間らしい心を持つことが出來るのだ、人間らしい行を行ふことが出來るのだ、人生本義に到達することが出來るのだ、天國の希望を發見することが出來るのだ。



美談の華・逸話の泉

死刑中止

徳川光圀が隱居して常陸の西山に住んでゐた頃、二羽の鶴を飼つてゐたが、その一羽を近所の村の長作といふ農夫が殺してしまつた。その頃には天下の規則として、鶴殺しは大罪であつた。そこで光圀には、長作を引出して手打にする事になつた。



刀を拔いて、『憎い奴、鶴を殺したのがよいか。是れがよいか』と、云ひながら刀の背を四五度、長作の肩へあてたが、しかし斬らずに家來の中村新八を顧つて、『この者を殺したとて、鶴が生きかへりもせぬであらう。助けるか』と、云つた。

『それは有難き思召でござります』と、新八もほかの家來一同も答へた。『では死刑は免して追放にする』と、光圀は云つた。

それから長作には内々で、『鶴を殺すやうな亂暴者は、追放されて飢ゑたりすると、又もや惡事をするであらうから、當分食べるに困らぬだけの金を惠んでやれ』と、家來に命じた。

鶴殺しは死刑、死刑を免したのは慈悲、しかし罪ある者は罰せねばならぬ。そこで追放。しかしく罰しても後の事まで考へてやる。光圀は領民に對しては、どこまでも情深かつたのである。（山道聞）

謙遜すぎて

ある時ヴュルツテルダムで自然科學者の大會が催されたことがあつた。そして詩人のウーランドもその席に列つてゐた。

するとその中の一人が乾杯する時に、ウーランドに讃辭を呈すると、この詩人は恐縮のあまり、やをら身を起して、



『今日の宴會は學者諸氏の爲に開かれた

もので、一詩人の仇ではないから』と遮ぎつた。この有様を見た一學者、ウーランドの盛名はかねぐ知つてはゐるものの、未だ當人を見た事がないから、この風采のよくない男がウーランドとは夢にも知らず、非常に怒つて、

『この無禮な男を戸外へ放り出してしまへ。さア諸君、更めてわが敬愛するウーランド氏の健康を祝しませう』

と高らかに呼び立てた。

この滑稽な一場面に、一座の人々はコップを投げ出す位笑ひこけた。無論當人のウーランドも涙の出る程笑つたことは云ふまでもない。

最後の一瞬まで

『閣下！』

『…………』

『閣下！　敵は迫つて來てゐます！』

『知つとる！』

『御存知なら即刻開戰命令を――』

『…………』

『閣下！　開戰命令を――』

『うるさい！　默れ！』



鈴木參謀總長

大正十年シベリヤ出征の第五師團長であつた、現參謀總長の鈴木莊六氏は、今しも若い幕僚の言を跳飛すやうに一喝した。

當時の敵味方の兵力では、尋常の戰法では勝てる見込みがなかつた。そこで鈴木師團長は、師團司令部をチタ市街の中央部に置いて、先刻から櫛の齒を引くやうな報告を、一つも洩らさず胸に納めて、戰法を考へてゐた。その悠然たる態度は、若い士官をヂリヽさせた。

泰然として動かなかつた氏は、

『敵軍、チタ市街に迫る！』

の報告を耳にした時、いままでの悠々たる態度は忽ち變つて電光石火、

『直ちに出動！』

の命を下すと共に、先づ敵の右翼部隊に全軍を當らせ、これを破るや時をおかずに中央を、そして次は左翼を――そして結局味方に三倍する敵軍を擊破してしまつた。これこそ少數の味方で大敵に當る鈴木式戰法であつた。最後の一瞬間まで、抑へに抑へて機を見てゐた氏の沈着さに、若い士官は勿論全軍は悉く敬服した。

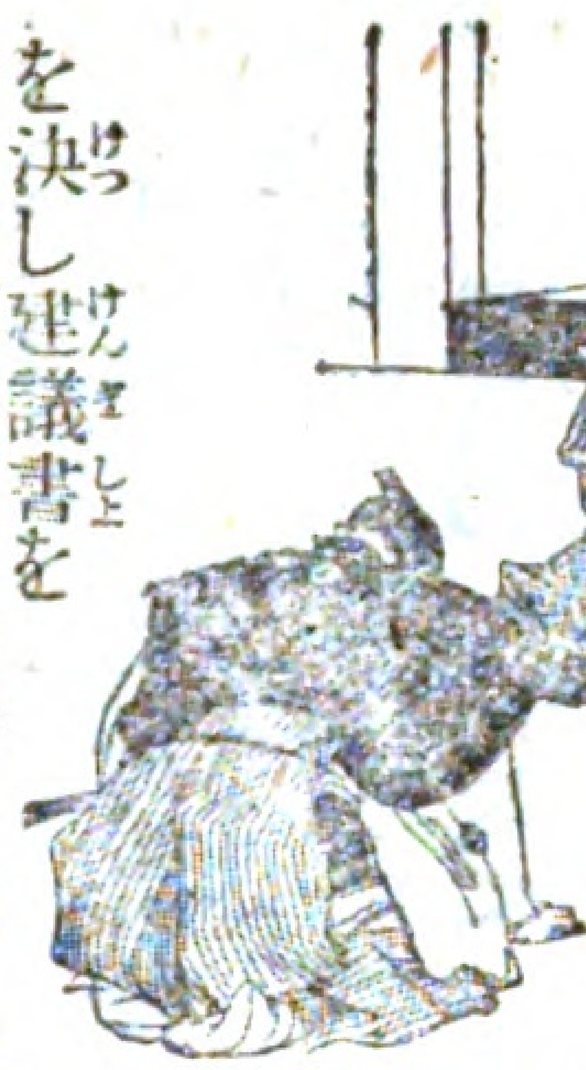
明君の慈言

明治維新の際、その藩から幾多有爲の人材を輩出せしめた明君島津齊彬も、家庭的には甚だ惠まれず、實子は男女併せて七人もあつたが、皆夭折してしまつた。その後へ生れたのが六男の哲丸。藩臣は一齊に明君の世嗣が今度こそは健かに育つやうに祈り、齊彬も殊の外寵愛して、片時も側を離さぬ位であつた。

だが、天下の形勢は愈よ急となつた。

もとより賢明なる齊彬、早くも時勢を看破して、城内二の丸の庭内に演習場を設け、藩士を督勵して大砲小砲の練習をさせた。藩士は一生懸命、朝から晩まで

砲聲の絶ゆる間のない威勢のいゝ演習ぶりに、老臣達は薩摩隼人の雄々しさを今更ながら力強く感じたが、砲聲をきくと赤子は育たぬといふ昔からのいひならはしを思ひ、二の丸と程近い場所に在す幼公子の身の上を心配しだした。中にも藩老黒田清綱は、意を決し建議書を呈出して、幼公子哲丸君の安泰を保つ爲に、演習の場所を磯の別墅へかへるやう切願した。



その建議書を一見した齊彬は、やがて沈痛な面持で悟すやうにいつた。『そちを始め藩臣一同の心根、齊彬まことに忝なく思ふ、ぢやが磯の別邸附近には藩民も大分多く住み、それらの家にも赤子は居る筈、二の丸なれば哲丸一人のみ、殊に哲丸が砲聲に驚いて病を發するやうな虚弱な身體なら、到底余が後を嗣いで國恩を報いることなどは望めない。さやうなものなれば今死するとも、余にとつては苦痛を感ぜぬぞ』

清綱はたゞ感涙に咽ぶばかりだつた。

ターレスの熱心

希臘哲學の始祖と云はれたターレスは殊に天文學に精通してゐた。或る夜、星を眺めながら家に歸る途中、足を退ける拍子に、後の溝へ落ち込んで、ズブ濡れになつて歸つて來た。之を見た召使ひの老婆は、



『先生は天のことには明るいが、脚下のことには暗い』

と云つて笑つたといふ話があるが、この老婆の言葉も學ぶべきところがある。

宇宙の句に、

行燈につまづく人や今日の月

とあるのも、此の意に外ならない。

健氣な覺悟

今、三菱合資會社の總理事として、大三菱に采配を振つてゐる木村久壽彌太氏が大學を出た時、もう官界には口がない。仕方なく先輩岩崎彌之助氏に身の振り方を相談に行くと、岩崎さん、



木村久壽彌太氏

『一體、君はどうするつもりか？』

『イヤ、實の所、未だ何にも定まつて居りません、迷つてゐるのです』

『さう……それなら三菱へ入つて見たらどうだ』

と云はれたので、つひに三菱入社と決心したが、その時に曰く、

『岩崎さん、貴下が私のやうなものでも使つて見て下さると云ふ御考ならば、私にも考があります』

『考？』

『ハイ、十年間、貴下に私の身體をお預けします。いかやうにでもお使ひ下さい。そして十年間使つて見て、責任の地位にた〻せられないやうな、役に立たない人間だつたら、御遠慮なくおやめになつて下さい。イヤ若しさうだつたらその時は私の方からやめるかも知れません。兎に角、この十年間、貴下の御自由に私の身をお預けしますから』

これが二十六歳の時、それから本社に五年、長崎支店に二年たつと、つひに長崎支店長と云ふ責任ある地位に抜擢された。

十年間、身を預けると云ふ覺悟――これは、今日の青年が、よく〳〵がん味すべき一言である。

人格の力

近江の大溝と云ふ處に罪人があつて入牢した。しかし、さして大罪と云ふのでもなかつたので、近所の者が憐れがつて、中江藤樹先生の宅へ行つて其譯を話し、『何卒免さる〻樣お言葉を加へられたし』と一同で哀訴した。藤樹は『ではともかくも役人に話して見よう』と云つて其晩衣服を改めて役人の邸へ訪づれた。

そして夜更けるまで四方山の話をしたが、肝腎の罪人の事は一言も云はずに戻つて仕舞つた。と、あくる日役人は彼の罪人を放して仕舞つた。下役共は不審がつてその理由を問ふと、『藤樹先生の扱ひある上は仔細はない』と答へた。



『でも昨夕のお話には一向にそんな話はございませなんだ樣に思ひますが』下役は重ねてさう不審した。役人は、『成る程、その通りだ。しかし、先生が夜になつて密に來られて、しめやかにお話しなされたので、何となくその事の樣に思はれた』と答へたと云ふ。至誠人を動かすとはこの事を云ふのであらう。

重荷を下した樣に全身が輕くなり、絕望とされた病人も希望へ、間もなく全快の喜びを迎へる事が出來ます。健康者が本機を使用すれば愈よ精力絕倫の人となります。

さて上述の如き絕大の偉効を有する本機の使用法は極めて簡單で機械に附屬せる使用說明書を御覽になれば、どなたにも容易に理解されて使用する事が出來ます。從來病人の絕えなかつた家で本機一臺を備へ爲めに全然醫藥と絕緣したものも數知れぬ程澤山にあります。又單に自らの家族を治するに止まらず廣く世の哀れな病者救治の目的をもつ人の爲に同所では講習會を開催し希望者は考查の上隨時入會を許可して居ります。尙東京市麴町區三番町七三野一色電氣研究所へ申込めば何誰にも四六判一六四頁の詳細なる說明書を贈呈します。

◇本機の卓效を物語る此事實

名士の全快せし方數百名中今其數名の方を列擧すれば左の如し。

前朝鮮總督海軍大將　齋藤子爵曰く　二回の治療で每晩放尿に起て居たのがお蔭で起きないで濟む事になりました、又目もはつきりした樣で實に氣持が良いです、朝鮮に歸つたら暫く續けて是非治療致しませう。

安田銀行頭取　安田善次郎氏曰く　御蔭で大そう能くなりました。先日宮口氏に勸めるつもりで同氏宅へ行つた所が、さすが日本一の電氣學者だけあつて、反つて此器械の偉大な效果のある所以を、きかされた次第です。

宮口竹雄氏は東京電力株式會社の重役で我國否東洋電氣界の第一人者である

野一色氏發明

「放射蒸氣電氣治療機」の特許權

一、特許第七二七八〇號　電氣治療機特殊電流發生裝置
二、同　第七二七一三號　治療用附屬電極
三、同公告決定第二九六〇號　電氣治療機械裝置
四、同　第五二二一號　治療用附屬電極
五、登錄實用新案第八六六九二號　治療用蒸熱電極
六、同　第八七五四一號　治療用附屬電極
七、同　第八九五九八號　治療用蒸熱電極
八、同　第八九六〇七號　同
九、同　第八九六一〇號　同
十、同　第九七六四三號　同
十一、同　第四四九二號　治療用浴用電極
十二、同　第四二〇七號　治療用蒸熱電極
十三、公告決定第一一二九號　治療機械積裝置
十四、英國特許　第二五四九九七號　治療用蒸熱電極
十五、同　第一一六八七號　同
十六、米國特許　第一六二五六七五號　同
十七、同　第一六三六七號　同
十八、同　第一八六一九三號　特殊電流發生裝置
十九、同　出願中　電氣治療機械裝置
二十、獨逸特許　出願中　治療用蒸熱電極
二十一、佛國特許　出願中　同

安田善次郎氏夫人曰く　每年夏になると、足をお水平にして寢られないのでふとんを置いて其上へ足を上げてゐたので、非常に苦しかつたのが、今年は御蔭で更に苦しいとも思はず、足を水平にして寢ても何等の苦痛も感じなくなりました。風呂の電氣は又何とも言へぬ氣持で御蔭で今年は風を引かずに濟ませる事と思つて喜んで居ます。

前遞信大臣　元田肇氏曰く　僅か六回の治療で、九州旅行中三日間も酒を續けて飲んだが何等の異常を呈さなかつた。斯くの如きは從來嘗つて無い事だ、又此寒がりが治療後はぽかぽか非常に暖い、實に偉大な效果がある。

海軍少將　福島熊太郎氏曰く　哀れな病者を救ひたいと思つて講習を受けましたが、近來治療の依賴者が多く、いそがしくて閉口です、然し皆結構な治療だと喜んでくれますのでいそがしい中にも誠に喜ばしい事です。

衆議院議員　三輪市太郎氏曰く　久しく左手關節の神經痛で惱んで居たが、唯一回の治療で後で帶が出來る樣になつたのは實に嬉しい、效驗神の如しである。

衆議院議員鳩山一郎氏曰く　盲腸炎やら疲勞やらで休んで居たが、三越の朝吹常吉氏の紹介で此治療を受け、僅か二回の治療で長時間演說をしても、何等の苦痛を感じなくなつた、其效驗の著しいのに驚いたから、知人に勸めて見ると、それが皆喜んで呉れるので、こんな嬉しい事はない。

獨逸大使ゾルフ氏曰く　實に結構な治療機の發明で日本の名譽です、どうか將來の御發展を祈ります。

漫畫

明るい家庭六題

田中比左良



(一)何と言つても家庭を明るくするものは細君の笑顔が一等。細君たるものはこの修養がカンジン。良人が連木を振り翳していきり立つた時でも細君が笑顔でこれを受け止めたらいかな良人も喧嘩の張合が抜ける。





(二)夫が勤め先から疲れて歸つた時なぞ、可愛い子供さへうるさくなる。併しそこが辛抱、笑顔で子供の頭を撫でたらいかなヒステリー女房でも『お歸り遊ばせ、お疲れ様』と笑顔で來る。

明るい家庭と暗い家庭

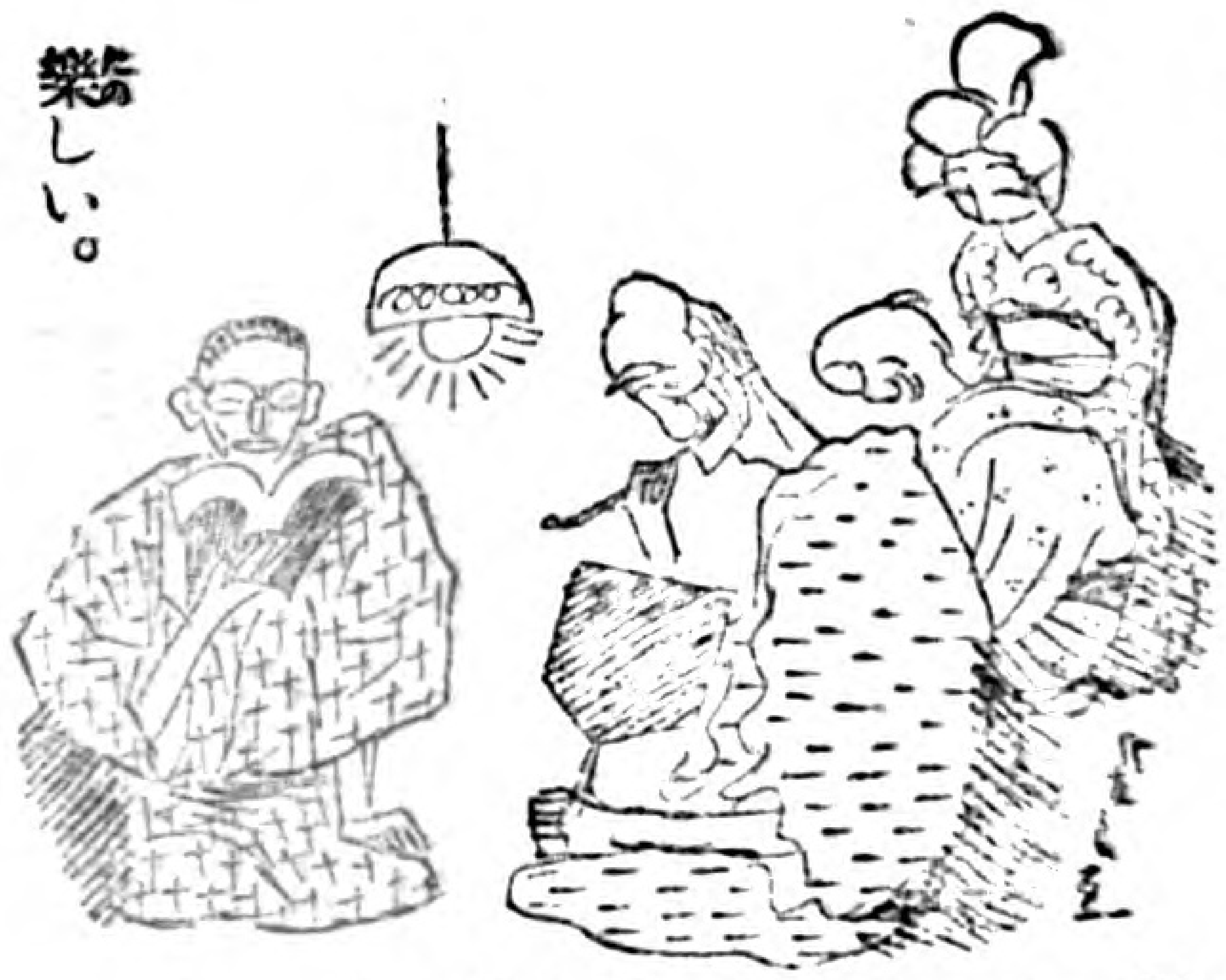
大妻高等女學校長　大妻コタカ

世の中には、御家族が皆暢々として居られるので、そこを辭し去るのが何となく惜しまれる樣なお宅もございます。又之と反對に、訪問した者が殆ど窒息する樣な息苦しさに、御門を出てからホッと甦つた樣な氣のするお宅もございます。

同じ樣に親子兄弟が集つて結ばれる一つの家庭でありながら、どうして一方にかうも明るく、又一方はかうも暗く感ぜられるのでございませう。これは財産や地位や名譽に原因するのでないことは申すまでもなく、寧ろ屢々これらは家庭を暗くする原因となります。家庭の明るさといふものは、かういふ限られた人にだけ與へられるといふ不公平なものでなく、心掛け一つで何人にでも惠まれる人間平等の恩惠なのでございます。然らば、その心掛けとはどんなものでございませうか。まづ、

第一に家族が皆揃つて健康であること

が、明るい家庭をつくる根本條件でございます。働き手である主人の病氣で困る事は云ふまでもなく、主婦が蒼ざめた顏をして絶えず藥に親しんでゐては、御主人がつい氣を外に移すことにもなります。たゞ一つこの子が丈夫でゐてくれたらと、暗い顏をして淋しく暮らす富豪もございます。健康といふものは、何もお金をかけなくとも、心に屈託がなく愉快に働いてさへをれば、自然に惠まれるもの、食ひ過ぎて死ぬ人こそあれ、飢ゑて死ぬ人は滅多にございません。と云つて、あまり粗食に過ぎて、出來のわるい



(三)嫁が姑を大事にし、息子が父に講談を讀み聴かせる家庭にはラヂオなんぞ徒らに騒騒しいばかりだ放送局のお世話にならずとも毎晩ホームは温く明く樂しい。

(四)親が子供を玩具にし子供が親を玩具にする良習を日課にする家庭は明過ぎて近所隣りが閉るほど明い。



瓢箪の様な顔をしてゐるのも感心出來ません。そこは京の着倒れよりも、大阪の食ひ倒れの方がよろしいと思ひます。

第二は經濟問題を考慮すること

が肝腎でございます。修養のお話には、とかく經濟問題が度外視され易い傾向がございますが、從來はとに角、お金が無くては一日も生きて行けない今日では、是非この問題を解決しておかぬと、決して明るい家庭をつくることは出來ません。貧ゆゑ親子心中するなどの大きい問題は別としても、帯が一本買へないとか、靴下に孔があいてゐたといふ小さな問題が原因となつて、親子兄弟が泣き叫ぶといふ様な事は敢て珍らしくございません。寧ろかうした小さな而も眞劍な紛爭の連續が懸け値のない家庭生活の實相かと思はれます。といつて、必要以上に家族の欲望を充たす様なのも、却つて女や子供の虚榮心を徒らに煽ることになり、家庭を暗くする原因となりますから、各人がつゝましい必要だけの欲望を充たすことの出來る程度の生活をするのに差支のない丈の經濟状態を維持して行きたいと存じます。

それが爲めには、家族が協力して、無駄を省き、又分にかなつた職を營むことが必要でございます。表面はお上品振つて、内面は四苦八苦の苦しまぎれに、八つ當りの暗い生活をしてゐる多くのおめかし屋よりも、手内職の一つもして、子供を小綺麗に育てゝゐるお内儀さんの方が、どのくらゐ意義ある生活か知れません。

家庭生活の中心たる主婦が、いつも明るい氣持で、行屆いた家政ぶりを發揮して下さることは、申上げるまでもない事でございますが、こゝに特に御注意したいことは、

御主人の心掛け一つで家庭が明るい

ものになるといふ事を、一つの例をあげて申上げます。二三十萬の資産があつ

五）子供の健かさと眞面目と溌剌さを象徴する大聲の讀方は聖者の祈詞以上に家庭の空氣を清淨にする。これでは夫婦喧嘩も出來ない。



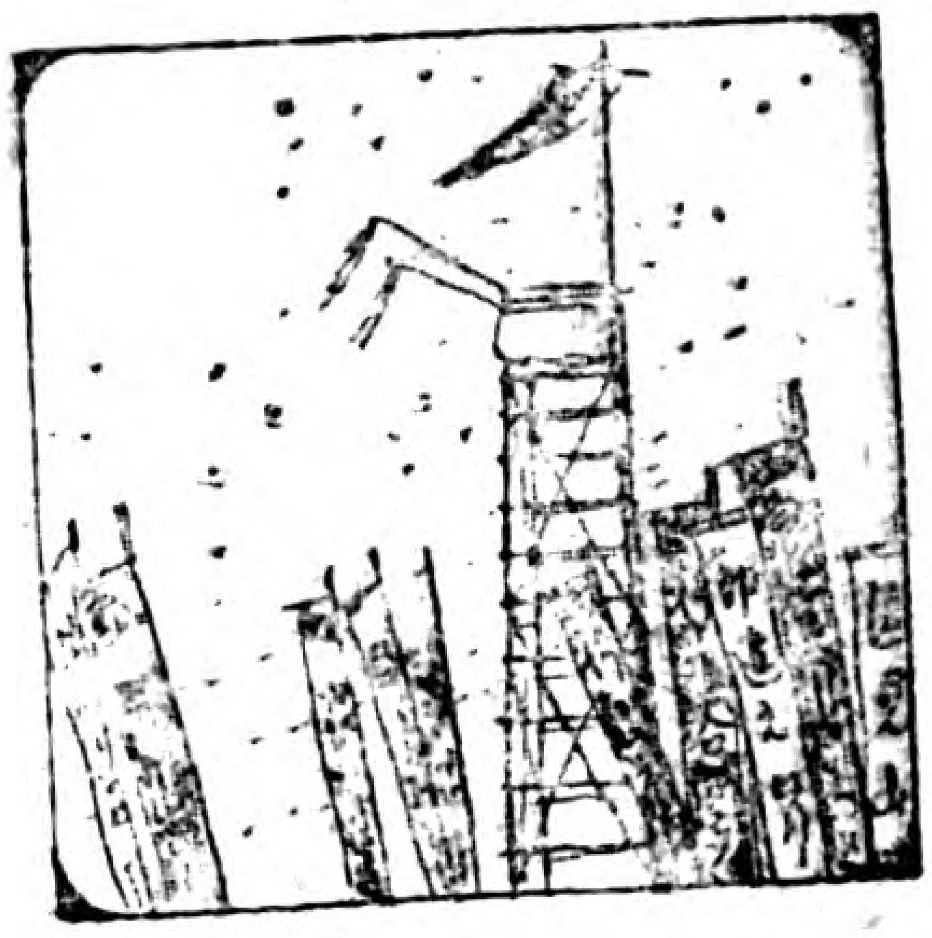
六）ナニ主義カニ主義と、いろんな主義の流行する世の中だが、家庭幸福中心主義とでもいふ主義を立て個人主義を排斥したら家族の顔が等分に明るくなる。



て、母親に姉二人の家族で、養子にはかねての望みで教育のある人をと、さる頭のいゝ小學教師を迎へ、之に高等學府まで仕込み、今ではこの御主人は立派な地位に羽振りを利かせてをられる御家庭がございます。御家庭の方は、宿願成就、さぞかし御滿足の事と思ひきや、御主人は自分の專攻する教育學の力が進むにつれ、家族の者の低級さに愛想がつき、子供の教育には事毎に衝突して、新教育學の立場から、絶えず難しい理窟をいはれ、泣かせてはいけない、間食はならぬ、時間などは教育的に整理をせよ、教育的機會を逸するなと、それは〳〵難題を申されるに、子供は勿論周圍の者迄が寛ぐ暇もないといふ有樣。それで自然に鬼の居ぬ間の洗濯となり、子供達まで表裏のある生活を眞似るやうにもなりました。世間では道理のよく解る御主人でも、家庭のお父樣としては嚴格に過ぎた恐ろしい存在となつて、家庭はいつか暗いものとなり、妹さんなど『私は學問のある人よりも、伽さん（人工）のやうな家庭を打寛いだものにする人の方が良人としてどの位いゝか知れません』とこぼしてをられる有樣でございます。

從來、家庭の事といへば、すぐ婦人ばかりを責めますが、それも必要には違ひありませんけれども、私は又御主人の氣質、御心掛け一つで、家庭が明るくも暗くもなることが、決して少くない事を思うて、世の主婦方を代表いたし、こゝに御主人方に少しく御注意を申上げる次第でございます。


大試合大勝負決死の大場面
纖美の體、溌溂の性、必死の勢をもつて、輸贏を瞬間に爭はんとするは、男兒の快心事である。進むや正々、撃つや堂々、風雨雷霆、交々發し、並び至り、龍蛇虎豹、相鬪ひ、相搏つ。惡し、その態、競技の如何にかゝはらず、見るものをして、血を湧かしめ、聽くものをして、心を躍らしめる。命題下にをさむるところの篇々、みなこれ意氣衝天の活文字、丁貢の裏、一讀、宛ら競技場に在らしむるは勿論、三伏の炎天、惰心を去り、睡氣を斥け、鐵腕一揮、疾呼して、風雲を叱咤せんとするの情熱、自から心胸をついて迫り來るものあらんか。



名力士義侠の引分

角道の眞髓を發揮した名勝負

鈴木彦次郎

一

強いばかりが能ぢやない。血もあり涙もあつてこそ眞の武士。相撲とても同じこと、その武士道的精神を失つては、いくら名勝しても、名力士とは云ひ難い。



朝潮



國見山

その好適例が、明治四十三年春場所の國見山對朝潮の取組、これぞ實に我が國技の眞髓を發揮した名勝負として後世に傳ふべきものであつた。

此の場所は、梅、常陸の兩横綱を始め東は西ノ海、駒ケ嶽、朝潮。西は、太刀山、國見山、伊勢濱の剛勇無双の大力士。一人の休場者もなく、いづれも元氣一杯で登場。東西の力量正に伯仲といふので、滿都好角家の熱はいやが上にも高まり、さしもの廣大な國技館も連日滿員といふ有樣。外は雪さへ降るといふ寒さに、此所は汗びつしよりといふ好景氣であつた。

二

此の大人氣のうちに、中日もすぎて、今日は六日目の中入後、番數追々取進んで結び相撲の一つ前。

ワアツ！ ワアーツ！ とどよめくなかを、呼出し勘太の得意の美聲。

『東、朝潮。西、國見山』

その呼び聲に、兩力士、すつくと土俵に登れば、滿場割れるやうな大喝采。

『クニミヤマ』『アサシオー』ひいき、ひいきが熱狂して聲援する聲々で、耳もつぶれさうな大人氣。

それもその筈。東の朝潮太郎は、新進氣鋭の若武者、當場所、新たに關脇に昇

り前名朝嵐を改め、師匠の名を繼いだ東方切つての人氣者。相手は、老巧熟達の大關國見山悦吉、新進をこなすに妙を得た名力士。

二人とも昨日までは勝抜しの元氣同士。殊に初顔合せといふので、場所前から噂高かつた當場所中での好取組といふのだから、見物の熱狂するのも無理がない。

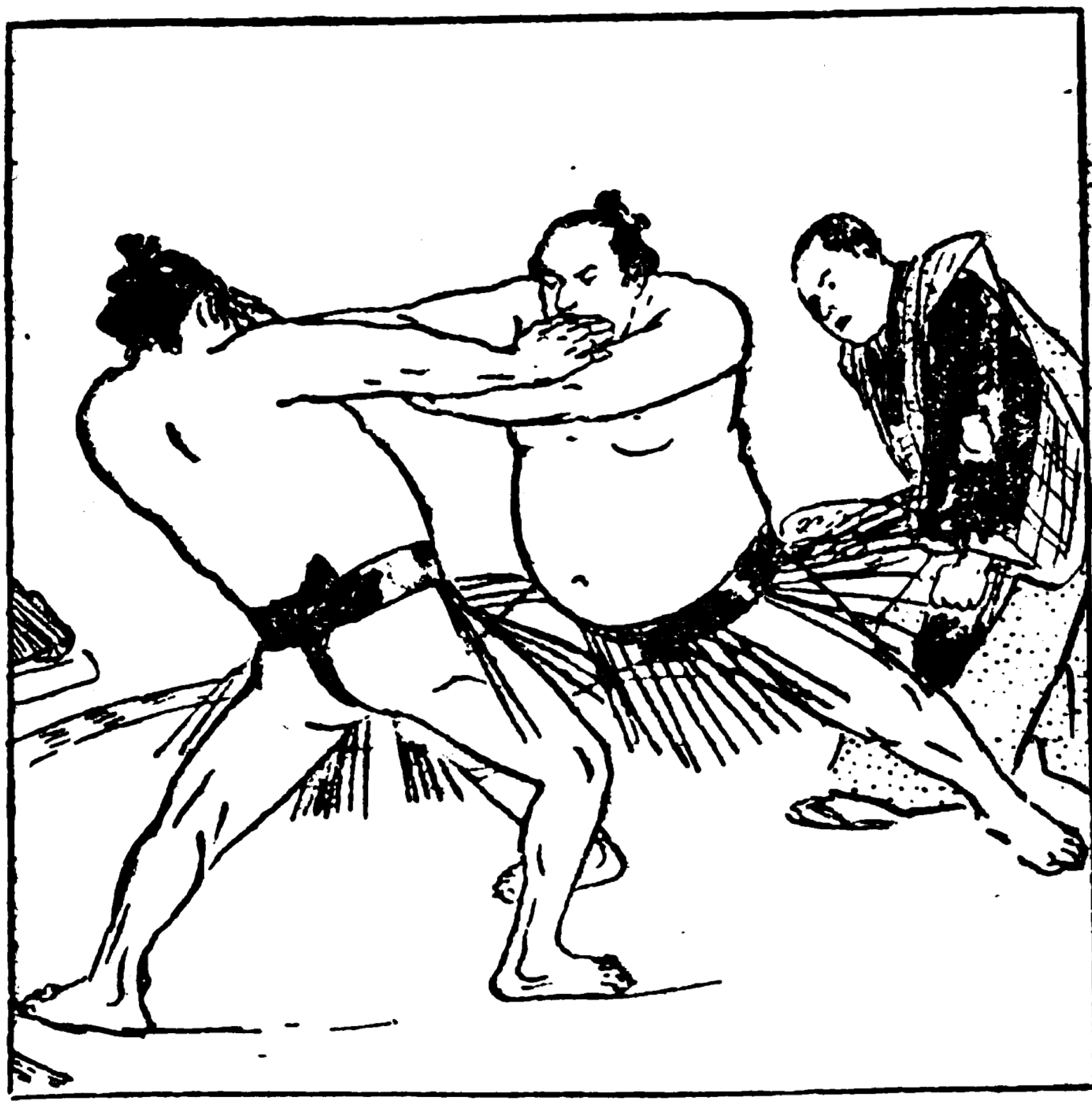
やがて、兩力士は、行司の軍配の下に入念に仕切り始めた。

國見は、いかにも大關らしい大兵肥滿、色白でにこやかな顔立。ゆつたり仕切つてゐる樣子は、まるで錦繪の相撲だが、右の膝關節を固く卷いた繃帶が痛々しく目立つ。

これぞ、前場所、砥瀨に引落されて以來、癖になつて外れる關節を豫防したものである。

一方、朝潮は、色逞黒く、きりりしまつた男らしい眉宇に精悍の氣をみなぎらし、筋骨隆々たる五尺八寸の長軀をかがめて、美事大關を投げ倒さうと隙を狙つて仕切つてゐる。

どちらにとつても大事な相撲。だから、なかなか、立てるものぢやない。



もう、滿場の見物は、熱狂の極度に達してゐる。あつちの隅で一組。こつちの二階で一組、ひいき、ひいきの喧嘩に花が咲き出した。

化粧立數回、およそ、十五分もすぎたと思ふ頃、いかなる隙を見てか、氣短の朝潮、一聲高く『ヤッ』とをめいて突掛ける。

『オウ』と受けて立上つた國見山。此の時早く、行司誠道の軍配は『ヤッ』とひかれる。

水の如く靜寂だつた三十六俵裡は、忽ち龍虎爭ふ大血戰場に化した。

『ワッワッワッワアーッ』

見物は、たゞもう、醉つたやう、手に汗にぎつて見つめてゐる。

3

もとより、突張りは、國見の得意。朝潮、いかに元氣と云へど、次第に突き負けて、東土俵際までつまつたが、そこは若武者、追ひこむ國見の突張りを、巧みに體をかはしてはたきこむ。不意を食つて、國見、トトトト……と前に泳ぎ、危く土俵の砂をつかまうとしたが、どつこい、さすがは大關、辛くも立直つて、またも突返さうとする隙を、それならからだと云はんばかり、朝潮は、得意の右をズブリ差して褌をひいた。

四ツに組むと、朝潮には、投げがあるだけ六分の利があり、國見は、膝の故障のため、分が悪い。

『アサシオ！　アサシオ！』

東力ひいきの聲は、どつと湧き立つ。

國見は、大事を取つて、守勢に構へた。だが、新鋭の關脇は、そんなことに頓着ない。得意の投を見せながら、ぢりぢり、ぢりぢり寄つてゆく。

國見は、太鼓腹に波うたせながら、必死となつてこらへ、隙を見て吊らうとする。朝潮は、その敵の力を利用して、投げにゆきたいのだ。だから、どつちも輕率には動けない。

ここが四ツ相撲の妙諦。國技の眞の味である。大關吊るか。關脇投げるか。かうなつては、見物は、もう怒鳴れない。ただ、息をこらして、兩力士の一擧一動を見はるだけである。

そのうち、元氣の朝潮、いかなる隙を見てか、寄ると見せ、咄嗟に猛烈な上手投をうつた。國見の大兵は、ゆらりよろめく。

『あつ！』

だが、老巧の名將、さすがに、右足をうんとふんばり、危く残したと思ふ瞬間、どうしたわけか、國見の力はぬけて、よろよろと敵の肩先に倒れかかつた。ここが、肝心と、行司は、懸聲勇しく飛び廻つてゐる。

『アサシオ！　何故、差手をぬかぬ！』

ひいきの一人は、我慢し切れず、怒鳴つた。

さうだ。もう國見は、倒れかかつてゐるのだ。だから、朝潮が烏渡身をひけば、勝負は決する。

それなのに――朝潮は、ぢつと、自分にうなだれかかつてゐる敵の身體を支へてゐるのだ。行司も軍配を納めて側に寄つてくる。國見の顔は眞青だ。四本柱は總立ちになる。

まして、見物は、滿場悉く立上つて、この不思議な取口を、ただ、わめきながら、見つめてゐる。

『おい、行司、行司、引分けてくれ、國見關が、關節を外づしたんだ。』

朝潮は、大聲で行司に注意を與へながら、敵方の控力士と共に、國見を抱きかかへ、西溜りに運んでいつた。

國見は、倒れながら、悲痛な聲を上げた。

『いいや、それアいかん。俺は膝をぬかなくとも、朝潮關に投げられてるんだ。勝名乗りは朝潮關にあげてくれ』

行司は、まごまごして四本柱に相談してゐる。検査役と雖も、こんな勝負は始

めてだ。

負けまい、としてこそ物言ひがつくのだが、勝つたのぢやないといつて物言ひがついたのは、全く相撲道始まつて以來だ。

行司は、ともかくも、朝潮の投げが利いたと認め、暫くためらつた後、朝潮に軍配をあげかかつた

「冗談ぢやない。相手が怪我で倒れかかつたのに、勝星を貰ふなんて、そんなケチな俺ぢやないわい、俺は天下の力士だぞ。』

さう云ひすて、淡白な朝潮は、後もふりむかず、スタスタ控部屋に入つていつた。

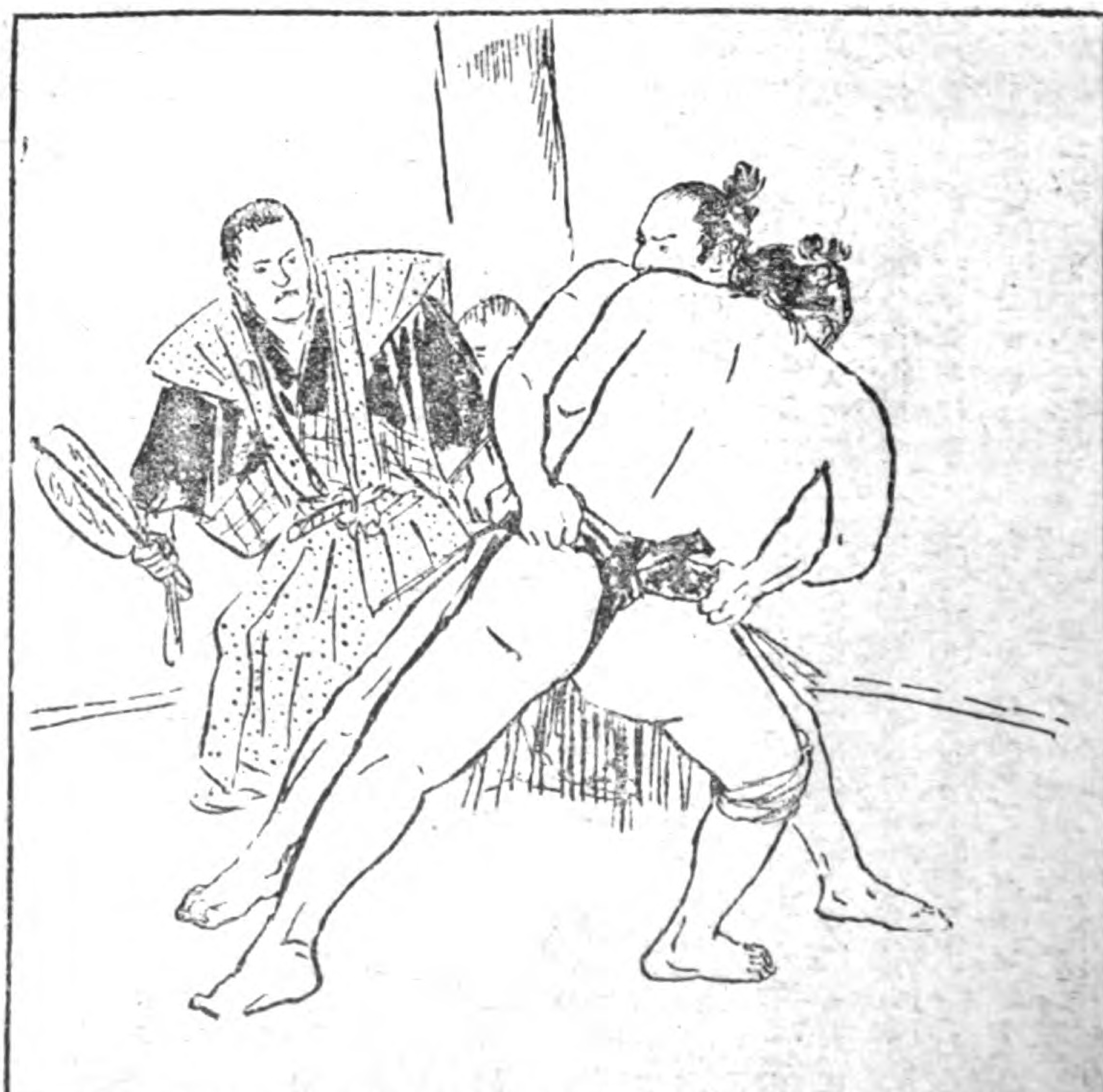
『朝潮關、馬鹿云ふな、俺が負けたんだ』

國見も、弟子にかつがれながら、怒鳴つた。

この兩力士の態度に感激せぬ者があらうや。滿場の觀客、總立ちとなり、東西のひいき口をそろへて、朝潮を賞め、國見を讃へる聲々は、眞に萬雷の如く、大[illegible]もゆるがんばかりであつた。

全く兩力士の如きは、眞に相撲道の模範ばかりでなく、一般社會に於いても好個の美談といふべきであらう。

當年の朝潮太郎こそは、現在、取締として、日本大相撲協會を双肩に背負つて立つてる年寄高砂浦五郎その人である。





玉川プールの大競泳

國際的大選手高石の神技

寺田瑛

秋晴れの空は美しい。人波はあとからあとからと、玉川電車で玉川プールへ運ばれる。何といふ人氣だ。素晴らしいといふだけでは、盡されぬ人の群！日英米の諸豪をあつめて、汎太平洋水上競技大會が開かれるといふ昭和二年十月一日のことである。



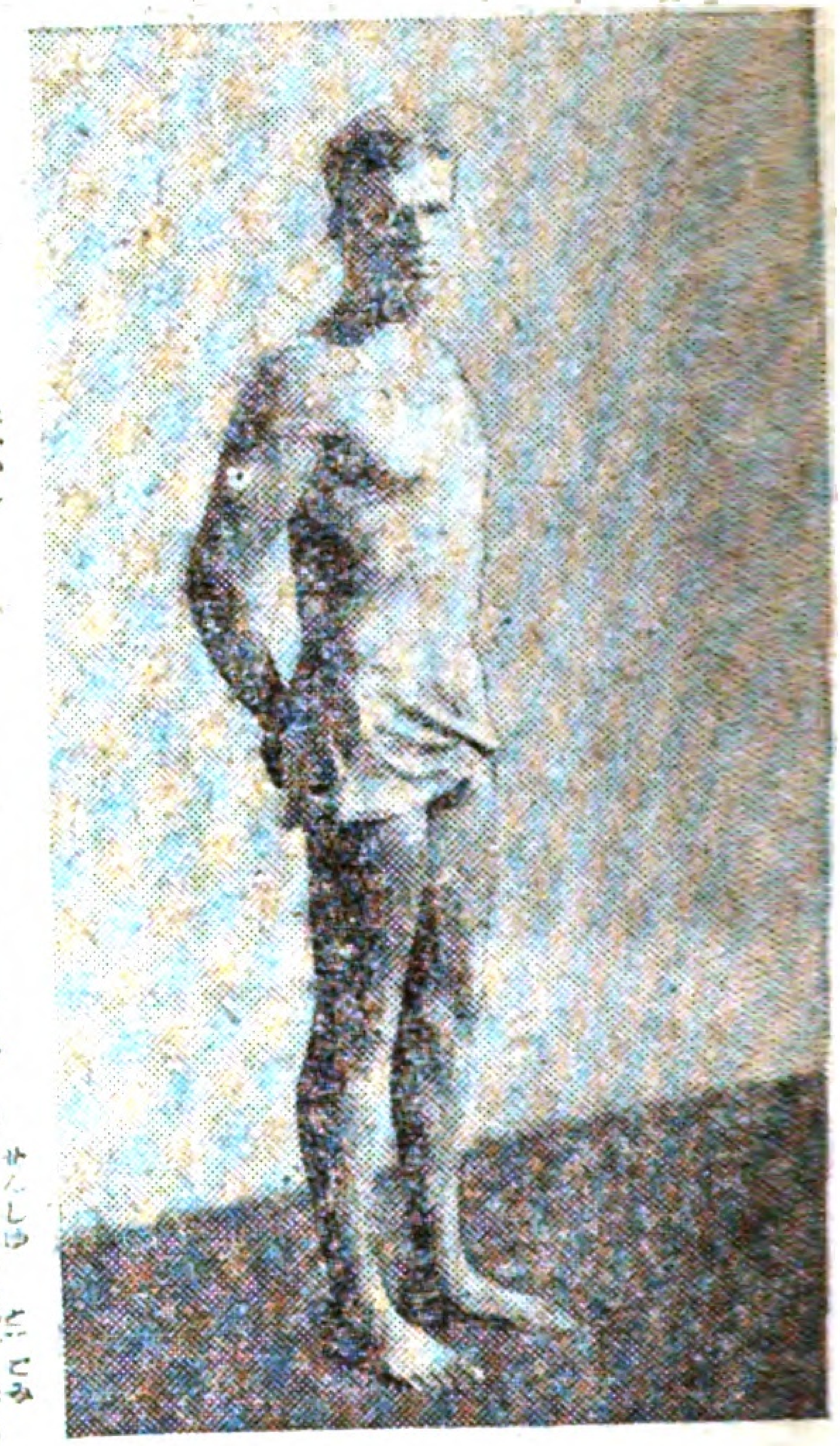
高石勝男氏

八千人を容れるといふ大スタンドは、溢れるばかりの觀衆に滿され、遙な貴賓席には賀陽宮殿下を初め、田中首相、中橋商相、財部海軍大將などいふ名士が居並び、今や競技は白熱の絶頂に達しようとしてゐる。といふのは、この日最初の百米突自由型では、高石がロウファーを破つて日章旗を揚げ、次の二百米突平泳でも鶴田がカシバムに勝つたと思へば、千五百米突自由型では米國のCクラブがわが新井を拔き放ち、二百米突背泳でも、ロウファーが入江を破つて、日米互に二勝二敗のあとを受けて、最後の四百米突自由型の競泳が始まらうとする時だからである。

期待されてゐたわが佐田も、この大會では元氣がないし、これに對してCクラブは、前年の日米大會の時とは別人の樣な進境を示し、その夏の全米選手權大會では、ワイズミユラーに次ぐの好成績を現はしてゐるし、世界の中距離選手として聞えたグランシーは、たゞこの種目一つを狙つて準備してゐる。高石に至つては、早くも前年ワイズミユラーの保持するオリンピツク記錄を破つてゐるのであるから、Cクラブ、グランシー、高石の巴狀戰こそは、當然世界的の壯觀でなければならない。アナウンサーの聲は高ら

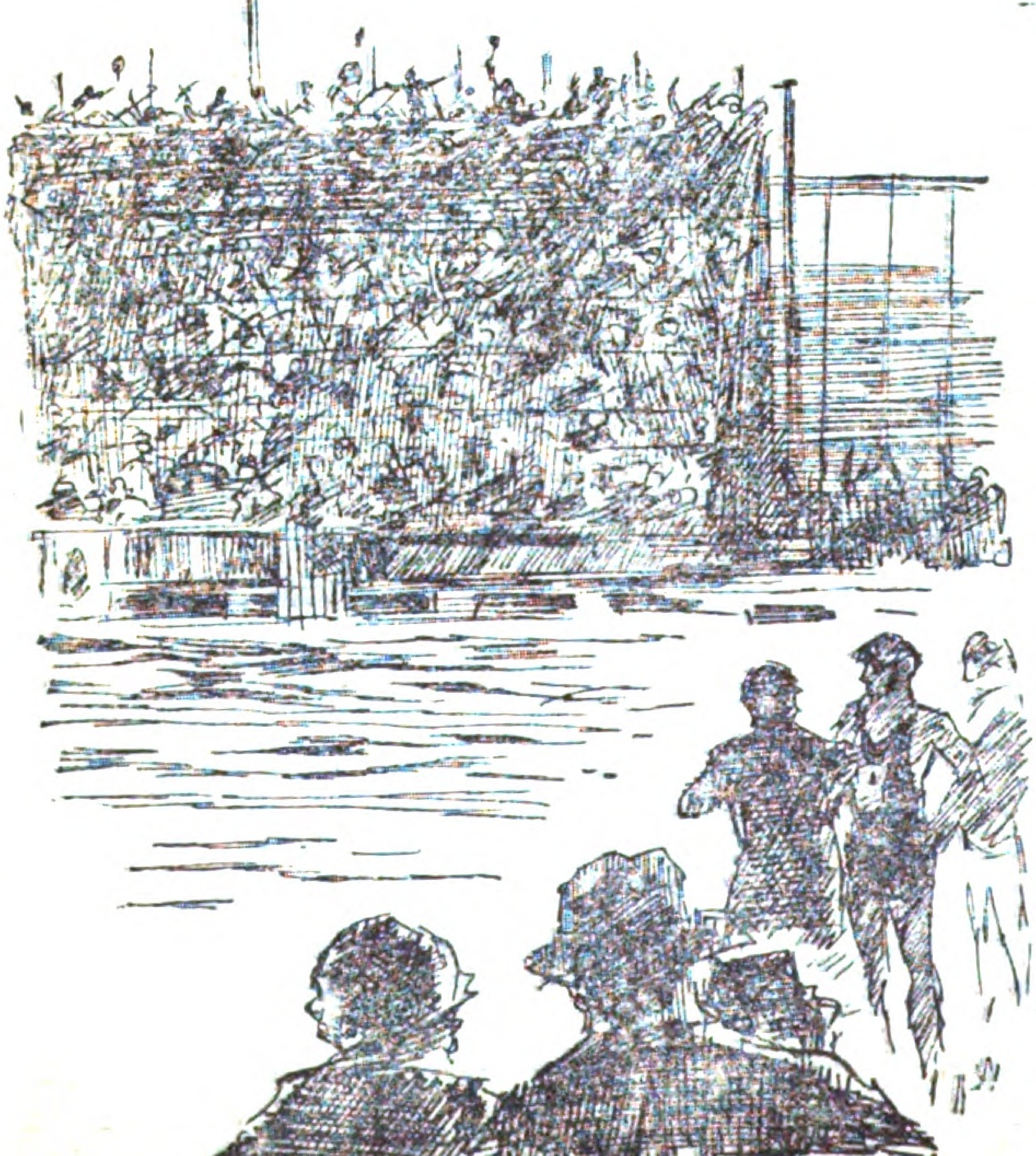
かに、二コース・高石、三コース・グランシー、四コース・Cクラブ、五コース竹林、六コース・Eクラブ、七コース山本、八コース・グリーアと報告した。偶然高石、グランシー、Cクラブの三豪が並んだので、スタンドからは嵐の様な拍手が起つた。『高石！ 高石！ 頑張れ！』の聲はしばらく續いて、それが拍手との交響樂は、何といふ壯嚴な偉大な場面であつたことか。貴賓席なる賀陽宮殿下も、いと御興深げな拍手を送り給ふといふ情景！

野村スターターはピストルを高く差上げて『ピー』と警笛を吹いた。滿場深夜のやうな沈默に落ちて、咳一つするものもない緊張さ。『用意！』とスターターがいつた時には、最う七人*



Cクラブ氏

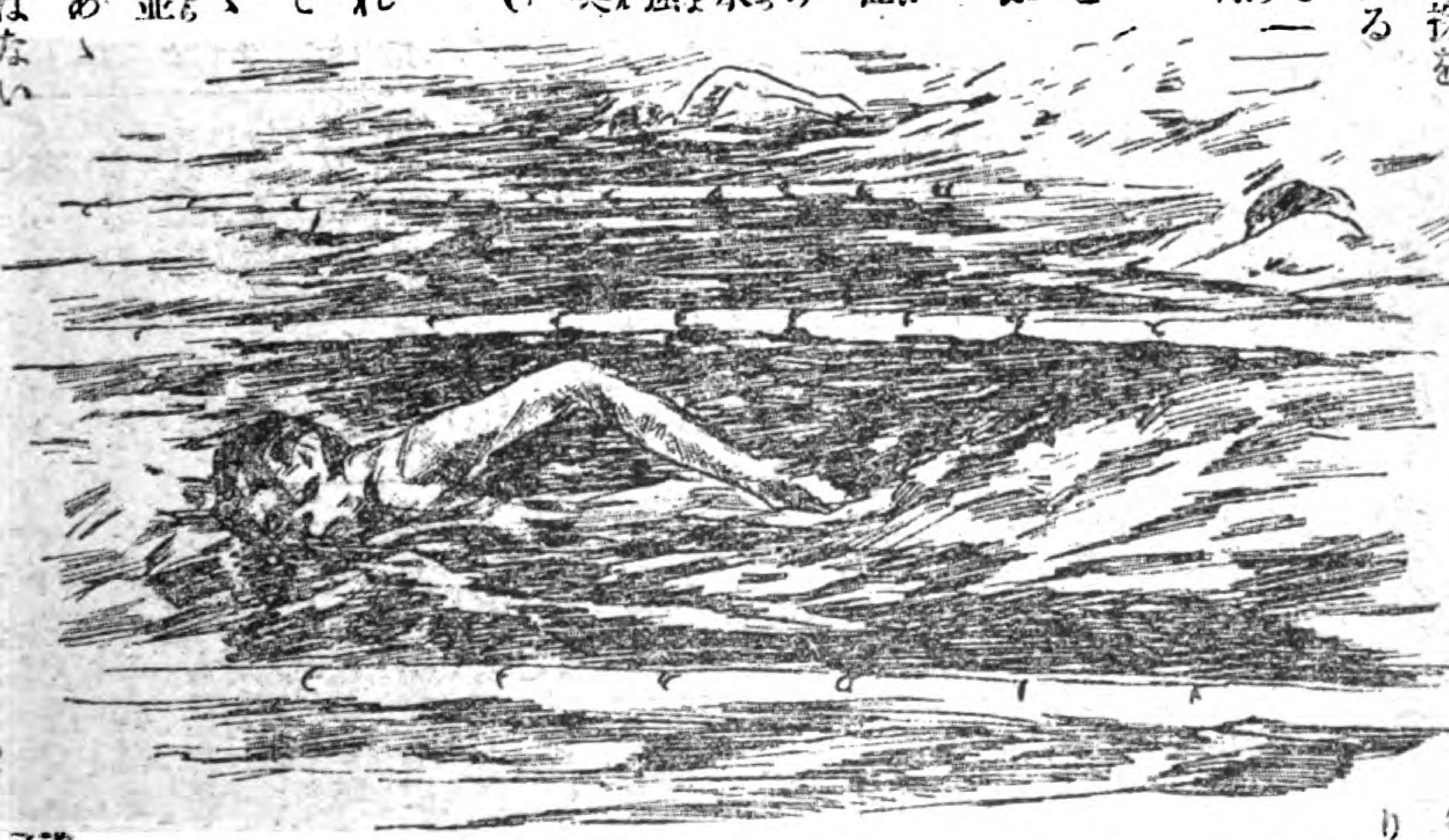
*の選手は飛込の姿勢に移つて、中空に響くドンの合圖と共に、柵を倒しでもしたやうに、一分の隙もなく揃つて水に飛込んだ。白い泡が水面に飛沫となつて散つた時、そしてそれが二十米突・三十米突と進んだ時には、もう高石とグランシーとCクラブの三人は、一線をなして先頭に並び、水を掻く手の拍き、波を切る頭の律動、毛程の隙もなく進んで行く。その間にも絶えず『高石！ 高石！』と叫ぶ數千の觀衆は、この接戰に魅せられたやうに、いづれも總立ちになり、足を踏み鳴らし手で



を躍らせて、熱狂の亂舞を繰り返しながら、一闘に水面に散る雪の樣な飛沫と、その間に點在進出する三選手の形勢に醉はされてゐたが、見ればグランシーは幾分遲れて、高石、Cクラブとが一米突を先んじ、Y字狀の陣形になつたと思つたのも束の間、五十米突の引ツ返しでは、グランシーの巧みな折返し技術でまた三者は並び、七十米突から九十米突となり、百米突でCクラブが高石を一呎拔いたとき、グランシーは更に高石よりも一米突遲れてゐたが、またもこゝの折返しで、グランシーは高石、Cクラブに迫り、依然一進一退の形勢で、わづかに紙一枚の差のまゝで、Cクラブ、高石、グランシーの順となり、勝敗はまだなかなか逆睹することが出來ないと見てゐるうちに、果然、百五十米突の引ツ返しで高石はCクラブと並び、二百米突では、再びCクラブに拔返されたが、この時既に、グランシーは八米突も後に殘されて、先頭爭ひの興味はなくなつたけれど、それだけ高石とCクラブの接戰は一層緊張味を呈し、滿場はこゝでも『高石！高石！』と聲援を繰返し、帽子を振るもの、手を叩くもの、まるで嵐の樣な騒ぎ。

その幾千の瞳を浴びて、水に狂ふ兩者は人か魚か。人にしては水を征することの巧みさ、魚にしては水を切ることの力强さ。二百五十米突で、高石が再びCクラブのために、一呎だけ拔かれたが、三百米突でまた取返し、こゝに完全に二人は並んでしまつた。あゝ息づまる熱戰ではないか。貴賓席の賀陽宮殿下まで、椅子からお立上りになつて、テーブルに兩手をお突きになつたまゝ、お乘り出し氣味に兩者の爭覇を凝視遊ばされてゐるではないか。

あゝ、最後の百米突が來た。今までCクラブの力を測るやうに制するやうに、一張一弛の形勢を繰返してゐた高石は、俄然兩の腕もくだけよとばかり、波を切る頭の律動も速く、强引にスピードを出し始めた。『高石！頑張れ！』――死に物狂ひである。波は散る。水は光る。龍と龍の爭ひとはいはずに、何と形容したら好いのか。この鎬を削る場面は約一分、七八十米突の長き間も續けられたが、高石は元來が



短距離選手、死力を盡してスピードで爭へば、Cクラブに劣ることはない。ただ、如何に短距離に强くとも、敵は世界に名高き中距離選手、始めにこれを拔けば拔き返される。されば、最初を偵察戰のつもりで、追隨し、最後の五十米突で一氣に勝敗を決せんとする策戰に出れば、それは十中の六分まで高石のものである。泳いだ。泳いだ。高石は荒れ狂ふ龍の樣に泳ぎ拔いた。Cクラブもまた、獨特の手の掻き足の運びで、拔かせじ拔かんと競ひ立つた。しかし、それにしては、決勝線が餘りに近かつた。二人は殆ど同着とも見える程の接戰で、ただ掌の長さだけの少差で、高石はCクラブに勝つたのである。あゝ、それは、何といふ間髮を入れざる最後までの奮鬪であつたか。

スタンドの一角から起る劉喨たる君が代の奏樂につれて、スル〳〵と、檣頭高く揭げられゆく日章旗の色の鮮やかさよ。日本は勝つたのである。世界の水泳王國とも呼ばれる米國に、その人ありと知られたるCクラブを美事に破つて、わが高石選手は優勝したのであつた。五分六秒といふそのレコードは、自身の有するものには及ばずとも、世界最强のワイズミユラーが作れるオリンピック・レコードをさへ一蹴してゐるとは！

火の出る熱戰！　息づまる大ゲーム！―それが日本で行はれたる國際的大競技會に於て、現實に我等の眼前に展開され、目前にそれに接し得た興奮は、今といへども、猶腦裡を離れないといふのは、たゞ私一人だけであらうか。



三千呎の空中戰

リヒトホーフヱン少尉とボール大尉

風間清

一

ロータ・リヒトホーフヱン少尉は、所屬隊にはぐれて只一機、六千呎の上空を味方の陣地に引きあげようとしてゐる。操縱してゐるのは、眞赤に塗られた輕快な驅逐機。世界大戰中、獨逸空軍には、『赤隊』と稱せられた勇猛果敢な飛行中隊があつたが、彼も亦光榮ある赤隊

の一人だ。丁度日の暮だ。蜿々として眼下にひろがつてゐる西部戰線の塹壕を見下し乍ら、翼に落日の光を一ぱいに浴びて、悠々と飛翔をつゞけてゐる。時も時、突然、前方から驀進してくる機影。

『はてな』少尉は、小首をかしげた。

敵？　味方？

機は、刻々に近づく。見ると、特徴のある三葉飛行機、――英機だ。

『あッ、來たな、ボール大尉の愛用機だな』

素早くさう見てとつた。と、渾身の血が一時に湧き立つた。

『しめたぞ、一か八か今日こそ勝負をきめてやる』

敵に向つて機首を立直し、ぐいと舵を下げた。

ボール大尉は、英國飛行將校中の豪の者、敵ながらも、天晴れな空の雄者、少尉は今迄數回、空中に於て出會つて居るが、向ふもさるもの、機の操縦が巧みな上、且射撃の名手なので、容易に勝負をきめることは出來なかつた。

（今度こそは？）

一氣に翔つて、射落さうと、ボール機をさがして居たが、つひぞ出會はす機會がなかつた。

（今、こゝで、偶然ぶつかつたのは、正に天の許だ、やツつけろ）

ぐん／＼と降下して、ボール機と同じ三千呎の高さまで降りて來ると、雙二無二、突進した。此方は赤塗の單座驅逐機、敵は鋼色にぬつた三葉飛行機。

血の色に彩られた夕燒雲の中に、二點の黒影、追ひつ追はれつ、壯快な必死な空中戰鬪は開かれようとして、まつしぐらに迫りよる。

だが、また兩機とも射程圏内に入らぬと見えて、同じ速力をもつて飛行をつゞけてゐる。

ボール大尉も、赤機の豪膽な飛行振を認めて、リヒトホーフエン少尉か、それとも、兄のマンフレツド・リヒトホーフエン大尉と推定したらしい。

今は早や逃れようとして、逃れることの出來ぬ、せつぱ詰つた空中の一騎討。

まして、其の度胸と熟練とは、英國空軍の第一人者といはるゝボール大尉だ。

『好敵手！　御參なれ！』

これも亦、昂高く、突嗟の觀察を取る。

驅逐機が、敵機を射落すには、其の背後に廻るのが、一番望ましい。だから、もし敵機の背後に於て、完全な位置にいけば、已にこれを射落したと同然。

『いざ、來い』

勇氣凛々たる二勇士。

數十碼の距離に近づいたなと思ふと、忽如、英機から發砲した。だが、ゴーン、ゴーンと恐しい聲をあげて唸るプロペラの響に遮ぎられて、砲聲は少しも聞えない、――パッと白い烟がたつので、

（やつたな）と、氣づく丈のものだ。

獨機も、英機も、リヒトホーフエンも、ボールもおの／＼相手の後尾に出ようとして、旋回飛行を續けて居るが、いづれ劣らぬ空の猛者なので、お互に成功しない。そして、すれ違ひさまに、隙をねらつては、彈丸の應酬が行はれてゐる。

丁度天翔ける大鷲が、蹴爪をふりたて丶、猛闘をつゞけてゐる、それに均しい。両機は、秘術の限りを盡して、こゝを先途と闘つてゐる。

赤い飛行機が勝つか、灰白の飛行機が勝つか。落陽は、巨人が死の床につくが如く、今、西に沒しようとして、一天赫奕、パッと最後の尖を投げてゐる。

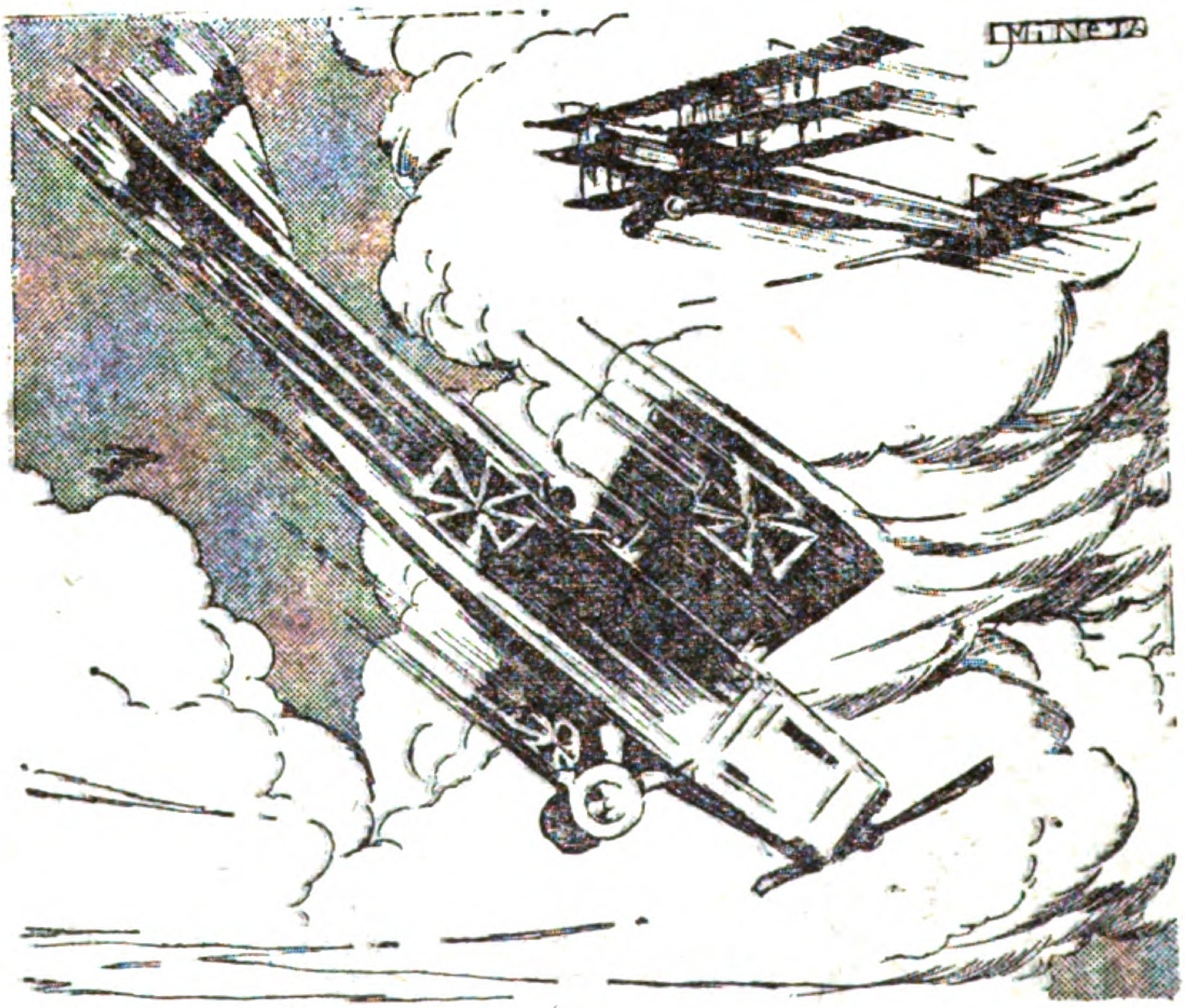
二

旋回又旋回！

両機ともの打ちまはつて闘つて居る中に、リヒトホーフエン少尉の機が、いくらか下になつたので、彼は、ヘッとした。

『こりや、いかんぞ』

突嗟、上舵になる。と、くるりと蜻蛉返りをした様子に、發動機に故障を起したのだ。



操縦不能、全身不随だ。飛び離れて冒険家の少尉も、機體が動かなくなつては、もうおしまひだ。

あはや、急轉直下、機體もろとも、こつぱい微塵にならうとした瞬間、何等の幸運ぞや、どうかした調子で、又發動機のはたらきが元へかへつた。

『しめた』

勇氣百倍の少尉、健翼を羽搏きさせるやうにして、猛然と敵機に突かゝる。

折しも、彼の眼にうつッたのは、遥か彼方に浮び出た、もう一臺の飛行機。

（敵だ、敵だ、大尉の助力に來た敵だ）

さう思つた。いかに、彼が豪勇無双の飛行家とは云へ、此の處、互角の戰、そこへ敵に助力するものが現れたら、彼としても、勝味はなくなる。

（射落すなら、今の中、たつた、今の中！）

のるか、そるか、死を決した少尉は、敵機と同じ高さまで上昇すると、猛射をあびせかけた。敵も亦、少尉の操縦する赤機に向つて、死物狂ひの應戰をした。

刹那！　赤機はくるりと宙返り、そのまゝくる〳〵と木の葉の落つる様に三千呎の高空から地上を目懸けて墜落した。

墜死！

憂ふる勿れ、これは、少尉が敵を欺く手だ。計畫的の宙返りだ。忽ち、機體を水平にして、隙に乘じて、執念く敵機の背後を覘はうとした。

勝利か？　死か？　又一義！

此時だ、少尉の機が、ほんとうに宙返りをしたのは。

『やられた』

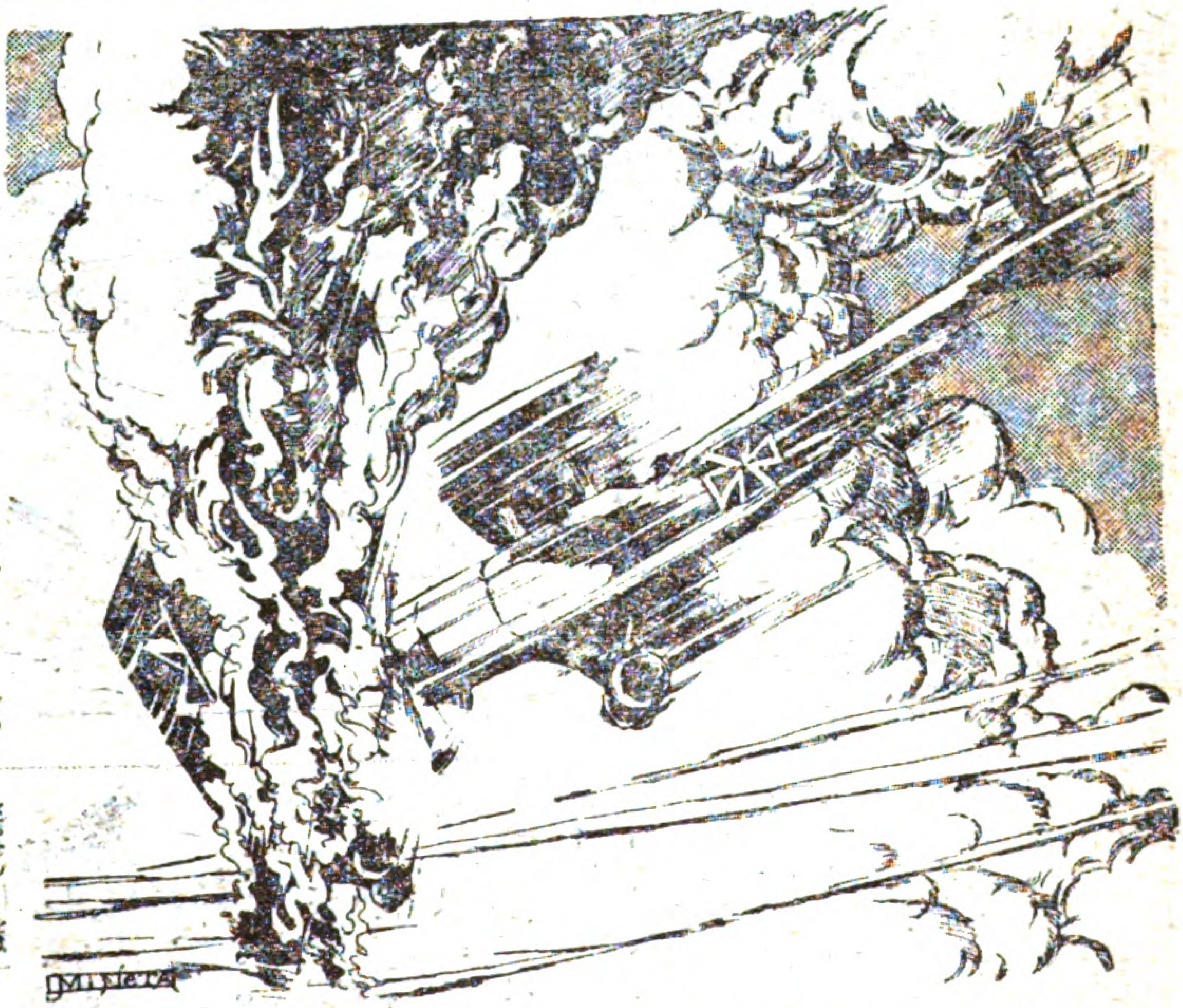
氣がつくと、ガソリン槽が、兩方とも敵彈の爲に貫かれて居る。待てしばしはない、すぐさま發動機を停止して、極めて迅速に着陸しなければ、機は、紅蓮の炎につゝまれる。敵機を前にして、もう一息のどたん場で、敗けをとつたかと思ふと、彼の腹は煮えくり返るやうに、殘念だつた。

やんぬる哉！　事は終つた。

それにしても、勝誇つた敵機は、いかに？　沈勇な少尉は、彼自らが危地に臨んでゐる隙にもかゝはらず、宙返りをした間一髪の時、敵機に彈を投じた。

ところが、何うだ！

彼の機が、引くり返ると、殆んど同時に、敵機も引くりかへる。相撲なら、同體に倒れたといふ形。ガソリン槽に彈丸うけた時、彼の放つた一彈は、敵機の操縱席に居たボール大尉の頭上を射たのだ。何條たまるべき。流石のボール大尉も、愛機と共に、くる／＼くると落下して、空中戰の犧牲となる。



息づまるやうな勝負は、一瞬にして決つた。

少尉の飛行機は、味方の陣地に着陸して、幸に無事だつた。折柄、怪しき機影は兩機が鬪つた上空に現れたので、眼をあげて仰ぎ見ると、こは如何に、これも亦赤くぬられた僚機、それも、兄マンフレッド・リヒトホーフェン大尉の愛機。

弟少尉の危難を救はんとして、全速力で馳せつけた大尉が、射程圏内に入るに先立つて、壯烈無比の決勝戰は終つたのだ。

『おゝ、弟よくやつたぞ』

さう云はぬばかりに、大尉の愛機は、夕暗迫る空中で、壯快な亂舞を繼けてゐる。



滿場啜泣く悲壮の競走

我が國競技史上未曾有の大紛擾

行田西晴

時は大正七年十一月初旬、處は駒場グラウンド。そこに催された盛大無比の大運動會である。

何しろ當時、駒場農科大學の秋季大運動會といへば、今の神宮競技以上に、人氣の焦點となつたものだが、殊にこの日は、全國專門學校、各大學の招待選手競走が呼物となつて、その一勝一敗に天下の視聽を集め、各校の精鋭、一粒選りの選手の意氣の物凄さ。極度に緊張せる空氣の一波一動にも、ファンの胸を躍らすものであつた。

あゝ誰かしらん、この時この際、我が國競技史あつて以來の一大珍事勃發して、未曾有の大紛擾を醸し、都下の各新聞を始め、一般の大問題とならんとは。而もこゝ僅かに數分間、運命の扉は堅く鎖して、萬餘の觀衆、只一人の豫感をも覺えしめないのであつた。

朝來、カラリと晴れた秋日和、實に惠まれたる好天氣であつた。定刻前、さしも廣きスタンドは、既に觀衆によつて埋められた。今日の晴れの運動會、優勝するものは果して何校であらう？　また遂に三年連勝の一高の勝利に歸せしむるか、將又、美事一高を屠る強敵あらはるるとせば、そは果して何者ぞ！　など噂がそれよりそれへ、此處より彼處へと、湧いて流れて散るのであつた。

時も時、一高軍が根津權現の大太鼓をドドドドンドンと打鳴し、雲霞の如く大小の白旗を押し立て、氣勢を舉げつゝ堂堂と入場する。駒場原頭、競技氣分は頓に高潮した。手に〱振りかざす白旗のひらめき、大太鼓の音、石油罐の響。風呂敷、敷布、蓆、薦、大と小と、美と醜とを論ぜす、長竿に吊して押し立て振り立て、應援歌も勇しく、嵐の如くに荒れ狂ひ、萬雷の崩るゝ如きどよめきである。熱狂、熱狂、熱狂、熱狂。

おゝ見よ！　純白のユニホームの凜々しき姿、各選手の顏には悲壮な決心が漲り、今日の晴れの競走に我こそ一番功名を成して見れんずと、身も心も躍り狂つてゐる。歡呼の聲は天地を壓し、選手の

意氣はいよ〳〵あがり、正に最高潮の雰圍氣に達した。

機は熟した。この時、容貌魁偉の一高應援團長が、自校選手を前にして滔々たる大熱辯を振つて激勵の辭を述べる。

『諸君！ 我等は玆に我が名譽ある河野選手を起たしめた。我等は必勝を期して母校の名譽のために奮鬪しなければならない。諸君！ 我等一同はこの光榮ある河野選手を祝福すべく、こゝに應援歌を三唱するであらう。』

言ひも終らず、忽ち轟く應援歌、大小の白旗のひらめく中に佇立せる若き選手こそ、今日の晴れの運動會に必勝を期する河野選手である。彼は感激のあまり、顏色蒼然として身慄ひさへしてゐるではないか。

軈て、出發合圖員の號令一下、高師、一高、早大、慶大、明大、日歯、同志社、等々の一流選手が、一列にスタートについた。當時天下に覇を稱した日歯の蓮見君、明大の得能君、早大の平野君、一高の河野君等の猛者揃ひ、何れ劣らぬ剛の者ばかりだ。將にスタートは切られんとする。選手一同は今や遲しと片唾を呑み乍ら滿身の筋肉を躍動させてゐる。タイムは刻々に迫る、一秒！ 二秒!!



『オン・ユア・マーク』『ゲット・セット』

ドン！ 轟然一發、拳銃は鳴つた。十數名の猛者は脱兎の如くにスタートした。トラックを圍む總ての觀衆は我を忘れて應援する。一頭地を拔いてぐん〳〵リードしてゐるのは一高の代表選手河野君である。一週、二周、興味は絶頂に達する。先頭河野君に次いで明大の得能君、日歯の蓮見君、早大の平野君等の猛者連が肩もすれ〳〵に打續いて力走する。何れも必死の猛鬪！ 技倆は全く伯仲の間、負けず劣らず、頑張りつゞける物凄さ。

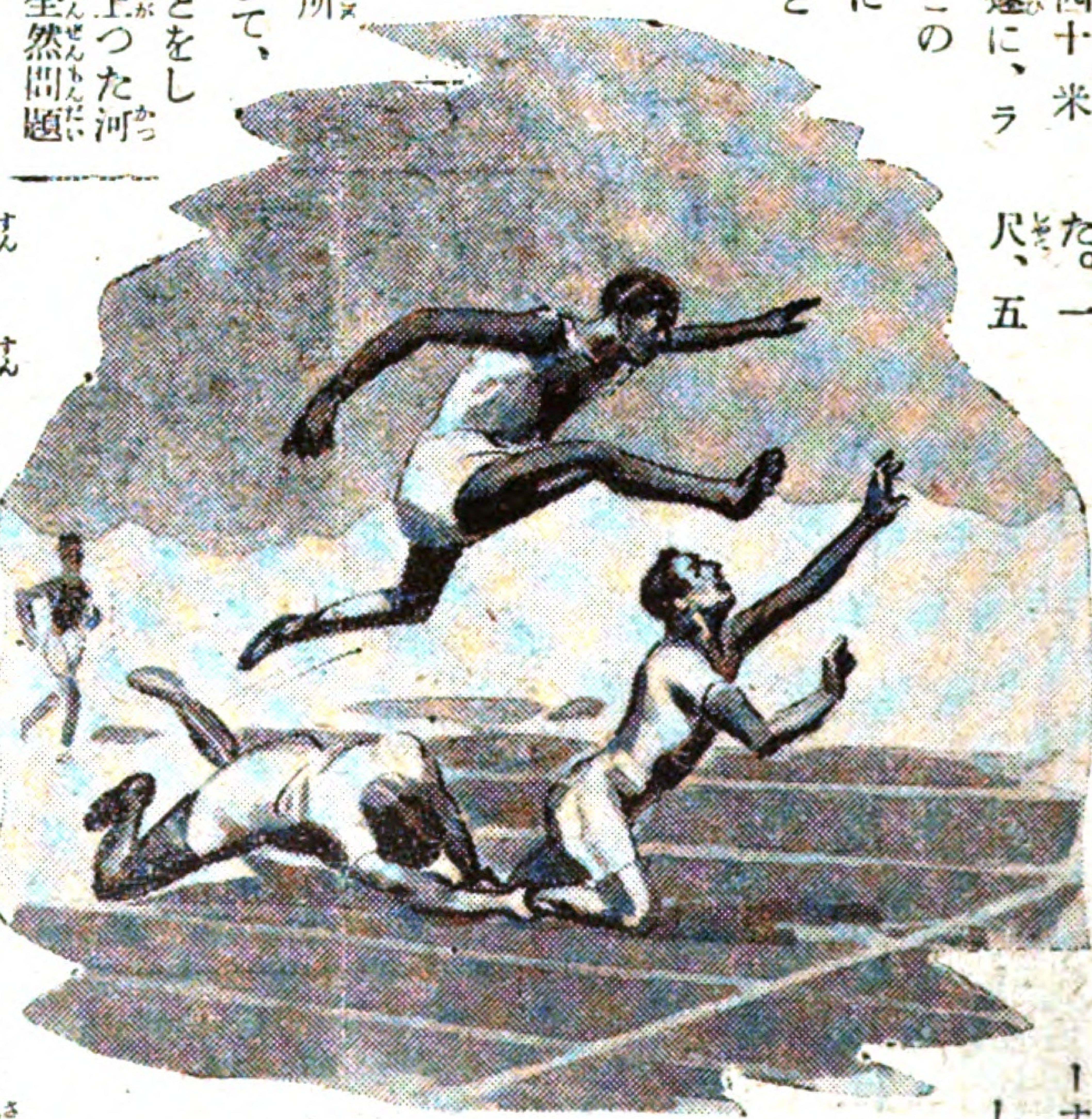
應援團もこゝを先途だ。ドドド、と亂打する太鼓の響、それに交つて石油罐の轟音！ 破れよとばかりに打振る白旗――一高の熱狂的應援を始

めとして、各校、我劣らじと、今や分け目の關ヶ原、聲は耳を聾するばかりであつた。

決勝戰はいよ〱近づいた。四十米……三十米……二十米……遂に、ラストコーナー前に差し掛つた。この眼前に横はるコーナーの奪取戰によつて勝敗の運命は決せられんとするのだ——その刹那である。

高師の齋藤謙吉選手。彼は當時わが水泳界の重鎭としてこそ其の名天下に冠たれ、陸上競技には今日が始めての出場だ——尤も、彼がランニングに於ける隠れたる實力は、知る人ぞ知る所であつたが、彼は飽くまで自重して、曾て斯うした晴れの場に立つことをしなかつた。さればこそ人は陸に上つた河童ぐらゐに思つたのであらう、全然問題にしてゐなかつたのだ。

ところが驚くべし、今まで第六七位についてゐた彼齋藤君は、スハと見る間に猛烈なラストへビーをかけた。偉大なる突風的力走よ。見る〱下野君を抜いた。得能君を抜いた、蓮見君を抜いた。而して今や刻々先頭の河野君に迫つて來た。一尺、五寸、二寸、一寸！　忽如河野君を抑へて、よろ〱と其の前を遮つた。——どうした機か、河野君のコースに入つてしまつたのである。



（規則では一米を越した場合でなければ、前の選手のコースに入れぬことになつてゐる）サア大變！　將に最後のコーナーにかゝらんとする一刹那だ。而して事は突發、間、髪を容れない。お互に夢中だつた。ハッと氣付いた齋藤君は、『しまつた！』と思つた。その瞬間、夢中になつて駈けてゐる河野君は、と見ると、咄嗟につッと猿臂を伸ばした。あッと思ふ間もなく、齋藤君の新らしいユニホームは、右の肩からビリビりと引ッ裂けた。機を喰つて齋藤君は前へトントンとつんのめる——身體は極度に疲れ切つてゐる、何條以て堪るべき、バッタリと倒れてしまつた。續いて河野君も倒れる！　決勝線は目の前だ。すべてが無我夢中である。精根疲れ果てた齋藤君は、地を這つて、奮然身を起して、よろめきながら再び駈け出さんとした。全く意識を失つた河野君は、あゝ何たる神の惡戯であらう、彼の手は再び

齋藤君の足に行つた。二人は又もやバタリと折重なつて倒れた。直後に迫つて居た早稻田の平野選手は、眼のあたりこの痛ましい光景を見ては、追越して行くのにも忍びなかつた、さすがに一寸ためらつたが、背後には日齒の蓮見君、明大の得能君、强者剛者が肉迫してゐる。彼は敢然、倒れてゐる二人を躍り越した。さうして第一着のテープを切つた。齋藤、河野兩選手の出來事に、手に汗を握つて熱狂してゐた觀衆も鳴りを鎭めた。飽くまで死力を盡して戰つた齋藤選手も、ここにヤツと絕體絕命から免れる好機會を得て、第二着にゴールへ轉げ込むやうに入つたのであつた。再びどよめきの聲がパツと上る。あゝ何たる悲壯極まる光景であつたらう。

嵐のあとの靜けさ……今まで勝ち誇れるが如く林立した一高應援團の白旗は、音もなく地に伏せられたのであつた。

この年も常勝軍の名を贏ち得ようとし、また飽くまで母校の名譽を傷けまいとした一高の應援團の中からは、翕然として啜り泣きの聲が聞えた。悲憤の涙がはふり落ちた。勿論、この敗れたる戰跡を歎くのではない。この悲しむべき突發事件を呪ふのである。若き河野選手を斯くまで責任感に苦しめるやうにせしめた運命を悲しむのであつた。

駒場グランドには、恰も水を打つた樣な靜寂が續いた。まさに西山に沒せんとした赤い夕陽が、秋の木の葉を透して、再びあるべからざる、恐らく未曾有の事件として、この日の出來事を永遠の過去に包んだ儘、赤くどんより暮れて行くのであつた。



隅田川決死の大力漕

青？赤？白？霸權はいづこに

大音龍太

『三年負けつゞけとは、實に情ない、今年こそは、石に嚙りついても勝たねばならん、腕の續く限り漕いで、是が非でも勝たねばならん』

醫科の選手は、悲壯な決心をした。

一體、東京帝國大學が、テムズ河に於ける牛津、劍橋兩大學の對校競漕に擬して、分科競漕を始めたのは、明治二十年の春、渡邊洪基が總長時代で

ある。

何しろ、始めてのボート・レース。花時の隅田川の土堤は、人をもつてうづまつた。言問から吾妻橋間、一直線に千二百米突のコースをとつて、法、工、醫、各科の選手が、一世一代、こゝを晴の舞臺と心得、さかんなる應援のもとに、力漕する花々しさ。從つて、帝都の人氣は、此のレースに集まる、選手も亦責任が重くなる。

熱狂した觀衆が、亂舞して居る間に、最後の瞬間、ラスト・ヘビーで、辷るが如く決勝線に入る時の快さ。ぐ、い、、つたりと、艇の中に倒れるやうになつても、天地を覆すやうな勝鬨の聲が、鼓膜をつき破る。彼等は、この刹那、隅田川の英雄となるのだ。

それが、どうだ。最初の明治二十年は、法科の勝、翌年の二十一年も、同じく法科の勝、ついで二十二年の春は、久しぶりで工科の勝となつたのだが、その間三年ぶツつゞけて、醫科は負けて來たのだ。



『ドクトルは、優男に限るんだよ、ボートの選手なんて、些とお齒に合はない、まア、枯木も山の賑といふことがある、負けに出てくれるのは、おんの字だが』

法科や工科の蠻骨學生が、へらず口を叩くのが、彼等の耳にも入る。

『殘念だ、勝たなくてはならん』

醫科の選手は、淚をのんで、隱忍壹ケ年、燒くやうな眞夏の烈日の下に、オールを握つた。剃刀のやうに短い筑波颪が、身を切る極寒の十二月、大利根の遠漕にも出かけた。暇さへあれば、猛練習をくりかへして來たのだが、今や、雪辱の時は來る。

向島の櫻が、薄紅を刷いたやうに、ボーツと紅らんでくる頃からして、彼等は、死物ぐるひの猛練習、合宿所から足一歩も戸外には出なかつた。

勝つて、三年越の恨をはらすか？負けて、又しても、萬斛の熱淚を河上にそゝぐか？競漕の日は、一日と迫る。

醫科にとつては、最も重大なる此の一戰に、重任を荷うて立つた選手は誰々ぞ。舵手は近藤次繁、整調安藤慶次郎、五番三角恂、四番大澤岳次郎、三番中西龜太郎、二番吾妻勝剛、一番枝國安太郎の面々。近藤舵手は、今の近藤博士、一高時代に、整調を二度、舵手を一

度つとめた老練な選手、安藤整調と共に、特に將に將たる器量は、十分に備つて居る。

二番の吾妻、一番の枝國と來たら、小兵のつはものだが、腕力の強いことにかけては、時のクルウ中、第一といはれた。オールが強く、練習中、何回か折つて了つたくらゐ。

『來い』

合宿所で、腕押しが始まると、誰も吾妻に敵はない。果は、巨腕巨軀、堂々たる安藤整調、中西三番が、滿身の力をこめて、これに向つてゆくが、小兵の彼の腕ッぷしに、みんごとへし折られる。とど、吾妻と枝國、猛者ぞろひの力競べとなる。これが又、見もので、どつちも負けず嫌ひ、うん、うん、唸り乍ら、猛闘をつゞけるさまは、眞にこれ龍闘虎挐の趣。

だから、二十三年の醫科の選手は、粒えりの勇士ぞろひであつた。

(これで勝てなければ……?)

意氣ごんでは居るものゝ、勝利の神は果して、どつちに團扇を揚げるか、當日となつて見なければ、何とも云ひかねる。

敵はいかに。

法科は、去年は、ちツかり手ぬかりをしたので、今一息のところで、工科にしてやられた。だが、今年は此方のものだと、英氣颯爽、嚴かに陣容をとゝのへた。

工科は、去年も勝つた、今年も勝たねばならぬと、意自から驕り、氣自から揚る。されば、兩者とも、容易ならぬ強敵だ。

(醫科は、ほんとうに克てるかしら?)

こゝに至つて、先輩も、學友も、附屬病院の看護婦達までも、心配になつて、物が手につかない。

四月十日——不安と焦燥と期待との中に、待ちに待つたレースの當日は、到頭、彼等の前にやつて來た。

泣いても、笑つても、今日の勝負で、事は決る。

花ぐもりの櫻堤、彩旗、紅燄、入り亂れて、朝の中から一ぱいの人だかり。どつちを見ても、滿堤、たゞ人の山。

『青、勝て、やーーい』

法科に聲援するものが居る。

『糞ツ、白だ、白だ、今年も白だ』

工科に味方する同情者も居る。

此うして、青と白との名をよぶものは居るが、つひぞ、赤勝てと呼ぶものがゐない。醫科は、それ程、見くびられてゐるのかと思ふと、Mといふ襟章をつけて居るのが氣恥しい。

彼等は、人しれず、泣いた。そして、選手に向つて、勝つて吳れと、秘かに祈つた。

競漕の時間は、刻々と迫つて、午前十一時となる。合宿所に陣取つた選手は、みな皮肉が張り裂けるほどに緊つて居る。

彼等は、今、出場といふ途端場になつて、神前に額づいた。可憐なる若者達は、合宿所の一隅に神棚をしつらへて、朝な夕な、神前に祈願をこめてゐたのだ。

德利には、新たに神酒がもられて、白

い西洋蠟燭には、あか〳〵と火が點されて居る。ユニホームに身をかためた選手一同、柏手を打つと、晴の勝負に、榮冠を得させたまへと、近藤舵手が祈の言葉をさゝげた。

と、いかにやしけん、かたッ！　音がして、御燈明の蠟燭が倒れると、パッと火が一しきり燃えたつて、間もなく消えた。選手の顏色が、さつとかはつた。出陣の間際に、何といふ不吉の兆だ、燈明が倒れたのだ。

（あゝ、今年も負か？）

彼等は、張りつめてゐた氣が急にゆるんで、口惜し涙が、腹のどん底からこみ上げてくると、ぐつたりと氣ぬけがした。

すると、近藤舵手。

『諸君喜べ、蠟は、Lawだ、法科だ、白蠟の白は、白だ、工科だ、法科と工科とが倒れたンだ、しかも、赤い焔が燃えた、赤は醫科だ、醫科が勝つたンだ、死力をつくして漕げ！　きつと勝てるぞ』

當意即妙の機智。

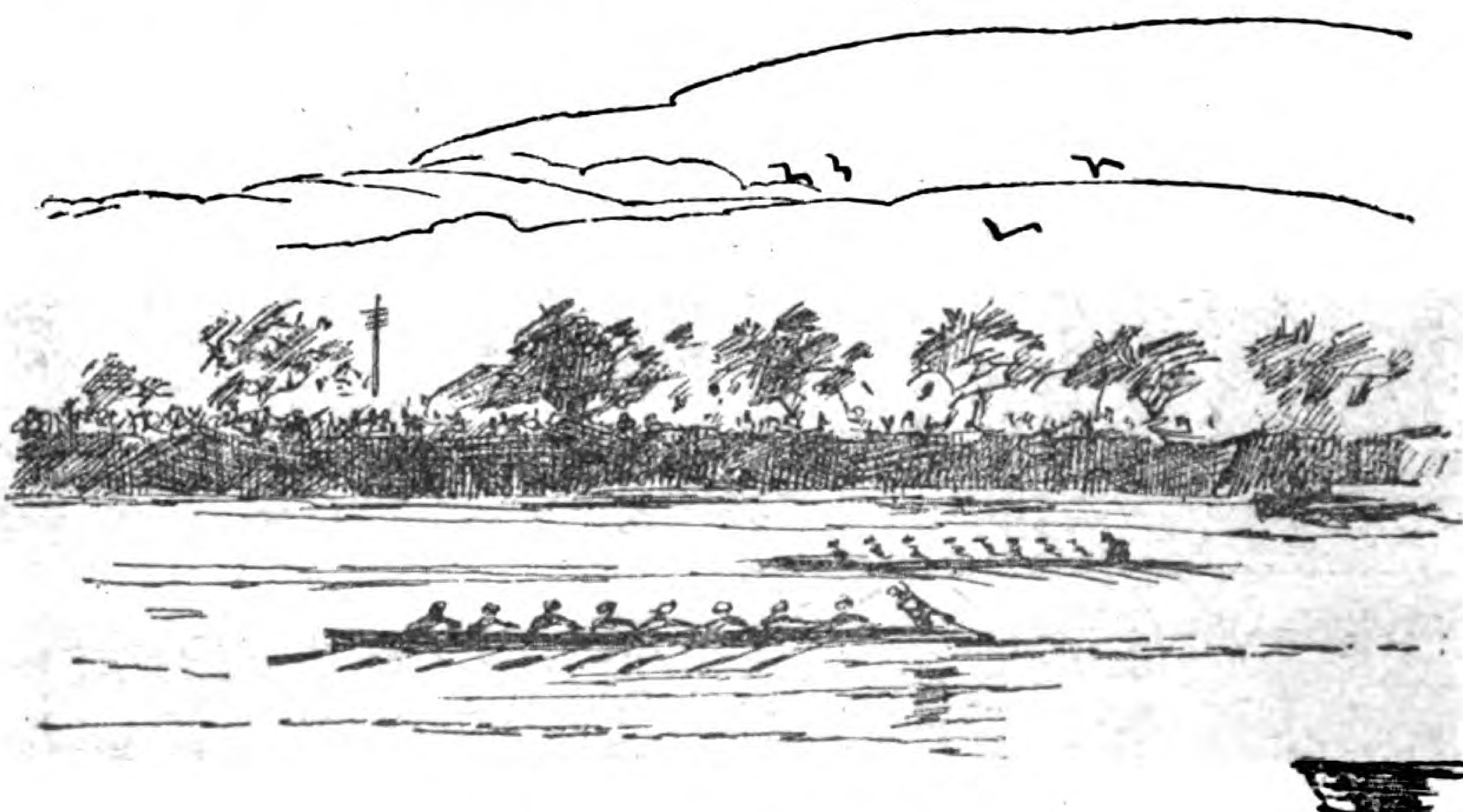
『さうだ、さうだ、バンザーイ』

彼等は、戰はざるに、先づ萬歳を三唱して、勇氣凜々、艇に上る。

青と赤と白の順列。

『そらこそ』

堤上の人はどよめき、旗はうごき、花片、ひら〳〵と河上に舞ひくるつて、應援の聲は、どうと嵐の如くに渦卷いた。



號砲一發！

スタートを切つた三艇。さつとしぶきをあげて、漕出した。醫科は、必死だ！

いづれ劣らず、力漕の凄じさ。觀衆は、みな手に汗握る。最初から馬鹿にしてゐた赤が、不思議にも、漕ぐ、漕ぐ。

『うわーッ』

賞讃とも、絕叫とも、何ともいへぬ聲があがると、ぬいたりや、ぬいたり、竹屋の渡にさしかゝつた途端、赤は、敵の二艇よりも、約半艇身をぬいた。

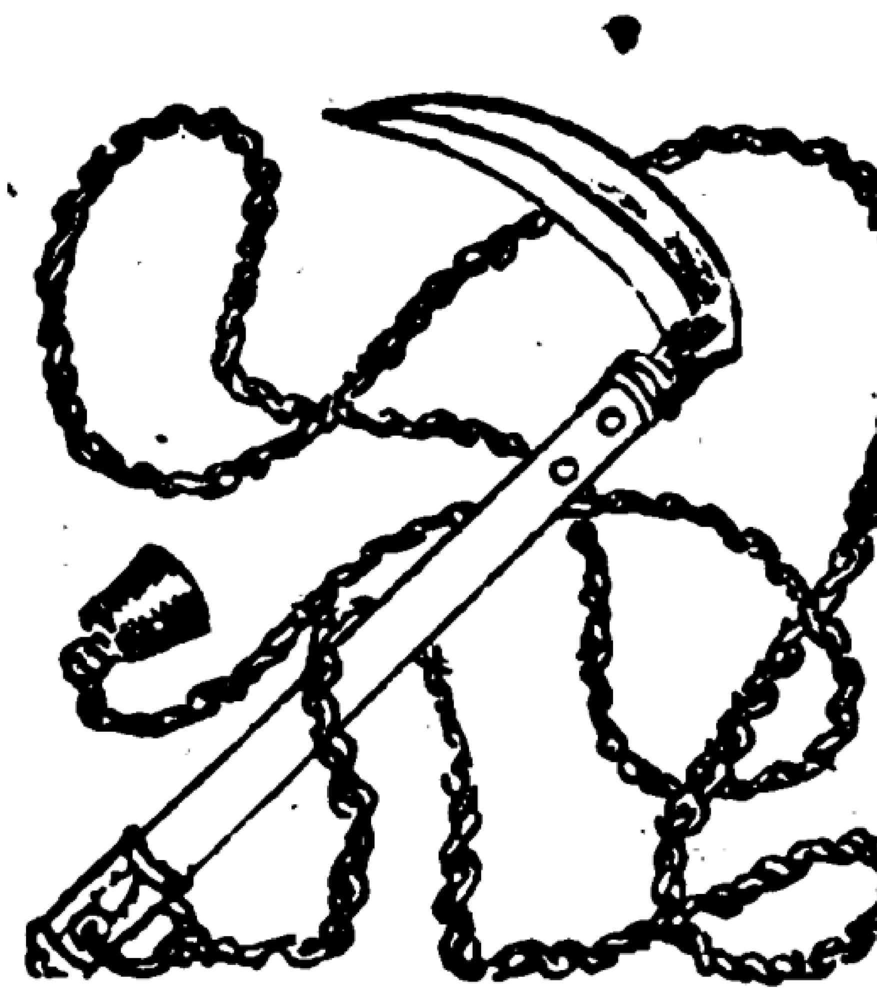
『赤、赤、赤だ』

急に赤の呼聲が、活氣を帶びてくる。

こゝぞ！　決勝點！

近藤舵手の一聲。『ラスト・ヘビー』の號令に、勇氣百倍のクルウ。吾妻二番、枝國一番の腕ツぷし、大澤四番、中西三番の巨腕、骨も砕けよ、肉も裂けよ、五尺の一身、粉になつてふツとんで了へとばかり、力漕又力漕、眼が眩んだ、氣が遠くなつた。……だが、彼等は、つひに勝つたのだ。三作越、負けつゞけの恥を雪いだのだ

人は躍り、旗は躍り、隅田川は、彼等に覇者の名を與へて、波また躍る。



山上烈火の氣合

獵師姿と逆髯武士が目に留らぬ活殺の手練

眞下醒客

一

どんよりした初秋の午過ぎ——

早くも其地こちに、黄色の葉を見せてきた赤城の山深く、劍ケ峰の嶮を越えて、獵師姿の伴藏が恰度、南面のなだらかな方へ出ようとした時である。突如、ズドンと鳴り響く銃聲一發——と思ふと、狂ふが如く躍り出たのは一頭の大猪であつた。

心身鍛錬の傍ら、よき獲物もがなと、山周りをしてゐた伴藏である。いかで逸すべき、サツと切りこむ電撃の早技、急所をしたゝか斬られたと見えて、猪はそのまゝドンと倒れてしまつた。

伴藏が繩をそれにかけようとしてゐると、

『や、そりや拙者が射止めたもの。勝手な眞似をすまいぞ！』

熊笹をわけて出て來たのは、虎髯逆まに生やした雲突くばかりの大兵な武士。手には未だ焔硝臭い獵銃が握られてゐた。

孰らう、遣るまいの口爭ひが暫く續いた。遂に武士は、刀に掛けても、と言ひ出した。伴藏もムツとして言つた。

『ホほう、これは面白い。餘人なら知らず、かく申すは上泉伊勢守の門弟にて、少しは人にも知られた礒畑伴藏秀國ぢや、いかにもお對手致さう！』

聞くと、件の武士は顏中を口にして笑ひ出した。

『な、なにが可笑い?』
『ハツハツハ、をかしいぢやないか。こりや聞け、ついまだ一昨日の事よ。その上泉のヘナチョコ劍術を一つ凹まして呉れうと思つてな、鎖鎌の達人山田萬龍軒と名のつて試合に行つたのぢやすると上泉奴、聞き怖したと見え、虚病を使つて出て來んわ。已なく疋田、淺山、丸目などいふ木葉對手に立合うて、悉く打据ゑてくれたが、上泉の門人なんどと口幅ツたく吹聽するからには、貴樣も何れはあの腰拔組であらう。……敵はぬと思つたら、その猪置いて、怪我せぬうちにサツサツと遁せたが利口といふものぢや』
『なんと? さては貴樣が、あの山田萬龍軒とやら申すしれ者か。我が師を罵る無禮者。果して、ヘナ〳〵劍術か、腰拔か、今こそ神影の極意の程を思ひ知らせて呉れる――さあ來い!』
俄然、捲き起る山上の風雲!



二

一方は、萬に近い上泉伊勢守の門弟中、塚原小太郎(卜傳)と共に、上州箕輪の龍虎とまで言はれた程の傑物。だが、對手の萬龍軒も鎖鎌では當時日本無双の妙手、現に彼がこゝへ來る前、箕輪の道場を訪れて、伊勢の病氣、磯畑塚原等の不在を幸ひに、丸目、淺山等を破つて、高言を吐いて來た事も事實である。だから、伴藏が拔いたなと見ても騒がない。
『ハヽヽヽ、さア其處なヘナチョコ、何處からでも參れ!』と、傲然たるもの。
だが、次の瞬間には、鎌を左手に、長い鎖のついた一方の分銅を右手に提げて、仁王立に突立つた萬龍軒の顔色も、頓に緊張した。寸隙だにない伴藏の構へ、態度に、早くも此奴、油斷のならぬ敵手と觀てとつたからだ。
伴藏にしても亦然り。師を罵られたる憤怒に双の拳を震はせながらも、青眼につけた秋鐵の構へを、容易に變へる事ができない。對手が對手、武器が武器、う

ツかり撃つたり拂つたりすれば、すぐ鎖が捲着いて來て刀を奪られる心配があつたからである。

嵐の前の靜けさ。兩雄相對して、互ひに隙を窺ひながら、息塞るやうな沈默に、一寸詰りの攻勢を持續してゐる……暫しと思ふと『えーい…』裂聲するどく、先づ萬龍軒の分銅が、敵手の脳骨目がけて、ブーンと飛ぶ。伴藏、素疾く身を翻へす。と、入り違ひに鎌。それを避ける間もなく分銅！鎌と分銅が殆ど交互のやうに、目にも止まらぬ妙術で、飛來し、また飛來するので、流石の伴藏も撃ちこむ機會は愚か、一步も攻勢に出る事が出來ない。

だが、足場の惡い狹い場所で、右かと思へば左、左かと見れば前後と、飛燕そのまゝの働きに、體よく外されて了ふのを見ると、萬龍軒も今は必死。眼を据ゑ、一聲高く叫んだかと見ると、いよいよ猛烈に分銅を飛ばす。その見事さ、鮮かさ。宛ら手許から水が迸り出るかのやうである。その鋭鋒に壓せられたか、狩獵姿の伴藏の偉軀は、一步、後へ、後へ自然に退つて、遂に、今一步にして千仭の谷底と云ふどたん場まで、追ひつめられてしまつた。

こゝぞ！と許り、愈々峻烈に、敵の分銅は風を捲いて飛び來たつた。今は伴藏、身を躱すに自由なく、我知らず颯と、目の前の邪魔物を拂つたからたまらない。丈餘の鎖は先樣の註文通り、伴藏の刀にクルくと捲きついてしまつた。

『失策つた…。』と思つたが、追付かない。背後は谷、前は敵、もう絶體絶命である。

『してやつたり！』

と萬龍軒、えいく聲に、力をこめて、絡み着いてる鎖を、手許へ引く。その度に、



盤石の伴藏の身體が、寸、一寸と前へ出る。出まいとしても分が惡く、持つてる刀尖を引張られるから、嫌應なしに跟いて行く事になる。併し、さうして、手許へ

手繰り寄せられたが最後、そこには物凄い利鎌が待つてるのだ。それかと言つて刀を離せば、敵もさる者、隙さず手許へ躍り込んでくるに決まつてゐる。——件藏は血流の逆行するの思ひに、戰慄した。

とは言へ、萬龍軒にしてからが、まだ安心はならない。己れに十二分の勝算はありながらも、對手が對手である。窮餘の策、如何なる變化、いかなる反跳に、奇想天外の一擧を見せぬとも限らぬ——考へると、ヂリ〱と手繰りよせてる双の拳も、自づと波打つ。

三

果然、番狂はせは演ぜられた。

両虎、玉なす汗。爛々たる烱光に睨み合つたまゝ、火焔の息を吐いて、引く、引かれまいとして挑む、秒、一秒……

突如、件藏の巨眼、赤く熱して輝くよと見る間に、

『えーいッ！』

岩間に反響する物凄まじい烈火の氣合！と見ると、驚くべし、さしも頑丈に組合されてあつた鐵鎖が、見事、萬龍軒の手許からプツつりと切れてしまつたのである。

——彼が赤城の山登りをしては、霜辛雪苦の果てに編み出した合氣の術！遂には氣合一つで、猛獸をも睨竦め、鐵をも切り放すまでに練達した。その神技が、死に直面した件藏の渾身の精髄から、爆然と、而も自然に發露して、圖らずも其の身を護る活劍となつたのだつた。

『呀ッ！』

萬龍軒は失神せんばかりに呻つた。が、彼もさるもの、矢庭に、手にせる鎖鎌を、對手の頭上めがけて投げつけるなり、素疾く腰なる一刀を拔く——いや、拔きかけた其の一刹那である。ヒラリ、五體を絞つた前屈み、飛箭と振飛ぶ件藏が神影流熱火の殺劍に、

『ア、う……む……。』

顳顬から頬深く割りつけられて、流石不敵の萬龍軒も、ひとたまりもなく、前へ踣つてしまつた。



鐵腕鳴り熱球飛ぶ向ヶ丘

早大チームと向陵チームの爭覇戰

橋戸頑鐵

一

風雲怒る校庭に
　寄せくる敵は多けれど
鎧の袖の一觸に
　物もいはさで追返し
覇者の譽の年々に
　上りゆくこそ嬉しけれ。

一高が、球界の覇權を握ること多年、明治三十六年には、山内冬彦氏作の野球部々歌が出來上つた。これは、その一節だ。

『一高の選手といへども、同じ人間である、彼は官學、我は私學、官學なるが故に、野球にも強いといふ道理はない、いでや、彼に一泡ふかせて與れん』

吾々、早大野球部選手は、覇權の殿堂を打碎かうとして、猛練習をつゞけた。

機は熟して、明治三十七年六月一日となる。皇軍、滿洲の野にあつて、連戰連勝、帝都の巷には、每日のやうに號外のベルが鳴る、每夜のやうに、祝聲の提灯が流れる。國民といふ國民が、戰時氣分で緊張し切つてゐる矢先、彼に戰を挑んだ。

『御相手申さう』

さういふ挨拶。此の時、一高の野球部は、有名な投手故守山恒太郎君が去つて、今の黒田昌恵博士が、投手を承つてゐたが、素より早稻田などは赤子の手を捻ぢるくらゐに考へてゐたらしい。

鎧袖一觸の意氣込みは、敵乍らも天晴れであつた。だが、吾々としても、絶好の機會。勝てぬ迄も、土俵際まで押つめようとして、主將たる自分も、秘かに肝膽を碎いてゐた。

陣容已に成る、決戰の期は近づく。すると、肝心の投手獅子内謙一郎君が、ふいと姿をかくした。

『獅子内は何處へ行つたんだ』

みんなして、行方をさがしたが、何處にも居らない。

『さア大變だ、怪我でもして、病院にでも入つたんぢやないか』

段々調べると、驚いたことには、郷里へかへつて、高等農林學校の入學試驗を受けて居ると判つた。

吾々は、愕然とした。獅子内を恨んでも見たが、今更、何うにもならない。

『よし、非常な場合だ、俺が引受ける』

到頭、河野君が、乘出した。君は、肩を痛めて、投手を斷念し、中堅に退いてゐたのだが、この場合、まことに氣の毒ではあるが、君を煩はすより外はなかつた。

（もう駄目だ）

一時は、ぐつたりとなつて、氣拔けがしたが、河野君の奮起によつて、又顏色をもりかへした。

で、河野君のかはりには今、呉の住友銀行支店長をつとめてゐる陶山素一君が、補缺から入つて右翼を守ることにした。

さて、當日となる。勝傲れる向陵チームの勢のすさまじさ、彼等はてんから早稻田チームなどは眼中にないのだから、打擊順を作らなかつた。もつとも一高は、對外試合の外は打順を作らぬ風習、この試合は、いはゞ練習試合であつ

て、榮譽ある覇權を失ふやうな性質のものでないと高を括つてゐたかに見える。

『よし、その分なら、此方も打順をつくらずにやれ』

負けじ魂に於ては、一歩も向陵健兒にゆづらぬ吾々である。勝つも男らしく、負くるも男らしく、その間、微塵も、不純な心的分子の存在を許さなかつた。

初夏の風は薫る向陵のグラウンド、ノックのひゞきは、戛然として雲に入る。――各級の猛彌次が、ぎつしり詰めかけてゐたのは申す迄もない。

二

肩を痛めてゐる河野投手の痛々しい健闘ぶりは、今も、眼前にちらつく。

『勝つた方がえゝ』

猛烈な彌次の中に、第一回に於て、早くも敵に二點を奪はれた。

二回戰に於て、又一點。

『これではならぬ』

勢こんで、やつと、敵のミスに乘じ、二點をとり返した。

今や、その差僅かに一點、我軍始めて生色あり、勃然として、勢づいて來た。



明治三十八年早大第一回渡米野球團紀念撮影
(前列)右から泉谷氏山脇氏四番目河野氏次は森本氏(中列)右から獅子内氏陶山氏(中央安部先生)左端橋戸氏(後列)二番目押川氏等の思出深い記念寫眞である

(この機會を逸するな)と、自分は、味方を激勵した甲斐があつて、第五回には、森本選手が、素晴しい猛ゴロで、一壘の近くを抜き、河野、山脇を入れた。一體、彼位打撃の利かぬ男はなかつた。從つて、自分は、數の中に入れて置かなかつたのだが、日頃の熱心、此の場の危急、いざとなつて、意外な殊勲をたてゝ一擧、四點を占めた。

(勝てるぞ!)

勇みたつた我がチーム。

七回目に又一點を加へ、八回目に、敵一點を得、我二點を得て、いよ〳〵最後

の九回戰となる。

我軍、四點を勝越して居るので、優劣、こゝに地をかへ、意氣、敵を壓倒した。とは云ふものゝ、はち切れさうな元氣充滿の向陵チーム。どたん場になつて、鋭氣一番、此の得點を奪ひ返すかもしれない。向陵氣質の取得もそこに在る。

(油斷はならぬ)

相警しめて、場に立つ。向陵を取らんとする多年の宿望を逹して、我、覇を成すか。いみじくも、彼等に踏みにじられて、盡きぬ恨を向ケ丘のグラウンドに留むるか。

事は、此の一回にきまる。

敵は攻め、我は守る。河野投手の任は重し。と、敵は二死となつたが、果然!終局になつて、滿壘の好機をとらへた。

彌次は、こゝぞと、一生懸命。わるくすると、今迄の努力が水泡に歸するかもしれない。

(あゝ、勝利の神は、又しても、吾々を見放すのだらうか?)

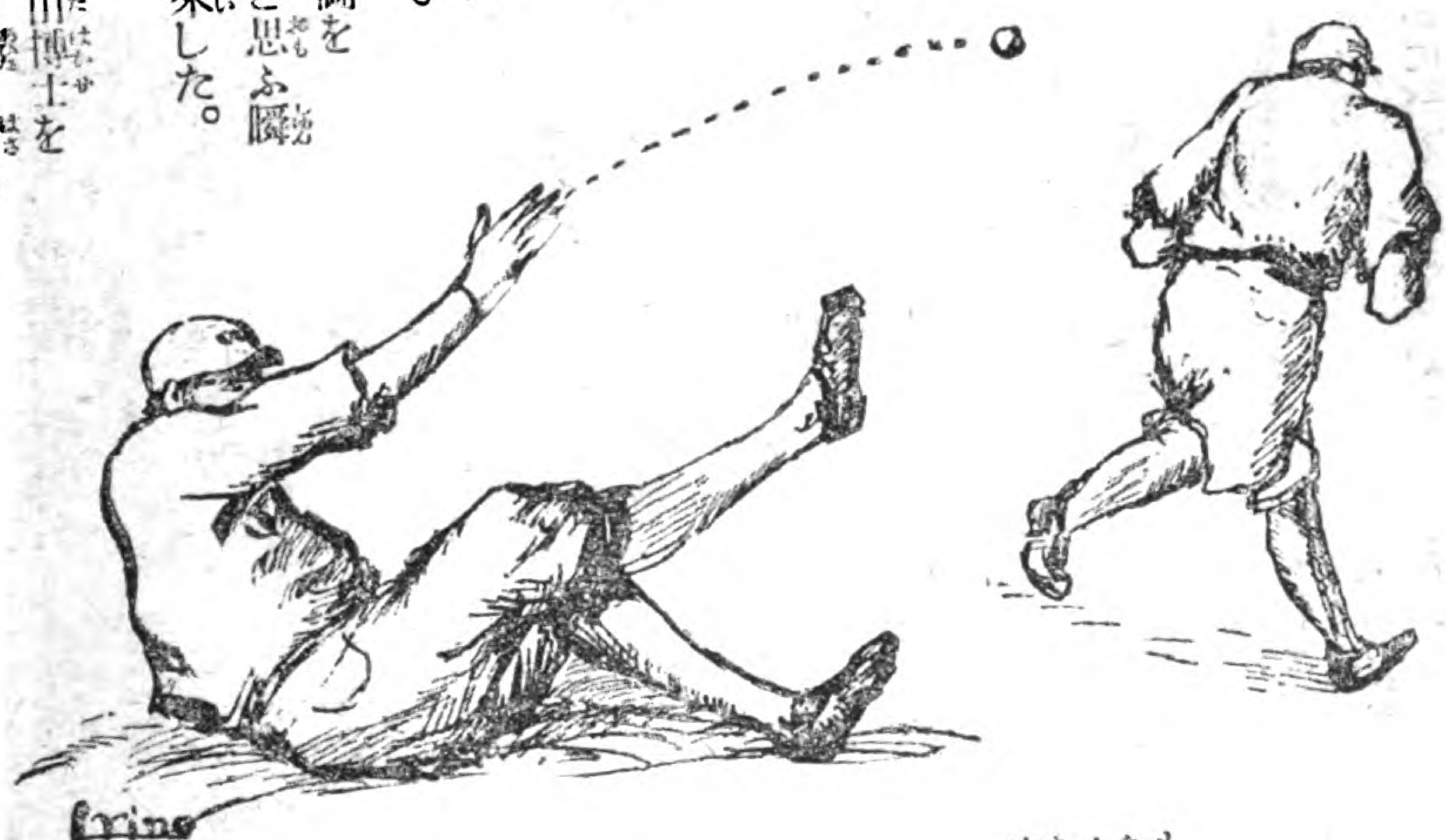
自分は、場内をうづむるばかりの彌次の聲の中に、ふと二壘を見た。走者の黒田博士が恐ろしく壘を離れてゐる。

『今だ!乘ずべきは今だ!』

電光のやうに頭上に閃いた。河野投手に合圖をすると、ハッと思ふ瞬間に、球は飛來した。

『それッ』

首尾よく黒田博士を二壘と三壘との間に挾んだ。ところが、敵も必死!たかたかもつて止めを刺すことが出來ない。すばぬ



けて走力のある泉谷三壘手が、さつと追撃する、球は五寸か、一尺の隙をのこして、いつも敵を逸する、魚は網の中に入つて居るのだが、容易につかまらない。

最後の一擊!

泉谷君は、隙を見て、力走して、博士に迫る。

『しめたッ!』

と思ふと、又しても、するりと體をかはされたので、泉谷君は、空をついて、なゝめに撞と倒れた。これがもし、三壘の近くだつたら、當然、走者を逸したのだが、幸ひ、二壘を去る三四間のところだつた。

その時だ、泉谷君は、倒れ乍ら、自分に向つて球を投げた。博士は、身をかはした刹那、體を立直さうとして、隙が出來たが、それにつけ入つて、つひに、刺すことが出來た。

博士が身をかはす、泉谷君が倒れる、球を投げる、私が受取る、——それが、同時に行はれた。もし、博士に、體を立直す必要がなかつたら、自分の球に觸れなかつたかも知れぬ。いや、危ない瞬間ではあつた。

『アウト！』

自分の此のタッチで、我軍は、勝鬨をあぐることが出來た。そして、このタッチが、一高の名譽ある覇權を、己れらの手に奪ひ取る機縁となつた。思うても見よ、此の瞬間の己れらの喜び！

自分は、その晩、夜つぴてまんじりともしなかつた。意外な勝利の爲めに昂奮して了つて、實際、眠らうとしても眠ることが出來なかつた。

それもこれも、二十五年の昔語、今、此うしてペンをとつて、其の時の情景をうつし出さうとすると、手がふるへてくる、心が躍つてくる、血が湧つてくる、——快なりしかな、六月一日。



烈女晴れの弓試合

一念凝つて現はす不思議の神技

小泉長三

弓拜見の願

足利四代將軍義持が、ある日微行で遠乘りを試み、双の丘のほとりへかゝつたとき、弓矢を携へた若い女を見かけた。

『何者ぢや、呼び止めよ』

仰せに道を避けようとしたその女を、近侍の士が呼びとめて義持の前へ連れて來た。

女は年の頃二十二三、賤しい身裝はしてゐるが縹緻はまことに美しい。さうして物腰もしとやかに膝まづいた。

『その方は何者ぢや。また何のため弓矢を持つてをる』

『わたくしは平岡のほとりに住む、賤しき獵人でございます』

『なに獵人——女の身で、弓で獵をいたすとな』

『はい』

『その弓矢、これへ持て』

『は』

近侍は女から弓矢を取りあげて、義持の前へ持つて來た。見ると弓矢とは名ばかり、手作りにした竹の弓矢である。

『このやうなもので獵が出來るかなう――そこな女、余の前で、何か射て見よ』

『はい』

ちやうど女が弓に矢をつがひたとき、一羽の小鳥が高い梢から飛ぶのを見て、無造作にひようと放した矢はあやまたず、小鳥の羽を縫つてそこへ落した。

『見事な手練ぢや――褒美とらす。望みあらば申せ』

義持は女の技倆に感じ入つてから言つた。

『お言葉にあまえ、お側まで申しあげます。わたくし弓を覺えましたのは、師匠を取つて教へをうけたのではなく、日々の生活を立てるため、鳥獸を獵して自ら習うたのでございますから、作法故實は存じませぬが、物を射中てることだけは、人に負けようとは存じませぬ。褒美を望めとの仰せゆゑ、恐れながらお願ひの儀がござります』

『遠慮なく申せ』

『高貴の御方樣とお見あげ申してのお願ひ。室町御所樣では端午のお節句に、小的の餘興をお催しと承はりました。一生の思ひ出に、拜見いたしたうございます』

『的矢見たいとな――滿更の賤の女とも思はれぬ、吉例外の餘興、身分に依らず見ること許してやる。また賭矢にも加へてやらうぞ』

『有難き仕合はせに存じます』

義持は近侍に何やら吩附け、馬を進めて行つてしまつた。

命を受けた近侍の一人は女に向ひ、

『既に存じをると思ふが、あの御方こそ御所樣であるぞ。お許し出たからは端午の當日、巳の刻に三枝靱負と訪ねてまゐれ、案内して取らせる』と、言置いて馬をあげ義持の跡を追うて去つた。

敵手賤の女

端午の節句、吉例の儀式を濟してから義持はくつろいで、弓に堪能な家臣の賭的を催した。

餘興ではあるが將軍が褒美を賭け、直々弓術の技倆を試めすのであるから、競技に選ばれた家臣はこれを晴れの試合として、一心こめて勝負を爭つた。

的は小的一組、一組は一尺二寸、一尺、八寸、六寸、五寸の五種あつて、內規（中心の星）の眞中に射中てたものを第一とする。射手は一つ的に二人、一人二筋づつ、試みて勝負を決する。五寸の的に向ふものは幕府の射術師範小笠原信濃守であるが、これは敵手に立つものがないので信濃守一人である。

數年前義持の近臣に內田隆昌といふ弓の名手があつて、自ら願ひ出て信濃守の敵手となつた。ところが志願した甲斐もなく信濃守に負けたので、義持は怒つて隆昌を放逐してしまつた。それからといふものは五寸の的は信濃守の一人舞臺と

なつてしまつた。

『靱負、かの女獵人はまゐつたか』

將軍義持は三枝靱負を側へよせて、囁くやうに訊いた。

『はい、控へさせてござります』

『身分を訊ねたか』

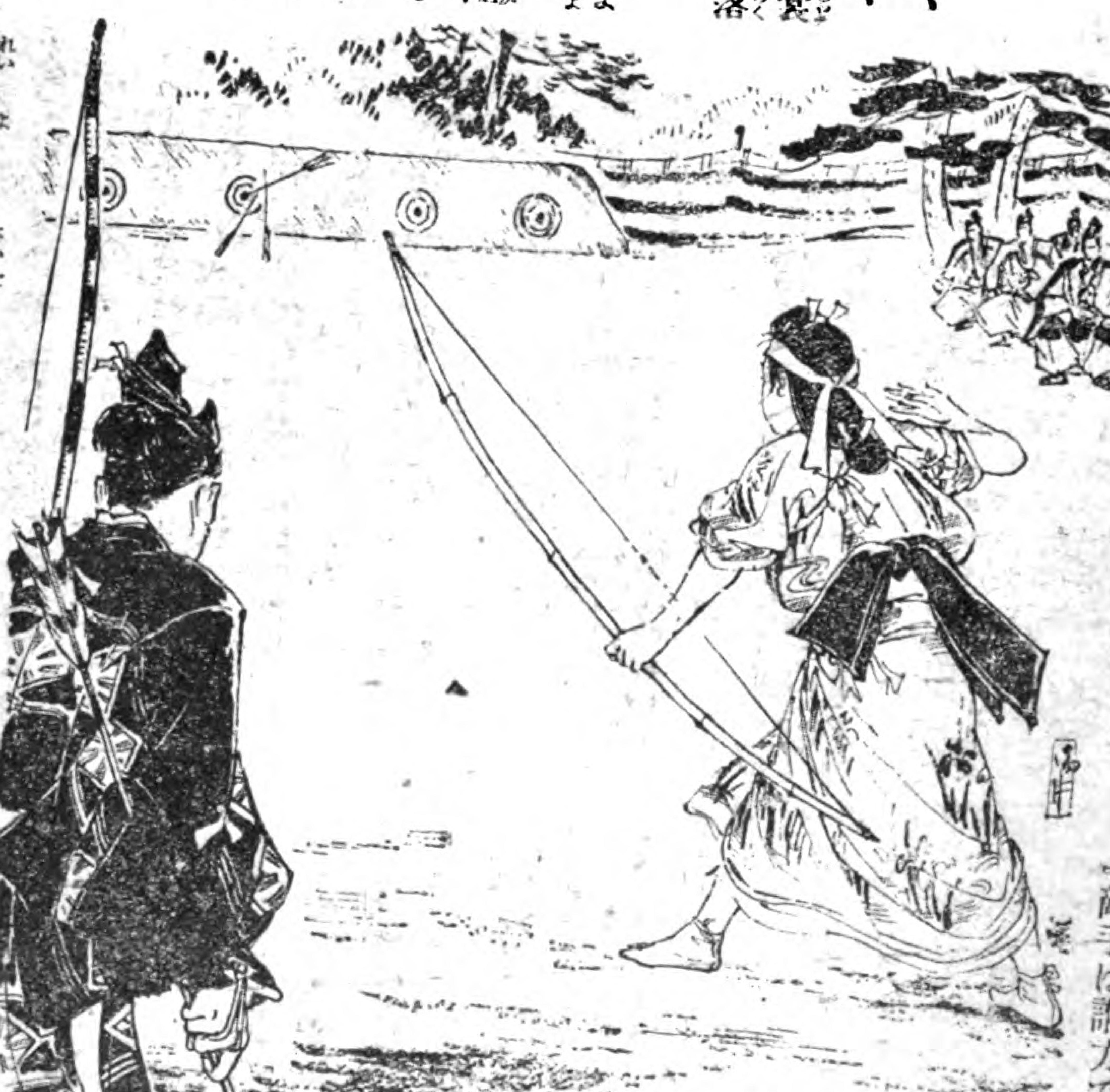
『訊ねましたが双の丘のほとりに住む、獵人しのぶと申す賤の女と申しますが、先日と違うて今日は粗末ながらも晴衣裳に着替へてをります。由あるもの丶零落したもの丶やうに存じます』

『今日はあの女を信濃の敵手にしてみよう』

義持は常に信濃守の技倆自慢を快く思つてゐない。嘗て近侍の寵臣內田隆昌を敵手に出したのも、本人の志願でもあつたが、義持も信濃守の鼻を挫いてやりたいからであつた。それが思ふやうにならなかつた癇癪まぎれ、義持は隆昌を退けてしまつたのであつた。

先日遠乘の途中、飛鳥を射て落した女獵人の手練を見たとき、女が的矢拜見を願つたのを幸ひ、それを許したのは常日信濃守の敵手をさせてみようと思ひついたからであつた。

競技は尺二寸の的から始まつて、六寸の的までおの〳〵勝敗があつて終ると、



例に依つて最後の五寸の的に信濃守一人向はうとしたとき、不意に近侍から上意として敵手と試ふべきことを沙汰された。

『敵手は誰方でござるな』

『御家臣ではござらぬ。三枝靱負身寄りの者、しのぶと申す女子でござる』

『ふむ——女子。上意とあらば畏まつた。敵手をお呼び出し下さい』

そこへ靱負に案内されて來たのは女獵人、今日は綿服ながら新らしい晴衣に着替へて、容色は一層美くしく見えた。

神妙矢筈割

信濃守は二筋の矢を取つて、まづ一矢を放した。さすがは天下第一人、射術を以て將軍家に仕へる信濃守、內規——五

寸的の內規は徑一寸、星よりも小さく見える——の眞只中へ矢を立てた。この上はしのぶが同じやうに內規の眞中を射ても勝負なしである。

と、しのぶは自分の的へ向かはず、信濃守の射た的を狙つて、ひようふつと放した。

『あッ』並居る人々の口からおどろきの聲が起つた。

しのぶの矢は、的に立つてゐる信濃守の矢筈に中り、立つた矢を二つに割いて的の眞中へすつくと立つたのである。

すると信濃守、小賢しとばかり弓に矢を番へて、しのぶの矢筈を狙つて放したが、わづかにふれてしのぶの矢と並んで立つた。

しのぶは更に二の矢を、切つて放した。わが一の矢に觸れず、信濃守の二の矢をまた矢筈から二つに割つて立つた。

『わッ』といふ感歎の聲、御前も憚からず射場を搖るがした。

この上もない面目をほどこしたしのぶは、やがて上意をうけた靱負の訊問に身の上をうちあけた。

聽取つた靱負は義持の御前へ出て、

『かのしのぶと申す女は、內田隆昌の妻でございます』

『なに、隆昌の妻となう。隆昌は今いづれにをる』

『五年前御勘氣を蒙り、双の丘に潜みましたが、御勘氣を苦にして長の病氣、その日の生活にこまつて、妻のしのぶは弓矢を持つて山へ分け入り、獵をして暮らしてをるうちに、神かけた一念が通つて今の手練を覺えたものだと申します』

『さても健氣な女ぢや。しのぶの貞節にめで、隆昌を召し返さうぞ』

義持は內田隆昌の勘氣を許して、元のやうに召し出した。

四段と無段の大激戰

盤上火を吐く瀨越七段の出世碁

岡田東魚



人氣の兩雄

『高部と瀨越と打たしてみたい、きつと面白い碁が出來るぜ』

『さうだ、高部と瀨越なら、面白からう、だが、どちらに分があるだらうか』

『そりや、高部だ』

『いや、瀨越だ』

と、寄ると觸はるとその噂。

明治四十一年のことである。思ひがけぬ二つの出來事が、棋界のファン連に、絶好の話題を提供した。その一つは、四段高部道平氏が、圍棋の本家本元と誇る支那へ遠征し、該國一流の名手連を、段違ひの格を以て、片つ端から連破したことであり、他の一つは、廣島縣の代議士望月圭介氏(現内相)が、國から連れて來た瀬越憲作といふ、やつと肩揚のとれたばかりの青年が、名だたる東都の猛者連と鬪つて、連戰四十餘局の内、敗局僅か二三番といふ素晴しさ、安藝小僧(棋聖秀策の異名)の再來と謳はれてゐることであつた

双方の人氣が高くなればなる程、この兩雄を鬪はせてみたくなるのは人情、早くも其處へ目をつけたのは、當時、東京朝日新聞の棋の世話をしてゐた安藤政得氏であつた。

『よしッ、この二人に、一番打たせてやらう』と、双方へ渡りをつけた。

あはや談判破裂

斯くてこの兩雄は、愈よ、盤上で相見ゆることになつた。時はこれ、明治四十二年の一月二十五日、處は本郷一丁目の伊藤甲子女史(二段)の邸であつた。

『では、如何いふことで?』

さて、いざ對局となると、第一に問題になるのは、手合のことである。角力や武術の立合では、強弱に關せず略同樣の狀態で始めるが、棋では力量の差だけの、ハンデキャップを附することになつてゐる。双方段があれば、一段半目の差の割合で、下手に石を置かせるのだ。これには文句のありようはない。然し困つたことには、強い強いと言はれるものの、瀬越氏はまだ段を持つてゐない。だが、唯免狀がないだけで、他の四段五段の連中に常先で立向ひ、連戰連勝の勢ひを見せ、凡そ二三段の待遇を公然受けてゐる際だから、瀬越氏の胸中では、無論高部氏も、しかく扱つて呉れるものと信じてゐた。然るに、高部氏の言は意外であつた。

『兎に角、君は免狀を持つてゐないのだから、二目置き給へ』

瀬越氏は、はつと顏色を變へた。

『それは困ります。他の四段五段の先生方に、先で向つてゐるのですから、どうぞ、先でお願ひしたい』

『そりや、いかん、僕は四段だ、段の權威上、無段の者と先で打つ譯にはゆかぬ』

高部氏は却却強硬だ。

然し、瀬越氏とて、當時到る處で、二三段の格で立合ひ、好成績を得てゐるのだから、體面上からも、背ふ譯にはゆかぬ。

『でも、貴君へだけ二目置くと他の先生方に濟みませぬ。どうぞ先でお願ひしたい』

『それは困る。兎も角、一番は二目置き給へ、打てぬやうなればまた考へもしよう』

『それは困ります。それに先年神戸でお願ひした時には、先でしたから、強ち今初めて對局する譯ではなし……』

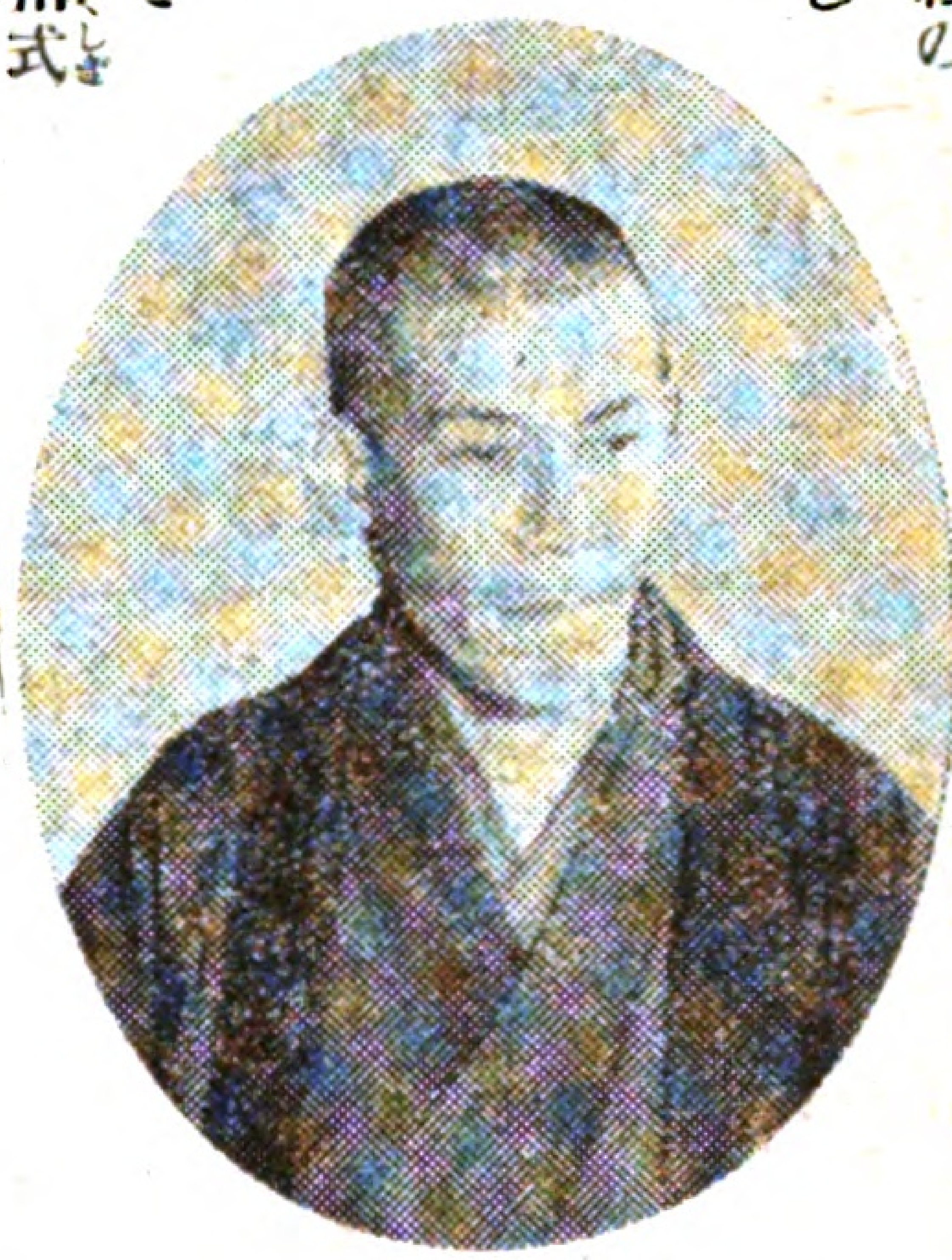
『あの時は、素人への稽古の意味だつたからだ、今は專門家としての眞劍勝負だから、問題が異ふ』

と、双方ともに譲らない。結局、談判破裂、物別れといふことになつた。すると、始終の様子を傍で見聞きしてゐた安藤氏は、この時やつと口を出した。

『双方の主張は共に道理がある。四段の者が無段の者と先では打てぬといふのも格式上當然の主張だし、他の先生方に先で向つて勝つてゐるのだから、先でゆかうといふのも無理がない。さりとてこの儘、折角の手合を中止するのも如何にも惜しい。こゝは一番、私に任かしては呉れまいか。兎に角瀬越君、君は先で打ち給へ、そして瀬越君が若し負けたら、先二（初段の格）の先番を負けたことにしよう、若しまた勝つたら、先相先（三段の格）の先番を勝つたことにしたら』



高部六段



瀬越七段

と提議した。

一番の勝が、十番の連勝に價するといふ破天荒な企てだ。だが、斯うなつては、双方共に退くに退かれない。いづれも『宜しい』といふことになつた。

惡戰苦鬪

斯くて戰ひが開始された。

今は意地でも負けられない、勝つて思ひ知らす外はない、萬一負けたら、當の相手にそれ見たことかと嘲らるゝばかりでなく、世間の冷評も怖しい。兩雄の立場は同一であつた。

これを外觀から評するなら、一は體軀堂々たる偉丈夫、一はこれ乳臭の消えさらぬ白面の青年、宛ら、荒鷲の前の小雀の感がある。然し、盤上の爭鬪は、智力を以て相搏つもの、形容を以て律し去ることは出來ない。

五手――十手と打進む程に、異常の緊張のために双方共に顔面蒼白となり、手は戰き、眼は血走り、凄氣見る者の胸に迫る。――その必死の覺悟が、早くも盤上に反映して、自ら成る死戰の形勢、着子と着子の相觸るゝところ、火を吐くかと疑はるゝ激戰となつた。

さはさりながら、強い強いと言はれるものゝ瀬越氏は未だ若年のこと、思ひも依らぬ相手の冷遇に、精神的に受けた打撃が大きい、手段の攻究、利害の打算よりも、ともすれば『汝れッ！』と思ふ感情が先走る。憤兵は敗るゝの慣ひ、次第次第に旗色が悪くなつた（してやつたり）とほくそ笑む高部四段。

戰端は晝頃に開始されたのだが、灯し頃となつては、誰が目にも局面黑に利あらざるが如く見え、二更、百手を過ぐる頃には、白の勝勢疑ふべくもなかつた。高部四段の顏からは、いつしか緊張味が失せて、傍の安藤氏を顧み、支那漫遊談を試みる程になつた。見やうによつては餘裕綽々、見やうによつては『それみたことか』と言はんばかり。

『あゝ、負け――か、殘念ツ！』

思はず呟いて、瀨越氏はハツとした。嘲けるが如き、高部四段の一瞥に氣付いたからである。その瞬間、總身の血が一時に逆流するかと思はれた。無念！殘念！

『死ぬまでも、死ぬまでも』

妙手はなきか、妙手はなきか、起死回生の妙手なきか。よし、五十年の生命を、此の一刻の考慮に消磨し盡さうとも、藝道の意地、敗戰の辱しめを受けたくはない。――

何處かで、一番鷄が鳴いた。

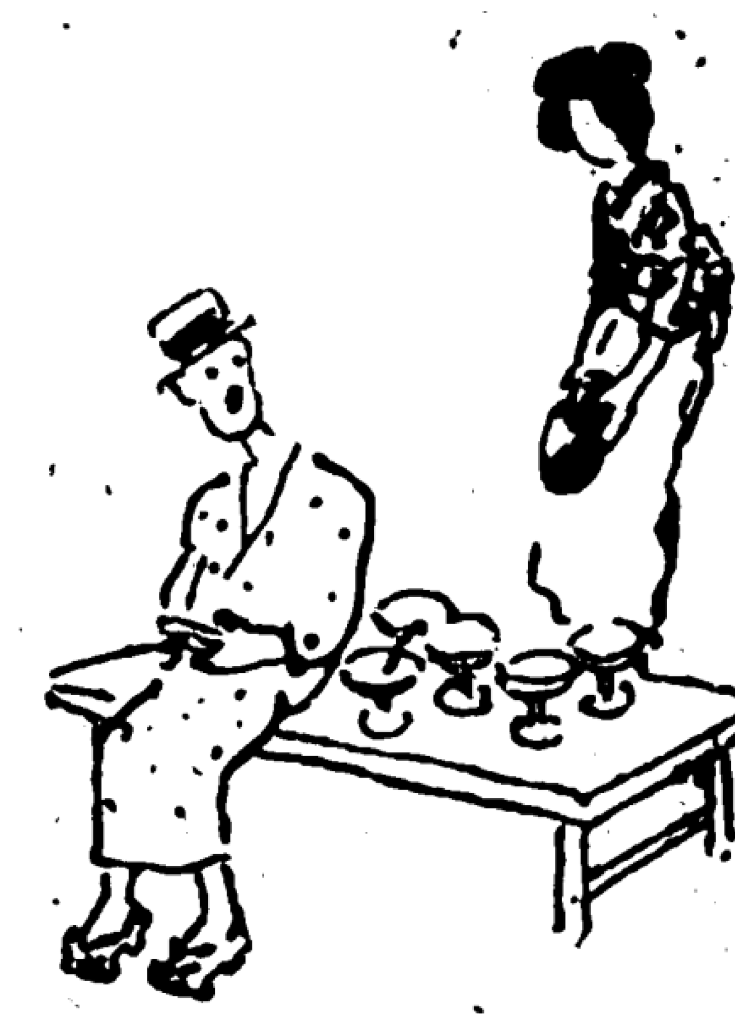
瀨越氏の考慮はなほ續く。僅か一宵の對戰に、顏容に憔悴の影さへ見えるも痛痛しい。此儘に放置すれば、空しくなるのではないかと氣遣はれる程である。やがて瀨越氏は、カラカラと碁笥を鳴らして『よしッ』と叫んだ。戛然――と石は盤上に鳴る。と見れば高部氏の顏に、さつと狼狽の色。

『おゝツ』と、呻くが如く、吠ゆるが如き嘆聲がその唇を洩れる。然し、これも曲者、敵の意外な逆襲に驚きながらも『さらば』と陣形を立直す。得たりとつけ入る黑軍、これより双方猛擊突進、再び大激戰となつた。斯して、



曉光の窓を訪れた時に、瀨越氏四目の勝となつて局を結んだ。

此碁は『四段と無段の爭棋』と題して東京朝日に掲載され、滿天下の碁狂を唸らした。角力の本場所に比すべきものに、碁界では日本棋院の春秋大手合がある。三段以上はこの勝負に所定の昇段點（平均七十點）をとらなければ、絕對に昇段させぬ規定である。昨秋、八十四點といふ得點の驚異的記錄を作つた、西軍主將瀨越七段こそは、實に當年の無段の青年であつて、これがその出世碁である。高部氏は今は六段、形のよき碁を打つので知られてゐる。





農理學博士　松村松年氏著

「驚異と神秘の生物界」を讀む

理學博士　石川千代松

松村君の此の書は生物界の事柄を最も平易に且つ最も面白く書かれたもので、ダーウヰンの自然淘汰說から、戀愛、生存競爭を說き、夫れから生ずる保護色本能の例と其の起因を論じ、又動物も教育をする事が出來るもので、人類の進歩が詰る處教育にあるものだと看破し、『天禀の才ありと雖も教育なきに於てはサルと相擇ぶ所がないであらう』と結んで居る處などは誠に面白い。

夫れから又話は移つて共同生活の面白い例を澤山揭げられたが、其の內に發光バクテリヤの共棲が拔けて居るのはサルも木から落ちるの感がある。話は夫れから又轉じて萬物不滅の法則を說かれ、蝶や、兎、虎、蚤、蚊等に就き面白い話を揭げられて、生命の神秘を說かれ、科學と哲學と宗教との關係も說かれたが、何れも皆最も興味ある事實を最も解り易い言葉で、しかも誰にもスラ〱讀める樣に書かれた許りでなく、何れの事實の後にも最も健全な結論が附せられて居るがこれも亦最も簡單平易で又流暢に書かれ、專門家が讀んでも面白いが、又文字が讀めるものならば誰彼の別なく容易に理解する事の出來るものだと私は深く信ずるのである。

實にハツクスレーが云うた樣に人間が動物である以上動物學上の知識は職業が何んであるに關はらず、誰も一通りは知らなくてはならないのである。松村君の此の書は萬人が讀んで動物に關する一般の知識を得るには最も適當なものであると感ずるものである。

但し驚異と神秘と云ふ見出しを見て或は特種の書であると思ふ人もあらんが、其の實此



川越しは 臍へとゞくと どつきりし（夜叉郎）



若夫婦 いたちごつこを 見つけられ（鯛坊）

谷脇素文先生著

『川柳漫畫うき世さまゞ』より

定價二圓三十錢送料十二錢本社發行

の書は動物界にある事柄を掲げられ之に最も穩健な說明を付けられたものであるから、學者でも政治家でも女でも子供でも安心して讀めるものである。

之に依つて本邦人の動物學の知識が普及せられ人間も他動物が支配されてゐる大きな法則に從ふものであると同時に人間は又之等法則を知つて向上する事が出來れば、私許りでなく、誰も悅ばねばならない。故に私は此の有益な著書に對して松村君に滿腔の謝意を表する許りでなく、又大いに之を紹介したいのである。

（定價二圓三十錢送料十二錢　大日本雄辯會講談社發行）

『維新風雲回顧錄』を讀む

樞密顧問官男爵　田　健治郎



自分は、嘗つて明治十五年の頃、暫く土佐に滯在した事がある。當時、私の借りてゐた家の家主が藩の記錄の整理をしてゐたため、私は土佐を中心としての勤王家の間に往復された澤山の文書を讀む機會を得た。これによつて當時、雄心勃々たる私の若い心が、どんなに刺激された事か分らない。

然るに今回田中老伯口述による維新風雲回顧錄を贈らるゝに及び、一讀、當時を回想して舊知に逢ふが如き感がした。

明治維新成つて爰に六十有餘年、當時の勤王家の生存する人、殆ど無い。實に田中老伯こそは唯一の人と言はねばならぬ。其の唯一の體驗者たる老伯より親しく志士の面々の活躍を聞く。一面興味津々たるものあると共に他面先輩の國を思ふの至情、活躍、實に吾等の胸を打つものがある。

本書は洵に、史外の記錄にして貴き維新の史料たると共に、靑年子女修養の伴侶として廣く天下に讀まれん事を望んで止まない。（田中光顯伯爵著『維新風雲回顧錄』定價二圓送料十二錢本社發行）

家庭小說界の巨星菊池幽芳先生の名篇

「妖美人物語」出づ

『己が罪』『乳姉妹』等の名作を出して全國幾千萬の士女を惱殺せる作者が全力を傾倒せる最近の傑作

尾崎紅葉歿して明治文壇の凋落しかけた時、彗星の如く現れて活躍し出したのが菊池幽芳先生、小杉天外先生などであつた。爾來盛名隆々、圓熟せる手腕は一作を出す毎に讀者をして熱狂歎讀せしめずには措かず、眞に二十世紀を飾る大作家と言はるゝに至つたのである

天外先生は、先に不朽の名作と稱せられる『魔風戀風』以上の會心の作『眞空鈴』を上梓して好評を博してゐるのであるが、『己が罪』『乳姉妹』を始め、『彼女の運命』『白蓮紅蓮』等の名篇を發表して、明治大正を通ずる全國幾百千萬の讀者を魅了し惱殺し盡し、異常の波動を捲き起して洛陽の紙價を高からしめた幽芳先生も、一年有半の心力を注いで物せる畢生の力作『妖美人物語』を此の程愈よ出版されたのである。

數奇な運命の下に轉々とする青年信一は、世にも類なく艶麗な美女千鶴子と、或突發事件後同じ家に起伏する身になつた。が、端なくも此處に醸され

本社發行　評判の名著

△破軍星　行友李風先生著

美しい二八娘と、彼女が捜す二人の從兄を中心に捲起された痛烈悲壯の幕末物語である。（定價一圓三十錢送料十錢）

△あゝ玉杯に花うけて　佐藤紅綠先生著

近來少年讀物として全く破天荒の賣行を示してゐる大傑作。全篇火の如き熱と誠と愛に溢つてゐる。（定價一圓五十錢送料十錢）

△次男坊　佐々木邦先生著

吾人のユーモアを堪能したやうな脫線家正晴君の生立記。他人事とは思へない擽つたい笑ひの傑作。（定價二圓送料十二錢）

△豹の眼　高垣眸先生著

北米アリゾナ大高原の一角に立つた身の毛も逆立つ大爭鬪。快男兒黑田杜夫と怪盜ジヤガー。思はず手に汗握つて息はずませる面

た焼きつく様な戀の葛藤。純情なる處女の愛に生きんとする信一を求めて、己が身の秘密も不純も、異なれる己が肌の色をもひた隠しに隠し、謎かけるが如き媚態と甘語と秘戯を盡して、或は含羞む乙女の如く、或は奔放なる色魔の如く迫る妖美人、千鶴子の切なる思ひ、苦心、血を吐く懊惱と、巧みに避けようとする信一の努力は、實に深刻を極めたもので、讀む者思はず胸を震はせて共に惱み共に歎くであらう。その新鮮巧妙なる人情描寫、性格描寫は、流石に先生得意の筆と感嘆せしむるものがある。

岩田專太郎先生の麗筆になる美しい羽二重表紙、金文字入りで美麗箱入。

（定價二圓三十錢送料十二錢　大日本雄辯會講談社發行）



新刊良書紹介

○**雄辯法講話**　加藤咄堂先生著　定價二圓　送料十四錢

演説腹案の立て方、壇上に立つ用意、座談の急所、講演の要訣、あらゆる言表のあらゆる場合を模範例つきで述べた無比の良書。

○**華鬘**　加藤武雄先生著　定價二圓三十錢　送料十四錢

非凡なる構想力と、優麗なる才筆を以て、四人の男女を舞臺に出し、男女兩性の愛慾生活を縦横に描いた長篇新小説である。

（以上何れも大日本雄辯會講談社發行）

白さ痛快さ。（定價一圓六十錢送料十錢）

△**東西婦人觀**　佐藤紅緑先生著

『戀の蟲』『美人論』『男の恐怖時代』等内外古今の女性を或は禮讃し、或は諷刺し、或は素破抜ける快著。（定價二圓送料十二錢）

△**薔薇の戯れ**　片岡鐵兵先生著

その感覺的描寫、清新優麗の筆致、變化あるテーマは、新時代の乙女の血潮を高鳴らしめずに措かぬ。（定價一圓五十錢送料八錢）

△**町の人々**　佐藤紅緑先生著

廢頽せる現代社會に對する著者の烈々たる信念を、一青年に託して述べた尾崎行雄先生推賞の大政治小説。（定價二圓送料十二錢）

△**ムッソリニ傳**　澤田謙先生著

全世界に轟くムッソリニの名を知らぬ者はない。本書は僅か數ケ月間に十數萬部を賣り盡した快著。（定價一圓二十錢送料十錢）

△**眞空鈴**　小杉天外先生著

奔放なる絶世の美女を繞る金持の男爵、大盗團の親分、老詩人、牧師、青年士官等互の爭鬪から、捜れば捜る程驚くべき怪事實が發かれる。（定價一圓二十錢送料十二錢）

家庭セクション

顔色でわかる病氣の數々

■腎臓病心臓病の人　皮膚が黄色くむくみ、とりわけまぶたが腫れぼつたく見えます。

■胃腸の惡い人　矢張り色は黄色く、皮膚に油氣が無くガサ〳〵して居ります。

■婦人病の人　皮膚が青黒く木目も荒く、時としては顔面にニキビやしみが出來て、一見トゲ〳〵しい感じをしてゐます。

■呼吸器の惡い人　とりわけ結核患者の皮膚は大變敏感で、一寸したことにでも昂奮して赤くなります。しかし、平生は貧血で顔色青く綺麗に透き通つて居ります。

■内臓に病氣があると　顔の皮膚の色が變るものですから、御婦人方などは化粧でごまかさずに根本から癒さなければなりません。

衣紋の筋

袷から單衣、單衣から薄物と、その季節季節に衣更へされる女の姿を見ると、世界が一新したやうでこゝろよいものです。しかし其着物の衣紋にきゆッと一線深く、一年間のたたみじわがついてゐるのを見ると、女のやさし味を失つて見せます。寒くなつてあたふたと引ずり出して着た男の外套にも、これと同じやうなしわを見出すことの多いものです。『あの人奥さんがあるのかしら』と思ひますが、其實、今の奥さんでそれほど用意のある人は少いのです。

滑稽　臺所問答

△『お鍋で飯を炊いてもいゝの？』
○『えゝ、カマはないのよ！』
△『ゼンは急げっていふからお膳を先に出しませうか？』
○『いゝえ食卓を出してチヤブダイな』
△『ソースがないからオシタジへカラシを入れて間に合せませうか？』
○『シヤウイウことに致しませう』
△『お豆腐を買つて置いてくれましたか？』
○『トーフの昔に買つてあります』



けづりかつを

○近頃ボール紙の箱に入れた、簡便けづり鰹節を賣つてゐますが、持つて見て、目方の輕いものが宜しい。（但し、箱によくつまつてゐる事を確めて）目方の重いものは、上等ではありません。けづりかつをと稱するものの八分通りは、鯖、鰯を原料としたものと思へば間違ひありません。

手數要らずの顔面體操

朝、洗面後鏡に向ひ、目、鼻、口、眉等の筋肉を思ふ存分活躍させ



一語千金

○早寢と早起とは、人をして健全ならしめ、富裕ならしめ、又賢明ならしめる。
○『賢人は聞き愚人は語る』
○成功の道は事業を追ひかけて進むにあり』

るのです。マッサージと共に、これを毎朝二三分繰返せば、顔の美しさが見違へるほどになり、無愛想の人も自然愛嬌顔になります。外國の俳優が表情に長けてゐるのは、皆なこの顔面運動の結果だと言ひます。

美味しくて簡單に出來る漬物

ヤタラ漬

材料。胡瓜二本。茄子三個、青紫蘇少量。キヤベージ五六枚。西洋人參一本。新生姜少量。鹽五勺。



胡瓜は洗つて皮のまま、竪二つ割として芯を取り去り薄く小口切とします。茄子はへたを取つて竪四つ割として更に横に一分位に切り、青紫蘇は二三枚合せて竪に巻き細く切ります。キヤベージは幅一分長さ一寸位に切り、人參は五六分の千に切ります。生姜は皮をむいて二三分の千に切り、以上全部の材料を洗つて笊に揚げ、鹽を分量の半分だけふつて、手で輕くもみ合せ、出汁をすてゝかるく絞り適宜の鉢か桶に入れて鹽をふりかけ、輕く重石をいたして置きませば、五六時間後には甘しく食べられます。

消化の惡い食物

(1) 茶漬飯　(2) 汁掛飯
(3) 搗きたての餅　(4) 極熱い食物
(5) 早飯

油斷大敵

東京市學校衞生技師　岡田道一

△秋は喰べ物が美味しい時です。喰べ過ぎて胃腸を害はない様、腹八分目が大切です。

△肌心地がよいので知らず知らずお腹を冷して、腹痛下痢を起します。お腹の冷えぬやうに、腹巻をして寝るのが安心です。

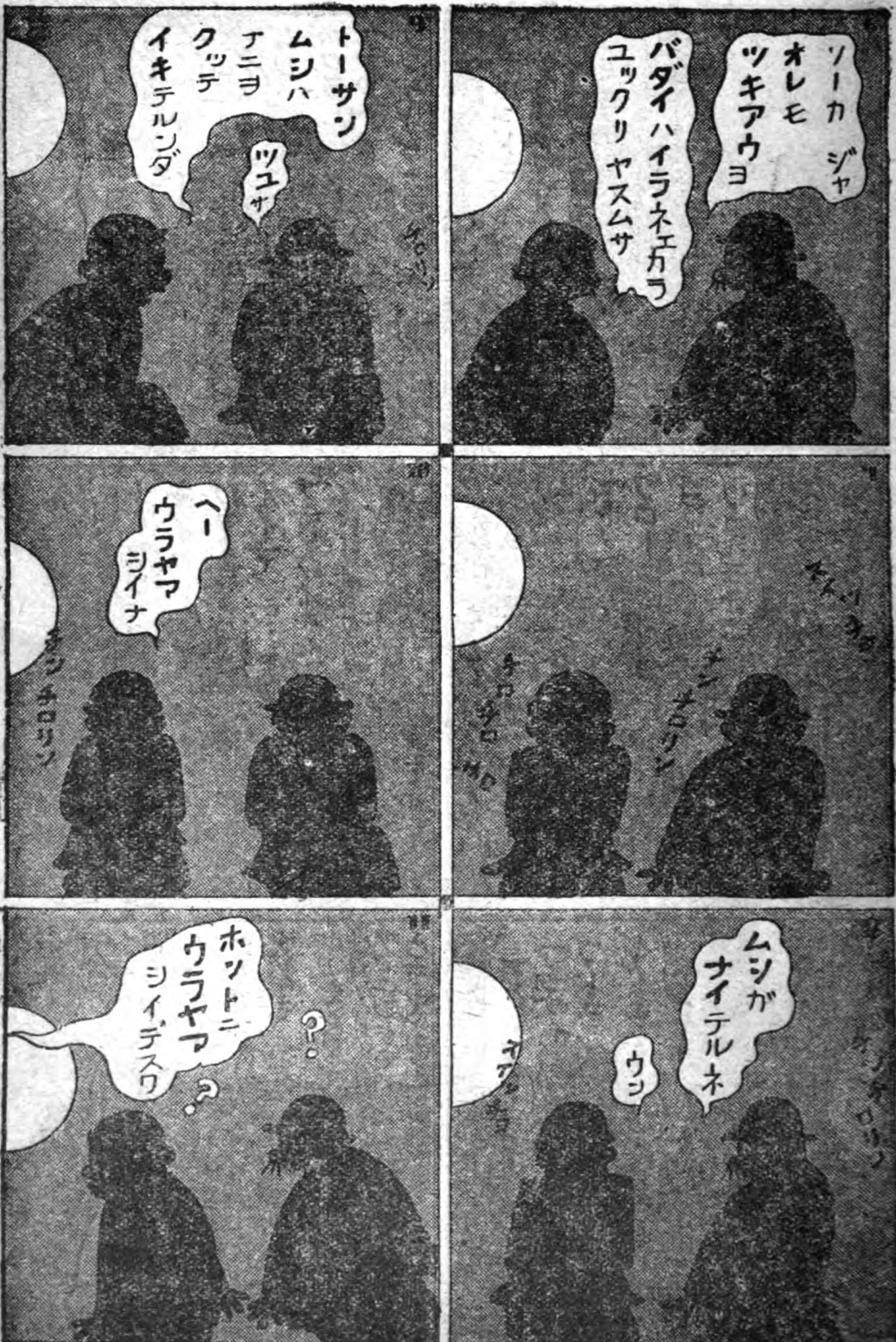
△秋には、まだ腸チブスが多いから、用心のために豫防注射が必要です。もう一つ氣を附けることは、慣れないものを無暗に喰べぬこと、また、汚れてゐる生のものを喰べないことです。

△子供に生の野菜を與へる時、うつかり不潔なものを喰べさせると傳染病にかゝつたり、寄生蟲に冒されます。それで野菜を喰べる前に、濃い鹽水の中に充分に浸して、後に清水で洗へば大丈夫です。

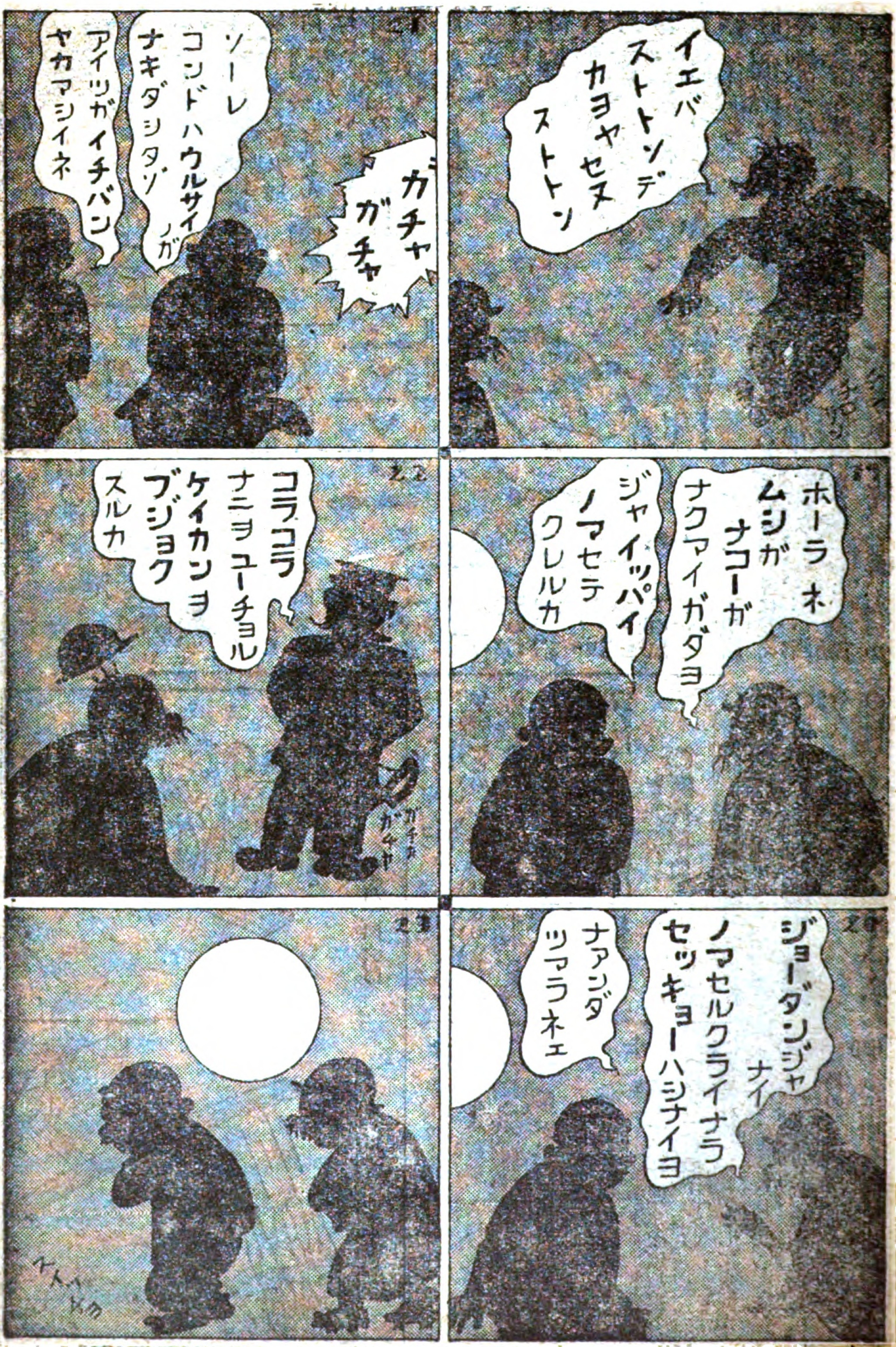
△秋の流行病で一番恐ろしいのは、死亡率の最も高い猩紅熱です。病人の衣服、食器は病菌の媒介者ですから、患者に近づかぬのが賢明。




ノンキナトーサン
麻生豊作
タイショー キョーモ シゴトニ アブレタナ
オラー カンガエタヨ アブレルノガ オイラノ シゴトダッテ
ナルホド エライ ハツメイダヨ
エラクテモ 一モンニモ ナラネエ
ヤレヤレ ヒガクレタ アブレテモ ヤレヤレダ
オマンマニモ アリツケネエ ヤレヤレダ
タイショー ミロヨ オツキサマガ デテキタゼ
イマゴロ ハラノヘッテル トキニ ヨーハネエ
オイオイ ソンナ トコロニ スワリ コンデドースル
モーイッスンモ ウゴケネー


ソーカ ジャ オレモ ツキアウヨ
バダイハイラネエカラ ユックリ ヤスムサ
トーサン ムシハ ナニヨ クッテ イキテルンダ
ツユサ
ヘー ウラヤマシイナ
チンチロリン
ムシガ ナイテルネ
ウン
ホントニ ウラヤマシイデスワ
?
?


ムシヨキクヨユーガアルンデスモノ
フーリューデスワ
ムシハボクラヨウタッテクレテルノデスヨ
トーサンキイタカワカイモノハイイナナニヨキイテモウレシインダカラ
ウラヤムナウラヤムナウラヤムトキリガナイナンデモキノモチヨーダ
ソレニシテモウラヤマシイ
ホントニウラヤマシイワ
ヒトノクローモシラズニウタッテテ
ナタイショーアンナフーニキクヒトモアル


イエバ
ストトンデ
カヨヤセヌ
ストトン
ホーラ ネ
ムシガ
ナコーガ
ナクマイガダヨ
ジャイッパイ
ノマセテ
クレルカ
ジョーダンジャナイ
ノマセルクライナラ
セッキョーハシナイヨ
ナアンダ
ツマラネエ
ガチャ
ガチャ
ソーレ
コンドハウルサイノガ
ナキダシタゾ
アイツガイチバン
ヤカマシイネ
コラコラ
ナニヲユーチョル
ケイカンヲ
ブジョク
スルカ
ガチャ
ガチャ



娛樂室

◎滑稽問答

問　金は男性か女性か。
答　子を産む故女性。

問　戰機熱してどんな味か。
答　血腥い。

問　癇癪玉の直徑は何の長さ。
答　胸三寸。

問　思案の首は投げても割れぬか。
答　しをるゝばかり。

問　詞の揚げ足は左か右か。
答　いさそく取るから左。

問　盂蘭盆に何を乘せる。
答　先祖橙（代々）

問　味噌をつけて何を食ふ。
答　お目玉を。

問　赤貧洗へば何色となる。
答　無色となりて見る影もなし

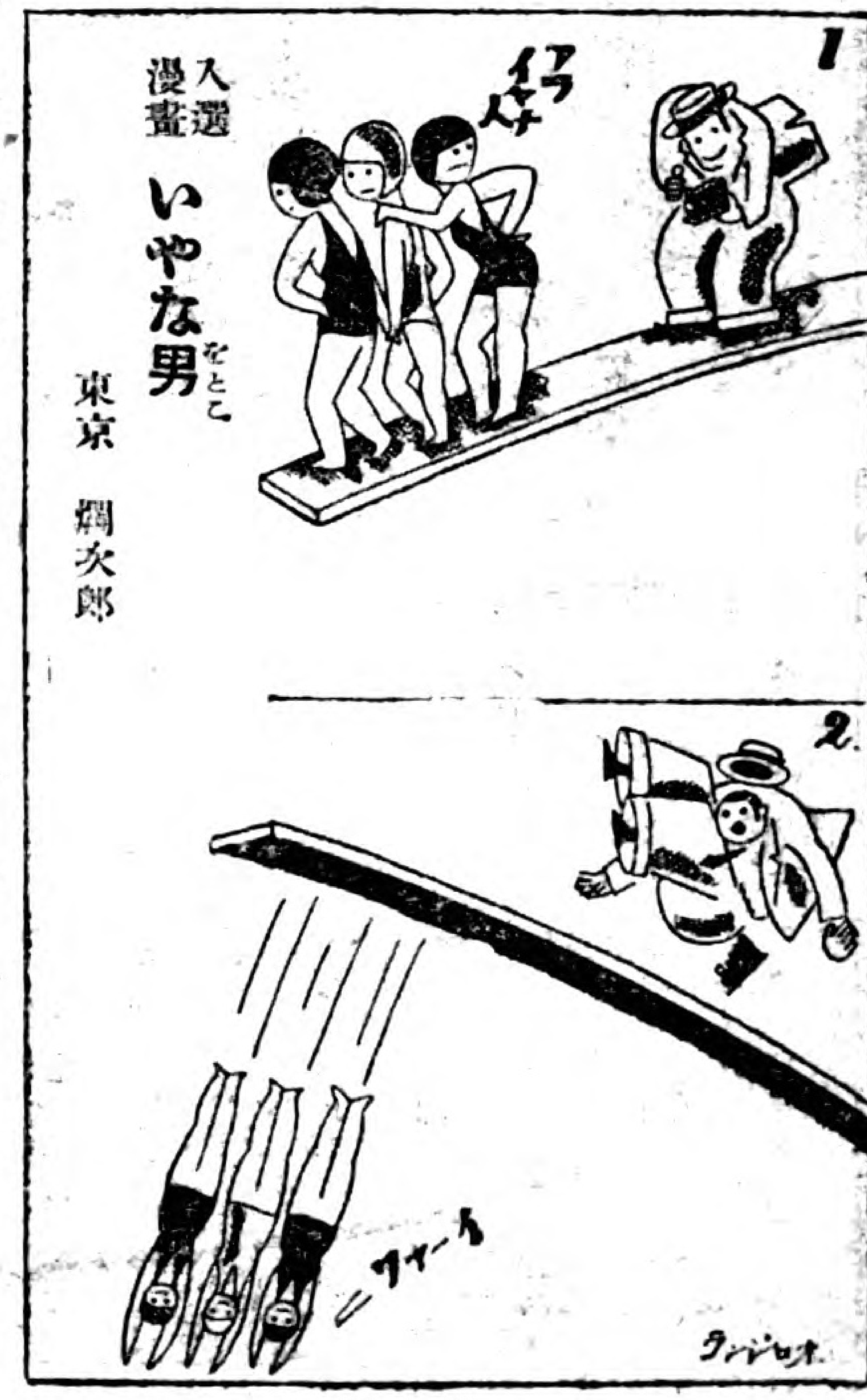
問　燃ゆる思ひはどうして消す
答　情の露で。



滑稽義太夫

三勝半七　魚屋の段

今頃は半平さん、魚に泥鰌でござらぞ、鯔鮭蟹らぬ鯒海鼠、鰌と海豚の鮟鱇蝦蛄とび秋刀魚鱸にめいじ、小鰭なしたる鮭鰹どの、鮹に蝦烏賊しやこに鮹、半平さんの刺身もなほり、ご鱗車魚も鮎まいに、鱧へば鱧へばこの鮫が去年の鰤のわかさぎいいに、いつそ鯡で白魚たら、海鼠腸いい、なまこはあるまいもの、沖に見えぬと知り乍ら、鯡なわらさがい鯔ゆゑ、鯉鱒はかながしらと、お鯖にゐ鱵と辛抱して、蒲鉾いいたのがいいうにの腸、今の思ひに海月れば、一年鰤にこのしろが、いいひものまぐろか鱶なんだ、鯔へてたべ半平さん、いいわしやこの魚に思うて海豚、いいうるめ鰯はつゆ河豚も、お魚を思ふ眞實心に、いよく鯨馬鹿貝りなり。



入選漫畫　いやな男
東京　燗次郎

◎新作早口

○茶會社の社長茶瓶で茶會社の社長さん。

○あの土手を唐人が提灯屋まで提灯もて通る。

○福助ふくふく福袋、ふくふくかついで福かつぎ。

○させ干せ雨傘、人に貸すな唐傘。

○二條の西洞院西入人形堂の二階で鷄が二羽西向いて逃げた。

◎考へ物

(一)　盛りて出す氷水をば取落し。（百人一首の下の句）

(二)　是れ程に意見をしても聞かざれば。（臺所道具三つ）

(三)　義經は舟八艘を苦もなしに。（鳥の名三つ）

(四)　二十四を分けて出來たる小間

(五) 物は。(髪道具一つ)
お母さん、坊のおかずは、何アに?(國名三つ)

◎皮肉くらべ

肥つた男『何だい、君は骨にたのまれて皮を着てゐるのかい?』
痩せた男『何とでも云ふさ、肉に頼まれて脂を着てゐる男もゐる世の中だからね…』

入選漫畫 **擧動不審**

擧動不審の男が路地にかけ込んだ。さては、と巡査が跡を追ふと、彼の男はいら〳〵と小便をしてゐた (横濱つねや)



切れた繪

凸坊が惡戯して清ちやんの繪をこんなに切り離してしまひましたが、清ちやんはその切れ端を一つも殘らず集めておきました。どんな繪であつたか、皆さん一つ清ちやんに代つて合せてみて下さい。



◎なぞ〳〵

◇お髭の塵を拂ふとかけて、帆だけ見える船と解く。心は?(お氣(沖)に居る)

◇親友とかけて、拍子木の音と解く、心は?(氣(木)が合つて成(鳴)る)

◇成功の秘訣とかけて、獨樂と解く。心は?(いゝ、しんぼうが第一)

○詰將棋新題

八段 大崎熊雄出題

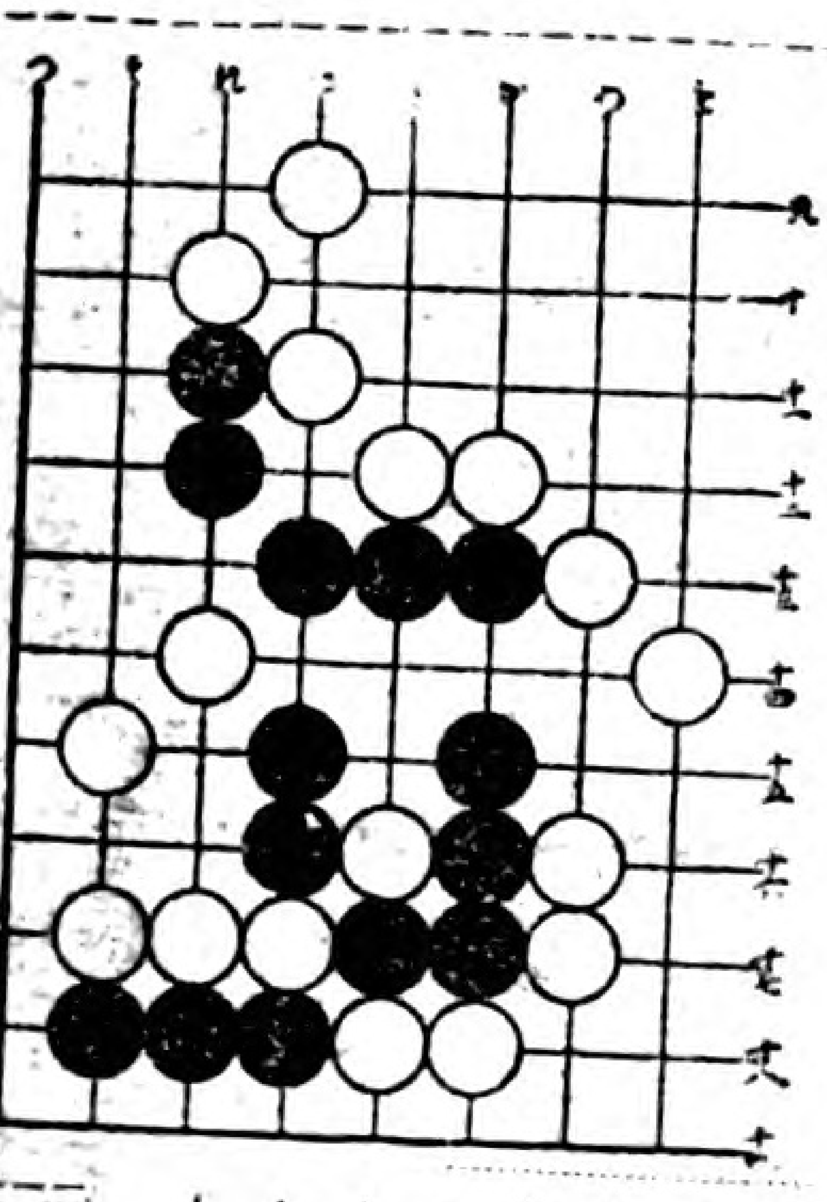


持駒 角、桂、歩

○詰碁新題

五段 福田正義出題

黒先にて結果は如何?



○將棋必至の研究

七段 溝呂木光治出題



持駒 △攻め方金、銀 ▲防ぎ方殘り駒全部

○聯珠新題

珠叟 清水香石出題

此問題は最近或る競技大會席上で有段者の手合せに現はれた局面です。黒(五)の(六)の所に打つのが定石ですが(實戰上の法則)後手方からそれを兼ねたので闇の如く打つたのです。そこで白(十二)迄打進んだ時黒方の考へでは、白は次から(いろ)の順で勝つ目算だなと見たので熟考の結果(十三)と打つて先手で止めた積りでしたが何ぞ計らん白は(十四)から最も簡單に勝ちました。それはどう打つたのでせう。



本欄解答は本文三三九頁にあります

舞臺に於ける
手拭の使ひ分け

荻　鴻之助



いがみの權太

役者が舞臺で手拭を使用することは、非常にむづケ敷いことになつて居る。何故なれば、侍、職人、商人、百姓と、各階級各職業を通じて、此の手拭の使ひ方一つで其の人に成り得たり成り得なかつたりするからである。芝居の種類を問はず、つまり時代物、世話物など云ふ種類には拘泥しなくつても、役者がその扮した人物を完全に演り了せるには、手拭の使ひ分けに、人の知らない苦心をして居るのである。

◇淺黃の手拭……同じ淺黃の手拭でも、濃い色のは野暮な人物を演出する時に用ひ、水淺黃のはイナセな人物に扮する時に使ふ。

淺黃の無地は、主として侍等に扮した時に持つ。持ち方は、十六折りにして、右の手の食指を延ばした儘で握り、坐つたり腰掛けたりする場合は、右の膝の上にその右手を置く。さうすると、自然と品格が崩れないので侍に見えることになる。又愁嘆場などで泣く時は、手拭は八ツに



肩に手拭をかうかけるとイナセに見える

古今風流函

◇金銀がなくては

糟粕園文車の隣りにいたつて將棊好きの醫者殿があつた。

さて一年の大つごもりとなつたが、本職をそつちのけにして將棊ばかりに凝つて居るので、御禮を持つて來る者はないが、米屋、八百屋、酒屋なんど借金取りは遠慮なく押しかけて來る。流石に堪まらなくて文車の許へ逃げて來て、『借金取りが丸で京車のやうにつき込んで來る、どうしたものだらう』と頭をかくのを見て、文車は一首を詠んだ。

下手將棊さすがの醫者も金銀が
　なくては事をかくの仕合せ

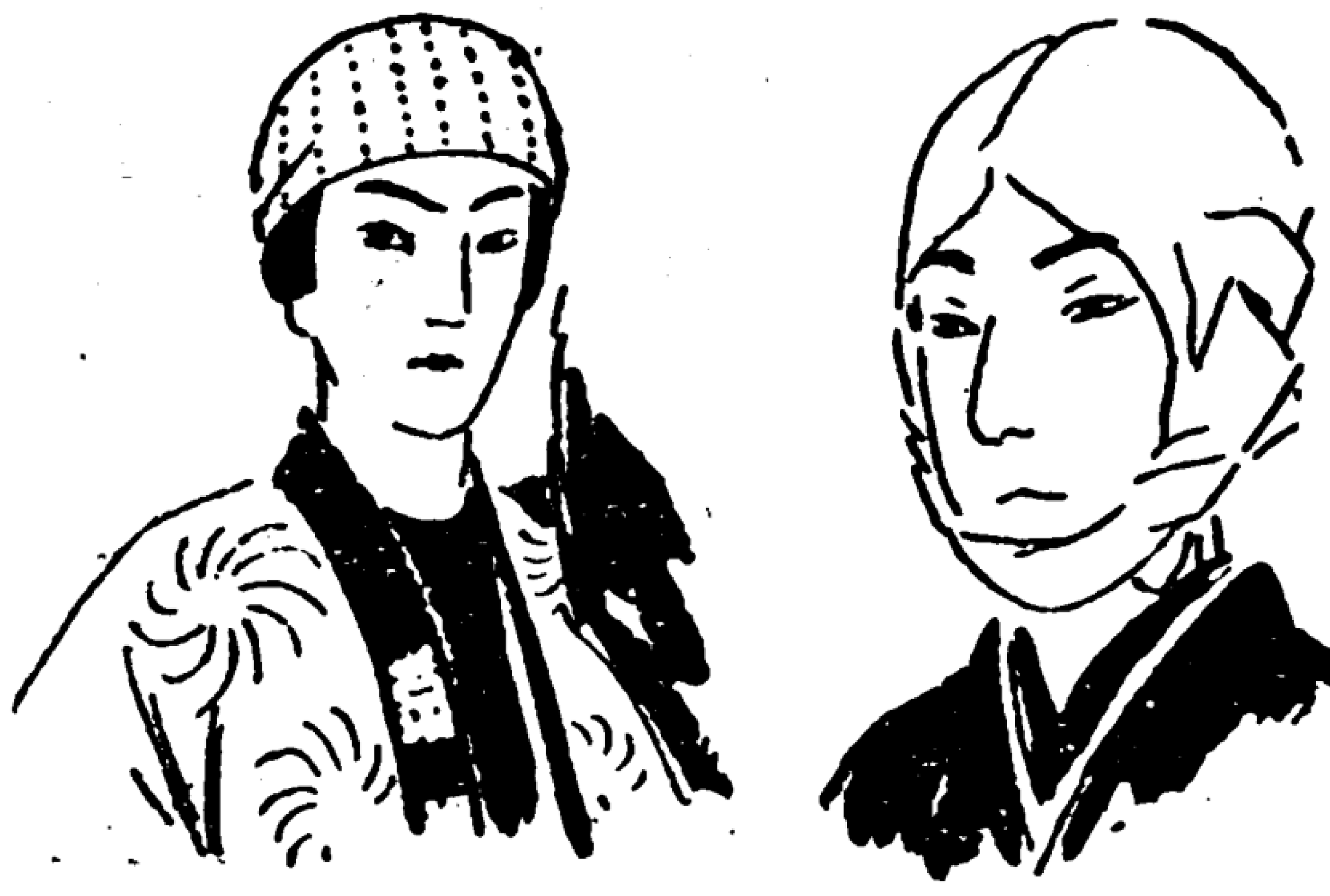
◇烏羽の書

敏達天皇の御時、高麗の國から書を持つて來た。烏の羽に書いてあつたので誰も讀めなかつた。その時、王辰爾といふ人があつた。ふくさのきぬで、その上を強く押したので、鮮かに國書がうつつた。

疊んで、その眞ン中に食指を入れて二つに折り、涙を拭くのである。

水淺黄のイナセな持ち方にも、時代物と世話物とでは違つて居る。細長く八ツに折つた手拭を鷲摑みにすれば時代になるし、今一ツ折つて手へ握り込んで仕舞ふと生世話の時の持ち方になる。

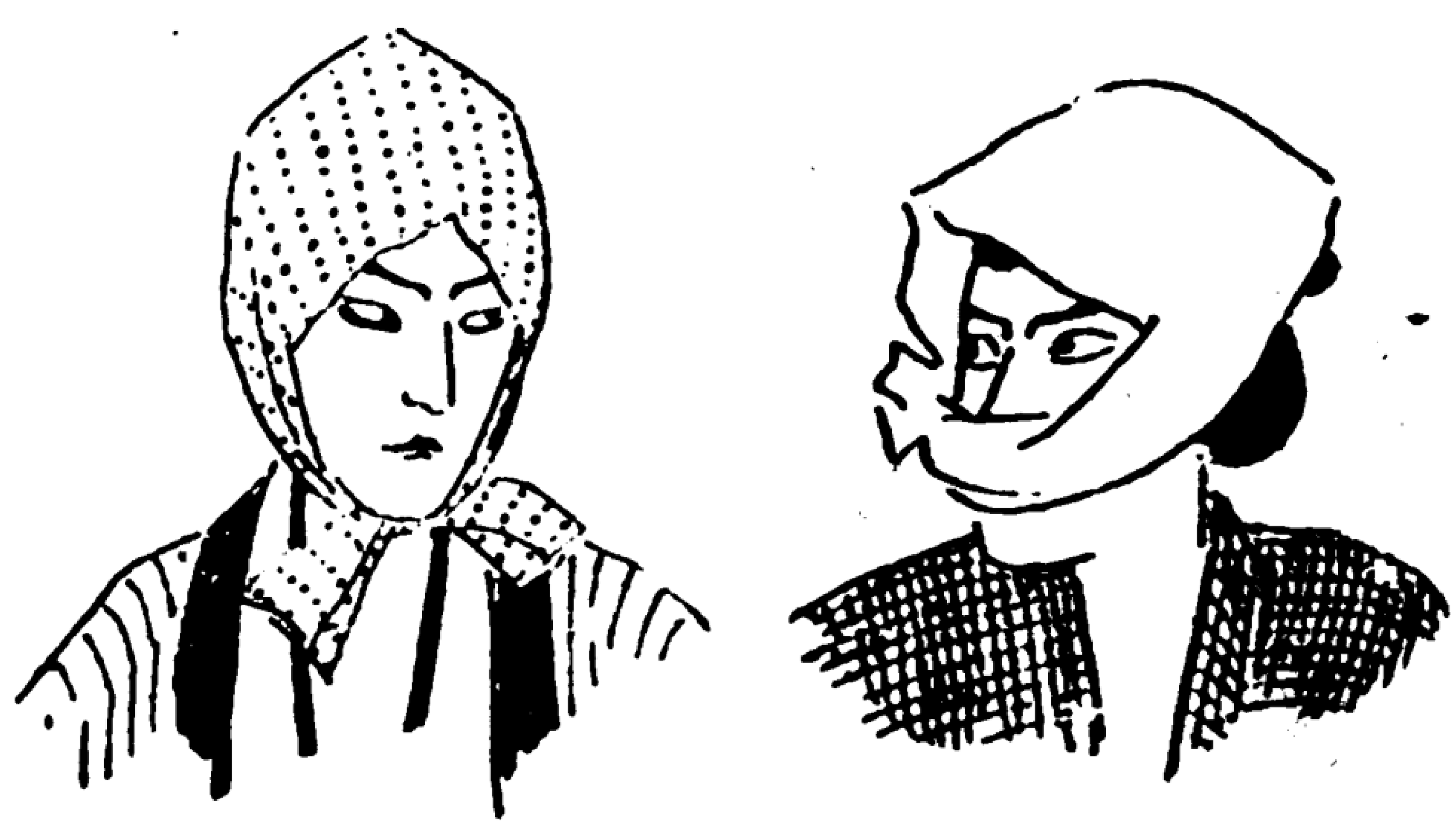
又、手拭を細長く二つに折つて、一寸肩へ掛けるのにも、時代なら兩端をチヤンと揃へて掛けるのだし、世話なら、却つて揃はないやうに掛けるのである。



優にやさしい頰かぶり　意氣な南瓜かぶり

◇頰冠……頰冠りには區別がある。傳兵衛とか忠兵衛とかの頰冠り

の仕方は、時代で色氣を持たせなければ不可いのであるから、水淺黄をフウワリと冠る。白い手拭を頭から掛けて左の耳の下で挾むと時代で野暮に見え、これを鼻の下で捻つて一寸と挾むと非常にイナセになる。



盜賊かぶりと豆しぼり——どちらも物凄い

◇南瓜冠り……盜賊冠り此の二種類は、芥子玉の豆絞りでは生粋になつて了ふが、山道だと凄くなつてゐるのである。

黒手組の助六、池の端の道行に出る番頭の權九郎や、油屋の人形振へ出る番頭の善六などのやうに冠れば三枚目（道化

或る人がこのことに寄せて戀を歌つた。

わが戀は烏羽にかく言の葉の
うつさぬほどは知る人もなし

◇紀の景雄の朝寢

靑山樓紀の景雄は備前香々登の人で朝寢で有名であつた。或る人が、『そのやうに寢るばかりゐて一體何が樂しみなのでござるか』と訊ねた。すると景雄は詠んで

世の中にたのしきものはあかつきの
鐘をきゝつる又むすぶ夢

娯樂室解答 ――本文三三七頁―

［著へ物答］
（一）我衣手に雪は降りつゝ。
（二）釜、椀、手桶（釜はんで吊け）。
（三）鳶、鵜、鶴（飛び移る）。
（四）護謨櫛（五六九四）。
（五）出羽、能登、土佐（いつもの魚さ）。

［詰將棋］
△八四桂▲八二玉△九一角▲同玉△七一飛ナリ
▲八一銀△九二歩▲八二玉△七二桂ナリ▲同銀
△九一飛ナリ▲七三玉△六五桂▲六二玉△五二
歩ナリ▲同玉△四一龍▲六二玉△五三桂ナリ▲同玉



重くるしい鉢巻　　輕っぽい鉢巻

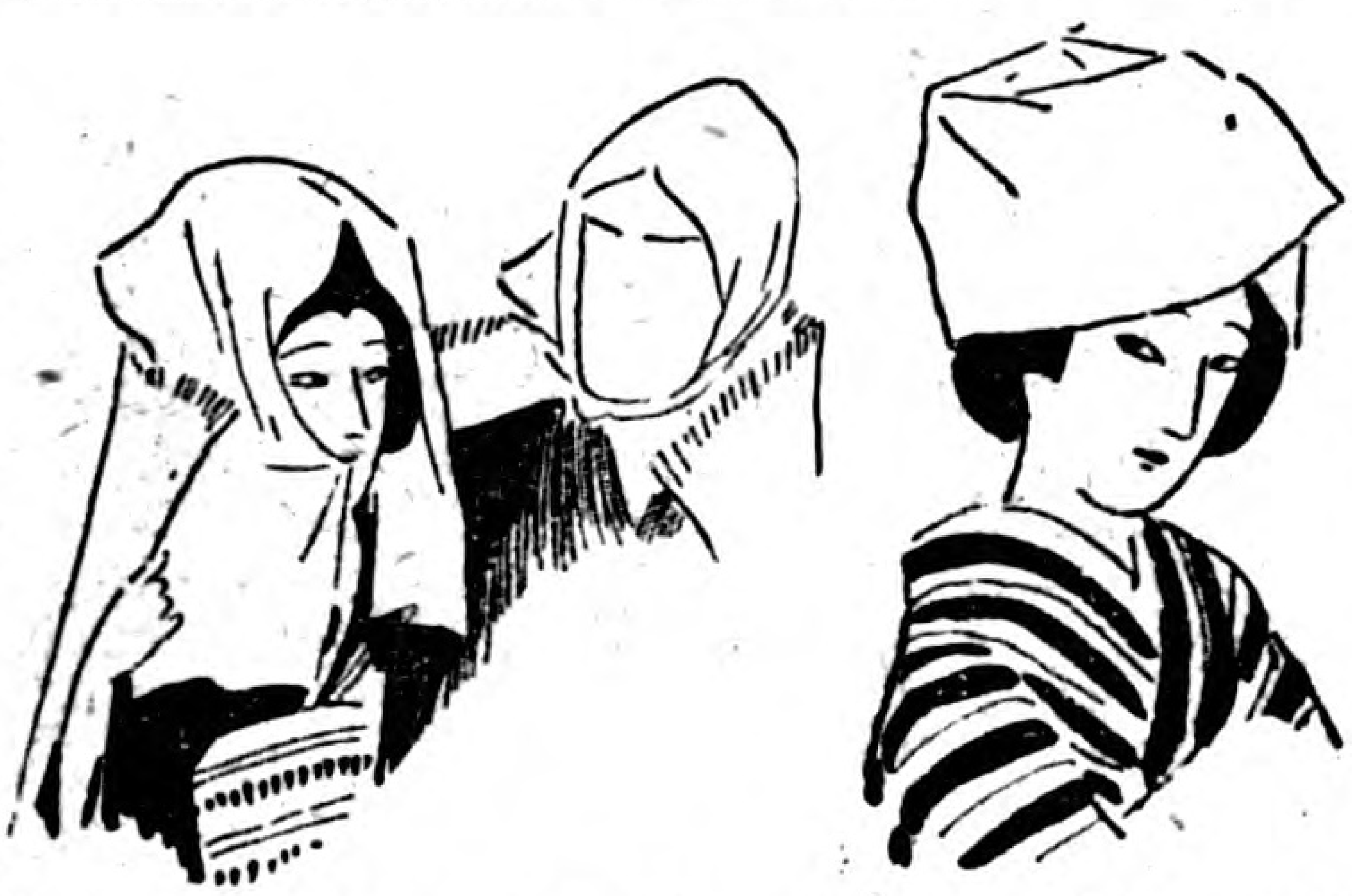
役）になつて了つて可笑しくなるが、直侍が入谷の大口の寮へ忍んで來る所とか、辨天小僧の引つ込みなどの時は、矢張り南瓜冠りであるが一向に可笑しくは無く、返つて生粋に見える。

此處の呼吸は、全く劍先き（額の處へ折目を出す）の工合にあるので、手拭の冠り方ほどむづかしいものは無いのである。

◇

鉢巻き……向ふ鉢巻、後ろ鉢巻き、その外にも色々あるが、先づ向ふ鉢巻きと云つても、鰭屋の權太のは一種別で差込んで兩端が揃つて出るやうに巻くのである。

女形の手拭……女形が必要とする手拭の冠り方には、『姉さん冠り』『吹流し』の二種類位しかない。『姉さん冠り』は道中姿とか、世話女房の役の時に用ゐるのである。



意氣な姉さんかぶり　　仇っぽい吹き流しかぶり

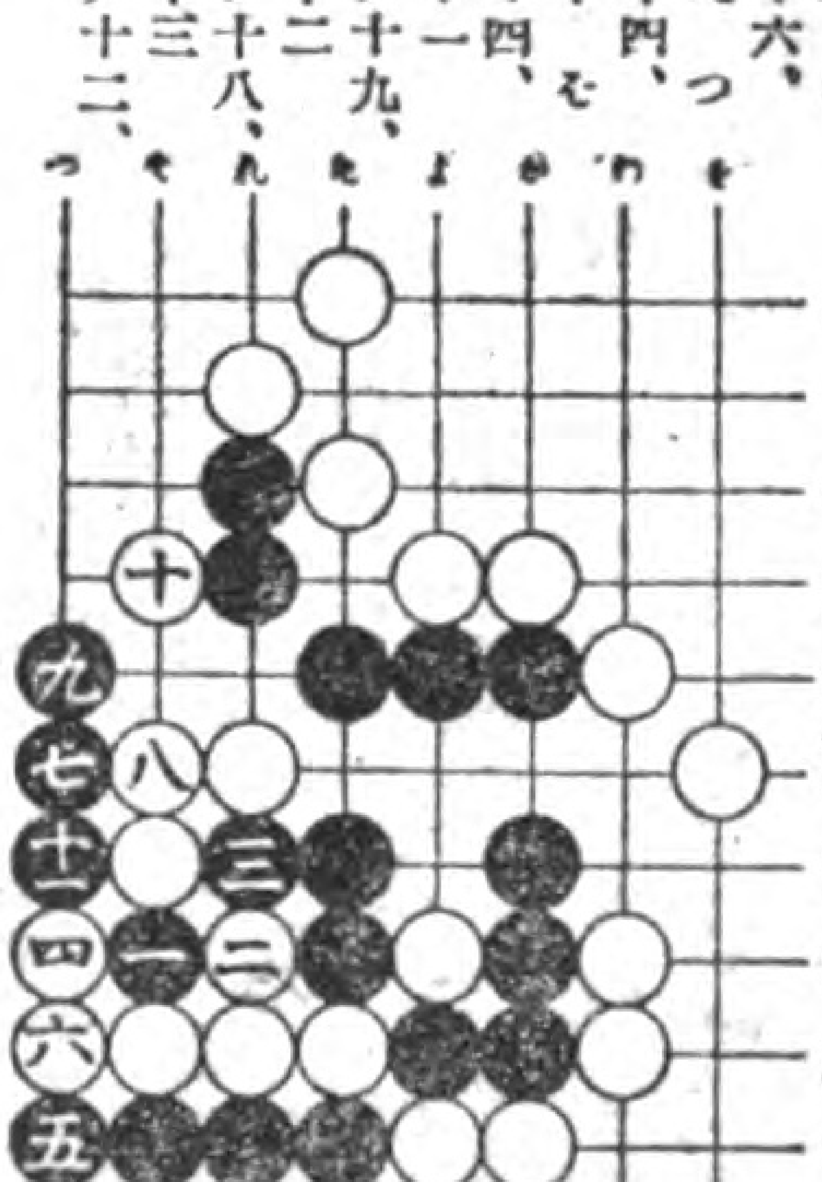
そして時代物には白を用ひ世話物には淺黄に輕い形のあるのがいいのである。

此の外、權太冠り、米屋冠り、吉原冠り、置き手拭等と、種々な手拭の使ひ分けがあるが、餘り専門的になるので、返つて興味を殺ぐから、此の位にして置く。

△四三角▲六二玉△五二馬▲七三玉△七四歩△八二玉△九一龍迄。二拾七手詰

□詰碁（黑先勝）

白六ヨリノ變化　白六 そノ十三、黑七 つノ十七、白八 そノ十六、黑九 つノ十四、白十 むノ十四、黑十一 よノ十九、白十二 わノ十八、黑十三 そノ十二、



□將棋必至の研究

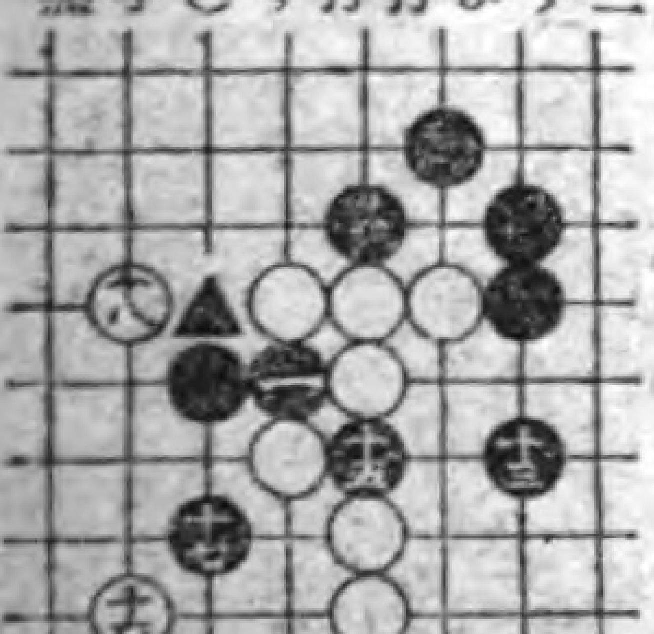
◎必至のかけ手順△八三銀▲九三玉△七四銀成迄

（解説）

最初攻め方が△八三金と打てば▲七一玉と玉方は逃げる、其時△六三銀と打つて必至をかけても▲六一玉と逃げられて詰る事が出來ない、そこで最初攻め方△八三銀と打ち▲九三玉の時△七四銀成る手が妙手で敵玉に必至が完全にかゝつた事になります、次に玉方が▲七四歩と成銀を取れば△八三金打で詰みます、又△七四銀なるの時▲玉方が▲九三歩ならば△八三歩なる▲九四玉△八四と迄にて詰む。

□聯珠

○黑が（十三）と引いた三聯を、白は見向きもせず（十四）から圖の通り四伸びて▲の所は黑三々で打てぬ、黑が打たねば白が打つて全き五聯を作るのです（白勝）△要は黑が（十二）の止めを誤つたのです此手で▲の所に止めて置けば黑の勝は慥なのでした。



江戸小咄選

田舎者の度忘れ

日本橋の大通りで好い年恰好の男が道を聞いてゐるが、肝腎の訪ねて行く家の名を忘れて仕舞つて、

『實は私は水戸から參つたもので、教へて下さらないとこの路を又戻らねばなりません。』



『教へてやりたいのはやま〳〵でも、肝腎な名がわからなきやアな、それで、何か手懸りになる樣な事でも思出せねえのか。』

『はい、それがその、アッ思ひ出しました、何んでも屋號も名前も刺す樣な名で……』

『ちやア向ふ側の宿屋だ、松葉屋有介で、松葉も蟻も刺すやうだ。』

『いや、それでは御座いません樣で……』

『そんなら、はりまやかへゑかね。』

『いゝや、もつと強く刺すもので……』

『そんな事を云つたつてわかりやしねえよ、まさかいが栗や蜂でもあるめえ。』

『それそれ、その伊賀屋八兵衛で御座います。』

文盲の柱暦

至極文盲の親父、柱に略暦のはつてあるのを見て、あれは何ですかときく、これは柱暦ですと答へれば、この柱暦は何にするものですときく、さて〳〵文盲な人だ、一年中の事を知るものです。と答へると。



『それならばチト尋ねたい、ことしの顔見世には團十郎はどこへ參ります。』

十二軒茶屋

放蕩息子、仲見世の十二軒茶屋で醉つぱらつて、太平樂を並べてゐる所へ、親父が通りかかつて、己れはここで何をしてゐると叱りつけると、とぼけた顏で、



『これはお久しうございます。』

『馬鹿ぬかすな、今朝家で逢つたぞ。』

『でも、こゝで逢うたが百年目。』

鸚鵡

○『此頃俺は鸚鵡を飼つてゐるが、不思議なことには、他人が來ると、屹度乃公の思うてゐる事を云ふよ。』

△『いゝ加減な事を云ふな、鸚鵡は人の口眞似をするが、何で心に思ふ事を云ふものか。』



○『噓だと思ふなら晩にでも來て見ろ。』

約束通り其家へ行き座敷へ通ると、亭主は默つてゐるのに、鸚鵡が聲をかけて、

『いらつしやい。』と云ふ。

○『俺の云ふことに間違ひあるまい。』と亭主は鼻高々の自慢、と今度は、

『お三、お茶と煙草盆を持つて來い。』

客は膽を潰して、煙草を二三服のんでゐると、鸚鵡が、

『もう、歸ればよい。』

―特別社告―

思想國難！默視する能はず「現代」と「雄辯」の大猛躍

此際、良雜誌大普及の必要を痛感し、

思ひ切つて定價改正を斷行!!

「現代」は從來一部壹圓の處　九月號以降五十錢

「雄辯」は從來一部八十錢の處　九月號以降五十錢

同時に内容の大改善を圖り

雜誌報國の素願達成に向つて邁進!!

滿天下愛讀者各位！

現下思想界の混亂は實に國家の大患であります。新舊左右紛糾の極に達し、國家を思ふ者の憂慮措く能はざる處であります。

此際、どうしても正しき思想が普及しなければならない。眞の道德が起らなければならない。眞の人物が出なければならない。それには良い雜誌を廣く〳〵普及するより外はない。

「現代」が創刊以來、高級知識の民衆化、國民の修養のため如何に盡して來たか、又「雄辯」が我國唯一の辯論雜誌として、思想鍊磨、人物養成の爲め如何に貢献して來たか、これは洽く人の識る處でありますが、今この思想國難に際會し、奮然として更に一大躍進、以て雜誌報國の使命を達成せんとするのであります。

定價改正――頁數に多少の變化はありますが、用紙は却つて上質のものに改め、而も一躍半値或は半値に近い大値下げ！犧牲は想像以上であります。況や經濟界不況の今日之をなさんとするが如きは、出版事業に通ずる者より見れば暴擧之より甚だしきはありますまい。然も小社がこの暴擧を敢てせんとするもの、只々時の急なるを思うて止むに止まれないのであります。

然し乍ら、定價の引下げは今回の大計畫の一部に過ぎません。

内容の充實です。大改善です。編輯部一同半歳に亙る苦心奮闘の結果、眞に世を益する金玉の記事を滿載して讀者諸君に見えんとするのであります。

九月號一度び店頭に出でんか、その清新潑溂たる！全然新雜誌であります。而も熱烈至誠を籠めた編輯は必ずや世の稱讃萬人の歡呼を受くること疑なしと信じて居ります。

滿天下愛讀者各位！

冀くは小社の精神に御同情是非々々兩誌の發展の爲め御援助下さい、今まで兩誌を御覽にならなかつた方も九月號よりは本誌と併せ御覽下さい。尚ほ御知合の方々へもお奬め下さい。勝手のやうですがこれは眞に國家の爲めと存じ御願申上る次第であります。

次に兩誌九月號の内容の一部を御紹介致します。凡そどんなであるか概要だけは御賢察が頂けると存じます

更始一新の

眞の人物出でよ！眞の思想起れ！

樂しき家庭、正しき社會、強き日本より生れん

◎世界救濟の大法（狂亂怒濤の中に蕩漾する世界人類に進むべき大道を示す一代の卓説！何人も見逃す勿れ）……德富蘇峰

◎立派な青年、立派な紳士……（著名婦人數氏の男性觀發表）

◎人間學（◎人と交る道……文學博士 市村瓚次郎◎人を使ふ道……飯野忠夫◎人に使はれるの道……藤原銀次郎）

◎憂國の大熱辯（◎青年諸君……鶴見祐輔◎婦人諸君……永井柳太郎◎紳士淑女諸君……高島米峰◎全國民諸君……永田秀次郎）

▲花嫁の駕籠……内務大臣 望月圭介

▲（文士月旦）寛、正雄、武羅夫……十菱愛彦

▲（劇壇三人男）菊五郎、左團次、吉右衛門

▲名士の思ひ出話（各方面の一流名士執筆）

▲ショペンハウエルより得たる敎訓……中島德藏

▲淸少納言より得たる敎訓……鹽野新次郎

▲我等は何を求むるか……頴賀鹿之助

▲伊藤、陸奥、小村……橫山健堂

▲（維新以後）偉人傑士名人達人の噂ばなし……

◎紳士淑女の心得 現代社交禮法（洋服の着方、各種宴會の作法、料理のいたゞき方等現代人として知らねばならぬ社交禮法）

◎彼は斯くして大文豪となつた（マーク・トウエン。マキシム・ゴルキー。バルザツク。高山樗牛。德富蘇峰。小泉八雲。）

「現代」九月號

◎歐米五人男（エヂソン、マクドナルド、アインスタイン、ムツソリニ、マサーリツク）……澤田謙

▲大聖と性慾……龍谷大學教授 梅原眞隆

▲諸名士の國民訓（勝田主計、三土忠造、鈴木貫太郎、山室軍平氏等）

▲海外に活躍する人々……柳原緑風

▲如何にして今日を成せしか……名士執筆

▲朝の祈り……後藤靜香

▲無味の味……文學博士 長井眞琴

▲直ぐ役に立つ家庭科學いろ〳〵

▲名人達人決死の大試合……鳴弦樓主人

▲漫畫 夫婦百態（漫畫界一流大家總出）

◎世界の名小說 トノバンゲー……鶴見祐輔

◎小說 無題……菊池寛

◎戯曲 一本杉……眞山青果

◎諧謔小說 村の成功者……佐々木邦

◎探偵小說 三人の富豪……松居松翁

◎漫談、演說、苦笑……大辻司郎

◎名選手決死の大場面

◎面白い〳〵演藝界噂ばなし

◎此の外本誌小說欄には

加藤武雄、廣津和郎、加能作次郎、細田源吉、上司小劍、大倉桃郎等一流大家の傑作滿載

▲此外名士の論文、演說、傳記、修養物、文藝物等數十篇！

改正定價五十錢（送料三錢）

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

見よ！雄辯九月大革新号！！

■思想國難に直面して（聽け政界思想界の人氣男世界的新人たる氏の大獅子吼）……鶴見祐輔

■新舊勢力の衝突（政界唯一の大雄辯家が本誌を通じて世に訴ふる大熱辯）……永井柳太郎

■此條件を備ふれば成功する（ウイルソン氏十年の苦心研究且貴き體驗による成功法）……池田藤四郎

■古今東西偉人名士出世演説物語（嗚呼偉大なる辯の力感奮興起の大讀物！）

◎今日の日本と明日の青年……中村進午

◎良心宗教と良心藝術……賀川豐彦

◎思想問題の對策……本多日生

◎時の人問題の人……新妻莞

■全日本婦人を代表して男子諸君に訴ふ……山田わか　和田富子

■我輩は牛である……高田義一郎

■私は一圓札です……高島米峰

即席演說

◎雄辯家ゼスチユア畫報（世界雄辯家十數名）

◎演説批判の標準……加藤咄堂

◎議會雄辯家物語……柳井正夫

◎雄辯家體驗談（演壇に臨みて遭遇したる成敗彌次封じ等）

◎私の雄辯心得（本邦雄辯家十數氏の演壇に立つ迄の準備）

キングポスト

一 ○キング編輯五訓
編輯の秘訣は只親切
二 一枚の原稿は一枚の紙幣
三 毎月一冊キングのモットー
四 一つの誤り千萬人を誤る
五 キングが良くなれば社會が良くなる。

展望臺

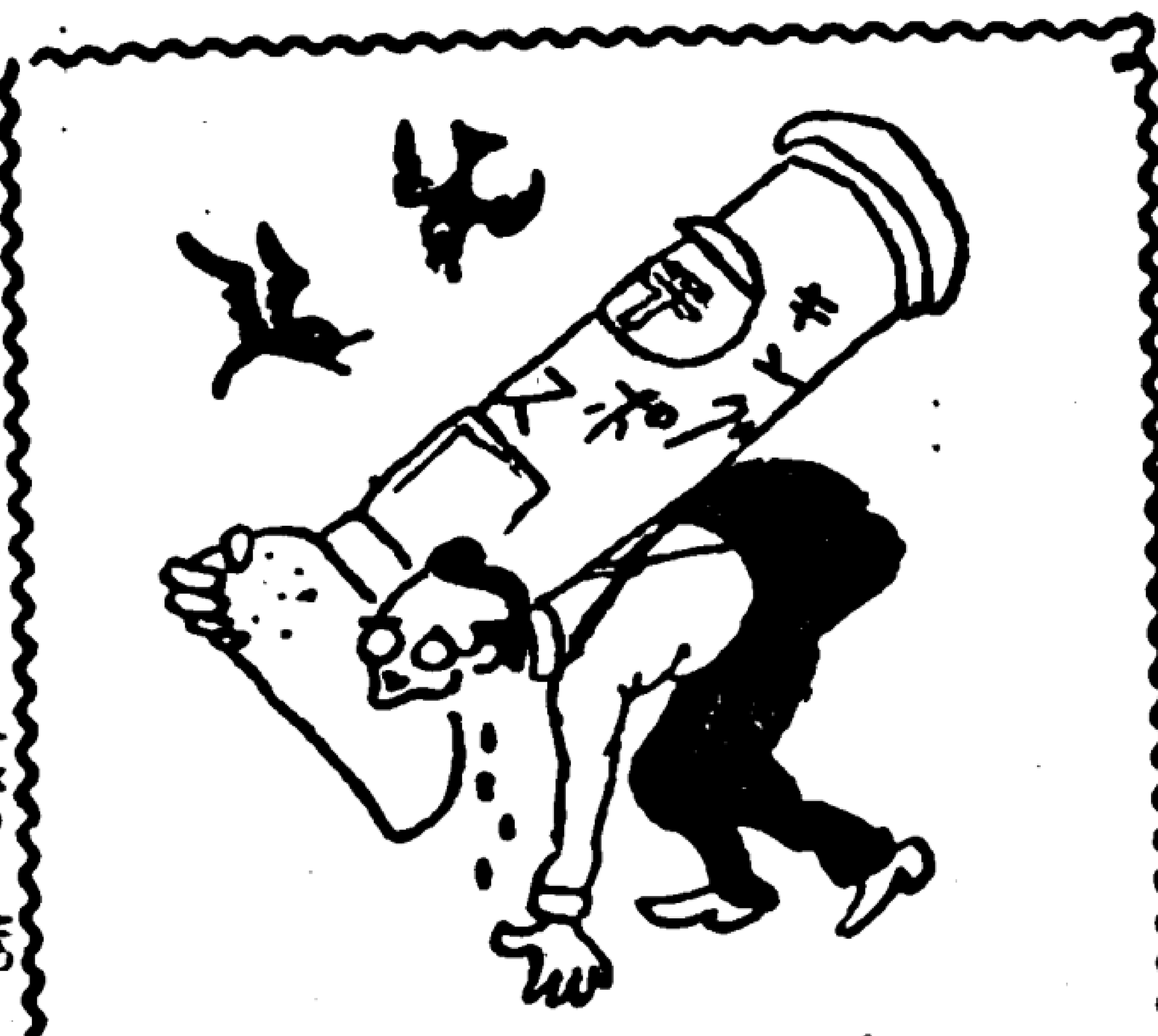
◇本誌十一月號には天下を驚倒させる樣な大畫報を添付する計畫であるが、右の印刷は高速度輪轉機で一時間に十六萬頁宛印刷するとしても五十日かゝるといふ大掛りなもの、サアどんな素晴しいものが出來るか何卒刮目して御待ち下さい。

○

◇キング口繪の眞價は既に御承知の通りですが最近キング口繪を中等學校の教科書や官廳の印刷物などに利用されるのが非常に多くなつて來た事は欣快の次第です。

○

◇本號「本家彌次喜多」で活躍會我廼家五九郎丈、暇を偸んで何やら繪絹にヌタくつて居るので、或る茶目ソツと覗いて見ると出來上つた繪はどれもこれもみんなキングの表紙に出たものばかり。茶目早速『日本の五九郎ともあらうものが僞作はチトひどいですな』と一本參れば『ナーニ繪をやるなら大家の描いたキングの表紙に限るよ』と嘯く。よく／＼見れば蚤の樣な字で『いゝいゝキング表紙を寫す五九郎』ナール程。



キングポストの欄は編輯記者が毎月交替で受持つ。當番記者『ウム中々重いポストだぞ』讓つた記者『バンザーイ』

編輯日記

W記者＝山と積まれた十一月大附錄の材料整理に汗だく／＼で大童わ。

E記者＝素晴らしい連載物を得る爲に南船北馬で大奮闘。

S記者＝蒲田の松竹キネマに日參十月號「侠美人」の寫眞撮影中。

N記者＝藝界第一人者を悉く訪ねてその秘話蒐集十月號發表。

T記者＝次號に運動界花形選手の總まくりを出すので東奔西走。

M記者＝今春募集短篇小說當選者を次號に發表する爲大馬力。

H記者＝近く大阪に赴き大仕掛けで特別の寫眞撮影の筈。其他編輯全員次號の爲に大活動中。

○

◇[illegible]り屋で有名なK記者或る晩目白に行くべく山手電車に乘つた。處が車中で讀物である本誌繪ばなし大會の組み方に夢中になつて[illegible]

讀者通信

◇キング八月號！ 何といふ素晴らしい出來榮だ。海の博覽會」「衛生畫報」を始めその充實した內容には驚嘆の外はない。最近キングの充實振りを心から感謝する。偉なる哉キング！（東京 山下勉）

◇私の中隊百數十名は悉くキングの愛讀者です。晝夜に涉る激しい演習の後でもキングに目を通すと不思議な程疲れも癒えて了ひます。中隊で許可を受けずに讀める本はキング丈けです。（K上等兵）

◇キングは質と云ひ量と云ひ誠に申分ありませんが二三の御願ひがあります。それは（イ）次號の豫告を今少しこまかにして下さい（ロ）風景寫眞を八頁位入れて下さい（ハ）滑稽漫畫飾や活動ものを入れて下さい。（埼玉　三角生）

記者より――出來る丈け御希望に添ふ樣に致しませう。豫告なども詳細に正確に御傳へしたいのですが何分部數が多い爲四ケ月前に纏めねば印刷が間に合はないといふ始末です。然し何とか方法を講じたいと思つてゐます。

◇羊頭狗肉の多い雜誌界にキングのみは泥中の蓮である。隅から隅迄むだなく一字一句燦然たる寶石の如く光つてゐる。（仙臺Ｉ生）

つてゐる內ウツカリ目白を來襲して了つた。慌てゝ目を白黑させ乍ら降りて見れば目黑だ。K記者狐に化された樣にポカーンとはまるで落語の樣な本當の話。



○

一騎當千の士が五人キングに入つて活躍されてゐます。一寸漫畫子の御世話になつて御挨拶までに。

◇見惑ふ所で通つて居るC記者或る日來社した知人と對談中雨が降り出したので自分の傘を貸さうと出して見れば雫がポタ〳〵垂れて居る。サア大變『誰だ無斷で僕の傘をさしたのは？』とばかりプリ〳〵怒つて勢ひ當るべからずだ。處が暫くするとC記者突然席を蹴つて外へ飛出し『やあやあその傘待ていッ』と雨の中をピシャ〳〵追跡。焉んぞ知らん自分の傘と思つて貸したのは他人樣のだつた。悄てショボり濡れ鼠となつて歸つて來たC記者の姿を見た一同クス〳〵。

◇キング狂句　松の家

○キング買ふお使だれもいやがらず。
○それ來たでキング忽ち奪ひ合ひ。
○讀みかけのキングなか〳〵立たれない。
○急ぎ食ふ飯はキングが見たいなり。
○發行日キングの山が築かれる。
○汽車の隅此處にも一人キング黨。
○次々にキング借手が待つてゐる。

○謹　告

本號より連載の筈でありました御待兼の「新家庭双六」に關し、佐々木先生より次の樣な、御書簡がありました。誠に殘念ですが、十月號迄御待ち下さい。

『月末に十日近く忙しい講演旅行を致しました。歸つて直ぐお約束の新家庭双六第一回を書く積りでしたが、悉皆疲れてしまつて、何うもいけません。三日間努力した後、到頭諦めてこゝ一月待つて頂くことに編輯局へ願入れました。全く私の手違です。豫定を狂はせて申譯ありません。その分來月號からの勉強で取り返したいと存じまして、ここにお詫を申上げます』　佐々木邦

○御　願

編輯局宛の御手紙は
一、住所姓名を明記のこと
一、返信料必ず添付のこと

◇キングの口繪にふさはしい寫眞がありましたらドシ〳〵御送り下さい。良い寫眞は枚數に制限なく薄謝を呈します。

◇キングの連載小說は益々面白くなりました。東京行進曲、智勇速魁傳、人外魔境の秘密、死よりも强し等々キングならでは見られぬ讀物です。(熊本　一郞)

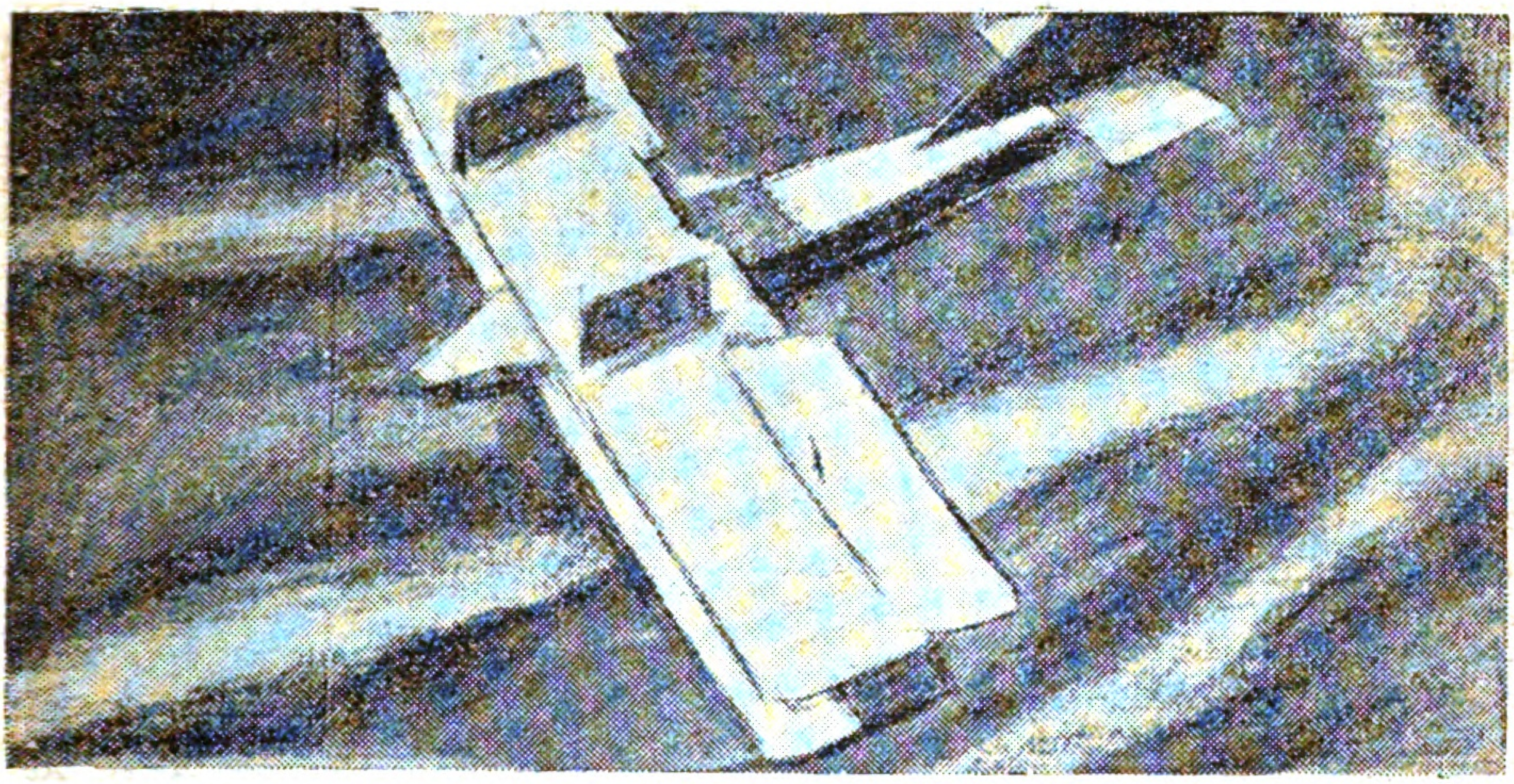
◇五月號の「つばさ」七月號の「怪紳士」に一同熱狂致候積々かゝるグラビア映畫欄を每月御揭載願上候。(廣島　山本)

◇每號キングの口繪は他の雜誌に比較して一段と光つて居り誠に感服の外ありません。就中八月號の美麗さ、どの頁も目を驚かすものばかりで御苦心の有樣が私達にもよく解ります。記者樣の健康を切に祈ります。(福岡　閒下知子)

◇私は先頃から弄み半分に文藝雜誌の編輯をやつて居りますが今更乍ら沁々キングの編輯には感心して了ひました。組み方の千變萬化挿繪やカットやリンカクに至る迄の細心の注意、僅かの埋草に至る迄むだのない點は他の雜誌と比較して雲泥の差です。仍で一句御笑覽までに。(大阪、不二夫)

キング讀む人をほめつゝ門涼み

◇諸先生の連載小說が一日も早く發表されるのを待つてゐます。記者樣、佐々木先生、加藤先生、白井先生、江戶川先生、大倉先生其他素晴しいものを是非掲載して下さい。(朝鮮　李生)



人外魔境の秘密

――アマゾン大探險記――

小山莊一郎譯
林唯一畫

◇陸上の汽船

ニグロ河の淺瀬に放つて置いた獲物の大鰐はたツた一晩で立派な鰐皮に早變りしてゐた。それは可いとして、その鰐皮を引ッ張つた時に、下からニューッと現はれたのは何か？ 生々しい骸骨では無いか！

『やア！、虎だ！ 虎もピラナに食はれたんだ！』

ヒントン飛行士は、頓狂な聲を出した。

『肉ばかりか、あの厚い毛皮まで遣ッつけるなんて、成る程、ピラナの齒は鋭いものだね。』

冒險記者のアルバートは、怖氣を震つたやうに頸を縮めた。

が、腰の番を撃つた手負ひ虎が、モ一匹ゐる。それに此の鰐皮を加へれば、一晩の冒險としては、相當の成績と言はねばなるまい。

二人は、狩小屋へ鰐の皮を引き入れた。朝飯の用意をしてゐた機關士のウイルも、ピラナの獰猛振りには、すッかり驚かされてゐた。

手負ひ虎は、アルバートの一發で、譯なく仕止められた。もう腹拵らへをするだけだ。

三人は、乏しい朝の食卓に就き乍ら、第三日目を、何うして過そうかと相談し合つた。

『ピラナ釣をやらうぢや無いか。』

ヒントンは、一種の敵意を有つたやうな語氣で、から提議した。

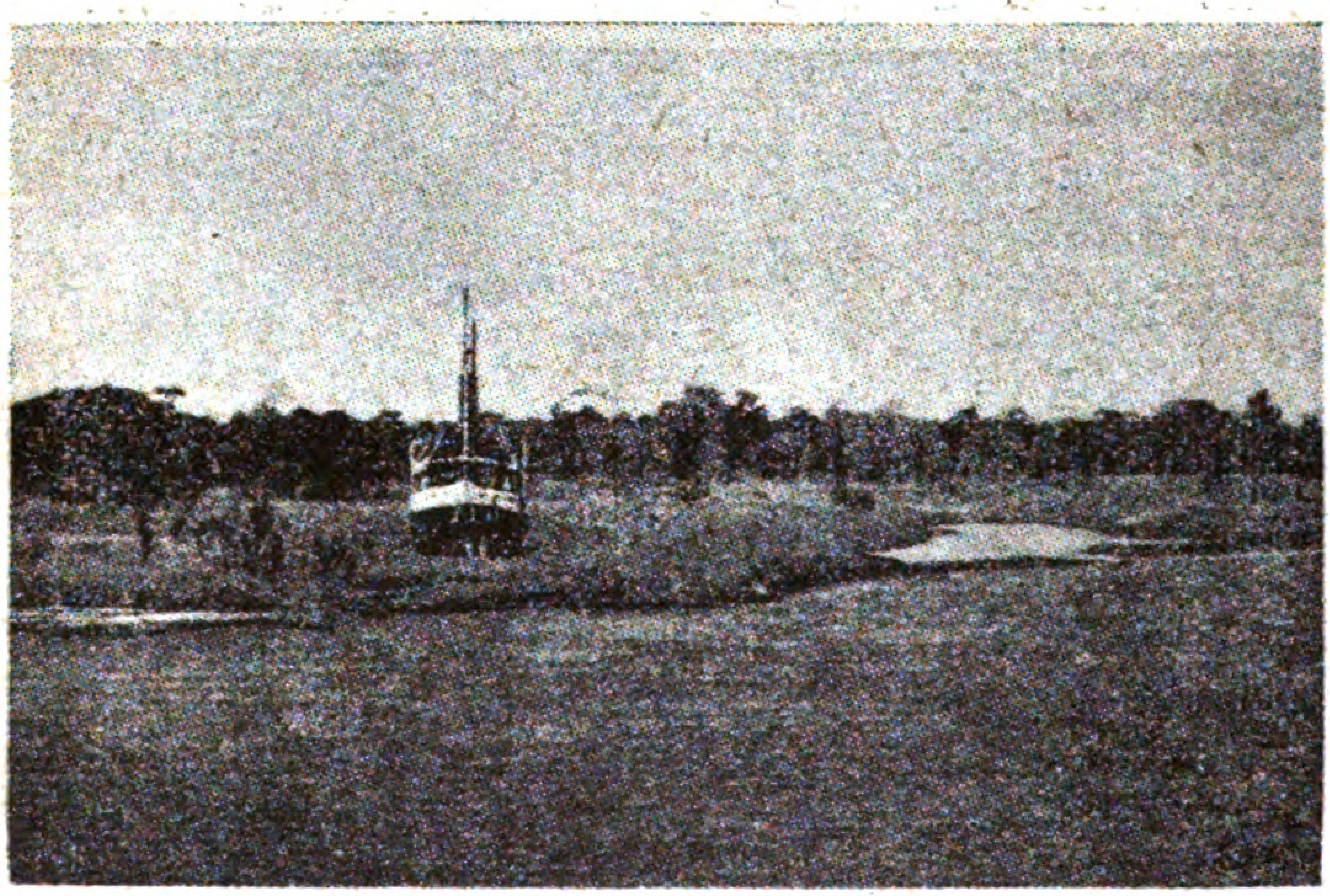
『面白い！……が、道具が無からう。』

言下に賛成したアルバートも、特別の仕掛けを要する釣道具の一段で行き詰まつて了つた。

『何んでも無い！　僕が造らう。』

ウイルは、機關士だけに、細工物には自信を有つてゐた。

その日は、ウイルの造つた變手古な釣針で、一日一杯ピラナ釣をして暮した。幾か作りの道具ではあつたが、虎の肉といふ好餌がある。動物の肉に惡事を知ら無い大喰ひのピラナの事であるから、面白いやうに釣れた。そして、ただの釣と違つて、ちよツとでも油斷すると、自分の指を噛み切られるといふ危險があるので、人跡未踏の蠻地に、無聊を忘れるに相應しいだけの緊張を味はふのに、何の不足も無かつた。



水にだまされて、陸上の草原へ居すわつてしまつた汽船。

それから後の四晝夜を、彼等は此の河岸で、迚も寂かな、けれども、まかり間違へば、恐ろしく危險な——恰度、この世が、原始時代に復つたとでも言ひたいやうな感じを味はひ乍ら過した。その間に、一度森林島の夜狩をやつて、また一匹のアマゾン虎を射斃した。

團長ライス博士を初め探險隊の幹部一行が、飛行機用のガソリンをうンと小蒸汽船に積込んでやつて來たのは、ヒントンの水上飛行機が不時着水してから、實に六日目の朝だつた。

『ガソリンが來たぞ！』

ヒントンは、ガソリンが來たといふ事を、何よりも喜んで、手を拍いて子供のやうに跳ね廻つたりした。

飛行機の用意が出來ると、ヒントンは待ち兼ねたやうに飛び乘つた。續いてアルバートも機上の人となつた。今度は、機關士のウイルは居殘る事となつたのである。

直ぐ水上滑走が始まる。見る〳〵内に離水して、折から水のやうに晴れ渡つた朝の

アマゾンの空高く、ニグロ河に沿うて東へと、勇ましい爆音を引いて飛んで行つた。

機上から俯瞰すると、ニグロ河は、二本にも三本にも岐れて、それこそ魔の森のやうな千古の密林の中をうねつて流れてゐる。廣い個所は、十哩の餘の河幅を有つて、まるで湖を長くしたやうに見える。

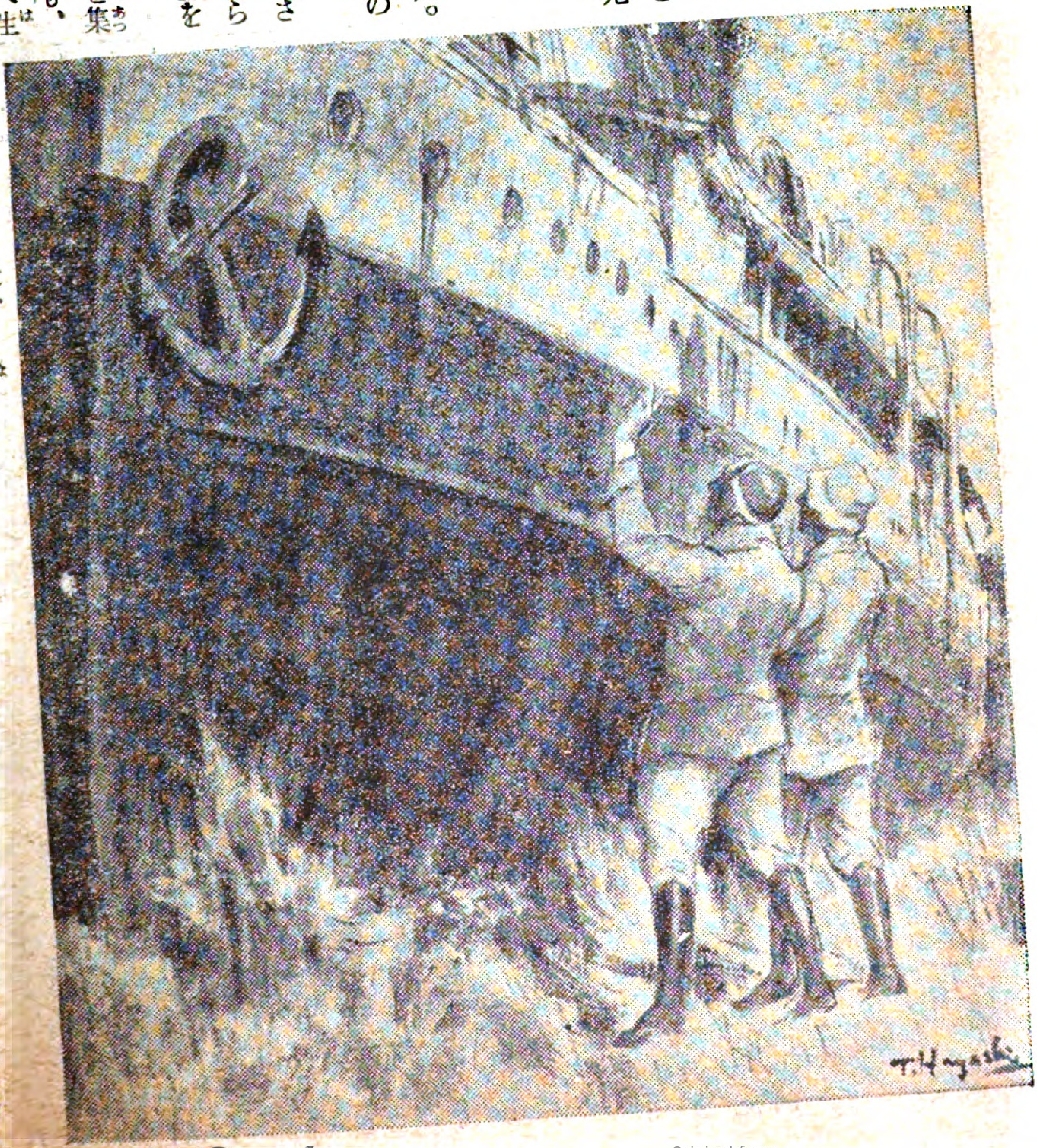
四十分も飛んだと思ふ頃、

『おやッ！』

と、叫ぶ聲がアルバートの口から出た。彼は一心に脚下に展がつてゐる河沿ひの陸地を見詰めてゐるのである。

この聲はプロペラーの烈しい音に消されて恐らくヒントンには聞えなかつたらう。が、ヒントンも矢張り、同じ地點を凝ッと視てゐるのだ。

まるでお伽の國だ！　二人の視線を集めた地點は、勿論立派な陸地。而かも、一面の草原で、ところ／＼には木さへ生えてゐる。それだのに、その草原の上に、何う見ても二百噸以上はあらうと想はれる汽船が、謎のやうに居据わつてゐるでは無いか。



ヒントンは、鮮やかな手際で下げ舵を取つて、その不思議な



河口から一千三百哩のブランコ河流域第一の都會（但し人口僅かに五百人）『ボア・ヴイスタ』のブラジル孃さん。

汽船に一番近い河面に、着水させた。二人は手早く、流れ無いやうに機體を岸へ繋ぎつけると、身輕るに陸へ飛び上つた。

『何うだね、船渠へでも入つた恰好ぢやないか。』

ヒントンは、その船を見上げて、警戒と云つたほどの心持から、低い聲で、アルバートの耳許で囁いた。

アルバートは、默つて頷いただけだつた。が、その瞳は、此の謎を解からうとするやうに、思慮深く四邊を探つてゐた。

その邊一帶の地面は、少く見積つても、水面より一丈以上は高い。それだけ高い土地へ、相當な荒海でも結構航海出來るだけの立派な汽船が、そツくり其の儘、何所と云つて破損した個所もなしに、上り込んでゐるのだ。何う考へても、ちよつとは此の謎は解けさうにもなかつた。

二人は、呆れ返つて、顏を見合つた。その時、頭の上へ、にゆーツと何者かゞ現はれた。

それは、矢張り人間だつた。日に燒けて赤銅色こそしてゐるもの〻、その帽子で、一目に船長といふ事が頷けた。が、餘程長く、この不可能の船の中に籠城してゐたと見えて、制帽の金筋もすツかり錆び、服も見る影も無く汚れてゐた。

『お〻！』

上と下とで、同時に意外を叫んだ。

『船長！』

ヒントンは、直ぐ續けて質問した。

『……何うして、この船は、こんな原ツぱへ這ひ上つたんです？』

船長は、口許を歪めて苦笑ひすると、

『冗談言つては困りますよ。何で、船が這つたり、歩いたりするものですか。自然に、安全に、この通り据わつて了つたのです。』と、まるきり冗談でも無いやうな言ひ振りだつた。

『へーえ！　けれども、之だけの船を引ツ張り揚げる機械は、

蟻が粘土を積み上げて拵らへたブランコ河畔名物の蟻の塔。これが無數に立ち並んでゐるのを探險隊はお墓の石塔と間違へたのである。



まだ世界の何所にも無い筈ですがね。』

ヒントンも、淋しく微笑んで餘裕を見せた。

『實は、お恥づかしい事ですが、水のヤツに騙されたんです。御存じの通りに、この雨期には隨分水が出たものです。この時、私共は商用で此の河を溯航したのですが、その歸りに、此所まで來ると、日が暮れたのです。夜の河下りは危險ですから、一番安全な河の眞中へ、この船を碇泊させました。翌朝、早く起きて見ると、何うでせう！　此の通り此所へ据わつてゐたのです。』

『へゝえ！』

ヒントンも、アルバートも、頷いては見せたけれども、ちツとも理由は判つてゐなかつた。いよ〳〵不可解を濃厚にしただけだつた。

『吃驚しましたよ。』

船長は、その時にも、多分恁んな顔をしたらうと想はれるやうな、驚きの表情をして見せた。

『さうでせうとも！』

『一時は、まだ夢を見てゐるのだと思ひましたね。夢で無いと判つた時には、今度は氣でも違つたんぢや無いかと、自分で自分を疑つて見たぐらゐでした。その筈でせう、前の晩、碇泊する時に水深を測つたのですが、その時には確かに十三尺あつたのですからね。そこで、だん〳〵調べて見ると、一夜の中に、水が一丈五六尺も減つて河身が變つて了つたのです。それきり、船は此の通り安全に着陸して動かないのです。』

『成る程。で、何うなさらうといふのです。』

『それですよ。貴下の仰しやる通り、二百五十噸の汽船を、此所から水へ持ち運んでくれる機械はありません。仕方ないので、來年の雨期には何うかなるだらうと、それまで私共船員は、代はり合つて、赤道直下の炎天に斯うして、夏籠りをしてゐるのです。珍無類な私共の不幸をお察し下さい。』

船長は、本當に珍らしい來訪者と、もつと〳〵寛ろいで語り合ひたかつたのだらう、熱心に船室へ案内しようと言ひ出した。が、二人は、それを固辭して、心からの慰めの言葉を置土產に、再び機上の人となつた。

◇大都會の人口五百

いよ〳〵、ニグロ河の眞黑な水と別れねばならぬ時が來た。ヒントンは、機首を北へ向けた。そして、北から南へ數百哩を一直線に流れる支流ブランコ河の上空を飛んでゐた。

ブランコ河の水は、煮詰めた珈琲のやうな色をしてゐるニグロ河の水と比較すると、お話になら無いくらゐに澄んでゐた。機上から見下すと、淸水へミルクを注したやうに美しい。

軈て、ちよツとした部落が目に入つた。それはソロロコといふ村であつて、この村に、先發隊がガソリンや重油やを持つて來てゐる筈になつてゐた。

ヒントン達は、此村で不足の物を補充して、三十分間ばかりも息を入れると、直ぐに又、機首を北にして出發した。今度は、このブランコ河流域五百哩の中で、第一の都會と云はれるボア・ヴィスタを志してゐるのだつた。

かうして、ブランコ河の沿岸には、幾つもの都會がある。ニグロ河の奥のやうに、人跡未踏の地方ばかりでは無い。クアレナ、ソロロコ、ヴィスタ、アレグレの四部落の外に、ボア・ヴイスタとボア・エスペランカの二都會までである。が、都會と云つても、文明國並に考へると、大きな間違ひが起こる。一番繁華なボア・ヴィスタが、人口は何の位あるかといふに、驚く勿れ、たつた五百人なのである。他は推して知るべしだ。假に下關から青森までの約七百哩に、第一の大都會が人口五百人と云つたなら何うか。この一事でも、二百七十萬方哩といふ途轍も無く大きい水鄉の情景が想像されよう。それは、太古のノア時代であり



鳥のやうな、狸のやうな、カンガルーのやうなアマゾンの蟻喰獸。

支那の堯舜時代である。富源開拓の餘地が多いといふよりも、この水郷の全部が富源であると云つた方が、更に中つてゐる。
　かうした富源の中に、恰度、大洋の直中にちよツぴり浮んでゐる孤島にも等しい、所謂都會とは、一體どんな所であるか。ボア・ヴイスタ市を例に引けば、それは宛ら大自然の公園であると云ひたい。ヒントンとアルバートとが、市の直ぐ前の河――ブランコ河――に着水した時は、夕暮近くであつた。
『何うだ！　まるで名畫だ！　いや、古今の名畫にも無い！』
　アルバートは、その絶景にすツかり魅せられて、しばし呆然としてゐた。ヒントンだつて其の通り、飛行機を岸へ繋ぐ事さへ忘れて、モ少しで流す所だつた
　岸から、なだらかな勾配を登つて、綠美しくふツくり圓みを有つた丘の上に、色さま〴〵の別莊風の建物が散らばつてゐる。色の配合だけでも、人間の手では迚も、かう美事には描き出せない。鼻から、口から、流れ込む空氣には、得も言はれぬ薫りを含んでゐる。しばらく呼吸してゐる内に、不老長壽の靈藥でも服んだやうに、身體全體がすき〴〵して來る。
　假りの宿と定めたブラジル紳士の家には、健康其の物のやうな色白の娘さんが三人もゐて、庭の木にハンモックを吊つて、その上でギータを彈いてゐた。眞綠色のペリキットや、腹が燃えるやうな紅色で、脊の青いアラアラやの鸚鵡が、何所からともなく飛んで來て、樂の音に合せるやうに好い聲で唄ひ續ける。程よく乾燥した涼風は、この美しい樂手達を汗ばませないやうに、輕く袂を撫でて流れてゐるのだつた。
　この家ばかりでは無い。五百人の住民は、總て富んだ家庭に惠まれて、樂しい團欒に嬉々として其の日〴〵を、神の集ひのやうに送つてゐる。まるで、この世ながらの武陵桃源である。
　ヒントンもアルバートも、路を迷つて桃源の石門を潜つた黄道眞のやうな心地で、その夜を明かすと、翌朝は最う高く澄んだ空に翼を張つて、五十哩先きのボア・エスペランカ指して飛んでゐた。
『おや！』
呟くと同時に、ヒントンは遽てたやうに下げ舵を取つた。何物が彼を驚かしたらう？　その瞬間、彼の表情からは、昨夜の樂しい印象の總てが吹き飛ばされてゐた。

◇奇妙な動物と奇妙な帶

　ウツとりした氣分に浸つてゐたアルバートは、急に機體が前のめりをしたので、いつもの自分に還つた。が、下げ舵を取つた理由が判ら無い。で、爆音を避ける爲に、通話器へ口を持つて行つた。
『ヒントン君、何うしたんだ？　着水するのかね。』
『無論だ。下を見給へ！』
　成る程、今、機體が圓を描いて旋回運動をしてゐる其の恰度中心あたりの眞下に、妙な物が見える。
『何んだらう？』

『何んだか判断出來ん。』

二人は、双眼鏡を覗いた儘、こんな問答をした。

が、だん／＼機が地面に近づくに從つて、不思議な物體の姿が、肉眼でもはツきり見えるやうになつた。見えはするが、何んであるかといふ斷定はまだ下されない。何千何萬と數へ切れぬくらゐに、聳く尖つた自然石のやうな物が列んでゐる。強ひて言へば、墓らしくもある。

『人間の墓標ぢや無いだらうね。』

『さア……が、文明國の大都市だつて、あんなに澤山の墓のある所は無いぜ。第一、此の附近には部落らしいものさへ無いぢやないか。』

不思議は、不思議を生んで、近づけば近づくほど想像が附かなくなる。何うやら、一丈以上の高さのものさへ、少く無いやうだ。

すツかり好奇心に緊張した二人は、着水すると、息を切るやうにして、現場へ驅けて行つて見た。

『おゝ！　これや例の蟻の塔だ！』

ヒントンは、曾て味はつた苦い體驗を想ひ出して、頓狂に叫んだ。このアマゾン蟻の爲に、大切なシャツを一晩でボロボロにされた事がある。

『ええ！　ぢや、どんな動物でも、五時間と經たない内に、綺麗に白骨にして了ふといふ、あの毒蟻の巣か？』

アルバートは、もう逃げ出しさうな身構へをしてゐた。

『さう慌てなくても可い。』

『でも、まるで蟻の世界の紐育ぢや無いか。こんな所で愚図愚図してゐたら、それこそ、三十分で骨にされるぞ。』

『大丈夫だ！』

ヒントンは、苦笑した目をアルバートに向けた。

『……猛烈なヤツには相違ないが、生きてゐる動物にはかゝらんよ。少くとも、生きてゐる人間には、手向ひしないさうだ。』

『本當かな。』

まだビク／＼ものでゐる。

『襲撃しさうだつたら、その時に逃げるまでさ。』

から言つたヒントンは、手近かの蟻の塔を、拳固で叩いて見た。

出て來るわ／＼、まるで砂を敷き詰めたやうに、そこら一面が大きな蟻で埋められて、地肌さへ見えないくらゐになつたけれども、生きてゐる人間を取つて喰はうとはしなかつた。

『成る程、大丈夫らしい。』

アルバートも、塔へ近づいて叩いて見た。粘土を集めて築き上げたものであるが、多年の風雨に晒されて、コンクリートのやうにカチ／＼になつてゐる。

『驚いたものだねえ！　これぢや、人間より蟻の方が、餘ツ程利巧だぜ。』

すつかり感心して了つたらしい。

『何うして?』
『考へて見給へ、さうぢや無いか、人間となると、焼いたり捏たり、散々手數をかけて、土を煉瓦にしたりして家を造るが、此の蟻は何うだね。ただ粘土を積んだだけで、あとは天道樣に乾し固めて貰つてゐるぢやないか。』
『あツはツはツは……馬鹿に敬服して了つたね。』
ヒントンは、揶揄ふやうに高く笑つた。が、アルバートは、大眞面目だつた。
『笑ひ事ぢや無いぜ。モ少し正確な推理を働かして見給へ。この塔は、小さいのでも、蟻の身長の何百倍かの高さがある。大きいのになると、何千倍か判らんくらゐだ。そこで、吾々の家の一階の高さを、身長の一・五倍と假定すると、蟻の住家には、千階以上の摩天樓がザラにある勘定だ。』
『さう言へば、まア爾うだがね……』
餘り氣乘りがしないやうな返事をしたヒントンは頻りに四邊を見廻してゐた。
『何を探してゐるんだね。』



『咽喉が渇いて仕方無いのさ。あそこの森へ入つて見ようか。』
と、もう其の方角へ歩き出してゐた。
『清水を探すのか。僕も大分、水が欲しくなつた所だつた。』
二人は一緒に森へ入つて行つた。
直ぐ、繪に描いたやうな、綺麗な流れを見出す事が出來た。底に沈んでゐる木の葉さへ、洋盃のカクテールに趣きを添へる橄欖の實のやうな感じで見られた。
ヒントンもアルバートも、その清冽な水を手で掬つては飲み、掬つては飲みしてゐた。
と、偶と妙な物音が聞えた。
『何んだらう?』
顏を見合つて、耳を澄ます。
その音は、大きな枝が影を投げてゐる岩の蔭から聞えて來るらしい。
アルバートは、身輕るに忍び寄つて、岩の一端からそツと覗いて見た。
『……………』
叫びも何もしなかつたけれども、その身振りには、可成り驚いたやうな樣子が窺はれた。ヒントンは、直ぐ其の樣子を看て取つて、跫音を偸んで近づいた。
居る! 確かに生物だ。が、獸でも無い、鳥でも無い。腰から下は、羽のやうな



厖々した毛で被はれて、足は、恰度、洋袴だけ穿いて靴下を脱いでゐるやうな恰好をしてゐる。殊に、一番滑稽なのは、その首だ。鼻先きと口とは、むく〱動いてゐるけれども、首其の物は、まるで大きな鳥の嘴みたやうに細く尖つてゐる。そして、眼の上から、波打つた毛の襞が、身體の側面を流れてゐるのが際立つて目立つ。

如何にも奇妙な動物だ。鳥のやうでもある、狸のやうでもある、袋鼠のやうでもある。その得體の知れぬ動物が、岩の平たい部分を、流れるやうに動いてゐる帶みたいたものを盛んに喰つてゐる。妙な音は、喰ふ時に起こる音だつた。

その喰はれてゐる帶のやうに動くもの！　それは蛇か？

いや蛇では無い。それは、數十百千萬と、限りも無い蟻の密集した大行列であつた。

『あれが、アマゾンの蟻喰獣だらう。』

アルバートは、漸く納得が行つたやうにヒントンの耳へ囁いた。

『さうだ。あのステッキのやうな物が、口から出たり引ッ込んだり、電光石火に進退してゐるだらう。あれが舌だぜ。舌で、蟻を嘗めて取るのだね。』

『舌か？　まるで箭の飛ぶやうな速さで動いてるね。』

『うむ、旨いので夢中にやつてるんだ。一ツ、拳銃で爲止めるから見てゐ給へ。』

ヒントンは、落着き拂つた態度で、腰の衣嚢から愛用の拳銃を取出して、素早く狙ひをつけた。

渡る風にも、神秘の樂が奏でられる此の幽境に、瞬時の後には、聞くさへ物凄い俗惡な音が起きようとしてゐる。

アルバートは、どうしたものか、その時は太く感傷的になつてゐた。この神秘境を銃聲で搔き亂すことは、神へ對する冒瀆のやうな氣さへした。まして、目の前に餘念なく舌を動かしてゐる蟻喰獸を見た時に、彼は怺らないほどの憐愍を覺えた。自分達は憎むべき闖入者であつて、神から與へられた他人の平和を、今、ぶち壞そうとしてゐるやうな苛責を感じた。

『ヒントン君……』

しんみりと囁いて、拳銃を狙ふ手を摑んだ。

『あれは、人間に危害は加へ無い。殺すのは可哀相だ。僕に免じて許してやつてくれ給へ。その代り、君の慈悲を永久に記念する爲に、僕が寫眞に撮つて置く。ね、承知してくれるだらう。』

哀訴するやうに、氣持ち聲に顫へを帶びてゐた。

呆氣に取られたらしく、ヒントンはジロ〳〵とアルバートの樣子を見詰めてゐた。

『君は、何うかしてゐるね。』

と、不平さうに呟いたけれども、それでも拳銃は納めてくれた。



島の面積實に一萬方哩といふドえらいウラリコエラ上流の、大川中島の牧場の偉觀。川のへりの森林の外は、すべて大草原。

アルバートは、淚ぐましく見えるほどに感謝に充ちた目で默禮をかへすと、急いで寫眞機の焦點を合せた。

◇水源地の怪異

ボア・エスペランカの町の上空を一周すると、それだけで、ボア・ヴイスタへ引き返して來た。

ボア・ヴイスタを、この探險隊の一時的本據とする豫定だつたからである。で、ラヂオ技手のスワンソンやマツクカレブやも、先着として遣つて來て、後から精密な調査をしながら進んで來る團長等の本隊と、始終無線電話

で聯絡を取つてゐた。ずツと上流へ向つてゐた先發隊とも、矢張り無線の交渉が續けられつゝあつた。

ヒントンとアルバートにも、重大な責任があつた。それは最終の水源地飛行の準備をすることと、今までの飛行區域の地圖や記錄を作製する事とであつた。

二人は、此所に數日を忙しく、久しぶりで地上の人として暮した。

と、その時は最う、四百餘哩の上流まで溯つてゐた先發隊から、クレー・クレーマ岩礁流域の水の工合も至極好くなつて、岩が隱れて了つたので、好個の着水位置を選定する事が出來たといふ無線電信が入つて來た。



このクレー・クレーマ岩礁流域といふのは、ボア・ヴイスタからブランコ河の上流三十哩ばかりの地點で落合ふウラリコエラ河を、更に六十哩ほども上流へ行くと、幅三十哩長さ六十哩ばかりの河中島がある。その島から、東へ〳〵と溯航すること約百哩で、急湍岩を噛み、白沫常に飛散して、激流又瀑流、轟々天地も轟くやうな物凄い響きを絶やさない延長百哩の一區域である。土人達さへ震ひ上つてゐる魔所である。

飛行家に取つては、激流なぞ何んでも無い。ただ着水場さへあれば可いのである。二人は、先發隊の報告に接すると、勇み立つて、直ちに出發した。

そして、ほんのちよいとの間に、もうクレー・クレーマ岩礁流域の上空まで飛んで來て了つて、その恐ろしい魔の淵の眞上を、悠々と旋回飛行しながら、充分念入りの視察をやツつけて、それから選定されてゐた着水場へ着水した。

が、いよ〳〵着水して見ると、端と當惑するやうな出來事に出會つた。それは、前以て到着してゐる手筈になつてゐたガソリンや、その他の必要な荷物が、何うした都合か、まだ來てゐ

ない事だつた。第一、一番肝腎なガソリンは、もう殆んど油槽にも殘つてゐない。となると、足と手を一度に捥ぎ取られたほどの苦しみだ。

後で判つた事ではあるが、荷物を積んだ丸木舟が、激流を押し上つてゐる途中で顛覆した爲に、こんなヘマな事が持上つたのであつた。

で、ヒントン達は、先着してゐた數名の隊員と共に、孤島に流された囚徒のやうに、淋しく恐ろしい數週間を河岸の天幕に過さねばならなかつた。

それは隨分待遠しい、不安なものであつた。が、第二の船便が漸く無事に到着し、續いて隊長等の本隊もやつて來た。

『飛行中に殺られるのは、寧ろ本望だが、こんな所で餓死するかと思つた時には、泣いても泣き切れなかつたねえ！』

ヒントンとアルバートとは、こんな事を語り合つて、飛行機に乘り込んだ。長い間に、すツかり手入れが出來てゐたので、乘つた感じが馬鹿に好い。何となく、心丈夫でもあつた。

いよ〳〵離水した。北方アマゾン流域では、文明人最後の前進陣地だと云はれてゐるアラガリコを指して針路を取つてゐた。このアラガリコは、世界無比の、大河中島に設けられた大牧場である。

百哩も來たと思ふと、脚下は最う一面に草茫々涯しも無い一大草原であつた。その草原の周圍は、曲つたりくねつたり、勝手放題に流れてゐるとでも言つて見たいやうに、非常に曲折の多い河で取り繞まれてゐた。その島の面積は、實に一萬方哩といふド豪いものである。日本の四國より、まだ大きいのだ

この島全體が、牧場となつてゐる。牧場には無數の家畜が飼はれてゐるけれども、島であるから柵は要ら無い。そしてただ一人のブラジル人が、多くの土人の牛飼を使つて立派な成績を擧げてゐる。

この牧場の家畜と、その附近に產する護謨とを、文明國の市場へ仲繼ぎするために、ボア・ヴイスタ市が存在してゐるのである。

ヒントン等は、その牧場の低空を一周してから、再び最初の針路に戾つて、更に奧深く飛行を續けた。

と、また河が二筋に岐れてゐる合流點へ出た。

『ヤツ！』

二人は、申合せたやうに一緒に叫び出した。そして遽てゝ通話器を取つて話し始めた。

『小屋が見えるぞ！』

『確かに見える！』

『チャーレス・ブルの一行ぢや無いだらうか。』

『僕も、さうと思つたんだ！』

機は、ぐン〳〵と低くなつて行つた。

着水してから、急いで假小屋の方角へ行かうとすると、森の陰からガヤ〳〵といふ人聲が聞えて來た。

確かに、人聲ではあるが、時とすると、獸の吼えるやうにも

聞える。兎に角、人間としても、文明國人では無い。

果然、眞暗な森から飛び出して來たのは、ぞッとするやうな相貌をしてゐる土人だつた。一人——二人——三人——と、後から後からとばら／＼馳けて來る。此方へ向つて、馳けて來る。

佶ッとなつたアルバートの目は、怪しく光つた。ヒントンの右の手は、腰の衣嚢の拳銃を握つてゐた。

『おゝ！　矢ッ張り爾うだつたなッ！』

喚くやうな、感情の高調した聲が、土人達の背後の方から聞えて來た。確かに英語だ。立派な自國語だ。

『チャーレス君かッ！』

『さうだ！　さうだ！　ヒントン君ッ！　アルバート君ッ！』

兩方の叫びが接近した時には、何方の人も、お互ひの顔が見別けられ無いほど、涙が目に一杯になつてゐた。

チャーレス・ブルは、數十日前に先發した隊員の一人である。最後の水源探險の根據地を設ける爲に、土人の配下を督勵して、假小屋を造つて待つてゐたのだ。それにしても、人迹未踏の蠻地の奥の又奥で、數十日目で廻り合つた隊員同士が、お互ひに無事な顔を見た時には、矢張り涙が先立つのだつた。

ヒントンとアルバートとは、この假小屋で二三日休養して、傍ら飛行機に充分手入れをする事とした。これからいよ／＼、世界の誰も足を踏み入れた事の無いパリマ河の水源地へ向つて、冒險中の冒險飛行を斷行しようといふのである。

假小屋に過した三晝夜は、この人達に取つては、生涯忘れる事の出來ないものであつた。ヒントンとアルバートとは、アマゾン河口から二千哩の奥の、天秘を啓かうとして決死の飛行に直面してゐる。チアーレスは、數十日間を、蠻人と一緒に暮らし、之から又、さうした生活を續けねばならぬ立場に在つた。一度別れゝば、二度とは會へないやうな氣がしてなら無い。同じ探險隊の隊員としての親しみが、凝ッと顔を見合つてゐるうちに、ぐン／＼懐しさを募らせて來て、何時か兄弟のやうにも思はれ、夫婦のやうにも思はれて來る。彼が自分であり、自分が彼であるやうな幻想にさへ囚はれて了ふ。別れるといふ事は、自分といふ一個體を、無理に引き割かれるやうな悲しさ苦しさを覺えさせる。

『五月十一日、この日を忘れないぞ。』

三人は、その朝未明、かう言つて、機の上と下とで泣いて堅く握手した。握手の手が、しッかりくッ着いて、取らうとしても取れないやうな氣がして、いつまでも顔を見合つてゐた。心ない、本當に無智な土人共でさへ、淋しさうに肩を窄めて、目を伏せてゐた。

が、遂にプロペラーは唸りを生じた。機は岸を離れ、水を切りして、魔物のやうにふうはり浮いた。浮いて／＼だん／＼浮いて、名殘り惜し氣に、低く圓を描いて舞つてから、咽ぶやうな爆音を殘して雲の上へ舞ひ上つて行つた。

パリマ河の川幅は、相當に廣くはあつたが、それでも十哩の

幅員を有つ、マナオス市附近のアマゾン本流と比べれば、子の孫の、曾孫の玄孫のやうなものであつた。ヒントン等は、そのパリマ河の白い流れを脚下に目標として、ただ驀地に進み續けた。

眼界は、いつまで行つても總て大森林である。黒いほどに茂つた樹海である。土地の高くなつた關係からして、アマゾン椋梠の類は無くなつたが、矢張り、化物のやうな大樹木の密集した原始の密林である事には變りは無かつた。

この密林、この河、この空間、此所を見、此所に足を入れたものは、自分等が最初である。自分達は、千古の神秘を征服したのである――といふやうな感じが、いつどなく胸一杯になる。それは、世界的優勝者のやうな誇らしい氣分であつた。

河幅は、ますく狹くなつて來た。狹くなつたとは言へ、それでも六十米突は確かにあつた。

が、たうとう其の河も見えなくなつた。

『無くなつた!』

二人は、殆んど同時に、かう思つた。が、次ぎの瞬間に、又殆んど同時に、

『いや、隱れたんだ!』

と、思ひ直してゐた。

(今に屹度、又姿を現はすに相違ない)

かうした期待が、針路を變へずに、眞直ぐに進ませた。

果して、姿は現はれた。けれども、又隱れた。それからは、何度といふ事なしに、隱くれては、現はれ、現はれては、隱くれた。

何故か? 少し、アマゾン水源の實際を説明しよう。

大森林は、吾々のちよつと想像を容さぬやうな巨木ばかりである。五十尺――六十尺――七十尺――そんな物は何んだ。矢張り、化物と形容するより外は無いやうな大木が、高くくそそり立つてゐる。高いばかりでは無い。前後左右に枝と枝、葉と葉とを、彌が上に擴げてゐる。地面は、何千年といふ事なしに、日光といふものを知つてゐない。その木の下闇を流れてゐるパリマ河であるから少し河幅が狹くなつたり、枝の茂り工合が違つたりすれば、忽ち隱くれて了ふ。上から、どんなに覗き下したつて、見えつこは無いに決まつてゐる。

が、遂に、何うしても、もう出て來ない時が來た。

それでも、二人は諦められなかつた。一所懸命に探し作ら、飛行を續けて行く。

『やツ!、出た!』

ヒントンとアルバートは、一緒に叫んだ。が、それは河では無かつた。瀧だつた。

普通の瀧では無い。落ち際も分らず、瀧壺も見えない、ただ落ちる水だけの、出所不明、行衞不明の瀧であつた。何千年も、何萬年もかうして白く光り續けて來た、その不思議の瀧であつた。

それが、二本も見えてゐた。見えてゐる部分だけでも、數百

尺は確かにある。

こんな大きな瀧が、どうして頭を尻尾を見せないのだ。それは矢張り、大森林の魔術が爲す業であつた。

大森林の隧道も、削ぎ立つ貳百尺の絶壁では、俄かに態度を變へる。そこで初めて、流れの水は、天日を仰ぐ事が出來るのである。

『まるで、白のリボンだ！』

『光つてる所は、寧ろ白銀の延棒だ！』

『どつちでもいい。あの震動してゐる恐ろしさは何うだ！』

二人は、アマゾン水源の不思議の瀧に見とれてゐる内に、いつか分水嶺を越してゐた。

何處から出て、何處へ流れ去るのか、瀧壺も落ちぎはも分らぬ行先不明の、アマゾン水源地の瀧二筋。



もうブラジルでは無い。目に入つた小さな河は、反對の方角へ流れてゐる。之はコロンビアからヴエネズラを貫くオリノコ河の上流であつた。

現代人の力を以てしては、此の二筋の瀧以上に、神秘境の〻推ともいふべきアマゾン河の水源を發見する事は出來ない。

ヒントンも、アルバートも、それを能く識つてゐた。そして之だけで心から滿足して、根據地へ引還したのだつた。（終）

更に〱痛絶壯絶の大冒險事實物語を最近の號で發表します。御期待下さい！



蜂須賀小六

村上浪六
小山榮達畫

縁といふもの、互ひに兼ての知り合うた間柄よりも、思はぬところに繋がれる事が多い、つまり双方に不思議のない豫期の常縁常遇でなく寧ろ案外の奇縁奇遇に離れ難い人情の深味を加へて來る、

海東郡一圓の守り本尊といはるゝ蜂須賀村の小六正勝と、愛知郡中村の生れた家にも居れず半乞食の姿で旅の空を流れ歩いた十五の針賣と、固より何の縁も由緒もないが、其日の飢に迫りし哀れさを見兼ねて握り飯五個と三十文の錢を與へたのが縁の端となり、また蓮華寺の慈證坊といふ老僧の墓の前で一言二言の情が由緒らしい端となり、時も時、不意に清洲勢の押寄せて來たを幸ひ百姓一揆の中に紛れ込で、追へども追へども去らず離れず、ちよろ〳〵尻に附纏うて以來、この針賣は其まゝ小六の家に轉げ込で動かない、

あぶないぞ、怪我するぞ、踏殺されるぞと、あの騒ぎの中で押退けても叱り飛しても、蒼蠅く影に纏ひ附て離れぬ奴、その騒ぎが治まりて危な氣もなく怪我もせず踏殺される恐れもないとなればます〳〵平

氣に纏着て離れない、いよ〳〵安心したらしい樣子で動かない、置てやるとも使うてやるともいはないに、づる〳〵べッたりの居候を極め込だ横着さは小面憎いが、朝は明けぬ前に飛起きて水を汲み庭を掃き、夜は寢るまで油斷なく隙間なく立働いて、同じ小六に召使はるゝ男の手助けとなり、をりをり人を馬鹿にするやうな事をいふかと思へば、また人より馬鹿にされても白痴扱ひにされても怒らず怨まず、用のない時の退屈凌ぎには結句、おもしろい慰み物として無理に追ひ出さうとするものはない、

ことし十五でも世間普通の十二三ぐらゐに見える痩せた小さい身體で居ながら、旅より旅を飢ゑ歩いた今までの空腹を一時に取返す量見か、いざ飯時となれば餓鬼のやうに茶碗へ嚙り付て、びッくりするほどの大飯を喰ふ事まで聞し味の種にされて、人の愛嬌に弄ばれる、加之も名を調べて聞くものはない、始め針を賣りに來たので、今も其まゝ針賣々々といはれて居る、

『おい、針賣、さう一時に喰ひ込むと腹の皮が裂けるぞ』

茶碗を片手に箸を片手に中休みの面が此奴また面白いと笑はれながら、いかにも眞面目に不思議さうな小首を傾けて、

『さほど、大喰ひに見えますするか』

『もう誰も追ひ出さうとはせぬぞ、元來その小粒で、どこへ這入る、身の毒ぢや、ゆる〳〵氣長う日を伸して喰へよ』

『いや、あまりものを軒下に置いても不憫い身、これで腹半分に控へて居りまする』

『ヤア、それで腹半分か』

居合した四五人、どッと笑ひ出して、

『はゝゝ此奴の腹は別物ぢや』

飯時の飯ばかりが別物でない、此奴の腹は他日の天下を一口の丸飲にした腹で、もう五六年もすれば人間の五疋や十疋は三ばい酢にして食ふほどの運命に待受けられて居る、

小六も自分の家に豐太閤の卵子が轉げ込で居るとは知る筈ないが、そも〳〵始めから此奴、虫の這ふが如く蠢めくやうに見えない、たとひ旅の空に針を賣り盡しても其まゝ其處で飢死する奴とは見えない、この恐ろしい亂世ながら人にも馬にも踏まれる小倅でないらしく見て居る、一種の奇相を帶びた面貌、射るやうに底光りのする目、どこやらに閃めく生來の大膽さ、うてば響く氣轉の素早さ、づう〳〵しく強情に辛い程押の強いところあるかと思へば、また物事に執着せぬ自然の暢々としたところもありて、ます〳〵世間にありふれた尋常の小せがれでないらしく見えて來る、

奥の室の踏板に打藁の圓座を敷て、ゆッたりと柱に背を持たせた小六、はや冬近き庭前の落葉を掃きに來たを幸ひに近く招き、みづから一ぱい茶を汲み與へて縁端に腰をかけさせ、猿々しい顏に優しい微笑を浮べながら、

『もう針を賣り歩く氣はないか』

出された茶を遠慮なく戴いて飲み、指された緣端に悪びれもせず小さい身體を捻りながら額越に見上げて、

『もう、賣る針は持ちませぬ』

『いや、まだある筈ぢや、四日前に問うた時、まだあると聞いたに、あれを、どうした』



『埋めました』

『埋めた』

『あの針め、なまじひ彼奴のため知らぬ旅路の野山に行きくれて、喰ふや喰はずの難儀いたしまする、あれさへ無くば、こなた様に犬か猫のやう、飼はれる事と思ひまして』

小六は目を閉ぢて、ちよいと考へたらしい顏で笑ひながら、

『はゝゝゝ人と犬猫とは違ふぞ、他に行く先なくば心置なう、いつまでも居よ、但し針は何處へ埋めた』

『裏庭の蘇鐵の根に』

おもはず首肯た小六、

『蘇鐵には大の肥料、無益にならぬ捨場ぢや』

また茶を汲み直してやると、また遠慮なく一息に飲む横顏を、ジッと打守る小六、

『これは過ぎた事ながら、あの

時もし清洲の勢に蹴殺されるか乃至また一揆の人數に踏殺されるか、その不運に出逢はゞ何とする』

思案する遑もなく手幡に受けて、

『それまでの生命と、諦めまする』

年にも似合ず、よい覺悟の奴と思うたらしい小六、

『なれど、生れ故郷には、まだ親があらう、歸りたくはないか、顏を見たうはないか、逢ひたうはないか』

これを聞くと急に差俯いて、目に一雫の露を宿して居る、

『父母ともに存命か』

目の雫を保ち得ず、そツと痩せた手の甲で拭ひながら、あはれや聲も沈み勝に、

『母、うみの母は居りまするが、父は後添ひの人、同胞も皆種違ひ、幼少より村に傭はれた草刈りも田螺取りも、この身だけの麥には足らず、せめて貧苦の中の食ふものを減らさうため、十二の時に家を出て、ことし十五まで三年の間、知らぬ土地を彷徨ひ、野宿の夢にばかり母の顏を見て居りまする』

小六の目も自然と濕み出して來る、

『どうならうとも、早く成人して、その母に孝養を盡すが第一、



我等も兩親はない、片親なりとも生みの母あるだけ幸福ぢや、ほんの父は、いつごろ世を去りしぞ』

暫く差俯いたまゝに無言の後、

『ほんの父、いや、この身には父親といふもの、御座りませぬ』

『異な事をいふ、たとひ死だとて、父親のない子が生れるか、はゝゝゝ』

なほ顏をあげず首を左右に振りて、

『御座りませぬ』

『ないとは』

『御座りませぬ』

『母の胎内にある時、失うたか』

『いや御座りませぬ』

父の顏を知らぬといふならば兎も角、あくまで父は無いといふ言葉に小六はます〳〵眉を顰めながら、

『解せぬぞ、蓮華寺で何のため慈證坊を尋ねるかと問へば、その墓の前に於て、父の所緣というたでないか、また今の父を後添ひの人といへば、その前添ひの父がある筈、さるを名さ

へ知らぬとは』
伏した頭いよ／＼板敷に下げて、
『前の父も、實は生みの父でないらしく、家を出ます時、母の言葉、もし海東郡へ立廻りて、蜂須賀村の蓮華寺に慈潤坊いふ御僧、まだ生きて居られたらば今年七十あまり、そッと他所ながら聞かされる事もあらう、この口からは恐れ多くて、いはれぬと、それがため、はる／＼尋ねてまゐりました』
小六の眉毛、ぴく／＼と動いて、いかにも不審深く寄せながら、
『あの時、いふ通り、この小六も幼少の頃、始めて指に筆を持ち添へられた手習ひ師匠ぢや、その後は都の東寺に在したが、寺へ歸られて間もなく亡になられた、もう八年』
小六のためには懐かしき幼少の昔、いろはを教へられた人、この針賣のためには生みの父の謎を秘めたまゝ世を去りし人、慈潤坊は苔の下で二人の緣を引寄せたかも知れない。

豐太閤の素性は愛知郡の熱田神領で中村の產、彌右衞門といふものゝ子に生れ彌右衞門の死後その母は織田家の同朋衆で歸農した筑阿彌を入夫に迎へたといふ事は、もはや史家も世間も殆ど肯定して居るが、一說また都より配流されし持萩中納言の息女が民間に嫁して生れた子とし、一說また其母の若き頃、內裏のみづし所の下女たりしが、ゆくりなく玉體に近づき奉りて生れたといふ事である、

持萩中納言の事は、飛保の村雲といふ里に流されて（ながめやる都の月に村雲のかゝる住居も浮世なりけり）といふ和歌を以て傳へられ、また御所屋敷といふ事も口碑に殘りつゝあるが、當時の少納言以上補任の記錄中に其人も其名もない、これは秀吉の母が御器所村に生れたといふ點より附會したらしいが、只その皇胤說に至りては斷ずる考慮を要すべきものがある、恐れ多いが當時の朝廷は後世の今日より我々の夢にも想像にも及ばざる荒廢の極に達し、高野の僧に有雅なるもの寺務檢校に補せられ色紙短冊に陛下の御染筆を乞ひ、これを民家の富めるものに頒ち與へて僅かの謝物を納れしめ、やう／＼に朝廷用度の補足にせしといふ時代、築地は破れて御垣守の影なく徒らに犬猫の通ひ路となり、深夜に三條の橋の上より望めば幽かに殿上の奥深き燈火を認め、近く仰げば紫宸殿の柱も傾き清凉殿の廂も朽ち、御簾は蜘蛛の巣に閉され內侍所に雨漏り月を宿して、玉體を包む御衣さへ四季に更め給はず、をり／＼召すに人稀なりといふ時で、名もない端た女の近き奉りし事のないとは斷ぜられない、
この事は秀吉が始めて參內の時、裝束めしかへの施藥院にて自から左右に語りしを松永宗匠が書殘して居る、母は日輪その懷中に入ると夢みて我を孕めりと、

また天正十八年現に豐太閤が征韓のため朝鮮王に與へし書中にも（予當于托胎之時、慈母夢日輪入懷中、相士曰、日光之所及無不照臨）とせしは、强ち外敵に對する威嚇の文字でもないらしい、

そも〳〵我國の氏素性、即ち系圖系統なるもの、わけて武門武將は父系を尊び母系を語らない、史籍の上にも母は父の姓を冒さずして生家の氏を稱し、系圖の上には多く一女二女三女と記し、晴がましき戰場の敵には猶更の事、何の某の子孫とか嫡男とか、五男でも六男でも鞍坪に伸び上りて必ず父の名を叫び、いかなる場合も母の素性を誇らず、本腹でも妾腹でも野合の子でも何等の顧慮なく、今日の婦人に對しては實に氣の毒の至極であるが、いはゆる腹は假り物とした當時、御器所村の士民の女といふ母を奉ずるに天下取の勢ひを以て從二位の大政所とし贈從一位の三后に准ぜられるまで孝養を盡した豐太閤が父の位牌も安置せず父の廟も寺も建てず贈位贈官も乞はず、生涯いまだ曾て一度の追善供養も行はざりしといふは、あまりの大矛盾で、あまりの不思議に堪へられない、

彌右衞門の子にせよ彌助の子にせよ筑阿彌の子にせよ、母を女儀無上の光榮に奉じた秀吉として、父系を尊ぶ當時その父のため一基の墓碑も一片の追福もせざりし不可思議を思へば、父の名を憚かりて日輪その母の懷中に入りしといふ夢物語りに我皇胤たる事を托したのではなからうか、

さらに別の一說は、海東郡の蜂須賀村に名高い蓮華寺の僧が都より孕める女を連れて來て、いかなる人の胤ともいはず、只その姙身せる事だけを打明けて自分の俗緣に當る中村の彌右衞門に嫁せしめた時、彌右衞門は既に亡妻の生み殘した一女子ありて、それを秀吉の姉とすれば、この姉は木下家の系圖に三位法印一路とせる羽柴武藏守の室で、後の關白秀次その間に生れ、彌右衞門の死後、筑阿彌を入夫に迎へて生れたのが弟の小十郎で後の大和大納言秀長、次の女子たる妹は德川家康に嫁した南明院、つまり秀吉のためには姉も弟も妹も悉く腹違ひと種違ひである、

その豐太閤も一家の貧苦に繼父の手前、母の氣兼と氣苦勞を見るに忍びず、せめて自分だけの餌を求めようとして家を去る時は、やう〳〵十二で、いかに悲しく淋しく泣たであらうか、また的もない旅の空へ行衞も知れず放し遣る母の目に、とぼ〳〵と出て行く哀れな後姿を見て、いかに寂しく痛々しく泣たであらうか、幸ひ蜂須賀村の小六に拾はれて、ふしぎの緣に朝夕の露命は繫ぎ得ても、これまで野宿の夢に母の顏ばかり見ましたといふ時は、しく〳〵と啜りあげて、他日の三軍を叱咤する人の十五とは思へない、やはり十五は十五で、たゞの子供に等しく、

天性の大膽も不敵も智惠も策略も親子の情には用を爲さない、それ以來の小六は人一倍の情を掛け目を掛けて、をり〳〵用のない暇潰しの話し相手にして見ると、なか〳〵面白い、ますますその生來が一皮づつ剝ぐやうに現はれて來て、顏色を悟るや否、すぐに心の底を讀む工合、呼べば返事よりも早く眼前に身を運び出し、急場の氣轉は世間馴れた大人の二人分も三人分も瞬く間に埒を明けて、爲る手輕く便利よく重寶に使へるが、出る時も入る時も傍を離れず、ちよこ〳〵と附て來るのが聊か足手纏ひに蒼蠅い、然し清洲勢の押寄せた時あの一揆の中で追うても拂うても尻へ喰ひ付て廻る奴、かうなれば猶更いよ〳〵離れない、それだけに小六また面倒な厄介物ながら段々と憎くない氣がして來る、

『おぬしと我とは、前世に他人ではないらしいぞ、はゝゝゝ』

ぴよこりと頭を下げて、にや〳〵笑ひながら、

『親子には、ちと年が近づき過ぎて、ぶしつけながら兄弟でゝも御座りませうか』

『いや、親子は一世といふ、兄弟は現世かぎりで夫婦は二世の諺、三世の主從かも知れぬ』

『三世目に當りまするか』

『三世目として置かう、もう一度これから先の世に附き纏はれては叶はぬ、はッはッはッ』

主從といふのは無論それを現在の眼前に見た言葉であるが、今この場の主從は軈て後の位置を轉倒して、さかさまになるとは實に面白い人間の行末で、互ひの運命が流れ行く時勢の推移に從ひ廻り行く人生の變遷に伴はれて、いづれから助けても助けられても、ありし昔を思へば猶更この二人に全くの深い因緣が結ばれて居る、



蜂須賀村の野に咲く秋の萩も尾花も枯れて仕舞うて、鬱蒼たる蓮華寺の森も次第に葉越の隙間を見せ、田も畑も青い色の絶えた冬空に北風の激しい夕まぐれ、小六の門前に行き倒れの病人がある、

苦しげの唸り聲に間近の小耳を立てたのは例の針賣、他の男よりも身輕く飛出して見ると、馴れぬらしい旅路に姿は窶れて居るが、身に纒うた衣類は色こそ褪せたれど當世風で、まだ殘る夕陽の餘光に被り笠の内を差覗けば、十六七の畫に描いたやうな美少年、そろ〳〵門の軒下に這ひ寄りて、細き眉を顰め目を半眼に開きながら、聲も幽かに切々に、

『暫く、暫くの間、御門前を借りまする、この邊は始めての旅のもの、俄かの苦しみで、一歩も、御無心ながら、おなさけに水を、水を、一ぱい水を惠まれたい』

見苦しからぬ風俗と旅の日燒けもせぬ目鼻立は、どろ〳〵に垢づいた腰ぎりの半着物で黑く瘦せた空腹を抱へ步きし我身と雲泥の相違ながら、年が若くて同じ旅の空に行きくれ加之も俄かの病氣に惱む人と思へば、よそならぬ心地、猶更の氣の毒に捨てゝ置けない、

『水、心得た、藥は、藥は』

『藥は、不用意、持ち合しませぬ』

『や、それも心得た』

さッと飛鳥の如く門内へ引返し、すぐに出て來た時は片手に土瓶と片手に一服の粉藥、

『さア水、この藥は常々當家に蓄へられる腹痛の名藥』

小腕に抱き起して土瓶のまゝ一口まづ水を與へ、頻りに背を擦りながら粉藥を含ませて二度目の水を飲まして居る時、二人の下男も聞附けて立出で、折しも夕暮の庭前を步いて居た主人の小六まで出て來て、



『やれ旅の病人か、この北風に、そこは冷えるぞ、内へ入れて介抱せい、卑しからぬ若衆風ぢや、今宵一夜、おぬし達の部屋で暖かう休ませて進ぜよ、入らざる事を聞き糺して苦し味を増さすな、そッと大切に、大切に』

其まゝ一度だけ振返りて入りし小六の後姿を、さも苦しげの中より嬉しげに會釋して、殘りし三人に向ひ、

『數々の、お手を掛けまする、かやうの儘、お言葉に甘えて、一夜のお宿、お宿を願ひまする』

二人に左右の手を引かれ一人に腰を押されて、やうやう寢るところまで運び込まれ、敷かれた蒲團の上に身を横たへながら、少し首を持ち上げて、

『なるほど、いかにも有難い御名藥、今の今まで、あの、あれほどの苦しさが次第に薄らいで行きまする、これは不思議、この分ならば、あけの朝、滿足に起きて、お禮の言葉も出ませうぞ、御當家は、何といふ方樣で』

二人の男は外の用に立ちて、その枕頭に例の小さい身體を去らず、ちよこなんと坐りながら、

『これは蜂須賀村の濱殿、小六殿の家』

病人の若衆は思はず目を見張りて、

『濱どの、あの音に響いた小六どの』

名を聞て驚いたかと、我事のやうに自慢らしい微笑を浮べたが、その顏は泣たのか笑うたのか、ちよいと急に見分けの附かぬ怪しい面で、俄かの苦痛に堪へ兼ねて滿面を皺めた若衆の病人顏よりも、うすぎたなく、はツきりとして居ない、されど、いふ事は面にも年にも似合ず、はきはきとして居る、

『一夜でも二夜でも、三日が四日にならうとも病氣の癒るまで出て行けとは、いはれぬ筈の主人どの平生の氣質、遠慮は無用、この身も實は先月以來、誰の手蔓も足蔓もなく旅の空から轉げ込で、其まゝの厄介もの、はゝゝゝ』

外へ行くところがなくば、これ幸ひに居坐れとはいはぬばかりの言葉、飛入の一人では古顏の奴に對して肩身が狹いため味方の心算で同じ居候の新米を引ずり込まうとするぐらゐの親切半分と横着半分は、たしかに備へて居る、それを若衆の耳に心に何と聞たか、まだ聊か苦痛の殘る目鼻を寄せながら、

『もし、もし無慈悲の軒下で病めば、元來、かよわい、この五體、どうならうも知れぬところを、佛神の加護でか、運よく、なさけある人の御門前で倒れました、いづこの生れで何の某といふ事は、病氣の癒え次第、あらためて、お禮と共に、ぢきぢき主人の殿へ申上げまする』

べらべら口達者に饒舌る奴、うかと油斷がならぬと見たか、問はれぬ先に網を張り出した此若衆も尋常の若衆でないらしい、第一その急病も疑へば疑がはれる節があるのみか、また姿も言葉も正しく間違ひのない武家生育のやうで居ながら、町人百姓さへ旅の空に用心深い一刀を離さぬ世の中で、ふしぎや腰に寸鐵も帶びて居ない、たゞ寢る時に懷中より隱さず女持の匕首らしいものを袋のまゝ取出して、そつと枕頭へ置き、やが

て腹痛の治まりしものか、すや〳〵と睡り始めたが、その寢惚ける如き寢顔の美はしさ、それを振返りて自己の居室へ寢に行く顔とは、あまりに違ひ過ぎた生れ工合で、ます〳〵互ひの美醜が明白に容赦なく際立ちて來る、

あけの朝、かういふ事がなくとも、常に人より早起きの身で、病人の枕頭へ一人分には案外の大きい鍋を持運び、梅干に茶碗と箸を添た熱い粥、

『今朝の氣分は、もし前夜あの後また痛まうかと思ひましたに、その顔色では安心、少しでも腹に物を入れねば身の力にならぬ、無理にも搔き込で、餘れば朝飯前に此方の役徳、はゝゝゝ』

嫁にせまほしい若衆の前へ、まして病人の前へ、達者な大男の三人分も、おまけに汁氣のない半炊きのやうな堅い粥を持ち込み、その小さい身體で、その餘りを朝飯前に喰はうとする腹加減の恐ろしさ、おもはず呆れ顔に見詰めたが、笑はれもせず手を打振りて、

『一度の馴染もない旅の行倒れに、まめ〳〵しい其お心は、何と申して宜いやら、なれど今朝まだ食は進みませぬ、たゞ湯と梅干だけ、いたゞきまする』

『や、それでは折角の骨折が無になる、せめて一ぱいでも、是非に二はいでも』

その一二はいを無理やりに押付けるかと思へば、其まゝ茶碗も箸も片隅に持出して、寢て居る若衆に背を向けながら、いかにも素早い藝當で瞬く間に鍋の底まで平げた後、けろりと此方へ向き直り、

『これから皆の衆と一同の朝飯を濟ませて、この顔を主人殿へ見せまする、何か申される事があれば、取次ぎませうぞ』

ます〳〵呆れ返りし若衆、うす氣味の惡い奴が居るぞといふやうな目で見詰めて居たが、寢ながら上げた頭を丁寧に下げて、

『おなさけの、ついでに、もう一日、此まゝ御厄介になりたう願ひまする』

あれだけの粥、どこへ這入りしか、胸にも腹にも閊へぬらしい顔で氣輕に首肯き、

『さう急かれいでも同じ事、後の養生が專一、ゆる〳〵なされませ』

この若衆の居る間は日に三度の食事を四度にする考へらしい、

三日目の晝過、自在鍵を吊した茶の間に近く大兵の小六、その前に豆のやうな身體の膝を縮めた工合、猶更ます〳〵小さく見える、

『あの若衆病人、どうぢや』

『もう、起きて居りまする』

『けふ起きたか、きのふ起きたか』

『今朝、始めて』

『いづこの生れで、何といふもの、聞かぬか』
『いろいろ話し相手になりまするが、それは、それだけは、こなた樣へ、ぢき〳〵申し上げたいと』
『ふウ、三日も朝夕の介抱をうけたものへ、生地も名もいはぬとは、ちと異な和郎ぢや、まして緣もない他人の親切を受けた身、世間の人情、問はれずとも嬉しさの餘り、自己より氏素性を語り出すべき筈』
それを此奴の小さい奥深い底光りのする目で、いかに考へて居るか、どう見て居るかと試す氣、
『あの若衆に不審の點はないか』
『仰せの通り、ちと異な和郎で御座りまする、第一は生育にも風俗にも不似合のところが多いばかりか、あの急病とて、うかと受取れぬ不思議の段々、をり〳〵人目を偸みて思案に沈む樣子、また時には我を忘れて片頰に心地よげの笑渦を入れる樣子、じたいの解せぬ若衆、どこやら化けてゐるやうに見えまする』
一息、唾を吞込で小膝を進めながら、
『お慰みに喧嘩でも賣り付け、取ツ組だところを、お目にかけませうか』
『はゝゝ弱々しく見えても年上ぢや、その細い瘦せこけた身體では、叶はぬぞ』
ぐツと今度は大きく膝を割り出して肩を怒らせ、
『負けませぬ、人は膽玉、この小粒でも手足の働きは、喰ふや喰はずの旅空を長い間、散々に馳け廻りて、雨に風に野山に骨を硬う鍛へて居りまする、ひよろ〳〵として浮世繪の亡者に等しい、あの男か女か分らぬ奴、一蹴りに蹴飛し一摑みに捻ぢ伏せて、掌で豆腐を押潰すよりも易い事、もしも手荒い業でなく汝に任すと承はれば、くる〳〵と口車に乘せて正體を見屆けまする』
これほどの事を平氣でいふ奴、また遣りかねない奴とは思ひながらも、小六は笑うて、
『いや、それに及ばぬ、あらためて一目、こゝで見る、呼で來い』
呼ばれて小六の面前に出て來た若衆、亂れた鬢の毛を手水に掻き上げたか、ふさ〳〵と艶々しく、三日前の急病に行き倒れたとは見えぬ顏に薄紅を帶び、名畫の筆に現はれたやうな面貌、くツきりと水際の立ちし美少年で、いかにも馴れた儀に正しく、疊二枚を隔てたところへ慇懃の頭を伏せたが、當世風の中剃は青黛を塗れるが如く、梅花の匂ひに春の夜の月とも思へるが、その横に少し出洒張りて仔細らしく控へた小粒の顏は、ます〳〵眞ツ黑に瘦せこけて見苦しい、
じツと打守りし小六の眼光、この時は常よりも物凄く眞一文字に睨きながら、骨太い聲に言葉の優し味を含ませて、
『君臣の間柄でもないに、はゝゝずツと前へ、前へ、心易く打解けて話さう、道行く袖のすれ合せも緣といふではないか』
『は、お言葉、恐れ入りまする、御門前に病み倒れましてより

三日の間、御禮は何とも申し上げられぬ山々』

『いや人の病み煩ひは、いつ何時、どこで起らうとも知れぬ、まづ思うたよりは早く癒て重疊、これから先は、いづれへ行く旅路ぞ』

『いづれへも、この先に行き場を持ちませぬ、實は、こなた樣の御名を慕ひまゐらせ、ある城主の許を脱け出して來た窮鳥、その御門前とも知らず、俄かの腹痛に倒れた身は、よくよく氏神の御手引かと心得まする』

『これは案外の事を聞くぞ、いづれの生國でその城主は誰、名は何といふ』

そろりと笠の額越に小六の顏を見上げて、また頭を下げたままの低い聲で、隱さずつゝまず大膽に本名を語り出した、

『城主は清洲の織田彦五郎信友、この身は近從に召使はれました坂田小平次と申すもの、當年十七歲』

泰然自若として身は動かないが、小六の眼光ますます鋭く光り出して來る、

『清洲の織田どの、先月の初旬、わざわざこの邊まで合戰の下稽古に來られたが、その後とんと御無沙汰ぢや、はッはッはッ』

清洲と聞くや否、例の小粒は舟を漕ぐやうに疊の上を膝頭で刻みながら段々と若衆の方へ近づかうとする、全く捨てゝ置けば不意に摑み掛るかも知れぬ勢ひ、小六これを片手に制して、

『その清洲の近從者が何のため、この小六を慕うて來る、方角違ひ過ぎるぞ』

『かやうな弱々しい身ながらも武士の家に生れました馬前の役目、戰場の討死は厭ひませぬが、あられもない無體の非道に從はぬとて兩親もない只一人の兄を手討にされ、女色の外の的に覘はれた現在の此身は兩刀を召し上げられて、固く一室へ押込められたところを朋輩の友誼に助けられ、やうやう城を脱け出しても猶、どこへ取り付く島はなく、あまりの無念さに他國へも走らず、あまりの口惜しさに他家へも泣き込まず、あまりの心外さに驅られ、こなた樣を一途の救ひの神と念じまして、今後もし清洲勢と取合の曉は、この小平次を先鋒に加へられたく、それを生涯の願ひとして』

小六の名を聞ては清洲の城中、名ある武者の荒男も互ひに顏を見合して團子餅を咽喉に詰込んだ如く目を白黑させながら言葉も出ない中より、この花も恥かしい風情の坂田小平次たゞ一人が不敵の座に進み出で、よもや鬼神の化身ではあるまい、心に油斷もあれば身に急所もある筈と、寢首を搔きに來た恐ろしい奴、

小六これを何とするか、ぎろぎろ傍で目を剝く小粒の顏を訝しげに見ながら、

『ふと忘れて居た、今日は庄內より長江の來る約束、もう時刻ぢや、明日の事、明日の事、あれは女色沙汰で、これは男色騒ぎで、我は他人の兩斷を受けるぞ、やア堪らぬ、はッはッはッ』

――つゞく――



情熱時代

三上於菟吉

岩田專太郎 畫

二ツの夜

――山田近一は、何かしら惡どいもので、胸を一ぱいに詰められたやうな氣がして、殆んど嘔きけを催さんばかりの氣持で、すばらしい食卓の前に坐つてゐた。昌一郎が主宰する商事會社では、社主の親友の一人が、新らたに設置された或る部內の課長級に任命されたといふので、社主に對してもそのままでも置けないから、今夜かなり盛大な歡迎會を東京會館で催したのだつた。

宮殿風のレストオランの一廣間は、濡羽いろの燕尾に、眞白な胸を見せたお上品なお客達で一ぱいで、うづたかく花をかざつた主卓には、近一と相ひ對して昌一郎がさも樂しげに席をしめてゐた。いいかげんにアルコホルも廻り、皿かずがかさなり、デザアトコオスが來て、社長自身が近一のために紹介演說を試みた。昌一郎は學生時代の交情を、事實よりも幾分か誇張してさへしやべつた。聽きやうに依つては、この新入社員とは切つても切れぬ間柄であるやうにも聽かれる演說だつた。

この演說は、心ある老幹部たちの眉根をいく分ひそめさせたには相違ない。私的にはどんな密情があるにせよ、さうしたことを言はゞ新米の見習社員同樣な人物の

ために公けに發表するといふことは、社中に一種の閥を作るやうなものだ――新米は我儘をふるまつてもいいと思ふであらうし、氣の弱い古株社員どもは、社主に氣兼ねして、社主その人の鼻息をうかがふために、この新米におべんちやらを言はうと試みるかも知れない――

しかし、さうした氣持を、そのまま外へ出すほど無考へな人間もゐなかつた。調査課長が立つて、社長の推讃を補足しようとするやうに、山田近一をあらためて賞美した。

近一は、さうした歡迎のことばの雨を浴びながら、今も言ふ通り、嘔きけを催さんばかりの氣持を感じてゐた。

――何といふ下らない、胸糞の惡いお芝居なんだ！

と、彼はこゝろの中に呟やいてゐた。

――社長は社長で、自分の運勢に有頂天になつて、舊友の僕を困乏の間からひろつたと言ふことに、さも大慈善でもほどこしたやうな得意を感じてゐるし、社員は社員で、滅相社長から待遇されてゐる僕に莫大な反感を覺えながら、おべつかの百萬だらだ！　人生は何て虚僞だらけのところなんだらう！

若し、千世子の事件さへなかつたならば、いかに近一のこゝろがねぢまがつてゐたにもせよ、舊友昌一郎の温情を、こんな風にばかりはとらなかつたであらう――しかし、自分が失つた戀人を、何も知らない昌一郎が拾ひ上げたといふことを知つたために、今や昌一郎のすることなすことが、小面にくくてならなかつた。

だが、會衆たちは、今や近一の健康と幸福とを祝賀するために、シヤムパンのグラスを舉げようとしてゐた。彼は無意味な目つきで杯を取り上げた。

高價な酒も、彼には惡醉ツぱい味を覺えさせたにすぎなかつた。

近一は喫煙室へ引き取つてから、それでもまはりの高級社員に、笑がほで今夜の禮を言つた。

昌一郎が近づいて來た。

『君はまつすぐに家へかへるかね？』

と、彼は囁やくやうに言つて微笑した。

『僕は今夜ちよいと訪問の約束があるのだが――』

と、言ふ意味は、明らかに、その微笑の中に、彼はこれから千世子の家をたづねなくてはならないからだといふことを示してゐるのだつた。

『どうぞ御自由に――今夜は僕も何となく落着かないから、そこらをブラついて歸りませう。』

近一は答へた。

間もなく近一は自動車の中に、燕尾服の腕を高く拱きながら坐つてゐた。微醉を帶びた頰を、めつきり春めいて來た夜を吹く風がここちよく冷ましてくれた。

『これで、今夜ツからこの僕も、東京紳士の一人なんだ。すばらしいことになつたものだ――ハ、ハ、あの貧乏で、孤獨な流浪者が――』

彼は自分の鋭どい才能と尖り切つた智恵とに就いては十分な自信があつた。今やさうした自分をこゝろゆくまで伸ばすに足りる土臺はなしとげられたのだ。

『果報は寢て待てといふが妙なものさ。若しあの大雪の晩、あの郊外のケチ臭いカフエで社長さんと出逢はなかつたら、今ごろの僕はどんなものになつてしまつてゐたかわかりはしないのだ。あの好人物の社長さん――模範的青年紳士にネ！　知らぬがほとけといふ言葉があるが、しかもこの僕が、戀人を中心にして見て、どんな存在だかといふことを知つたら、あの人は隨分妙な顔をするだらうなア――』

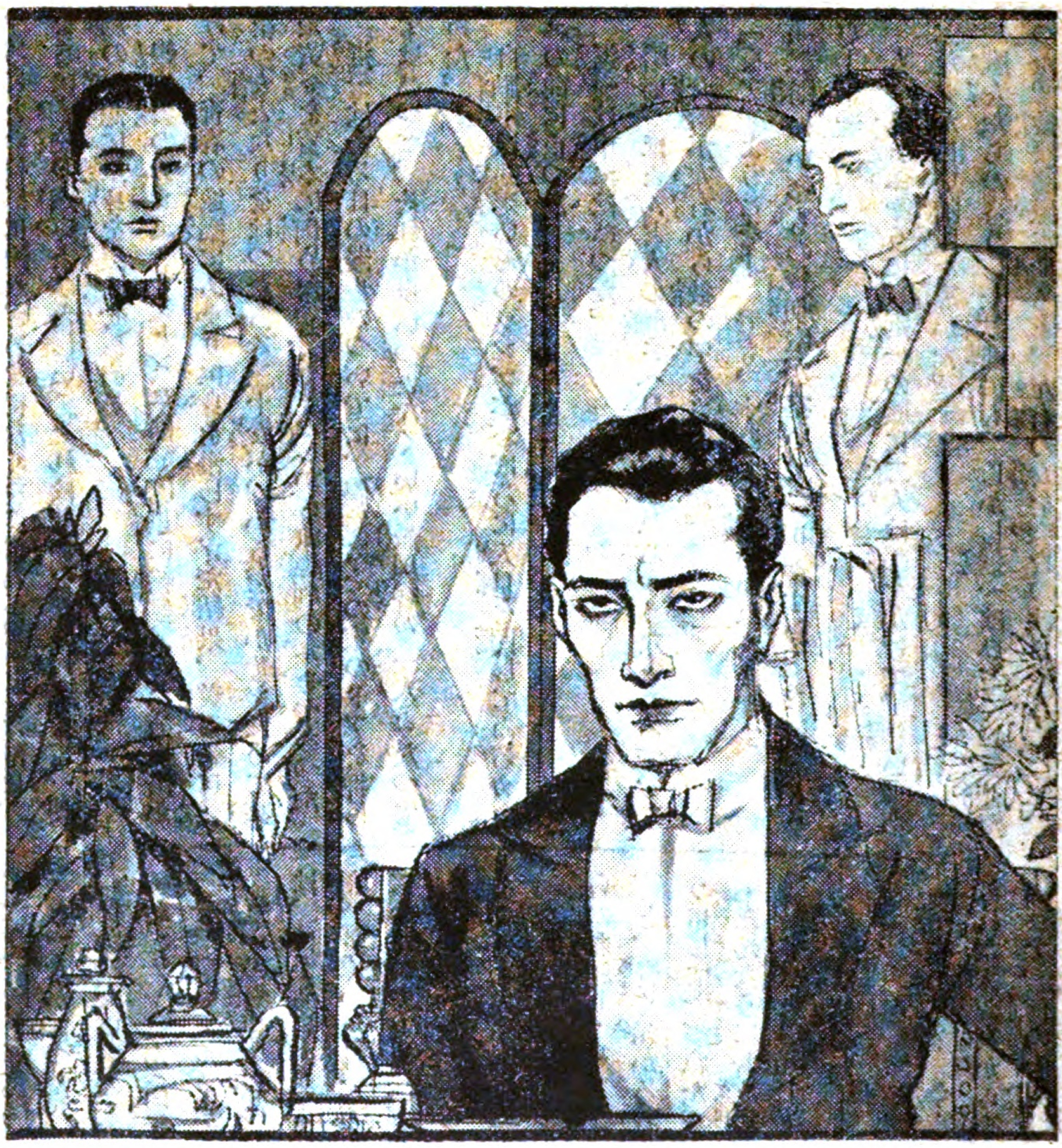


と、心に呟いて見たが、しかし、彼のこころは突然とげとげしいもので突き立てられた。

『だが、ようく知つて置いた方がいいよ！　この僕はこの安樂を買ふために、自分を一個のけだものに、たとへば犬のやうなものにしてしまつたのさ――あの好人物の紳士の番犬と身を落したのだぜ――吠えろと命じられれば、ワンワンと吠えねばならぬ番犬に――しかも、その主人は千世子を妻と呼ぶ男なのだ。だからさ、今後この犬めはよつぽど食べ肥らなければ割に合はない――この犬は、おそらく十分食べますぜ――主人閣下が痩せ細るほど食べますぜ。そこは考へて置いて下さい――それにしても尊敬する社長さんは、今ごろはさぞ幸福に――』

自らあざけり他をあざけつて、こんなひとりごとを心の中で言つてゐるうちに、だしぬけに彼の唇が引き釣つた。彼は昌一郎が千世子の許を訪づれて、どのやうな甘い歡ばしい享樂をほしいままにしてゐるかを、あまりにハツキリと想像せさるを得なかつたのだ。

『君たちは、當分おたのしみなさるがいいさ――しかし、そのおたのしみがいつ



までつゞくかは、この僕の氣持次第なのだぜ――ちよいとこの指先が、秘密の幕を引き開ければ、千世子さん、君の正體がすぐに暴露してしまふんだ――昌一郎君、御自慢の幸福はそれッきりになつてしまふんだ――いいかい？』

とは言へ、彼の瞳は見据ゑられ、奥齒はガチ〳〵と嚙み合はされた。あのやうに愛した目、愛した唇、愛した胸、愛した指、愛した髮の毛――曾て自分のいのちのやうなものであつた千世子の一切は、今はすつかり昌一郎の愛撫の下にまかせられてゐるのだ。

嫉妬は青い目の墓だと詩人は言つてゐる――その青い目の物凄い動物に、近一の魂は變化しつゝあつた。

『フン、まア、何も急くこたあないよ。どゆつくりおたのしみなさい――』

近一は、突然運轉手に言ひかけた。

『カフエ・ドオトンヌへ！』

長い不幸な放浪時代に、いつとなく深酒の味を覺え込んでしまつた近一は、ときどき底まで飲んで自分のすべてを忘却

することの快感に溺れざるを得なくなつてゐた。強烈な醉は、まさに魔藥の痲痺とひとしい。それは悲痛を乘り越させて、切那の幻想に全身を沒入せしめる。

銀座裏のカフエ・ドオトンヌは、巴里に繪修業のために出かけて、青春の逸樂にあまりに身を浸しすぎた結果、美ごとに淪落の女となりをはつたある三十女が、からだでかせぎためて來た黄金を資本に創めた、あまり芳しからぬ評判のみせであつた。近一はある日の漫歩のついでに、偶然にその家のドアを押してはひつて、それからいつとなくいい贔屓客の一人となつてゐた。

自動車は紫いろのランプがおぼろに入口を照してゐるカフエの前に止つた。

近一は中にはひつた。

暗い、ほとんど人の顏さへ見わけかねるやうなところで、二人の女給が左右から彼の手をさゝへた。

『まア、ようこそ！　でも、ずゐぶん遲いわねえ！』

『二階のいつもの貸切室が空いてをりますわ。さあ、どうぞ——』

もつれ合ふやうに、近一の腰に二人は手をかけて、細い、あぶなツかしい階段を導いた。

魔女たちのさうした歡迎にも、しかし近一はひどく無愛想だつた。彼は部屋に通ると、左右の女を突きのけるやうにして、ドカリと椅子に坐つた。

『まア、今夜はもうお醉ひになつていらつしやるのね。』

と一人が言つた。

『何か冷たいものを持つてまゐりませうか？』

『わざ〳〵こんな家へ水を飲みに來たわけではないよ——』

で、強いアルコホル類がもたらされた。

近一の愛想ツ氣のない態度にもかかはらず、二人の女給どもは、はたち娘のあらゆる愛くるしい媚びをもつて寄り添つてゐた。多くの男性たちにちやほやとながしめを送くられるに馴れてゐる美女どもは、やにツこい青年の馴れ〳〵しげな言葉よりも、狷介な、男らしい近一の容子に、何かしら心をひかれるものがあるらしかつた。

『まあ、今夜はすつかり盛裝なすつてゐる——ね！　どちらの宴會のお歸り？』

と、青く光かる着物を着た一人が、ほれ〳〵と近一を見るやうにしてたづねた。

『ほんたうにお立派だわ——私、背の高い方がイヴニングを召したすがたが大すきよ。』

近一は笑つた——カラ〳〵と、干からびたやうな笑ひを笑つた。

『今夜かね？　今夜はすばらしい晩なのさ。僕は僕のために張られた大祝宴から來たのだよ。』

『まア、何のお祝ひ？』

『僕が犬になつたお祝ひさ——飼ひ犬に——ハヽヽ

單純な女給たちには、近一の言葉の意味は何もわからないやうに見えた。

『ほんたうに、山田さんはいつもおもしろいことばかりおつしやるわ――とにかくお目出たいことに違ひないわね！』

と、曙いろの着ものの娘が兩手を打ち合せるやうにした。

『じやあ、シャムパン拔きませうか？』

『ウム、結構だ。今夜の祝盃は、あんな連中と擧げただけでは意味をなさない――一そ君たちと擧げた方がいいのだ――君たちは乾度こゝろから僕の成功を祝福してくれるだらうね――僕の未來の成功をね！』

と、近一は苦ッぽく笑つて言つた。

『ええ、ます〱成功なさるやうに！』

すぐに、黄金いろなす酒は、グラスに溢れ泡立つた。

二人の娘たちは、ちよいと背のびをするやうにして、近一の盃を打ち合せて飮んだ。

『幸先がいいよ、君たちのやうに美くしい人達に祝盃をあげて貰ふのは――これからまだ澤山仕事のある僕なのだ――』

さう云ひかけて、しかし、近一はふたゝび唇をかみしめて考へ込んだ。

――さぞ君たちは樂しんでゐるだらうね！　千世子さん！だが、僕は何とも思はないよ！

沈鬱な目つきに默つた近一のグラスを、娘たちはふたゝびみたした。青色の娘は、一ぱいのシャムパンにほんのりと目元を染めて、そしてしんみりと言ふのだつた。

『めづらしく元氣のいいお顏を見たと思つたら、また默つておしまひになつたのねえ。何をこちらはいつも考へ込んでばかりいらつしやるの？』

のぞき込むやうにしたが、しかし近一は答へなかつた。むしろ、うるささうに肩を動かしただけだつた。

『ほんたうよ、さち子さんは、いつもあなたのお噂をしては、どうしてあんなに陰氣でいらつしやるのだらうッて心配してゐますのよ。』

と、曙色の娘は口を添へた。

『あんまりあなたのことばかり言つてゐるので、みなさんからこの人はひやかされてゐなさるのよ。ホ、ホ、ホ。』

そして、さう言ひ捨てると、

『じやあ、さち子さんにおまかせするわ。私、階下が氣になるから――御ゆつくりね。』

と、ひらりと身を飜すやうにして、その娘は去つてしまつた。

さち子と呼ばれた少女は眞實近一を案じてゐるやうに見えた――いゝえ、ことに依れば、多少とも彼を愛してゐるやうにさへ見えた。

『ね、そんなにお目出度い晩だといふのに、駄目ですわ――さあ、もつとお飮んなさるがいいことよ！　私、何だか今夜のやうに嬉しいことはありませんのよ。』

『君はいつもうれしさうで、にぎやかだなア。』

と、近一は苦しげに笑つた。

『全く僕は陰氣に見えるだらうね。恐らく、それは當然なのだよ、なぜと言つて僕はいつもその場所に生きてはゐないのだもの――』

『その場所に生きていらつしやらないのですつて！　まあ！　妙な言葉ですこと。』

と、さち子はいぶかしげに言つた。

『つまり僕の魂は、いつだつて僕から離れてゐるのさ。』

不幸な人間は、自分の不幸について、永久に沈默してゐることの苦しさに堪へ切れぬ。小さなハケ口を見つけて、誰れにか歎げき訴へたい――歎げき訴へるまでなくとも、せめては語りたい、呟やきたい。で、この素直な少女の前で、彼は誰れにも言つてはならぬことを言ひ出したのだつた。

さち子は、美くしい、若々しい瞳をあつめて、びつくりしたやうに近一をみつめるのだつた。

『僕はいつだつてこゝにゐないものを、目の前にないものを追つかけてゐるのだ――だから、こゝにゐる僕はぬけがらさ。』

薄氣味悪い微笑をうかべて、近一はグラスを取り上げた。そしてグッと煽ると、

『全く、これはばけものじみた話だよ。僕なんか生きながら地獄に棲むものの一人だから、それも無理はあるまいね。』

近一はおしやべりになつて、どし〳〵新らしい盃を片づけて行つた。すると、一時頰を染めてゐた酔がサッと退いて、そして青白い、殆んど死の影に似たすさまじい色がたゞよひはじめるのだつた。

さち子は言ふに言へず哀しげな目つきをした。若し彼女が、近一に對して普通以上の愛情を感じてゐるとすれば、それはあたりまへだつた。愛するものの憂苦の根を知り得ないほど――そしてたゞ悩みのあらはれだけを眺めてゐなければならないほど辛らいことはあるはずがなかつた。

とうとう、彼女は辛抱がしきれなくなつて訊ねた。

『でも、どうしてあなたの魂はこゝにないのでせう？　何を追ひかけてゐるのでせう？』

『君がそれを訊くの？』

と、近一は苦笑した。

『君のやうな美くしく仕合せな娘が、僕の暗い世界に興味を持つといふのは、あんまり似合はしいことではないね。』

『だつて、私、氣にかかつてならないのですもの――』

と、さち子はうなだれるやうにして、近一の目をさけた。

近一は意地の悪い目で、うつむけたさち子の白い美くしい頸すぢをみつめた。頸すぢはほツそりとしてたよりなかつた。

それをマジ〳〵見ながら近一は酔ひのために乾く咽喉を更らに酒で濕した。

『さうかい？　そんなに氣にかけてくれるなら、ほかならぬ君だから云ふがね――僕は自分の女を他人に奪られて、そしてそ



の二人がどんなに親しくしてゐるかを、しじゆう見せつけられてゐる男なんだよ——その女だつて、全く昔は、君のやうに美くしかつた——やさしさうだつた——いゝえ、君より、もつとやさしさうだつたかも知れぬ——娘たちは、うはべではだれだつてやさしいからね。そして、それに反比例して、どんな男の悪黨だつて三舎を避けずにはゐられないやうな、悪どい虚僞を心に藏してゐるのだ——ねえ、君だつて、その點では、僕たち男どもが足もとへも寄れないえらさを持つてゐるといふことを、僕はちやんと證言するよ——』

『まア、何とおつしやるの？』

と、しをらしげなカフエ女は、顏をふり上げて抗辯した。

『私が、どんな女だとおつしやるの？』

『はるかに僕どもの知らない自己主義の世界に生きる、君も亦一人の女であることをさ——』

『だつて、あなたが、どうして私の氣持の中を御存知でせう？』

と、娘は目をかゞやかした。

『いゝえ、そんなことを言つても駄目さ、われ〳〵は個人として何も自分から主張することは出來ないのだよ。類推と批判とすべてを決定するのだ。すべての娘がかなしくしをらしい――なぞといふ考へは、三文小說にしか存在しやしないよ。きやつ等、小說家といふ、何かしら珍らしい感情や感覺を描いて、われわれの好奇心につけ込んで利を〆めようとする連中は、だから、一ぱんこの世であり得ない、女性のまごころなぞといふものを、ことさらめかしく書いて見せるのさ。若し、女ごころの信實なぞといふものがザラに此の世にあるものなら、どうして小說の材料になんぞなるものか！　ねえ！　おれはあり得ないから人の心を打つだけさ――』

べら〳〵と、さもさち子その人に、つきせぬ恨みでもいだくもののやうに近一はしやべりつけた。

さち子は半ば寂しげに、半ば絕望したやうに近一をみつめた。

『山田さん！』

と、彼女はつぶやくやうに呼びかけた。

『何だね？』

近一の瞳には、他人を殘害なつてよろこぶ邪惡なものがきらめいてゐた。

『だから、君も、必らず男性を傷けるだらうよ――恰度あれが僕を傷けたやうにどこかの男性を傷けるだらうよ。』

『山田さん、あなたは不幸な性格ねえ。』

そして、エプロンの娘は、伏目になつた。

『僕の性格が不幸だつて？』

と、近一はおもしろさうに言つた。

『僕の性格を作つたのは環境だよ、周圍だよ、そして、就中、女だよ。』

さう笑つたが、その笑には彼はもうすつかり醉ひみだれてしまつてゐたに相違なかつた。

『さち子さん、僕はさめてゐると絕えず苦しいつまらない時を送らねばならんのだ。だから、僕は眠るのがすきさ。』

と、言つたかと思ふと、兩手をテーブルの上に投げ出して、その上に顏を伏せてしまつた。

酒罎は倒れて、テーブルを酒でぬらした。恐らく近一の頰も濡れたであらう。

しかし、そんなことには拘はず、彼はもはや顏を上げなかつたのである。

×　　×

――山田近一が坐つてゐるカフェの一間のほの暗い灯りに引きかへて、恰度同じ時刻を昌一郎が費やしてゐた千世子の居間は、明るく、春らしく、樂しみに充たされてゐた。

『全く、僕は今夜位うれしいことはないのですよ。』

と、昌一郎は、思ひ出したやうに山田の噂をしだすのだ

つた。

『小さな自分の力が、今迄あんなに暗い世界に沈んでゐた友だちを、いくらかでも光明のある高みへ引き上げることが出來たと思ふと――男は、いつだつて仕事を持つてゐなければいけないのです。あの人の沈鬱な人生觀も、多分これからはスツカリ變るだらうと思はれますよ。』

『私、あの時はじめてお目にかかつたのですけれど、あの山川さんとかおつしやる方は、ほんたうに陰氣な方でございますわねえ――』

と、千世子は山川の名を口にする時にも、別にとりわけてこれといふ表情もうかべずに答へるのだつた。

『あの男もこれまでは全く不幸な者の見本のやうなものでしたよ――だが、そのためにあの男が、どんなにねぢけた人間になつてゐたとしても、だれにもとがめることは出來ないでせう――僕自身にひきくらべて見ても――かりに、こんなに愛してゐるあなたが、だしぬけに僕の目の前からゐなくなつたとして見たら――その時氣違ひにならなかつたら隨分仕合せなのです――山川君の、大そう慘憺たる戀物語については、いつぞやお話したことがあつたと思ひますね？』

さすがに、千世子の目はさまよつた――だが、言葉には何の變つたひゞきもなかつた――たゞ、一種の歎息のやうなものが漂つてゐるだけのやうに思はれた。

『――ええ、伺ひましたわ――伺つたと思ひますわ。』

昌一郎は呪ふやうに言つた。

『あの生々した昔の山田君を思ひ出すと、第三者の僕でも、あの人をそんなにひどい目に逢はせた女を怒らずにはゐられませんよ――もつとも、われ／＼が呪つたり怨んだりするまでもなく、天の配劑で、今ごろはどうせひどいことになつてゐるでせうけれど――』

『乾度さうにちがひありませんわ。』

千世子はもう瞳をたゆたはせはしなかつた――語調にも弱々しいところは失くなつてゐた――いつもの華やかな、感情的なひゞきが返つて來てゐた。

『あゝいふ正直さうな方を苦しめるやうな人が、どうして幸福でゐられるでせう――私なんか一目お目にかかつて、この方こそあなたのために一生の親友だと、失禮ですけれど感じた位ですのに――』

『君があの人をさうまで言つてくれゝば僕はほんたうに嬉しいのですよ。なぜと言つて、これから先き、あの人は仕事の方で、絶えず僕と觸接のある人物なのですから、君が若しあの人を面白くなく思ふやうなことがありでもすると、みんなのために不幸ですから――』

『まア！』と、千世子はうれしげにさけんだ。

『そんなことを御懸念なさる必要はちつともありはしないわ。一たい、あなたがお好きなものを、私が嫌つてどうしますの？私、たとへ昨日までどんなに厭なことでも、あなたがお好きだ

といふことを今日うかゞへば、その時からどんなにでも好きになりますわ――それが女ごころと言ふものなのよ――女なんて、との方とちがつて定見といふやうな立派なものが、あるはずがないのでございますもの――』

『ほんとに君は現代では二人とないやさしい人だ。』

と、昌一郎は幸福の吐息で言つた。

『今の世の中の女性は、何ひとつまとまつた知識もなければ力もたなく、おまけに美しくしくもない癖に、ふた言目には、さも自分に一人前のものがそなはつてゐて、自分がなければこの世の中の男といふ男が、生きる力もなくしてしまふやうに考へてゐるのが多いやうです――それなのに君は、どんなほかの女性も持つてゐない、美も、智恵も、力も、みんな持つておいでなのに、何ひとつ持たぬもののやうに謙遜だ――僕は全く幸福だ。この世の中で、あらゆる美點を備へながら、何も持たぬものよりしをらしくふるまふ性分の女性



に愛される男より幸福なものはないはずです。』

昌一郎は、歡びに胸を引きしめられるやうに言つて、思はず白い美くしい手を把つて唇へつけた。

千世子は深い微笑をうかべた――その微笑ほど複雜で解きがたい謎をたゝへたものはなかつたが、しかし昌一郎は何も氣がつかず、たゞ恍惚として甘い接吻の感觸に醉つてゐた。

やがて、彼は身を起した。

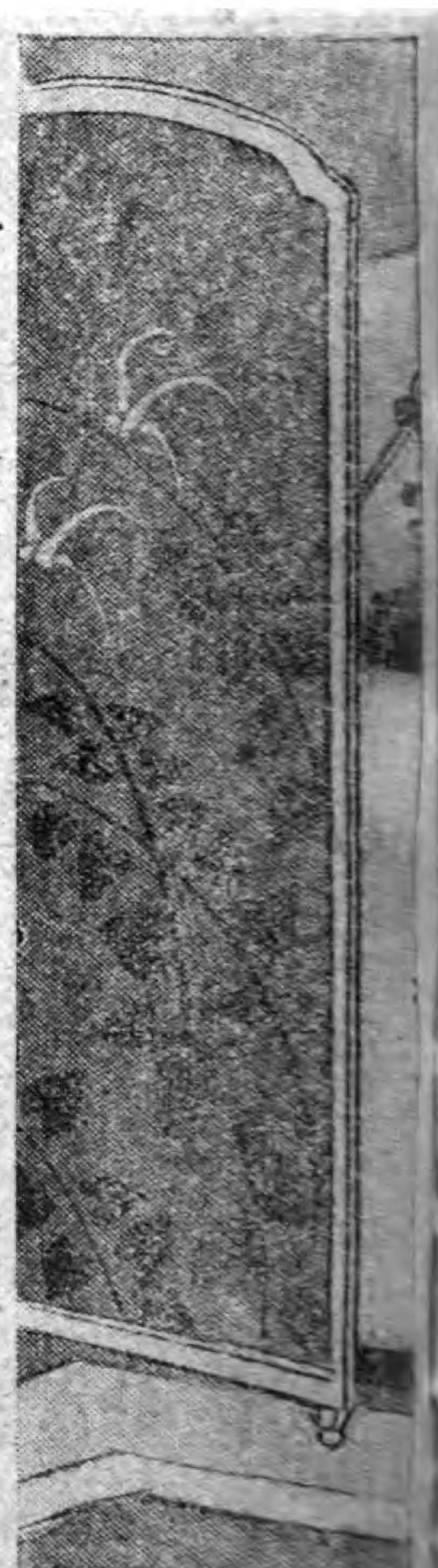
『おお、もう大分おそくなりました。もうおいとましなければ――』

『いゝえ、まだおよろしいわ。』

夢ましく、千世子は昌一郎の手を握りしめた。

『どんなに長く私の部屋にとゞまつていらしつても、だれも何ともいふ權利はないのですもの――』

『いゝえ、まだ僕には公けに主張する何の權利もないのです――叔母さまだつて、あんまりいつまでもお邪魔したら、屹度僕をおさげすみになるに相違ない――僕はどんなにだれにさげすまれてもかまはないが、あなたにまで輕はずみなひとだと思はれてはなりません――でも、僕は、これからおいとまするのを、ちつとも苦痛とは思ひませんよ。勿論お別れするのはいやだが、でも、明日になれば、今日よりも一日だけ、僕たちのほんものゝ幸福に近づけるのですから――ね、あなたもそれを待つてゐて下さい。』



昌一郎は、もう一度千世子の指先に接吻して出て行つた。

千世子はそれを玄關まで送つて出た。

昌一郎の自動車は闇の中に消えた。

――あの人はどこまでいい人なのでせう？ 全くはづかしくなる位だわ！ でも、あの人だつて、私の幸福のためには、たとへどんな苦しい犧牲に立つときがあつても、怺へてくれるに相違ないわ！

千世子の唇には再び複雜な微笑がうかぶのだつた。（つづく）

カフエー取締の名案

ハンガリー政府は最近女學生に白粉及び紅の使用を禁じたが今回又旅館料理店及びカフエーは四十歳以下の女子を使用すべからずと云ふ事にした。それと同時に男の付添のない女客は料理店及びカフエーに出入を禁ぜられる事になつた。（ブダペスト發聯合郵信）



快報！大快報!!

「修養全集」「講談名作全集」準備愈々進捗！

見よ！この大苦心！

編輯局では――一同血眼の大活動、全日本名士文豪熱誠執筆の原稿山積、面白い面白い思はず卓を叩いて熱狂するもの、一讀感に打たれ奮起せざらんとするも能はざるもの、或は何、或は何……而もその中から十に一百に三をとる、その人知れぬ苦心慘憺の狀眞に容易のものではありません。

早くも樓上樓下に歡聲壯に起る！

營業局では――見本を五十も八十も作る、何としても一家の寶となるべき大全集、形の方でも日本第一を期したい、あゝでもない斯うでもないと、苦心研究の末、愈々之ならといふので社員一同へ披露しました處、「之は素晴しい、どうして斯んなに安く出來るのか？」と皆々驚嘆、即座に全社員の豫約が出來るといふ盛況！

驚いた話

◎全部上等の背皮にしたい、といふので使用高を豫想して見ると、月に羊が五萬頭以上要る。日本の羊は極めて少い（昭和二年報知年鑑では緬羊まで併せ



て九千三百三十頭）電報で印度及び濠洲に註文するのであるが、日本には之を仕上げ得る工場がない、然し何とかして革皮を用ひたいと目下大苦心中。

◎本全集印刷の爲、東京の各大印刷所が新に機械を輸入して据付け工事中のもの二三に止まらず此方は前號所報の通りであるが更に製本所でも新に大工場を増設、手ぐすね引いて待つてゐます。

◎紙も出來るだけ良くしたい。本全集の大量なる一封度に一錢違つても忽ち數十萬圓の相違となる。然し、この國家的大事業！何としても出來るだけ良く安く提供せねばと製紙會社も義俠的に大奮發！否、製紙會社のみならず、本全集の原料方面の關係者は擧つて今回といふ今回は全く利害を離れ、本全集の善美のために其盡力は一方でない、實に業界の美談として、人情美涙ぐましく感じてゐます。

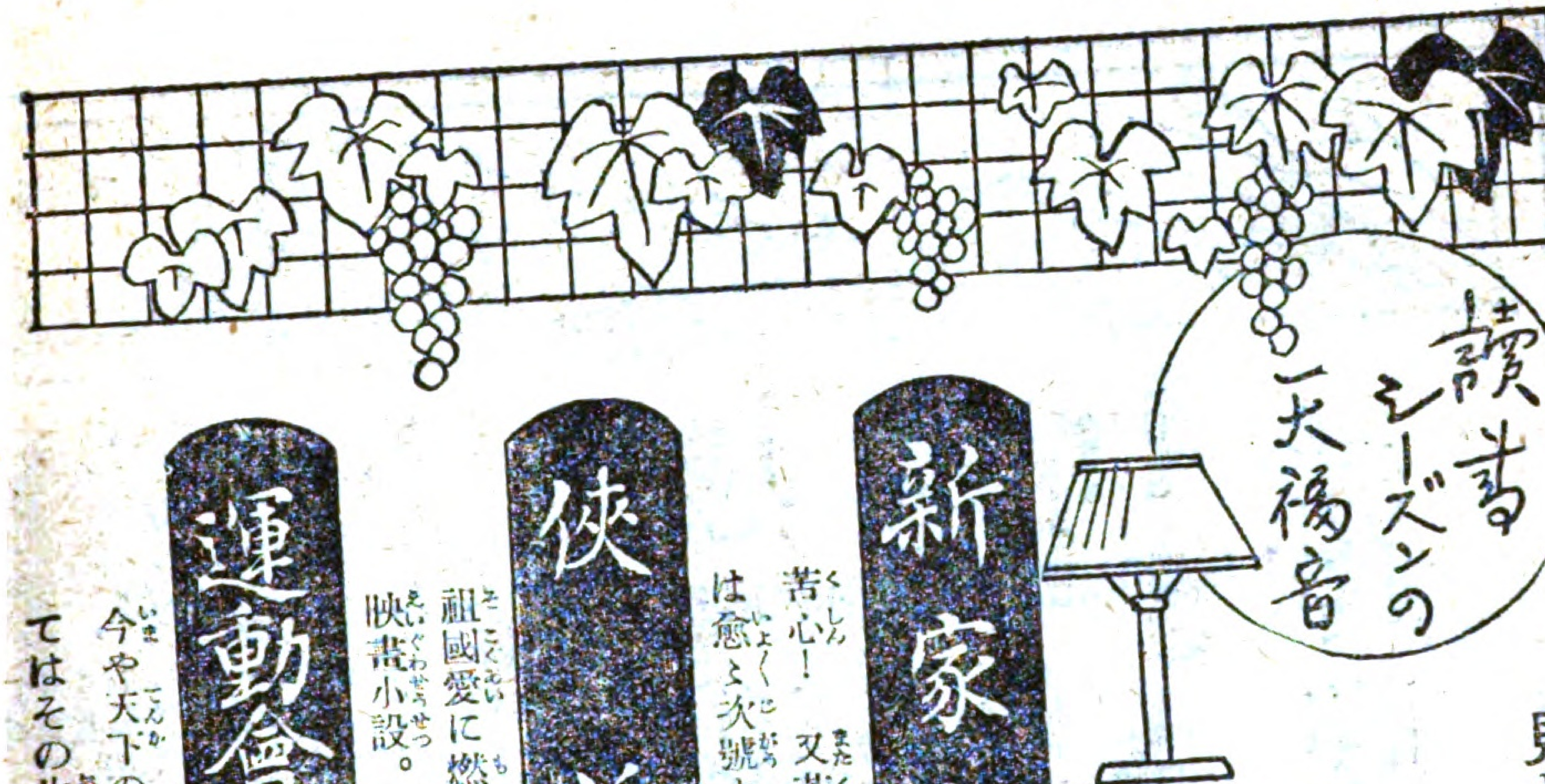
感激!!

内閣總理大臣 田中義一	民政黨顧問 若槻禮次郎	民政黨顧問 床次竹二郎
前樞密院議長子爵 清浦奎吾	樞密顧問官男爵 田健治郎	樞密顧問官海軍大將 八代六郎
子爵 澁澤榮一	貴族院議員男爵 阪谷芳郎	貴族院議員侯爵 小村欣一
樞密顧問官陸軍大將 河合操	海軍中將子爵 小笠原長生	國民新聞社長 德富蘇峰
文學博士 上田萬年	法學博士 上杉愼吉	文學博士 幸田露伴
文學博士 坪內逍遙	文學博士 服部宇之吉	文學博士 椎尾辨匡

其他多數名士（次號詳報）**より**
本擧に御賛同熱烈御援助の御言葉を戴きました

清秋、讀書の好機を前に發表の日近づく

乞ふ！誰方も刮目してお待ち下さい!!



見よ！此の内容、此の計畫！

キング十月號の壯觀！

躍進！又躍進！誌界の覇王キングは秋の讀書界にいよいよ大評判を捲起すべくハチ切れそうな充實振りを以て皆樣に見える事になりました。御期待あれ十月號！

新家庭双六（諧謔小説）佐佐木邦

苦心！又苦心！一字一句美しく稔つた果實を思はせる甘美爛熟の大傑作『新家庭双六』は愈よ次號より連載！その爽快さ、輕妙さ、今から沸立つ日本中の人氣が目に見える樣——

俠美人（映畫小説）前田曙山

祖國愛に燃ゆる絶世の俠美人が、深く敵地にあつて有爲男子を相手に奇計百出壯烈悲壯の大映畫小說。蒲田撮影所の人氣俳優總動員で大活躍。絢爛眼もあやなる正に卷中の白眉!!

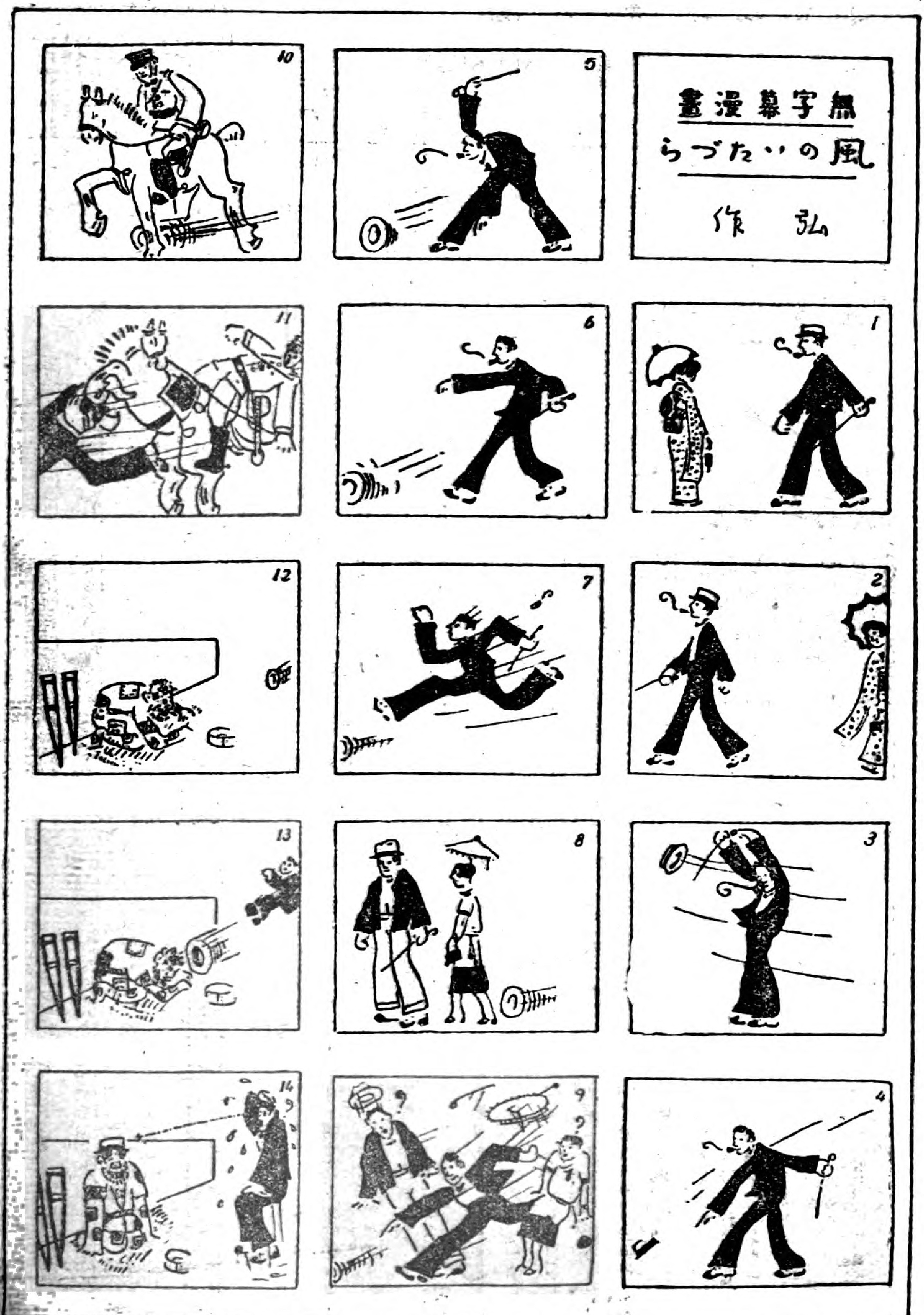
運動會花形選手總まくり 行田重治

今や天下の視聽、滿都の人氣を一身にあつめつゝある一流花形選手の秘話、ローマンス、さてはその生立から苦心物語まで躍如として紙上に躍る、興趣横溢の大讀物！

◎金言

讀書程安價にして繼續的なる快樂なし。

（モンタギユー夫人）


無字幕漫畫
風のいたづら
弘作

特に御安心と御滿足を頂ける御家庭用品

病弱、老衰、神經衰弱 生殖器不能等の新若返り藥

偉大顯効 精壯

和漢洋のあらゆる方劑の長をとり苦心創製された新高貴藥で、尊くも身心青春の泉たる人體各種ホルモンの刺戟卽ち覺醒を圓滿完全に絶えず湧き立たしむる驚異的卓効を有し、老衰者をして壯者たらしめ、病弱、神經衰弱症、記憶力減退等を快復せしめて、頭腦は明晰となります。

六十錠入約一週間分二圓五十錢

百八十錠入約三週間分七圓

送料 內地 十五錢 領土 五十錢

（說明書進呈）

血壓の低下劑 プロモール

村山ドクトル 百瀨 田所 兩博士推奬

生命保久の爲め是非!!

血壓を低下させ、動脈硬化症を治し、恐るべき中風や、腦溢血を防ぐ最良藥として、多數專門醫家に賞讃を受け、發賣以來同病者の間に專ら好評を頂いてをります。御安心の上直ちに御試用下さいませ。藥價十日分二圓、一月分五圓、送料內地十五錢領土五十錢。

お子様の百日咳に フステン

可愛いお子様の百日咳、側で見る親御様のお辛らさをお察し致します。軍醫梅村祐助先生が、その先生の愛兒三人まで同時に百日咳にかゝり、その苦しさを見るに見かねて、苦心研究遂に創製されたのがフステンであります。有効的確、以來百日咳藥の王として專ら好評高いものであります。服用三四日にして、いかなる百日咳も夢の如く治ります、可愛いお子様の爲め、眞に理解ある本藥をおすすめ致します。一週間分入三圓、送料內地十二錢領土五十錢。

色白くなる ウテナを是非！



愛用家 水谷八重子孃

色黒き方
赤黒き方
蒼黒き方
荒性の方
垢ぬけせぬ方
首筋の黒き方
ニキビ吹出物
小皺に惱む方

へ、眞に生れながらの如く色白くなるウテナをおすゝめ申します。

小瓶 一圓　中瓶 二圓　大瓶 三圓
送料內地一五、領土五〇

東京市本鄕區駒込坂下町
大日本雄辯會講談社 代理部
振替東京六六二九番

おでき腫物が切らずに治る スズノキ錠

佛國フロイン博士發見の内服治療法、恐るべき面疔、ねぶと、耳だれ、ニキビの類等に効果偉大――本邦唯一おできの内服藥……

面疔、やう、癤腫、耳だれを初め、黄色の膿をもつ腫物おできは總て化膿性葡萄狀球菌病と言ひます。此れ等の諸病は塗布藥、軟膏、又は切開手術によつても根本的に跡を出し治療することは困難とされてゐましたが、遂に佛國フロイン博士は内服法によつてこの葡萄狀球菌を根滅せしめる驚くべき新藥を發見して、各國醫界の賞讃を博しました。即ちスズノキ錠で、内服後短時間で身體を循環し、病原菌を全滅する絶大な作用があり、初期のものはそのまゝ消失し、既に化膿してゐるものは自然に口を開いて治ること、全く驚異の外ありません。八日分一圓五十錢、十六日分二圓五十錢、二十四日分三圓五十錢、四十日分五圓、送料内地十五錢領土五十錢。（説明書進呈）

熱帶地の藥草 ダウンチリメン

咳一切に奇効ある不思議な熱帶藥草

東印度の土人が神の藥と稱し、一種の強い信仰を以て珍重して居る熱帶地特有の不思議な藥草ダウンチリメンは、流感、肺病、肺炎、百日咳、肋膜、喘息等總て咳の伴ふ諸病に奇効を奏するので、發賣以來實驗者の喜悦、好評、遂に深く重い信用を得て居ります。煎じた藥液を普通吸入器に用ひて、吸入することも出來、効驗又著しいものであります。藥草一ヶ月分二圓、錠劑十五日分二圓八十錢、三十日分五圓、送料内地十五錢領土五十錢。（説明書進呈）

天然藥 木ささげ

腎臟病の天然藥として全國的に信用厚い名藥効果火よりも明か

發表以來、その實効は次から次へと喧傳せられ、各地の隅々まで大評判となつて居ります。百分の幾らと言ふ蛋白の增加した重い腎臟病が間もなく千分の幾らといふ程に減じ、又は醫家の見放した重症が一夜にして輕快、夢の樣になつたといふ實例が澤山あります。一ヶ月分一圓二十錢、送料内地十二錢領土五十錢。

安全無害 蟻よけ液

全國に採用の蟻の根本退治法――蟻の智的活動を巧に利用して全滅させる藥液

蟻は悧口であり、同時に恐るべきものであります。その理智に富んだ生活狀態を精細に研究して、蟻の活動知識を巧妙に利用し、その巢又は附近に散在する他の蟻の部落まで全滅させる樣、苦心發見されたのが、東京府立府中農學校長森斧三郎先生の『蟻よけ液』であります。蟻の通路或は入口に數滴たらして置きますと、蟻はおたがひに呼び合ひ、他の部落の蟻までも呼び集め、藥液をなめては歸る中、遂に附近一帶の蟻に傳播して自然と姿を見せぬ樣になり、滅亡するのであります。農園家、庭園愛好家、その他一般の御家庭用品としておすゝめ致します。小瓶一圓、中瓶二圓、大瓶三圓、送料内地十五錢領土五十錢。（説明書進呈）

毛虱の驚異藥 ペチグロス

□安全無害、用法極めて簡單□

どんなひどい毛虱でも、僅か五分位で死滅せしめる程の卓効。慶應醫科大學、その他大病院で推奨されて居る優秀毛虱驅除藥であります。小六十錢、大二圓、送料内地十二錢領土五十錢。

プロゲノール

山田博士發見のプロゲノールは、唯だ患部に輕く摩擦しながら塗り込むだけで、疼痛は忽ち取去られ、膿液は目に見えて消散します。その効果は實に百發百中と申してもよい位で、臨床醫家の推賞あり、今日迄各地實驗者の等しく驚嘆され、感激を受けて居る處であります。

御自身の病氣は御自身のお心次第、右往左往とお考へになつて色々煩悶し所謂ありふれた賣藥などに縋りなさるより先づプロゲノールを御試用下さいませ、必ず喜ばしい好結果を得られませう。八日分三圓五十錢、十六日分六圓五十錢、五週間分十二圓、送料内地十五錢領土五十錢（實驗報告書進呈）

喘息エキス

五年十年と悩むだしつこさも奇蹟の如く忘れた様に治り、發作の前兆ある時用ふれば、簡單完全に豫防出來る靈藥の泉——喘息エキス。

□不思議な驚くべき實力□

根治至難の喘息、その激しく起る時など、まさに死を思はせる程苦しく辛いものであります。在來の藥或は注射等いろ〱ありますが、何れも一時を凌ぐ外、場合によつて中毒されることもあります。此の不完全な諸點を美事に補ひ、喘息者へ新生命を與へんとして、苦心研究されたのがこの喘息エキスで、まことに同病者にとり、喜悦の泉源であります。

喘息藥中第一の賞讃あり、現に蘆澤子爵其の他知名の人士多數より御愛用を受け、しかも異口同音、その顯著なる効果を驚嘆されて盛んに推奨下さる處、本藥の光榮と存じます。

激烈な發作へのタッタ一匙は、斯かる様な息苦しさを不思議にケロリと鎭め、尚ほ發作徴候前の一匙はその苦しみをよく避けて防ぎます。

●エキスは暫くして病源たる氣管支腔に直接作用をし、根本的治癒を高速度に促進せしむるものであります。

三十回分二圓五十錢、六十回分四圓八十錢、百回分七圓、送料内地十五錢領土五十錢。

（實驗報告書進呈します）

恐るべき夏の病に 皮膚膏

日本醫學士大森良太先生がふとしたことより思ひ付いて或る動物の分泌液より發見され、藥種問屋を端から端まで探したが得られず、遂にウラヂオストツクの藥種問屋にある事を探知して、そこより原料を取寄せ非常な確信を以て製剤されたものが、この皮膚膏であります。

インキンタムシ唯一の治療法

數年間悩ひ通したインキンの患者を忽ち全治せしめた實例も多く、先生が富士六月號キング八月號に御苦心談を公表されるや、大評判となり申込殺到の有様であります。インキン、タムシ、濕疹、白癬、頑癬等の皮膚病一切、汗疹、切傷、火傷、刺傷に絶大な効果あり、特に痔疾に用ひて意外の奏効を見たのは最近の事であります。

小一圓、大二圓、送料内地十二錢、領土五十錢

滋養強壯の自然藥　にんにく丸

□悪疫を豫防し、胃腸を整へ、病弱者も見違る程血色をよくする□

「にんにく」は昔から神藥或は藥草の王と稱して虚弱者を丈夫にし胃腸を整へ、身心を強壯にして、食慾増進、精力回復、冷性、肺病等に大效を奏する事は、古來幾多の實例によつて證據立てられ、既に皆様も御存じの事であります。今日でも惡疫流行の際豫防として用ゐられますが、これは専門家の説によると強烈な殺菌力と解毒の作用あることが明にされ、又榮養價値の方面から見てヴイタミン含有量の豊富さは、蓋し野菜中第一とされてをります。

この「にんにく」から有効成分のみを抽出し、どなたにも服みよい丸藥としましたのが「にんにく丸」であります。生のまゝより遙かに效き目あり、しかも服みよくて服用後口中から惡臭を出さないのが特長でありますから、何時如何なる處でもお用ひになることが出來、子供さへ容易に服用し得る樣に製されてあります。

これによつて見違へる程健康を回復した方や種々の難病が快癒した實例も澤山あります。病弱の人、胃腸の弱い人、精力根氣のない方、冷性の御婦人方へ、特におすゝめ致します。

三百粒入（十日分）一圓七十錢、千粒入（三十餘日分）四圓五十錢、送料内地十五錢、領土五十錢。（實驗説明書進呈）

ニキビ專門藥　マーシー

□□ドクトル、オブ、ファマシー　小川龜重先生創製□□

マーシーは内服により、體内脂肪の濃度を適當に薄め、同時に外用藥に依つて炎症を除き、總ての黴菌を死滅せしめる様工夫されたもので、どんな體質の人でも根本的に頑固なニキビを治して行きます。流石はマーシー、不思議によく効くと、専ら好評を博して居ります。

内服		外用		送料
七日分	七十五錢	試用	五十錢	内地十五錢
十五日分	一圓五十錢	中形	一圓	領土五十錢
四十五日分	四圓	大形	二圓	
特別用	十圓	特大	三圓	

アイヌ民族間に傳はる　秘藥　イースクリン

□内服して諸病を治し塗布して外傷を癒す□

何百年の昔から、やさしいロマンスと共にアイヌ民族間に萬能秘藥として傳へられてゐるイースクルスと言ふ木の實は、現在でもアイヌを始め内地より移住の村人までが、日常滋養強壯劑としてその粉末を服用し、打傷や眼病にその溶水を塗布したり、又は洗滌に用ひなどして珍重して居ります。

本劑はその實の秘成分に更に朝鮮人參エキスの純良なものを配劑して一層奇効を大ならしめたものであります。

内服すれば精力活力を増進せしめ、リウマチス、神經痛、胃臟病、胃腸病、婦人病、一般衰弱に偉効を奏し、尚外用として切傷、火傷、痔、打傷等に不思議な効果があります。藥價十五日分瓶入二圓、三十五日分瓶入四圓、送料内地十五錢領土五十錢。



若くなり美しくなる　佛國の化粧水　レーデリス

一瓶　二圓六十錢　送料　内地廿五錢　領土五十錢

皮膚のたるみや、皺をのばし、肌に活々とした艶を與へて若返らせます。「新若返り化粧水」として皆様の御評判高いばかりでなく、乳白色の極めて床しいこのレーデリスは、香りの氣高い高級香水の代用ともなり、その上數倍に薄めて使へます處に特徴と人氣を有して居ります。

不治の難症とされた……

神經痛リウマチス關節炎が

メキ〳〵救はれる家傳藥『白仁』湯

神經痛、リウマチス關節炎などと云ふ病氣は今日進歩した醫學上から見ても未だにその的確なる原因を知ることは眞に困難とされて居ります。例へばたゞ單に冷え込みから來る場合もあれば梅毒性のものもあり、時には患者それ自身が何等氣附かないで何時か知らぬ間に罹つて居ると言つた樣に、殆んどその專門家でもこの判定には苦しまれるさうであります。

そしてその病氣が何であるかその原因が何であるかさへ斷定出來ないとすればその治療方法にも手を下しかねるわけで事實これ迄多の專門家も此の神經痛リウマチス關節炎の三病には顰面奏效する藥はないと嘆聲を洩らして居られました。

その治療方法としては

然し神經痛リウマチス關節炎は何れも血液循環の不完全に基く病氣である爲めに痛みを起す場所の血行は愈々惡くなり其虛に乘じて黴菌なり病毒が集り來つて痛みを起し熱を持ち化膿させると言ふ事になりますから之が治療方法としては先づ第一に血液を充分循環させれば血液中の白血球が盛に活躍をして黴菌を喰ひ殺しその後を血液によつて洗ひ淸められすべて體外に排出するより方法はないのでありますが、扨てそれには如何なる方法に依るべきかが第二の問題となりました。

唯一の理想的溫浴藥『白仁』

これまで可成多くの愛讀者から之等について色々御尋ねを受けて居りますが先づ私共から最も御手輕に然も御家庭での方法としては入浴藥『白仁』を御奬め申上げて居ります。と言ふのも白仁が事實それ等多數の患者から全く救ひの神の樣に思はれ或る人は足一本を白仁の御陰で拾つたも同樣と喜ばれ十數年來のリウマチスが忘れた樣に治つたなどと日に日に目に見えて喜ばしい御報告が參ります。それ丈に私共から『白仁』ならと聲を大きく然も絕對安心して御奬め申上げる事が出來ると思ひます。最も私共は專門的な立場でないからこれ以上の詳しい説明は致しませんが、その實際上の效果に對して確信を持つて御すゝめ出來るわけであります。

『白仁』は凡そ五百年前慶長年間和蘭陀から傳つた家傳藥で醫者にも藥にも見放され一生不治と斷念された方々が全快された實例は枚擧に遑ない程でかつて本誌上に一度發表いたしました事からその效驗は次から次へと傳へられ然も之に依つて多數病患者が幸福になられつゝある事もこの上もない私共の喜びです。

白仁によつて子寶まで

『白仁』は單にリウマチス關節炎神經痛等に奏效するばかりでなく特に御知らせしたいのは種々病氣中で最も難治とされてゐた婦人病に驚くべき特效があることで現に數年來の冷え症の爲めに子寶がなく一家が甚だ寂寥で居たのに『白仁』を用ひてから子宮病は全癒し間もなく子供が得られ家中は春風が吹き起つた樣に樂しい家庭となつたと喜びの體狀を寄せられたものもあります。殊に月經前後の不攝生不衞生から膣內又は子宮等に炎症を起しても『白仁』湯に入浴すれば強烈な殺菌力で黴菌は死滅し炎症などは忘れた樣に治つたとは多數報告中にも明であり、特にこの際婦人病に惱される方々は『白仁』湯に入浴されるか腰湯にでもなさる樣御奬めいたします。（記者）

溫浴藥『白仁』は家庭風呂用として十五日分一圓五十錢、三十日分二圓八十錢、別法重症用は十五日分二圓五十錢、三十日分四圓八十錢、送料內地各十二錢、領土五十錢御希望の方へは本社代理部で御取次します（振替東京六六二九）が御便利です。

何でも重寶する本誌代理部案内

折疊み自由で便利輕快な 輕便小兒車

旅行にも郊外散策にも携帶至便
體裁優美で安全衛生的



五分間で極めて簡單に折疊み組立てが出來ますから乳母車の樣に置場所に困る事もなく電車內にも持ち込み得られますから重寶です二輪車ですがスタンド附ですから四輪車と同樣又寢臺ともなります。クッションは美しいビロード張りで振動も少ないから衛生上最もよい乳母車で專門大家も賞讃されて居ります。

特價九圓五拾錢 運賃着拂
携帶用車輪袋付 荷造費五十錢

驚く程効力のある 米國製金屬磨 ライトニング

どんな性質の金屬の汚れでも他の金屬磨では落ちないサビでも之で磨くと見る〳〵除かれて來ます、又貴金屬の如き面の柔かいものに安心して用ひられ全然無害安全です。貴金屬用には布狀眞鍮ニッケル銅には糸狀が適當です布狀壹箱一圓糸狀小五拾錢大一圓 送料內地十五錢領土四十五錢



輕便で最も使ひよい 家庭用小型ミシン

完全精巧堅牢而も頗る廉價



◇…小型なれど能力構造は大型に劣らぬ
◇…本縫式で上絲下絲の調節自由
◇縫ひ目は荒くも細かくも意の儘
◇和服洋服何でも縫へる。
◇用法簡單誰でも直ぐ使へる。
○場所張らず輕量故取扱かひに便利
◇…堅牢保證で狂ひの出ることがない。

＝針はシンガーと共通です＝
◇木製蓋付五百號……金參拾圓
◇蓋なし鐵臺つき……金廿四圓
（針絲卷油さしネジ廻し等つき）
荷造賃五拾錢運賃着拂
＝御申込次第型錄進呈＝

□□お洗濯の資料□□

◇**輕便のり**＝煮る面倒なく、水で溶かしそのまゝ使へる便利と經濟、木綿絹物、麻等其の他、又障子張りに用ひて特に具合よいものです。
十反分入一袋廿八錢 送料四錢
六十反入一函八十錢 送料六錢

◇**純白上等粉石鹸**＝ありふれた黃色のこな石鹸と異なり、純白品質極上、少量で驚く程お役に立ちます。
一函三十匁入三十錢、送料五函迄內地十五錢領土五十錢

◇**粉末ふのり**＝色がつかず硬張らず、僅か小匙に一二杯で、非常に上等な張物用のりが五六合即座に出來、至極重寶經濟であります。一函百反分入五十錢送料二函迄內地十五錢領土五十錢

マッチ一本で手輕に接ぐ 糊狀ハンダ

（一名、道具いらずの糊ハンダ）



どんな金屬でも小さなものはマッチ又はローソクで（勿論大きなものは鏝で）他に何にも要せず即座に手輕に接着出來る便利なハンダです。取扱ひの簡單なのと出來上りの美麗で完全なのが本品の特長で家庭用として最も便利です。

試用小罐四拾錢 徳用罐壹圓（送料四錢）

何でも重寶する本誌代理部案内



最後の小片まで綺麗に削れる！

安全 鰹節削り器（荷造送料内地五十錢 [illegible]九十錢）

鰹節の大きいのは差込んで、小さいのはホウリ込んで、たゞハンドルを廻しさへすれば樂々と最後の小片まで美しく完全に削れます。在來の鉋の數倍以上の能力。然も仕事が綺麗で早くて、危險が全くありません。實に重寶です。

ネジ廻し付 一組 二圓五十錢

タッタ一匙水に入るれば 何んでも綺麗に美しくする 米國で大評判のデブル



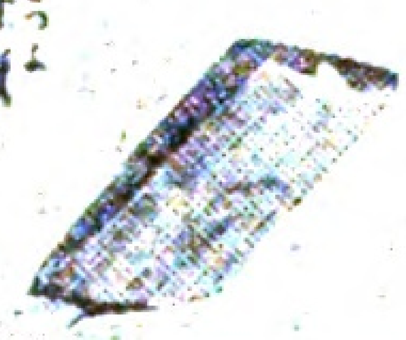
デブルはあらゆる者を綺麗にする純白無味無臭の洗淨料で洗ふに最も骨の折れる油たらけの皿や其他の食器はデブルを一匙ほうり込んで洗つて下さい。唯簡單にザット洗ふ丈で油も汚れも去つて器物は買立の様に美しくなります。ソーダ水や磨き粉よりズット早くおちて手數がいらず廊下家具洗濯に洗髮其の他機械ガラス何に使つても見事に美しくキレイになります。

一ポンド入一圓廿錢送料 内地十五錢外五十錢

寝ながら讀書の出來る ブックスタンド 之は便利！重寶！

雜誌書籍はその大小に不拘總てこれに用ひられ横向でも仰向きでも樂々書見が出來ます。今迄十册讀んだ努力で五十册の讀破も容易でせう角度の加減回轉も高低も自由ですから御病人は勿論身體の疲勞した場合等一層重寶です。





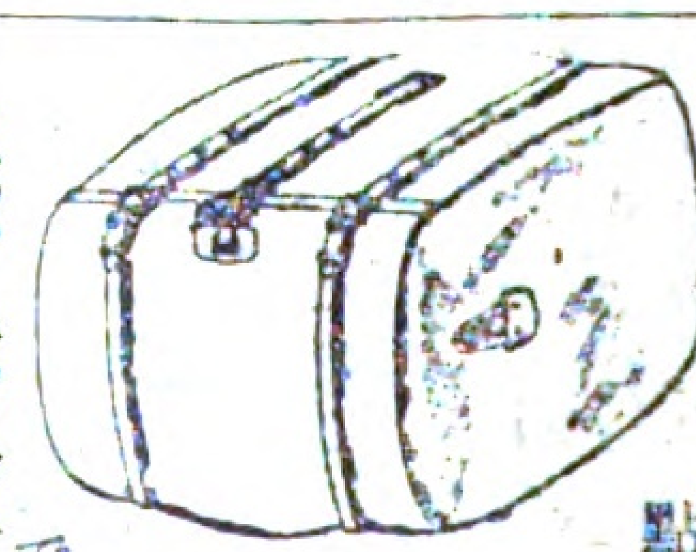


◇一臺で六種使用出來る

◇寝讀二通り◇音樂演奏の譜面臺に◇卓上書見臺記臺へ書架となり◇氷のう吊にもなる

上製 三圓五十錢
並製 三圓
三種用 二圓五十錢
送料 内地三十錢 領土七十五錢
寝臺用 四圓

旅行 移轉 保存に 便利な 蒲團袋（一名文化長持）

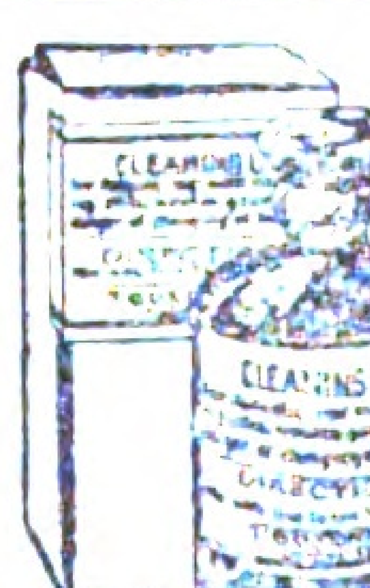


夜具の保存及び運搬特に旅行や移轉の時に最も重寶であります。然も在來品のすべての欠點を改良考案されたもので、その包裝方法も獨特のものですから一枚以上五六枚まで一人で手輕に自由に取扱ふことが出來るのであります丈夫な厚生地上等ズック製でバンド付ですから紐等要せず運搬に便利防水装置ですから濕地に置いても絶對安全。

上製 ―― 金九圓五十錢
特製 ―― 金十一圓
荷造送料 内地六十錢 領土一圓

◇家庭クリーニング液

洋服でも和服でも一着十錢で手輕にクリーニング出來る



只この液を汚れの程によつて五倍乃至十倍に薄めて強いブラシで生地を洗つて行けばそれでよいのです。洗濯やに出せば二三圓もかゝるクリーニングがこの液で家庭で御やりになれば一着分僅十錢位で御子樣の洋服でも帽子でも絹物の着物でも何んでも手輕に出來て決して生地を損する御心配はありません。

一瓶 洋服十着分 壹圓 送料内地十五錢 領土五十錢

自分の病氣は……自分で癒せる
恐るべき肺疾患の內服療法
世界に誇る結核性最的藥の發見……
病患者は救はれ虛弱症も健康恢復

心一つで病氣は治る

病氣に罹れば醫師にかゝるのが一番安全な方法である事は申す迄もない事でありますが併し病氣は決して他人のものではなく自分自身の病氣であり喜憂哀苦も自己の生命の脅威でありますから醫者任せや他人にのみ賴らず十分自分から用心せねばなりません。殊に一寸判斷し惡い肋膜、肺病の初期に至つては尙更のことで、遂に治療の時機を逸し、次第々々に、病魔に蝕ばまれ心付いた頃には最う取り返しもつかない悲慘な狀態になつて失ふ例も少くありません。その中でも特に恐るべきは、肺結核で近來世の文明に連て愈猖獗を振ひ年々その數を增し大正十五年中結核性疾患に依る死亡總數は實に十一萬一千餘人と言ふ驚くべき數字を示して居ります、之が爲結核豫防デー等を組織し結核撲滅運動に當務者も專心されて居りますが第一各々個人個人の十分な注意に訴へる事が最も肝要急務な事項であります。

早期治療が肝心

斯して銘々が十分周到な注意の下に生活する事は勿論でありますが、時已に遲く不幸にして疾患に犯された場合は如何にすべきでせう。話はこの種の病氣は一般に不治の病とされ罹つたが最後悔悶恐慌に怯れながら、あたら若きも何時しか灰色の雲につゝまれて失ふ樣な事もありましたが醫學の進歩した今日では病原すら不明のものでも御探究して治療出來得るまでになつて居ります。

然し何れの病氣にしても早期の治療が最も大切である事は申上げるまでもない事で特にこの肺疾患等になりますと、何時か知らぬ間に第一期も過ぎ第二期に入り第三期となりますと最うどうにも致方がなくなりますが、その前に我が飯田左三先生多年の御苦心になつた世界的治療藥として歐米專門家も激賞した內服藥を御試用なさる事は惱める患者に取つて一つの光明臺にも等しい物であります。

決定的奏効藥發見さる

ドクトル飯田左三先生はかつて獨逸及英國に留學中その當時英米の專門家に依つて大藥の主成分と認めらるゝ硫化アルリールが肺患に卓越した貸効を證明され卽ち英國の醫家グアリユー・シー・ミンチン氏は、「硫化「アルリール」の二分の一乃至二「ミム」を服用せしむれば迅速に全身症狀を輕減し咳痰の惡臭を去り喀痰を輕快ならしめ、喀痰量を減じ、咯嗽を鎭め、呼吸困難を治し、盜汗を去り食慾を增進し、體重を增加し、血色を良好ならしむるのみならず他覺症狀も著しく佳良ならしむ」と發表之にヒントを得た飯田先生は更にその眞價を判定する爲めに多年專門的に硏究、漸くにして完成し得た硫化アルリール製劑を自家病院に於て二百八十餘名に臨床實驗の結果遂ひに的確、決定的効力を認められました。

大蒜は日本古來の靈藥

硫化「アルリール」成分を最も多量に含有して居る植物は古來より藥用として珍重して居た大蒜の球根で、我國でも遠く日本武尊の御時代に於て既に大蒜が惡疫に効力ある事は認められて居り其後二三の醫師に依つて肺病藥とし、生食又は熱蒸して用ひられて居りましたが元來その主成分たる硫化アルリールは揮發性のものでありますから之を焼き煮沸する等熱を加へる事に依つて大切な主成分は逸失し變質して失ひその効力は誠に稀薄となります、若し之を生のまゝ食べようとしてもあの萬人の忌み嫌ふ峻烈な惡臭には如何な患者と雖もその病氣を癒す事に必要な量を攝るには可成の當となるのみならず、咽喉を害する事も甚しく折角天惠の靈藥も空しくそのまま見捨てられて居りました。

秘成分の抽出に成功

然るに化學の進歩は遂に人類愛に一大幸福をもたらしました、即ち茲に於て我がドクトル飯田先生は如何にすればその大切な主成分を抽出し得るかに就て大正三年獨逸より歸朝以來引續き苦心研究、遂に獨特の操作に依りその主成分を完全に抽出し、更にその主成分をして益々その効力を絶大ならしむる爲、之が配劑等にも一方ならぬ苦心を重ねる事實に前後十有餘年、漸くにして絶對的確實なる結核内服藥アールスの完成を見るに至りました

アールスの有効なる理由

アールスは服用して胃腸より吸收せられ血液中へ混入して其運行中徐々肺小胞より排出せらるゝ際に特異の殺菌力を發輝し菌膜を滲透して菌體に直接作用して發育を制止し死滅せしむる大効があります、かつて日本醫學士大口眞純氏の臨床實驗報告によりますと『本劑を一期間連續服用せしめたる患者の略痰を採り之を檢鏡すれば結核菌は皆悉く斷烈状となりて死滅せるを見る』と(結核雜誌五卷九號所載)

斯様に菌膜に直接作用して偉大なる透過力は見事に細胞組織を破壞しその目的を十分に達し得るものは實にアールスの獨特の作用であり、同時に結核患者に酬いられた一大福音とも言はねばなりません。

求めよさらば救はれん

近來大蒜を主材とした製劑も多くありますがアールスの如く多量にヴヰタミンを含有し硫化アルリールの治療的作用と相俟つて全身の榮養を補足して虚弱者も健康を恢復する事が出來ます。今日まで醫者に藥に、自然療法にあらゆる手を盡しても寸効もない方はこのアールスを御試用下さい、之こそ病める方々へ心から御奬め出來る最良藥であります。

尚アールスは今日までの實驗の結果から見て結核性諸症に卓効ある事は勿論でありますが、肺尖カタル、結核性肋膜炎、腺病質肺炎肺膿瘍、肺壊疽、寝汗、虚弱體質、病後の衰弱恢復、貧血症等に用ひ偉効を奏し、然も強烈なる殺菌力と迅速な滲透性を有して居りますから頑固な皮膚病にその液汁を塗布して皮膚結核、頑癬、疥痒、白癬の如きも短時日で全快した例も少くありません(塗布する場合は膠珠の一端に一孔を開け搾取して使用する事)

用法は毎食二三時間の後に水又は微温湯、茶又はコーヒー等にて一回十珠乃至十五珠を隨意に嚥下し服用後若し惡臭又噯氣を催した場合には梅干少許を食しますと直に爽快となります。

右アールスの價は三〇〇粒入(約十日分)六圓、六〇〇粒入(約二十日分)十一圓、九〇〇粒入(約一ヶ月分)十五圓也、送料小中は内地十五錢、大は二十五錢、領土は七十錢、便宜上本社代理部でも御取次します。(振替東京六六二九)へ

萬人に嫌はれる……わきがの新しい治療法

御困りの方はどなたも御試し下さい

わきがで良縁も破談になつた

夏から秋にかけて薄ものを御召になる頃殊更に苦しまれるものは、わきがを持つ方々で、身についたものとは思ひながらも何時も人知れない憂苦の惱みに悶えねばなりません。

わきがは一般男子よりも女子に多いとされて居りますが、殊に年若な娘さんなど自分がわきがと氣付いたが最後極端に悲觀してお嫁入の相談などには耳を藉さないで兩親を困らせ、然も切角の良縁さへも破談になつたと言ふ樣な話は世間に少くありません。

わきがの原因と豫防法

腋臭は遺傳性のものもあり又體質不良及結核素因ある者に起り易く小兒や老人には稀で壯年者に最も多いと言はれて居りますが、何れにしても不潔から來る場合が最も多く、殊に傳染性のもの丈に平常十分な注意や豫防する事が最も必要で、わきがの患者に觸れることは勿論わきがのある人の着た下衣などよく消毒した後でなければ身體につける事など最も危險なものです。

尤もその治療法としては極く輕いうちなら度々入浴してその都度二三十倍のフォルマリン水等を塗布して置けば、外から氣がつかない程度にはなつて了ひますが、然し稍々重患になつて來ると局部に炎症を起して遂に糜爛した痛みを感ずる樣になり、衣類などもこの惡臭の爲めに變色する、こうなると姑息的な療法や單なる塗布藥位では到底治り難いものであります。從來はわきがの療法としてサルチル酸ライノリンタンニン酸等の塗布藥も用ひられて居りましたが、之等も唯局部を一時的に收斂して僅かに臭氣を防ぐに過ぎない程度のものであり又根本的治療として居る外科手術についてもその何れの良否かを御答へいたしかねて居りました。

遂ひに腋下脱臭新劑の發見

然るに和漢藥の大家として有名な小泉榮次郎先生はどうぞして一日も早く之等世の不幸の方々をお救ひしたい御精神から、このわきがの療法について久しい間、専門的に御苦心研究を重ねられつゝありましたが、遂に腋下脱臭新劑として卓效あるゼットを御發見になりました。

ゼットは今迄の[illegible]劑などとは全然違つた收斂防腐鎭痛殺菌の諸作用を兼ね備へて居る藥物を主成分とした最も新しいもの丈にその效力も遙に優越して居るわきが劑で之を患部に塗布すると腋窩腺に浸入して皮膚を強く收斂し腋窩皮膚穴に作用して發汗分泌を止めそれと同時に局部の炎症糜爛や痛みも忘れた樣になくなり從つて惡臭も全く出なくなるのであります。

つまりゼットはありふれたわきが止とは全然その類を異にし最も確實な腋下脱臭劑とも言ふべきもので勿論その病氣の輕重に依つて效力も一概には申されませんが今日まで多數實驗した結果から申しても輕症なら數日の塗布で治癒の狀態になり殆んど百發百中の良結果を納めて居る事に依つてもこのゼットの眞價を證明する事が出來ますが之以上は實際に御使用になつた方々から御話を承りたいと思ひます。(一記者)

こゝに御紹介申上げました小泉先生御創製のわきが治療藥ゼットは粉末塗布用のものですから使用上には何等の手數も入りません價は一個二圓五十錢(送料内地十五錢領土五十錢)で特に東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二一九)で御取次いたします。

各種懸賞〔寫眞・漫畫・考へ物・最短篇原稿〕募集當選者發表

六月號誌上募集 懸賞考へ物當選者

解答

〔一〕バンコク 〔二〕天津 〔三〕富山 〔四〕伯林 〔五〕鳥 〔六〕松樺

六月號懸賞考へ物は上の如く答へた方が正解です。例によつて正解者が多數にのぼりましたので、その中から嚴重な抽籤の結果、左の一千十一名の方が當選されました。賞品はこゝ一ヶ月以内にお送りする筈でございます。

〔一等〕ラヂオ受信機一式

福岡縣京都郡行橋町 山口年子

〔二等〕美術置時計

樺太眞岡郡廣治村羽母舞 佐藤古長
朝鮮釜山府佐川町三一八 後藤恒吉
大分縣大野郡三重町 河野定
臺灣臺中市新富町寶芳堂 莊悔寶
富山縣東礪波郡福野町 松原金三
大阪市港區北恩加島町一 小林孝
東京府下上駒込一三二 朝倉滿子
神戸市下山手通リ七ノ一五九 山崎壽賀雄
豐橋市外高師村字福岡 中津里子
福島縣若松市橋三日町九 半澤サカイ

〔三等〕クローム製鉛筆

【東京】[illegible]

【京都】[illegible]

【大阪】[illegible]

【神奈川】[illegible]

【兵庫】[illegible]

【長崎】[illegible]

【新潟】[illegible]

【埼玉】[illegible]

【群馬】[illegible]

【千葉】[illegible]

【茨城】[illegible]

【山梨】[illegible]

【栃木】[illegible]

【奈良】[illegible]

【三重】【愛知】【靜岡】【滋賀】【岐阜】【長野】【宮城】【福島】【岩手】

【青森】【山形】【秋田】【福井】【石川】【富山】【鳥取】【島根】【岡山】【廣島】【山口】【和歌山】【德島】【香川】【愛媛】【高知】

【福岡】【大分】【佐賀】【熊本】【宮崎】【鹿兒島】【沖繩】【北海道】

【臺灣】【樺太】【朝鮮】【支那】【外國】

新聞紙上募集　キング最短篇原稿當選者

〔秀逸〕

「東京」（四篇）中川庄藏（二篇）秋元かの子○（一篇）臼井春子○伊藤雄三○桜川擇賢○加藤武雄○植田杏梧○寄椨家治○須永宮夫○臼井新一○石塚男○小里○代家○角永嘉男「神奈川」（一篇）邊早太郎○讀○高橋茂○上野多門○太田悅造○坂下敏英○吉「茨城」（一篇）河西勇「千葉」（一篇）間立樂○秋芳「埼玉」（一篇）野たくし平「栃木」「群馬」（一篇）三井桐蔭「福島」（一篇）佐々○伊田ひで子（一篇）矢部明一「宮城」（四篇）木十三雄○淺里務二「青森」（一篇）白崎光三○河合義雄○水野信次○三浦いさ「愛知」（四篇）牧野鋼一○むつ○（一篇）滝口市之進○山川武夫○岩田義定○鈴木猛

雄「新潟」（一篇）豊田秀雄「長野」（二篇）宮澤一雄○和田和賀野「福井」（一篇）松田半七「岐阜」（一篇）窪田菊次「三重」（一篇）矢野正雄「和歌山」（一篇）崎直一郎　宮「大阪」（一篇）重村文三郎○佳充一郎○小西正一○二土頭花史○高田一草○龜井虚無郎「兵庫」（一篇）坂嘉文○秋光一男○瀬川ヒサノ○中西常治「岡山」（一篇）川上俊夫「廣島」（一篇）戸田平一○蒲池文雄○五川玉浪「鳥取」（一篇）遠藤孤治「島根」（一篇）三島理平「福岡」（二篇）美○高田正元○藤岡正「長崎」（一篇）山田綱夫「鹿兒島」（一篇）立山長門「高知」（一篇）山中俊男「愛媛」（一篇）高石千代

「朝鮮」（二篇）長次三郎 [illegible]

〔佳作〕

「東京」（四三篇）[illegible]

「神奈川」（七篇）[illegible]

「千葉」 [illegible]

「埼玉」 [illegible]

「群馬」 [illegible]

「栃木」 [illegible]

「茨城」 [illegible]

「福島」 [illegible]

「宮城」 [illegible]

「岩手」 [illegible]

「青森」 [illegible]

「山形」 [illegible]

「秋田」 [illegible]

「新潟」 [illegible]

「長野」 [illegible]

「靜岡」 [illegible]

「愛知」 [illegible]

「岐阜」 [illegible]

「山梨」 [illegible]

「富山」 [illegible]

「石川」 [illegible]

「福井」 [illegible]

「三重」 [illegible]

「和歌山」 [illegible]

「奈良」 [illegible]

「滋賀」 [illegible]

「京都」 [illegible]

「大阪」 [illegible]

「兵庫」 [illegible]

「岡山」 [illegible]

「廣島」 [illegible]

「鳥取」 [illegible]

「島根」 [illegible]

「山口」 [illegible]

「愛媛」 [illegible]

「高知」 [illegible]

「德島」 [illegible]

「香川」 [illegible]

「福岡」 [illegible]

「佐賀」 [illegible]

「大分」 [illegible]

「長崎」 [illegible]

「熊本」 [illegible]

「北海道」 [illegible]

「臺灣」 [illegible]

「朝鮮」 [illegible]

「北」 [illegible]

五月號誌上募集懸賞漫畫寫眞當選者

（漫畫之部）

〔秀逸篇〕

ワチサンハアツラモノ　濱野幸則（富山）
モダン河渡り　池內正造（茨城）
旦那様十戒　矢崎茂四（靜岡）
路上小景　御木欄一郎（東京）
戀人を食つた人喰土人の話　千葉誠（東京）
夜店の木　宮崎勝之（埼玉）
ダンス狂　山口靜雄（神戶）
ドンチヤン　清水中（新潟）
忠實なる新兵　北村一王（東京）
風のいたづら　畠山弘（福岡）

〔佳作篇〕

○宮崎勝之（埼玉）○赤羽希以子（長野）○井原勇（長野）○小森光（東京）○牧野兩昌（熊本）○大野利一郎（京都）○志村常弥（横濱）○藤澤三郎（熊本）○土屋春男（郡山）○宮崎三郎（郡山）

（寫眞之部）

〔秀逸篇〕

風景　中村多市（札幌）
雪　大谷雄三郎（札幌）
明石港、その他　北村喜代治（兵庫）
臺灣風俗　泰地吾郎（臺灣）
風の日　狩野章治（愛知）
トリツク寫眞　和田兵馬（東京）
縣二題　吉濱吉藏（山梨）
金魚　松村玉仙（朝鮮）
風景　大西萬平（神奈川）

〔佳作篇〕

○上野健一（東京）○中畑茂夫（和歌山）○野川清四郎（京城）○竹田竹賀（臺灣）○村田靜（東京）○橋詰吾松（北海道）○山下正基（臺灣）○谷崎喜佐太（兵庫）○小田清榮（兵庫）○小林金治（長野）○小原四郎（北海道）○上原米斗（東京）○松永政市（東京）○蠣崎芳子（大分）○須部春風（福岡）○青井勘一郎（栃木）○村山與賢（東京）○鈴木三次郎（熊本）○神野一市（大阪）○下村清太郎（滋賀）○岡田久也（廣島）○木村美治（滋賀）○松尾葉（長崎）○松岡正藏（臺灣）○藤永生（住所姓名 [illegible]

回見よ！懸賞大募集!!

左記の要項に依り、原稿の大募集を致します。どうか大力作大傑作をドシ〳〵御寄せ下さい。

一、滑稽小説　編輯局選

(一)一讀破顔大笑、而も上品にして一家團欒の中に讀み得るもの。(二)枚數は四百字原稿用紙十枚乃至三十枚。(三)優秀篇には金貳拾圓以上金壹百圓までの賞金を呈す。

二、新作落語　編輯局選

(一)落語作家の續出を熱望す。大に努力して素晴らしい傑作を御寄稿下さい。(二)四百字原稿用紙五枚乃至二十枚。(三)優秀篇には金貳拾圓以上金壹百圓までの賞金を呈す。

三、子供に聞かせる面白い話

(一)題材は何でも結構、大人が讀んでも面白く、子供に讀んで聞かせて更に一層感興を呼び起すやうなもの。(二)四百字原稿用紙五枚乃至十五枚。(三)優秀篇には金拾圓以上金五拾圓までの賞金を呈す。

〆切八月二十日　當選發表本誌十二月號

御注意

○一人で數篇應募せらるゝも可○原稿は一篇毎に綴ぢ、一篇毎に住所姓名を明記する事○原稿には各種別を（滑稽小說なら滑稽小說、新作落語なら新作落語と）朱書する事○宛名は東京市本鄉區駒込坂下町キング懸賞部○原稿は一切返戻せず○當選原稿の著作權は本社に歸屬するものとす。

回奮へ!! 江湖諸彥!!

定價

一册	金五拾錢	送料三錢
四册	金貳圓	送料共
八册	金參圓九拾貳錢	同
十二册	金五圓七拾六錢	同

稟告

○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受入手數料の金壹錢御同送の事○郵劵代用は必ず一割增の事○雜誌代前金切れ候節は最終の雜誌帶封に『前金切』の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○外國行郵稅は一册拾八錢申受候○御註文書狀宛名は『大日本雄辯會講談社營業部』の事○郵稅不足又は未納の郵便物は請取不申候○○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第詳細に御報知可申上候

昭和三年八月三日印刷納本
昭和三年九月一日發行
（第四卷　第九號）

編輯兼發行人　長谷川卓郎
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川　二二五・二二六・二二二七　七〇八八・三五九六・五九八一　二六〇・一五一一（長）五一〇

元取次店　東京堂・東海堂　北隆館・大東館

17

THE KING
Published monthly by the Dainippon Yubenkai Kodansha, Hongo, Tokyo, Japan
Entered as second class mailmatter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
日第三種郵便物認可　昭和三年八月三日印刷納本　昭和三年九月一日發行（毎月一回一日發行）